



Title	日本語と韓国語補助動詞の意味拡張における通時的対照研究
Author(s)	一色, 舞子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11174号
Issue Date	2014-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k11174
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55577
Type	doctoral thesis
File Information	Maiko_Isshiki.pdf



博士学位論文

日本語と韓国語補助動詞の意味拡張における
通時的対照研究

北海道大学文学研究科

一色 舞子

平成25年度
博士學位論文

日本語と韓国語補助動詞の意味拡張における
通時的対照研究

この論文を博士(文学)学位論文として提出する
提出:2013年11月29日

北海道大学大学院文学研究科
言語文学専攻

指導教員 李連珠

氏 名 一色 舞子

博士学位論文

日本語と韓国語補助動詞の意味拡張における
通時的対照研究

北海道大学文学研究科

一色 舞子

-目次-

第1章 序論.....	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的	2
1.3 研究の方法	2
第2章 先行研究.....	8
2.1 日本語の補助動詞に関する先行研究	8
2.2 韓国語の補助動詞に関する先行研究	11
第3章 本稿での立場.....	15
3.1 補助動詞について	15
3.2 日本語のV2「おく」及び韓国語のV2「twuta/nohta」の意味用法	17
3.2.1. A 本動詞的用法	17
3.2.1.1. A1〈積もる〉	17
3.2.1.2. A2〈置く〉	18
3.2.1.3. A3〈放つ〉	19
3.2.2. B 複合動詞的用法	20
3.2.2.1. B1〈結果物残存〉	20
3.2.3. C 補助動詞的用法	22
3.2.3.1. C1〈パーフェクト性〉	25
3.2.3.2. C2〈結果維持〉	26
3.2.3.3. C3〈事前処置〉	29
3.2.3.4. C4〈非難・自虐〉	30
3.2.4. D〈完遂〉	33
3.3 日本語のV2「しまう(しまふ)」の意味用法	35
3.3.1. A 本動詞的用法	35
3.3.1.1. A1〈終える〉	35
3.3.2. B 複合動詞的用法	36
3.3.2.1. B1〈動作終了〉	36
3.3.3. C 補助動詞的用法	38
3.3.3.1. C1〈一掃〉	40
3.3.3.2. C2〈遺憾〉	41

3.3.3.3. C3〈無意識〉	43
3.4 韓国語の V2「pelita(pAlita)」の意味用法	44
3.4.1. A 本動詞的用法	44
3.4.1.1. A1〈捨てる〉	44
3.4.2. B 複合動詞的用法	45
3.4.2.1. B1〈対象物除去〉	45
3.4.3. C 補助動詞的用法	47
3.4.3.1. C1〈一掃〉	49
3.4.3.2. C2〈遺憾〉	51
第 4 章 日本語の場合	53
4.1 日本語の「-おく」	53
4.1.1. 上代日本語の「-おく」	53
4.1.1.1. V1 の特性	53
4.1.1.2. 意味用法	56
4.1.2. 中古日本語の「-おく」	60
4.1.2.1. V1 の特性	60
4.1.2.2. 意味用法	69
4.1.3. 中世日本語の「-おく」	81
4.1.3.1. V1 の特性	81
4.1.3.2. 意味用法	91
4.1.4. 近世日本語の「-おく」	100
4.1.4.1. V1 の特性	100
4.1.4.2. 意味用法	112
4.2 日本語の「-しまう(しまふ)」	122
4.2.1. 近世日本語の「-しまふ」	122
4.2.1.1. V1 の特性	122
4.2.1.2. 意味用法	129
第 5 章 韓国語の場合	136
5.1 韓国語の「-twuta」	136
5.1.1. 15 世紀中世韓国語の「-twuta」	136
5.1.1.1. V1 の特性	136
5.1.1.2. 意味用法	141

5.1.2.	16 世紀中世韓国語の「-twuta」	148
5.1.2.1.	V1 の特性	148
5.1.2.2.	意味用法	150
5.1.3.	17 世紀近世韓国語の「-twuta」	156
5.1.3.1.	V1 の特性	156
5.1.3.2.	意味用法	159
5.1.4.	18 世紀近世韓国語の「-twuta」	165
5.1.4.1.	V1 の特性	165
5.1.4.2.	意味用法	167
5.2	韓国語の「-nohta」	174
5.2.1.	15 世紀中世韓国語の「-nohta」	174
5.2.1.1.	V1 の特性	174
5.2.1.2.	意味用法	175
5.2.2.	16 世紀中世韓国語の「-nohta」	179
5.2.2.1.	V1 の特性	179
5.2.2.2.	意味用法	180
5.2.3.	17 世紀近世韓国語の「-nohta」	183
5.2.3.1.	V1 の特性	183
5.2.3.2.	意味用法	184
5.2.4.	18 世紀近世韓国語の「-nohta」	186
5.2.4.1.	V1 の特性	186
5.2.4.2.	意味用法	187
5.3	韓国語の「-pelita(pAlita)」	190
5.3.1.	15 世紀中世韓国語の「-pelita」	190
5.3.1.1.	V1 の特性	190
5.3.1.2.	意味用法	193
5.3.2.	16 世紀中世韓国語の「-pelita」	200
5.3.2.1.	V1 の特性	200
5.3.2.2.	意味用法	202
5.3.3.	17 世紀近世韓国語の「-pelita」	205
5.3.3.1.	V1 の特性	205
5.3.3.2.	意味用法	208
5.3.4.	18 世紀近世韓国語の「-pelita」	210

5.3.4.1. V1 の特性	210
5.3.4.2. 意味用法	211
第 6 章 日本語と韓国語の「V-V」構造における歴史的変遷	215
6.1 日本語の V1 における形態的変遷.....	215
6.1.1. 日本語の「-おく」の V1 における形態的変遷.....	215
6.1.2. 日本語の「-しまう(しまふ)」の V1 における形態的変遷	221
6.2 日本語の V2 における意味的変遷.....	224
6.2.1. 日本語の V2「おく」における意味的変遷	224
6.2.1.1. 日本語の V2「おく」における意味用法の変遷.....	224
6.2.1.2. 本動詞「置く」と V2「おく」の意味的関連性.....	233
6.2.1.3. 補助動詞としての V2「おく」における意味拡張の過程	242
6.2.2. 日本語の V2「しまう(しまふ)」における意味的変遷.....	245
6.2.2.1. 日本語の V2「しまう(しまふ)」における意味用法の変遷.....	245
6.2.2.2. 本動詞「しまう(しまふ)」と V2「しまう(しまふ)」の意味的関連性	248
6.2.2.3. 補助動詞としての V2「しまう(しまふ)」における意味拡張の過程	250
6.3 韓国語の V2 における意味的変遷.....	253
6.3.1. 韓国語の V2「twuta」における意味的変遷.....	253
6.3.1.1. 韓国語の V2「twuta」における意味用法の変遷	253
6.3.1.2. 本動詞「twuta」と V2「twuta」の意味的関連性	260
6.3.1.3. 補助動詞としての V2「twuta」における意味拡張の過程.....	263
6.3.2. 韓国語の V2「nohta」における意味的変遷	264
6.3.2.1. 韓国語の V2「nohta」における意味用法の変遷	264
6.3.2.2. 本動詞「nohta」と V2「nohta」の意味的関連性.....	267
6.3.2.3. 補助動詞としての V2「nohta」における意味拡張の過程.....	269
6.3.3. 韓国語の V2「pelita(pAlita)」における意味的変遷	270
6.3.3.1. 韓国語の V2「pelita(pAlita)」における意味用法の変遷.....	271
6.3.3.2. 本動詞「pelita(pAlita)」と V2「pelita(pAlita)」の関連性	275
6.3.3.3. 補助動詞としての V2「pelita(pAlita)」における意味拡張の過程	276
第 7 章 結論.....	278
参考文献.....	284
添付資料.....	290

表記法について

本稿では、韓国語のハングル字母のローマ字表記において、基本的に以下のような「Yale 方式(The Yale System, 1954(Martin, S.E.))」を用いることとする。この Yale 方式は、文字を基本的には 1 対 1 に置き換える翻字方式であり、アメリカの言語学で広く用いられているものである。

(1)Yale 方式によるハングル字母のローマ字表記

母音

ハングル字母	ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅡ	ㅣ
Yale 1954	a	ya	wa	e	ye	we	o	yo	wu	yu

ハングル字母	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅡ	ㅣ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ
Yale 1954	ay	yay	way	ey	yey	wey	oy	u	i	uy

子音：初声

ハングル字母	ㄱ	ㅋ	ㆁ	ㄷ	ㅌ	ㄴ	ㄷ	ㅌ	ㄷ	ㅌ	ㄷ	ㅌ
Yale 1954	k	t	p	c	kh	th	ph	ch	kk	tt	pp	cc

ハングル字母	ㄷ	ㅌ	ㄷ	ㅌ	ㄷ	ㅌ
Yale 1954	s	ss	h	n	m	l

子音：終声

ハングル字母	ㅇ	ㄴ	ㄷ	ㄷ	ㄷ	ㄷ	ㄷ
Yale 1954	ng	n	m	l	k	t	p

尚、現代語には無い旧ハングルの字母に関しては、本稿において以下の通り規定する。

旧ハングル字母	ㅅ	ㅆ	ㅇ	ㅁ	ㅂ
Yale 1954	A	Ai	ng	'	z

第1章 序論

1.1 研究の背景

これまで筆者は、「言語はいかにして変化していくのか」という問いに対して一貫して取り組んできた。この「言語の変化」、特にあることばの意味が、いかにして拡張していくのかを説明するため、類型論的に類似する日韓両言語の補助動詞を対象に、対照言語学的視点から研究を進めてきた。

従来の現代日本語の補助動詞研究では、主に補助動詞における複数の意味・用法間の拡張関係をどう捉えるかが論点であった(金田一 1955、高橋 1969、吉川 1973、寺村 1984、笠松 1993)。これらの研究に共通する点は、意味拡張という通時的現象を共時的分析により明らかにしようとしている点である。現代語という共時態により、意味拡張のある一定の傾向を予測することは可能である。しかし、それはあくまで仮説を論じているに過ぎず、意味拡張のプロセスに対する論証としては説得力に欠ける。

一方、韓国語の補助動詞に関しては、特にアスペクトと関連させた分析が盛んに行われてきた(Son1996、Jeong2006 など)。例えば、Jeong(2006)では 15 世紀から 16 世紀にかけての中世語を対象にその接続構造を分析し、現代語よりも接続や分布に制約が見られることを指摘している。韓国語補助動詞研究の特徴は、歴史的研究が比較的進んでいるという点である。ただ、どの研究も、ある特定の時代の意味・用法および接続制限などを指摘するに留まっており、各時代の言語の様相を時間軸に沿って連続的に捉えるという視点に欠けている。

現代語の日韓対照研究の立場からは、文法化や認知意味論の観点から双方の意味拡張を対照した研究がある。Strauss・Sohn(1998)は文法化に伴う意味変化の観点から対照を試みており、日本語の方が文法化において進展が見られると指摘している。また、鄭・上原(2008)は認知意味論的手法を用いて文法化に伴う意味拡張を分析し、そのメカニズムをメタファーやメトニミーといった認知能力によって説明している。認知意味論からのアプローチは近年増えつつあるが、意味拡張をある一時代における現象として共時的に捉えるのか、時間軸に沿った通時的現象として捉えるのか、といった議論がなおざりにされている。さらに、認知能力のみに意味拡張のメカニズムを求めているため、実証的ではないという問題も孕む。また、これらの日韓補助動詞の対照研究が抱える問題として、文法化や認知意味論といった大枠に囚われるあまり、両言語間の異同を明らかにするという対照研究の使命が十分に果たせていないという点が挙げられる。

したがって、本稿では、以上のような日韓補助動詞の意味拡張という一種の言語変化を捉え

るため、通時的観点を導入した分析を行う。従来の研究のような共時的分析のみでは、意味拡張という言語変化のプロセスを把握し、さらにその方向性を論証するのは難しい。したがって、日韓両言語における歴史的文献からのデータを基に、補助動詞が時間の経過とともにいかにして変化したかを記述し、説明する。以上のような通時的アプローチにより、意味拡張のプロセスをより実証的に提示することが可能となる。

1.2 研究の目的

本稿は、日韓両言語における補助動詞の意味拡張を通時的観点から対照分析することを目的とする。日韓両言語の補助動詞を扱うことにより、従来のような個別的研究では明らかにできなかった、異なる言語間の言語変化における異同を詳らかにする。

1.3 研究の方法

本研究が分析対象とする補助動詞は、日本語の「-おく」、「-しまう(しまふ)」と、それに対応する韓国語の「-두다(-twuta)/-놓다(-nohta)」、「-버(브)리다(-pelita(pAlita))」である。

「-おく」に対応する「-twuta /-nohta」は、本動詞としても同様に〈置く〉を意味し、補助動詞としても〈結果状態の保持〉や〈準備〉を表す。一方、日本語の「-しまう(しまふ)」に対応する韓国語の「-pelita」は、本動詞として〈捨てる〉を意味するが、補助動詞としては〈一掃〉、〈遺憾〉のように「-しまう」と類似した意味を示す。

「-いる」のような文法化の進んだ補助動詞は、主にアスペクト(-いる, -ある, -いく, -くる)や、視点(-やる, -くれる, -もらう)の面から比較的研究が進んでいる。しかし、本稿が分析対象とする「-おく」や「-しまう」については、これらがアスペクトや主観的評価など、その機能の広がりが多岐に渡るため、いまだ確固たる枠組みが提示されずにいる。

金水(2004)では、補助動詞全般を捉える枠組みとして、「個々の文脈を取り込んで、推論を導出し、その結果に対して動作主や話し手が「望ましい」「望ましくない」などと評価を与えるようなシステム(金水 2004:47,13-15)」を提言している。例えば、「-しまう」では、話し手が意図した行為などの場合、文脈から導出される結果状態は望ましいものと解釈される(例：さっさと食べてしまいなさい)。一方、話し手の意図と全く無関係に生じる出来事の場合は、不可逆性ゆえに、憂うべき事態であると解釈される(例：また皿を割ってしまった)。

本稿が分析対象とする日韓補助動詞のペアは、単純な一対一の関係を示すものではない。しかし、推論の方向性を指定することによって新たな語用論的意味を獲得するという、補助動詞

としての性質を特に強く表出する形式である。つまり、これらはすべて言外の文脈から見通される結果状態への主観的な判断・評価に深く関わっているのである。したがって、本稿では以上のような補助動詞的性質を特に強くもつ形式を対象とし、分析を進める。

筆者が現在最も注目しているのは、日韓補助動詞における「主観化」、「間主観化」のような意味変化である。これまで、先行研究の記述を参照しつつ進めてきた現代日韓補助動詞の共時的分析により、両言語ともに主観化、間主観化の様相が見られることが明らかとなった。現代日本語の「-しまう」に関しては、主観性の弱い意味がより主観的な意味になり、そして、主観的な意味から間主観的な意味が生まれるという Traugott and Dasher(2002)の主張を支持する結果となった。ただ、このような意味変化の方向性というのは、共時的分析の段階では仮説に過ぎない。よって、本稿では、日韓の補助動詞の使用を歴史的なデータの中でたどって、時代別の出現頻度や分布パターンを分析し、以上のような意味変化の方向性を演繹的に検証する。ただし、単なる頻度分析に終わらないように、文脈からの情報を精査し、いかなる要因・メカニズムが意味変化に関わっているのかを明らかにする。

したがって、本稿では日韓両言語における歴史的資料の中から各種補助動詞構造をデータとして抽出する。以下、本稿において使用した日韓両言語による歴史的資料を提示する。以下のような歴史的資料を利用することにより、より実証的で説得力のある分析を行えることが期待できる。

尚、日韓両言語による歴史的資料から収集した各用例の現代日本語訳については、基本的に、日本語の歴史的資料の場合は、小学館『新編日本古典文学全集』における現代語訳、韓国語の歴史的資料の場合は、世宗大王記念事業会刊行の各種訳注および河瀬幸夫訳『釈譜詳節上』、『釈譜詳説下』によるが、必要に応じて筆者が加筆、修正を施した。また、韓国語による参考文献内にある引用個所の現代日本語訳も筆者によるものである。現代語訳は用例の下に〔〕で表示した。〈〉は中世及び近世韓国語資料の原典を表示しているが、『捷解新語 初刊本』、『改修捷解新語』の場合は原典における日本語の平仮名漢字交じり表記を、『隣語大方』の場合は、京都大学国文学会発行『隣語大方 本文・解題・釋文・索引』の釋文を表示している。

用例を収集するに際し、本稿では以下の表に示されている日韓両言語の歴史的資料を使用した。各資料名と合わせて、時代区分と表中における略称を表示する。

(1) 日本語の歴史的資料

時代区分	資料名		表の略称
上代	『万葉集』		〈万葉集〉
中古	『伊勢物語』		〈伊勢〉
	『枕草子』		〈枕草子〉
	『源氏物語』		〈源氏〉
	『夜の寝覚め』		〈寝覚め〉
	『狭衣物語』		〈狭衣〉
	『とりかへばや物語』		〈とりかへ〉
	『今昔物語』		〈今昔〉
中世	『宇治拾遺物語』		〈宇治拾遺〉
	『平家物語』		〈平家〉
	『徒然草』		〈徒然草〉
	『天草版平家物語』		〈天草平家〉
	『伊曾保物語』		〈伊曾保〉
	『中華若木詩抄』		〈中華若木〉
	『虎明本狂言集』		〈虎明〉
	『醒睡笑』		〈醒睡笑〉
	「浮世草子集」	『好色敗毒散』	〈浮世〉
		『野白内証鑑』	
		『浮世親仁形気』	
近世	「西鶴集」	『好色一代男』	〈西鶴〉
		『好色五人女』	
		『好色一代女』	
		『西鶴諸国ばなし』	
		『男色大鑑』	
		『日本永代藏』	
	「近松集」	『五十年忌歌念仏』	

近世	「近松集」	『淀鯉出世滝徳』	〈近松〉
		『冥途の飛脚』	
		『博多小女郎波枕』	
		『女殺油地獄』	
		『薩摩歌』	
		『丹波与作待夜のこむろぶし』	
		『夕霧阿波鳴渡』	
		『長町女腹切』	
		『山崎与次兵衛寿の門松』	
		『曾根崎心中』	
		『心中二枚絵草紙』	
		『卯月紅葉』	
		『卯月の潤色』	
		『心中重井筒』	
		『心中万年草』	
		『心中刃は氷の朔日』	
		『今宮の心中』	
		『生玉心中』	
		『心中天の網島』	
		『心中宵庚申』	
		『堀川波鼓』	
		『大経師昔暦』	
		『鍵の権三重帷子』	
		『出世景清』	
		『用明天王職人鑑』	
		『けいせい反魂香』	
		『国性爺合戦』	
		『曾我会稽山』	
		『平家女護島』	
	『洒落本』	『跣夫人伝』	〈洒落本〉
		『遊子方言』	

近世	『洒落本』	『甲駅新話』	〈洒落本〉
		『古契三娼』	
		『傾城買四十八手』	
		『傾城買二筋道』	〈洒落本〉
	『滑稽本』	『酩酊氣質』	〈滑稽本〉
		『浮世床』	
	『人情本』	『春告鳥』	〈人情本〉
	『東海道中膝栗毛』		〈膝栗毛〉

(2) 韓国語の歴史的資料

時代区分	資料名	略称
15 世紀中世韓国語	『釈譜詳節』	〈釈譜〉
	『月印釈譜』	〈月印〉
	『楞嚴經諺解』	〈楞嚴〉
	『圓覺經諺解』	〈圓覺〉
	『金剛經三家解』	〈金剛〉
	『杜詩諺解』	〈杜詩〉
	『三綱行實圖』	〈三綱〉
	『南明集』	〈南明〉
16 世紀中世韓国語	『續三綱行實圖』	〈續三〉
	『翻譯朴通事』	〈翻譯朴〉
	『翻譯老乞大』	〈翻譯老〉
	『呂氏郷約諺解 華山本』	〈呂氏〉
	『重刊蒙山法語諺解』	〈蒙山〉
	『重刊三綱行實圖』	〈重三〉
	『重刊續三綱行實圖』	〈重續〉
	『翻譯小學』	〈翻譯小〉
	『小學諺解』	〈小諺〉
	『分門瘟疫易解方』	〈分門〉
	『七大萬法』	〈七大〉
	『順川金氏諺簡』	〈順川〉

17 世紀近世韓國語	『諺解痘瘡集要』	〈諺痘〉
	『諺解胎產集要』	〈諺胎〉
	『練兵指南』	〈練兵〉
	『女訓諺解』	〈女訓〉
	『東國新續三綱行實圖 續三綱孝子圖』	〈東續孝〉
	『東國新續三綱行實圖 孝子圖』	〈東孝〉
	『東國新續三綱行實圖 三綱忠臣圖』	〈東三忠〉
	『東國新續三綱行實圖 忠臣圖』	〈東忠〉
	『東國新續三綱行實圖 烈女圖』	〈東烈〉
	『重刊杜詩諺解』	〈重杜詩〉
	『老乞大諺解』	〈老諺〉
18 世紀近世韓國語	『捷解新語 初刊本』	〈捷新〉
	『伍倫全備諺解』	〈伍諺〉
	『兵學指南』	〈兵學〉
	『明義錄諺解』	〈明義〉
	『改修捷解新語』	〈改捷新〉
	『五倫行實圖』	〈五倫〉
	『隣語大方』	〈隣語〉
	『敬信錄諺釋』	〈敬信〉
	『增修無冤錄諺解』	〈增無〉

第2章 先行研究

本章では、日本語と韓国語の補助動詞に関する先行研究について概観する。

2.1 日本語の補助動詞に関する先行研究

従来の現代日本語の補助動詞研究では、主に補助動詞における複数の意味・用法間の拡張関係をどう捉えるかが論点であった。例えば、金田一(1955)、吉川(1973)、寺村(1984)などによる現代日本語「-しまう」に関する一連の研究では、アスペクト的意味〈完了〉が含意する「不可逆性」から評価的意味〈不都合など〉が派生すると論じているが、藤井(1992)は、基本的意味は評価的意味であり、アスペクト的意味は様々な条件によって読みとられる付随的意味にすぎないとしている。現代日本語「-おく」に関しても、アスペクト的意味〈結果状態の保持〉ともくろみの意味〈準備〉の拡張関係をどう捉えるかで対立している(高橋 1969, 笠松 1993 など)。

一方、大場(2002)(2005)では、以上のような議論をふまえた上で、各先行研究の主張する基本義説を統一的に捉えることを目指している。

例えば、大場(2005)では、「-おく」を「行為によって生じる事態を見込んだ上で、その行為を行うことを表す(23:8)」とし、この規定において「行為によって生じる事態」を、「〈生じる事態 1〉当該の動作に伴って生じる直接の結果」と「〈生じる事態 2〉当該の動作に伴って生じる間接的な効果・効力」に分けて論じている。そして、先行研究で「-おく」のアスペクト用法と言われてきたものは、実は〈生じる事態 1〉を見込んでいる場合の含意に過ぎず、〈生じる事態 1/2〉は、「-おく」の意味の記述という観点からのみ見た場合には、どちらも当該の行為によって新しく獲得される事態という共通性によって一まとめにして考え得るものであり、「-おく」の本義はこの新しく獲得される事態を見込んで行為を行う点にあると述べている。さらに大場(2005)では、以上のような「-おく」の本義を規定した上で、以下のように「-おく」の用例を便宜的に分類している。

(1) 大場(2005)による「-おく」の用例の分類

用例群 A：「動作終了後の状態の保持」を表すとされるもの

用例群 B：「動作中の状態の保持」を表すとされるもの

用例群 C：「状態の保持」を表さず、準備性が顕著に見て取れるもの

用例群 D：「状態の保持」を表さず、準備性が極めて希薄なもの

大場(2005, 25:11-14)

例えば、用例群 A と B は、先行研究においてアスペクト用法と呼ばれてきたといえるが、それはこれらの用例群が〈生じる事態 1〉を見込んでいるということと関わっていると、「状態保持」という、先行研究がアスペクト用法とする「-おく」の意味は、その状態を見込むというところから生じる含意にすぎないと述べている。一方、先行研究においてもくろみ用法と呼ばれてきた用例群 C と D は、〈生じる事態 2〉と関わるとする。ただ、高橋(1969)や笠松(1993)が主張するように、「-おく」にはその行為によって何かを「もくろむ」という側面は確かにあるが、それは必ずしも「後の事態に備える」ということに限らないという。つまり、「後の事態に影響を与えることを見込む」場合もあれば、「それまでの事態に影響を与えることを見込む」場合(例：「(会議が終わった後)先生には私からご報告しておきます(大場 2005 による(36)の例)」、「(報告書を提出した部下に向かって)今、手が離せないから、後で見ておくよ(大場 2005 による(37)の例)」)、「当該行為そのものが直接引き起こす結果だけを見込む」場合もあるとし、「-おく」の「行為によって生じる事態を見込む」という基本義を、「後の事態に備える」というよりも広い意味として規定している。

一方、大場(2002)では、「-しまう」の意味の分析においては、先行研究のようなアスペクト的規定でもなく、話し手の感情を表すという規定でもなく、まったく別の把握が必要であるとし、「-しまう」を「『当該の事態は、上接動詞や発話状況によって示された、それまでに存在していた《拮抗状態》に対する《区切り》である』という話し手の認識を述べる形式(150:5-7)」であると規定している。この《拮抗状態》は「上接動詞によって表される客観的な過程」を指す場合もあれば、「発話状況によって示される状況」を指す場合もあるとするが、それらでは不十分な場合には「当該の事態があってはならないという状況が存在していた」という《拮抗状態》があったと解釈されるとする(例：「電車の中に傘をおいてきてしまった(大場 2002 による(14)の例)」、例：「(ポケットをさぐって)あれ？財布、落としてしまったか？(大場 2002 による(15)の例)」)。そして、従来〈動作過程の終了を表す〉とされ、積極的にアスペクトを表すとされてきた用例も、結局、話し手の《拮抗状態》からの離脱という把握の一つのパターンに過ぎず、「-しまう」に伴って現れるように見える話し手の感情は、その用例がおかれた発話状況による単なる含意であると主張する。

これらの現代日本語における補助動詞、とくにその意味用法に関する研究は、アプローチの仕方は異なるものの、現代日本語という共時態を対象として補助動詞の基本義を導き出すという点で共通する。本稿では、これらの先行研究において提示される各補助動詞の基本的意味および用法を検討しつつ、歴史的資料からの用例を基にした通時的手法によって、これらの現代日本語研究における成果を検証していく。

一方、日本語の複合動詞後項や補助動詞の歴史的展開を論じる先行研究も盛んに行われてい

る(百留 2000 他、福嶋 2004、金水 2006a 他、青木 2010 他)。百留(2000 他)による一連の研究では、文献資料における「動詞+動詞」型の表現を対象とし、それが「二語の連続」か「一語」という点に論点を絞り、音韻形態的な側面や統語的側面のみならず、意味的な観点からも全体の展開を推定し、個別的な語彙の様相を明らかにしている。

例えば、百留(2001a)では、従来、動詞間の結合の強弱はアクセントや音便化、連濁といった形態音韻論的指標、係助詞などの介入を許すかといった統語論的指標をもとに論じられてきたが、意味、用法の面から結合の強弱を明らかにしようとする際には、「補助動詞化」という現象が手がかりになるのではないかと述べている(百留 2001a,80:12-17)。そして、現代日本語における複合動詞を構成要素の意味によって以下の(2)のように分類する。

(2) 百留(2001a)による現代語複合動詞の構成要素の分類

- 1 前項、後項共に単独で使用される際の意味を保っているもの。
- 2 前項が補助動詞化(接辞化)しているもの。
- 3 後項が補助動詞化(接辞化)しているもの。
- 4 意味の面でも一語化し、前項、後項の意味からは全体の意味が導き出せないもの。

百留(2001a, 80:22-26)

百留(2001a)では、2 以下は構成要素の意味内容が単独で使用される場合とは異なっており、複数の動詞の接続であるという解釈を許さないため、「単なる動詞の接続とは異なり、その時点で形態的なまとまりが強まっていると判断できよう。本稿(百留 2001a)で取り上げる複合動詞後項(-入る)の補助動詞化は、動詞間のまとまりが強まった後に起こる現象であると考えられ、複合動詞成立を意味の面から論じる際に有効な指標であると考え(80:35-39)」と述べている。

百留(2001a)の概略を述べると、中古日本語における「-入る」の意味用法は、単独で使用される場合とほぼ同じであり、この時点では補助動詞化していなかったが、中世日本語における「-入る」は、時代が下るにつれて連体修飾のものに偏り、「動詞+入る」の動作性が失われ、全体が状態性を帯びるようになったという。これは「-入る」の補助動詞の意味が生じる素地が整った、あるいはすでに進行していることを反映している現象であり、「-入る」の担う意味役割が慣用的に使用され続けた結果不明確になったことと、状態性を帯びて使用されていることも合わさって、上接する動詞を修飾する要素であると捉えられるようになった、ということである。

以上のような百留(2001a)をはじめとした一連の研究においては、補助動詞化といった意味的な側面から「V+V」型表現の結合度を論じているが、百留(2001a)においても「複合動詞が成立していると判断するにあたり、アクセントなどにおける形態的な変化を重視しており、補助動

詞化だけを指標とするわけではない(百留 2001a,注(5))」と言及しているように、日本語における複合動詞の成立に関しては、様々な観点からのアプローチが必要であると思われる。百留(2000)でも主張されているように、言語にとって形と意味とは不可分のものであって、一方を無視するべきではないだろう。ただ、補助動詞化において、それが動詞間の形態的あるいは意味的なまとまりが強まった後に補助動詞化という現象が起こるのか否かに関しては、「-入る」の場合のにならず、その他の形式についても個別に検証せねばならないだろう。本稿においては以上のような動詞間のまとまりと補助動詞化の関連性についても検討する。

2.2 韓国語の補助動詞に関する先行研究

一方、韓国語の補助動詞に関しては、特にアスペクトと関連させた分析が盛んに行われてきた。Son(1996)は補助動詞の基本的意味を主にアスペクトに求め、その他の多様な派生的意味は文脈的解釈によるものであると結論づけている。そして、現代語に限らず中世語にまで範囲を広げ、より包括的な研究を試みている。一方、Jeong(2006)は 15 世紀から 16 世紀にかけての中世語を対象にその接続構造を分析し、現代語よりも接続や分布に制約が見られることを指摘している。

例えば、Son(1996)では、韓国語の「-twuta」と「-nohta」の基本的意味を以下の(3)のように提示している。

(3) 基本意味

「完結した動作の結果持続」を意味機能とする。

(4) 오래 전에 여행갈 물건을 챙겨 {놓았다(noh-ass-ta)/두었다(twu-ess-ta)}¹.

Olay ceon-e yehayng-ka-l mwulken-ul chayngky-e {noh-ass-ta / twu-ess-ta}.

だいぶ前に旅行に行く (ための) 荷物を揃えておいた。

(今もその状態が維持されている)

Son(1996:p.175, l.15-16)

また、Son(1996)では以上の(4)のような例を挙げ、括弧内における含意が「完結した動作の結果持続」を表すということを支持すると述べている。つまり、「-twuta」、「-nohta」のない

¹ 下線及び太字は筆者による。

² 『日本国語大辞典』において、「おく」【二】〔三〕(2)に「あとに残しとどめる。また、見捨てる」との記述が見られるが、これは「親ををきてなくなる人はいと罪ふかかなるものを〈源氏・浮舟〉」のように、「人物」を対象としてそれを「置き去りにする、見捨てる」の意味で限定的に用いられているため、本稿

「챙겼다(chayngky-ess-ta, 揃えた)」が単純な動作の完了を表すのに対し、これらが結合した(4)は、V1の動作が完了してその結果が現在まで維持されているということ表すということである。ただ、具体的な意味において「-twuta」と「-nohta」には差があると指摘している。そして、このような意味の違いは、特別な文脈や副詞との共起、先行語との結合において一方が制約を受けるという点に現れるという。

(5)a. 죽어가는 사람을 살려 {놓다(noh-ta)/*두다(twu-ta)} .

cuk-e-ka-nun salam-ul sally-e {noh-ta / *twu-ta} .

死にそうな人を {救う/?生かしておく} .

b. 오늘은 일단 살려 {두지만(twu-ciman)/*놓지만(noh-ciman)}

다음날 만나면 혼날 줄 알아.

onul-un iltan sally-e {twu-ciman / *noh-ciman} taum-nal manna-myen hon-na-l cul al-a.

今日は一旦 {生かしておくが/?救うが} 次の日会ったら酷い目にあうぞ。

(5a)では「살리다(salli-ta, 生かす)」ことが死んでいく状態を変化させたことになる(状態変化)。それに対し、(5b)では生きている状態を維持させているのみであり、状態を変化させてはいない(状態維持)と述べている。

また、Son(1996)では、「-twuta」と「-nohta」は文脈で「その事柄を基にする」、「あらかじめ準備する」、「事柄を終える」の意味に解釈される場合があるとしている。これは完了した動作の「結果持続」という意味が抽象的であるため、具体的に認識されるときに文脈によって解釈され得るためであると述べている。

さらに Son(1996)では、「-twuta」と「-nohta」の補助動詞化の様相についても言及しており、「-twuta」が補助動詞としての可能性を見せるのは 18 世紀の資料からであると指摘している。「-twuta」が補助動詞として用いられているという判断基準としては、まず「持続」という意味を表すということ、そして同時に V1 のみで実質的な叙述が完了し得る場合、「-twuta」は補助動詞であると述べている。一方、中世韓国語資料における「-twuta」については、原典においてそれに対応する漢字が明確に現れない例があったとしても、これらを補助動詞と見るには無理があるとしている。文脈で意味を推論してみると、程度の差こそあれ「-twuta」が本動詞としての意味を表しているため、補助動詞としては認めないと述べている。

また、「-nohta」に関しては 19 世紀の資料から補助動詞としての用法が確認されると述べている。そして、近代韓国語における「-nohta」は動作動詞のみを先行語とし、先行語によってなされる動作状態を維持するという意味を補い、動作の持続ではなく動作が完結して始まる状

態の持続に焦点が当たると述べている。なお、「-nohta」の場合、資料の不足ゆえ何世紀頃から補助動詞として確立したか断言はできないが、中世韓国語資料における「-nohta」については補助動詞として扱わないと述べている。

一方、「-pelita(pAlita)」に関しては、その基本的意味を「終結」、つまり「完全に終わること」に対する話し手の認識であるとし、文脈で「終結の強調」や「残念、心の負担除去」あるいは「爽快」の意味に解釈される場合があるとしている。また、「-pelita(pAlita)」は中世韓国語の時期から補助動詞としての用法が確認され、本動詞としてよりも補助動詞として使用されている場合の方が多いと述べている。ただ、現代韓国語の「-pelita」とは異なり、文脈のみではその意味が「完了」なのか他の意味なのか明確に検証できないと断った上で、中世韓国語の「-pelita(pAlita)」を、動作を「強調」する機能と動作の「完結」を意味するものと結論づけ、それ以外に現代韓国語でいう「負担除去」や「期待外れ」などのような意味があったと推論している。

それに対し、Jeong(2006)では 15 世紀資料や 16 世紀資料にも「twuta」の補助動詞的用例は観察されるとし、「twuta」の補助動詞構造が確認される時期は中世韓国語の時期であると述べている。

Jeong(2006)では、15 世紀の「-twuta」構造を「接続構造」と「補助動詞構造」に分類している。接続構造は、連結語尾「-서(-se)」の介在が可能であり、「twuta」が単独で述語として機能しており、独立性が高いものを指す。一方、補助動詞構造は、「-서(-se)」の介在が不自然であり、「twuta」が単独で述語として機能せず、独立性が低いものを指す。以上のような分類をした上で、15 世紀および 16 世紀中世韓国語資料における「-twuta」構造を分析し、「-twuta」構造における補助動詞構造は「動作の完結後、すなわち終結点以後の結果状態持続に焦点を置く」表現であると規定している。ただ、中世韓国語の「-twuta」構造は、語彙的意味の漂白化がほかの補助動詞よりも進行していないとし、「保有」、「維持」などのような語彙的意味が色濃く残存しているとも同時に指摘する。しかし、中世韓国語の「-twuta」構造は、動作の完結後の結果段階に対する[+持続性]のアスペクト的意味を産出し、先行状況の終結点以後に結果状態が持続することを表しているということを根拠に、中世韓国語資料における「twuta」の補助動詞化を認めている。

一方、「-nohta」の補助動詞としての成立に関しては、用例は少ないものの 15 世紀から 16 世紀の時点で補助動詞的な用法のものが確認されるとし、「-twuta」と同様に結果状態維持の意味を持つとする。ただ、「-nohta」の場合は終結局面の直後の状況を指示する[+瞬間的]という意義素を持つと述べている。

また、「-pelita(pAlita)」に関しては、中世語において補助動詞的な用法のものが確認され、

完了的(perfective)なアスペクトの意味を表すと述べている。加えて、現代韓国語では先行する動詞として自動詞とも結合するが、15 世紀から 16 世紀にかけての「-pelita(pAlita)」は先行する動詞として他動詞のみを選択するとし、現代韓国語の「-pelita」が中世韓国語の「-pelita(pAlita)」に比べて文法化の程度の側面において進展があったことを示すと指摘している。

以上のように、韓国語補助動詞研究においては歴史的研究が比較的進んでいるものの、補助動詞化の時期に関しては統一の見解に至っていないようである。これは使用する文献資料等も要因となっていると考えられるが、やはり補助動詞が語彙的な動詞と文法的な形式の間に位置する中間的な存在であるがゆえに、定義づけや位置づけの面で研究者により異なる見解が提示されるものと思われる。したがって、本稿においては、次の第 3 章にて従来の研究を参照しながら補助動詞の定義づけを行い、資料に関しても 15 世紀と 16 世紀中世韓国語資料のみならず、17 世紀から 18 世紀近世韓国語資料にまで調査範囲を広げ、より長い時間軸に沿った補助動詞化の様相を捉えていくこととする。

第3章 本稿での立場

本章では、本稿において扱う「補助動詞」の認定基準と分析対象である日本語の「-おく」と韓国語の「-twuta/-nohta」及び日本語の「-しまう(しまふ)」と韓国語の「-pelita(pAlita)」の意味用法について述べる。

3.1 補助動詞について

現代日本語において、補助動詞としての「-おく」及び「-しまう」は「動詞連用形+テ+おく/しまう」のような構造で出現しているが、上代日本語資料から近世日本語資料に渡って観察される「-おく」においては、「動詞連用形+テ+おく」のほか、「動詞連用形+おく」構造のものが多く観察される。特に、上代日本語から中古日本語資料にかけての「-おく」においては、用法を問わず「動詞連用形+おく」構造のものが圧倒多数を占める。近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」に関しても「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」のほか、「動詞連用形+しまう(しまふ)」構造のものが多数観察される。つまり、現代日本語における「-おく」や「-しまう」の場合とは異なり、上代日本語資料から近世日本語資料にかけて観察される「-おく」や「-しまう(しまふ)」においては、形や構造上の違いから補助動詞を識別することができないということである。したがって本稿では、歴史的資料において観察される日本語の「-おく」及び「-しまう(しまふ)」から、V2が補助動詞として用いられている用例を識別するために、寺村(1984)における以下の(1)のような方法を参照し、(2)のような補助動詞認定基準を設定する。

寺村(1984)では、日本語である事象を過程の中に位置づけ、完了・未了、継続その他動的事象の諸相を表す役目をするのは、(i)動詞の活用形、(ii)動詞のテ形に後接する補助動詞の一部、及び(iii)動詞の連用形に後接する補助動詞の一部、ということになるとし、(i)をアスペクトの一次的形式、(ii)を二次的形式、(iii)を三次的形式としている。つまり、動詞のテ形に後接するものの他、連用形に後接するものも補助動詞として認めていることとなる。そして、(iii)動詞の連用形に後接する補助動詞の一部である三次的形式を数ある「動詞連用形+動詞」という複合形態素からすくいとり、認定する方法として、次の(1)のような手順を示している。

(1)寺村(1984)による「V-v(動詞連用形+補助動詞)」型をとり出す手順

- ① V1-V2のうち、V2が本動詞としてもっている意味、文法的特徴を保持しているものは、V-Vという複合動詞とし、V2は補助動詞とは考えない。
- ② V2の文法的特徴の中心は、その補語のとりかたである。単に主格に立つ補語が有生か無生かということだけでなく、それが本来とる補語すべてについて考えなければならない。
- ③ v-V(接頭辞+動詞)や、一語化したものをのぞくと、V-vが得られる。

寺村(1984)では、複合動詞のうちある特定の特徴をもつものを「(本)動詞+(三次的)アスペクトの形式」としてすくいとり、それをアスペクトの体系の中に位置づけるための作業の一部として以上のような手順を提示しているが、本稿では、アスペクトの形式であるか否かに関わらず、補助動詞というものを規定する基準として、寺村(1984)による(1)のような手順を参照し、以下の(2)の通り補助動詞の認定基準を設定する。

(2)「補助動詞」の認定基準

- ① 本来有している意味を変容させ、他の動詞に一定の文法的意味を付加する
(意味機能の抽象化)
- ② 本来とり得る補語をとらない(格支配力の喪失)

3.2 日本語の V2「おく」及び韓国語の V2「twuta/nohta」の意味用法

本節では、3.1.で示した補助動詞の認定基準を踏まえ、上代日本語から現代日本語において観察される「-おく」の V2「おく」の意味用法、及び 15 世紀中世韓国語から現代韓国語において観察される「-twuta/-nohta」の V2「twuta/nohta」の意味用法について述べる。本節において規定するこれらの V2 の意味用法を基にして、各形式における歴史的な意味用法の変遷及び各形式の V2 における補助動詞化、そして補助動詞としての意味拡張の過程について考察する。

3.2.1. A 本動詞的用法

A 本動詞的用法は、日本語の本動詞「置く」や韓国語の本動詞「twuta/nohta」が表すような実質的な動作あるいは変化、出来事を表す用法である。日本語の V2「おく」の場合は、A 本動詞的用法として A1〈積もる〉と A2〈置く〉、韓国語の V2「twuta」の場合は A2〈置く〉、そして韓国語の V2「nohta」の場合は A2〈置く〉と A3〈放つ〉の用法が観察される。

3.2.1.1. A1〈積もる〉

日本語の V2「おく」の場合、V1「(霜、雪が)降る」に後続して「積もる」、つまり「露や霜が生じて、ある場所を占める。また、雪などが降って地にたまる(『日本国語大辞典』「おく」【一】)」という実質的な変化、出来事を表すことがある。この場合の V2「おく」は本動詞「置く」の原義そのものを表しており、自動詞として用いられている。

この意味用法は主に上代日本語資料『万葉集』において多く観察され、中古日本語以降の資料においても少数ではあるが観察される用法である。以下に用例を挙げる。

(3)富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり

〈不盡嶺尔 零置雪者 六月 十五日消者 其夜布里家利〉

〈万葉集 03/0320〉

(4)埼玉の小埼の沼に鴨ぞ羽霧るおのが尾に降り置ける霜を掃ふとにあらし

〈前玉之 小埼乃沼尔 鴨曾翼霧 己尾尔 零置流霜乎 掃等尔有斯〉

〈万葉集 09/1744〉

(3)の「降り置く」は、富士山の嶺に降り積もる雪は六月十五日に消えると、その夜再び降るということを表しており、この場合の V2「置く」は「(雪が)積もる」ことを表している。一方、(4)の「降り置く」は、鴨が自分の尾に降り積もった霜を、羽を動かすことによって振り払っていることを表しており、この場合の V2「置く」も「(霜が)積もる」ことを表しているといえる。

3.2.1.2. A2 〈置く〉

日本語と韓国語の V2 「おく/twuta/nohta」において、「置く」、つまり「事物に、ある位置を占めさせる(『日本国語大辞典』「おく」【二】〔一〕)」という実質的な動作を表す用法が共通して観察される。これは、それぞれの本動詞「置く/twuta/nohta」が共通して持つ原義そのものであり、他動詞として用いられている。この A2 〈置く〉は本稿において調査した日韓両言語の歴史的資料において、遍く観察される用法である。

日韓両言語の現代語において、この場合の「おく/twuta/nohta」は各々「服を脱いで、(そして)置く」あるいは「옷을 벗겨(서) 두다/놓다(os-ul peskye(se) twu-ta/noh-ta)」のように、「句的な動詞連続」によって表される。以下に用例を挙げる。

(5)「見だに向きたまへかし」と心やましうつらうて、ひき寄せたまへるに、御衣をすべしおきてみざり退きたまふに、…

[…(宮の御衣を)お引き寄せになると、(宮は)御衣をすべらせて置いて、お逃れになるが、…]

〈源氏物語 賢木〉

(6)牟尼佛도 내게 조고맛 爪髮을 施하샤 塔中에 조쳐 뒀습다가 世尊 涅槃 後에 塔中으로서 내야 이 閻浮提와 大千界에 니르리 곧고대 衣塔을 流布하야 後ハ 遺法을 鎮호리이다
牟尼佛 to nay-key cyokoma-s 爪髮-Al 施 hAsy-a 塔中-ey cochy-e twi-s-sAp-taka...

〈牟尼佛施我少爪髮 並置塔中〉

[牟尼仏も私たちに爪と髪を少し布施してください。塔中に並べて置き、世尊が涅槃の後に塔中から出し…]

〈月印釈譜 25:54a〉

(7)安樂國이 듣고 菩提樹 미틱 가 보니 삼동내 버혀 더뎃거늘 주서다가 次第로 니셔 노코 짜 해 업데여 그 울며 슬하디여 우니…

安樂国 i twut-ko 菩提樹 mith-ui ka po-ni samtongnyay pehy-e tetyey-s-kenul cuz-etaka
次第-lo niz-e noh-ko...

[安樂国はその話を聞き、菩提樹の下に行って見ると、三つに切断された(母の遺体が)放り捨てられていたので、拾って順番に繋げて置き、…]

〈月印釈譜 8:102a〉

(5)の「すべしおく」は、宮(藤壺)が御衣を滑らせて、とある場所に御衣を位置させるということを表しており、この場合の V2 「おく」は「事物をある位置に占めさせる」、つまり「置く」という実質的な動作を表している。(6)の「조쳐 두다(cochy-e twu-ta, 並べる-お

く)」は、三人の比丘が爪と髪を塔の中に並べて位置させるということを表しているため、この場合の V2「twuta」はやはり「事物をある位置に占めさせる」という実質的な「置く」という動作を表す。(7)の「니서 놓다(niz-e noh-ta, 繋げる-おく)」も、安樂国が三つに切断された母の遺体を拾って、繋げるように位置させることを表すため、この場合の V2「nohta」も「置く」という実質的な動作を表すといえる。

3.2.1.3. A3 〈放つ〉

韓国語の V2「nohta」の場合、「放つ」つまり「手で何かを掴んだり押さえている状態から、手を広げたり力を抜いて掴んでいたものが手の外へ抜けていくようにする（『標準国語大辞典』「nohta」[1][1]）」という実質的な動作を表すことがある。この場合の V2「nohta」は本動詞「nohta」の原義そのものを表しており、他動詞として用いられている。以下に用例を挙げる。

(8)한 도즈기 오슬 믹티고 平床 우희 미야 두고 어루려 커늘…崔氏 두리여 소겨 닐오디 히미
 ㅎ마 屈ㅎ니 혼 様으로 드루리라 ㅎ야늘 도즈기 글어 노흔대 崔氏 도즈기 갈흘 아사 나모
 지여 셔어서 닐오디

…hon 様-Alo tulwuli-la hA-yanAl tocAk-i kul-e noh-Antay 崔氏 tocAk-Ai kalh-Al az-a ...

〈群賊毀裂其衣. 縛於 簀之上將陵之…今力已屈. 當受處分. 賊遂釋之. 妻因取賊刀. …〉

〔…盜賊が(崔氏を)解き放つと、崔氏は盜賊の刀を奪い、…〕

〈三綱行實圖 烈女 13b〉

(8)の「글어 놓다(kul-e noh-ta, 解く-放つ)」は、盜賊が寝台の上に縛りつけていた崔氏を解いて放すことを表しており、この場合の V2「nohta」は「放つ」という実質的な動作を表しているといえる。

3.2.2. B 複合動詞的用法

本節では、日本語の「-おく」において観察される B 複合動詞的用法について述べる。この B 複合動詞的用法の場合、V2「おく」は本動詞「置く」の持つ語彙的意味から意味を変容させており、その意味の成立において V1 に依存的である。日本語の V2「おく」の場合、中古日本語から近世日本語、そして現代日本語において、以下のような B1〈結果物残存〉用法のものが観察される。

3.2.2.1. B1〈結果物残存〉

日本語の V2「おく」の場合、「当該の動作の結果生じた結果物を残存させる」という〈結果物残存〉を表すことがある。前述のような A 本動詞的用法とは異なり、前接する V1 の表す生産的な動作の結果生じる結果物を(残存させる)対象物とするため、その意味の成立において V1 に対し依存的である。本動詞「置く」にも以上のような意味用法は存在しないため、「-おく」において独自に出現した意味用法であるといえる²。

また、この場合、その結果物は以下の(9)や(10)のように具体物である場合もあれば、(11)のように抽象物である場合もあり、動作主体が V1 で表される当該の動作を行い、その結果物を残した後その場を立ち去る、あるいは亡くなるといった場面で用いられることが多い。

この B1〈結果物残存〉は中古日本語において最も高い生産性を示す用法であり、中古日本語から近世日本語にかけて観察される用法である。現代日本語においては、「不在なので、用件を書きおいてきた」、「家人に言いおいてでかける」のように「動詞連用形+おく」の「語彙的複合動詞」によって表される。以下、用例を挙げる。

(9)秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにそありけれと書きおきて、「かしこよりひとおこせば、これをやれ」とていぬ。

〔(女が)「秋かけて…」と書きおいて(書き残し)て、「あちらから使いをよこしたら、これを(男に)渡してくれ」と言って、去った。〕

〈伊勢物語〉

² 『日本国語大辞典』において、「おく」【二】〔三〕(2)に「あとに残しとどめる。また、見捨てる」との記述が見られるが、これは「親ををきてなくなる人はいと罪ふかかなるものを〈源氏・浮舟〉」のように、「人物」を対象としてそれを「置き去りにする、見捨てる」の意味で限定的に用いられているため、本稿における V2「おく」の B1〈結果物残存〉とは異なるものである。

(10)「艶にもの恥じして、恨み言ふべきことをも見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをづくり、心ひとつに思ひあまる時は、言はむ方なくすぎき言の葉、あはれなる歌を詠みおき、しのばるべき形見をとどめて、深き山里、世離れたる海づらなどに這ひ隠れぬるをり。…」

〔「…いよいよ胸に一つおさめきれなくなると、言いようもない恐ろしい言葉や、悲しい歌を詠み残して、深い山里や、辺鄙な海辺などに身を隠してしまう女がおります。…」〕

〈源氏物語 帚木〉

(11)いとをかしと聞いたまへど、人々の苦しと思ひたれば聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひを聞こえおきたまひて帰りたまひぬ。

〔君は（紫の上の発言を）ほんとにおもしろいなお聞きになるけれども、人々が困りきっているのです、耳に入らぬふりをして、懇ろなお見舞いの言葉を申しおかれて（申し残されて）お帰りになった。〕

〈源氏物語 若紫〉

(9)の「書きおく」は、女が楓の初紅葉に「秋かけて…」の歌を詠んで書きつけて、それを男に見せるために残し、その場を去っていくことを表しているため、この「書きおく」のV2「おく」はV1「書く」ことによって生産された結果物としての「歌」を、誰かに見せることを目的として「残存させる」ことを表しているといえる。

(10)の「詠みおく」も、悲しい歌を詠み、それをある男に自分のことを思い出してもらうためにどこかに書きつけることによって残し、深い山里や辺鄙な海辺などに去っていくことを表しているため、この「詠みおく」のV2「おく」もV1「詠む」ことによって生産された結果物としての「歌」を、誰かに見せることを目的として「残存させる」ことを表している。

(11)の「聞こえおく」は、君(源氏)が病に伏している尼君を訪ね、お見舞いの言葉を伝え残して、その場を去っていくことを表しているため、この「聞こえおく」のV2「おく」も、V1「聞こゆ(申す)」ことによって生産された結果物としての「(お見舞いの)言葉」を、尼君に伝えることを目的として「残存させる」ことを表しているといえる。

以下からは、日本語と韓国語の「-おく/-twuta/-nohta」の補助動詞構造におけるV2「おく/-twuta/-nohta」の用法となる。

3.2.3. C 補助動詞的用法

本節からは、日本語と韓国語の V2「おく/*twuta*/*nohta*」における C 補助動詞的用法について述べるが、その前提として、日本語と韓国語の補助動詞構造「-おく/*twuta*/*nohta*」における基本的特徴についての本稿の立場を明らかにしたいと思う。本稿では、日本語と韓国語の補助動詞構造「-おく/*twuta*/*nohta*」において、以下の(12)の通り「設定時に先行する〈動作の完成性〉と、その設定時における〈結果の継続性〉を複合的に捉える」という特徴が基本になっていると考える。

(12) 「-おく/*twuta*/*nohta*」の基本的特徴

〈動作の完成性〉+ 〈結果の継続性〉

そして、以上のような〈結果の継続性〉の〈結果〉はその性質によって、以下の(13)のように二種類に分けることができる。この〈結果〉をどのように捉えるかが、V2「おく/*twuta*/*nohta*」の実現する意味に関わってくることになる。

(13) 「-おく/*twuta*/*nohta*」における〈結果〉の分類

- ① 直接的な〈結果〉…基本、語彙的に含意された結果、文脈依存的な結果
- ② 間接的な〈結果〉…文脈依存的な結果としての〈効力〉

すなわち、日本語と韓国語の「-おく/*twuta*/*nohta*」の V2 が C 補助動詞的用法として用いられている場合、「当該の動作が設定時以前に達成され、その結果生じた結果(状態)が、設定時においても継続し、場合によってはそれが設定時において何らかの影響を与えている」ことを表すということである。以上のような日韓両言語の補助動詞構造「-おく/*twuta*/*nohta*」の基本的特徴は、工藤(1995)による「パーフェクト相」の規定に相当する特徴であるといえる。

工藤(1995)では、パーフェクト相を「〈ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動が引きつづき関わり、効力を持っていること〉を表していると規定することができる(99:14-16)」とし、次の(14)のようにパーフェクト相を規定する。

(14) 工藤(1995)によるパーフェクト相に関する規定

- a. 発話時点(ST)、出来事時点(ET)とは異なる〈設定時点〉が常にあること。
- b. 設定時点にたいして出来事時点が先行することが表されていて、テンス的要素としての〈先行性〉を含んでいること。
- c. しかし、単なる〈先行性〉ではなく、先行して起こった運動が設定時点との結びつき＝関連性をもっていると捉えられていること。つまり、運動事態の〈完成性〉とともに、その運動が実現した後の〈効力〉も複合的に捉えるというアスペクト的要素を持っていること。

工藤(1995:p.99, 1.21-28)

以上の(14)のようなパーフェクトの規定は、狭義のパーフェクト、つまり「動作パーフェクト」を規定するものである。研究者によっては、以上のような動作パーフェクトに対し、〈動作の完成性〉と同時に〈結果の継続性〉を複合的に捉えるという点で共通する「シテイル」の基本的意味の一つである「結果継続」を「状態パーフェクト」として区別し、両者をまとめて広義のパーフェクトとする場合もあるが、工藤(1995)では、以上の(14)のようなパーフェクト相を継続相から派生した独立のパラダイムとして扱っている。

一方、金水他(2000)において、以上のような「パーフェクト」という用語を用いた、現代日本語の「おく」の用法に関する記述が見られる。金水他(2000)では、次の(15)のように、「おく」の用法を区別している。

(15) 金水他(2000)による「おく」の用法の分類

A: 場所を表す二格名詞句を取り、実際に対象(客体)をその場所に「置く」意味を持つ。つまり、前項動詞と「置く」とが継起的な意味を持つ。

例: 積んでおく、出しておく、立てておく、つないでおく、つるしておく、浸けておく、など

B: 意志的な行為を表すすべての動詞に付き、〈準備〉の意味を表す。

例: 読んでおく、話しておく、知っておく、走っておく、など

金水他(2000:p.69,1.24-p.70,1.1)

金水他(2000)では、以上のような分類を提示して、時間性の面からそれぞれの用法のタイプを検討している。A類の「おく」は本動詞「置く」に近く、「机の上に本を積んでおいた」は完成相過去を表すが、B類は「パーフェクト性の表現(p.70,1.6)」であるとし、設定時以前に達成された意志的な行為が、なんらかの効果を狙って行われた〈準備〉の意味を含むものであることを表すとしている。

そして、以下のような例を挙げ、(16a)はパーフェクト相現在、(16b)はパーフェクト相未来に相当すると述べ、(16a)が完成相過去ではなくパーフェクト相現在であるという一つの根拠として視点制約を持つという点を挙げている。視点制約があるということは、出来事時とは別に、特定の視点と結びついた設定時があるということと仮定でき、「しておいた」の場合は、特別な文脈がなければ、設定時は発話時と同一、すなわち現在であるということになると述べている。

(16)a.調査書は読んでおいた。

b.明日までに調査書を読んでおくよ。

(17)a.??田中さんは調査書を読んでおいた。

b.田中さんは調査書を読んでおいたらしい。

金水他(2000:70)

以上のような金水他(2000)における現代日本語「おく」の記述を見てわかるように、「おく」の用法の規定において「パーフェクト」という用語を用いつつも、「おく」の B 類を「パーフェクト性の表現」とし、さらに B 類「おく」の用例(16ab)をそれぞれパーフェクト相現在(16a)、パーフェクト相未来(16b)に「相当する」と述べており、「パーフェクト」という用語に対して慎重な姿勢を見せていることが窺える。

本稿では、以上のような先行研究における記述を踏まえて、日本語と韓国語の補助動詞構造「-おく/-twuta/-nohta」の基本的特徴、そして用法の一つとして「パーフェクト」という用語を用いる。本稿においては、「-おく/-twuta/-nohta」の V2 に観察されるパーフェクト的用法を日本語および韓国語のアスペクト体系に位置づけることを目的とはしていないが、「設定時に先行する〈動作の完成性〉と、その設定時における〈結果の継続性〉を複合的に捉える」というパーフェクト相の規定に相当する特徴として、日本語と韓国語の補助動詞構造「-おく/-twuta/-nohta」における基本的特徴を以上の(12)のように規定し、用法の一つとして C1〈パーフェクト性〉を設定することとする。

3.2.3.1. C1〈パーフェクト性〉

日本語の V2「おく」において、「当該の動作が設定時以前に達成され、その結果生じた結果(状態)が、設定時においても継続し、場合によってはそれが設定時において何らかの影響を与えている」ことを表す用法が観察される。本稿ではこの用法を「設定時に先行する〈動作の完成性〉と、その設定時における〈結果の継続性〉を複合的に捉える」という C 補助動詞的用法の一用法として C1〈パーフェクト性〉を規定する。

この C1〈パーフェクト性〉は、前接する V1 の表す〈動作の完成性〉と同時に、その結果生じる〈結果の継続性〉をも表すため、V2 の意味の成立において V1 に対し依存的であるのは B1〈結果物残存〉と同様である。しかし、この場合、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「置く」が表すような実質的動作等を表しているともいえないため、B1〈結果物残存〉とは異なり、その機能は文法的である。

特に中古日本語から近世日本語の V2「おく」において、以上のような C1〈パーフェクト性〉用法と見られる用例が観察される。この場合、動作主体の動作における〈意図性〉は無いかあるいは希薄であるため、「後続く事態を見越す」といった〈準備性〉が表出しない。以下に用例を挙げる。

C1〈パーフェクト性〉

(18)御心地にもをかしと聞きおきたまひし人なれば、かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さるべき契りあるにやと思しながら、…

〔器量よしとお聞きになっていた人なので、こうして思いがけずこの地においでになる巡り合わせになったのも、しかるべき宿縁のあることだろうかと思ひになりながら、…〕

〈源氏物語 明石〉

(19)「などて、よろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし、若けれど中納言をばえ思しかけずなりぬめりしを、…」

〔「…しっかりと腰が定まらず、心の弱くなっていた私の怠りから、このような事態にもなったのだ。…」〕

〈源氏物語 若菜上〉

(18)の「聞きおく」は、君(源氏)がかつて良清から話を聞いていた入道の娘(明石の君)と思いがけず巡り会うこととなり、このような宿縁があるものだろうかと思いを巡らせていることを表している。つまり、過去のある時点で入道の娘の噂を「聞き(V1)」、その入道の娘についての

情報、記憶が君(源氏)の中に結果状態として存在しており、思いがけず巡り会うことになったその宿縁について思いを巡らせている時点(設定時)においても継続して存在し続けていることを表している。「かくおぼえなくてめぐりおはしたるも(こうして思いがけずこの地においでになる巡り合わせになったのも)」という文脈からも、「聞きおく」が後の事態、つまり入道の娘と出会うことを見込んで良清から話を聞いたのではないということがわかり、この「聞きおく」の V2「おく」が C3〈事前処置〉用法とは異なる用法として用いられていることがわかる。

一方、(19)の「なりおく」は、殿(源氏)が自分の意志が弱くなっていたことから女三宮を迎え入れてしまい、今になってそのことについて苦悩していることを表している。つまり、過去のある時点から心が弱く「なり(V1)」、その結果状態、つまり心が弱くなっていた状態が女三宮を迎え入れるか否かという判断をする際(設定時)にも継続しており、それが災いして、結果迎え入れるという事態を引き起こしたということを表しているのである。

現代日本語の「聞きおく」には、「参考までに聞きおくに留める」のように、「先方の意見、要求などを聞くだけで、自分の考えなどを言わないでおく(『日本国語大辞典』「ききおく」(1))といった限定的な意味用法は存在するが、主に中古日本語において生産的に用いられている以上の(18)や(19)のような C1〈パーフェクト性〉の用法は現代日本語には見られず、「聞いている」や「なっている(た)」のように「いる(いた)」で対訳させる方が適当であると思われる。

3.2.3.2. C2〈結果維持〉

日本語と韓国語の V2「おく/twuta/nohta」において、「当該の動作の結果生じた直接的な結果状態を維持する」という〈結果維持〉を表す用法が共通して観察される。本稿ではこの用法を「設定時に先行する〈動作の完成性〉と、その設定時における〈結果の継続性〉を複合的に捉える」という C 補助動詞的用法の一用法として C2〈結果維持〉と規定する。

この C2〈結果維持〉は、動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのが特徴である。しかし、その動作の結果生じる結果の維持に関しては、その結果の継続に終了時点が見込まれ、その結果の継続を意図的に維持することを表す場合(保持)と、当該の動作は意図的に行われるものの、その完了後の結果の継続が意図的に維持されているとはいえず、それが半永久的に継続することを表す場合(放置)がある。したがって、前者の場合は、程度性はあるものの「後続く事態を見越す」といった〈準備性〉が表出し、後者の場合はそれが希薄である。両者のどちらの意味で解釈されるかは V1 の動詞的性質と文脈により、かならずしも両者を明確に二分することができないため、中間的な用法も存在する。

なお、日韓両言語の現代語において、この場合の「-おく/twuta/nohta」は「涼しくなるまで窓を開けておく/시원해질 때까지 창문을 {열어 두다 / 열어 놓다} (siwenhay-ci-l

ttay-kkaci changmwun-ul {yel-e twu-ta / yel-e noh-ta})」、「あんな奴、もう放ってお
け / 그런 놈, 이제 놔 뒀 (kule-n nom, icey nw-a tw-e)」のように「動詞連用形+テ+おく / 動
 詞語幹+ -e +twuta/nohta」の「動詞+補助動詞」によって表される。以下に用例を挙げる。

(20) 銀八十目にさしつまり、内証借りにして、その代りには、朝夕念ずる、弘法大師の御作の如
 来を済ますまで預け置くべし。…

〔銀八十目なくて困るので、内証借りをいたしたい。その代わりに、朝夕念じている、弘法大
 師の御作の如来様を、返済まで預けておく。…〕

〈好色一代女〉

(21) 「반만 닉거든 장물와 파와 약들 따 노하 짓고 가맛우흘 돕고 김 나게 말오 불디더 도면
 아니한 스시에 닉느니라」

「…kama-s uh-ul twup-ko kim na-key mal-o pul-tit-e twu-myen anihan sAzi-yey
 nik-nA-nila」

〈…休着出氣，焼動火…〉

〔「…釜の蓋を被せて湯気が出ないようにし、火を焚いておけば、間もなく火が通る」〕

〈翻譯老乞大上 21b-22a〉

(22) 「これ母様. いたづらも、悪性も. 男持たぬ先ならば、言はれぬ構ひぢやあるまいか. それに
 いぢむぢ言ふ人はほからかいておかしやんせ. …」

〔「これ母様. 浮気もふしだらも、男持たぬ前ならば、無用な節介ではありませんか. それに
 ついてぐじぐじ言う人はほったらかしておきなされ. …」〕

〈心中万年草〉

(23) 드디여 두 념 거드랑을 달려 주기고 주검을 길헤 브려 두니 사라실 제 기르던 개 거터
 덕키여서 슬피 우니 보논 사름이 예엿비 녀기디 아니리 업더라 금 상도애 정문히시니라
 tutAiye twu nyep kyetulang-ul till-e cwuki-ko cuk-em-ul kilg-ey pAly-e twu-ni sal-a-si-l cey
 kil-A-ten kay…

〈遂刺兩腋殺之暴屍路傍生時所養之狗守側悲…〉

〔ついに両脇を刺して殺し、屍を道端に捨てておくと、生きていたときに飼っていた犬が側で
 (屍を)守り、悲しく泣くので、見ている人の中でそれを可哀相に思わない者はいなかった〕

〈東國新續三綱行實圖 烈女圖 6:81b〉

(20)の「預けおく」は、借金の形に阿弥陀如来の仏像を置き、借金を返済するときまでその仏
 像を預けるということを表している。つまり、阿弥陀如来の仏像を「預け(V1)」、その結果状態

つまり仏像を預けている状態を、借金を返済するときまで継続して維持することを表しているのである。これは「済ますまで(借金を返済するまで)」という継続期間を表す「～まで」と共起している点からも、V2「おく」が結果状態の維持を表しており、さらに「借金を返済する」という後の事態を見込んだ上で「預ける(V1)」という動作を行うことを表していることから、C2〈結果維持〉用法として用いられていると判断することが可能である。

(21)の「디더 두다(tit-e twu-ta, 焚く-おく)」は、釜で肉を調味料等とともに炒めた後、湯気が出ないように蓋をし、しばらく火を焚いた状態を維持すると、その肉に火が通るということを表している。この場合のV2「twuta」も「肉に火が通る」という後の事態を見込んだ上で「(火を)焚く(V1)」という動作を行い、その結果状態、つまり「火が焚かれている状態」を継続して維持することを表しており、C2〈結果維持〉用法として用いられていると判断することができる。

(22)の「ほからかいておく」は、不平やお節介なことを言う人のことは構わずにそのままにするということを表している。この場合のV2「おく」は後の事態を見込んで「ほからかす(V1)」という動作を行うわけではないが、その結果生じた状態を継続させることを表しているため、C2〈結果維持〉用法として用いられているといえる。(20)や(21)と異なり、〈結果の継続性〉において特定の継続期間については言及しておらず、V1の表す動作の結果状態が特定の変化を加えられずに継続することを表している。

(23)の「버려 두다(pAly-e twu-ta, 捨てる-おく)」は、両脇を刺して殺した遺体を道端に捨て、そのまま道端に放置することを表している。この場合のV2「twuta」も後の事態を見込んで「捨てる(V1)」という動作を行うわけではないが、その結果生じた「遺体が道端に捨ててある」という状態を継続させることを表しているため、C2〈結果維持〉用法として用いられていると考えることができる。この場合も、(22)と同様に特定の継続期間については言及しておらず、V1の表す動作の結果状態が特定の変化を加えられずに継続することを表している。

(20)や(21)のような場合のV2「おく」および「twuta」は後の事態を見込んだ動作の結果生じた有期限的な結果状態の継続を表す〈保持〉的な用法であるのに対し、(22)や(23)のような場合のV2「おく」および「twuta」は後の事態を特に見込まれずに行われた動作の結果生じた無期限的な結果状態の継続を表す〈放置〉的な用法であるといえる。

3.2.3.3. C3〈事前処置〉

日本語と韓国語の V2「おく/twuta/nohta」において、「後続く事態を見越して、当該の動作を行う」という〈事前処置〉を表す用法が共通して観察される。本稿ではこの用法を、「設定時に先行する〈動作の完成性〉と、その設定時における〈結果の継続性〉を複合的に捉える」という C 補助動詞的用法の一用法として C3〈事前処置〉と規定する。

この場合、前接する V1 は語彙的にも文脈的にも直接的な結果が生じることを表さない。したがって、文脈に依存した間接的な結果が、後続く事態への〈効力〉として捉えられることになる。また、動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのは C2〈結果維持〉と同様である。したがって、「後続く事態を見越す」といった〈準備性〉が顕著に表出する用例が多く観察されるが、日本語の V2「おく」においては、近世日本語から徐々に歴とした〈準備性〉を示さない「一時的処置」、「臨時的処置」のような用例も出現してくる。このような用例も亜種として C3〈事前処置〉に分類する。

なお、C3〈事前処置〉の「-おく/-twuta/-nohta」は、現代語において「明日までに本を読んでおく/내일까지 책을 읽어 {두다/놓다} (nayl-kkaci chayk-ul ilk-e {twu-ta / noh-ta})」のように「動詞連用形+テ+おく / 動詞語幹+ -e + twuta/nohta」の「動詞+補助動詞」によって表される。以下に用例を挙げる。

(24)「宮へ渡らせたまふべかなるを、その前に聞こえおかむとてなむ」とのたまへば、…

〔「父宮の所にお移りになるということなので、その前に一言申しあげておこうと思ひまして」とおっしゃるので、…〕

〈源氏物語 若紫〉

(25)「二三日 디나거든 銅鑑 看品 흘 써시니 몬져 代官네씩 출히라 닐리 두옵소」

「二三日 tina-ketun 銅鑑 看品 hAl skesi-ni moncye 代官-neyskuy chAlhi-la nill-e twu-Apso」

〈「…さきにたいくわんしゆに こしらゑとゆうて於加しられ」〉

〔「…先に代官衆に備えよと言っておいてください」〕

〈捷解新語初刊本 3:28b〉

(24)の「聞こえおく」は、紫の上が父宮の邸に移ると聞いた源氏が、父宮が紫の上を迎え入れに来る前に先に紫の上の邸を訪れ、密かに自邸に連れ出す旨を述べることを表している。つまり、源氏が事前に紫の上の邸に赴き、自らが先に紫の上を自邸に連れ出すことを「聞こえる(申しあげる,V1)」ことによって生じる間接的な結果、つまり「紫の上を自邸に連れ出すと断りを入

れたという処置の効果」が〈効力〉として継続し、父宮が紫の上を邸に迎え入れに来るという後の事態への備えとして働くことを見込んで「聞こえる(申しあげる)」という動作を行うことを表している。この場合、C2〈結果維持〉とは異なり、V1の表す動作の〈結果の継続性〉が直接的かつ具体的な〈結果の継続性〉ではなく、間接的かつ抽象的な〈結果の継続性〉である〈効力〉として捉えられている。よって、このV2「おく」はC3〈事前処置〉用法として用いられていると判断することができる。

(25)の「닐러 두다(nill-e twu-ta, 言う-おく)」は、二三日が過ぎてから銅、鑑の看品(品質の鑑別)を行うので、そのつもりで備えるよう事前に代官衆に伝えることを表している。つまり、二三日後に行われる看品の準備をするように代官衆に「言う(V1)」ことによって生じる間接的な結果、つまり「代官衆に看品が円滑に進むための手筈を整えさせる、あるいはその心構えを持たせるという処置の効果」が〈効力〉として継続し、二三日後に看品を行うという後の事態への備えとして働くことを見込んで「(備えるよう)言う」という動作を行うことを表している。やはりこの場合も、V1の表す動作の〈結果の継続性〉が直接的かつ具体的な結果として継続しているわけではなく、間接的括抽象的な〈効力〉として捉えられており、このV2「twuta」もC3〈事前処置〉用法として用いられているといえる。

3.2.3.4. C4〈非難・自虐〉

日本語と韓国語のV2「おく/nohta」において、「-おいて/-nohko」の形で複文の従属節の内部に現れる場合、「当該の動作を行ったことに対する動作主体への非難」というC4〈非難・自虐〉を表す用法が観察される。動作主体が第三者であれば、その人物の行った動作に対する〈非難〉となり、話し手自身であれば〈自虐〉となる。本稿ではこの用法を、「設定時に先行する〈動作の完成性〉と、その設定時における〈結果の継続性〉を複合的に捉える」というC補助動詞的用法の一用法としてC4〈非難・自虐〉と規定する。

このC4〈非難・自虐〉の用法は、日本語の場合は中古日本語から徐々に観察されはじめるものの、その用例は他の用法と中間的である。典型的な用例は、中世から近世日本語にかけて出現してくる。一方、韓国語の場合は本稿において調査した15世紀から18世紀までの歴史的資料では観察されなかった。したがって、その他の用法よりも後の段階になって出現した用法と考えられる。

C3〈事前処置〉と同様に、C4〈非難・自虐〉の場合も〈動作の完成性〉において動作主体の〈意図性〉が表出しており、〈結果の継続性〉は間接的かつ抽象的な結果、つまり動作の結果に対する動作主体の〈責任性〉として捉えられる。そして、その動作主体の動作の結果に対する〈責任性〉の追求として「非難」といったマイナスの評価性を帯びるようになると考えるこ

とができる。この点については、6.2.1.2において詳述する。

なお、C4〈非難・自虐〉の「-おく/-nohta」は、現代語において「一緒にお昼ご飯食べようと言っておいて、先に食べるとはひどい/같이 점심 먹자고 해 놓고, 먼저 먹는다니 너무하네(kath-i mek-ca-ko **hay noh**-ko, mence mek-nun-tani nemwuha-ney)」のように「動詞連用形+テ+おいて / 動詞語幹+ -e + twuko/nohko」の「動詞+補助動詞」によって表される。以下、用例を挙げる。

(26)「頼もしき御蔭に、幼き者を奉りおきて、みづからをばなかなか幼くより見たまへもつかず、…」

〔「(母上を)お頼りどころとおすがりして幼い姫君をお任せ申しておいて、本人に対してこの父親はかえって幼いころからなんのお世話もいたさず、…」〕

〈源氏物語 少女〉

(27) (名取の何某) やいやい、何ものなれは、せつしやうきんだんの所で魚をすくふぞ

〔やいやい、何者であれば、殺生禁断の所で魚を掬うのか〕

(出家) いや身共は魚はすくはぬ

〔いや、私は魚は掬わない〕

(名取の何某) すくはぬとは、今のほどすくふておひて、ことさら出家の身で似合わぬ事をあそばす

〔掬わないとは、今さっき掬っておいて、ことさら出家の身に似合わないことをする〕

〈虎明本狂言集 出家座頭類 名取川〉

(28)「脇差忘れた、ちやつとちやつと、なんと伝兵衛、町人はこゝが心やすい、侍なれば、そのまゝ切腹するであろの。」「我ら預っておいて、とんと失念、小刀も揃うたと、渡せば、…」

〔「脇差忘れた、早く早く。どうだ伝兵衛、町人はここが気楽だ。侍なら、すぐに切腹ものであろうな」「私も預っておいて、すっかり忘れていました。小刀もそろっています」と渡すと、…〕

〈心中天の網島〉

(29)「ナニうそなものか。只今灸をすへて呉ると言て置て、灸点をおろしてあげやふといふと、脇へ逃るではないかへ。…」

〔「何、嘘なものか。たった今灸を据えてくれと言っておいて、灸点に灸をすえてあげようという、脇へ逃げるではないか。…」〕

〈春告鳥〉

(26)の「奉りおく(お任せ申しておく)」は、内大臣が大宮に対して、幼いころから姫君(雲居雁)を母親である大宮に任せたままにして、自らは父親として何も世話をしなかつたということを表している。つまり、内大臣が大宮に姫君の世話を幼い頃からこれまで継続して任せていたことに対して自責の念にかられていることを表しているということである。ただ、この場合は母親である大宮に姫君を「奉りおく(お任せ申しておく,V1)」という動作の直接的な結果状態、つまり「姫君を大宮に任せている」という状態を継続させていることを表しているとも捉えられ、いわば C2〈結果維持〉と C4〈非難・自虐〉の中間的な用法であるといえる。

(27)の「すくふておく」は、殺生を禁じられている場で魚を掬うような動作を行っているにもかかわらず、魚を掬っているわけではないと弁明する出家に対して、名取の某がその動作を咎め、実際目の前で行われている動作と弁明の矛盾を指摘していることを表している。つまり、名取の某の認識として、出家が殺生禁断の場で魚を掬い、禁じられた行為を行ったという結果に対して出家が責任を負っていることを表しているのである。この場合の V2「おく」は、V1「すくふ」の表す動作の結果生じた結果状態が動作主体の動作の結果に対する〈責任性〉として捉えられており、その責任について言及し追及することによって〈非難〉のようなマイナスの評価を帯びた主観的意味が表出してくると思われる。

(28)の「預つておく」は、亭主(伝兵衛)が治兵衛から脇差を預かっていたにもかかわらず、そのことを忘れていたということを表している。つまり、亭主(伝兵衛)が治兵衛から脇差を預かり、治兵衛が帰るときまで管理し、帰り際に返すという責任下にありながら、それを忘れるという失態を犯しかけたことを表している。この場合の V2「おく」は、V1「預かる」の表す動作の結果生じた結果状態が当該の動作の結果に対する〈責任性〉として捉えられており、その〈責任性〉を顕在化させ、そのことについて言及し追求することによって〈非難〉あるいは〈自虐〉のようなマイナスの評価性を帯びた主観的意味が表出してくるものと思われる。

(29)の「言て置く」は、お玉が忠之丞に灸を据えてくれと言ったにもかかわらず、いざ灸を据えようとすると思方へ逃げたお玉を忠之丞が咎めることを表している。つまり、お玉が忠之丞に灸を据えるよう自分から依頼した以上、忠之丞から灸を据えてもらう責任下にありながら、それとは矛盾したその場から逃げるといふ動作を行っていることを表しているのである。この場合の V2「おく」も、「(灸を据えるよう)言う」という V1 の表す動作の結果生じた結果状態が当該の動作の結果に対する〈責任性〉として捉えられている。そして、その動作主体の〈責任性〉について言及し追求することによって、〈非難〉のようなマイナスの評価性を帯びた主観的意味が実現すると考えられる。

3.2.4. D〈完遂〉

日本語と韓国語の V2「おく/twuta/nohta」において、「当該の動作を最後まで行う、当該の動作を完全に行う」ことを表す〈完遂〉の用法が観察される。この場合、「後に続く事態を見越す」といった〈準備性〉は表出しない。

Son(1996) では、現代韓国語の「-twuta/-nohta」の基本的な意味機能を「完結した動作の結果持続」としているが、文脈により「その事柄を基にする」、「あらかじめ準備する」、「事柄を終える」の意味に解釈される場合があるとしている。これは完了した動作の「結果持続」という意味が抽象的であるため、具体的に認識されるときに文脈によって以上のような意味に解釈されるためであると述べている。以下、Son(1996)における「その事柄を基にする」及び「事柄を終える」を意味する韓国語の「-twuta/-nohta」の用例を提示する。

(30)a. 일을 다 망쳐 {놓았으니/두었으니} 무얼 할 수가 있겠어.

il-ul ta mangchy-e {noh-ass-uni / twu-ess-uni} mwue-l ha-l swu-ka iss-keyss-e.

仕事を台無しにして、何ができるというの。³

b. 노력해 {놓은/둔} 게 있어야 말을 붙이지.

nolyek-hay {noh-un / twu-n} key iss-eya mal-ul pwuthi-ci.

努力したことがあってから話かけなよ。

(31)a. 이 일부터 처리해 {놓고/두고} 이야기합시다.

i il-puthe chili-hay {noh-ko / twu-ko} iyaki-ha-psita.

この仕事から処理してから、話をしよう。

b. 일단 학위를 받아 {놓고/두고} 그때 가서 생각해 보자.

iltan hakwi-lul pat-a {noh-ko / twu-ko} ku-ttay ka-se sayngkak-hay po-ca.

一旦学位を取って(おいて)から、その時になって考えてみよう。

Son(1996:179)

ただし、以上のような Son(1996)による「その事柄を基にする」及び「事柄を終える」ことを表す「-twuta/-nohta」の用例を韓国語母語話者に確認したところ、(30a)と(30b)は前述の C1〈パーフェクト性〉に近く、(31a)は D〈完遂〉として解釈できるものの、(31b)は C3〈事前処置〉の用法に近いと述べている。したがって、(31b)以外の現代韓国語による用例に現代日本語の対訳を付ける場合、「おく」に対応させることが不自然であることは勿論、適当な表現がないといえる。

³ 太字と下線及び日本語訳は筆者による。

ただ、以上のような現代韓国語における「-twuta/-nohta」に類似した用例、特に D〈完遂〉と考えられる(31a)のような用例は、中古及び近世日本語の「-おく」においても数例観察される。以下、用例を挙げる。

(32)上帰らせたまふ御送りしおかせたまひて、中宮に、「ある山里に、ほのかなるものをこそ見たまへりしか」と申したまへば、…

〔(中納言は)帝がお帰りになるお見送りをおすませになつてから、中宮に、「ある山里で、ほのかなものを見たことでした」とおっしゃると、…〕

〈夜の寝覚め〉

(32)の「(御送り)しおく」は、中納言が帝の見送りを最後まで終えてから、その後中宮に対し、但馬守三女のことについて話し始めることを表している。(32)のような D〈完遂〉がほかの用法と異なるのは、V1「(御送り)す」の表す動作により生じる〈結果の継続性〉が捉えられていないということである。D〈完遂〉の場合、〈動作の完成性〉のみが顕在化し、その結果生じる〈結果の継続性〉は直接的にも、〈効力〉として間接的にも捉えられないため、後に続く事態を見込むといった〈準備性〉も表出しない。

3.2.3 において、日本語の補助動詞構造「-おく」の基本的特徴を「設定時に先行する〈動作の完成性〉と、その設定時における〈結果の継続性〉を複合的に捉える」と述べたが、この D〈完遂〉用法の場合は、以上のような基本的特徴の〈動作の完成性〉のみが捉えられている。この場合の V2「おく」は、3.2 における(2)「補助動詞」の認定基準により「①本来有している意味を変容させ、他の動詞に一定の文法的意味を付加」し、「②本来とり得る補語をとらない」ため、V2「おく」の補助動詞的用法であり、周辺的な用法として C 補助動詞的用法の一つに分類することも可能である。しかし、本稿では〈結果の継続性〉を捉えていないという点で以上のような補助動詞構造「-おく」の基本的特徴からは逸脱した用法であることを考慮し、その他の補助動詞的用法とは別のカテゴリーとして D〈完遂〉用法を立てることとする。

3.3 日本語の V2「しまう(しまふ)」の意味用法

本節では、近世日本語及び現代日本語において観察される「-しまう(しまふ)」の V2「しまう(しまふ)」の意味用法について述べる。本節において規定するこれらの V2「しまう(しまふ)」の意味用法を基にして、各形式における歴史的な意味用法の変遷及び V2 における補助動詞化、そして補助動詞としての意味拡張の過程について考察する。

3.3.1. A 本動詞的用法

A 本動詞的用法は、日本語の本動詞「しまう(しまふ)」が表すような実質的な動作あるいは変化、出来事を表す用法である。近世日本語の V2「しまう(しまふ)」の場合、以下の通り A1〈終える〉のような用法が観察される。

3.3.1.1. A1〈終える〉

日本語の V2「しまう(しまふ)」の場合、「終える」、つまり「し終える。しとげる。しすます。」(『日本国語大辞典』「しまう」〔一〕(1))という実質的な動作を表すことがある。この場合の V2「しまふ」は本動詞「しまう(しまふ)」の原義そのものを表している。ただ、この A1〈終える〉用法の V2「しまう(しまふ)」は「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」構造で用いられているものの、二つの動詞の句的な連続とも捉えられ、その他の用法における V2「しまう(しまふ)」のような非自立的な動詞というよりは、意味的、統語的に自立した本動詞として用いられているとも捉えられる。以下に用例を挙げる。

(33)「犬がくらひつくでゆかれぬと、大切なお客衆が見えませいで、いかい商売のかいのござりますれば、ふびんな事なれど、一服させてしまひたうござります。」

〔「犬がかみつくからいやだと、大切なお客方がお見えになりませず、大変商売の邪魔になりますので、かわいそうですが、一服盛って始末したいと思います。」〕

〈野白内証鑑〉

(34)上方ははや歌うて仕舞ひぬる、春の山道はさんさなど、今になりてから引いて、踊りぶりをかしく、これは座にたまられず。さても淫婦の姿にさへふつふつとあきはてぬれば、常なるものはことかけにも身の毛立ちて、又舟に乗り移り、…

〔上方ではもはや歌って終えた(流行遅れになった)「春の山道は、さあんさ」の歌を、今頃になって弾いて踊る身振りがおかしくて、とても見てはおられない。〕

〈男色大鑑〉

(33)の「(犬に一服)させてしまふ」は、店にいる犬が人を噛むので商売の邪魔になるといい、店の者がその店を訪れた弥五六に対して、一服毒を盛ってその犬を始末したいと述べていることを表している。したがって、V1「(犬に一服)さす」と V2「(犬を)しまふ」は手段的動作とその結果としての動作という継起的な関係で並列しており、形態的に緊密化した複合動詞やV2「しまふ(しまう)」の補助動詞的用法というよりは、二つの動詞の連続であると捉えることができる。つまり、この場合の V2「(犬を)しまふ」は補語をとって統語的にも自立し、「殺して結末をつける。かたづける(『日本国語大辞典』「しまう」〔一〕(4))」という本動詞の実質的な語彙的意味を表しているといえるため、この V2「しまふ」は A 本動詞的用法の A1〈終える〉用法として用いられていると判断することができる。

(34)の「歌うて仕舞ふ」は、備後の鞆の津にある郭で、女郎らが上方では以前に流行して歌っていたが、流行が終わると同時にもはや歌わなくなった歌謡を踊りながら歌っていることを表している。したがって、V1「(歌謡を)歌う」と V2「(歌謡を歌うという流行を)仕舞ふ」という一連の出来事を並列して述べる表現であると考えられる。次の B 複合動詞的用法の B1〈動作終了〉は、「当該の動作の最終段階が行われる」ことを表す用法であるが、この場合の「歌うて仕舞ふ」はこの B1〈動作終了〉のように V1「歌う」の表す動作の最終段階が行われることを表すといった、動作の時間的な局面を捉えているわけではない。あくまで V1「(歌謡を)歌う」との出来事の連続を表す動詞連続として把握されるものである。よって、(33)の場合と同様に、(34)の「歌うて仕舞ふ」の V2 も、独自の補語をとり、「(流行を)終える」という本動詞の語彙的意味を表していると考えられるため、A 本動詞的用法の A1〈終える〉用法として用いられていると判断される。

3.3.2. B 複合動詞的用法

本節では、日本語の「-しまう(しまふ)」において観察される B 複合動詞的用法について述べる。この B 複合動詞的用法の場合、V2「しまう(しまふ)」は本動詞「しまう(しまふ)」の持つ語彙的意味から意味を変容させており、その意味の成立において V1 に依存的である。日本語の V2「しまう(しまふ)」の場合、近世日本語において以下のような B1〈動作終了〉用法のものが観察される。

3.3.2.1. B1〈動作終了〉

日本語の「-しまう(しまふ)」の場合、「当該の動作の最終段階が行われる」ことを表す〈動作終了〉の用法が観察される。近世日本語資料の「-しまふ」において、V2「しまう(しまふ)」

が B1〈動作終了〉用法で用いられている場合、現代日本語に見られるような「動詞連用形+テ+しまう」ではなく、「歌ひしまふ」や「言ひしまふ」、「食ひしまふ」のように V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+しまふ」の構造で出現している場合が多数である。現代日本語における「動詞連用形+テ+しまふ」構造の V2「しまう」は以下に続く C 補助動詞的用法の C1〈一掃〉や C2〈遺憾〉用法として用いられる傾向が高いといえるが、近世日本語資料における「動詞連用形+しまふ」の V2「しまう(しまふ)」の場合は、現代日本語でいうところの「-終わる(終える)」に近い意味で用いられていることが多いといえる。つまり、そこに次に挙げる C1〈一掃〉における「負担感の一掃」や、C2〈遺憾〉における「話し手の結果に対する残念な気持ち」といった評価的要素は含まれず、勿論 C 補助動詞的用法における「再び元の状態に戻ることができない、後戻りできない」といった〈不可逆性〉も含まれていない。よって、本稿ではその他の用法と区別して B1〈動作終了〉用法を規定することとする。

この B1〈動作終了〉の場合、V2「しまう(しまふ)」は前接する V1 の表す動作の最終段階が行われる、ということを表すため、V2 の意味の成立において V1 に対し依存的である。この場合、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、その機能は文法的である。よって、「-しまう(しまふ)」の V2「しまう(しまふ)」における補助動詞的な用法であるとはいえるが、本動詞「しまう(しまふ)」における「し終える。しとげる。しすます」のような実質的動作を表す語彙的意味が色濃く残存しているという点で、次に挙げる C 補助動詞的用法の用法とは異なっていると考えられる。以下に用例を挙げる。

(35)「今宵かもしれず」と待侘びて、臂を枕にすこし夢むすびけるに、建仁寺の陀羅尼つきしまふ時分に、表に人のおとなひ。

〔「来られるのは今夜かもしれない」と待ちわびて、臂枕をして少し眠ったが、建仁寺の陀羅尼の鐘をつき終えるころに、表に人の訪問の音がする〕

〈野白内証鑑〉

(36)一人は荒木与次兵衛が追出し太鼓の鳴りしまふまで、田舎らしき人に気を付け、…

〔もう一人は荒木与次兵衛座の打ち出しの太鼓が鳴り終わるまで、田舎者らしい人物に目を付け…〕

〈武家義理物語〉

(37)此内三人ともあしをあらひしまいすぐにおくへとほる

〔この内、三人とも足を洗い終え、すぐに奥の方へ通る〕

〈東海道中膝栗毛〉

(35)の「つきしまふ」は、ある一定の時間の間に建仁寺の陀羅尼の鐘⁴百八つを突くという断続的な動作の最終段階が行われることを表している。この場合のV2「しまふ」はある一定の時間幅をもって続く当該動作の最終段階という時間的な局面を捉えている。

(36)の「鳴りしまふ」は、荒木与次兵衛座の興行の終了を知らせる打ち出し太鼓の音が鳴るとある一定の時間幅をもった出来事⁵の最終段階が行われることを表しており、(37)の「あらひしまう」も、V1「(足を)洗う」の表す一定の時間幅をもった動作の最終段階が行われ、次の事態「奥の方へ通る」へ移行することを表している。これらの場合のV2「しまふ」も(35)の場合と同様に、ある一定の時間幅をもって続く当該動作、出来事の最終段階という時間的な局面を捉える表現であるといえる。

これらのV2「しまう(しまふ)」は独自に補語を取らないという点においては統語的自立性を失っており、補助動詞的であると考えられるが、本動詞「しまう(しまふ)」の語彙的意味が色濃く残存しているという点で、以下のC補助動詞的用法のV2「しまう(しまふ)」とは性質を事にする。また、形態、構造的な特徴においても「動詞連用形+しまう(しまふ)」として実現しており、C補助動詞的用法のV2「しまう(しまふ)」とは差異を見せており、V1のヴァリエーションや使用頻度の面からも生産性の低さが窺え、V1とV2「しまう(しまふ)」が慣用的に固定化されて用いられていた可能性が高いと思われる。以上のような動詞的特性を考慮し、本稿ではこれらのV2「しまう(しまふ)」をB複合動詞的用法のB1〈動作終了〉としてカテゴリーを立てることとする。

3.3.3. C補助動詞的用法

本節からは、日本語のV2「しまう(しまふ)」におけるC補助動詞的用法について述べるが、その前提として、日本語の補助動詞構造「-しまう(しまふ)」における基本的特徴についての本稿の立場を明らかにしたいと思う。本稿では、日本語の補助動詞構造「-しまう(しまふ)」において、次の(38)の通り「当該動作が行われたり、あるいは当該の変化や出来事が生じたりして、再び元の状態には戻れない、後戻りできない」ことを表す〈不可逆性〉という特徴が基本になっていると考える。

(38)「-しまう(しまふ)」の基本的特徴

「当該動作が行われたり、あるいは当該の変化や出来事が生じたりして、再び元の状態には戻れない、後戻りできないという〈不可逆性〉」

⁴ 「陀羅尼」は建仁寺で毎夜子の刻(午前零時前後)より卯の刻(午前六時前後)まで百八つつく鐘。陀羅尼を誦しながらついたゆえの称。(『小学館新編日本古典文学全集第65巻』,p.174 頭注四を参照した)

そして、この〈不可逆性〉、つまり「後戻りのできなさ」をどのように捉えるかによって、次の(39)のように概ね三種類に分けることができる。この〈不可逆性〉をどのように捉えるかが、「-しまう(しまふ)」の実現する意味に関わってくる。

(39) 「-しまう(しまふ)」における〈不可逆性〉の分類

- ① 〈不可逆性〉を「もう元の状態には戻らない、後には戻らない」という勢いとして積極的に捉える。
- ② 〈不可逆性〉を「もう戻りたくても元の状態には戻れない、後戻りできない」という取り返しのつかなさとして消極的に捉える。
- ③ 〈不可逆性〉を「気づいたら後戻りできない状態になっている」という状況として捉える。

金水(2004)では、現代日本語における「-しまう」に関して、V2「しまう」とは「終う」ということで、「終わる」、「終わらせる」という意味から出発しており、もはや So(出来事が完成する前の初期状態)には戻らない、あるいは戻れないという含みを持つと述べている。そして、話し手自身の行為や話し手自身が計画した行為などの場合は、Sp(初期状態 So において、出来事 p が完成した時の結果の状態)は望ましいものであり、含意としては Sp への移行を速やかかつ確実なものとし、次なる局面へと移行する意欲等が生じるとする。一方、話し手の意図と全く無関係に生起する出来事の場合は、不可逆性の故に、Sp がもはや取り返しの付かない憂うべき事態であるという方向へ解釈されることになる、と述べている。さらに、Sp が So からは想像も付かない事態であったという「驚き」を表すこともある、と加えている。

以上のように、金水(2004)では「-しまう」の V2「しまう」は「もはや So(出来事が完成する前の初期状態)には戻らない、あるいは戻れないという含み」をもつとし、本稿における「-しまう(しまふ)」の基本的特徴〈不可逆性〉に対する考察と概ね一致する。つまり、(38)のように「当該の動作が行われたり、あるいは当該の変化や出来事が生じたりして、再び元の状態には戻れない、後戻りできないという〈不可逆性〉」として「-しまう(しまふ)」の基本的特徴を規定するが、金水(2004)でも指摘しているように、本稿ではもはや元の状態には「戻れない」あるいは「戻らない」といった、意志的に中立的な概念として提示する。ただ、金水(2004)では、「話し手自身の行為や話し手自身が計画した行為などの場合は、Sp は望ましいものであり、含意としては Sp への移行を速やかかつ確実なものとし、次なる局面へと移行する意欲等が生じる」あるいは「話し手の意図と全く無関係に生起する出来事の場合は、不可逆性の故に、Sp がもはや取り返しの付かない憂うべき事態であるという方向へ解釈されることになる」というように、「-しまう」の実現する意味を Sp、つまり、話し手(視点者)や動作主体の結果状態に対する評価と

して捉えているが、前者のような場合はむしろ結果状態よりも当該の動作そのものの勢いや積極性が主に捉えられており、その結果状態に対する評価は二次的なものかあるいは言及していない場合の方が多いと思われる。ただ、後者のような場合は、やはり当該の動作や変化、出来事が生じた結果の状態に対する話し手(視点者)や動作主体の評価(特に「後悔」や「残念」といったマイナスの評価)に焦点があたっていると考えられる。

本稿では、以上のような先行研究における記述を参照し、日本語の「-しまう(しまふ)」の基本的特徴を〈不可逆性〉と規定する。

この C 補助動詞的用法の場合、前接する V1 の表す動作あるいは変化、出来事の「後戻りのできなさ」を表すため、V2 の意味の成立において V1 に対し依存的である。また、この場合、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「しまう(しまふ)」における「し終える。しとげる。しすます」という実質的な動作を表しているとはいえないため、B1〈動作終了〉よりもその機能は文法的であるといえる。

3.3.3.1. C1〈一掃〉

日本語の V2「しまう(しまふ)」において、「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」といった〈一掃〉を表す用法が観察される。本稿ではこの用法を、「当該の動作が行われたり、あるいは当該の変化や出来事が生じたりして、再び元の状態には戻れない、後戻りできない」という C 補助動詞的用法の一用法として C1〈一掃〉と規定する。

この C1〈一掃〉は、以上のような〈不可逆性〉を「①もう元の状態には戻らない、後には戻らない」という勢いとして積極的に捉える用法である。したがって、この C1〈一掃〉用法の V2「しまう(しまふ)」は「もう後には戻らないという勢いで、積極的に、意欲的に当該の動作を行う」ということを表す。当該の動作の結果、爽快感を伴う場合もあり、そのような意味において結果状態に対する話し手(視点者)の評価(プラスの評価)が表出している場合もあるが、前述の通り、結果状態に対する評価よりも当該の動作そのものの勢いや積極性が主に捉えられている場合が多いといえる。以下に用例を挙げる。

⁵ ただ、「しまった！家に財布置いてきた！」、「しまった！お母さんの誕生日、昨日だった！」のように、「しまった」が間投詞のように用いられて一種の〈不可逆性〉を表すことはある。

(40)「よごしますとわるふございますから、はやく着かへて仕舞ひませう。しはになりそふで心配でなりません」ト立をとどめて…

〔「汚しますと悪いですから、早く着替えてしまいましょう。皺になりそうで心配でなりません…」…〕

〈春告鳥〉

(41)「エ、めんどうな、はらつてしまつたがい。手めへのするこたア、なんでもおさまらねへ。あしもとのあかるいうち、はらつてしまや」

〔「ええい面倒な、払ってしまつた方がいい。てめえのすることは、何でもただでは済まねえ。大事に至らぬうちに、払ってしまえ」〕

〈東海道中膝栗毛〉

(40)の「着かへて仕舞ふ」は、鳥雅がたみに着物を着せるが、高価な着物に慣れていないたみが汚れや皺になるのを恐れ、着たばかりにもかかわらず理由をつけて早々と着替えようとすることを表している。V1の表す当該の動作「着かへる」が積極的に素早く行われることを表しているというのは、副詞「早く」を伴っていることから明らかである。つまり、着物を着替える前の状態(元の状態)、言い換えれば、着物を着ている状態において生じ得る、高価な着物を汚し、皺を作るという危険性を回避するために、V1の表す「着かへる」という動作を積極的に行うということを表しているのである。これは、着物をそのまま着ているという元の状態には戻らないという〈不可逆性〉を積極的に捉えることによって生じる意味である。

この場合のV2「しまう(しまふ)」は、補語を取らず統語的な自立性を失っており、また本動詞「しまう(しまふ)」としての語彙的意味からも変容し、「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」を表す。よって、C補助動詞的用法の一つC1〈一掃〉として分類することが可能である。

3.3.3.2. C2〈遺憾〉

日本語のV2「しまう(しまふ)」において、「当該の動作が意図的に、あるいは話し手のコントロール不可能な状況下で行われるか、同様の状況下で当該の変化や出来事が生じた結果、話し手が残念な気持ちになること」といった〈遺憾〉を表す用法が観察される。本稿ではこの用法を、「当該の動作が行われたり、あるいは当該の変化や出来事が生じたりして、再び元の状態には戻れない、後戻りできない」というC補助動詞的用法の一用法としてC2〈遺憾〉と規定する。

このC2〈遺憾〉は、(42)のような〈不可逆性〉を「②もう戻りたくても元の状態には戻れな

い、後戻りできない」という取り返しのつかなさとして消極的に捉える用法である。したがって、この C2〈遺憾〉用法の V2「しまう(しまふ)」は「当該の動作を行った結果、あるいは当該の変化や出来事が生じた結果、もう後には戻れず、取り返しのつかない事態になる」ということを表す。話し手が動作主体で意図的に当該の動作を行ったのであれば後悔の念を伴い、意図的ではなくコントロール不可能な状況下で行われた場合、あるいは話し手のコントロール不可能な状況下で当該の変化や出来事が生じた場合は、残念な気持ちを伴う。発話時以降に当該の動作を行う場合や、変化及び出来事が起こることを予期する場合は、憂慮や不安感を伴う。したがって、C2〈遺憾〉の場合は、結果状態に対する話し手(視点者)の評価性(マイナスの評価性)が顕著に表出するといえる。以下に用例を挙げる。

(42)「ツイツイ、それは今朝のお薬か」「へい昨日のはお辰どんが流して仕舞ました」
〔「おいおい、それは今朝のお薬か」「へい、昨日のはお辰どんが流してしまいました」〕
〈春告鳥〉

(43)「たばこ盆へ火をいれたらこげてしまはア。たばこ盆の中にある、火入のうちへ、火をいれてこいといふもんだ…」
〔「たばこ盆へ火を入れたら焦げてしまうぞ。たばこ盆の中にある火入れの中へ火を入れてこいというものだ…」〕

〈東海道中膝栗毛〉

(43)の「こげてしまふ」は、たばこ盆に火を入れてくるよう女中に依頼した喜多八に対し、弥次郎兵衛がたばこ盆に火を入れたら焦げることになる、火はその中にある火入れという器に入れるのだとその誤りを注意していることを表す。つまり、たばこ盆に火を直接入れると、V1「こげる」の表す変化によって、「たばこ盆が火によって焦げる」という、いわば話し手にとって好ましくない状態が生じ、たばこ盆に火を入れる前の状態(元の状態)、つまり、たばこ盆に火が入れられていない、正常で話し手にとって好ましい元の状態には後戻りできなくなるという〈不可逆性〉を消極的に捉えることによって生じる意味である。この場合、視点者である話し手(弥次郎兵衛)は V1「こげる」の表す変化の結果状態「たばこ盆が火によって焦げている状態」を自らにとって好ましくない状態であると捉えているため、その結果状態が憂慮や不安感といったマイナスの評価性を帯びることとなる。

この場合の V2「しまう(しまふ)」も、補語を取らず統語的な自立性を失っており、また本動詞「しまう(しまふ)」としての語彙的意味からも変容している。よって、本稿においてこれを C 補助動詞的用法の一つ C2〈遺憾〉として分類する。

3.3.3.3. C3〈無意識〉

日本語の V2「しまう(しまふ)」の場合、「当該の動作が話し手のコントロール不可能な状況下で無意識に行われたり、話し手が意識しないうちに当該の変化や出来事が生じること」といった〈無意識〉を表す用法が観察される。本稿ではこの用法を、「当該の動作が行われたり、あるいは当該の変化や出来事が生じたりして、再び元の状態には戻れない、後戻りできない」という C 補助動詞的用法の一用法として C3〈無意識〉と規定する。

この C3〈無意識〉は、以上のような〈不可逆性〉を「③気づいたら後戻りできない状態になっている」という状況として捉えている用法である。したがって、この C3〈無意識〉用法の V2「しまう(しまふ)」は「動作主体の知らない間に当該の動作や変化といった事態が生じており、気づいたら後戻りできない状態になっている」ということを表す。動作主体の意図性が希薄という点で C2〈遺憾〉と近接しているが、結果状態に対する話し手(視点者)の評価が無いかあるいは希薄であるという点で、C2〈遺憾〉とは異なる。以下に用例を挙げる。

(44)「乗合のことだから、まゝのかはとそれなりに、くたびれまぎれに、ツイねてしまひやして、…」

〔「…乗り合いだから、ええままよとそのまま、くたびれたのにまかせて、つい寝てしまひまして、…」〕

〈東海道中膝栗毛〉

(45)「おらア、ついのんでしまつた。いめへましい。サアいかふ…」

〔「俺は、つい飲んでしまった。忌々しい。さあ行こう…」〕

〈東海道中膝栗毛〉

(44)の「ねてしまふ」は、弥次郎兵衛と喜多八がのぼり船に乗ろうとしたところ誤って下り船に乗ってしまい、乗った後に誤ったことに気づいたがそのまま船に乗り、くたびれたせいもあって、いつの間にか無意識のうちに船の中で寝ていたことを表している。V1「寝る」の表す動作そのものは、それを行うか行わないかにおいて動作主体の意志によるコントロールが可能であるといえるが、この場合は「くたびれまぎれに(くたびれたのにまかせて)」という文脈からも裏付けされているように、疲労による眠気という動作主体のコントロールの及ばない状況下で V1「ねる」という動作が行われたことを表している。この場合は、動作主体が自らの意志ではコントロールが不可能であるという状況下において V1「ねる」の表す動作が実現し、動作主体がその事態に気づいたときにはすでに元の状態「寝る前の起きている状態」に戻れなくなっていることを表す。この場合、C2〈遺憾〉とは異なり、V1の表す動作や変化などの結果生じた結

果状態を好ましいあるいは好ましくない捉えるような評価性は帯びていないか希薄である。

3.4 韓国語の V2 「pelita(pAlita)」の意味用法

本節では、15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語において観察される「pelita(pAlita)」の V2 「pelita(pAlita)」の意味用法について述べる。本節において規定するこれらの V2 「pelita(pAlita)」の意味用法を基にして、各形式における歴史的な意味用法の変遷及び V2 における補助動詞化、そして補助動詞としての意味拡張の過程について考察する。

3.4.1. A 本動詞的用法

A 本動詞的用法は、韓国語の本動詞「pelita(pAlita)」が表すような実質的な動作あるいは変化、出来事を表す用法である。15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語の V2 「pelita(pAlita)」の場合、以下の通り A1 〈捨てる〉のような用法が観察される。

3.4.1.1. A1 〈捨てる〉

韓国語の V2 「pelita(pAlita)」の場合、「捨てる」、つまり「持っている、必要のないものを投げたり放ったりする(『標準国語大辞典』「pelita」)」という実質的な動作を表すことがある。この場合の V2 「pelita」は本動詞「pelita」の原義そのものを表しており、他動詞として用いられている。以下に用例を挙げる。

(46) 獄卒이 그 말 듣고 머리를 수거 쇠슬히 노하 브리고 머리 조사 一千 디위 나마 절 하고
讚歎하야 날오디…

…極卒-i ku mal tut-ko meli-lAl suk-ye soysulg-i noh-a pAli-ko meli coza…

〔獄卒はその言葉を聞いて頭を下げ、鋏を放して捨て、…〕

〈月印釈譜 23:82b〉

(47) 기피 信히리 허러 붓오물 조차 地中에 무더 브려…

kipi- 信 hAl-i hel-e pAs-om-Al coch-a 地中-ey mwut-e pAly-e…

〈…其深信者 從其毀碎 埋棄地中…〉

〔深く信じる者も、壊し砕くのに従い、地中に埋め棄て、…〕

〈楞嚴經諺解 9:77b〉

(48) 엇디 길히 드른 거슬 주어 그 횡실을 더러이리오 하니 양지 크게 붓그려 금을 내어 버리고…

…esti kilh-Ai tulu-n kes-Al cwu-e ku hAlngsil-ul teleilio yangcAi khu-key puskuly-e kum-ul nay-ye pAli-ko…

〈況拾遺求利 以汗其行乎 羊子大慙乃捐金於野…〉

〔「どうして道に落ちているものを拾って、その行いを汚すのか」羊子は大いに恥じ、金を投
げ捨てて、…〕

〈五倫行實圖 烈女 15a〉

(46)の「노하 버리다(noh-a pAli-ta, 放して捨てる)」は、目連が釈迦牟尼仏の弟子であることを述べたのを承け、極卒が頭を下げ、門の番をするために持っていた鍬を手放してその場に捨てることを表している。したがって、(46)は、V1「noh-ta, (鍬を)放す」とV2「pAli-ta, (鍬を)捨てる」という二つの異なる動作が継起的に行われることを表しており、(49)の「노하 버리다(noh-a pAli-ta, 放して捨てる)」は二つの動詞の連続であると捉えることができる。つまり、この場合の V2「(犬を)しまふ」は補語をとって統語的にも自立し、「殺して結末をつける。かたづける(『日本国語大辞典』「しまう」〔一〕(4))」という本動詞の実質的な語彙的意味を表しているといえるため、この V2「しまふ」は A 本動詞的用法の A1〈終える〉用法として用いられていると判断することができる。

3.4.2. B 複合動詞的用法

本節では、15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語の「-pelita(pAlita)」において観察される B 複合動詞的用法について述べる。韓国語の V2「pelita(pAlita)」の場合、以下のような B1〈対象物除去〉用法のものが観察される。

3.4.2.1. B1〈対象物除去〉

韓国語の V2「pelita(pAlita)」の場合、「除去する」つまり「付着していた不必要なものを取り除く」、「これまで持っていた悪い考えや思想を払拭する、断ち切る、滅却する」という実質的な動作を表すことがある。本稿において使用した 15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語まで遍く観察される用法であり、その他の用例よりも非常に多くの用例が観察される。(54)から(56)のように、各資料の原典において「除」や「落」、「去」等が対応漢字となっている場合が多数観察され、これらの「-pelita(pAlita)」において、V2「pelita(pAlita)」が B1〈対象物

除去〉の用法で用いられていたことを示唆する。

ただし、この B1 〈対象物除去〉用法と思われる「**pelita(pAlita)**」は、A1 〈捨てる〉用法や次に挙げる C 補助動詞の用法と中間的である用例も多く含まれており、先の「除」や「去」といった原典における対応漢字や前後の文脈を以てしてでもどちらか判断のつかない場合も多い。また、本動詞「**pelita(pAlita)**」にも「잡념을 버리고 학업에 힘 써라(capnyem-ul peli-ko hakep-e him sse-la, 雑念を捨てて学業に励みなさい(『Daum 日本語辞典』より引用))」のような例が見られ、この V2 「**pelita(pAlita)**」が A 本動詞的用法として用いられている可能性を示唆する。しかし、同時に現代韓国語において「잡념을 끌어버리고 열심히 공부하기로 마음을 다 잡았다(capnyem-ul ssul-e-peli-ko yelsim-hi kongpu-ha-ki-lo maum-ul ta cap-ass-ta, 雑念を払い除けて一生懸命勉強することを決心した(『標準国語大辞典』より引用))」のように、V1 「**ssul-ta**」と V2 「**peli-ta**」の結合が固着化した複合動詞「**ssi-l-e-pelita**(払い除ける、払い去る)」のように用いられている例も見られる。中世韓国語及び近世韓国語において、この B1 〈対象物除去〉に含まれる V2 「**pelita(pAlita)**」と前接する V1 の形態的緊密性については今後詳細に検討する必要があるが、意味的な側面からこの V2 「**pelita(pAlita)**」を検討すると、雑念や煩悩といった抽象物の排除という限定的な意味で用いられ、また現代韓国語においても V1 と V2 が結合して慣習的に用いられていることを考慮し、本稿では暫定的に B 複合動詞的用法の B1 〈対象物除去〉のものを区別して提示する。以下に用例を挙げる。

(49) 善容이 무로디 너희 그리 밋고래 이서 므슴 煩惱를 몬 **쓰리 브리**관디 得道를 몬히엿는다
…musum 煩惱-lal mot **psul-e pAli**-kwantAi 得道-lal mot hA-yays-nan-ta…

[…「あなたたちはそのように山奥にいらっしゃりながら、どうして煩惱を**払い除けられず**、得道できないのですか」]

〈釈譜詳節 24:26a〉

(50) 比丘 | 偈 지서 對答호디 내 므슴미 解脫을 得히야 뒷논 거슬 다 **더리 브료**니 이 모미
샤 늑외야 앓기디 아니호노이다
…nay mAzAm-i 解脱-Al 得 ha-ya twis-non kes-ul ta **tel-e pAly**-oni…

〈…我心得解脱 **斷除**諸有盡 今此身骸 無復恪惜…〉

[…「私の心は解脱を得て、持っていたものをすべて**捨て去った**ので、この身などこれ以上惜しくない」…]

〈釈譜詳節 24:16a〉

(51)이난 일후미 色陰區字 | 라 모든 念을 스러 벗료문 물고ㅁ로 虛妄한 生滅을 두르혀미라
 …i-nan ilhum-i 色陰區字·ila motAn 念-ul sul-e pAly-o-m-An mAlko-mA-lo 虛妄 hA-n 生滅
 -ul twuluhhy-e-m-ila

〈…銷落諸念者…〉

[…すべての念を消し去ることは、清いものに虚妄な生滅を取り戻すことである]

〈楞嚴經諺解 9:51a〉

(52)초로써 조히를 적셔 우희 덩헛다가 혼 時스동안을 기다려 아사 벗리고 물로 씻으면 그
 痕이 곳 뵈느니라

…hAn 時 s tongan-ul kitAky-e as-a pAli-ko mwul-lo psis-umyen ku 痕-i kos poy-nA-tila

〈以醋蘸一時久除去 以水洗 其痕即見〉

[…酢で紙を濡らし、上に被せてからひと時の間待ち、取り除いて水で洗えば、その痕が見える]

〈増修無冤録諺解 1:41a〉

例えば、(49)の「쓰러 벗리다(psul-e pAli-ta, 払い除ける)」は、善容が山奥で修行をしているが得道できない梵志らに対し、なぜこれまで持っていた煩惱を消し去ることができず、得道することができないのか尋ねていることを表している。したがって、(49)は、手段的な動作を表す V1「psul-ta,(煩惱を)払う」と V2「pAli-ta,(煩惱を)除ける」という二つの異なる動作が継起的に行われることを表しており、(49)の「쓰러 벗리다(psul-e pAli-ta, 払い除ける)」は二つの動詞の連続であると捉えることもできるが、次に挙げる C 補助動詞的用法の C1〈一掃〉のように「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」を表していると把握することもでき、用法としては中間的である。

3.4.3. C 補助動詞的用法

本節からは、韓国語の V2「pelita(palita)」における C 補助動詞的用法について述べるが、その前提として、韓国語の補助動詞構造「-pelita(palita)」における基本的特徴についての本稿の立場を明らかにしたいと思う。本稿では、韓国語の補助動詞構造「-pelita(palita)」において、次の(53)の通り「ある心理状態や状況が消えてなくなるように当該の動作が行われる」ことを表す〈消去的動作〉という特徴が基本になっていると考える。

(53) 「-pelita(pAlita)」の基本的特徴

「ある心理状態や状況が消えてなくなるように当該の動作が行われるという〈消去的動作〉」

そして、この〈消去的動作〉によって消えてなくなる心理状態や状況が、以下の(54)のように概ね二種類に分けることができる。この〈消去的動作〉によって消えてなくなる心理状態や状況をどのように捉えるかが、「-pelita(pAlita)」の実現する意味に関わってくる。

(54) 「-pelita(pAlita)」における〈消去的動作〉によって消失する心理状態や状況の分類

- ① 視点者(動作主体あるいは話し手)にとって、不必要、無益な心理状態や状況
- ② 視点者(動作主体あるいは話し手)にとって、必要、有益な心理状態や状況

Park(2003)では、補助動詞「-pelita」の意味は、本動詞としての「pelita」との関連性を考慮すると、ある事態が発生するのかが発生しないのかという問題がある人物の関心の対象であり、その人物の心の中に緊張感を惹起しているが、その問題がある一方に決定し、その緊張感が消えてなくなることを表すものとして把握される、と述べている。さらに、本動詞としての「pelita」が自分の所有ないし統制下にあったある対象を自分の統制圏外に出す行為を表すとすれば、補助動詞としての「-pelita」の場合、捨てられる(出される)ものは、心理的負担感あるいは緊張感であるということができる、と述べている。また、「ある人物」は話し手でもあり得れば、その事態を表す動詞の意味上の主語が指す人物でもあり得るとする。

Park(2003)でも指摘するように、「-pelita(pAlita)」の表す意味は何らかの形で本動詞「pelita(pAlita)」の持つ語彙的な意味と関連していると思われ、それはやはり本動詞「pelita(pAlita)」の持つ、ある不必要な対象物を「捨てる」あるいは「除去」することを表すといった特徴であると考えられる。現代韓国語における補助動詞「-pelita」の用法のみを見て、それが表す意味や機能を本動詞「pelita」との関連から考察するのは非常に困難であると思われる。これまでの先行研究においても、補助動詞「-pelita」の基本的意味機能を「完了」や「終結」と捉えたが故に、本動詞「pelita」と補助動詞「-pelita」との関連性、つまり本動詞「pelita」から補助動詞「-pelita」への意味拡張の様相を明確に見出だすことができなかったものと思われる。

ただ、時を遡り、15世紀中世韓国語をはじめとした歴史的資料における「-pelita(pAlita)」の用例を観察してみると、C補助動詞的用法の中においても、何らかの心理状態や状況、特に「①視点者(動作主体あるいは話し手)にとって、不必要、無益な心理状態」の消去が関連している用例が多いことがわかる。このような事実に基づき、補助動詞としての「-pelita(pAlita)」の本質

の特徴について考えを巡らせてみると、原始的な用法として、ある不必要な対象物を実際に「捨てる(A1〈捨てる〉)」、あるいはこれまで持っていた不必要な考えを除去する(B1〈対象物除去〉)を表すものがあつたが、その用法が拡張して、負担感や緊張感といった不必要で無益な心理状態や状況の消去的動作に繋がっていったものと考えられる。

本稿では、以上のように、韓国語の「-pelita(pAlita)」の基本的特徴として「ある心理状態や状況が消えてなくなるように当該の動作が行われる」ことを表す〈消去的動作〉を規定する。前述の通り、「-pelita(pAlita)」の実現する意味は、この〈消去的動作〉によって消えてなくなる心理状態や状況をどのように捉えるかが関わってくる。

この C 補助動詞的用法の場合、前接する V1 の表す動作が「ある心理状態や状況が消えてなくなるように行われること」を表すため、V2 の意味の成立において V1 に対し依存的である。また、この場合、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「pelita(pAlita)」における「捨てる」という実質的な動作を表しているとはいえないため、その機能は文法的であるといえる。

3.4.3.1. C1〈一掃〉

韓国語の V2「pelita(pAlita)」において、「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」、「面倒な状況を解消するために当該の動作が行われること」といった〈一掃〉を表す用法が観察される。本稿ではこの用法を、「ある心理状態や状況が消えてなくなるように当該の動作が行われること」という C 補助動詞的用法の一用法として C1〈一掃〉と規定する。

韓国語の V2「pelita(pAlita)」における C1〈一掃〉の場合、消えてなくなる心理状態や状況を「①視点者(動作主体あるいは話し手)にとって、不必要、無益な心理状態や状況」として捉えることによりその意味が表出し、日本語の V2「しまう(しまふ)」における C1〈一掃〉と類似した意味を示すようになる。韓国語の V2「pelita(pAlita)」の場合も、視点者にとって不必要で無益であると思われる心理状態や状況が消失し、そこから解放されるといったことを表すため、当該の動作の結果、爽快感を伴う場合もあり、そのような意味において結果状態に対する話し手(視点者)の評価(プラスの評価)が表出している場合もあるが、やはり日本語の V2「しまう(しまふ)」と同様に、結果状態に対する評価よりも当該の動作そのものの勢いが主に捉えられている場合が多いといえる。

日本語の V2「しまう(しまふ)」の場合は、補助動詞的用法の基本的特徴である〈不可逆性〉を「①もう元の状態には戻らない、後には戻らない」という勢いとして積極的に捉え、「もう後には戻らないという勢いで、積極的に、意欲的に当該の動作を行う」ことを表す用法であるとした。韓国語の V2「pelita(pAlita)」の場合、日本語の本動詞「しまう(しまふ)」と韓国語の本

動詞「pelita(pAlita)」の語彙的意味(「終える」、「捨てる」等)の違いにより、各補助動詞「-しまう(しまふ)」と「-pelita(pAlita)」の持つ基本的な特徴も異なってくると思われる。したがって、双方の意味拡張の様相も自ずと異なってくると考えられるが、以下の用例のように、韓国語の V2 「pelita(pAlita)」も日本語の V2 「しまう(しまふ)」が示すような C1 〈一掃〉用法に類似した用例が観察され、双方の補助動詞的用法において非常に興味深い一致を見せているといえる。以下に用例を挙げる。

(55)그 어미 아들 나니더늘 중돌홀 모도아 닐오디 ㅎ다가 중곳 내 門 알피 오나든 매로 그우리 터 브리고…

…hAtaka cyungkos nay 門 alph-Ai o-natAn may-lo kuwul-i thy-e pAli-ko…

[…「もし僧がうちの門の前に来たら、鞭で追い返すように打ってしまえ」…]

〈月印釈譜 23:73a〉

(56)이러면 네 이 물 글월 내여다가 더 사롬드려 무려 처섬의 덩흔 갑새셔 닷 랑 은을 더러 내여 흐르는 갑새 해오 글월 익혀 브리라

…chezem-uy tyenghA-n kapsay-sye tas lyang un-ul tel-e nay-ye mulu-nun kapsay hyey-o kulwel muyhy-e pAli-la

〈「…元定價錢内中, 除了五兩銀子, 做番悔錢, 扯了文契 着」〉

[「…元の額から五兩の銀貨を除いて、払い戻す額で計算し、契約書を破ってしまってください」]

〈翻譯老乞大 下 19a-20b〉

例えば、(55)の「터 브리다(thy-e pAli-ta, 打ってしまう)」は、羅卜の母が息子から僧齋に使うための財貨を預かっていたにもかかわらず他のことに使うつもりでいたため、使用人に対してもし僧が門の前に来たとしても鞭で打って追い返すよう命令していることを表している。つまり、「僧が門前に来たため僧齋をしなければならない」という話し手(羅卜の母)にとって、不必要、無益な状況が解消されるように、V1 の表す「(鞭で僧を)打つ」という動作を行うことを表しているのである。これは、〈消去的動作〉において消去される状況を、視点者(話し手)にとって不必要、無益な状況と捉えることによって生じる意味である。

この場合の V2 「pelita(pAlita)」は、補語を取らず統語的な自立性を失っており、また本動詞「pelita(pAlita)」としての語彙的意味からも変容し、「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」、「面倒な状況を解消するために当該の動作が行われること」を表す。よって、C 補助動詞的用法の一つ C1 〈一掃〉として分類することが可能である。

3.4.3.2. C2 〈遺憾〉

一方、韓国語の V2「pelita(pAlita)」においても、日本語の V2「しまう(しまふ)」における C2 〈遺憾〉のような「当該の動作や変化、出来事が生じた結果、視点者(動作主体あるいは話し手)が残念な気持ちになること」を表す用法が観察される。本稿ではこの用法を、「ある心理状態や状況が消えてなくなるように当該の動作が行われること」という C 補助動詞的用法の一用法として C2 〈遺憾〉と規定する。

韓国語の V2「pelita(pAlita)」における C2 〈遺憾〉の場合、消えてなくなる心理状態や状況を「②視点者(動作主体あるいは話し手)にとって、必要、有益な心理状態や状況」として捉えることによりその意味が表出し、日本語の V2「しまう(しまふ)」における C2 〈遺憾〉と類似した意味を示すようになる。つまり、「視点者にとって必要で有益な心理状態や状況が、当該の動作が行われることによって消失し、その結果残念な気持ちになる」ことを表すということである。したがって、韓国語の V2「pelita(pAlita)」における C2 〈遺憾〉の場合も、結果状態に対する話し手(視点者)の評価(マイナスの評価)が顕著に表出するといえる。

日本語の V2「しまう(しまふ)」の場合は、補助動詞的用法の基本的特徴である〈不可逆性〉を「②もう戻りたくても元の状態には戻れない、後戻りできない」という取り返しのつかなさとして消極的に捉える用法であり、よって「当該の動作を行った結果、あるいは当該の変化や出来事が生じた結果、もう後には戻れず、取り返しのつかない事態になる」ということを表すとした。C1 〈一掃〉と同様、C2 〈遺憾〉の場合も、日本語の本動詞「しまう(しまふ)」と韓国語の本動詞「pelita(pAlita)」の語彙的意味(「終える」、「捨てる」等)の違いにより、V2「しまう(しまふ)」と V2「pelita(pAlita)」の間で意味拡張の様相が自ずと異なってくると考えられるが、以下の用例のように、韓国語の V2「pelita(pAlita)」も日本語の V2「しまう(しまふ)」が示すような C2 〈遺憾〉用法に類似した用例が観察され、双方の補助動詞的用法において非常に興味深い一致を見せているといえる。以下に用例を挙げる。

(57)또 이 봄 二三月 дох 시저를 만나니 дох 시경을 컨네터 브리디 말 거시라

sto i pom 二三月 tyohA-n sicye-lul masna-ni tyohA-n sikyeng-ul kenneythy-e pAli-ti
mal kes-ila

〈「又逢着這春二三月好時節, 休蹉過了好時光」〉

〔「またこの春の二、三月の良い季節を迎えたので、この良い時期を逃してしまわないようにしよう」〕

〈翻譯朴通事 1a〉

(58) 엿디 저문 아히돌호로 아롬덜 飲食을 몬드라 먹게 햏야 가문 햏을 히려 브리 뇨 햏니…
 …esti cyemu-n ahAi-tAlh-olo alAmtyes 飲食-ul mAntal-a mek-key hAya kamwun spep-ul
hel-e pAli-nA-nyo hani…

〈豈可使小兒輩私作飲食壞家法也〉

〔「どうして幼い子どもたちに個人的に食事を作らせて、家庭内の掟を破ってしまうのか…」〕

〈翻譯小学 9:7a〉

(59) 햏다가 몬져 콩을 주면 그 물이 다만 콩만 곁히여 먹고 답플다가 다 햏터 브리 뇨니라
 …ku mal-i taman khong-man kAlhAi-ye mek-ko tipphl-taka ta heythy-e pAli-nA-nyo…

〈若是先與料時，那馬只揀了料喫，將草都抛撒了〉

〔「万一先に豆を与えたら、その馬たちは豆だけ選んで藁はすべてまき散らしてしまうんだよ」〕

〈老乞大諺解 上 22a〉

例えば、(59)の「햏터 브리다(heythy-e pAlita, まき散らしてしまう)」は、馬に先に豆を与えると、豆だけを選んで食べて、藁は食べずにまき散らすという話し手にとって不都合な状況が生じていることを表している。つまり、「馬がえり好みせずに藁も豆も均等に食べる」という話し手にとって、必要、有益な状況が解消されるように、V1の表す「햏티다(heythi-ta, (藁を)まき散らす)」という動作が行われ、よって話し手にとって不都合な状況が生じることを表しているのである。これは、〈消去的動作〉において消去される状況を、視点者(話し手)にとって必要、有益な状況と捉えることによって生じる意味である。この場合、視点者である話し手は、V1「햏티다(heythi-ta, (藁を)まき散らす)」の表す動作の結果状態「(豆だけが食べられて)藁がまき散らされている状態」を自らにとって好ましくない状態であると捉えているため、その結果状態が残念や不都合といったマイナスの評価性を帯びることとなる。

このV2「pelita(pAlita)」も、補語を取らず統語的な自立性を失っており、また本動詞「pelita(pAlita)」としての語彙的意味からも変容し、「視点者にとって必要で有益な心理状態や状況が、当該の動作が行われることによって消失し、その結果残念な気持になる」を表す。よって、C補助動詞的用法の一つC1〈一掃〉として分類することが可能である。

第4章 日本語の場合

本章では、上代日本語から近世日本語にかけて観察される「-おく」と「-しまう(しまふ)」における V1 の特性及び V2「おく」と「しまう(しまふ)」の意味用法を、時代別に分けて考察する。

4.1 日本語の「-おく」

本節では、上代日本語から近世日本語にかけて観察される「-おく」における V1 の特性及び V2「おく」の意味用法を明らかにする。まず V1 の特性については、V2「おく」に前接する V1 を表で提示した後、その形態的特徴及び「自他」といった動詞的性質について、実際の用例を挙げながら考察する。

4.1.1. 上代日本語の「-おく」

まず、上代日本語資料『万葉集』において観察される「-おく」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。次に、「-おく」における V2「おく」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

4.1.1.1. V1 の特性

以下の表 1 は、上代日本語資料『万葉集』において観察される「-おく」の V1 を用例数とともに提示するものである。また、表 2 において提示する通り、異なり語数は 16、延べ語数は 26 となっている。以下の表 1 及び表 2 を見られたい。

表 1 上代日本語資料『万葉集』における「-おく」の V1

V1	用例数
開け-	1
う(打)ち-	1
送り-	1
易へて-	1
消たずて-	1
据ゑ(へ)-	2

貯(蓄)ひ(へ)-	1
立て-	1
造(作)り-	2
貫き-	1
と(取)り-	2
並み-	1
はじき-	1
降り-	8
隔てて-	1
寄せ来て-	1
合計	26

表 2 上代日本語資料『万葉集』における「-おく」の V1 の異なり語数および延べ語数

	異なり語数	延べ語数
用例数	16	26

次に、「-おく」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 3 の通り示される。「-おく」の V1 の形態として、「動詞連用形+おく」のものと「動詞連用形+テ+おく」のものが観察されるが、多くの用例が前者の「動詞連用形+おく」構造で現れていることがわかる。ただし、上代日本語資料『万葉集』にて観察される「-おく」の「動詞連用形+テ+おく」構造のものは、(2)「消たずて置かむ」以外、すべて「句的な動詞連続」であると考えられる。以下、表 3 と上代日本語資料『万葉集』における「-おく」の「動詞連用形+テ+おく」構造の用例を見られたい。

表 3 上代日本語資料『万葉集』における「-おく」の V1 の形態

	異なり語数	延べ語数
動詞連用形	12(75%)	22(84.6%)
動詞連用形+テ	4(25%)	4(15.4%)

(1)胸を割き心を採り、易へて置き、投るるに神薬を以てすれば、即ち寤めて平なるがごとし。

〔割胸採心、易而置之、投以神薬、…〕

〈沈痾自哀文〉

(2)松陰の 浅茅が上の 白雪を 消たずて置かむ ことはかもなき

〔松影乃 浅茅之上乃 白雪乎 不令消将置 言者可聞奈吉〕

〈08/1654〉

(3)ひさかたの 天つしるしと 水無し川 隔てて置きし 神代し恨めし

〔久方 天印等 水無川 隔而置之 神世之恨〕

〈10/2007〉

(4)秋さらば 我が船泊てむ 忘れ貝 寄せ来て置けれ 沖つ白波

〔安伎左良婆 和我布祢波弓牟 和須礼我比 与世伎弓於家礼 於伎都之良奈美〕

〈15/3629〉

次に、「-おく」における V1 の自他に注目してみると、表 4 の通り示される。「降り-」、「寄せ来て-」以外、すべて他動詞である。

以下の(5)「降り置く」の場合、V1「降る」は非対格自動詞であり、V2「おく」は 3.2.1.1. で述べた A1〈積もる〉用法としての意味を示しているため、非対格自動詞として用いられているといえる。また、(6)「寄せ来て置けれ」の場合、V1「寄せ来る」は非能格自動詞であり、V2「おく」は 3.2.1.2. で述べた A2〈置く〉用法としての意味を示す他動詞として用いられているといえるが、「動詞連用形+テ+おく」という「句的な動詞連続」として現れているといえる。

影山(1993)では、「V-V 型の複合動詞」において、V1 と V2 に他動性の制限が見られると述べている。つまり、他動詞と非能格自動詞とは互いに調和するのに対し、非対格自動詞は他動詞とも非能格自動詞とも相容れず、非対格自動詞としか結合しないという「他動性調和の原則」が働いているということである。勿論、現代日本語の複合動詞を対象とした以上のような先行研究による分析を、そのまま上代日本語の「-おく」をはじめとした V-V 構造に当てはめて考え得るか否かに関しては検討せねばならないが、仮に上代日本語において(5)の「降り置く」が現代日本語における複合動詞のようなものとして存在していたとしても、その構造は「非対格自動詞+非対格自動詞」と分析されるため、「他動性調和の原則」による制限から逸脱した用例であるとはいえない。また、(6)の「寄せ来て置けれ」は「動詞連用形+テ+おく」という構造で「句的な動詞連続」として存在していたと考えられるため、以上のような「他動性調和の原則」による制限は受けないと考えられる。以下、表 4 と上代日本語資料『万葉集』の「-おく」において V1 として自動詞をとる用例を見られたい。

表4 『万葉集』における「-おく」のV1の自他

	異なり語数	延べ語数
自動詞	2(12.5%)	9(34.6%)
他動詞	14(87.5%)	17(65.4%)

(5)高山の巖に生ふる菅の根のねもころごろに降り置く白雪

〔高山乃 伊波保尔於布流 須我乃根能 祢母許呂其呂尔 布里於久白雪〕

〈20/4454〉

(6)秋さらば 我が船泊てむ 忘れ貝 寄せ来て置けれ 沖つ白波

〔安伎左良婆 和我布祢波弓牟 和須礼我比 与世伎弓於家礼 於伎都之良奈美〕

〈15/3629〉

4.1.1.2. 意味用法

次に、上代日本語資料『万葉集』において観察される「-おく」のV2「おく」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、上代日本語において「-おく」のV2「おく」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、最も多く観察されたものとしてA本動詞的用法におけるA1〈積もる〉用法を挙げることができる。再掲するが、A1〈積もる〉用法は「露や霜が生じて、ある場所を占める。また、雪などが降って地にたまる」という実質的な変化、出来事を表す。この場合、V2「おく」は本動詞「置く」の原義そのものを表している。以下の用例を見られたい。

A1〈積もる〉

(7)富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり

〔不盡嶺尔 零置雪者…〕

〈03/0320〉

(8)さを鹿の萩に貫き置ける露の白玉あふさわに誰れの人かも手に巻かむちふ

〔棹四香能 芽二貫置有…〕

〈08/1547〉

(9)真木の上に降り置ける雪のしくしくも思ほゆるかもさ夜間へ我が背

〔真木乃於尔 零置有…〕

〈08/1659〉

(10)埼玉の小埼の沼に鴨ぞ羽霧るおのが尾に降り置ける霜を掃ふとにあらし

〔…己尾尔 零置流霜乎…〕

〈09/1744〉

(11)峰の上に降り置ける雪し風の共ここに散るらし春にはあれども

〔峯上尔 零置雪師…〕

〈10/1838〉

(12)立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし

〔多知夜麻尔 布里於家流由伎乎…〕

〈17/4001〉

(13)…高き立山 冬夏と 別くこともなく 白栲に 雪は降り置きて 古ゆ あり来にければ こそ
しかも…

〔…之路多倍尔 遊吉波布里於吉弓…〕

〈17/4003〉

(14)立山に降り置ける雪の常夏に消ずてわたるは神ながらとぞ

〔多知夜麻尔 布理於家流由伎能…〕

〈17/4004〉

(15)高山の巖に生ふる菅の根のねもころごろに降り置く白雪

〔…祢母許呂其呂尔 布里於久白雪〕

〈20/4454〉

次に、A 本動詞的用法における A2〈置く〉用法を挙げる。再掲するが、A2〈置く〉用法は「事物に、ある位置を占めさせる」という実質的な動作を表すものである。これは、本動詞「置く」の持つ原義そのものである。以下の用例を見られたい。

A2〈置く〉

(16)海神は くすしきものか 淡路島 中に立て置きて 白波を 伊予に廻らし 居待月…

〔…淡路嶋 中尔立置而…〕

〈03/0388〉

(17)天雲の…たらちねの 母の命は 斎瓮を 前に据ゑ置きて 片手には 木綿取り持ち 片手には 和栲奉り…

〔…齋忌戸乎 前坐置而…〕

〈03/0443〉

(18)やすみしし 我ご大君は み吉野の 秋津の小野の 野の上には 跡見据ゑ置きて み山には
射目立て渡し 朝狩に 獣踏み起し 夕狩に

〔…野上者 跡見居置而…〕

〈06/0926〉

(19)あしひきの荒山中に送り置きて帰らふ見れば心苦しも

〔…荒山中尔 送置而…〕

〈09/1806〉

(20)…親族どち い行き集ひ 長き代に 標にせむと 遠き代に 語り継がむと 娘子墓 中に造り置き…

〔…處女墓 中尔造置…〕

〈09/1809〉

(21)…壮士墓 このもかのもとに 造り置ける 故縁聞きて 知らねども 新喪のごとも 哭泣きつる
かも

〔…此方彼方二 造置有…〕

〈09/1809〉

(22)海神の 神の命の み櫛笥に 貯ひ置きて 斎くとふ 玉にまさりて 思へりし 我が子にはあ
れど うつせみの…

〔…美久之宜尔 多久波比於伎氏…〕

〈19/4220〉

(23)秋されば霧立ちわたる天の川石並置かば継ぎて見むかも

〔…安麻能河波 伊之奈弥於可婆…〕

〈20/4310〉

(24)胸を割き心を採り、易へて置き、投るるに神薬を以てすれば、即ち寤めて平なるがごとし。

〔割胸採心、易而置之、投以神薬、…〕

〈沈痾自哀文〉

(25)ひさかたの 天つしるしと 水無し川 隔てて置きし 神代し恨めし

〔久方 天印等 水無川 隔而置之 神世之恨〕

〈10/2007〉

(26)秋さらば 我が船泊てむ 忘れ貝 寄せ来て置けれ 沖つ白波

〔安伎左良婆 和我布祢波弓牟 和須礼我比 与世伎弓於家礼 於伎都之良奈美〕

〈15/3629〉

次に、C 補助動詞的用法における C2〈結果維持〉用法を挙げる。再掲するが、C2〈結果維持〉用法は「当該の動作の結果生じた直接的な結果状態を維持する」ことを表す。

C2〈結果維持〉用法の「-おく」は、V1 の表す〈動作の完成性〉と同時に、その結果生じる〈結果の継続性〉をも表すため、V2「おく」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「置く」が表すような実質的動作等を表していないという点を特徴とする。したがって、V2「おく」の機能は文法的であり、C2〈結果維持〉用法の V2「おく」を補助動詞として認定することができる。以下、用例を挙げる。

C2〈結果維持〉

(27)高麗錦紐の片方ぞ床に落ちにける明日の夜し来なむと言はば取り置きて待たむ

〔狛錦 紐片叙 床落邇祁留 明夜志 将来得云者 取置待〕

〈11/2356〉

(28)あしひきの山桜戸を開け置きて我が待つ君を誰れか留むる

〔足日本能 山櫻戸乎 開置而 吾待君乎 誰留流〕

〈11/2617〉

(29)あをによし 奈良山過ぎて もののふの 宇治川渡り 娘子らに 逢坂山に 手向け草 幣取り置きて 我妹子

〔…手向草 絲取置而 我妹子尔…〕

〈13/3237〉

(30)陸奥の安達太良真弓はじき置きて反らしめきなば弦はかめかも

〔美知乃久能 安太多良末由美 波自伎於伎弓 西良思馬伎那婆 都良波可馬可毛〕

〈14/3437〉

(31)松陰の 浅茅が上の 白雪を 消たずて置かむ ことはかもなき

〔松影乃 浅茅之上乃 白雪乎 不令消将置 言者可聞奈吉〕

〈08/1654〉

4.1.2. 中古日本語の「-おく」

次に、中古日本語資料において観察される「-おく」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-おく」における V2 「おく」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

4.1.2.1. V1 の特性

以下の表 5 は、中古日本語資料において観察される「-おく」の V1 を用例数とともに提示するものである。中古日本語資料全体における「-おく」の異なり語数は 158、延べ語数は 695 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 6 で提示する通りである。以下の表 5 及び表 6 を見られたい。

表 5 中古日本語資料における「-おく」の V1

V1	伊勢	枕草子	源氏	寝覚め	狭衣	とりかへ	今昔	合計
預け-			1				2	3
諫め-			1					1
射立て-							1	1
営み-				1				1
祈り-			1					1
祝ひ-					1			1
言(云、宣)ひ-		1	16	6	8	10	28	69
いまし(警)め-		1						1
入れて-							1	1
浮かべ-			1					1
承り-			4					4
う(打)ち-		11	30	5	12		7	65
う(打)ち懸け-							1	1
う(打)ち懸けて-							1	1
う(打)ち棄て-							1	1
う(打)ち付けて-							1	1
埋み-							1	1
埋めて-							1	1

植ゑ-			1					1
恨み-			1	2				3
撰びて-							1	1
選り-			1					1
掟て-					1			1
送り-					1			1
行ひ-			1					1
納め-							4	4
納めて-							1	1
教へ-						1	3	4
落とし-			3				2	5
怯え-				1				1
思し-		1	20					21
仰せ-			2					2
思うたまへ-			1					1
思ひ-			21	1	2	4	1	29
思ひたまへ-			1					1
下ろし-							3	3
書き-	1		5		2	1		9
書きつけて-			1				1	2
書いて-		1						1
隠し-		2	3				5	10
懸(掛)け-							1	1
重ね-		1						1
固めて-							1	1
語らひ-			3		1			4
語らひつけて-		1						1
語り-			1					1
飼ひ-							2	2
構へ-							1	1
搦め-							1	1

刈(蒧)り-							1	1
聞き-		4	20	3		1	2	30
聞こえ-			21	2	2	1		26
聞こえさせ-			1					1
聞こしめし-		2	4	1				7
着せ-							1	1
切り殺して-							1	1
切りて-							1	1
加へて-							1	1
啓し-					1			1
気色ばみ-			1					1
心ざし-			2					2
こしらへ-			3			1		4
籠(込)め-			2	1			3	6
籠(込)めて-							1	1
御覧じ-			1					1
殺して-							2	2
搜り取り-							1	1
捧げて-							2	2
さし-		3	14	3	2	3	1	26
さ(指)し出して-							1	1
さ(指)し入れて-							1	1
定め-			4				1	5
し(仕)-			18	2	3			23
したため-			1				1	2
したためて-							1	1
縛り付けて-							1	1
占め-			2					2
締め結び-					1			1
知り-			1					1
記し-			1					1

濯ぎ浄め-							1	1
棄(捨)て-			4				10	14
すべし-			1					1
据ゑ(へ)-			1					1
奏し-			1					1
そそのかし-			1					1
膳へ-							1	1
染め-			1					1
貯(蓄)ひ(へ)-							2	2
たぐへ-			1					1
尋ね-			2					2
奉り-			4					4
頼め-			1	1				2
契り-			8			2	3	13
ついさして-		1						1
仕うまつり-			2					2
造(作)り-			1		1		4	6
付け-			1					1
付けて-							1	1
伝へ-							3	3
包み-			1					1
繋ぎ-							1	1
摘み-			1					1
積み-							7	7
積みて-							1	1
積り-							1	1
説き-			1				1	2
調へ-							1	1
とど(留)め-			5	2	1	1	3	12
と(取)り-			2		2		15	19
と(取)り集めて-							1	1

と(取)り隠して-			1					1
慰め-			1		1			2
投げ-							1	1
なり-			1	2				3
にほはし-			2					2
脱ぎ-			2				3	5
脱ぎて-							1	1
残し-			1					1
のたまはせ-			2					2
のたまひ-			20	1		1		22
のどめ-			2					2
登せ(し)-							1	1
履き-							1	1
運び-							1	1
始め-							4	4
放ち-			1		1		1	3
匆ね-							1	1
曳き-							3	3
引き(い)て-							1	1
引き結びて-					1			1
秘め-			1					1
弘(広)め-							5	5
降り-		1						1
褒め-			1					1
掘り-							1	1
巻き-							1	1
まどひ-		1						1
参らせ-			1					1
見-			15	4	17	1	12	49
見え-			2					2
見たてまつり-			4		1			5

見たまへ-			4					4
迎へ-							1	1
結び-			2	2				4
申し-				1	2	1	1	5
もてしづめ-			1					1
養ひ-							1	1
宿し-							1	1
遺言し-			1					1
譲り-			2	1	1			4
結び付けて-			1				2	3
許し-			1					1
怨じ-			1					1
寄せ(し)-							2	2
詠(読)み-	1		2					3
分け-					1			1
渡し-						1	1	2
合計	2	31	326	42	66	29	199	695

表 6 中古日本語資料における「-おく」の V1 の異なり語数および延べ語数

	伊勢	枕草子	源氏	寝覚め	狭衣	とりかへ	今昔	合計
異なり(延べ)	2(2)	14(31)	82(326)	20(42)	24(66)	14(29)	82(199)	158(695)

次に、「-おく」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 7 の通り示される。「-おく」の V1 の形態として、「動詞連用形+おく」のもの他「動詞連用形+テ+おく」のものが観察されるが、上代日本語と同様に、多くの用例が前者の「動詞連用形+おく」構造で現れていることがわかる。

ここで興味深いのは、中古日本語資料『今昔物語』において、以下の用例(39ab)から(41ab)のように、同一の V1 をもつ「-おく」が「動詞連用形+おく」の構造(a)や、「動詞連用形+テ+おく」の構造(b)で現れるといった、V1 の形態の混在が見られるという点である。表 7 と表 8 を見てもわかるように、『今昔物語』における「-おく」の V1 が「動詞連用形+テ」の形態で出現している用例が異なり語数 24(延べ語数 29)と多く観察され、また「-おく」全体における割合も 29.3%(14.6%)と、他の中古日本語資料よりも高い割合を占めている。

上代日本語資料『万葉集』においても「動詞連用形+テ+おく」構造をもつ「-おく」は観察されたが、それらのほとんどは「句的な動詞連続」であると分析される。しかし、以下のような中古日本語資料における「動詞連用形+テ+おく」構造をもつ「-おく」の用例は、C2〈結果維持〉用法といった、V2「おく」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それらを含む構文において V2 が対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「置く」が表すような実質的動作等を表していない補助動詞の用法と認めることのできる用例が多く含まれており、上代日本語の場合とは様相が異なっている。以下、表 7 と表 8 にてその割合を提示した後、中古日本語資料で観察される「-おく」における「動詞連用形+テ+おく」構造の用例を挙げる。

表 7 中古日本語資料における「-おく」の V1 の形態

	伊勢	枕草子	源氏	寝覚め	狭衣	とりかへ	今昔	合計
動詞連用形	2(2)	11(28)	79(323)	20(42)	23(65)	14(29)	58(170)	129(623)
動詞連用形+テ	0(0)	3(3)	3(3)	0(0)	1(1)	0(0)	24(29)	29(36)

表 8 中古日本語資料における「-おく」の V1 の形態の割合

	伊勢	枕草子	源氏	寝覚め	狭衣	とりかへ	今昔	合計
動詞連用形	100%	78.6%	96.3%	100%	95.8%	100%	70.7%	81.6%
	(100%)	(90.3%)	(99.1%)	(100%)	(98.5%)	(100%)	(85.4%)	(94.5%)
動詞連用形+テ	0%	21.4%	3.7%	0%	4.2%	0%	29.3%	18.4%
	(0%)	(9.7%)	(0.9%)	(0%)	(1.5%)	(0%)	(14.6%)	(5.5%)

(32)「かかる者をなむ、語らひつけて置きためる。すかして、常に来る事」とて、ありしやうなど、小兵衛といふ人にまねばせて聞かせさせたまへば、…

〈枕草子〉

(33)「物忌なれば見ず」とて、上についさして置きたるを、つとめて手洗ひて、…

〈枕草子〉

(34)をかしと思ふ歌を草子などに書きておきたるに、言ふかひなき下衆のうちうたひたるこそ、いと心憂けれ。

〈枕草子〉

(35)姫君も、おぼろけならでし出でたまへるわざなれば、物に書きつけておきたまへりけり。

〈源氏物語〉

(36)「思ふさまにかなひはてさせたまふまではとり隠しておきてはべるべけれど、世の中定めがたければ、うしろめたさになむ。…」

〈源氏物語〉

(37)持て来たるに書きつけて、「今宵はえ帰るまじ」と言へば、ものの枝に結ひつけておきつ。

〈源氏物語〉

(38)思しわびて、ただ引き結びて置かせたまひたるを、包みて出ださせたまひつ。

〈狭衣物語〉

(39)a.夏比吉キ瓜ヲ得タリケレバ、「此レハ難有キ物ナレバ、タサリ方返来テ、人ノ許ヘ遣ラム」と云テ、十果許ヲ厨子ニ入レテ納メ置テ云ク、「出ヅ」トテ云ク、…

〈今昔物語〉

b. 其ノ後、僧涙ヲ流シテ、夢ノ告ヲ知ヌ。弟子等師ノ泣ヲ見テ、其ノ心ヲ問ト云ヘドモ、師答フル事無クシテ、只一紙ニ此ノ夢ノ告ヲ注シテ、蜜ニ経箱ノ中ニ納メテ置ツ。

〈今昔物語〉

(40)a. 事シモ寺ヨリ運バム様ニ東ノ大門ニ積置テ後、国の司死ヌレバ、故ニ運タルガ如シ。

〈今昔物語〉

b. …此ノ材木、其ノ河ヨリ曳上テ、此ノ寺ノ東ノ大門ノ前ニ三百余物乍ラ積テ置ケリ。

〈今昔物語〉

(41)a. 平中、「現ニ」ト思テ、「然ハ疾ク御マセ」ト云ヘバ、女起テ上ニ着タル衣ヲバ脱置テ、単衣袴許ヲ着テ行ヌ。

〈今昔物語〉

b. 「此レハ、人ノ物ヘ行ケルガ、雨モ降ル、日暮、我ガ入ツル様ニ、此ノ墓穴ニ入テ、前ニ置ツルハ、持タリケル物ヲハクト置ツル音ナメリ。次ニハ蓑ヲ脱テ置ク音ノ、サラサラトハ聞ヘツルナメリ」

〈今昔物語〉

次に、「-おく」における V1 の自他に注目してみると、表 9 の通り示される。上代日本語資料『万葉集』の「-おく」で多く観察された A1 〈積もる〉用法としての「降りおく」のような例は、『枕草子』において一例観察されるものの、他の中古日本語資料においては観察されなかった。また、同じく『枕草子』において(43)「まどひ置く」のような例が観察されるが、この V1 「まどふ」は非対格自動詞であり、V2 「おく」が非対格自動詞と結合していることになる。しかし、この場合は、V2 「おく」が A2 〈置く〉用法の他動詞として用いられていても、V1 「まどふ」と V2 「おく」は「句的な動詞連続」として捉えられるため、他動性調和の原則による制

限は受けないと考えられる。

ただ、非常に興味深いのは、(44)と(47)、(48)のように、中古日本語資料において V2「おく」が非対格自動詞「なる」と結合する用例が数例観察されるということである。しかし、これらの場合、V2「おく」の意味用法に注目してみると、本稿における C 補助動詞的用法として用いられているものと考えられ、V2「おく」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それらを含む構文において V2 が対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「置く」が表すような実質的動作等を表す他動詞ではない。つまり、V2「おく」の補助動詞的用法として認めることができるということである。したがって、現代日本語の複合動詞のような他動性調和の原則による制約を受けないといえる。

しかし、(42)で示す通り現代日本語の補助動詞「-おく」が非対格自動詞を V1 として取りづらい点を考慮すると、(44)と(47)、(48)の「なりおく」のような「非対格自動詞+おく」の用例は、中古日本語における特異な用例であるといえる。以下、表 9 とその割合を示す表 10、そして V1 として自動詞をとる中古日本語の「-おく」の用例を挙げる。

(42)??心が弱くなっておく。

表 9 中古日本語資料における「-おく」の V1 の自他

	伊勢	枕草子	源氏	寝覚め	狭衣	とりかへ	今昔	合計
自動詞	0(0)	2(2)	3(3)	2(3)	0(0)	0(0)	1(1)	7(9)
他動詞	2(2)	12(29)	79(323)	18(39)	24(66)	14(29)	81(198)	151(686)

表 10 中古日本語資料における「-おく」の V1 の自他の割合

	伊勢	枕草子	源氏	寝覚め	狭衣	とりかへ	今昔	合計
自動詞	0% (0%)	14.3% (6.5%)	3.7% (0.9%)	10.0% (7.1%)	0% (0%)	0% (0%)	1.2% (0.5%)	4.4% (1.3%)
他動詞	100% (100%)	85.7% (93.5%)	96.3% (99.1%)	90.0% (92.9%)	100% (100%)	100% (100%)	98.8% (99.5%)	95.6% (98.7%)

(43)ゆだけのかたの身を縫ひつるがそむきざまなるを見ついで、とち目もしあへず、まどひ置きて立ちぬるが、…

〈枕草子〉

(44)などで、よろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし、…

〈源氏物語 若菜上〉

(45)「…内外などのゆるされぬべき。年ごろのしるしあらはれはべる心地なむしはべる」など、気色ばみおきて出でたまひぬ。

〈源氏物語 夕霧〉

(46)「…かく思ひかけはべらぬ世の末に、かくて見たてまつりはべるなん、かの御世に睦ましく仕うまつりおきししるしのおのづからはべりけると、うれしくも悲しくも思ひたまへられはべる。…」

〈源氏物語 宿木〉

(47)人がらの、限りなくのみなりおきにければ、何の情もなく、ひたぶるに思ひわびたるしも、たとへむものなきままに、…

〈夜の寝覚め〉

(48)ことと慰むこともやと、あやしきまでまめになりおきはべりにし心を改めて、朱雀院の宮の御事も思ひ寄りにしを、…

〈夜の寝覚め〉

4.1.2.2. 意味用法

次に、中古日本語資料において観察される「-おく」の V2「おく」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、中古日本語において「-おく」の V2「おく」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、一例のみではあるが、上代日本語と同様に A 本動詞的用法における A1〈積もる〉用法の用例が観察される。以下の用例を見られたい。

A1〈積もる〉

(49)いづくともなく雪の降りおきたるに見まがへられ、…

〈枕草子〉

次に、A 本動詞的用法における A2〈置く〉用法を挙げる。前述の通り、中古日本語資料『今昔物語』において、以下の用例(55ab)と(56ab)のように、同一の V1 をもつ「-おく」が「動詞連用形+おく」の構造(a)や、「動詞連用形+テ+おく」の構造(b)で現れるといった V1 の形態の混在が見られる。しかし、これらの場合、「動詞連用形+おく」(a)と「動詞連用形+テ+おく」(b)

の間で V2「おく」における意味用法の相違はなく、双方ともに A2〈置く〉用法として用いられているといえる。以下の用例を見られたい。

A2〈置く〉

(50)ゆだけのかたの身を縫ひつるがそむきざまなるを見ついで、とち目もしあへず、まどひ置きて立ちぬるが、…

〈枕草子〉

(51)みなほかさまに火をかきやりて、炭を重ね置きたるいただきに、火を置きたる、いとむつかし。

〈枕草子〉

(52)「見だに向きたまへかし」と心やましようつらうて、ひき寄せたまへるに、御衣をすべしおきてゐざり退きたまふに、…

〈源氏物語 賢木〉

(53)山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべし。

〈源氏物語 若菜上〉

(54)御衣の鳴れば、脱ぎおきて、直衣、指貫のかぎりを着てぞおはする。

〈源氏物語 宿木〉

(55)a.事シモ寺ヨリ運バム様ニ東ノ大門ニ積置テ後、国の司死ヌレバ、故ニ運タルガ如シ。

〈今昔物語〉

b.…此ノ材木、其ノ河ヨリ曳上テ、此ノ寺ノ東ノ大門ノ前ニ三百余物乍ラ積テ置ケリ。

〈今昔物語〉

(56)a.「疾登リ給へ」ト云テ、共ニ板敷ニ登テ、長増笠延ニ脱ぎ置テ、障帟ノ内ニ這ヒ入ヌ。

〈今昔物語〉

b.「此レハ、人ノ物へ行ケルガ、雨モ降ル、日暮、我ガ入ツル様ニ、此ノ墓穴ニ入テ、前ニ置ツルハ、持タリケル物ヲハクト置ツル音ナメリ。次ニハ蓑ヲ脱テ置ク音ノ、サラサラトハ聞ヘツルナメリ」

〈今昔物語〉

(57)此ク三切レニ咋切テ觜ヲ以テ咋ツ、前ニ投置テ、身篩打シテ翼蹴シ、尾ナド打振テ、露事シタリトモ不思タラデ有ケレバ

〈今昔物語〉

(58)一人ノ女、二歳許ノ子ヲ背ニ負タリケルヲ、平也ケル石ノ上ニ下シ置テ、亦幼キ童ノ有ケルヲ付テ遊バセテ、女ハ貝拾ヒ行ク程ニ、…

〈今昔物語〉

次に、B1〈結果物残存〉の用法を挙げる。再掲するが、これは「当該の動作の結果生じた結果物を残存させる」ことを表し、以上のような A 本動詞的用法とは異なり、前接する V1 の表す生産的な動作の結果生じる結果物を(残存させる)対象物とするため、その意味の成立において V1 に対し依存的である。本動詞「置く」にも以上のような意味用法は存在しないため、「-おく」において独自に出現した意味用法であるといえる。

また、この B1〈結果物残存〉用法は、V1 として「書く、詠む、言ふ、思ふ」等ある程度限られた動詞を取るという制約は見られるものの、中古日本語資料の「-おく」において非常に多く観察される使用頻度の高い用例である。

以下、中古日本語資料で観察される「-おく」における B1〈結果物残存〉の用例であるが、その残存させる結果物は以下の(59)から(62)のように具体物(「書、歌」)である場合もあれば、(63)から(71)のように抽象物(「感情、言葉」等)である場合もある。また、文脈上の特徴として、「当該の動作を行い、その結果生じた結果物を残存させ、その後その場から離れる、あるいは亡くなる」といった文脈で用いられている場合が多い。以下、用例を挙げる。

B1〈結果物残存〉

(59)秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにそありけれと書きおきて、「かしこよりひとおこせば、これをやれ」とていぬ。

〈伊勢物語〉

(60)かの殿にも、今はの気色見せたてまつらまほしけれど、所どころに書きおきて、離れぬ御仲なれば、つひに聞きあはせたまはんこといとうかるべし、…

〈源氏物語 浮舟〉

(61)いでていなば心かるしといひやせむ世のありさまを人はしらねばとよみ置きて、いでていにけり。

〈伊勢物語〉

(62)艶にもの恥じして、恨み言ふべきことをも見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをつくり、心ひとつに思ひあまる時は、言はむ方なくすごき言の葉、あはれなる歌を詠みおき、しのばるべき形見をとどめて、深き山里、世離れたる海づらなどに這ひ隠れぬるをり。

〈源氏物語 帚木〉

(63)「…よし、かくをこがましき身の上、また、人にだに漏らしたまふな」と怨じおきて、例よりも急ぎ出でたまひぬ。

〈源氏物語 総角〉

(64)仏あらはしたてまつりて御祈りすべきよし、頼もしげに言ひおきて帰りたまひぬるに、胸の隙をあけて、さりともと頼み思ふ。

〈夜の寝覚め〉

(65)「今よりは、たどたどしからぬ心地しはべりぬべかめれば、常にも」など聞こえ置きたまひて、出でたまふに、…

〈狭衣物語〉

(66)「いと疾うまかではべりなん。御前に人多くさぶらひたまへ。物の気などのするわざなめり、心得ぬ御気色の交じるは」と言ひおきて、出でたまひぬ。

〈とりかへばや物語〉

(67)世を憚るやうにて歩きもせず、さまざまの祈りをせさせ、よろづに扱ひ、泣く泣く言ひおきて、また宇治にたち帰りたまへれば、…

〈とりかへばや物語〉

(68)大方の世を心細げにのたまひて、いつばかりその折などはのたまひおかずはべりし。

〈とりかへばや物語〉

(69)「…此ノ講、吉ク御心ニ入レテ勤メ可給シ。我レハ、講ノ畢ラム時ニゾ命可終キ」ト云ヒ置キ、去ヌ。

〈今昔物語〉

(70)今は、心やすく思ひおくことなくて、鳥の音聞こえぬ山に跡絶えはべりなんことをこそ限りなく思ひたまへるに、…

〈とりかへばや物語〉

(71)官も、やがてついでに渡したてまつりて、我は一筋に思ひおくことなくてと思して、さるべき老いしらへる女房などをだにとどめたまはず、…

〈とりかへばや物語〉

以下からは、「-おく」における V2「おく」の補助動詞的用法となる。

まずは、「当該の動作が設定時以前に達成され、その結果生じた結果(状態)が、設定時においても継続し、場合によってはそれが設定時において何らかの影響を与えている」ことを表す C1〈パーフェクト性〉の用法を挙げる。前述の通り、本稿では、この C1〈パーフェクト性〉用法が示すような「設定時に先行する〈動作の完成性〉と、その設定時における〈結果の継続性〉

を複合的に捉える」という特徴が補助動詞構造としての「-おく」の基本的特徴であるとする。

この C1 〈パーフェクト性〉の場合、V2「おく」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それを含む構文において V2「おく」は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「置く」が表すような実質的動作等を表しているともいえない。したがって、V2「おく」の補助動詞的用法であると認めることができる。またこの場合、動作主体の動作における〈意図性〉が無いから希薄であるため、「後続く事態を見越す」といった〈準備性〉が表出しない。

尚、この C1 〈パーフェクト性〉用法は、V1 として「聞く、思ふ」を取る場合が多く、それらの他「なる、仕うまつる」等の自動詞を取る場合もある。V1 が「聞く、仕うまつる」のような他動詞あるいは非能格自動詞の場合、動作パーフェクト相当の意味を表し、「なる」のような非対格自動詞の場合は結果継続のような状態パーフェクト相当の意味を表す傾向がある。

以下、中古日本語資料で観察される「-おく」の V2「おく」における C1 〈パーフェクト性〉の用例である。

C1 〈パーフェクト性〉

(72)…となむ聞えたまひけると、聞きめしおきて、御物忌なりける日、古今を持てわたらせたまひて、御几帳を引きへだてさせたまひければ、…

〈枕草子〉

(73)をりにつけても、一ふしあはれともをかしとも聞きおきつるものは、草、木、鳥、虫も、おろかにこそおぼえね。

〈枕草子〉

(74)山の駅は、あはれなりし事を聞きおきたりしに、またもあはれなる事のありしかば、なほとりあつめてあはれなり。

〈枕草子〉

(75)思ひあがれる気色に聞きおきたまへるむすめなれば、ゆかしくて、耳とどめたまへるに、この西面にぞ人のけはひする。

〈源氏物語 帚木〉

(76)御心地にもをかしと聞きおきたまひし人なれば、かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さるべき契りあるにやと思しながら、…

〈源氏物語 明石〉

(77)「さらばこの若君を。…対に聞きおきて常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、袴着のことなども人知れぬさまならずしなさんとなむ思ふ」と、まめやかに語らひたまふ。

〈源氏物語 薄雲〉

(78)殿はた、「疾くも出だいてばや」とおぼせど、昔より聞きおかせたまへることあるにより、
かたはらいたくて言交ぜたまひにくけれど、…

〈夜の寝覚め〉

(79)「…かつは心ゆきぬべき御住まひなる」と語り出でたるを、さる人ものしたまふとはみな聞きおきたまへれば、…

〈とりかへばや物語〉

(80)守ノ云ク、「頼信坂東ハ此度ナム始メテ見ル。然レバ道ノ案内可知キニ非ズ。然レドモ家ノ
伝ヘニテ聞き置ケル事有リ、…」

〈今昔物語〉

(81)「…胡桃ノ多ク被盛タルヲ見給テ、極ク難堪氣ニ思給ヒタリツル気色ヲ見給ヘテ、己ハ聞き置
タル事ノ侍レバ、試ムト思給ヘテ、此ク仕タリツルニ、否堪給ズシテ、解給ヒタル也」

〈今昔物語〉

(82)「…すさまじき例に言ひおきけむ人の心浅さよ」とて、御簾捲き上げさせたまふ。

〈源氏物語〉

(83)「経などを読みて、功德のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやむごとなきこと
に、仏のたまひおきけるもことわりなりや。…」

〈源氏物語〉

(84)「…『…掌ヲ合セテ一念ノ心ヲ発シテ礼ム人ハ、必ズ当来ノ弥勒ノ世ニ可生シ』ト釈迦仏説
き置き給ヘル事ナレバ、仏ノ御法ヲ信ゼム人、此レヲ可疑キニ非ズ。…」

〈今昔物語〉

(85)「などて、よろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなり
おきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし、若けれど中納言をばえ思しかけずなり
ぬめりしを、…」

〈源氏物語 若菜上〉

(86)「…かの御世に睦ましく仕うまつりおきししるしのおのづからはべりけると、うれしくも
悲しくも思ひたまへられはべる。」

〈源氏物語 宿木〉

(87)「…人は心づきなしと思ひおきたまふこともあらむに、我はいますこし思ひ乱るることの
まさるべきを、あいなしと心強く思すなるべし。」

〈源氏物語 賢木〉

(88)互若カリケル時ニ、守心ヨリ外ニ頗ル妬シト思ヒ置タル事ノ有ケルヲ、不知シテ、…

〈今昔物語〉

次に、C 補助動詞的用法における C2〈結果維持〉用法を挙げる。前述の通り、C2〈結果維持〉用法は「当該の動作の結果生じた直接的な結果状態を維持する」ことを表す。

C2〈結果維持〉用法の「-おく」は、V1 の表す〈動作の完成性〉と同時に、その結果生じる〈結果の継続性〉をも表すため、V2「おく」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「置く」が表すような実質的動作等を表していないという点を特徴とする。したがって、V2「おく」の機能は文法的であり、C2〈結果維持〉用法の V2「おく」を補助動詞として認定することができる。

この C2〈結果維持〉は、動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのが特徴であるが、その動作の結果生じる結果の維持に対する〈意図性〉の有無によって〈準備性〉が顕著な〈保持〉的な用法とそれが希薄な〈放置〉的な用法に分かれるのは前述の通りである。ただし、中間的な用法も存在する。

以下、中古日本語資料で観察される「-おく」の V2「おく」における C2〈結果維持〉の用例である。V1 としては「隠す、籠める、留める」といった動詞や、「棄てる、放つ」といった動詞をとる場合が多い。前者の場合は〈保持〉的な用法となり、後者の場合は〈放置〉的な用法となる傾向がある。

ただ、中古日本語資料『今昔物語』における「-おく」の V2「おく」の C2〈結果維持〉用法の用例においては、以下の(94ab)、(99ab)のように、同一の V1 をもつ「-おく」が「動詞連用形+おく」の構造(a)や「動詞連用形+テ+おく」の構造(b)で現れるといった V1 の形態的な混在が見られる。ただし、これらの用例における V2「おく」はすべて C2〈結果維持〉用法として用いられていると考えられるため、「動詞連用形+おく」(a)と「動詞連用形+テ+おく」(b)の間に V2「おく」の用法の相違といった顕著な機能分担の様相は見られず、資料内における表記上のゆれである可能性が高い。しかし、以下のような用例(b)をはじめとした中古日本語資料における「動詞連用形+テ+おく」全体を総合的に観察すると、V2「おく」が C2〈結果維持〉や C3〈事前処置〉といった補助動詞的用法として用いられているものが多数を占め、「-おく」の補助動詞構造専用の構造として「動詞連用形+テ+おく」が使用されてきている様相が窺える。以下の用例を見られたい。尚、波線部分はこれらの用例における V2「おく」が C2〈結果維持〉用法として用いられていることを裏付ける文言及び副詞等の表現である。

C2 〈結果維持〉

(89)長女が童の、鶏をとらへ持て来て、「あしたに里へ持て行かむ」と言ひて隠しおきたりける、いかがしけむ、犬見つけて追ひければ、廊の間木に逃げ入りて、おそろしう鳴きののしるに、…

〈枕草子〉

(90)「思ふさまにかなひはてさせたまふまではとり隠しておきてはべるべけれど、世の中定めがたければ、うしろめたさになむ。…」

〈源氏物語 若菜上〉

(91)「早ウ、長谷ノ観音ノ哀ビ給フ也ケリ」ト、悲ク貴クテ、其ノ死人ヲ深ク家ノ内隠シ置テ、明ル日ヨリ妻夫共ニ、此ノ金ノ死人ヲ打鉄ツ、売テ世ヲ過ケルニ、…

〈今昔物語〉

(92)姫君の御贈物に、いどもの深く籠めおきたまへりける唐の琴など、この折にぞ引き出でたまひける。

〈夜の寝覚め〉

(93)前ノ蛇ヨリモ大キニ増レル大蛇直ニ来テ、此ノ老僧ニ向テ申シテ云ク、「我ハ此レ、鍾ノ中ニ籠メ置シ僧也。悪女毒蛇ト成テ、遂ニ其ノ毒蛇ノ為ニ被領テ、我レ其ノ夫ト成レリ。…」

〈今昔物語〉

(94)a.此小瓶ヲバ皮子ノ底ニ深ク納置ツ。

〈今昔物語〉

b.其ノ後、僧涙ヲ流シテ、夢ノ告ヲ知ヌ。弟子等師ノ泣ヲ見テ、其ノ心ヲ問ト云ヘドモ、師答フル事無クシテ、只一紙ニ此ノ夢ノ告ヲ注シテ、蜜ニ經箱ノ中ニ納メテ置ツ。

〈今昔物語〉

(95)「契りあれや君を心にとどめおきてあはれと思ふうらめしと聞く なほえ思し放たじ」とある御文を、…

〈源氏物語 夕霧〉

(96)宰相の君は、「これに孝ずると思ひて、ここにさぶらひて、扱ひきこえよ」とて、とどめおきたまふ。

〈夜の寝覚め〉

(97)此ノ人々皆去ヌル後ニ、慶祐阿闍梨ト云フ人独リ許ヲ留メ置テ、蜜ニ語テ云ク。

〈今昔物語〉

(98)「此ニ宿タル人ノ若狭へ今朝行ヌルガ、明日此ニ返り来ラムトシテ、留メ置タル也。其等ニモ可食キ物ノ無ケレバ、日ハ高ク成ヌレドモ、可為キ様モ無クテ居タル也」

〈今昔物語〉

(99)a.滝口返テ、忠明ノ教ヘニ随テ、灰ヲ多ク集テ、其中ニ男ヲ埋ミ置テ、一二時計ヲ経テ見ルニ、灰動ケレバ、搔開テ見ルニ、…

〈今昔物語〉

b.「不知ヤ。其事難知シ。然ラバ□灰ヲ多ク取り集メテ、其男ヲ其灰ノ中ニ埋テ置テ暫ク見ヨ」ト教ヘケレバ、…

〈今昔物語〉

(100)美作ノ国ノ人、粮米ヲ牛ニ負テ、此ノ山ニ参テ、牛ヲ僧房ニ繋ギ置テ、主ハ神殿ニ参ル。

〈今昔物語〉

(101)…年老タル僧三人ガ夢ニ同時ニ見ル様、此ノ持經者ヲ縛リ付タル男ノ家ニ、普賢ヲ縛リ奉テ、打責メ奉テ、家ノ柱ニ結ヒ付テ置奉タリ、ト見ル。

〈今昔物語〉

(102)此ノ男預タル郎等来テ、正家ニ告テ云ク、「此ノ盗人男、日来吉ク拈メテ置タル、守ル者共モ寝入ル事モ無ク、亦人モ不寄ヌニ、械モ皆抜ケ縛緒モ解ケテ、毎夜ニ自然ラ被免ル事ナム有ル。

〈今昔物語〉

(103)暫ク思ヒ廻シテ、二人ノ妻ヲ捕ヘテ縛リ付テ置タラマシカバ、終ニハ頭レナマシ。糸口惜ク逃シタル也。

〈今昔物語〉

(104)「しのばれんわが身と思はばいかばかり君をあはれと思ひおかまし …」

〈とりかへばや物語〉

(105)「なめしともや思さんと、つつましながら、さすがに年経ぬる人のはべるを、あやしき所に棄ておきて、いみじくもの思ふなるが心苦しさに、近う呼び寄せてと思ひはべる。

〈源氏物語 浮舟〉

(106)病人ノ云ク、「日来世ノ中心地ヲ病ムヲ、カク出シテ棄置タル也」ト。

〈今昔物語〉

(107)汝ガ書奉タル様ニ、不浄懈怠ニシテ書タル経ハ、広キ野ニ棄置ツレバ其ノ墨ノ雨ニ洗レテ流ルハガ、此ク河ニ成テ流ルハ也」ト。

〈今昔物語〉

(108)思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、かく放ちおきたるに心やすくて、人も言ひ犯したまふなりけむかし、と思ふにも、

〈源氏物語 蜻蛉〉

(109)ここかしこ、紛れ歩きたまひて、心安き掛金にやありけん、放ちおきたまひけるを、知る人もなし。

〈狭衣物語〉

次に、C 補助動詞的用法における C3〈事前処置〉用法を挙げる。前述の通り、C3〈事前処置〉用法は「後続く事態を見越して、当該の動作を行う」ことを表す。

C3〈事前処置〉用法の「-おく」は、V1 の表す〈動作の完成性〉と同時に、その結果生じる〈結果の継続性〉をも表すため、V2「おく」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「置く」が表すような実質的動作等を表していないという点を特徴とする。したがって、V2「おく」の機能は文法的であり、C3〈事前処置〉用法の V2「おく」を補助動詞として認定することができる。

C3〈事前処置〉は、文脈に依存した間接的な結果が、後続く事態への〈効力〉として捉えられることになる。動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのは C2〈結果維持〉と同様であり、〈準備性〉が顕著に表出する用例が多く観察される。

以下、中古日本語資料で観察される「-おく」の V2「おく」における C3〈事前処置〉の用例である。V1 としては他の用法に比べ多様であるが、前述の通り、直接的な結果を語彙的に含む動詞よりは、そのような結果を含まない動詞を V1 として取ることが多いといえる。以下、用例を見られたい。尚、波線部分はこれらの用例における V2「おく」が C3〈事前処置〉用法として用いられていることを裏付ける文言及び副詞等の表現である。

C3〈事前処置〉

(110)「私の懸想もいとよくしおきて、案内も残る所なく見たまへおきながら、ただ我どちと知らせてものなど言ふ若きおもとのはべるを、そらおぼれしてなむ隠れまかり歩く。…」

〈源氏物語 夕顔〉

(111)心あるどちは念じ思ひて、夜夜中のことも、御堂にては恐ろしかるべければ、おはする顔にしおきて、さるべき女房、侍は、みなさぶらはせて、御方ばかり、やをら、かの尼君の家に率てたてまつりたまふ。

〈夜の寝覚め〉

(112)例の、御庄の預りどものまゐれる、破子や何やと、こなたにも入れたるを、東国人どもにも食はせなど、事ども行ひおきて、うち化粧じて、客人の方に来たり。

〈源氏物語 宿木〉

(113)暮れゆくも知られたまふべくもあらねば、大納言、中納言、夜さりの御渡りのこと営みおきて、上達部の親しくおはするは、みな、やがて今宵の御送りつかまつりたまふべければ、…

〈夜の寢覚め〉

(114)「暁、かしこにもものせむ。車の装束さながら、隨身一人二人仰せおきたれ」とのたまふ。

〈源氏物語 若紫〉

(115)「宮へ渡らせたまふべかなるを、その前に聞こえおかむとてなむ」とのたまへば、…

〈源氏物語 若紫〉

(116)さるべきついでにはべらむをりには、御用意加へたまへとて、聞こえおくになむ。

〈源氏物語 柏木〉

(117)「なほよきをりななるを」と例ならず強ひて、「明後日ばかり車奉らん。その旅の所尋ねおきたまへ。ゆめ、をこがましうひがわざすまじくを」と、ほほ笑みてのたまへば、…

〈源氏物語 東屋〉

(118)「…言葉の限りまばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることの中に、げにと見え聞こゆることなき、いと見劣りするわざなり。すべて、よからぬ人に、いかで人ほめさせじ」など、ただこの姫君の点つかれたまふまじくにとよろづに思しのたまふ。

〈源氏物語 蛭〉

(119)「…おはしたらんに、よくよく案内申せ、と言ひ置きはべりぬ」と言ふも、…

〈狭衣物語〉

(120)「残りの音は、聞こえさせつるほだしども、このはかなき人に教へおきはべりしに、違はず弾き取りたるとおぼえはべるは、山伏の、吉野の峰の山おろしに耳慣らしてはべる僻耳にや…」

〈とりかへばや物語〉

(121)「…吉ク々物ナド食テ、此巖ノ上ニ立ン。此ヨリゾ上ラン為ル」ト、吉々教へ置テ、奥様ニ入ヌ。

〈今昔物語〉

(122)普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧をばさるものにて、またまた加へ行はせたまふべきことなど定めおかせたまふ。

〈源氏物語 松風〉

(123)阿闍梨、年ごろ契りおきたまひけるままに、後の御事もよろづに仕うまつる。

〈源氏物語 椎本〉

(124)衛門督は、尋ねんと思したりきと御気色を見おきて、日ごろ経て参りたまへり。

〈源氏物語 若菜下〉

(125)御山籠りはてはべらん日数も承りおきて、いぶせかりし霧のまよひもはるけはべらん。

〈源氏物語 橋姫〉

(126)暮れぬれば、内裏へ参りたまふついでに、かの蓬の門を尋ねさせたまへば、見おきし隨身、
「そこそこ」と申す。

〈狭衣物語〉

(127)鷹ノ櫟ヲ食タル所ヲ見置テ、年来下ケルニ、母鷹此ノ事ヲ思ヒ侘ビケルニヤ有ケム、本ノ
所ニ櫟ヲ不食ズシテ、…

〈今昔物語〉

(128)「それなん、また、え生くまじくはべるめる。我も後れじとまどひはべりて、今朝は谷に
落ち入りぬとなん見たまへつる。『かの古里人に告げやらん』と申せど、『しばし思ひしづめ
よ、事のさま思ひめぐらして』となん、こしらへおきはべりつる」と語りきこゆるままに、…

〈源氏物語 夕顔〉

(129)「…うしろめたくはあるまじきを」とこしらへおきて、わが御身はあなたにおはしぬ。

〈とりかへばや物語〉

(130)…例にも引き出でつべき根に結びつけたまへれば、「今日の御返り」などそそのかしおき
て出でたまひぬ。これかれも、「なほ」と聞こゆれば、御心にもいかが思しけむ、…

〈源氏物語 蛸〉

(131)大白牛車を、え思し返すまじう、思ひ取りたまひてしかば、よろづに慰めおきたてまつり
たまひて、立ち出でたまふ心地、疎かならず、…

〈狭衣物語〉

次に、C 補助動詞的用法における C4〈非難・自虐〉用法を挙げる。前述の通り、C4〈非難・自虐〉用法は「-おいて」の形で複文の従属節の内部に現れる場合、「当該の動作を行ったことに対する動作主体への非難」を表す。動作主体が第三者であれば、その人物の行った動作に対する〈非難〉となり、話し手自身であれば〈自虐〉となる。C4〈非難・自虐〉用法の場合も、その他の C 補助動詞的用法と同様に、V2「おく」の機能は文法的であり、C4〈非難・自虐〉用法の V2「おく」を補助動詞として認定することができる。

この C4〈非難・自虐〉の用法は、中古日本語から徐々に観察されはじめる。しかし、中世日

本語から近世日本語にかけて出現してくる典型的な C4〈非難・自虐〉の用例よりもその他の用法と中間的であると言え、拡大解釈の可能性も否定できない。例えば、(132)の場合は C2〈結果維持〉用法と中間的であり、(133)の場合は C3〈事前処置〉用法と中間的である。以下、用例を挙げる。

C4〈非難・自虐〉

(132)「頼もしき御蔭に、幼き者を奉りおきて、みづからをばなかなか幼くより見たまへもつかず、…」

〈源氏物語 少女〉

(133)千代の春見るべき花といのりおきてわが身ぞ雪とともにふりぬる

〈源氏物語 幻〉

最後に、D〈完遂〉用法を挙げる。前述の通り、D〈完遂〉用法は「当該の動作を最後まで行う、当該の動作を完全に行う」ことを表す。この場合、「後続く事態を見越す」といった〈準備性〉は表出しない。以下の用例を見られたい。

D〈完遂〉

(134)上帰らせたまふ御送りしおかせたまひて、中宮に、「ある山里に、ほのかなるものをこそ見たまへりしか」と申したまへば、…

〈夜の寝覚め〉

(135)若狭へ行クトテ、女ノ着物ノ無キヲ見テ、衣共着セ置テ、超ニケリ。

〈今昔物語〉

4.1.3. 中世日本語の「-おく」

次に、中世日本語資料において観察される「-おく」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-おく」における V2「おく」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

4.1.3.1. V1 の特性

以下の表 11 は、中世日本語資料において観察される「-おく」の V1 を用例数とともに提示するものである。中世日本語資料全体における「-おく」の異なり語数は 186、延べ語数は 444 であり、中古日本語資料全体における「-おく」の異なり語数 158、延べ語数 695 という分布の様

相と比較してみると、中世日本語資料で観察される「-おく」における V1 のヴァリエーションが中古日本語資料の場合よりも多様になっていることがわかる。尚、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 12 で提示する通りである。以下、表 11 と表 12 を見られたい。

表 11 中世日本語資料における「-おく」の V1

V1	宇治拾遺	平家	徒然草	天草平家	伊曾保	中華若木	虎明	合計
愛して-				1				1
あがめ-		1						1
上げ-				1			1	2
上げて-							4	4
預け-		1	1	4	1		1	8
預けて-				1			1	2
あつらへて-							1	1
当てて-				1				1
あまやかひて-							1	1
生かいて-							1	1
生けて-					1		3	4
出ひて-							1	1
射残いて-				1				1
言はせて-							1	1
言(云、宣)ひ-	6	3	1	3	1		3	17
言(云)いかけて-						1		1
言(云)ひ付けて-							1	1
言(云)(う、ふ)て(は)-						1	2	3
いまし(警)め-				1				1
いまし(警)めて-	1							1
入れ-					2		2	4
入れて-	1				3	1		5
承り-			1					1
うち-	4	1	2			1		8
う(打)ちくづひて-							1	1

う(打)ちや(遣)りて-						1		1
写(寫)し-		1						1
写(寫)して-						2		2
埋み-			1					1
植ゑ(へ)-			1					1
植へて-						2	1	3
得させ-	1							1
納め-	1						2	3
納めて-	1	3		1				5
押し籠うで-				1				1
教へ-							1	1
落とし-	1							1
落として-	1							1
逐(おひ)入て-						1		1
思し-			1					1
思し召し-		1						1
仰せ-		1						1
思ひ-		8	1	2				11
思ひ知らせ奉らひで-				1				1
下ろし-		2		1	1			4
飼うて-					1			1
書き-		6		6			1	13
書き記ひて-							1	1
書き据へて-						1		1
隠し-	2							2
隠し(い)て-						2		2
懸(掛)けて-						1	2	3
飾り-					1			1
かしづいて-						1		1
語らひ-		1		1				2
買て-						1		1

借らひで-							2	2
刈(蒱)り-	2							2
聞き-	1							1
着せ-	1							1
着せて-							4	4
聞ひで-							2	2
切らいで-				1				1
腰かけさせて-							1	1
こしらへ-		3						3
こしらへて-					1		6	7
籠(込)め-	1							1
籠(込)めて-	1							1
こらへて-						1		1
御覧じ-		1						1
さし-	1	11	1	4	1	1	9	28
さ(指)し入れて-	1							1
さして-							1	1
さしはさみて-						1		1
させて-							1	1
沙汰し-			1					1
定め-		1					1	2
曝いて-					1			1
し-	3	1						4
仕掛けて-							1	1
し済まひで-							1	1
しつらうで-		1		1				2
して-	1					5	12	18
しなさで-	1							1
縛り付けて-	1						1	2
締めて-				1				1
知らせ奉らで-	1							1

知らせひで-							1	1
記し-			1					1
記し付けて-						1		1
しゐて-							1	1
賺いて-				4				4
賺し-	1							1
掬ふて-							1	1
棄(捨)て-	2	5		5			1	13
捨てずして-	1							1
捨てて-							2	2
据ゑ(へ)-							1	1
せいで-					1			1
對して-						1		1
貯(蓄)ひ(へ)-			1		1			2
巧み-					1			1
助けて-				1				1
尋ねて-							1	1
たたみ入れて-						1		1
立てて-							1	1
頼ふ(う、ん)で-							1	1
立て-						1	1	2
出ひ(い、し)で-							2	2
給はり-		1		1				2
契り-	1							1
使ひ-		1						1
造(作)り-		2						2
作(造)つ(り)で-				1		1	4	6
付けて-						1		1
包みてぞ-		1						1
繋がずして-	1							1
繋ひで-							1	1

積み-				1				1
つりつけて-	2							2
出来ひて-							1	1
解き-		1						1
と(取)って-							3	3
とど(留)め-	1	9		7				17
灯し(ひ)て-						1	1	2
と(留)め-							1	1
と(泊、留)めて-							1	1
捕らへて-							1	1
と(取)り-	2					2	1	5
と(取)り囲みて-						1		1
と(取)り替へて-							1	1
と(取)り整へて-							1	1
と(取)りもせいで-							1	1
な(為)いて-							1	1
直させて-							1	1
慰め-		1		1				2
投げ-	2							2
なし-		2		1				3
習ふて-							1	1
並べ-			1					1
並べて-							1	1
似せ得て-						1		1
脱ぎ-	1	2		3			1	7
寝させて-							2	2
練り止めて-							1	1
残し-			1	1			3	5
残し(い)て-						2		2
乗せ-	1							1
飲ふで(飲みて)-							1	1

糊摺り-							1	1
始め-	1	3						4
はへ-							1	1
掃わずして-						1		1
張り済まひて-							1	1
引き(い)て-							3	3
引き上げて-	1							1
引き隠いて-				1				1
引き据ゑて-				1				1
引き歪めて-							1	1
引つ張つて-							1	1
拾いて-						2		2
封つきて-	1							1
吹残して-						2		2
扶持して-				1				1
振る舞ひ-		1						1
参りとして-							1	1
任せて-						1	3	4
巻あけて-						1		1
見-	4	2	1	2			1	10
見知りて-			1					1
見て-							2	2
見計らふて-							1	1
向はせて-	1							1
向けて-							1	1
召し-		5	1	5	3		1	15
申し-	1	3		2			1	7
持たして-							1	1
持って-							1	1
雇ふて-							1	1
用意して-				1				1

詠(読)み-		1						1
呼び込で-							1	1
寄せかけて-							2	2
領じて-							3	3
忘れ-							1	1
渡し-							1	1
合計	58	87	18	72	20	43	146	444

表 12 中世日本語資料における「-おく」の V1 の異なり語数および延べ語数

	宇治拾遺	平家	徒然草	天草平家	伊曾保	中華若木	虎明	合計
異なり(延べ)	39(58)	34(87)	17(18)	37(72)	15(20)	32(43)	88(146)	186(444)

次に、「-おく」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 13 の通り示される。中古日本語と同様に「-おく」の V1 の形態として、「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」のものが混在して観察される。ただし、中古日本語資料における「動詞連用形+テ+おく」が異なり語数 29、延べ語数 36 であり、「-おく」全体における割合が 18.4%(5.2%)を占めているのに対し、中世日本語資料においては、異なり語数 119、延べ語数 196 で、「-おく」全体に占める割合は 64.0%(44.1%)となっている。つまり、中古日本語資料の「-おく」よりも「動詞連用形+テ+おく」の使用頻度が高くなっているということである。

ただ、資料別の語数及びその割合に注目してみると、中世日本語資料における「-おく」の V1 の形態的特徴に関しては、資料によって差があることがわかる。例えば、『平家物語』と『徒然草』で観察される「-おく」のうち、「動詞連用形+テ+おく」構造のものの割合はそれぞれ 8.8%(5.7%)と 5.9%(5.6%)である。それに対し、『中華若木詩抄』と『虎明本狂言集』で観察される「-おく」のうち、「動詞連用形+テ+おく」構造のものの割合は 87.5%(86.0%)と 73.9%(75.3%)であり、その差が非常に大きいことがわかる。『中華若木詩抄』は講義の場を再現した口語体の注釈書で、主に漢籍や仏典などの幅広い書物が注釈の対象となっている抄物資料の一つであり、『虎明本狂言集』は室町期の言語を反映した舞台演劇の台本である狂言資料の一つである。これらは、本稿において使用した『天草版平家物語』や『伊曾保物語』といったキリシタン資料を含めて中世後期の三大口語資料と呼ばれ、当時の生き生きとした口語を知る上で欠かせない中世日本語資料として数えられる資料である。その他の中世前期の資料においても当時の口語が多く用いられているといわれているが、文体のほか成立年代の差といった要因が「-おく」における V1 の形態にも反映されている可能性が高いといえる。

また、中世日本語資料の「-おく」においても、(136ab)から(140ab)のように、中古日本語資料『今昔物語』で観察されたような同一資料内における同一 V1 の形態的な混在が見られる。以下の各用例の「動詞連用形+おく」(a)と「動詞連用形+テ+おく」(b)の間に、V2「おく」の用法の相違といった顕著な機能分担の様相は見られず、同一資料内における表記上のゆれが生じていた可能性が高い。

ただ、以下のような用例(b)をはじめとした中世日本語資料における「動詞連用形+テ+おく」全体を総合的に観察すると、V2「おく」が C2〈結果維持〉や C3〈事前処置〉といった補助動詞的用法として用いられているものが多数を占めている。つまり、中古日本語と同様に、中世日本語においても「-おく」の「動詞連用形+テ+おく」構造が「-おく」の補助動詞構造専用の構造として使用されている様相を窺うことができる。以下、表 13 とその割合を示す表 14、及び中世日本語資料の「-おく」における「動詞連用形+テ+おく」構造の用例を挙げる。

表 13 中世日本語資料における「-おく」の V1 の形態

	宇治拾遺	平家	徒然草	天草平家	伊曾保	中華若木	虎明	合計
動詞連用形	24(42)	31(82)	16(17)	21(53)	9(12)	4(6)	23(36)	67(248)
動詞連用形+テ	15(16)	3(5)	1(1)	16(19)	6(8)	28(37)	65(110)	119(196)

表 14 中世日本語資料における「-おく」の V1 の形態の割合

	宇治拾遺	平家	徒然草	天草平家	伊曾保	中華若木	虎明	合計
動詞連用形	61.5%	91.2%	94.1%	56.8%	60.0%	12.5%	26.1%	36.0%
	(72.4%)	(94.3%)	(94.4%)	(73.6%)	(60.0%)	(14.0%)	(24.7%)	(55.9%)
動詞連用形+テ	38.5%	8.8%	5.9%	43.2%	40.0%	87.5%	73.9%	64.0%
	(27.6%)	(5.7%)	(5.6%)	(26.4%)	(40.0%)	(86.0%)	(75.3%)	(44.1%)

(136)a. 雀は腰うち折られて、かく月比籠め置きたる、よに妬しと思ひけり。

〈宇治拾遺物語〉

b. 人屋の司の者、宣旨のままに、重く罪ある者置く所に籠めて置き、戸にあまた錠さしつ。

〈宇治拾遺物語〉

(137)a. 横たへて差されたかの刀を紫宸殿の後ろで皆人の見るに、ある人に預けおいて出られてござった。

〈天草版平家物語〉

b. 備中の国の兼康といふ者は北国の軍に倉光といふ者が手にかかって生け捕られたが、剛の者であったによって、木曾殿あたら者をまづ切るなど言うて、倉光が弟に預けておかれたが、…

〈天草版平家物語〉

(138)a. 「いかに君、かのイソボを成敗致せと宣旨を下された時、あまり本意無さに、或る棺に入れ置いてござれば、まだ存命仕ることも有らうずる」と奏すれば、…

〈伊曾保物語〉

b. 「さても世上に名を得たこの学者を段さうことは本意無い、所詮身に罪を被るといふとも、命を継がうずる」と思ひ定め、密かに或る片脇な棺に入れて置き、「既に誅罰つかまつた」奏聞せられてあつた。

〈伊曾保物語〉

(139)a. 常のことく都へ上りつき、先次第にみねんぐうを上る、たんぼの者は、ほでをぶちのさきに付、まん中に上げおく、そうしや出る事はつねのことく、うかゞひて…

〈虎明本狂言集 つくしのおく〉

b. …かりにおじやつたらは、笠は御ざつたれ共、一日坊主の余所へさひて参られたれは、辻風が吹てまいつて、ほねはほね、かはゝかはとなつたによつて、まん中をゆふて、てんじやうへあげておいたといはしめ…

〈虎明本狂言集 出家座頭類ほねかわ〉

(140)a. 是をそなたへやれはこなたのうらみ、こなたへやれはそなたのうらみ、昔より申ごとく、あんずる物は中からとれといひおいた事が有程に、それがしがとるぞ…

〈虎明本狂言集 集狂言之類やるこ〉

b. やれやれにくひ事をいふ、惣じて女の口のこはひは、りべつのもといと、むかしからいふておひた、まだおのれはくちがへらぬか…

〈虎明本狂言集 女狂言之類ひげやぐら〉

次に、「-おく」における V1 の自他に注目してみると、表 15 の通り示される。本稿において使用した中世日本語資料において、上代日本語資料『万葉集』や中古日本語資料の「-おく」において観察されたような「自動詞+おく」の用例は一例も見られなかった。

表 15 中世日本語における「-おく」の V1 の自他

	宇治拾遺	平家	徒然草	天草平家	伊曾保	中華若木	虎明	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	39(58)	34(87)	17(18)	37(72)	15(20)	33(43)	88(146)	186(444)

4.1.3.2. 意味用法

次に、中世日本語資料において観察される「-おく」の V2「おく」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、中世日本語において「-おく」の V2「おく」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、上代日本語や中古日本語と同様に A 本動詞的用法における A2〈置く〉用法の用例が観察される。この A2〈置く〉用法の「-おく」にも、以下の用例(141ab)のように、同一の V1「落とす」をもつ「-おく」が「動詞連用形+おく」の構造 (a)や「動詞連用形+テ+おく」の構造(b)で現れるといった V1 の形態の混在が見られる。しかし、これらの場合も「動詞連用形+おく」(a)と「動詞連用形+テ+おく」(b)の間で V2「おく」における用法上の相違はないと思われる。以下の用例を見られたい。

A 本動詞的用法

(141)a.女の顔をうち見て、口より露ばかりの物を落し置くやうにして飛びて往ぬ。

〈宇治拾遺物語〉

b. 瓢の種をただ一つ落として置きたり。

〈宇治拾遺物語〉

(142)太政入道、「丹波少将をば此内へは入れらるべからず」と宣ふ間、其辺ちかき侍の家におろしおきつつ、宰相ばかりぞ、門のうちへは入り給ふ。

〈平家物語〉

(143)十にならるる女子八歳の男子を車に取り乗せ、いづくを指すともなく遣り出だいて、漸うとして雲林院といふ所へ落ちて着いて、そのあたりの寺に下ろし置いて、送りの者どもも皆わが身の捨てがたさに暇を乞うて帰れば…

〈天草版平家物語〉

(144)或る年寄りの山賊薪を擔げて山より出たが、草臥れ果てて薪をば傍らに下し置いて、ひとと倒れ伏いて、吐息をついて言ふは、…

〈伊曾保物語〉

(145)多くの工の心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。

〈徒然草〉

(146)我がもとの薄綿はむつかしう、何のあるにか痒き所も出で来る衣なれば、脱ぎ置きて、練色の衣三つが上にこの宿衣引き着ては臥したる心、いまだ習はぬに気もあげつべし。

〈宇治拾遺物語〉

(147)法皇むかへ参らせんずる事も、はや思ひとどまり、腹巻ぬぎおき、素絹の衣に袈裟うちかけて、いと心にもおこらぬ念珠してこそおはしけれ。

〈平家物語〉

(148)浄妙は這ふ這ふ帰って平等院の門前の芝の上に鎧を脱ぎ置いて、矢目を数へてみたれば、六十三が所あった。

〈天草版平家物語〉

(149)もはや人もしづまつた、さらはまいらふ と云て、きやうと、けさと、ころもぬぎおき、ねている所へいて、よつ、のいつして、のちにいだきつく、…

〈虎明本狂言集 万集類寝替〉

次は B1〈結果物残存〉の用法であるが、中世日本語資料においても、中古日本語資料の「-おく」において観察されたような B1〈結果物残存〉の用法が観察される。やはり、中世日本語資料の「-おく」におけるこの B1〈結果物残存〉用法のものにも、V1 として「書く、言ふ、思ふ」等ある程度限られた動詞を取るという制約が見られ、中古日本語の場合と同様に、文脈上の特徴として「当該の動作を行い、その結果生じた結果物を残存させ、その後にその場から離れる、あるいは亡くなる」といった文脈で用いられている場合が多い。

また、この B1〈結果物残存〉において注目すべき点は、『虎明本狂言集』における用例(154)の「かきおき」ように、転成名詞として用いられている点である。これは、「書きおく」のような「動詞連用形+おく」の V・V 構造が語彙的複合動詞のように形態的に緊密化し、一語のように一体化した可能性を示唆する。(154)のように「-おく」が転成名詞として用いられている用例は、次の近世日本語資料においてより多く観察されるようになる。以下、用例を挙げる。

B1〈結果物残存〉

(150)障子に又、「いづれか秋にあはではつべき」と書き置き給ひし筆の跡、げにもと思ひさぶらひしぞや。

〈平家物語〉

(151)「人の形見には、手跡に過ぎたる物ぞなき。書きおき給はずは、いかでかこれをみるべき」

〈平家物語〉

(152)それより父大納言殿の住まれた所を尋ね入って見らるるに、竹の柱、古りた障子、などに書きおかれた筆のすさみを見て、あはれ人の形見には手跡に過ぎた物はない。

〈天草版平家物語〉

(153)書きおかれぬならば、何としてこれをば見ようぞと言うて、康頼入道と二人読むでは泣き、泣いては読みなどせられた。

〈天草版平家物語〉

(154)さてさてこれを人に見せたいな、いや此ぶんでは、むさとした事じやが、かきおきをしてはたさう…

〈虎明本狂言集 集狂言之類 文山だち〉

(155)ただしいつとない波の上、船の内の住まひなれば、身々とならうも心苦しいなどと言ひ置いたものはかない予言であった。

〈天草版平家物語〉

(156)野牛の母草を喰ひに野に出づる時、子どもに言ひおく様は、「この穴の戸を中よりよう閉ぢて居よ、…楚忽に開くな」と言うて出た。

〈伊曾保物語〉

(157)「御有様見奉るに、日にそへてたのみずくなくこそみえさせ給へ。此世におぼしめしおく事あらば、すこしもののおぼえさせ給ふ時、仰せおけ」とぞ宣ひける。

〈平家物語〉

(158)「…今生の望一事ものこる処なし。ただし思ひおく事とては、伊豆国の流人、前兵衛佐頼朝が顔を見ざりつるこそやすからね。…」

〈平家物語〉

(159)義経涙を流させられ、この世に思ひおくことがあらば、義経に言ひおけと仰せらるれば…

〈天草版平家物語〉

中古日本語の場合と同様、以下からは中世日本語資料で観察される「-おく」における V2「おく」の補助動詞的用法となる。

まずは、C1〈パーフェクト性〉の用法を挙げる。中古日本語資料における「-おく」の C1〈パーフェクト性〉用法の場合は、V1 として「聞く、思ふ」のような他動詞や、「なる、仕うまつる」等の自動詞を取り、V1 が「聞く、仕うまつる」のような他動詞あるいは非能格自動詞の場合は動作パーフェクト相当の意味を表し、「なる」のような非対格自動詞の場合は結果継続の

ような状態パーフェクト相当の意味を表す傾向があるということを述べた。中世日本語資料の「-おく」における C1 〈パーフェクト性〉用法の場合は、「聞く」の他「御覧ず、ふるまふ、つくる、書く、言ふ」等他動詞あるいは非能格自動詞の場合が多く観察され、動作パーフェクト相当の意味を表すものが多く見られるのが特徴である。

以下、中世日本語資料で観察される「-おく」における C1 〈パーフェクト性〉の用例である。

C1 〈パーフェクト性〉

(160)頼信は、坂東方はこの度こそ初めて見れ。されども我が家の伝へにて、聞き置きたる事あり。

〈宇治拾遺物語〉

(161)上皇は法皇の離宮、故亭幽閑寂寞の御住ひ、御心苦しく御覧じおかせ給へば、法皇は又上皇の旅泊の行宮の浪の上、舟の中の御有様、おぼつかなくぞおぼしめす。

〈平家物語〉

(162)入道相国、かやうにいたくなさけなうふるまひおかれし事を、さすがおそろしと思はれけん。

〈平家物語〉

(163)日ごろつくりおかれし罪業ばかりや獄卒となつて、むかへに來りけん。あはれなりし事共なり。

〈平家物語〉

(164)「…『生あるものは必ず滅す。楽しみ尽きて悲しみ來る』と、いにしへより書きおきたる事にて候へども、まのあたりかかるうき事候はず。…」

〈平家物語〉

(165)a.是をそなたへやれはこなたのうらみ、こなたへやれはそなたのうらみ、昔より申ごとく、あんずる物は中からとれといひおいた事が有程に、それがしがとるぞ…

〈虎明本狂言集 集狂言之類やるこ〉

b.やれやれにくひ事をいふ、惣じて女の口のこはひは、りべつのもといと、むかしからいふておひた、まだおのれはくちがへらぬか…

〈虎明本狂言集 女狂言之類ひげやぐら〉

次に、C 補助動詞的用法における C2 〈結果維持〉用法を挙げる。以下、中世日本語資料で観察される「-おく」における C2 〈結果維持〉の用例である。

中古日本語の場合と同様、V1 として「隠す、籠める、留める」等の動詞をとって〈保持〉的

な用法として用いられている用例や、「捨てる」等の動詞をとって〈放置〉的な用法として用いられている用例が観察される。

ただ、中世日本語資料の「-おく」の C2〈結果維持〉用法においても、(166ab)や(167ab)のように、中古日本語資料『今昔物語』で観察されたような同一資料内における同一 V1 の形態的な混在が見られる。以下の各用例の「動詞連用形+おく」(a)と「動詞連用形+テ+おく」(b)の間に、V2「おく」の用法の相違といった顕著な機能分担の様相は見られず、同一資料内における表記上のゆれが生じていた可能性が高いといえる。

ただ、以下のような用例(b)をはじめとした中世日本語資料における「動詞連用形+テ+おく」構造の用例全体を総合的に観察すると、V2「おく」が C2〈結果維持〉や C3〈事前処置〉といった補助動詞的用法として用いられているものが多数を占め、中世日本語の「-おく」において「動詞連用形+テ+おく」構造が「-おく」の補助動詞構造専用の構造として使用されてきている様相が窺える。

また、(179)から(181)のように V1 として動詞の使役形をとる用例が多く観察される点も、中世日本語資料における「-おく」の C2〈結果維持〉用法の特色であるといえる。

以下、用例を挙げる。尚、波線部分はこれらの用例における V2「おく」が C2〈結果維持〉用法として用いられていることを裏付ける文言及び副詞等の表現である。

C2〈結果維持〉

(166)a. …垂布に包みたる藁をば大門の脇に隠し置きて、待ちみたる程に、二時余りありて、僧正、小門より帰る音しければ、

〈宇治拾遺物語〉

b.藏題ノ体トテ題ヲバカクシテライテ出サヌ也

〈中華若木詩抄 中〉

(167)a.雀は腰うち折られて、かく月比籠め置きたる、よに妬しと思ひけり。

〈宇治拾遺物語〉

b.人屋の司の者、宣旨のままに、重く罪ある者置く所に籠めて置きて、戸にあまた錠さしつ。

〈宇治拾遺物語〉

(168)a.その辺の下種のありける、地藏菩薩を一体造り奉りたりけるを、開眼もせで櫃にうち入れて奥の部屋など思しき所に納め置きて、世の営みに紛れて程経にければ、忘れにける程に、三四年ばかり過ぎにけり。

〈宇治拾遺物語〉

b.うち驚きて、何のかくは夢に見えつるにかと思ひ参らすに、あやしくて、夜明けて奥の方をよくよく見れば、この地藏納めて置き奉りたりけるを思ひ出して、見出したりけり。

〈宇治拾遺物語〉

(169)共に召し具したる馬部、吉上なソドとどめおき、其屋を守護せさせ、竜の御馬にうち乗つて、内裏へかへり参りたれば、ほのぼのとあけにけり。

〈平家物語〉

(170)汝が書き奉りたるやうに、心きたなく、身けがらはしうて書き奉りたる経は、広き野辺に捨て置きたれば、その墨の雨に濡れて、かく川にて流るるなり。

〈宇治拾遺物語〉

(171)a. …きみやうまるといつしけんしん、あらかしましのひやうたんや、とてはるかのたにすておかるゝ、それはむかしのけんしん、いまた我らかうちならすひようたんしもくを取出し、
…

〈虎明本狂言集 万集類はちたゝき〉

b.いじのわるひ事とは、おのれ一人わたりおつて、身共を爰にすてゝおく、おふてわたらずは後がわるからふ

〈虎明本狂言集 出家座頭類どぶかつちり〉

(172)一里配りなどして、果てにはまことにすぐれて大なる七つ八つは瓢にせんと思ひて、内につりつけて置きたり。

〈宇治拾遺物語〉

(173)木登よくする法師、登りて見れば、極楽へ迎へられ給ひし我が師の聖を、葛にて縛りつけて置きたり。

〈宇治拾遺物語〉

(174)御門この由を聞き給ひて、后を捕へて、髪に縄をつけて上へつりつけて、足を二三尺引き上げて置きたりければ、すべきやうもなく、心のうちに思ひ給ひけるやう、

〈宇治拾遺物語〉

(175) 今度馬をかりにわ〇たらは、やすひ事で御ざるが、いぜんうへのだんへあを草に付て御ざれは、だぐるひを致て、こしのほねを打おつて御ざるに依て、役にたゝぬ程に、馬やのすみにつなひでおいたといはしめ…

〈虎明本狂言集 出家座頭類 ほねかわ〉

(176) 蟹心中に殊の外腹を立てて、「所詮かやうの徒者を娑婆塞げに生けて置いて、頭の痛いことを堪へうよりは」と思ひ、…

〈伊曾保物語〉

(177) 言語道断の事じや、たとへははしにめはなをつけたるやうな男であらふとまゝよ、おのれがいまのやうにいはふ事か、そのうへ此間あまやかひておひたに依て、そのつれな事をぬかす、おのれちやうちやくせられうと思ふて、そのつれな事をいふか

〈虎明本狂言集 女狂言之類 おこさこ〉

(178) めなもみといふ草あり。くちばみにさされたる人、かの草を揉みて付けぬれば、則ち癒ゆとなん。見知りておくべし。

〈徒然草〉

(179) 此やうなうつくしひ子をひとりこゝにねさせておいたかにくひ事じやと云て、又なくと云て、すかす、

〈虎明本狂言集 集狂言之類 盗人の子〉

(180) それならなんぢが尤もじや、汝にとがはなひ、それならはわらはも汝をたのまふ程に、なんぢがしていたやうに、わらはをさせておいてくれひ

〈虎明本狂言集 女狂言之類 はなご〉

(181) いやおのれは、いはせておけはほうりやうもなひ、ちくしやうといふか、しかとそのつれな事を云か

〈虎明本狂言集 女狂言之類 河原太郎〉

次に、C 補助動詞的用法における C3〈事前処置〉用法を挙げる。以下、中世日本語資料で観察される「-おく」の V2「おく」における C3〈事前処置〉の用例である。

V1 としては、中古日本語の場合と同様に他の用法に比べ多様な動詞をとり、V1 が動詞連用形である「動詞連用形+おく」構造の用例も依然として観察されるものの、「動詞連用形+テ+おく」構造のものが圧倒多数を占める。

また、C2〈結果維持〉用法と同様、以下の(188ab)から(189ab)の通り、同一 V1 の形態的な混在も観察される。(188ab)のように、同じ中世日本語資料であっても異なる資料において観察される対もあるが、(189ab)のように同一資料内における同一 V1 の形態的な混在も観察される。

ただ、C2〈結果維持〉用法の場合と同様に、それらの各用例の「動詞連用形+おく」(a)と「動詞連用形+テ+おく」(b)の間に、V2「おく」の用法の相違といった顕著な機能分担の様相は見られず、同一資料内における表記上のゆれがあった可能性が高いといえる。

しかし、以下のような用例(b)をはじめとした中世日本語資料における「動詞連用形+テ+おく」構造の「-おく」全体を総合的に観察すると、やはり「-おく」の補助動詞構造専用の構造として「動詞連用形+テ+おく」が使用されてきている様相が窺える。

以下、用例を挙げる。尚、波線部分はこれらの用例におけるV2「おく」がC3〈事前処置〉用法として用いられていることを裏付ける文言及び副詞等の表現である。

C3〈事前処置〉

(182)弓矢とりは、いささかの所でも思ひ出の詞をば、かねてつかひおくべきで候ひける物かな。

〈平家物語〉

(183)人はいづれの日、いづれの時、必ず立帰るべしと、其期を定めおくだにも久しきぞかし。

〈平家物語〉

(184)「しばし、この事はてて」、「同じくはかの事沙汰しおきて」、「しかしかの事、人の嘲りやあらん、行末難なくしたためまうけて」、…

〈徒然草〉

(185)その瀬に身をも投げうとしたを、由ない少将の今一度都の音信をも待てかしなどと慰めおかれたを、愚かでもしやと頼うで存へうとはしたれども、…

〈天草版平家物語〉

(186)されども帝王この由を聞かせられて実否を未だ決しさせられなんだれば、豫てエンノ巧みおいたことちやによつて、「ここに證跡がある」と申して、一つの巻き物を捧げた。

〈伊曾保物語〉

(187)埋みけるを人の見おきて、御所へまゐりたる間に盗めるなりけり。

〈徒然草〉

(188)a.西八条へ出でし時、この子が我もゆかうどしたひしを、やがて帰らふずるぞとこしらへおきしが、今の様におぼゆるぞや。

〈平家物語〉

b.お前におのおのの御ざつて、まりをけふとおしやる程に、まりをもこしらへておいて、またさうじをもし、おのおの御ざつたらはこなたへ申せ

〈虎明本狂言集 出家座頭類まりざとう〉

(189)a.何としゆしやうな事ではなひか、思ひの外はやうおいとまを下され、仕合のよひもおかげじやと思ふ、だうのやうすを見おひて、国本にての物がたりにせう

〈虎明本狂言集 鬼がわら〉

b.さらはようだうの様子をみておかふ

〈虎明本狂言集 鬼がわら〉

(190)中々ならはひではなりませぬに依て、それはまへかどからならふておゐてござる

〈虎明本狂言集 あさう〉

(191)西八条へ出た時、この子がわれも行かうと慕うたを、やがて帰らうそと、賺いておいたが、今のやうに覚ゆる

〈天草版平家物語〉

(192)さてはさやうの事できた、ようこそわたせたれ、此おうちがさやうの事はなけれども、爰におもしろひ物語が有、かたつてきかせう、わかひ者はきひておいたがよひ

〈虎明本狂言集 女狂言之類枕物狂〉

(193)此やうな事はあるまひ、後のかたりくにもなる程に、ようみておいたがよひ

〈虎明本狂言集 集狂言之類にわう〉

次に、C 補助動詞的用法における C4 〈非難・自虐〉用法を挙げる。前述の通り、この C4 〈非難・自虐〉の用法は、中古日本語からその萌芽的な用例が観察されはじめるが、以下の(194)から(197)を見てもわかるように、中世日本語資料において、特に『虎明本狂言集』においてより典型的な V2 「おく」の C4 〈非難・自虐〉用法が観察されはじめる。三大口語資料の一つとして数えられる狂言資料における用例という点で、文体的な性質による C4 〈非難・自虐〉用法の出現であるとも考えられるが、やはり中世日本語の V2 「おく」において顕著に用いられはじめた用法である可能性が高いといえる。以下、用例を見られたい。

C4 〈非難・自虐〉

(194)おれがわごりよにまようた事か、わごりよがおれをよびこでおひて、おれおきながら、よそのめづかひ、せんじせんじとそこでかねうて、かつちかつちとうたひなふ、…

〈虎明本狂言集 女狂言之類はなご〉

- (195) (名取の何某) やいやい、何ものなれは、せつしやうきんだんの所で魚をすくふぞ
 (出家) いや身共は魚はすくはぬ
 (名取の何某) すくはぬとは、今のほどすくふておひて、ことさら出家の身で似合わぬ事をあそばす

〈虎明本狂言集 出家座頭類名取川〉

- (196) (夫) いや身共はさのみならふとおもはなんだれ共、さそこな僧がむりになされた程に、身共はしらぬ

(出家) それは迷惑な、そなたのたのふでおいて

〈虎明本狂言集 出家座頭類路れん〉

- (197)…ししやう何とて酒をくれぬぞと云、今のほどもつたに、のふでおいて、のみがくしをあそばすと云、ししやう、なをなをはらをたてゝ、もりもせいでにくひ事をいふと云、またもる、…

〈虎明本狂言集 出家座頭類どぶかつちり〉

4.1.4. 近世日本語の「-おく」

次に、近世日本語資料において観察される「-おく」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-おく」における V2「おく」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

4.1.4.1. V1 の特性

以下の表 16 は、近世日本語資料において観察される「-おく」の V1 を用例数とともに提示するものである。近世日本語資料全体における「-おく」の異なり語数は 264、延べ語数は 725 であり、中世日本語資料における「-おく」と同様、「-おく」における V1 のヴァリエーションが多様であることがわかる。尚、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 17 で提示する通りである。以下、表 16 と表 17 を見られたい。

表 16 近世日本語資料における「-おく」の V1

V1	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
あいしらつ(会釈)て-					1			1
明け-	1							1
上げ(け)-	1			1			1	3
開て-					1			1
上げて-				2		1		3
預かって-		1						1
預かり-	2	1		1				4
預け-	8	11			2	1		22
預けて-	1	4		2				7
あつためて-						1		1
集め-	1							1
あつらへ-					1			1
あつらへて-			2					2
当てはめて-		1						1
改め-	1							1
言(云)う(ふ、っ、ひ)て-		1	1	1	4		1	8
生けて-		5				1		6
いすいで-						1		1
致し-						1		1
致して-			2			1		3
言(云、宣)ひ-	1	5					2	8
言(云)ひ付けて-				1				1
入れ-	8	4				1	2	15
入れて-		2		2		5	3	12
言わせて-						1		1
受け取って-		1						1
動かせず-		1						1
請合ひ-		1						1
打たで-	1							1

打たでは-	1							1
打ち付け-	1							1
うっちゃっ(打遣・打捨)て-			3	1	3	4		11
打って-		2						2
埋んで(めて)-		1				1		2
植ゑ(へ)-	3							3
売らせては-	1							1
売り残して-	1							1
起して-				1				1
押さへ-		1						1
納め-	4	1						5
教へ-	1						3	4
落としては-	1							1
覚えて-		1						1
仰せ-				1				1
お待せ申て-					1			1
思はせて-	1							1
思ひ-		4						4
思ふて-							1	1
下ろし-	2	1						3
下ろして-		1						1
掛かって-		1						1
抱へ-	1						1	2
書き-	21	13					2	36
書き付け-	2						1	3
書(描)き(い)て-					2	1	1	4
書きては-				1				1
書き留めて-				1				1
隠し-	1	5						6
隠して-					2	1		3
匿へ(ひ)-	1	1			2			4

懸(掛)け-	3	1					2	6
懸(掛)けて-	2	1		1	4		3	11
囲う(っ)て-		1		2		1		4
重ね-	1							1
重ねて-		2				1		3
貸して-			2					2
片付て-			1					1
語らせねや-		1						1
買つて-						1		1
買はせ-	1							1
かばって-				1				1
買ひ-	16	2						18
飼ひ-		1						1
構へ-		1						1
搦め-		1						1
可愛がって-					1			1
考へて-					1			1
聞かにや-		1						1
聞き-		1				1		2
聞き捨てて-		1						1
聞きためて-				1				1
着せ-	1							1
極め-	1	1						2
極めて-						1		1
括し上げて-		1						1
括って-						1		1
括り-	1	1						2
紵け-		1						1
くすねて-						1		1
下し-	1	1						2
汲込で-					1			1

こしらへ-	3					1		4
こしらへて-				1				1
断って-		2						2
籠(込)め-	2	2						4
殺して-		1						1
さし-	3	8			1	1		13
さして-						1	1	2
させずに-					1			1
沙汰し-	1							1
定め-	3							3
さばき-	1							1
し(仕)-	3	8	1				1	13
仕掛け-	2	1						3
仕掛けて-		1						1
敷き-							1	1
しさいては-		1						1
持して-					1			1
したため-	1							1
して-	10	4	5	4	5	10	1	39
仕似せ-	1							1
縛り-		1						1
しまって-			2	1		3		6
しま(仕舞)ひ-					1			1
示し合わせて-							1	1
しめ(メ)て-					1			1
知らせて-		1						1
記し-	1			1				2
進じ-	1							1
棄(捨)て-	10	10		1	4	1		26
棄(捨)てて-		2						2
居(すは)らせて-					1			1

据へ並べて-							1	1
済し-		2						2
済して-				1				1
清して-					1			1
せいで-		1						1
せずに-		1						1
せせり探して-		1						1
貯(蓄)へ-	1					1		2
出させて-						1		1
出し-	1						1	2
出し(い、ひ)で-		3	1	1		3	1	9
助け-		4						4
叩いてばかり-		1						1
正さず-	2							2
立たせ-	1							1
畳み-	1	1						2
立ちわづらはせ-	1							1
立て-	2	1					2	5
立てかけて-						1		1
立てずに-		1						1
頼ふ(う、ん)で-		2			1			3
頼み-					1			1
騙して-		1						1
貯めて-	1			1				2
契って-						1		1
契り-		1						1
遣はし-	4				1			5
つき出して-						1		1
造(作)り-		1						1
付け-	7	3				1	1	12
付けて-	1	2		1	1		1	6

包み-	2							2
包んで-						1		1
勤めて-			1		1			2
つなひで-						1		1
積ませ-	1							1
詰め-	1						1	2
解かせいで-		1						1
閉じ込めて-							1	1
調へ-	1							1
調へて-		1						1
とど(留)め-		1		2				3
と(留)め-		5					1	6
と(留、止宿)めて-		1			1			2
取らずに-		2						2
取らで-		1						1
捕らへて-							1	1
と(取)り-	11	8		2				21
取り替へ-		1						1
取り殺さいで-		1						1
取り出し-							1	1
と(取)り(っ)て-	5	4	1			5	2	17
取り寄せ-							1	1
直し-	1		1				2	4
流し-		1						1
投げ出し-					1			1
なし-						1		1
なって-		3						3
習ひ-	1							1
習ふて-		1						1
並べ-		1			1	1		3
並べて-		1						1

にらんで-						1		1
抜いて-		1						1
抜き-		1						1
脱ぎ-	1						1	2
脱ぎ捨て-						1		1
脱ぎ放して-				1				1
寝させ-	2							2
ねだって-			1					1
除け-	2							2
除けて-	3	2	1	1				7
残し-	6	5						11
残し(い)て-		1						1
乗せ-	1							1
登せ(し)-		1					1	2
飲まさにや-		1						1
飲みて(飲ふで)-			1					1
吐かけて-				1				1
外し-	1				1			2
外して-				2				2
放し-							1	1
話して-			1					1
放ち-	1							1
張り-	1							1
引きあふて-						1		1
引き居-					1			1
引き込んで-		1						1
潜めて-				1				1
浸し-		1						1
ひっすへて(引据)-							1	1
広(弘)め-		1						1
ひん脱で-						1		1

伏伏-				1				1
踏まいで-		1						1
踏んでばかり-		1						1
へて-							1	1
ほからかいて-		1						1
放て-				1		4		5
干して-					1		1	2
掘り-		1					1	2
蒔いて-							1	1
任せ-		2			1			3
任せて-		5					1	6
待たしちや-				1				1
待たして-						1		1
待せ-						1		1
待せ申して-			1					1
待ち伏せさせて-		1						1
学び-	1							1
見-		1						1
磨かして-		1						1
見捨てて-		1						1
見せいで-		1						1
見せずは-		1						1
視せて-					1			1
見(看)て-		4	1		1	1		7
見逃し-		1						1
見廻り-	1							1
結び-	1	1						2
蒸らし-					1			1
召し-		1					1	2
申し-	6	1						7
申し入れ-						1		1

申しつけ-						1		1
申して-					1			1
持たせ-	1							1
もたせ掛けて-	1							1
持(っ)て来て-			1				1	2
求め-	1						1	2
貰うて-	1							1
貰ひ-	1							1
養ひ-		1						1
やらずに-						1		1
やり(っ)て-		1	1		1	1	1	5
許して-		1						1
呼び-					1			1
湧して-				1				1
分け-	1							1
忘れ-	1	1					2	4
渡してさへ-		1						1
合計	215	235	31	46	60	78	60	725

表 17 近世日本語資料における「-おく」の V1 の異なり語数および延べ語数

	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
異なり(延べ)	88(215)	119(235)	21(31)	37(46)	41(60)	51(78)	46(60)	264(725)

次に、「-おく」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 18 の通り示される。中古日本語や中世日本語と同様に、「-おく」の V1 の形態として「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」のものが依然として混在して観察されるが、近世日本語資料全体における「動詞連用形+テ+おく」は異なり語数 135、延べ語数 312 であり、「-おく」全体に占める割合は 51.1%(43.0%)である。つまり、中世日本語資料の「-おく」の場合と同様にかなり高い割合を占めており、近世日本語の「-おく」においても「動詞連用形+テ+おく」の使用頻度が非常に高くなっているということがわかる。

ただ、近世日本語資料における「-おく」の場合も、資料によって「-おく」における V1 の形態的特徴に差があることがわかる。例えば、「西鶴集」で観察される「-おく」のうち、「動詞

連用形+テ+おく」構造のものの割合は 17.0%(14.4%)であるのに対し、「洒落本」や「滑稽本」、『東海道中膝栗毛』で観察される「-おく」の場合は、それぞれ 90.5%(93.5%)、78.4%(78.3%)、80.4%(43.6%)とかなり高い割合を占めている。その他の資料においても半数近くあるいは半数以上を「動詞連用形+テ+おく」構造のものが占めていることを考慮すると、近世日本語資料における「-おく」が「動詞連用形+テ+おく」構造で出現する割合が全体的に非常に高まっていることがわかる。

また、近世日本語資料の「-おく」においても、中古日本語資料や中世日本語資料と同様に、以下の(198ab)と(199ab)で示されているように、同一 V1 における形態的な混在が見られる。ただ、これまでの中古日本語や中世日本語の場合と異なるのは、以下のような用例において「動詞連用形+おく」(a)と「動詞連用形+テ+おく」(b)の間に、V2「おく」の用法の相違といった機能分担の様相が見られるという点である。

例えば、(198ab)において(198a)の「書置」は B1〈結果物残存〉用法として用いられているのに対し、(198b)の「かいておく」は C1〈パーフェクト性〉用法として用いられているといえる。また、(199ab)についても、(199a)の「言ひおく」が B1〈結果物残存〉用法として用いられているのに対し、(199b)は C3〈事前処置〉用法として用いられている。つまり、各用例の(a)が示すように、主に V2「おく」が B1〈結果物残存〉用法として用いられている「-おく」は「動詞連用形+おく」構造で、各用例の(b)が示すように、V2「おく」が C 補助動詞的用法として用いられている「-おく」は「動詞連用形+テ+おく」構造で用いられはじめているということである。

以下、表 18 とその割合を示す表 19、及び近世日本語資料の「-おく」において同一 V1 が「動詞連用形+おく」構造と「動詞連用形+テ+おく」構造の両方で出現している用例を挙げる。

表 18 近世日本語資料における「-おく」の V1 の形態

	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
動詞連用形	73(184)	63(147)	2(2)	8(10)	16(21)	10(44)	25(34)	129(413)
動詞連用形+テ	15(31)	56(88)	19(29)	29(36)	25(39)	41(34)	21(26)	135(312)

表 19 近世日本語資料における「-おく」の V1 の形態の割合

	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
動詞連用形	83.0% (85.6%)	52.9% (62.6%)	9.5% (0.6%)	21.6% (21.7%)	39.0% (35.0%)	19.6% (56.4%)	54.3% (56.7%)	48.9% (57.0%)
動詞連用形+テ	17.0% (14.4%)	47.1% (37.4%)	90.5% (93.5%)	78.4% (78.3%)	61.0% (65.0%)	80.4% (43.6%)	45.7% (43.3%)	51.1% (43.0%)

(198)a.後家に云渡したるは始の日付也そちへ書置は日付後也と申せし

〈醒睡笑〉

b.昔より上人の霊前へそなへ物にふらではかなはぬとかいておいた撰釈集にあるかいや
難波に雪は法然の御調物と

〈醒睡笑〉

(199)a.若い人のことなれば、後日の念に、ちよつと知らせておきますと、言ひおいて帰られた。

〈心中重井筒〉

b.この在所で、わしは島原の傾城が、請け出されて来てみると、庄屋にも誰にも言うておく。

〈大経師昔暦〉

次に、「-おく」における V1 の自他に注目してみると、表 20 の通り示される。やはり、近世日本語資料で観察される「-おく」においても V1 として他動詞をとる用例が圧倒多数を占めていることがわかる。

本稿において使用した近世日本語資料において、「自動詞+おく」の用例は「近松集」における三例のみで、すべて C3〈事前処置〉用法の「なっておく」である。これらの場合の「なっておく」の V1「なる」は自動詞であっても非能格自動詞であるため、中古日本語資料の「-おく」において観察されたような「なりおく」の V1「なる」とは性質が異なっているといえる。しかし、この場合、V2「おく」は C 補助動詞的用法の C3〈事前処置〉用法として用いられているため、現代日本語における複合動詞のような他動性調和の原則の制約は受けないと思われる。

以下、表 20 とその割合を示す表 21 及び V1 として自動詞をとる「自動詞+おく」の用例を挙げる。

表 20 近世日本語における「-おく」の V1 の自他

	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
自動詞	0(0)	1(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(3)
他動詞	88(215)	118(232)	21(31)	37(46)	41(60)	51(78)	46(60)	263(722)

表 21 近世日本語における「-おく」の V1 の自他の割合

	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
自動詞	0% (0%)	0.8% (1.3%)	0% (0%)	0% (0%)	0% (0%)	0% (0%)	0% (0%)	0.4% (0.4%)
他動詞	100% (100%)	99.2% (98.7%)	100% (100%)	100% (100%)	100% (100%)	100% (100%)	100% (100%)	99.6% (99.6%)

(200)紙入れより金二十両取り出し、サア、金でした小判といふもの、近づきになつておけと、めつかうに投げつくる。

〈長町女腹切〉

(201)やがてこの男が女房に持つか、紙屋治兵衛が請け出すか、張り合ひの女郎、近付きに、なつておきやと、のさばり寄れば、…

〈心中天の網島〉

(202)ヤア亭主、近付きになつておきや。

〈けいせい反魂香〉

4.1.4.2. 意味用法

次に、近世日本語資料において観察される「-おく」の V2「おく」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、近世日本語において「-おく」の V2「おく」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、近世日本語資料においても、A 本動詞的用法における A2〈置く〉用法の用例が観察される。この A2〈置く〉用法の「-おく」にも、以下の用例(203ab)～(204ab)のように、同一の V1 をもつ「-おく」が「動詞連用形+おく」の構造(a)や、「動詞連用形+テ+おく」の構造 (b)で現れるといった V1 の形態の混在が見られる。ただ、(203ab)の場合は両者の用法において相違は見られないが、(204ab)の場合は、(204a)が A2〈置く〉用法として用いられているのに対し、(204b)は C 補助動詞的用法の C3〈事前処置〉用法として用いられていると考えられる。以下の用例を見られたい。

A2 〈置く〉

(203)a.かくのごとく折籠二、三千合も拵へ、様々の菓子餉酒肴したゝめ、各これに鴆毒を入れ陣屋に貯へ並べ置き、陣所近く敵を引き受け、戦ひ負けたる体にして、十里ばかり引き取るべし。

〈国性爺合戦〉

b.イヤさうでござらぬ。この道に高下はない。その小一兵衛も呼び出し、並べて置いて、念者に頼む。

〈心中宵庚申〉

(204)a.南無三宝と、剃刀捨て、側に抜き置く脇差の、鞘を持つて引き上ぐる。

〈卯月紅葉〉

b.つゝごかしの顔で、つらりと、九文、十文づゝ、百の口を抜いておけや。

〈心中万年草〉

(205)よき幸ひと景清は荷ひし櫃を下ろし置き、迷惑さうに揉み手をして、表にこそは出でらるゝ。

〈出世景清〉

(206)よし田が上がへの棲まで流れよる時、禿の小林、我がぬぎ置きし黒茶字のきる物にて残らずしたみ、かいやり捨てける。

〈好色一代男〉

(207)ト櫛笄を抜てそこへなげ出し置。

〈春告鳥〉

次は B1 〈結果物残存〉の用法である。近世日本語資料においても、B1 〈結果物残存〉の用法が観察される。ただし、中世日本語資料『虎明本狂言集』の「-おく」において見られた用例「かきおき」のように、特に V1 が「書く」である「書きおく」の場合は転成名詞「書置」として用いられている場合が圧倒的に多い。これは、前述した通り「動詞連用形+おく」の V-V 構造が語彙的複合動詞のように形態的に緊密化し、一語のように一体化した可能性を示唆する。このように「書きおく」が転成名詞「書置」として現れ、また「-おく」全体における B1 〈結果物残存〉用法の用例が中古日本語および中世日本語よりも出現頻度が減少していることを考慮すると、B1 〈結果物残存〉用法の「-おく」が語彙的な複合動詞として固定化したため、「-おく」におけるその他の補助動詞的な用法よりも生産性が低下していると考えられる。以下、用例を挙げる。

B1 〈結果物残存〉

(208)世之介と申しかはせし事を忘れず、書置して剃刀手にふれし事もありしとなり。

〈好色一代男〉

(209)…身もだえして嘆き、世にながらへても、せんなしと思ひ極め、心にある事書置きして、小浜の海に身を投げけるに、…

〈西鶴諸国ばなし〉

(210)毎年元日に書置して、四十以後死をわきまへ、正直に世渡りするに、自然と分限になつて、泉州堺に小刀屋とて長崎商人あり。

〈日本永代藏〉

(211)狂乱したりと嘆きをかけ、不孝の罪も恐ろしや、一筆づゝの書置を残さばやと、…

〈卯月の潤色〉

(212)古道具屋与兵衛入道助給。末期に親、伯母の御方へ申し残す書置のこと。

〈卯月の潤色〉

(213)母に向ひ、なんぼの言葉を尽したと思やるぞ。書置もしたゝめ、死装束、脇差も、荒布の荷へ巻き込み、この世の心がゝりは微塵ほどもなけれども…

〈心中宵庚申〉

(214)後にはあの婆たつた一人。留守のことはお家主頼みますと言ひ置き、今日か明日は戻られう。

〈博多小女郎波枕〉

(215)兄に我子幼稚也そちへとり養育成人の後家を渡してくれられよといひ置終にむなしくなれり。

〈醒睡笑〉

(216)命があらばまた会はう。死なば親子の末期の水、未来は八功德池の水。この世に思ひ置くことない。

〈心中宵庚申〉

(217)アゝ、いままし。老い木の末の、思ひ置きはよしなやな。こちもそなたも若松の、千代の杯ざんざ、浜松の音。

〈けいせい反魂香〉

中古日本語及び中世日本語の場合と同様、以下からは、近世日本語資料で観察される「-おく」における V2「おく」の補助動詞的用法となる。

まずは、C1〈パーフェクト性〉の用法を挙げる。近世日本語資料の「-おく」における C1〈パ

ーフェクト性〉用法の場合も、「聞く」の他「さばく、取る、す」等他動詞の場合が多く観察され、動作パーフェクト相当の意味を表すものが数多く見られる。以下、用例を見られたい。

C1 〈パーフェクト性〉

(218)揚屋町に行けば、日来の大臣よろしくさばき置かるとみえて、大座敷わたし、亭主・内儀が、入れ替りけいはく数を尽し、…

〈好色一代男〉

(219)「…その男は役に立たずにて、今は肥後の熊本に行きて奉公せしとや。世帯やぶる時分、暇の状は取つておく。男なしぢやに。ほんにおれは、生れ付きこそ横ぶとれ、口ちひさく髪も少しはちぢみに」

〈好色五人女〉

(220)尋ね巡るや、はうぼうの津。潮の辻なる裏貸家、かねて聞きおく目印あり。

〈薩摩歌〉

(221)内でかうした心からは、外で何がなしおきつらん、誰に似てこの根性、憎いが余つて不便なり。

〈心中二枚絵草紙〉

次に、C 補助動詞的用法における C2 〈結果維持〉用法を挙げる。以下、近世日本語資料で観察される「-おく」の V2 「おく」における C2 〈結果維持〉の用例である。

中古日本語や中世日本語の場合と同様、V1 として「留める、預ける」等の動詞をとって〈保持〉的な用法として用いられている用例や、「捨てる、うちやる、ほうる」等の動詞をとって〈放置〉的な用法として用いられている用例が観察される。

中古日本語や中世日本語の場合と同様に、V1 が動詞連用形である「動詞連用形+おく」構造の用例も依然として観察されるが、「動詞連用形+テ+おく」構造のものも観察される。また、近世日本語資料の「-おく」の C2 〈結果維持〉用法においても、(226ab)、(237ab)のように、同一 V1 の形態的な混在が見られる。以下の各用例の「動詞連用形+おく」構造(a)と「動詞連用形+テ+おく」構造(b)の間に、V2 「おく」の用法の相違といった顕著な機能分担の様相は見られず、この場合も同一資料内における表記上のゆれが依然として生じていた可能性が高い。

ただ、やはり以下のような用例(b)をはじめとした近世日本語資料の「-おく」における C2 〈結果維持〉用法の用例を全体的に観察すると、「動詞連用形+テ+おく」構造のものが圧倒多数を占めており、「-おく」の補助動詞構造専用の構造として「動詞連用形+テ+おく」が使用されている様相が窺える。

また、中世日本語の場合と同様に、(227)のような V1 として動詞の使役形をとる用例も観察される。以下、用例を挙げる。尚、波線部分はこれらの用例における V2「おく」が C2〈結果維持〉用法として用いられていることを裏付ける文言及び副詞等の表現である。

C2〈結果維持〉

(222)女子衆が見つけて、こゝへ失せたは曲者、夜明まで留め置いて、おとな殿へ渡すとて、錠を下ろして動かせず。

〈薩摩歌〉

(223)軍半ばの大民国、事太平に治まるまで、姫宮を汝に預け日本に留めおかんと思へども、筋なき女の心を窺ひ、わざとつれなく見せたるぞ。

〈国性爺合戦〉

(224)「銀八十目にさしつまり、内証借りにして、その代りには、朝夕念ずる、弘法大師の御作の如来を済ますまで預け置くべし。…」

〈好色一代女〉

(225)葛城ことは、三月二日に親方が暇を取り、拙者が本妻。借宅見立ての間、揚屋に預け置きしところ、判左衛門数通の艶書。かくのとほり、不義者の女敵なり。

〈国性爺合戦〉

(226)a.「何事も夜明けてのせんぎ、それまではその者汝等に預け置く」と立ち入るを呼びかけ、…

〈男色大鑑〉

b.吉原の太鼓に羽織かすと、川原のこんがうにこまがね預けて置くと。

〈男色大鑑〉

(227)これをかなしく、独りねられぬままに、世の無常を観ずる時、寝させ置きたる二人の子供、現に声をあげて、びく身のうごく事三十七度なり。

〈西鶴諸国ばなし〉

(228)なう生けて置いては、請け出して、女夫になるが情けない。わしには大事の男がある。その男と縁切れる。恋路の仇となる故に、今刺し殺す。

〈淀鯉出世滝徳〉

(229)よき敵の首取つて、討死するを侍の、死にくい死にとはいふぞ。覚えておけ。関の小まんと心中の討死を手柄とは、一切経にもないこと。

〈丹波与作待夜のこむろぶし〉

(230)垢をためて置く板へゆびをすり付ながら

〈浮世床〉

(231)「お洒落でなひ。能好男の風俗をして誰が幾日も止宿て置ものか。…」

〈春告鳥〉

(232)「そんならばはやく往てお出な。旦那をばお待せ申ておくから。エ旦那へ、お淋くともお待なさつてつかはさいましナ…」

〈春告鳥〉

(233)「…ゑらいけんくはがあると、人がはしるさかい、わしもツイいて、見てもどるほどに、それまでまでといふて、またしておきましたはいの…」

〈東海道中膝栗毛〉

(234)「…丁場の背戸につなひでおいたら、雪陣のやによヲ、がらゝみんなくらやアがつた…」

〈東海道中膝栗毛〉

(235)「いゝことをいふ。しかしきさまのこつたものを、うつてかしやせう。ノウ弥次さん、見なせへ乞食にしておくは、おいしい器量だ…」

〈東海道中膝栗毛〉

(236)「…一念通ふこそうれしけれ。いかでそのままそのころざしを捨て置くべきや。御望みにまかせ申すべし。今宵の明くるを待ち給ひて、明日はかならずわが宿に」

〈好色一代男〉

(237)a.「さては天から降りたる一箱」と大笑ひして、明けもせずそのままに捨て置きぬ。

〈男色大鑑〉

b.アゝお沢様の心推量した。遣りにくいはず。こゝに捨てて置かしやんせ。わしが誰ぞよさそな人に拾はせましょ。

〈女殺油地獄〉

(238)これ母様. いたづらも、悪性も. 男持たぬ先ならば、言はれぬ構ひぢやあるまいか. それにいぢむぢ言ふ人はほからかいておかしやんせ.

〈心中万年草〉

(239)なんだといゝは。うっちゃつておかつせへ。こんたのせわにやアならねへは

〈傾城買四十八手〉

(240)「延公が屋しきから帰つて、袴を脱放して置くと、コレ初や、其お袴を一寸袖畳にしておきやと云つたが、…」

〈浮世床〉

(241)「ワハ、ハ、ハ、てつきりけつねにがな つまゝれくさつたもんじやあるぞい。ゑらい隙費しな。ほつておけほつておけ。さりとは あほうなやつらじやな…」

〈東海道中膝栗毛〉

(242)「ソリヤおなごのない国で、生れた人さんじやあるぞいな。かまはんすな、ほつておかんせ…」

〈東海道中膝栗毛〉

次に、C 補助動詞的用法における C3〈事前処置〉用法を挙げる。以下、近世日本語資料で観察される「-おく」の V2「おく」における C3〈事前処置〉の用例である。

中古日本語や中世日本語の場合と同様に、他の用法に比べ多様な V1 をとる。V1 が動詞連用形である「動詞連用形+おく」構造の用例も依然として観察されるが、「動詞連用形+テ+おく」構造のものが圧倒多数を占める。ただ、本稿において使用する近世日本語資料の中でも、「西鶴集」では V1 が動詞連用形+テである「動詞連用形+テ+おく」構造のものが 17.0%(14.4%)とその他の資料よりも割合が低いため、C3〈事前処置〉用法の「-おく」においても「動詞連用形+テ+おく」構造のものが少なく、「動詞連用形+おく」構造で用いられているものが多いと考えられる。

また、C2〈結果維持〉用法と同様に、以下の(244ab)から(245ab)の用例が示す通り、同一 V1 の形態的な混在も見られる。ただ、他の場合と異なるのは、以下のような用例において「動詞連用形+おく」構造(a)と「動詞連用形+テ+おく」構造(b)の間に、V2「おく」の用法の相違といった機能分担の様相が見られるという点である。例えば、(244ab)における(244a)の「抜き置く」の V2「おく」が A2〈置く〉用法で用いられているのに対し、(244b)の「抜きおく」の V2「おく」は C3〈事前処置〉用法として用いられている。また、(245ab)における(245a)の「言ひおく」の V2「おく」が B1〈結果物残存〉用法として用いられているのに対し、(245b)の V2「おく」は C3〈事前処置〉用法として用いられている。つまり、各用例の(a)が示すように、主に B1〈結果物残存〉用法の「-おく」は「動詞連用形+おく」構造で用いられており、各用例の(b)が示すように、C 補助動詞的用法の「-おく」は「動詞連用形+テ+おく」構造で用いられているということである。

以下のような「-おく」の各構造における機能分担の様相については、同じ近世日本語資料における現象といえども、各資料間における文体差といった要因も考慮に入れて検討する必要があると思われる。しかし、(244ab)から(245ab)における各用例の(b)をはじめとした近世日本語資料における「動詞連用形+テ+おく」全体を総合的に観察すると、やはり「-おく」の補助動詞構造専用の構造として「動詞連用形+テ+おく」が使用されてきている可能性が高いといえる。

また、近世日本語資料における「おく」の V2「おく」の C3〈事前処置〉用法においてさらに注目すべき点は、(256)から(258)のような、歴とした〈準備性〉を示さない「一時的処置」、「臨時的処置」を示す用例が出現してくるという点である。このような用例も亜種として C3〈事前処置〉に分類するが、このような「一時的処置」や「臨時的処置」を示す用例は、その他の時代の資料には観察されない特色ある用例であるといえる。

以下に用例を挙げる。尚、波線部分はこれらの用例における V2「おく」が C3〈事前処置〉用法として用いられていることを裏付ける文言及び副詞等の表現である。

C3〈事前処置〉

(243) そもそも針刺の数を改め置きて、仕舞ふ時、又針を読みて、よろづを大事に掛け、殊更に身を清め、さほりある女は、この座敷出べき事にあらず。

〈好色一代女〉

(244)a. 南無三宝と、剃刀捨て、側に抜き置く脇差の、鞘を持つて引き上ぐる。

〈卯月紅葉〉

b. つゝごかしの顔で、つらりと、九文、十文づゝ、百の口を抜いておけや。

〈心中万年草〉

(245)a. 若い人のことなれば、後日の念に、ちよつと知らせておきますと、言ひおいて帰られた。

〈心中重井筒〉

b. この在所で、わしは島原の傾城が、請け出されて来てみると、庄屋にも誰にも言うておく。

〈大経師昔暦〉

(246) さりながら、いかにねんごろなればとて、先に断り立ておいて、使へば借るも同前。

〈冥土の飛脚〉

(247) そんなことに今まで歩いたことなけれども、てんぼの皮、行てのけう、その間に用意しておかんせ。

〈長町女腹切〉

(248) 何者とは眼をあけ、人ぢや、男ぢや、男といふもの見ておけ。うぬは何者、葉屋の彦介といふ男、見ておけ。

〈山崎与兵衛寿の門松〉

(249) 紙入れより金二十両取り出し、サア、金でした小判といふもの、近づきになつておけと、めつかうに投げつくる。

〈長町女腹切〉

(250)勘十郎殿さつきにから、切羽脛金する通り、銀渡したら御損であらう。断つておいたぞと、苦り切つてぞ申しける。

〈五十年忌歌念仏〉

(251)そのうちおたつが戻つたら、湯屋へ行つたと騙しておけ。かならず何にも吐かすなど。

〈心中重井筒〉

(252)若い人のことなれば、後日の念に、ちよつと知らせておきますと、言ひおいて帰られた。

〈心中重井筒〉

(253)「…武芸は侍の役珍しからぬ、茶の湯を上手になさるゝ故、人の用ひ奔走もある、小さい時から茶杓の持ちやう、茶巾さばきも習ふておきや、…」

〈鍵の権三重帷子〉

(254)「…扱も扱もあの茶屋めが、「七ツに、むかひをよこせ」と、いふて置たものを、今にむかいをよこさいで…」

〈遊子方言〉

(255)「…あの子の来ねへうち、おめへがたに話しておきてへ事がある。かならず笑つてくれちやア恨だぜ…」

〈傾城買二筋道〉

(256)はじめの程は、つれあひも合点にして、人の手にさはり、腰を叩く程の事は、余所見して置きしが、色ある男、毎日、一本一歩の扇、調へにくる人あり…

〈好色一代女〉

(257)その礼とて目腐り銀、樽代としてよこした。酒戻しはせぬもの故、まあ請け取つて置いたぢや。

〈山崎与兵衛寿の門松〉

(258)「実正の情心こそ放心とは仕ませんけれども、女房になるの仕様のといふくらゐのことは、口先でアイといつて置ますはネ。…」

〈春告鳥〉

次に、C 補助動詞的用法における C4 〈非難・自虐〉用法を挙げる。前述の通り、この C4 〈非難・自虐〉の用法は、中古日本語資料の「-おく」からその萌芽的な用例が観察されはじめ、中世日本語資料の、特に『虎明本狂言集』においてより典型的な用例が観察されはじめる用法である。以下の通り、近世日本語資料の「-おく」においても多くの用例が観察される。以下、用例を見られたい。

C4 〈非難・自虐〉

(259)「脇差忘れた、ちやつとちやつと、なんと伝兵衛、町人はこゝが心やすい、侍なれば、そのまゝ切腹するであろの。」「我ら預つておいて、とんと失念、小刀も揃うたと、渡せば、…」

〈心中天の網島〉

(260)「…少しも隔心様な事もせず、誠に私へ遠慮なく我儘をいふから、可愛がつておけば種々と兄をこまらせてならねへ。…」

〈春告鳥〉

(261)「ナニうそなもののか。只今灸をすへて呉ろと言て置て、灸点をおろしてあげやふといふと、脇へ逃るではないかへ。…」

〈春告鳥〉

(262)「…他に頼んで置て、サアといふと否だといふのは、則私を馬鹿にするのだけはネ…」

〈春告鳥〉

(263)「ハテ小便可くすねておいて何せうぞい。ありたけしたんで、のけたわいな…」

〈東海道中膝栗毛〉

(264)…そなたは我に阿弥陀經を教て善男子善女人といへといふておゐて今は又さういはぬとは一事兩様なる事をなとさんさんにからかひて表へ出ける時…

〈醒睡笑〉

(265)…經をひろけ同じ調子にあけ大旦那三蔵ほつしめかようない物をもてきてをゐて人に難儀をかくるはやといへとも人はきかんなんたけな

〈醒睡笑〉

(266)「…『顔が氣にいらぬ』と口舌仕懸けられ、かの男是非もなく『それが今日にみえましたか。何やかや貰うて置いてから、あまりむごい仕方でござる。いはしやれといはしやつたによつて、…』…」

〈好色一代男〉

(267)欲に目のあかぬ人、我おそしと取り急ぎ下しけるに、大分湊に積ませ置きて、「去年たばこは水にしめされ思はしからず。当年は湯か塩につけて見給へ」と、皆々つき返され…

〈日本永大蔵〉

最後に、D〈完遂〉用法を挙げる。D〈完遂〉用法は「当該の動作を最後まで行う」ことを表す。この場合、「後に続く事態を見越す」といった〈準備性〉は表出ししない。以下の通り、近世日本語資料の「-おく」におけるD〈完遂〉用法は、以下の(268)一例のみである。本稿において使用した上代日本語資料から近世日本語資料全体を通して、このD〈完遂〉用法の「-おく」

の用例は僅少である。以下、用例を見られたい。

D 〈完遂〉

(268) 手にかけて、殺しておいて行かんせな。放ちはやらじと泣きければ、

〔行くのなら手にかけて殺してから行きなさいな。決して放しはすまいと泣くと…〕

〈曾根崎心中〉

4.2 日本語の「-しまう(しまふ)」

本節では、近世日本語で観察される「-しまう(しまふ)」における V1 の特性及び V2「しまう(しまふ)」の意味用法を明らかにする。まず V1 の特性については、V2「しまう(しまふ)」に前接する V1 を表で提示した後、その形態的特徴及び「自他」といった動詞的性質について、実際の用例を挙げながら考察する。

4.2.1. 近世日本語の「-しまふ」

本節では、近世日本語において観察される「-しまう(しまふ)」における V1 の特性及び V2「しまう(しまふ)」の意味用法を明らかにする。まず V1 の特性については、V2「しまう(しまふ)」に前接する V1 を表で提示した後、その形態的特徴及び「自他」といった動詞的性質について、実際の用例を挙げながら考察する。

4.2.1.1. V1 の特性

以下の表 22 は、近世日本語資料において観察される「-しまう(しまふ)」の V1 を用例数とともに提示するものである。近世日本語資料全体における「-しまう(しまふ)」の異なり語数は 115、延べ語数は 201 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 23 で提示する通りである。以下、表 22 及び表 23 を見られたい。

表 22 近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」の V1

V1	浮世	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
洗ひ-							2		2
言(い、ひ)-			1	1					2
言うて-			2						2
行き-								1	1
いただきせて-		1							1
言って-						1	1		2
行って-							2		2
往て-					1				1
言ひも-			1						1
言はずに-				1					1
請けさせて-			1						1
歌うて-		2							2
歌(謡)ひ-		1					1		2
打ち出-							1		1
うっちゃって-							4		4
売って-			1						1
打って-					1				1
おっ潰して-							1		1
落ちて-							1		1
踊り-							2		2
思うて-			1						1
帰して-						1			1
帰って-						1			1
かかずに-						1			1
噛み砕いて-							1		1
聞いて-							1		1
消え失せて-			1						1
消えて-					1				1
着かへて-						2			2

切って-			1			1			2
切れて-				2					2
食(喰)はれて-							1		1
食(喰)ひ-		1					10		11
食(喰)(ふ、う)で-	1	2	1		1		11		16
食(喰)らって-							1		1
蹴放いて-			1						1
焦げて-							2		2
断はられて-						1			1
殺して-			1						1
刺して-		1							1
させて-	2								2
冷めて-							2		2
さらけ込んで-							2		2
さらけ出して-							1		1
騒ぎ-					1				1
仕立て-			1						1
して-	4					1	2		7
首尾して-	1								1
死んで-	1					4			5
捨てて-							1		1
吸ふて-							1		1
済んで-					1		2		3
ぜかして-					1				1
発って-							1		1
立て-						1			1
立てずに-		1							1
たふれ(倒)て-	1								1
ついて-							1		1
突き-	1						2		3
付けて-		1				1			2

届けて-			1						1
取っ(り)て-	2						1		3
取られて-							1		1
手扣いて-		1							1
出て-			1						1
突いて-							1		1
突出して-				1					1
流して-						1			1
流れて-							1		1
投げずに-			1						1
なって-						5	1		6
鳴り-		1							1
脱いで-						1			1
寝かして-						2			2
寝て-			1	1			1		3
乗って-						1			1
呑み-		1							1
呑んで-						1	8		9
入って-							2		2
吐いて-							1		1
入り-		1							1
掃出して-						1			1
始めて-		1							1
はたき-							1		1
鼻明いて-			1						1
はやって-					1				1
払って-							3		3
はり倒されて-					1				1
引て-						1	1		2
引き-				1					1
葺いて-							1		1

ぶち込んで-							1		1
ぶちまけて-							1		1
ぶっかけて-							1		1
ほかして-							1		1
放って-							1		1
曲げて-				1					1
見ずに-					1				1
見せて-		1							1
申し-		1							1
持てゐって-				1					1
貰って-						1			1
揉んで-							1		1
焼いて-			1						1
や(遣)って-			1			1	1		3
やって-					1				1
ゆきつかして-	1								1
結ひ-					1				1
緩めて-				1					1
読み-		1							1
読んで-	1								1
忘れて-					1	4			5
渡して-					1				1
わびて-	1								1
をれ(折)て-				1					1
合計	16	18	20	11	14	34	87	1	201

表 23 近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」の V1 の異なり語数および延べ語数

	浮世	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
異なり(延べ)	11(16)	16(18)	19(20)	10(11)	14(14)	22(34)	46(87)	1(1)	115(201)

次に、「-しまう(しまふ)」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 24 の通り示される。現代日本語において「-しまう」は「動詞連用形+テ+しまう」の構造で現れているといえるが、近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」には、V1 の形態として「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」のほか、「動詞連用形+しまう(しまふ)」の構造の用例が多数観察される。

中古日本語資料や中世日本語資料、そして近世日本語資料における「-おく」においても、以上のような「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」の形態的な混在が見られた。特に近世日本語資料における「-おく」には同一 V1 における両構造の間に機能分担の様相が見られたのは前述の通りであるが、近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」の場合も、以下の(269)と(270)のように、同一 V1 における両構造の間の機能分担の様相が観察される。

例えば、(269)において V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+しまう(しまふ)」構造の(269a)と(269a')が B1 〈動作終了〉用法として用いられているのに対し、V1 の形態が動詞連用形+テである「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」構造の(269b)と(269b')は C1 〈一掃〉用法として用いられているといえる。また、(270)においても(270a)の「くひしまふ」は B1 〈動作終了〉用法として用いられているのに対し、(270b)は C1 〈一掃〉用法として用いられている。ただ、(270c)のように同一文の中に「くつてしまふ」と「くひしまふ」が共起しており、両者間に用法の相違といった機能分担の様相が見られない用例もある。文体差に注目してみても、(269a)や(269a')が地の文に出現しているのに対し、(269b)や(269b')は会話文に出現している。

日本語の「-しまう(しまふ)」の場合は、中世日本語以前の資料において「-しまう(しまふ)」が観察されないため「-おく」のように形態的な変遷を辿ることはできない。しかし、「-おく」の V1 の形態における歴史的変遷と合わせて考えると、近世日本語の「-しまう(しまふ)」においても「動詞連用形+しまう(しまふ)」と「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」の間で機能分担が生じ、やがて補助動詞構造専用の構造として「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」が用いられはじめたといえるのではないだろうか。ただ、この点については、資料間の文体差、さらに同一資料内における文体差及び表記上のゆれ等、様々な要因を考慮しなければならないと思われる。以下、表 24 とその割合を示す表 25、及び近世日本語資料の「-しまう(しまふ)」において同一 V1 が「動詞連用形+しまう(しまふ)」構造と「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」構造の両方で出現している用例を挙げる。

表 24 近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」の V1 の形態

	浮世	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
動詞連用形	1(1)	8(8)	3(3)	3(3)	3(3)	2(2)	7(19)	1(1)	25(40)
動詞連用形+テ	10(15)	8(10)	16(17)	7(8)	11(11)	20(32)	39(68)	0(0)	90(161)

表 25 近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」の V1 の形態の割合

	浮世	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
動詞連用形	9.1% (6.3%)	50.0% (44.4%)	15.8% (15.0%)	30.0% (27.3%)	21.4% (21.4%)	9.1% (5.9%)	15.2% (21.8%)	100% (100%)	21.7% (19.9%)
動詞連用形+テ	90.9% (93.7%)	50.0% (55.6%)	84.2% (85.0%)	70.0% (72.7%)	78.6% (78.6%)	90.9% (94.1%)	84.8% (78.2%)	0% (0%)	78.3% (80.1%)

(269)a. 「…我らはもはや休みます」と我が事ばかり言ひしまひ奥に入りてぞ臥しにける。

〈卯月の潤色〉

a'. 「…ちよつと一筆請け取りして、出来た分くだされ」と言ひもしまはぬ半分聞き、三両三分に掴み付き…

〈心中方刃は氷の朔日〉

b. 「…人も連れず、着のまゝで、親の外聞構はぬ気か。言ふこと言うてしまうたら、きりきり戻りや、迎ひに来た」と後前もなく言ひ捨てけり。

〈薩摩歌〉

b'. 「オ、でかしやつた、言うてしまふは懺悔の一つ。罪を助かる種ともなる。…」

〈生玉心中〉

(270)a. 勝手よりおこしに來り、手水つかふやいな、膳をすゆるに、三人ともくひしまひ、丹波の人は、高野へと出ゆき、弥次郎兵衛喜多八は、…

〈東海道中膝栗毛〉

b. まんぢうをまたまた二十とりよせ、こんぴらへすゝめるやいなや、このたびは、なんのくもなく、たちまち二十くつてしまひ、…

〈東海道中膝栗毛〉

c. なづけのいれてありし、どんぶりをうちあけて、めしをもり、ぺろぺろとくつてしまひ、もつかいぼうへまはすと、これもしこたまよそつてくひしまひ…

〈東海道中膝栗毛〉

次に、「-しまう(しまふ)」における V1 の自他に注目してみると、表 26 の通り示される。日本語の「-おく」においては上代日本語資料から近世日本語資料にかけて V1 として他動詞をとる場合が圧倒多数を占めていたが、近世日本語資料で観察される「-しまう(しまふ)」に関しては、V1 として自動詞をとる場合が異なり語数 31、延べ語数 50 であり、「-しまう(しまふ)」全体に占める割合も 27.0%(25.0%)となっている。本動詞「しまう(しまふ)」自体は他動詞であり、

「-しまう(しまふ)」における A1〈終える〉用法の V2「しまう(しまふ)」は他動詞として用いられており、V1 としても他動詞をとるが、それ以外の B1〈動作終了〉用法や C 補助動詞的用法用法における C2〈遺憾〉用法等では、「-しまう(しまふ)」の意味において当該の動作に対する動作主体の意志性を必ずしも必要としないため、自動詞をも V1 として取り得ると思われる。以下、表 26 とその割合を示す表 27 を見られたい。

表 26 近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」の V1 の自他

	浮世	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
自動詞	2(2)	1(1)	4(4)	3(4)	6(6)	6(13)	13(19)	1(1)	31(50)
他動詞	9(14)	15(17)	15(16)	7(7)	8(8)	16(21)	33(68)	0(0)	84(151)

表 27 近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」の V1 の自他の割合

	浮世	西鶴	近松	洒落本	滑稽本	人情本	膝栗毛	醒睡笑	合計
自動詞	18.2% (11.8%)	6.3% (5.6%)	21.1% (20.0%)	30.0% (36.4%)	42.9% (42.9%)	27.3% (38.2%)	28.3% (22.1%)	100% (100%)	27.0% (25.0%)
他動詞	81.8% (88.2%)	93.7% (94.4%)	78.9% (80.0%)	70.0% (63.6%)	57.1% (57.1%)	72.7% (61.8%)	71.7% (77.9%)	0% (0%)	73.0% (75.0%)

4.2.1.2. 意味用法

次に、近世日本語資料において観察される「-しまう(しまふ)」の V2「しまう(しまふ)」の意味用法について考察する。3.3.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、近世日本語において「-しまう(しまふ)」の V2「しまう(しまふ)」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A1〈終える〉用法を挙げる。再掲するが、A1〈終える〉用法は「し終える。しとげる。しすます」という実質的な動作を表す。この場合、V2「しまう(しまふ)」は本動詞「しまう(しまふ)」の原義そのものを表している。以下の例を見られたい。

A1〈終える〉

(271)「犬がくらひつくでゆかれぬと、大切なお客衆が見えませいで、いかい商売のかいのござりますれば、ふびんな事なれど、一服させてしまひたうござります。」

〈野白内証鑑〉

(272)上方ははや歌うて仕舞ひぬる、春の山道はさんさなど、今になりてから引いて、踊りぶりをかしく、これは座にたまられず。

〈男色大鑑〉

次に、B1〈動作終了〉の用法を挙げる。再掲するが、これは「当該の動作の最終段階が行われる」ことを表す。この B1〈動作終了〉の場合、「・(しまう)しまふ」は前接する V1 の表す動作の最終段階が行われる、ということを表すため、V2 の意味の成立において V1 に対し依存的である。この場合、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、その機能は文法的である。よって、「・(しまう)しまふ」の V2「しまう(しまふ)」における補助動詞的な用法であるとはいえるが、本動詞「しまう(しまふ)」における「し終える。しとげる。しすます」のような実質的動作を表す語彙的意味が色濃く残存しているという点で、次に挙げる C 補助動詞的用法の用法とは異なっている。

以下の用例の通り、近世日本語資料において「・(しまう)しまふ」の V2「しまう(しまふ)」が B1〈動作終了〉用法で用いられている場合、「歌ひしまふ」や「言ひしまふ」、「食ひしまふ」のように V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+しまふ」の構造で出現している場合が多い。

この「・(しまう)しまふ」における B1〈動作終了〉の場合も、日本語の「・おく」における B 複合動詞的用法の B1〈結果物残存〉のように、V-V 構造が語彙的複合動詞のように形態的に緊密化し、一語のように一体化していたか否かについては検討の余地がある。V2 の意味の成立において V1 に対し依存的であり、この場合の V2「しまう(しまふ)」は対象物となる補語をとらないのは前述の通りである。また、V2「おく」が B1〈結果物残存〉用法として用いられている「・おく」のように V1 の形態が動詞連用形であるものがほとんどである。しかし、(274)のように「言ひしまふ」に対し「申ししまふ」といった V1 として謙譲語形をとる用例や、(277)の「言ひもしまはぬ」のように V1 と V2「しまう(しまふ)」の間に係助詞「も」を介在させる用例も観察されるため、V1 と V2「しまう(しまふ)」の間の形態的な緊密性はそれ程高いとはいえず、B1〈結果物残存〉の「・おく」のように一語化していたとは考えづらい。以下、用例を見られたい。

B1〈動作終了〉

(273)「今宵かもしれず」と待侘びて、臂を枕にすこし夢むすびけるに、建仁寺の陀羅尼つきしまふ時分に、表に人のおとなひ。

〈野白内証鑑〉

(274)さてもさても長事をさはりなく申ししまへば、浮気男ども思ひにむすび付けし中に、…

〈男色大鑑〉

(275)一人は荒木与次兵衛が追出し太鼓の鳴りしまふまで、田舎らしき人に気を付け、…

〈武家義理物語〉

(276)「…我らはもはや休みます」と我が事ばかり言ひしまひ奥に入りてぞ臥しにける。

〈卯月の潤色〉

(277)「…ちよつと一筆請け取りして、出来た分くござれ」と言ひもしまはぬ半分聞き、三两三分に掴み付き…

〈心中方刃は氷の朔日〉

(278)「いやいやいや、人の譏りも、身の恥辱も、思うてしまうて上のこと。よし御承引なきからは、こなたとこゝで刺し違へ…」

〈堀川波鼓〉

(279)わけもなく、理屈もなく、人の気にさわるもしらず、われおもしろの人かしまし。さわぎしまへば、いびきゴウゴウ。

〈酩酊気質〉

(280)此内三人ともあしをあらひしまいすぐにおくへとほる

〈東海道中膝栗毛〉

(281)「わしがおどりしまつた所で、おめへのつむりをちよいとなでよふから、それをきつけに、やんやアとほめてくんな。」

〈東海道中膝栗毛〉

(282)「そのかはり、わしもほめてがなけらにや、はりあいがない。うたひしまつたら、だんなほめて下さるかな…」

〈東海道中膝栗毛〉

(283)弥次郎、かの一ぱいのめしをくひしまひて、ちやわんをやつかいのかたへさすと…

〈東海道中膝栗毛〉

(284)勝手よりおこしに來り、手水つかふやいな、膳をすゆるに、三人ともくひしまひ、丹波の人は、高野へと出ゆき、弥次郎兵衛喜多八は、…

〈東海道中膝栗毛〉

(285)あとふりかへりふりかへり神前にいたり見るに、富つきしまひて、第一ばんより、だんだんと、あたりふだのばんづけ、いちいちしるして、…

〈東海道中膝栗毛〉

次に、C 補助動詞的用法における C1〈一掃〉用法を挙げる。前述の通り、C1〈一掃〉用法は「負担感を一掃するように当該の動作が行われる」ことを表す。

この C1〈一掃〉は、〈不可逆性〉を「①もう元の状態には戻らない、後には戻らない」という勢いとして積極的に捉える用法であり、「もう後には戻らないという勢いで、積極的、意欲的に当該の動作を行う」ということを表す。当該の動作の結果、爽快感を伴う場合もあり、そのような意味において結果状態に対する話し手(視点者)の評価(プラスの評価)が表出している場合もあるが、結果状態に対する評価よりも当該の動作そのものの勢いや積極性が主に捉えられている場合が多い。

この C1〈一掃〉用法の場合も、V2「しまう(しまふ)」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それを含む構文において V2「しまう(しまふ)」は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「しまう(しまふ)」が表すような実質的動作等を表しているともいえない。したがって、V2「しまう(しまふ)」の補助動詞的用法であると認めることができる。

以下の用例を見てもわかるように、補助動詞的用法の一つである C1〈一掃〉用法の「-しまう(しまふ)」は「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」構造で用いられており、「-おく」の場合と同様、「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」が補助動詞構造専用の構造として使用されている様相が窺える。以下、用例を見られたい。

C1〈一掃〉

(286)…三五の十八、焼物のあたま数読みて、膳出し前に下し膾の子もなくあへて、「先のしれぬ三軒屋より、ここでくうて仕舞へ」と、…

〈好色一代女〉

(287)梅川殿へも吹き込んで、此方から挨拶切り。島屋の客にさらりつと請けさせてしまひたい。

〈冥土の飛脚〉

(288)「…父様も留守なり、これも仕立ててしまひたし。今日は連れになりますまい。よう拝んでや」と、言ひければ…

〈卯月の紅葉〉

(289)「オ、でかしやつた、言うてしまふは懺悔の一つ。罪を助かる種ともなる。」

〈生玉心中〉

(290)煙草盆に切炭いけて、膳立てをして、椀拭いて、お給仕に差し合はう、「夕飯早う食てしまや」と、一口に千色ほど…

〈大経師昔暦〉

(291)「よごしますとわるふございますから、はやく着かへて仕舞ひませう。しはになりそふで心配でなりません」ト立をとどめて…

〈春告鳥〉

(292)「おれを呼たがつても其方へは往れないから、モウさつぱりとおれが事はあきらめろ、と言て仕まつてくれさツしやれば、また私も覚悟の仕様もありますのに、…」

〈春告鳥〉

(293)「サアサアこの元気で仏を桶へさらけこんでしまをふ。」

〈東海道中膝栗毛〉

(294)「コレしやれずと、もふいつぺん湯へ這入つてきや。そのうちに、みなおれがのんでしまはア」

〈東海道中膝栗毛〉

(295)「エ、めんどうな、はらつてしまつたがい。手めへのするこたア、なんでもおさまらねへ。あしもとのあかるいうち、はらつてしまや」

〈東海道中膝栗毛〉

(296)「コレコレ、おめへとんだことをする。それをふところへいれておくと、又はひ出ますは。うみへうつちやつてしまひなせへ…」

〈東海道中膝栗毛〉

次に、C 補助動詞的用法における C2〈遺憾〉用法を挙げる。前述の通り、C2〈遺憾〉用法は「当該の動作が意図的に、あるいは話し手のコントロール不可能な状況下で行われるか、同様の状況下で当該の変化や出来事が生じた結果、話し手が残念な気持ちになる」ことを表す。

この C2〈遺憾〉は、〈不可逆性〉を「②もう戻りたくても元の状態には戻れない、後戻りできない」という取り返しのつかなさとして消極的に捉える用法である。したがって、この C2〈遺憾〉用法の V2「しまう(しまふ)」は「当該の動作を行った結果、あるいは当該の変化や出来事が生じた結果、もう後には戻れず、取り返しのつかない事態になる」ということを表す。話し手が動作主体で意図的に当該の動作を行ったのであれば後悔の念を伴い、意図的ではなくコントロール不可能な状況下で行われた場合、あるいは話し手のコントロール不可能な状況下で当該の変化や出来事が生じた場合は、残念な気持ちを伴う。発話時以降に当該の動作を行う場合や、変化及び出来事が起こることを予期する場合は、憂慮や不安感を伴う。したがって、C2〈遺憾〉の場合は、結果状態に対する話し手(視点者)の評価(マイナスの評価)が顕著に表出するといえる。

この C2〈遺憾〉用法の場合も、V2「しまう(しまふ)」の意味の成立において V1 に対し依存

的であり、それを含む構文において V2「しまう(しまふ)」は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「しまう(しまふ)」が表すような実質的動作等を表しているともいえない。したがって、V2「しまう(しまふ)」の補助動詞的用法であると認めることができる。

以下の用例を見てもわかるように、C2〈遺憾〉用法の「-しまう(しまふ)」も「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」構造で用いられており、「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」が補助動詞構造専用の構造として使用されている様相を映し出しているといえる。以下、用例を見られたい。

C2〈遺憾〉

(297)「…命危なしと聞き及びしが、いかう重いか、但し無常の夕霧と、消え失せてしまうたか…」

〈夕霧阿波鳴渡〉

(298)「ハアこなたもよつぼどのこと言うたがよい。こゝからなんぼあると思はしやる、一里半ござる。そのうちに、船は出てしまふ。上げることはなりませぬと、…」

〈鍵の権三重帷子〉

(299)「読る坊さまによんでもらつた所が、又忘れてしまふゆゑ、孫や彦のこちとら組は、先祖の戒名をおぼえずに暮して、…」

〈浮世床〉

(300)「心を見ぬかれて、いゝよふにじらされるやら、なぐさまれるやらしても、則此様に馬鹿の様になつてしまつて、ほんに私きやア、なぜ此様にくだらなくなつたらうと、…」

〈春告鳥〉

(301)「ヲヤヲヤ私しやア先かも知れなひが、モウ前に断はられてしまつたのだけはネ。…」

〈春告鳥〉

(302)「お前さんも私も思ひがけなひ夏で別れ別れになつて仕まつて、モウ兎ても再度お目にかゝる事は出来なひのかと思つて居りましたのに、…」

〈春告鳥〉

(303)「ヲイヲイ、それは今朝のお薬か」「ヘイ昨日のはお辰どんが流して仕舞ました」

〈春告鳥〉

(304)「たばこぼんへ火をいれたらこげてしまはア。たばこ盆の中にある、火入のうちへ、火をいれてこいといふもんだ…」

〈東海道中膝栗毛〉

(305)「そのみしろを、きんにようのがんげに、畑で湯につつばおるとつて、ひん脱でおいたら、聞きやれ、だいじのきものを、がらゝおまにくはれてしまつたア。いまましい…」

〈東海道中膝栗毛〉

(306)「ハテがつてんのいかぬ。アノやらうが風呂敷包も笠もねへ。大かたおいらが寝てゐる内、たつてしまつたと見へる…」

〈東海道中膝栗毛〉

(307)「私ども右の泥房にあいまして、さつぱり路用はとられてしまいましたから、大きに難儀をいたします。…」

〈東海道中膝栗毛〉

(308)「それでも、ナニおればかりかぶるもんだ。いまましい。せつかく酔た酒が、みんなさめてしまつた…」

〈東海道中膝栗毛〉

(309)「ヤレゑらいおとがせるとおもふた。道理こそコリヤ地藏さまのねきにまで、箱どもがとびちつておるが。ヤア、お鼻がぶっかけてしもふた…」

〈東海道中膝栗毛〉

最後に、C3〈無意識〉用法を挙げる。前述の通り、C3〈無意識〉用法は「当該の動作が話し手のコントロール不可能な状況下で無意識的に行われたり、話し手が意識しないうちに当該の変化や出来事が生じる」ことを表す。

このC3〈無意識〉は、〈不可逆性〉を「③気づいたら後戻りできない状態になっている」という状況として捉える。したがって、このC3〈無意識〉用法のV2「しまう(しまふ)」は「話し手の知らない間に当該の動作や変化、出来事といった事態が生じており、気づいたら後戻りできない状態になっている」ということを表す。動作主体の意図性が希薄という点でC2〈遺憾〉と近接しているが、結果状態に対する話し手(視点者)の評価が無いかあるいは希薄であるという点で、C2〈遺憾〉とは異なる。以下の用例を見られたい。

C3〈無意識〉

(310)乗合のことだから、まゝのかはとそれなりに、くたびれまぎれに、ツイねてしまひやして、…

〈東海道中膝栗毛〉

(311)「おらア、ついのんでしまつた。いめへましい。サアいかふ…」

〈東海道中膝栗毛〉

第5章 韓国語の場合

本章では、15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語にかけて観察される「-twuta」、「-nohta」と「-pAlita」における V1 の特性及び V2 の意味用法を、時代別に考察する。

5.1 韓国語の「-twuta」

本節では、15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語にかけて観察される「-twuta」における V1 の特性及び V2「twuta」の意味用法を明らかにする。まず V1 の特性については、V2「twuta」に前接する V1 を表で提示した後、その形態的特徴及び「自他」といった動詞的性質について、実際の用例を挙げながら考察する。

5.1.1. 15 世紀中世韓国語の「-twuta」

まず、15 世紀中世韓国語資料において観察される「-twuta」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-twuta」における V2「twuta」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.1.1.1. V1 の特性

以下の表 1 は、15 世紀中世韓国語資料において観察される「-twuta」の V1 を用例数とともに提示するものである。15 世紀中世韓国語資料全体における「-twuta」の異なり語数は 52、延べ語数は 90 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 2 で提示する通りである。以下、表 1 と表 2 を見られたい。

表 1 15 世紀中世韓国語資料における「-twuta」の V1

V1	日本語訳	釈譜	月印	楞嚴	圓覺	金剛	杜詩	三綱	南明	合計
ㄹ리와-	選ぶ、分つ						1			1
ㄹ초아- (ㄹ초와-)	揃える	1	3			1	2			7
갓추어-	揃える				1					1
뺨ㄷ바-	突き刺す		1							1
兼ㄹ야-	兼ねる			1			1			2
救ㄹ야-	救う							1		1
그슴ㄹ야-	限定する			1						1
기러-	汲む		1							1
記録ㄹ야-	記録する					1				1
나하-	産む	1								1
녀히-	入れる	1	1							2
노하-	置く、放つ	1	1						1	3
ㄷ라-	懸ける		1							1
다가-	持つ		1							1
다마-	盛る		1							1
더더-	投げる、放る					1		1		2
동여-	縛る		2							2
두퍼-	覆う		1							1
드려-	入れる		2		1					3
디키편-	守らせる							1		1
미야-	縛る		1				1	2		4
밍ㄹ라-	作る	1	3				1		1	6
머겨-	飲ませる		1							1
머믄-	留める						3			3
모도아-	蓄える	1	1							2
뫼호아-(뫼화-)	集める	1	1				1			3
무더-	埋める		1							1
부려-	捨てる			1					2	3

버려-	設ける						1			1
브터-	付ける						1			1
殯所ᄃ야-	喪屋を作る							1		1
사거-	刻む							1		1
사마-	～にする		1					2		3
싸하-	積む		1							1
살아-	生かす	1								1
세여-	建てる								1	1
어더-	得る						1			1
여저-	載せる	2								2
연자-	載せる	1								1
옮겨-	移す		1							1
容納ᄃ야-	受入れる						1			1
일워-	成す						2			2
좁거-	閉ざす	1								1
자바-	捕まえる						1			1
자퍼-	守る		1							1
딱ᄃ야-	合わせる						1			1
接히여-	接待させる							1		1
定ᄃ야-	定める	1								1
조처-	合わせる		1							1
準備ᄃ야-	準備する	2								2
지서-	作る		1				1			2
ᄃ야-	する		2					1		3
히여-	させる						1			1
合計		15	31	3	2	3	20	11	5	90

表2 15世紀中世韓国語資料における「-twuta」のV1の異なり語数および延べ語数

	釈譜	月印	巖	円覚	金剛	杜詩	三綱	南明	合計
異なり(延べ)	13(15)	24(31)	3(3)	2(2)	3(3)	16(20)	9(11)	4(5)	53(90)

次に、「-twuta」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 3 の通り示される。「-twuta」の V1 の形態として、「動詞語幹+twuta」のものは観察されず、すべて「動詞語幹+・e +twuta」である。

Ko(2010)では、中世韓国語の「V-V」構造を含む動詞合成法について以下の(1)のように分類している。

(1) Ko(2010)による中世韓国語の動詞合成法分類

ア. 名詞+動詞

- ① 主語+述語
- ② 目的語+述語
- ③ 副詞語+述語

イ. 動詞+連結語尾+動詞

- ① 動詞+従属的連結語尾「-a/-e」+動詞

例) 도라오다(tol-a-o-ta, 帰ってくる), 도라보다(tol-a-po-ta, 振り返る), 니러셔다(nil-e-sye-ta, 立ち上がる), 살아잡다(sal-a-cap-ta, 生け捕る)…

- ② 本動詞+補助動詞

ウ. 副詞+述語

エ. 非統辞的合成動詞

- ① 対等的合成動詞

例) 나들다(na-tul-ta, 出入りする), 듣보다(tut-po-ta, 見聞きする), 여위시들다(yewyi-sitwul-ta, 痩せ萎れる)…

- ② 従属的合成動詞

例) 거두들다(ketwu-tul-ta, 取り上げる), 딛먹다(til-mek-ta, つけて食べる, 啄む), 밭먹다(pil-mek-ta, 乞食をする), 잡쥐다(cap-cwyi-ta, 掴んで握る)…

Ko(2010:194-195)

これらのうち、「V-V」構造のものはイとエであり、前者は「動詞語幹+・e +動詞」を含む「動詞+連結語尾+動詞」構造であり、後者は「動詞語幹+動詞」構造である。

現代韓国語において、以上の(1)でエ①に属すものは、「나들다(na-twul-ta, 出入りする)」等のように現代韓国語においても同一の構造で用いられているものもあれば、「듣보다(twut-po-ta, 見聞きする)」や「여위시들다(yewyi-sitwul-ta, 痩せ萎れる)」等のように「듣고 보다(twu-ko po-ta, 聞いて見る)」、「여위고 시들다(yewyi-ko sitwul-ta, 痩せて萎れる)」といった句でなけ

ればならないものもある。またエ②に属すものにおいても、中世韓国語と同一の構造で用いられるものもあれば、「거두들다(ketwu-twul-ta, 取り上げる)」や「빌먹다(pil-mek-ta, 乞食をする)」のように「거두어 들다(kwtwu-e-twul-ta)」や「빌어먹다(pil-e-mek-ta)」といった「動詞語幹+連結語尾+動詞」構造として現れるようになったものもあるという。

Han(1999)では、以上のような韓国語の「V-V」構造における形態的な分化に関し、「빌먹다(pil-mek-ta)」と「빌어먹다(pil-e-mek-ta)」を例に挙げながら、中世韓国語における「動詞語幹+動詞」構造の「빌먹다(pil-mek-ta)」の多義性を解消するために、「pil-mek-ta : 乞食, 求乞」、「pil-e-mek-ta : 乞食」といった形態的な分化が生じたと分析している。

ただ、以下の表 3 を見てもわかるように、中世韓国語における「-twuta」においては当時から「動詞語幹+ -e +動詞」の構造で出現しており、「빌먹다(pil-mek-ta)」と「빌어먹다(pil-e-mek-ta)」のような形態的な分化による機能分担は生じていなかったと思われる。以下、表 3 を見られたい。

表 3 15 世紀中世韓国語資料における「-twuta」の V1 の形態

	釈譜	月印	嚴	円覚	金剛	杜詩	三綱	南明	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+e	13(15)	24(31)	3(3)	2(2)	3(3)	16(20)	9(11)	4(5)	53(90)

次に、「-twuta」における V1 の自他に注目してみると、表 4 の通り示される。本稿において使用した 15 世紀中世韓国語資料の「-twuta」において、「自動詞+twuta」のものは一例も観察されず、すべて「他動詞+twuta」であった。

上代日本語から近世日本語資料で観察された「-おく」において、「他動詞+おく」のように V1 として他動詞をとる用例が圧倒多数を占めていることを考慮すると、15 世紀中世韓国語の「-twuta」においても他動性調和の原則のような制約が働いていた可能性が考えられる。Jeong(2006)でも、15 世紀中世韓国語のみならず現代韓国語の「-twuta」においても V1 に他動詞しかとらないことを指摘しており、「-twuta」の文法化がまだ途上であるとの見解を示している。以下、表 4 を見られたい。

表 4 15 世紀中世韓国語資料における「-twuta」の V1 の自他

	釈譜	月印	嚴	円覚	金剛	杜詩	三綱	南明	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	13(15)	24(31)	3(3)	2(2)	3(3)	16(20)	9(11)	4(5)	53(90)

5.1.1.2. 意味用法

次に、15 世紀中世韓国語資料において観察される「-twuta」の V2「twuta」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、15 世紀中世韓国語において V2「twuta」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A2〈置く〉用法を挙げる。再掲するが、A2〈置く〉用法は「事物に、ある位置を占めさせる」という実質的な動作を表すものである。これは、日本語の本動詞「置く」と同様、本動詞「twuta」の持つ原義そのものである。この A2〈置く〉用法の V2「twuta」には(5)と(6)のように、原典において「置」を対応漢字としている用例も観察される。原典の対応漢字については、動かぬ証拠というよりはあくまで参考程度に留めておくべきではあるが、「-twuta」における V2「twuta」の解釈を支える根拠の一つになると考えられる。以下、用例を見られたい。

A 本動詞的用法

(2)倉은 갈물씨니 나들 갈물씨라 庫는 천량 꺄초아 뒷는 지비라

〔…庫は財物を揃えて置く建物である〕

〈積譜詳節 9:20a〉

(3)庫는 천량 꺄초아 뒷는 지비라

〔庫は財物を揃えて置く建物である〕

〈月印積譜 9:38a〉

(4)庫藏은 천량 꺄초아 뒷는 庫 | 라

〔庫は財物を揃えて置く建物である〕

〈月印積譜 22:28a〉

(5)世尊이 大衆들히게 니르샤디 이제 文殊의게 付囑하야 戒壇上에 두어 三年 디내야 東南角에 옮겨 두어 三十 年을 디내야 이 히 디난 後에 西印度 頻伽羅山頂 光明池 南에 옮겨 住케 하노니

〈經三年已移置東南角〉

〔…今は文殊に付嘱し、戒壇の上に置き、三年経ったら東南の角に(函と塔を)移し置き、そこで三十年を過ごし、…〕

〈月印積譜 25:47b〉

(6)牟尼佛도 내게 조고맷 爪髮을 施하사 塔中에 조쳐 뒹습다가 世尊 涅槃 後에 塔中으로서
내야 이 閻浮提와 大千界에 니르리 곧고대 衣塔을 流布하야 後々 遺法을 鎮호리이다
〈牟尼佛施我少爪髮 並置塔中〉

〔牟尼仏も私たちに爪と髪を少し布施してください。塔中に並べて置き、世尊が涅槃の後に塔
中から出し…〕

〈月印釈譜 25:54a〉

以下からは、「-twuta」における V2 「twuta」の補助動詞的用法となる。

まず、15 世紀中世韓国語の「-twuta」の V2 「twuta」において、C 補助動詞的用法における C2 〈結果維持〉用法が観察される。再掲するが、C2 〈結果維持〉用法は「当該の動作の結果生じた直接的な結果状態を維持する」ことを表す。

C2 〈結果維持〉用法の「-twuta」は、V1 の表す〈動作の完成性〉と同時に、その結果生じる〈結果の継続性〉を表すため、V2 「twuta」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「twuta」が表すような実質的動作等を表していないという点を特徴とする。したがって、V2 「twuta」の機能は文法的であり、C2 〈結果維持〉用法の V2 「twuta」を補助動詞として認定することができる。

日本語の V2 「おく」における C2 〈結果維持〉用法と同様、韓国語の V2 「twuta」の場合も、動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのが特徴であり、その動作の結果生じる結果の維持に対する〈意図性〉の有無によって〈準備性〉が顕著な〈保持〉的な用法とそれが希薄な〈放置〉的な用法に分かれる。

以下、15 世紀中世韓国語資料で観察される「-twuta」の V2 「twuta」が C2 〈結果維持〉用法として用いられている用例である。

C2 〈結果維持〉

(7)耶輸 | 그 기별 드르시고 羅睺羅 더브리 노즌 樓 우히 오르시고 門들을 다 구디 조
겨뒹더시니…

〔耶輸はその話をお聞きになり、羅睺羅を連れて高い楼の上に登り、門を全て固く閉ざしてお
かれたので、…〕

〈釈譜詳節 6:2b〉

(14)山 자히 보고 太子를 셔스바 怒흔 쁘데 미야 뒷더니 婆羅門이 너교디 나를 주끓가 ㅎ야
거죽말로 글어 노히니…

〔獵師が太子を見て馴染がないと思い、怒って縛り付けておいたが、婆羅門が自分を殺すの
ではないかと思い、嘘をついて解き放ってもらい…〕

〈月印釈譜 20:46b〉

(15)羊을 미야 들오 모골 뺨어 더븐 피 바드며 도톨 동여 두고 매로 티니 물븐 소리 굿디
아니 ㅎ엿거든…

〔羊を縛って吊るし、首を切って温かい血を受け、豚を縛っておき、鞭で打つと、悲鳴が途絶
えることがなかった…〕

〈月印釈譜 23:73a〉

(16)羊을 들오 목 뺨어 더븐 피 바드며 도톨 동여 두고 매로 티며 글넌 가마애 오로 녀허
데티니…

〔羊を吊るして、首を切って温かい血を受け、豚を縛っておき、鞭で打ち、煮えたぎった釜に
丸ごと入れて煮るので、…〕

〈月印釈譜 23:75a〉

(17)阿菟樓陀 大臣이 阿育王像 밍ᄇ라 나모 象티와 東門 밍ᄇ리 두고 쏘 니 업슨 불 군 밍ᄇ
라 두퍼 두고 널오디 王곳 ㄷ외오져 커든 阿育이 東門이 잇ᄇ니 가 티라 ㅎ야닐 東門의
가니 불 구데 라지여 주그니라

〈又作無烟火坑以物覆之〉

〔阿菟樓陀大臣は阿育王像を作り、木の象に乗せ、東門の外に置き、また煙の出ない火の坑を
作り、(覆いを)被せておき、「王になりたいのなら、阿育は東門にいるから、行って撃て」と
言った。修師摩王子は東門に行き、火の坑に落ちて死んだ〕

〈月印釈譜 25:74a〉

(18)性이 空흔 眞實스 覺이 法界에 周徧커늘 ㅎ 번 迷惑ᄇ야 識 사물씨 이런ᄇ로 妄흔 몸
안해 그슴ᄇ야 두미 餅스 가온딛 虛空 곧ᄇ니라

〈…故局在妄身之内…〉

〔…故に虚妄な身の中に限定しておくことは、瓶の中の虚空と同じである〕

〈楞嚴經諺解 2:121a〉

(19)빋난 구루문 蕭史ㅣ 머므렛고 글월 字ᄇ 魯恭이 머글워두도다

〈綵雲蕭史駐文字魯恭留〉

〔彩雲は蕭史が留め、文字は魯恭が留めておくのだ〕

〈杜詩諺解 9:41a〉

(20)祿山이大怒하야 履謙이 조쳐 밌야 두고 쓰드니 두 사르미 죽도록 구지조물 이베 그치디 아니하더니 顔氏 주그니 설흔나몬 사르미러라

〈…縛而吊之. …〉

〔祿山が怒り、履謙とともに縛っておき、…〕

〈三綱行実図 忠臣 13b〉

(21)崔氏 닐오디 나논 士大夫스 리오 僕射스 겨지비로니 오늘 죽디비 현마 도즈기 겨집 아니 드외요리라 하야닐 한 도즈기 오술 믅티고 平床 우히 밌야 두고 어루려 커늘 崔氏 두리여 소겨 닐오디 히미 하마 屈하니 혼 樣으로 드루리라 하야닐…

〈…群賊毀裂其衣. 縛於牀簀之上將陵之…〉

〔…多くの盗賊たちが服を裂き、寝台の上に縛っておき、襲おうとしたので、…〕

〈三綱行実図 烈女 13a〉

(22)趙氏 每常 울며 구지저 죽가지라 커늘 도즈기 樣子를 스랑하야 주기디 아니하고 사름 여러를 디킴 뒷거늘 趙氏 버서 나디 몬흠 들 알오 소겨 닐오디…

〈…賊愛其色不殺. 多使人守之. …〉

〔…盗賊がその容姿を愛して殺さずに、数名の人に守らせておいたので、趙氏は抜け出せないと思って、騙して言った…〕

〈三綱行実図 烈女 17a〉

(23)그러나 이 몸이 相은 緣을 만나면 곧 現하고 緣이 다오면 곧 숨느니 더 報身 化身이 수므며 現호믄란 더더 두고 괴외흔 光明 眞實스 모몬 상네 몰ㄴ시며…

〈任它報化이 隱現하고 寂光眞身은 常湛湛하며…〉

〔しかし、この身とこの相は縁と遇うと忽ち現れ、縁が尽きると忽ち隠れるので、あの報身化身が隠れ現れるということは任せておいて、静かな光明の眞実の身は常に清らかで、…〕

〈金剛經三家解 2:25a〉

(24)絳山이 닐오디 사르미 各各 님금을 섬기느니 츠마 님금 ㅅㅅ을 士卒 훈가지로 더더 두리여 내 님금 묻조븐 後에사 寸寸이 사하라도 죽디 아니하애라

〈忍使暴露遺骸. 與士卒等邪.〉

〔…どうして王の骨を兵卒と一緒に放っておくことができようか…〕

〈三綱行実図 忠臣 27b〉

次に挙げる用例は、以上のような C2〈結果維持〉用法であると考えられるものの、同じく C補助動詞的用法における C3〈事前処置〉用法と中間的であると考えられる用例である。C3〈事前処置〉用法は「後に続く事態を見越して、当該の動作を行う」ことを表し、文脈に依存した

間接的な結果が、後に続く事態への〈効力〉として捉えられる。しかし、以下の(25)から(29)のような 15 世紀中世韓国語における「-twuta」の用例の V2「twuta」は、以上の C3〈事前処置〉のように、文脈に依存した間接的な結果が後の事態への〈効力〉として継続していることを表出すると同時に、C2〈結果維持〉のように直接的で具体的な結果状態を意図的に持続させていることをも表出するというように、〈結果の継続性〉のあり方が中間的であるという特徴を持つ。つまり、C3〈事前処置〉用法のように〈結果の継続性〉が〈効力〉として抽象化していると解釈することも可能であるが、依然として C2〈結果維持〉用法の「-twuta」の用例群のように〈結果の継続性〉において直接性及び具体性を備えており、その直接的かつ具体的な結果状態を意図的に維持するという意味が顕著に表出しているということである。

以下の(25)から(29)のような用例が以上のように解釈されるのは、本動詞「twuta」のもつ語彙的意味が影響しているものと考えられる。韓国語の本動詞「twuta」は「事物に、ある位置を占めさせる」ことを表す。しかし、そのような語彙的意味において、他の日本語の「置く」や韓国語の「nohta」とは異なり、事物をある位置に接触させることよりも、その後に事物をその位置に継続して占めさせることに重点がある。つまり、〈動作の完成性〉のみならずその動作の結果生じた直接的な〈結果の継続性〉により焦点が置かれているということである。したがって、「-twuta」の V2「twuta」においても以上のような本動詞「twuta」の語彙的意味が色濃く残存し、C3〈事前処置〉用法に近接する用例であっても、直接的な〈結果の継続性〉が依然として顕著に現れてくるものと思われる。

したがって、本稿では以下の(25)から(29)のように、C3〈事前処置〉用法としては典型的とはいえ、C2〈結果維持〉用法と中間的な用法であると判断される用例を C2'〈結果維持〉用法として区別し、提示することとする。以下、用例を見られたい。

C2'〈結果維持〉

(25)그 떡 王이 껌것 위하야 차바닐 만히 準備하야 뒀더니 그 상재 그런 한 차바닐 즉자히 다 먹고…

〈…王大設供…〉

〔その時、王は鬼神のためにご馳走を準備しておいたので、その沙弥は鬼神に出されたご馳走をその場で全部食べ、…〕

〈釈譜詳節 24:22b〉

(26)그저그 王이 金銀 瑠璃 玻璃로 네 가짓 도굴 밍궤라 香乳와 香湯을 담고 種種 음담과 보비엿 幢幡蓋와 花香 풍류를 ㄴ초 準備하야 두고 齋戒하야

〈…持種種飲食…〉

〔その時王は、金銀、瑠璃、玻璃で四種の甕を作り、香乳と香湯を入れ、種々の食べ物と宝物の幢、幡、蓋と花、香、音楽を準備しておき、齋戒し、…〕

〈釈譜詳節 24:42b〉

(27)브텃 굴근 弟子들이 이제 다 잇디 아니하고 如来 호오사 겨시니 王이 사름 브려 請호 쇼서 宮城에 드르시면 五百 ㄴ장 모던 黑象을 술 머겨 뒀다가 불박 주교리이다

〔「…如来が宮城にお入りになったら、五百頭の最も乱暴な黒象に酒を飲ませておき、踏み殺させましょう」〕

〈月印釈譜 22:71b〉

(28)...내 아드리 僧齋에 쓰고라 혼 도늬로 도티며 羊이며 거유 올히며 ㄹ 가히를 만히 사 오라 하야 ㄹ히 처 술찌그 하야 두고 羊을 미야 ㄹ오 모굴 ㄹ어 더븐 피 바드며...

〔「…私の息子が僧齋に使えといったお金で豚や羊、…などを沢山買ってこい」と言い、上手に育て肥えるようにしておき、羊を縛って吊るし、首を切って温かい血を受け、…〕

〈月印釈譜 23:73a〉

(29)ㄴ 외야 브라운 일 업거다 호고 ㅈ조 갈호로 주구려 커늘 집 사르미 놀라야 救하야 뒀더니 居喪 ㄴ차늘 아스미며 아로리 ㄹ히 다 스을 가지고 墓에 禮로 祭호고 모다 스을 머구려 호거늘 王氏 불써 남기 목 미여 주그니라

〈…家人驚救得免. …〉

〔…家人らは驚いて助けておいたが、喪に服すのを終え、親戚や知り合いらが皆酒を持って墓に礼儀として祭祀を行い、集まって酒を飲もうとしたところ、王氏がすでに木に首をくくって死んでいた〕

〈三綱行実図 烈女 26b〉

5.1.2. 16 世紀中世韓国語の「-twuta」

次に、16 世紀中世韓国語資料において観察される「-twuta」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-twuta」における V2 「twuta」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.1.2.1. V1 の特性

以下の表 5 は、16 世紀中世韓国語資料において観察される「-twuta」の V1 を用例数とともに提示するものである。16 世紀中世韓国語資料全体における「-twuta」の異なり語数は 46、延べ語数は 98 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 6 で提示する通りである。以下、表 5 と表 6 を見られたい。

表 5 16 世紀中世韓国語資料における「-twuta」の V1

		續三	翻朴	翻老	呂氏	重三	重續	翻小	小診	分門	順川	合計
금초아-	隠す								1			1
구향야-	救う					1						1
꾸며-	飾る							1				1
그려(글여)-	描く	2					3					5
내여-	出す										1	1
녀허-	入れる			1				1		3		5
노하-	置く、放つ		1	2								3
누겨-	和らげる、許す										1	1
니저-	忘れる										1	1
니퍼-	着せる										1	1
드마-	浸ける、浸す										2	2
듬가-	浸ける、浸す		1									1
다마-	盛る、込める							1				1
더덕-	投げる、放る			1		1					7	9
더러-	分け出す										1	1
떠디워-	落とす		1									1
더거-	書く			1								1
드려-	入れる										1	1

디더-	焚く			1								1
돌외여-	乾かす									1		1
미야(미여)-	縛る		2	1		2						5
밍ㄱ라-	作る	2					1	1				4
맛더-	預ける							1	1			2
머물워-	留める							1				1
머추워-	止める			1								1
무더-	埋める	1					1					2
브라-	請う										1	1
브려-	捨てる							1	1		1	3
바다-	受ける										4	4
보내여-	送る										1	1
브리워-	泊める			2								2
브터-	付ける、預ける		1					1				2
비허-	振りまく										2	2
사-	買う										1	1
사겨-	刻む					1		1				2
사마-	～にする					1						1
사하(싸하)-	積む							2	1			3
서-	書く				1							1
어더-	得る										2	2
어려-	結婚させる										1	1
여러-	開ける							1				1
자바-	捕まえる							1				1
지씨(지어)-	作る						1	1				2
쳐-	書き付ける		1	1								2
햐-	する					2					4	6
히여-	させる					1					5	6
합		5	7	11	1	9	6	14	4	4	37	98

表 6 16 世紀中世韓国語資料における「-twuta」の V1 の異なり語数および延べ語数

	續三	翻朴	翻老	呂氏	重三	重續	翻小	小諺	分門	順川	合計
異なり(延べ)	3(5)	6(7)	9(11)	1(1)	7(9)	4(6)	13(14)	4(4)	2(4)	18(37)	46(98)

次に、「-twuta」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 7 の通り示される。やはり、15 世紀中世韓国語資料における「-twuta」と同様に、「-twuta」の V1 の形態として「動詞語幹+twuta」のものは観察されず、すべて「動詞語幹+・e +twuta」である。以下の表 7 を見られたい。

表 7 16 世紀中世韓国語資料における「-twuta」の V1 の形態

	續三	翻朴	翻老	呂氏	重三	重續	翻小	小諺	分門	順川	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+・e	3(5)	6(7)	9(11)	1(1)	7(9)	4(6)	13(14)	4(4)	2(4)	18(37)	46(98)

次に、「-twuta」における V1 の自他に注目してみると、表 8 の通り示される。やはりすべて V1 として他動詞をとっている。以下の表 8 を見られたい。

表 8 16 世紀中世韓国語資料における「-twuta」の V1 の自他

	續三	翻朴	翻老	呂氏	重三	重續	翻小	小諺	分門	順川	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	3(5)	6(7)	9(11)	1(1)	7(9)	4(6)	13(14)	2(4)	2(4)	18(37)	46(98)

5.1.2.2. 意味用法

次に、16 世紀中世韓国語資料において観察される「-twuta」の V2「twuta」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、16 世紀中世韓国語において「-twuta」の V2「twuta」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、16 世紀中世韓国語資料においても、A2〈置く〉用法が観察される。この A2〈置く〉用法の「-twuta」にも(30)のように、原典において「置」を対応漢字としている用例が観察される。以下、用例を挙げる。

A2 〈置く〉

(30)待賓齋며 吏師齋랴 지블 지서 두며 나랴 빛난 이를 구경할 법을 세니…

〈及置待賓吏師齋〉

〔待賓齋と吏師齋を建てて置き、国の、光り輝くこれらを、士人らが眺めることができる法を立てなければならない〕

〈翻譯小學 9:17a〉

以下からは、「-twuta」における V2 「twuta」の補助動詞的用法となる。

まず、16 世紀中世韓国語の V2 「twuta」においても、C2 〈結果維持〉用法が観察される。日本語の V2 「おく」や 15 世紀中世韓国語の V2 「twuta」の場合と同様、16 世紀中世韓国語の V2 「twuta」の場合も、動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのが特徴であり、その動作の結果生じる結果の維持に対する〈意図性〉の有無によって〈準備性〉が顕著な〈保持〉的な用法とそれが希薄な〈放置〉的な用法に分かれる。

16 世紀中世韓国語資料における C2 〈結果維持〉用法の V2 「twuta」にも、A2 〈置く〉用法の V2 「twuta」のように原典において対応漢字が観察される。例えば、以下の(33)、(38)、(43)では、その原典において結果状態を表す「着」が用いられている。つまり、この原典における「着」が諺文における「-twuta」の V2 「twuta」が補助動詞的用法である C2 〈結果維持〉用法として用いられているという解釈を支える一つの根拠となるということである。また、(38)における「住」も結果持続を表しており、「着」と「住」双方ともに〈結果の継続性〉を焦点化する形式として用いられている。

ただ、(34)のように、原典において「上」が対応漢字として出現している用例も観察される。この「上」は Jeong(2006)において、〈動作の完成性〉を表すものとして説明されている。(34)における原典を検討すると、「…你燒的鍋滾時，下上豆子。但滾的一霎兒，將這切了的草，豆子上蓋覆了，…(…鍋を火にかけて沸騰したら、豆を入れる。ただ、ひと煮立ちしたら、切った藁を、豆の上にかぶせて、…)」となっており、「下上豆子。(豆を入れる。)」と「但滾的一霎兒(ただ、ひと煮立ちしたら)」が別の文によって別個の作業として述べられている。やはり「上」が「下(入れる)」という〈動作の完成性〉を表しているようである。

しかし、中世韓国語による諺文の方の全体の文脈を検討すると、「…네 가마의 불디더 ㄱ장 글커든 콩 녀히 두고 물읷 ㄱ장 것글후미 ㅎ 디워만 ㅎ거든 이 사ㅎ론 디플다가 콩 우히 둑고…(…君は釜に火を付けてよく沸騰したら、豆を入れておいて、ひと煮立ちしたら、この切った藁を豆の上にかぶせて、…)」となっており、「콩 녀히 두고(豆を入れておいて)」と「물읷 ㄱ장 것글후미 ㅎ 디워만 ㅎ거든(ひと煮立ちしたら)」が一つの文において一連の作業として述べ

られている。したがって、(34)「녀허 두다(nyehe-twu-ta)」の V2「twuta」が C2〈結果維持〉用法で用いられていると考えた方が妥当であると思われる。

以下、16 世紀中世韓国語の「-twuta」において V2「twuta」が C2〈結果維持〉用法として用いられている用例である。

C2〈結果維持〉

(31)랑둥하 몰란 옛 사르미 지빅 쥬신 브터 두고 찰 타 나커든 몰 미엿던 갑슬 더를 혼 우흠 찰만 주미 올흔니라

〈…馬只寄這人家裏…〉

〔「郎中さん、馬はこの人の家の主人に預けておいて、お米をもらったら馬を預かってくれた費用として、お米ひと掴みあげればいいですよ」〕

〈翻譯朴通事 11a〉

(32)뒛 내해 물 씻기라 가져 그늘 서느러운 디 민여 두고 글게로 글거 조히 햏야

〈…〈糸全〉在陰涼處…〉

〔「後ろ側の川辺に馬を洗いに行こう。陰の涼しいところに縛っておいて、櫛できれいに搔け」〕

〈翻譯朴通事 21a〉

(33)고티기 ㅁ차다 날회여 잇거 가져다가 조흔 짜해 나모 미딕 민여 두고 머규믈 도히 햏라

〈…乾淨田地上樹底下〈糸全〉着…〉

〔「全て治したので、(馬を)ゆっくり引いて持っていき、よい所に(行って、そこにある)木の下に縛っておいて、よく食べさせよ」〕

〈翻譯朴通事 43b〉

(34)네 가마의 불디더 ㅁ장 글커든 콩 녀허 두고 물읷 ㅁ장 것글후미 혼 디위만 햏거든 이 사햏론 디플다가 콩 우희 둑고 불딘디 말오 김 나게 말라 쯔션히 니그리라

〈…你燒的鍋滾時，下上豆子。但滾的一霎兒，將這切了的草，豆子上蓋覆了，…〉

〔「…君は釜に火を付けてよく沸騰したら、豆を入れておいて、ひと煮立ちしたら、この切った藁を豆の上にかぶせて、火を消して湯気が出ないようにしろ…」〕

〈翻譯老乞大上 19b-20a〉

(35)…반만 닉거든 장물과 파와 약들 빠 노하 젓고 가맛우흘 돕고 김 나게 말오 블디더 두면
아니한 스시에 닉느니라

〈…休着出氣, 燒動火…〉

〔「…半分ほど火が通ったら、味噌を溶いた水と生葱と調味料を溶かし混ぜてから、(肉とそれら)をかき回し、釜の蓋を被せて湯気が出ないようにし、火を焚いておけば、間もなく火が通る〕

〈翻譯老乞大上 21b-22a〉

(36)가니에 잡사름 업다 허야 잇는 거긔 닛선 잡사름 브리워 두디 몬홀 거시니…

〈…不得安下面生歹人〉

〔「…『家の中に悪い人はいない』と書いているそこに、馴染みのない人を泊まらせておくことはできないのに、…」〕

〈翻譯老乞大上 47b-48a〉

(37)본디로 쏘 셔르 사괴디 몬흐던 거시니 엇디 요흔 사름 아니완흔 사름 알리오 엇디
머믈워 브리워 두료

〈…便怎麼敢容留安下〉

〔「元々知っている間柄でもなく、どうして良い人か悪い人かわかりますか。どうして留めて泊まらせておくことができるというのですか〕

〈翻譯老乞大上 47b-48a〉

(38)우리 몰 모라 가 하츄에 가 짐들 설엇노라 허면 마치 불ㄴ리로다 이 몰들 다 미야 두라
더 둘흘 허야 닐에 허라

〈這馬們都 〈糸全〉住着…〉

〔「…この馬たちを皆縛っておこう。あの二人を起こしてこよう〕

〈翻譯老乞大上 58ab〉

(39)楊文公의 집 사름 ㄴ르치논 글월에 ㄴ로디 저문 아히 비호몬 ㄴ숨애 다마 두며 외올 썩
르미 아니라 쥬연이 알며 쥬연이 잘흐논 이를 길워…

〈童穉之學不止 記誦養其良知良能〉

〔「…幼い子どもの学びは心に込めておき、覚えるのみならず、自ら知り、自らよく学ぶ力を養ってやらねばならない…〕

〈翻譯小學 6:4b〉

(40)은 일백 량으로 내게 브터 뒀던 사름이 죽거닐 제 아드를 주니 즐겨 받디 아니흐느니…

〈以白金百兩 寄我者 死矣…〉

〔「…白金百兩を私に預けておいた者が死んだので、その息子に与えたが…〕

〈翻譯小學 9:81a〉

(41)니르건댄 통심드외니 너희 뼈에 사겨 두미 맛당히니라

〈…爾宜刻骨…〉

〔…記憶すべきことがあれば、あなたの骨に刻んでおくのがよい〕

〈翻譯小學 6:20b〉

(42)더 어름 담는 그릇 우희흔 덩잇 어름 노코 슬고와 이스랏과 여러가짓 성흔 과시를 어름
다든 그릇 안해 돛가 두면 7장 보디 도히니라

〈浸在水盤裏好生好看〉

〔…様々な果物を、氷を入れた器の中に浸けておくと、非常に見た目がよい〕

〈翻譯朴通事 5b〉

(43)집 혼 술위 자븐것 년는 술위 나귀 노새 메우논 큰 술위 툇논 술위 다 도히 지비 드려
노하 두고 눈비에 젖게 말라

〈坐車兒, 都好生房子裏放着.〉

〔「…人が乗る車、全てちゃんと家に入れて置いておき、雨雪に濡れないようにせよ」〕

〈翻譯老乞大下 36ab〉

(44)뉘 이긔며 뉘 몬 이긔니오 더더 두고셔

〈由他〉

〔「…誰が勝って、誰が勝てなかった者なのか。放っておこう((運に)任せておこう)」〕

〈翻譯老乞大下 37a〉

(45)伊川 先生이 니르샤디 병히야 자리에 누엇거든 사오나온 의원에게 맞더도물 스랑티 아니
히논 어버시와 효도 아니히논 조식에 가질비느니…

〈…委之庸醫…〉

〔…みずばらしい医院に任せておくのを好まない父と親孝行をしない子息にたとえることができ
るが、…〕

〈翻譯小學 7:5b〉

(46)넛 사르미 주금 사로매 통달히 헤여 명에 브려 두며 강강히고 질기우더 올코 고다

〈欲其觀古人之達生委命〉

〔…昔の人は生と死をくまなく予見し、天命に任せておき、意志が強く正しい〕

〈翻譯小學 8:28b〉

次のように、16世紀中世韓国語資料の「-twuta」のV2「twuta」においても、以上のようなC2〈結果維持〉用法であると考えられるものの、15世紀中世韓国語資料のV2「twuta」と同じようにC補助動詞的用法におけるC3〈事前処置〉用法と中間的であると考えられる用例が観察

される。15 世紀中世韓国語資料における「-twuta」の V2「twuta」の場合と同様に、本稿では以下の(47)から(50)のような用例を C2'〈結果維持〉用法とし、C2〈結果維持〉用法と C3〈事前処置〉用法の中間的な用法として区別し、提示することとする。以下、用例を見られたい。

C2'〈結果維持〉

(47)그 免帖 우희 세 번 마조물 면하라 하여 쓰고 스승이 우희 쳐 두느니라

〈師傳上頭畫着花押〉

〔「…その免帖の上には三回当てるのを免ずると書き、師匠が上に書きつけておく（署名しておく）」〕

〈翻譯老乞大上 3b-5a〉

(48)이의 이러면 버다 너희 세히 흠씩 다 내오 수 덕거 듯다가 北京의 가면 흠씩 헤여 덜 거시라

〈記着數目，到北京時，…〉

〔「…すでにこうなら、君たち三人が一緒に全てお払いなさい。金額を書いておいて、北京に行ったら一緒に計算して分けることにしよう」〕

〈翻譯老乞大上 24a〉

(49)내 또 人蔘과 모시뵈 이세라 리실 갑 듣보라 가고려 갑곳 잇거든 풀오 ㅎ다가 ㄴ장 디거든 안직 머추워 두어든

〈怕十分的賤時，且停些時〉

〔「…明日はそちらの値段を聞きに行ってみよう。値段が高ければ売り、万一とても安ければ、まだ(売るのを)やめておこう」〕

〈翻譯老乞大上 70ab〉

(50)손 드는 집과 역을 다 도히 꾸며 두며 손 이바드며 군스 머금믈 다 도히 호디

〈館傳必增飾…〉

〔「…館舎と驛を増築してよく飾っておき、客を接待し、…」〕

〈翻譯小學 10:14b〉

最後に、D〈完遂〉用法を挙げる。D〈完遂〉用法は「当該の動作を最後まで行う」ことを表す。この場合、「後に続く事態を見越す」といった〈準備性〉は表出しない。以下の通り、16 世紀中世韓国語における「-twuta」の D〈完遂〉用法は、以下の(51)一例のみである。

ただ、この場合もやはり C2'〈結果維持〉の場合と同様に、C2〈結果維持〉用法のものと中間的であるといえる。それは、V1 の「치다(chi-ta, 書き付ける)」により、公座簿に書き付けた

名前が残り、それが一種の直接的な結果状態として継続することを V2 の「twuta」が表している可能性もあるからである。しかし、原典において動作の完了を表す「了」が対応漢字として観察されること、そして後続文脈が「즉재 오마(cukcay o-ma, すぐに戻ってくる)」となっていることを考慮すると、二つの節が表す状況の間に時間的な隔たりがあり、「내 마ᄃᆞ래 가 공좌부에 쳐 두고(nay mazAl-ay ka kongcwapu-ey chy-e twu-ko, 私が官庁に行き、公座簿に(名前を)書き付ける)」事態を済ませてから、「즉재 오마(すぐに戻ってくる)」ことを表していると考えられるので、やはり(51)における V2 「twuta」の D〈完遂〉用法として用いられていると考えるのが妥当だと思われる。以下、用例を見られたい。

D〈完遂〉

(51)안직 날회라 내 마ᄃᆞ래 가 공좌부에 쳐 두고 즉재 오마 우리 둘히 보시와 향 가져가 비례ᄃᆞ고 공양ᄃᆞ야 저그나

〈我到衙門押了公座便来〉

〔「…私が官庁に行き、公座簿に(名前を)書き付けてから、すぐに戻ってくる」〕

〈翻譯朴通事 75b〉

5.1.3. 17 世紀近世韓国語の「-twuta」

次に、17 世紀近世韓国語資料において観察される「-twuta」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-twuta」における V2 「twuta」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.1.3.1. V1 の特性

以下の表 9 は、17 世紀近世韓国語資料において観察される「-twuta」の V1 を用例数とともに提示するものである。17 世紀近世韓国語資料全体における「-twuta」の異なり語数は 47、延べ語数は 68 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 10 で提示する通りである。以下、表 9 と表 10 を見られたい。

表 9 17 世紀近世韓国語資料における「-twuta」の V1

V1	日本語訳	諺痘	諺胎	女訓	東孝	東忠	東烈	重杜詩	老諺	捷新	合計
ㄹ리와-	選ぶ、分つ							1			1
ㄹ초아-	揃える							1			1
금초아-	隠す			2				1			3
가도아-	閉じ込める					1					1
가마-	巻く		1								1
갈마-	隠す、貯蔵する							1			1
거러-	掛ける						1				1
씨-	挟める、籠める		1								1
兼ᄃ야-	兼ねる							1			1
고자-	挿す		1					1			2
그려-	描く				2						2
기터-	残す							2			2
녀허-	入れる		1						1		2
노하-	置く、放つ								1		1
닐러-	言う									1	1
드라-	懸ける	1	1								2
다다-	閉める	1									1
다마-	盛る							1			1
더덕-	投げる、放る								1		1
더거-	書く									1	1
더퍼-	覆う	1									1
드려-	入れる								1	1	2
띄워-	浮かべる		1								1
미야(여)-	縛る						1	1	1		3
밍ㄹ라-	作る				1			2			3
머무러-	留める						1				1
머물워-	留めさせる							3	1		4
뫼화(뫼하)-	集める							2			2
무더-	埋める							1			1

브려-	捨てる						1				1
버려-	設ける							1			1
排設ᄃ야-	拵える							1			1
브터-	付ける						1	2			3
빌여-	借りる							1			1
슬와-	申す									1	1
써-	書く							1			1
섞거-	混ぜる	1									1
어더-	得る							1			1
容納ᄃ야-	受入れる							1			1
음간ᄃ야-	陰で乾かす	1									1
일워-	成す							2			2
딱ᄃ야-	合わせる							1			1
자바-	捕まえる							1			1
지어-	作る、著す				1			1			2
지여-	寄りかからせる							1			1
差定ᄃ야-	定める									1	1
ᄃ야(ᄃ여)-	する								1		1
히여-	させる							1			1
		5	6	2	4	1	5	33	7	5	68

表 10 17 世紀近世韓国語資料における「-twuta」の V1 の異なり語数および延べ語数

	諺痘	諺胎	女訓	東孝	東忠	東烈	重杜詩	老諺	捷新	合計
異なり(延べ)	5(5)	6(6)	1(2)	3(4)	1(1)	5(5)	27(33)	7(7)	5(5)	48(68)

次に、「-twuta」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 11 の通り示される。「-twuta」の V1 の形態として「動詞語幹+twuta」のものは観察されず、やはりすべて「動詞語幹+ -e +twuta」である。以下、表 11 を見られたい。

表 11 17 世紀近世韓国語資料における「-twuta」の V1 の形態

	諺痘	諺胎	女訓	東孝	東忠	東烈	重杜詩	老諺	捷新	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+-e	5(5)	6(6)	1(2)	3(4)	1(1)	5(5)	27(33)	7(7)	5(5)	48(68)

次に、「-twuta」における V1 の自他に注目してみると、表 12 の通り示される。本稿において使用した 17 世紀近世韓国語資料の「-twuta」において、やはり「自動詞+twuta」のものは一例も観察されず、すべて「他動詞+twuta」であった。以下、表 12 を見られたい。

表 12 17 世紀近世韓国語資料における「-twuta」の V1 の自他

	諺痘	諺胎	女訓	東孝	東忠	東烈	重杜詩	老諺	捷新	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	5(5)	6(6)	1(2)	3(4)	1(1)	5(5)	27(33)	7(7)	5(5)	48(68)

5.1.3.2. 意味用法

次に、17 世紀近世韓国語資料において観察される「-twuta」の V2「twuta」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、17 世紀近世韓国語において「-twuta」の V2「twuta」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A2〈置く〉用法であるが、17 世紀近世韓国語においても以下のように A2〈置く〉用法の用例が観察される。この(52)の場合も、原典において「置」が対応漢字として観察される。以下の用例を見られたい。

A2〈置く〉

(52)슬픈 말슴을 지어 머무러 두어 부뭇씩 고흥고 쯔 아히 머리를 빗기고 안고 눈물 흘리고 드디여 방의 드러 오래 나디 아니헿거늘…

〈一日作哀辭留置以告父母又梳兒髮抱而涕泣遂入房久不出…〉

〔悲しい言葉を作って留め置き、両親に告げて、また子供の髪を梳いて抱き、涙を流して、ついに部屋に入ってしばらく出てこなかったのもので、…〕

〈東國新續三綱行實圖 烈女圖 4:24b〉

以下からは、「-twuta」における V2「twuta」の補助動詞的用法となる。

まず、17 世紀近世韓国語の「-twuta」の V2「twuta」においても、C2〈結果維持〉用法が観察される。日本語の V2「おく」や 15 世紀及び 16 世紀中世韓国語の V2「twuta」における C2〈結果維持〉用法と同様、17 世紀近世韓国語の V2「twuta」の場合も、動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのが特徴であり、その動作の結果生じる結果の維持に対する〈意図性〉の有無によって〈準備性〉が顕著な〈保持〉的な用法とそれが希薄な〈放置〉的な用法に分かれる。

17 世紀近世韓国語資料における C2〈結果維持〉用法の V2「twuta」にも、原典において対応漢字が観察される。例えば、(59)と(64)では、その原典において結果持続を表す「住」、結果状態を表す「着」が用いられており、諺文における「-twuta」の V2「twuta」が補助動詞的用法である C2〈結果維持〉用法として用いられていることを示唆する。また、(55)や(56)、(57)、(58)、(61)、(63)のように、もはや原典において V2「twuta」に対応する漢字が観察されないものもあり、17 世紀近世韓国語にによる諺文における「-twuta」の V2「twuta」が実質的動作を表す動詞としては用いられていないということを示唆している。

以下、17 世紀近世韓国語資料の「-twuta」の V2「twuta」における C2〈結果維持〉用法の用例を挙げる。

C2〈結果維持〉

(53) 일빅번 글흔 물 ㅎ 사발의 드리티고 아모 거수로 마고 다다 ㄱ운 아니 나게 더퍼 두고
미양 반 흡식 ㅎ 흡식 드시햐 머기면 즉제 돈느니라

〈百沸湯一碗中以物合定勿令漏氣溫…〉

〔百度に沸騰した湯は器に注ぎ込み、何かで塞ぎ、気温が漏れないようにかぶせておき、…〕

〈診解痘瘡集要 上 21b〉

(54) ㅎ 덩이를 사발이 담고 일빅번 글흔 물을 붓고 두에 다다 듯다가 ㄹ근 ㅎ 거든…

〈一塊置碗内以百沸湯泡之以蓋合定後溫…〉

〔一塊を器に盛って百度に沸騰した湯を注ぎ、蓋を閉めておくと、ぬるくなるので…〕

〈診解痘瘡集要 上 66a〉

(55)만일 믿디 아니커든 도치를 알 안는 닭의 둥우리 아래 드라 두면 혼 자리 다 수둑 되느니라

〈若不信以斧懸抱雞窠下則一窠盡是雄雞〉

〔もし信じないのなら、斧を、卵を抱いた鶏の巣の下に懸けておくと、一カ所が全て雄鶏になるだろう〕

〈諺解胎産集要 12a〉

(56)또 굴오디 석옹항 혼 냥을 불근 녹막치 녀허 윈녁 허리에 치오고 또 활시울 혼나홀 허리에 가마 두고…

〈…弓弩弦一枚縛腰中…〉

〔…弓弦一本を腰に巻いておき、…〕

〈諺解胎産集要 12a〉

(57)열산은 닐온 7장 더운 제 아기 나커든 맛당히 겁고 안정코 햇빛 먼 디 잇고 창지계를 열고 물근 물을 만히 잇고 어름 띄워 두고 보라

〈…啓口戸多貯清水照冰〉

〔…澄んだ水をたくさん汲み、氷を浮かべておいて(それを)見よ〕

〈諺解胎産集要 25b〉

(58)림산커든 몬저 산부의 상해 님는 오솔 벗겨 브억머리과 어귀에 써 두면 수이 난느니 모로게 하라

〈…以籠竈頭及竈口則易産勿令知〉

〔…まず妊婦の日頃着ている服を脱がせ、竈の頭と口に籠めておくと、容易に産まれるので…〕

〈諺解胎産集要 31a〉

(59)그 굴기 소합원을 비빅여 녀커나 혹 죠히 심지를 기름 무터 고자 두어 다시 아오디 아니게 하라

〈…或以油紙撚維住不令再合〉

〔…あるいは紙の灯芯を油につけて挿しておき、再び合わせないようにしろ〕

〈諺解胎産集要 69b〉

(60)그러나 天地 사이에 妻 妾을 嫉妬할 마음을 내며 毒害할 쁘들 곰초아 두리 만하니 다 夫主의 쁘들 밧디 아니를 말미아문이라

〔しかし天地の間に妻が妾に嫉妬し、毒殺する意志を隠しておく者が多いが、全て夫主の思いを受け止めていないことによるのだ〕

〈女訓諺解 下 13a〉

(61)왕이 노하여 가도아 두니 튕이 장춧 죽게 되여 상서하여 날오디…

〈王怒囚之忠將死上書曰…〉

〔王が怒り、閉じ込めておくと、…〕

〈東國新續三綱行實圖 忠臣圖 1:11b〉

(62)네 불 씨더 가매 쓸커든 콩을 녀히 두고 물읏 쓸키 혼 디위만 ㅎ거든 이 싸흔 답흘다가
콩 우희 덩고 불 찢디 말고 김나게 말라

〈…下上豆子…〉

〔「…君は釜に火を付けてよく沸騰したら、豆を入れておき、ひと煮立ちしたら、この切った
藁を豆の上にかぶせて、火を消して湯気が出ないようにしろ」〕

〈老乞大諺解 上 18a〉

(63)드디여 두 녀 녀 거드랑을 딜러 주기고 주검을 길헤 브려두니 사라실 제 기르던 개 겨터
덕킴여셔 슬피 우니 보논 사름이 예엿비 녀기디 아니리 업더라 금 상도애 정문히시니라

〈遂刺兩腋殺之暴屍路傍生時所養之狗守側悲…〉

〔ついに両脇を刺して殺し、屍を道端に捨てておくと、生きていたときに飼っていた犬が側で
(屍を)守り、悲しく泣くので、見ている人の中でそれを可哀相に思わない者はいなかった〕

〈東國新續三綱行實圖 烈女圖 6:81b〉

(64)이미 가려 ㅎ면 내게 나쁜 은이 이시니 힘힘이 노하 두워 므슴ㅎ료 이므셔 비단시
가져가자

〈…閑放着怎麼…〉

〔「…どうせ行くなら、私に残ったお金があるから、手持ち無沙汰に放っておいて(お金を持て
余しておいて)一体何をするというのか。さあ絹織物でも買って持っていこう」〕

〈老乞大諺解 下 21b〉

(65)우리도 ㅎ나 둘히셔 되디 못흘 거시니 送使의 談合하여 아뭇 묘로나 묘흘 양으로 흘
거시니 아직 大廳의 드려 두읍소

〈…よ加るやうにしまるせうほとに まつたいてきにいれて於加しられ〉

〈捷解新語初刊本 4:27a〉

次のように、17世紀近世韓国語資料の「twuta」のV2「twuta」においても、以上のような
C2〈結果維持〉用法であると考えられるものの、同じくC補助動詞的用法におけるC3〈事前
処置〉用法と中間的であると考えられる用例が観察される。15世紀及び16世紀中世韓国語資料
における「twuta」のV2「twuta」の場合と同様に、本稿では以下の(66)から(68)のような用例
をC2'〈結果維持〉用法とし、C2〈結果維持〉用法とC3〈事前処置〉用法の中間的な用法とし

て区別して提示することとする。以下、用例を見られたい。

C2' 〈結果維持〉

(66) 김시 도적이 성히여 먼티 몬홀 줄 알고 미리 목글 남기 민여 듯더니 그 지아비 살이 진
혀여 해를 니버닐 즉제 나모 아래 노려며 죽다 금 상도애 정문히시니라
〈金氏見盛知不免預為繫頸于樹…〉

〔金氏は盜賊に勢いがあるので免れないと思い、あらかじめ首を木に繫いでおいたところ、…〕

〈東國新續三綱行實圖 烈女圖 8:24b〉

(67) 니일 갑슬 듯보라 가서 갑시 이시면 풀고 혀다가 7장 천혀면 아직 잠깐 머물워 두리라
〈怕十分的賤時，且停些時〉

〔「…明日はそちらの値段を聞きに行ってみよう。値段が高ければ売り、万一とても安ければ、
まだ(売るのを)やめておこう」〕

〈老乞大諺解 上 63b〉

(68) 글란 이제 東萊 술와 보내야 드릴 양으로 호오려니와 자세히 덕거 두읍소

〈それわいとねきゑ申やて いるるやうにしませう加 たし加に加きつけて於加しられ

〈捷解新語初刊本 1:25a〉

次に、C3 〈事前処置〉用法を挙げる。前述の通り、C3 〈事前処置〉用法は「後続く事態を見越して、当該の動作を行う」ことを表す。

C3 〈事前処置〉用法の「-twuta」は、V1 の表す〈動作の完成性〉と同時に、その結果生じる〈結果の継続性〉をも表すため、V2 「twuta」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「twuta」が表すような実質的動作等を表していないという点を特徴とする。したがって、V2 「twuta」の機能は文法的であり、C3 〈事前処置〉用法の V2 「twuta」を補助動詞として認定することができる。

C3 〈事前処置〉は、文脈に依存した間接的な結果が、後続く事態への〈効力〉として抽象的に捉えられることになる。動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのは C2 〈結果維持〉と同様であり、〈準備性〉が顕著に表出する。

韓国語の V2 「twuta」は、15 世紀中世韓国語から 16 世紀中世韓国語にかけて観察される V2 「twuta」において、〈結果の継続性〉が間接的かつ抽象的な〈効力〉として捉えることのできる典型的な C3 〈事前処置〉用法がはっきりと確認されない。C3 〈事前処置〉用法と解釈される用例も若干見られるが、依然として直接的かつ具体的な〈結果の継続性〉が色濃く出現しており、いわば C2 〈結果維持〉との中間的な用法の用例しか観察されないといえる。しかし、17

世紀近世韓国語資料の「-twuta」のV2「twuta」においては、以下の通りC3〈事前処置〉用法の典型的な用例であると認定することのできる用例が、数例ではあるが観察されはじめる。例えば、(69)の「닐러 두다(nill-e twu-ta, 言っておく)」や(70)の「슬와 두다(sAlw-a twu-ta, 申しておく)」の場合、C2〈結果維持〉用法の用例群が表すような直接的かつ具体的な〈結果の継続性〉が一切表出し得ず、その〈結果の継続性〉は間接的かつ抽象的な〈効力〉として表出する。つまり、この場合のV2「twuta」はV1である「니르다(nilu-ta, 言う)」や「슬오다(sAlo-ta, 申す)」の表す動作が後に続く事態を見越して行われ(〈動作の完成性〉)、その結果生じた〈効力〉が後の事態において何らかの準備的効果として影響を及ぼすこと(を見込んでいること)を表しているのである。以下の用例を見られたい。尚、波線部分はこれらの用例におけるV2「twuta」がC3〈事前処置〉用法として用いられていることを裏付ける文言及び副詞等の表現である。

C3〈事前処置〉

(69)二三日 디나거든 銅鑑 看品 홀 써시니 문전 代官네씩 출히라 닐러 두옵소

〈…さきにたいくわんしゆに こしらゑとゆうて於加しられ〉

〈捷解新語初刊本 3:28b〉

(70)一特送 中 歸船 一隻 第一 船 中 歸船 一隻 代官으로서 借船 一隻 합히여 三 隻이
옵도식 미리 슬와 두옵소

〔…加里ふねいつそう あわせてさんそうてこさる まゑ加とに申て於加しられ〕

〈捷解新語初刊本 4:8a〉

5.1.4. 18 世紀近世韓国語の「-twuta」

次に、18 世紀近世韓国語資料において観察される「-twuta」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-twuta」における V2 「twuta」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.1.4.1. V1 の特性

以下の表 13 は、18 世紀近世韓国語資料において観察される「-twuta」の V1 を用例数とともに提示するものである。18 世紀近世韓国語資料全体における「-twuta」の異なり語数は 37、延べ語数は 52 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 14 で提示する通りである。以下、表 13 と表 14 を見られたい。

表 13 18 世紀近世韓国語資料における「-twuta」の V1

V1	日本語訳	伍諺	兵学	明義	改捷新	五倫	隣語	敬信	増無	合計
ㄱ초아-	揃える					1				1
곰초와-	隠す			1						1
改正하야-	改正する								1	1
꼬자-	挿す	1	1							2
공봉하여-	供奉する							1		1
그만하여-	辞める						1			1
기록하야(여)-	記録する	1					1			2
내여-	出す						1			1
너히(너히)-	入れる			2			1	1		4
노하-	置く、放つ								1	1
니어-	繋ぐ		1							1
닐러(닐너)-	言う				2					2
드려-	入れる				1					1
미야-	縛る								1	1
맞저-	任せる			1				2		3
머물너(머므러, 머무러)-	留める			1		1			1	3
버려-	捨てる	1								1

뽀아-	踏む	1								1
바다-	受ける						1			1
밧고아-	易える					1				1
버려-	設ける			1						1
辨備ᄒ여-	準備する						2			2
付過ᄒ여-	控える						1			1
分付ᄒ여-	申し付ける				1					1
빈소ᄒ여-	喪屋を作る					1				1
슬와-	申す				1		1			2
사-	買う					2				2
써-	書く								1	1
세워-	建てる	1	1							2
아사-	奪う				1					1
옴겨-	移す		1			1				2
용납ᄒ야-	受入れる			1						1
定ᄒ여-	定める						1			1
저거-	書き付ける				1					1
포장ᄒ야-	包む							1		1
ᄒ여-	する						1			1
下陸ᄒ여-	陸揚げする						1			1
合計		5	4	7	7	7	12	5	5	52

表 14 18 世紀近世韓国語資料における「-twuta」の V1 の異なり語数および延べ語数

	伍諺	兵学	明義	改捷新	五倫	隣語	敬信	増無	合計
異なり(延べ)	5(5)	4(4)	6(7)	6(7)	6(7)	11(12)	4(5)	5(5)	37(52)

次に、「-twuta」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 15 の通り示される。「-twuta」の V1 の形態として、「動詞語幹+twuta」のものは観察されず、やはりすべて「動詞語幹+ -e +twuta」である。以下、表 15 を見られたい。

表 15 18 世紀近世韓国語資料における「-twuta」の V1 の形態

	伍諺	兵学	明義	改捷新	五倫	隣語	敬信	増無	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+-e	5(5)	4(4)	6(7)	6(7)	6(7)	11(12)	4(5)	5(5)	37(52)

次に、「-twuta」における V1 の自他に注目してみると、表 16 の通り示される。本稿において使用した 18 世紀近世韓国語資料の「-twuta」においても、やはり「自動詞+twuta」のものは一例も観察されず、すべて「他動詞+twuta」であった。以下、表 16 を見られたい。

表 16 18 世紀近世韓国語資料における「-twuta」の V1 の自他

	伍諺	兵学	明義	改捷新	五倫	隣語	敬信	増無	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	5(5)	4(4)	6(7)	6(7)	6(7)	11(12)	4(5)	5(5)	37(52)

5.1.4.2. 意味用法

次に、18 世紀近世韓国語資料において観察される「-twuta」の V2「twuta」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、18 世紀近世韓国語において「-twuta」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A2〈置く〉用法を挙げる。これは、日本語の本動詞「置く」と同様、本動詞「twuta」の持つ原義そのものである。これらの場合も、原典において「置」が対応漢字として観察される。以下、用例を見られたい。

A2〈置く〉

(71)만일 두어 거롬이 합디 몬호미 잇거든 다시 옮겨 두어 서로 합게 하라

〈如有數歩未合爲移置相合〉

〔…万一數歩が合わないことがあったら、再び移し置き、互いに合わせよ〕

〈兵学指南 8a〉

(72)…이에 7만이 뜰에 섰는 나모 우희 가마귀 샛기를 밧고아 두어 하여곰 서로 빠화 올게
하니 집사람이 괴이히 너기거늘…

〈…異居乃易置庭樹烏雛…〉

〔…こっそりと庭に立っている木の上に烏の雛を易て置き、…〕

〈五倫行實圖 附宗族 45a〉

(73)…그 날 風勢 不一하여 館所의 민지 몬호와 設門의 下陸하여 두옵고 계요 오늘날
드려는 완습거니와

〈…其日風が替まして 館まで参届ませいで設門にあげ置まして 漸今日入れて参じましたれ
ども…〉

〈隣語大方 7:1b〉

(74)某日時에 니르러 某縣 某里 地名엿 아모 명식 사람의 屍首 머무리 둔 곳에 니르러
합당히 참예할 사름들을 불너 모도아…

〈…某色人屍首停置處…〉

〔…ある肩書きの人の屍首を留めて置いたところに到着して、適当に参加する人々を呼んで集
めて、…〕

〈増修無冤録諺解 1:70a〉

以下からは、18世紀近世韓国語の「-twuta」における V2「twuta」の補助動詞的用法となる。

まず、18世紀近世韓国語の「-twuta」の V2「twuta」においても、C2〈結果維持〉用法が観察される。日本語の「-おく」の V2「おく」や 15世紀、16世紀中世韓国語、及び 17世紀近世韓国語の「-twuta」の V2「おく」における C2〈結果維持〉用法と同様、18世紀近世韓国語の「-twuta」の V2「twuta」の場合も、動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのが特徴であり、その動作の結果生じる結果の維持に対する〈意図性〉の有無によって〈準備性〉が顕著な〈保持〉的な用法とそれが希薄な〈放置〉的な用法に分かれる。

18世紀近世韓国語資料における C2〈結果維持〉用法の V2「twuta」では、16世紀中世韓国語や 17世紀近世韓国語資料の原典に見られた「着」や「住」のような対応漢字は観察されない。しかし、(78)や(79)、(81)のように、もはや原典において V2「twuta」に対応する漢字が観察されないということは、18世紀近世韓国語による諺文における「-twuta」の V2「twuta」が実質的動作を表す動詞としては用いられていないということを示す一つの根拠となっているといえる。

以下、18世紀近世韓国語資料の「-twuta」における C2〈結果維持〉用法の用例である。

C2 〈結果維持〉

(75)媚春아 燒香하라 杏花 흔 가지를 것거 膽瓶에 쏘자두라 香을 피워시니 썰리 와 절하
쇼셔 썰리 와 절하쇼셔

〔…杏花一枝を折って膽瓶に挿しておくよ。香りを漂わせていらっしゃるから、早く来て挨拶
なさいませ。…〕

〈伍倫全備諺解 1:32a〉

(76)爺爺 | 너를 ㄱ르치시는 거시 다 이 묘흔 말씀이니 句句마다 다 ㅁ음에 기록하야 두과더
하노라

〔爺爺が君にお教えになることは全て良いお言葉なので、一句一句すべて心に記録しておこう
と思う〕

〈伍倫全備諺解 3:37a〉

(77)그 편지를 보되 고변을 아니하고 그 편지를 머물너 두어시니 맛당이 지정불고로써 지만
하리이다

〔その手紙を見たのに返事をせず、その手紙を留めておかれるが、(それは)まさに知情不告と
して粗忽な振る舞いである〕

〈明義録諺解 2:24a〉

(78)…지물을 만히 주고 친히 관곽과 제물을 ㄱ초아 두고 집사람으로 더브러 영결하여 고평
다…

〈且輿之金幣親具衣棺祭物…〉

〔…財物をたくさん与え、手ずから棺と祭物を備えておき、家人を呼んで…〕

〈五倫行實圖 烈女 47b〉

(79)왕이 시험하고저 하여 도미를 머므려 두고 흔 신하로 하여곰 왕의 오솔 낚히고…

〈王欲試之留都彌以事使一近臣假王衣服…〉

〔王が試そうとして、都彌を留めておき、一人の臣下に命令して王の服を着せ…〕

〈五倫行實圖 烈女 62b〉

(80)우리도 하나 둘히셔는 되지 몬홀 써시니 送使의 談合하여 아문도로나 도홀 양으로 홀 써
시니 아직 大廳의 드려 두옵소

〈…よろしいやうにいたませうほとに まつたいてきにいれて於加しやれい〉

〈改修捷解新語 4:38b〉

(81)纏繞繫는 이 死人이 문져 노히나 씩를 가져 목 우희 두 돌림을 감아 두루고 스스로
눅흔 디를 드디여 上面에 밧야 두고 몸을 드리워 致死호얏거나

〈…自踏高繫在上面…〉

〔…自ら高い台を踏んで上面に縛っておき、身体を垂れ下げ、死に至ったのである〕

〈増修無冤録諺解 2:12a〉

(82)필경은 내 다시 득토지 아니호고 제 호는 대로 맞져 두니 제 박관이 모힐 뜻으로 못춤내
반포호고 아춤의 진하박관이 니 디흔 뜻으로써 우러러 품호니

〔…結局、私は再び争わずに、あちらのするがままに任せておき、…〕

〈明義録諺解 上首 52a〉

次のように、18世紀近世韓国語資料の「-twuta」においても、以上のような C2〈結果維持〉用法であると考えられるものの、C補助動詞的用法における C3〈事前処置〉用法と中間的であると考えられる用例が観察される。15世紀及び16世紀中世韓国語資料、17世紀近世韓国語資料における「-twuta」の V2「twuta」の場合と同様に、本稿では以下の(83)から(88)のような用例を C2'〈結果維持〉用法とし、C2〈結果維持〉用法と C3〈事前処置〉用法の中間的な用法として区別して提示することとする。以下、用例を見られたい。

C2'〈結果維持〉

(83)다만 기르던 양 톱여 구를 가지고 홀로 산등에 드러가 십여년을 양을 쳐 양이 성호여
천여 두에 니르니 전택을 사 두엇더니 그 아이 가산을 다 패호거늘…

〈…十餘季致千餘頭買田宅而弟盡破其産…〉

〔…十年余り羊を飼い、羊が増えて千頭余りに至ったので、田宅を買っておいたのだが、弟が破産したので、…〕

〈五倫行實圖 兄弟 4a〉

(84)벼슬이 이미 눅흐매 집 곳가온 곳에 도흔 밧 수천 묘를 사두어 의장을 삼아…

〈…近郭買良田數千畝爲義莊…〉

〔…家の近くに良田數千畝を買っておき、義莊をこしらえ、…〕

〈五倫行實圖 附宗族 50b〉

(85)글란 이제 東萊 술와 보내여 드릴 양으로 호오려니와 즈셔히 저거 두읍소

〈それわいもうらいゑ申つ加わして いるるやうにしませうけれとも たし加に加きつけて
於加しやれませい〉

〈改修捷解新語 1:37b〉

(86)銀貨는 優數이 辨備히여 두었스오니 失時치 마르시고 蔘貨를 入執히시면 이 편은 오히려 多多益善이읍도되

〔銀子は夥ふ用意いたしおきましたにより 其時を失れず人蔘を賣込れましたらば 此方は 猶多ひ程がよふ御坐りまする〕

〈隣語大方 1:24b〉

(87)그런 일은 預爲辨備히여 두어야 올치 臨渴掘井이란 말쳐로 덤병니니 이런 일이 일습논가
〔ヶ様な事は兼て備て置てこそ よふ御座れ…〕

〈隣語大方 3:17b〉

(88)聰明은 不如鈍筆이라 히니 아모 일이라도 後考히엄즉흔 일은 부디 기록히여 두시고져 히
읍니…

〔聰明は鈍筆に如不と申まするにより 何事も後の考に成そふな事は 必書記て置しやれませ
い〕

〈隣語大方 10:7b〉

次に、C3〈事前処置〉用法を挙げる。韓国語の「-twuta」のV2「twuta」においては、17世紀近世韓国語資料のV2「twuta」から徐々にC3〈事前処置〉用法の用例が観察されはじめるが、18世紀近世韓国語資料のV2「twuta」においては、以下の通り、より多くの用例が観察される。以下の用例を見られたい。尚、波線部分はこれらの用例におけるV2「twuta」がC3〈事前処置〉用法として用いられていることを裏付ける文言及び副詞等の表現である。

C3〈事前処置〉

(89)二三日 지나거든 銅鑑看品을 흘 써시니 문져 代官네의 출히라 닐러 두읍소
〈…さきにたいくわんしゆに こしらゑよとゆうて於加しやれい〉

〈改修捷解新語 3:38b〉

(90)一特送 中 歸舡 一隻 第一舡 中 歸舡 一隻 代官으로써 借舡 一隻 合히여 三隻이읍도되
미리 슬와 두읍소

〈…加里ふねいつそう あわせてさんそうてこさる まゑ加たに申て於加されませい〉

〈改修捷解新語 4:11a〉

(91)그러히면 日本 船頭 7장 니근 사롬을 十五人을 分付히여 두어시니…

〈…にほんのせんとうい加うこうしやなもの於 しうこにん於申つけ於きましたほとに…〉

〈改修捷解新語 5:21b〉

(92) 7장 쉬운 일이언마는 朝鮮 家風이 폐롭디 아닌 일을 폐로이 너기니 이러므로 미리 자니
네씩 당보히여 닐너 두니 그리 아르셔...

〈い加うやすいことてこされとも てうせんの加ふう加 むつ加しうないこと於むつ加しうそ
んしまするによ里 これによつて加た加ら こなたしゆゑくとうゆうて於きまするほとに…〉

〈改修捷解新語 5:33a〉

(93) 東萊令監이 近間の 新舊交龜히옵시다 히오니 去番부터 여러번 슬와 두어뎌 公幹事를 新
官끼 極盡히 付托히여 가시게 히여 주옵쇼셔

〈東萊が近内に新舊交代被成と申まするゆへ 此中より折々申置ましたこ用向を 新役に委細
申置れまするやふに 被成被下ませひ〉

〈隣語大方 1:7a〉

(94) 여러가지 거슬 혼디 녀히 두연기의 煩雜히여 猝然히 츠즈내기 어렵스오매 來日 모리 스
의 저기 閑暇히 쟈 내여 두오리

〔數々のものを一所に入ておきまして御坐るに方いりまして 俄に尋出しがたふ御坐るから
明日明後日内に ちと隙なときに出しておきませふ〕

〈隣語大方 1:24b-25a〉

(95) 에서 치고 시보되 늬의 집의셔 治罪히는 거슨 언더히오니 付過히여 두고 나가서 다스
리게 히연습니

〔これであゝきませふけれとも 他の家で罪をたゞすは 如何に御坐るにより 先ひかへま
して外え歸りましてから たゝきまするで御坐りませふ〕

〈隣語大方 1:30b〉

(96) 今年부터는 일즉 下送히옵게 뜰을 먹습고 各同事中의도 그 뜰을 다 히여 두얼스오매...

〔今年よりは早送下ませふと存立まして 仲間中にも 其趣を申置ましたにより…〕

〈隣語大方 7:2b〉

最後に、D〈完遂〉用法を挙げる。D〈完遂〉用法は「当該の動作を最後まで行う」ことを表す。この場合、「後に続く事態を見越す」といった〈準備性〉は表出しない。以下の通り、18世紀近世韓国語におけるD〈完遂〉用法は、以下の(97)一例のみである。本稿において使用した15世紀中世韓国語から18世紀近世韓国語資料全体を通して、このD〈完遂〉用法の「-おく」の用例は、日本語の「-おく」と同様に僅少である。以下、用例を挙げる。

D 〈完遂〉

(97)兩國 間 일을 勿論公私事^{ᄃᆞᆫ}업고 約束을 定^{ᄃᆞᆫ}여 두온 후는 約束 디로 서ᄃᆞᆫ 舉行^{ᄃᆞᆫ}는
거시 事理의 아니 당연^{ᄃᆞᆫ}니인가…

〔兩國の儀は 公私の事に寄ませず 約條を相定ましてからは 約束の通 互に取行ますが
道理におゐて當然で御座りませぬか…〕

〈隣語大方 7:17a〉

5.2 韓国語の「-nohta」

本節では、15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語にかけて観察される「-nohta」における V1 の特性及び V2「nohta」の意味用法を明らかにする。まず V1 の特性については、V2「nohta」に前接する V1 を表で提示した後、その形態的特徴及び「自他」といった動詞的性質について、実際の用例を挙げながら考察する。

5.2.1. 15 世紀中世韓国語の「-nohta」

まず、15 世紀中世韓国語資料において観察される「-nohta」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-nohta」における V2「nohta」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.2.1.1. V1 の特性

以下の表 17 は、15 世紀中世韓国語資料において観察される「-nohta」の V1 を用例数とともに提示するものである。15 世紀中世韓国語資料全体における「-nohta」の異なり語数は 6、延べ語数は 9 であり、同じ 15 世紀中世韓国語資料における「-twuta」よりも出現頻度が非常に少ないことがわかる。尚、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 18 で提示する通りである。以下、表 17 と表 18 を見られたい。

表 17 15 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の V1

V1	日本語訳	月印	三綱	合計
글어-	解く	2	1	3
내야-	出す	1		1
니서-	繋げる	1		1
바다-	受ける	1		1
짜다-	織る		1	1
퍼-	広げる	2		2
合計		7	2	9

表 18 15 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の V1 の異なり語数および延べ語数

	月印	三綱	合計
異なり(延べ)	5(7)	2(2)	6(9)

次に、「-nohta」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 19 の通り示される。「-nohta」の V1 の形態として、「動詞語幹+nohta」のものは観察されず、すべて「動詞語幹+・e +nohta」であり、この点は「-twuta」と共通する。以下、表 19 を見られたい。

表 19 15 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の V1 の形態

	月印	三綱	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+・e	5(7)	2(2)	6(9)

次に、「-nohta」における V1 の自他に注目してみると、表 20 の通り示される。本稿において使用した 15 世紀中世韓国語資料の「-nohta」において、「自動詞+nohta」のものは一例も観察されず、すべて「他動詞+nohta」であった。V1 として自動詞を取らないのは、「-twuta」の場合と同様である。以下、表 20 を見られたい。

表 20 15 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の V1 の自他

	月印	三綱	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	5(7)	2(2)	6(9)

5.2.1.2. 意味用法

次に、15 世紀中世韓国語資料において観察される「-nohta」の V2 「nohta」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、15 世紀中世韓国語において「-nohta」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A2 〈置く〉用法を挙げる。再掲するが、A2 〈置く〉用法は「事物に、ある位置を占めさせる」という実質的な動作を表すものである。これは、日本語の本動詞「置く」や韓国語の本動詞「twuta」と同様、本動詞「nohta」の持つ原義そのものである。以下の用例を見られたい。

A2 〈置く〉

(98)安樂國이 듣고 菩提樹 미틱 가 보니 삼동내 버혀 더뎛거늘 주서다가 次第로 니서노코 짜 해 업데여 그 울며…

〔安樂国はその話を聞き、菩提樹の下に行って見ると、三つに切断された(母の遺体が)放り捨てられていたので、拾って順番に繋げて置き、地面に伏せて泣きながら…〕

〈月印釈譜 8:102a〉

(99)金銀 돈 三千과 수암쇼 三百을 말다히 내야 노히시니…

〔金貨と銀貨三千と牡牛と牝牛三百を、言われるままに、出して並べられ、…〕

〈月印釈譜 20:57a〉

Jeong(2006)では、(98)と(99)の用例に対して、具体的な意味が捉えられるため「接続構造」としてみることができると分析している。「-nohta」のV1とV2「nohta」の間が連結語尾「-서(-se)」等によって分離可能であり、V2が単独で述語の機能を持つためである。

次に、A本動詞的用法におけるA3〈放つ〉用法を挙げる。再掲するが、A3〈放つ〉用法は「手で何かを掴んだり押さえている状態から、手を広げたり力を抜いて掴んでいたものが手の外へ抜けていくようにする」という実質的な動作を表すものである。この場合のV2「nohta」は本動詞「nohta」の原義そのものを表しており、日本語のV2「おく」や韓国語のV2「twuta」にはない、「nohta」のみに特有の用法であるといえる。以下の用例を見られたい。

A3 〈放つ〉

(100)放은 노홀 씨오 逸은 便安홀 씨니 제 便安홀 야으로 只 諷 7 장 퍼 노하 조심 아니홀 씨라

〔「放」は「はなつこと」であり、「逸」は「安らかなこと」であるので、「放逸」は自分が安らかでいられるように、心を広げて放ち、用心をしないことである〕

〈月印釈譜 21:208a〉

(101)그 ㅅㅅ 世尊이 한 사르물 거느리샤 比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷 無數億萬을 앞뒤헤 圍繞 히시고 虚空身을 퍼노히시니…

〔その時世尊が…虚空身を広げて放つと、…〕

〈月印釈譜 23:88〉

(102) 山 자히 보고 太子를 셔스바 怒흔 뜨데 미야 뒷터니 婆羅門이 너교디 나를 주깊가 하
야 거죇말로 글어 노히니...

〈月印釈譜 20:46b〉

〈主曰：織絹三百匹，即放。於是一月之內，三百匹絹足，主驚，遂放二人而去。…〉

〈三綱行實圖 孝子 11a〉

〈…今力已屈，當受處分，賊遂釋之，妻因取賊刀，…〉

〈三綱行實圖 烈女 13b〉

しかし、(101)に関しては、同じ 15 世紀中世韓国語資料『月印釈譜』において観察される割注内の記述(100)において、「放은 노홀 씨오(放-An noh-Al ssio, 「放」は「はなつこと」)」と註釈しており、「펴놓다(pye-nohta、広げて放つ)」の V2「놓다(nohta)」が A3〈放つ〉の「nohta」として用いられている可能性を示唆する。したがって、(101)の「펴놓다(pye-nohta)」の V2「놓다(nohta)」も A3〈放つ〉用法として用いられている可能性が高い。

また、(103)の「파다 놓다(pcaz-a noh-ta、織り、放す)」も、原典において対応漢字がそれぞれ「織」、「放」となっており、15世紀中世韓国語による諺文における「돈 님자히 닐오디 김三百匹을 파다 노호리라(ton nimcah-inil-odAi kip 三百匹-Al **pcaz-a noh-olila**)」の部分も、原典の「主曰. 織絹三百匹. 卽放.」に沿って「主人が言った。(董永の妻が)絹三百匹を織ったら、(すぐに董永とその妻を)放す(解放する)」と解釈するのが妥当であろう。後続文脈として「한 달 안에 다 먹고 노히(ひと月の内にすべて織り、(二人は)放された(解放された))」という継起的動作を表す「V+-ko+V」が続いている上、さらにその後続文脈の中に「놓다(noh-ta)」に受身の接尾辞「-이(-i)」が結合した「놓이다(noh-i-ta、放される)」という形式も見られるため、(103)のV2「nohta」がいずれも本動詞「nohta」として用いられている可能性が高いといえる。(102)の場合も同様にV2「nohta」に受身の接尾辞「-이(-i)」が結合しており、(104)に関しても、やはりこのV2「nohta」はA3〈放つ〉用法であると考えるのが妥当であると思われる。

したがって、15世紀中世韓国語における「-nohta」に関しては、V2「nohta」の用法においてA2〈置く〉あるいはA3〈放つ〉のみであり、補助動詞的な用法はまだ出現していないと判断される。

5.2.2. 16 世紀中世韓国語の「-nohta」

次に、16 世紀中世韓国語資料において観察される「-nohta」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-nohta」における V2「nohta」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.2.2.1. V1 の特性

以下の表 21 は、16 世紀中世韓国語資料において観察される「-nohta」の V1 を用例数とともに提示するものである。16 世紀中世韓国語資料全体における「-nohta」の異なり語数と延べ語数はともに 7 であり、同じ 15 世紀中世韓国語資料における「-nohta」と同様、依然として出現頻度が非常に少ないといえる。尚、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 22 で提示する通りである。以下、表 21 と表 22 を見られたい。

表 21 16 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の V1

V1	日本語訳	翻老	重三	順川	合計
그리-	解く		1		1
내여-	出す			1	1
뒤혀-	うら返す			1	1
드려-	入れる	1			1
자바-	捕まえる			1	1
빠-	溶かし混ぜる	1			1
혀-	引く	1			1
合計		3	1	3	7

表 22 16 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の V1 の異なり語数および延べ語数

	翻老	重三	順川	合計
異なり(延べ)	3(3)	1(1)	3(3)	7(7)

次に、「-nohta」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 23 の通り示される。15 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の場合と同様に、16 世紀中世韓国語資料における「-nohta」も V1 の形態として、「動詞語幹+nohta」のものは観察されず、すべて「動詞語幹+ -e +nohta」である。以下、表 23 を見られたい。

表 23 16 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の V1 の形態

	翻老	重三	順川	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+-e	3(3)	1(1)	3(3)	7(7)

次に、「-nohta」における V1 の自他に注目してみると、表 24 の通り示される。本稿において使用した 16 世紀中世韓国語資料の「-nohta」において、「自動詞+nohta」のものは一例も観察されず、すべて「他動詞+nohta」であった。やはり、16 世紀中世韓国語資料における「-nohta」も他動詞のみを V1 としてとるようである。以下、表 24 を見られたい。

表 24 16 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の V1 の自他

	翻老	重三	順川	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	3(3)	1(1)	3(3)	7(7)

5.2.2.2. 意味用法

次に、16 世紀中世韓国語資料において観察される「-nohta」の V2 「nohta」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、16 世紀中世韓国語において V2 「nohta」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A2 〈置く〉用法を挙げる。これは、日本語の本動詞「置く」や韓国語の本動詞「twuta」と同様、本動詞「nohta」の持つ原義そのものである。以下の用例を見られたい。

A2 〈置く〉

(105)집 혼 술위 자븐것 년는 술위 나귀 노새 메우논 큰 술위 툇는 술위 다 도히 지빅 드려
노하 두고 눈비에 젖게 말라

〈…坐車兒, 都好生房子裏放着. …〉

〔「…人が乗る車をすべてちゃんと家に入れて置いておき、雨雪に濡れないようにせよ」〕

〈翻譯老乞大下〉

次に、A 本動詞的用法における A3〈放つ〉用法を挙げる。この場合の V2「nohta」は本動詞「nohta」の原義そのものを表しており、日本語の V2「おく」や韓国語の V2「twuta」にはない、「nohta」のみに特有の用法であるといえ、15 世紀中世韓国語資料における V2「nohta」同様、16 世紀中世韓国語資料における V2「nohta」にも観察される。以下の用例を見られたい。

A3〈放つ〉

(106) 그 도조기 즉재 훈 弓手를 살 혀 노하 쏘니 물게 노력 디니 그 도조기 셋녁으로 물 들 여 니거늘…

〈那賊便将一箇弓手, 放箭射, 下馬來, 那賊往西走馬去了.〉

〔…その盗賊がただちに弓手一つ、矢を引いて放ち、射ると、…〕

〈翻譯老乞大上 28b-30a〉

(107) 도조기 그러 노하대 최시 도조기 갈흘 아사 나무 지혀서 날오디 나를 주기거든 주기고 죽고져 시브거든 나야오라 하야날 도조기 크게 노하야 모다 쏘아 주기니라

〔…盗賊が(崔氏を)解き放つと、崔氏は盗賊の刀を奪って、…〕

〈重刊三綱行實圖 烈女 13a〉

最後に、D〈完遂〉用法を挙げる。D〈完遂〉用法は「当該の動作を最後まで行う、当該の動作を完全に行う」ことを表す。この場合、「後に続く事態を見越す」といった〈準備性〉は表出しない。以下の通り、16 世紀中世韓国語における V2「nohta」の D〈完遂〉用法は、以下の(108)一例のみである。

以下の(108)は、16 世紀中世韓国語資料の V2「twuta」において観察された(34)のように、原典において「上」が対応漢字として出現している用例である。前述の通り、この「上」は Jeong(2006)において〈動作の完成性〉を表すものとして説明されている。

以下の(108)における原典を検討すると、「…將油熟了時, 下上肉, 着些塩, 着筋子攪動, 炒的半熟時, 調上些醬水, 料物拌了. …(…油が熱くなったら肉を入れて裏返し、塩を入れて箸で裏返して炒め、半分ほど火が通ったら、味噌を溶いた水と生葱と調味料を溶かし混ぜてから、(肉とそれらを)かき回し、…)」となっており、「調上些醬水(味噌を溶いた水と生葱と調味料を溶かし混ぜる)」ことが「料物拌了((肉とそれらを)かき回す)」作業の前に行われる、独立した補助的作業として表されている。つまり、「料物拌了((肉とそれらを)かき回す)」という作業を行うためには、「調上些醬水(味噌を溶いた水と生葱と調味料を溶かし混ぜる)」という作業が完遂していなければならないため、この場合の「上」は「調(混ぜる)」という動作が最後まで完全に行われることを表しているといえる。したがって、(108)の「따 놓다(ptha noh-ta)」の

V2 「nohta」は D 〈完遂〉用法として用いられていると判断することができる。以下、用例を挙げる。

D 〈完遂〉

(108)므슴 어려운 고디 이시리오 가마 굽싹고 가마에 불 디더 덮거든 반 잔만 참기름 두워
기르미 닉거든 고기 녀허 두의저터며 소곰 두고 저로 두의저터 붓가 반만 닉거든 장물와
파와 약돌 따 노하 짓고 가맛우흘 돕고 김 나게 말오 불디더 두면 아니한 슷시에 닉느니라
〈…將油熟了時, 下上肉, 着些塩, 着筋子攪動, 炒的半熟時, 調上些醬水, 生葱, 料物拌了. 鍋子上盖
覆了, 休着出氣, …〉

〔「…油が熱くなったら肉を入れて裏返し、塩を入れて箸で裏返して炒め、半分ほど火が通つたら、味噌を溶いた水と生葱と調味料を溶かし混ぜてから、(肉とそれらを)かき回し、釜の蓋を被せて湯気が出ないようにし、火を焚いておけば、間もなく火が通る」〕

〈翻譯老乞大上 21b-22a〉

5.2.3. 17 世紀近世韓国語の「-nohta」

次に、17 世紀近世韓国語資料において観察される「-nohta」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-nohta」における V2 「nohta」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.2.3.1. V1 の特性

以下の表 25 は、17 世紀近世韓国語資料において観察される「-nohta」の V1 を用例数とともに提示するものである。17 世紀近世韓国語資料全体における「-nohta」の異なり語数は 6、延べ語数は 7 であり、依然として出現頻度が非常に少ない。尚、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 26 で提示する通りである。以下、表 25 と表 26 を見られたい。

表 25 17 世紀近世韓国語資料における「-nohta」の V1

V1	日本語訳	練兵	東烈	重杜詩	老諺	合計
눌러-	押す、押さえる			1		1
빠-	溶かし混ぜる				1	1
돌려-	回す	1				1
드려-	入れる		1		1	2
번ㄷ라-	順番を替える	1				1
지어-	作る		1			1
合計		2	2	1	2	7

表 26 17 世紀近世韓国語資料における「-nohta」の V1 の異なり語数および延べ語数

	練兵	東烈	重杜詩	老諺	合計
異なり(延べ)	2(2)	2(2)	1(1)	2(2)	6(7)

次に、「-nohta」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 27 の通り示される。15 世紀中世韓国語資料や 16 世紀中世韓国語資料における「-nohta」の場合と同様に、17 世紀近世韓国語資料における「-nohta」も V1 の形態として、「動詞語幹+nohta」のものは観察されず、すべて「動詞語幹+ -e +nohta」である。

表 27 17 世紀近世韓国語資料における「-nohta」の V1 の形態

	練兵	東烈	重杜詩	老諺	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+-e	2(2)	2(2)	1(1)	3(3)	6(7)

次に、「-nohta」における V1 の自他に注目してみると、表 28 の通り示される。本稿において使用した 17 世紀近世韓国語資料の「-nohta」において、「自動詞+nohta」のものは一例も観察されず、すべて「他動詞+nohta」であった。やはり、17 世紀近世韓国語資料における「-nohta」も他動詞のみを V1 としてとるようである。以下、表 28 を見られたい。

表 28 17 世紀近世韓国語資料における「-nohta」の V1 の自他

	練兵	東烈	重杜詩	老諺	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	2(2)	2(2)	1(1)	3(3)	6(7)

5.2.3.2. 意味用法

次に、17 世紀近世韓国語資料において観察される「-nohta」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、17 世紀近世韓国語において「-nohta」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A2〈置く〉用法を挙げる。これは、日本語の本動詞「置く」や韓国語の本動詞「twuta」と同様、本動詞「nohta」の持つ原義そのものであるが、17 世紀近世韓国語の V2「nohta」においても A2〈置く〉用法の用例が観察される。以下の用例を見られたい。

A2〈置く〉

(109)서리 마즌 텅지 곳다운 橘에 눌러 노향도다

〈霜橙壓香橘〉

〔霜のついた枸橘、香り高い橘(の上)に押さえ置き(てある)〕

〈重刊杜詩諺解 2:36a〉

(110)집 지은 슬워 잡은 것 년느 슬워 나귀 노새들 머오느 큰 슬워 특느 슬워 다 도히 집의
드려 노하 두고 雨雪에 짓게 말라

〈…坐車兒, 都好生房子裏放着. …〉

〔…人が乗る車をすべてちゃんと家に入れて置いておき、雨雪に濡れないようにせよ〕

〈老乞大諺解 下 33a〉

次に、D〈完遂〉用法を挙げる。D〈完遂〉用法は「当該の動作を最後まで行う、当該の動作を完全に行う」ことを表す。この場合、「後に続く事態を見越す」といった〈準備性〉は表出しない。以下の通り、17世紀近世韓国語における V2「nohta」の D〈完遂〉用法は、以下の二例のみである。

D〈完遂〉

(111)능금이는 만경현 사름이니 갑스 최티강의 겨집이라 지아비 죽거를 복이 못츠되 오히려
흰 옷 입고 고기 먹디 아니코 요석의 상식히고 미 절의 의복 지어 노터라

〈…猶素衣不食肉朝夕上食每節製衣服以爲〉

〔…むしろ白衣を着て肉を食べず、朝夕上食をして、毎節に衣服を作りあげた〕

〈東國新續三綱行實圖 烈女圖 2:60b〉

(112)므슴 어려온 고디 이시리오 가마 굽싹고 블 찌더 가매 덥거든 반 잔만 찹기름 두어
기름이 닳거든 고기 녀허 뒤이즈며 저기 소곰 두고 저로 뒤저어 붓가 반만 닳거든 장물의
파와 교토를 따 노하 섯고 가마 두에 덥고 김나게 말고 블 찌더 혼 디위만 흥면 닳느니라
〈…將油熟了時, 下上肉, 着些塩, 着筋子攪動, 炒的半熟時, 調上些醬水, 生葱, 料物拌了. 鍋子上盖
覆了, 休着出氣, …〉

〔「…油が熱くなったら肉を入れて裏返し、塩を入れて箸で裏返して炒め、半分ほど火が通ったら、味噌を溶いた水と生葱と調味料を溶かし混ぜてから、(肉とそれらを)かき回し、釜の蓋を被せて湯気が出ないようにし、火を焚いておけば、間もなく火が通る」〕

〈老乞大諺解 上 19b〉

5.2.4. 18 世紀近世韓国語の「-nohta」

次に、18 世紀近世韓国語資料において観察される「-nohta」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-nohta」における V2 「nohta」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.2.4.1. V1 の特性

以下の表 29 は、18 世紀近世韓国語資料において観察される「-nohta」の V1 を用例数とともに提示するものである。18 世紀近世韓国語資料全体における「-nohta」の異なり語数は 9、延べ語数は 11 であり、やはり韓国語の「-twuta」に比べ出現頻度が非常に少ない。尚、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 30 で提示する通りである。以下、表 29 と表 30 を見られたい。

表 29 18 世紀近世韓国語資料における「-nohta」の V1

V1	日本語訳	明義	五倫	隣語	敬信	増無	合計
내여-	出す	1					1
던해-	伝える	1					1
드려내여-	あらわにする				1		1
드려(드려)-	入れる					2	2
버려-	設ける	1					1
사-	買う				1		2
設行ᄃ여-	催す			1			1
펴-	広げる		1			1	2
프라-	解く		1				1
合計		3	2	1	2	3	11

表 30 18 世紀近世韓国語資料における「-nohta」の V1 の異なり語数および延べ語数

	明義	五倫	隣語	敬信	増無	合計
異なり(延べ)	3(3)	2(2)	1(1)	2(2)	2(3)	9(11)

次に、「-nohta」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 31 の通り示される。15 世紀及び 16 中世韓国語資料や 17 世紀近世韓国語資料における「-nohta」の場合と同様に、18 世紀近世韓国語資料における「-nohta」も V1 の形態として、「動詞語幹+nohta」のものは観察

されず、すべて「動詞語幹+ -e +nohta」である。以下、表 31 を見られたい。

表 31 18 世紀近世韓国語資料における「-nohta」の V1 の形態

	明義	五倫	隣語	敬信	増無	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+-e	3(3)	2(2)	1(1)	2(2)	2(3)	9(11)

次に、「-nohta」における V1 の自他に注目してみると、表 32 の通り示される。本稿において使用した 18 世紀近世韓国語資料の「-nohta」においても「自動詞+nohta」のものは一例も観察されず、すべて「他動詞+nohta」であった。やはり、18 世紀近世韓国語資料における「-nohta」も他動詞のみを V1 としてとるようである。以下、表 32 を見られたい。

表 32 18 世紀近世韓国語資料における「-nohta」の V1 の自他

	明義	五倫	隣語	敬信	増無	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	3(3)	2(2)	1(1)	2(2)	2(3)	9(11)

5.2.4.2. 意味用法

次に、18 世紀近世韓国語資料において観察される「-nohta」の意味用法について考察する。3.2.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、18 世紀近世韓国語において「-nohta」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A2〈置く〉用法を挙げる。これは、日本語の本動詞「置く」や韓国語の本動詞「twuta」と同様、本動詞「nohta」の持つ原義そのものである。以下の用例を見られたい。

A2〈置く〉

(113) 일즉 축군에 원을 하여 갖다가 집과 비단을 어더 도라와 다 당 우히 피노코 형데로 하여곰 모름대로 곁히여 가지라 하고 미양 날오디

〈…得奇繪文錦以歸悉布於堂上恣兄弟擇取常曰…〉

〔…絹織物をもらって帰ってきて、全て堂の上に広げて置き、兄弟に好きなように取って持つていけと言ひ、…〕

〈五倫行實圖 兄弟 10b〉

(114) 초로써 적시고 屍를 곳 안히 드려노코 衣物로써 덮혔다가 7장 오라매

〈醋沃之置屍坑内以衣物覆之良久〉

〔酢で濡らして屍を坑の中に入れて置き、衣物で覆ってから、…〕

〈増修無冤録諺解 1:42b〉

次に、A 本動詞的用法における A3 〈放つ〉用法を挙げる。この V2 「nohta」における A3 〈放つ〉用法は、日本語の V2 「おく」や韓国語の V2 「twuta」にはない、「nohta」のみに特有の用法は 18 世紀近世韓国語資料の「nohta」においても観察される。以下の用例を見られたい。

A3 〈放つ〉

(115) 이제는 힘이 굴히여시니 너를 조차리라 하니 도적이 프리 노커는 최시 도적의 칼을 아사 쥐고 남글 의지히여 서서 굴오디

〈…賊遂釋之妻因取賊刀…〉

〔…盜賊はついに(崔氏を)解き放つと、崔氏は盜賊の刀を奪い取って、…〕

〈五倫行實圖 烈女 26b〉

(116) 胡麻두어 말을 가져 우희 피노향다가 뷔로 풀면 새 속잇 기름이 흠 속에 스미여 드러…
〈…取胡麻數斗撮上用帚掃之則麻内之油沁入土中…〉

〔胡麻を数斗持って、上に広げ放つてから帚で掃くと、胡麻の中の油が土の中に染み入り…〕

〈増修無冤録諺解 3:94b〉

最後に、D 〈完遂〉用法を挙げる。D 〈完遂〉用法は「当該の動作を最後まで行う、当該の動作を完全に行う」ことを表す。以下の通り、18 世紀近世韓国語における V2 「nohta」の D 〈完遂〉用法は、以下の(117)と(118)の二例のみである。

ただ、これらの(117)、(118)の用例は他の用法のものと中間的であると考えられる。例えば、(117)の「드려내여 놓다(tul-e-nay-ye noh-ta, あらわにする)」の場合は、「더러운 것과 더러운 그릇(teleo-n kes-kwa teleo-n kulus, 汚れた物と汚れた器)」という対象物を「신령 압과 삼광 일월성신 아래(sinlyeng ap-kwa samkwang ilwelsyengsin alay, 心霊の前と三光日月星辰の下)」という場所に「드려내여 놓다(tul-e-nay-ye noh-ta, あらわにして、置く)」のように A2 〈置く〉用法として解釈し得る可能性もある。また、(118)の「設行키여 놓다(設行 hA-ye noh-ta, 催す)」の場合は、D 〈完遂〉の他、C3 〈事前処置〉用法としての解釈も可能である。以下、用例を見られたい。

D 〈完遂〉

(117)더러운 것과 더러운 그릇을 신령 압과 삼광 일월성신 아래 드리내여 노치 말며…

〔汚れた物と汚れた器を心霊の前と三光日月星辰の下にあらわにせず、…〕

〈敬信錄諺釈 70b〉

(118)館守는 館中領首오니 당신 宴享부터 몬져 設行히여 노코 其餘小送使 宴享은 점초로
지내미 아니 존스올가

〈館守は館内の御頭で御座るにより 彼方の宴享から先にしもふておゐて 其餘の小送使衆
のいはちも 段々にするがよひでは御座りませぬか〉

〈隣語大方 4:22b〉

5.3 韓国語の「-pelita(pAlita)」

本節では、15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語にかけて観察される「-pelita(pAlita)」における V1 の特性及び V2「pelita」の意味用法を明らかにする。まず V1 の特性については、V2「pelita(pAlita)」に前接する V1 を表で提示した後、その形態的特徴及び「自他」といった動詞的性質について、実際の用例を挙げながら考察する。

5.3.1. 15 世紀中世韓国語の「-pelita」

まず、15 世紀中世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-pelita(pAlita)」における V2「pelita(pAlita)」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.3.1.1. V1 の特性

以下の表 33 は、15 世紀中世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V1 を用例数とともに提示するものである。15 世紀中世韓国語資料全体における「-pelita(pAlita)」の異なり語数は 64、延べ語数は 345 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 34 で提示する通りである。以下、表 33 と表 34 を見られたい。

表 33 15 世紀中世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1

V1	日本語訳	釈譜	月印	楞嚴	円覚	金剛	杜詩	三綱	南明	合計
마라-	磨く			2						2
마리터-	殴り飛ばす						1			1
굴히야-	選ぶ、分つ			2						2
갓가-	削る						2			2
빠-	消す						1			1
거더-	取る、集める						5			5
빠디워-	消す			1						1
것거-	折る		1				1			2
그쳐-	断じる		15	1			5			21
글어-	解く						1			1
내조차-	追い出す			1						1
너겨-	思う						1			1

노하-	置く、放つ		8		2	4		1	5	20
늘거-	老いる						1			1
니버-	着る						1			1
니저-	忘れる	1	1						2	4
뺨러-	壊す						1			1
더러-	払う、落とす	2	10	2			5			19
떠-	開く						1			1
떠러-	払う、落とす	2	7	7		4	8		2	30
드뵈-	争う						1			1
두위터-	ひっくり返す						1			1
드위혀-	ひっくり返す					1				1
들워-	穿つ						1			1
띄워-	浮かべる							1		1
미야-	縛る						1			1
머므러-	留まる						1			1
무더-	埋める		3	1		1		1		6
무터-	付ける		1							1
믹여-	破る						1			1
미러-	押す			2			1	1		4
쌌라-	吸う							1		1
슬혀-	払う						1			1
봏아(봏아)-	壊す、砕く		1	2	1					4
바사(버서)-	脱ぐ		1				2		2	5
바혀(버혀)-	切る	1					2			3
빠혀(빼혀)-	抜く、除く						3			3
벗겨(밧겨)-	外す		1					2		3
부러-	吹く		2						1	3
스라-	燃やす		1			2	1	1		5
스러-	消す			4						4
쓰러-	掃く	3	2		1	7	12		5	30
시서-	洗う						6			6

아싸-	奪う					2	1	1		4
에워-	取り囲む					2				2
여희여-	なくす	1								1
이어-	振る						1			1
이저-	欠ける		1	1		1	1			4
일허-	失う						1		4	5
뻘야-	裂く		1							1
뻘터-	裂く							1		1
뻘허-	裂く						1			1
주거(주겨)-	殺す							1		1
지여(저)-	※破る					7	17		3	27
츠마-	我慢する	1								1
터-	叩く		1				3			4
파-	掘る			1						1
퍼러-	青くなる						1			1
퍼-	広げる	1		1		1				3
헐야-	※壊す、滅ぼす	10	35	10	8	4	4	3	2	76
히야-	※壊す、滅ぼす						2			2
허러-	壊す	1	1				2			4
흐러-	散らす						1			1
合計		23	93	38	12	36	103	14	26	345

表 34 15 世紀中世韓国語資料における「-pAlita」の V1 の異なり語数および延べ語数

	釈譜	月印	楞嚴	円覚	金剛	杜詩	三綱	南明	合計
異なり(延べ)	10(23)	19(93)	15(38)	4(12)	12(36)	40(103)	11(14)	9(26)	63(345)

次に、「-pelita(pAlita)」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 35 の通り示される。

「-pelita(pAlita)」の V1 の形態として、「動詞語幹+pelita(pAlita)」のものは観察されず、すべて「動詞語幹+ -e +pelita(pAlita)」である。

表 35 15 世紀中世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の形態

	釈譜	月印	楞嚴	円覚	金剛	杜詩	三綱	南明	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+-e	10(23)	19(93)	15(38)	4(12)	12(36)	40(103)	11(14)	9(26)	63(345)

次に、「-pelita(pAlita)」における V1 の自他に注目してみると、表 36 の通り示される。本稿において使用した 15 世紀中世韓国語資料の「-pelita(pAlita)」において、「自動詞+pelita(pAlita)」のものは異なり語数 5、延べ語数 8 のみ観察され、他はすべて「他動詞+pelita(pAlita)」であった。以下の表 36 を見られたい。

表 36 15 世紀中世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の自他

	釈譜	月印	楞嚴	円覚	金剛	杜詩	三綱	南明	合計
自動詞	0(0)	1(1)	1(1)	0(0)	1(1)	5(5)	0(0)	0(0)	5(8)
他動詞	10(23)	18(92)	14(37)	4(12)	11(35)	35(98)	11(14)	9(26)	58(337)

5.3.1.2. 意味用法

次に、15 世紀中世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の意味用法について考察する。3.4. で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、15 世紀中世韓国語において「-pelita(pAlita)」の V2 「pelita(pAlita)」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A1 〈捨てる〉用法を挙げる。再掲するが、A1 〈捨てる〉用法は「持っている、必要のないものを投げたり放ったりする」という実質的な動作を表すものである。これは、本動詞「pelita(pAlita)」の持つ原義そのものである。この A1 〈捨てる〉用法の V2 「pelita(pAlita)」には(120)のように、原典において「棄」を対応漢字としている用例も観察される。原典の対応漢字については、動かぬ証拠というよりはあくまで参考程度に留めておくべきではあるが、「-pelita(pAlita)」における V2 「pelita(pAlita)」の解釈を支える根拠の一つになると考えられる。以下、用例を見られたい。

A1〈捨てる〉

(119)獄卒이 그 말 듣고 머리를 수거 죄슬히 노하 버리고 머리 조사 一千 디위 나마 절하고
讚歎하야 날오디…

〔獄卒はその言葉を聞いて頭を下げ、鋏を放して捨て、…〕

〈月印釈譜 23:82b〉

(120)기피 信하리 허러 붓오물 조차 地中에 무더 버려…

〈…其深信者 從其毀碎 埋棄地中…〉

〔深く信じる者も、壊し砕くのに従い、地中に埋め棄て、…〕

〈楞嚴經諺解 9:77b〉

次に、B 複合動詞的用法における B1〈対象物除去〉の用法を挙げる。再掲するが、これは「付着していた不必要なものを取り除く」、「これまで持っていた悪い考えや思想を払拭する、断ち切る、滅却する」ことを表す。この B1〈対象物除去〉の場合、本動詞「pelita(pAlita)」において以上のような意味用法が存在しないため、「-pelita(pAlita)」において独自に出現した意味用法である可能性が高いといえる。

この B1〈対象物除去〉は、本稿において使用した 15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語まで遍く観察される用法であり、その他の用例よりも非常に多くの用例が観察される。(123)から(126)の用例のように、各資料の原典において「除」や「落」、「去」等が対応漢字となっている場合が多々観察され、これらの「-pelita(pAlita)」において、V2「pelita(pAlita)」が〈対象物除去〉の用法で用いられていた可能性を示唆する。

ただし、この B〈対象物除去〉用法と思われる「-pelita(pAlita)」の中にも、A1〈捨てる〉用法や次に挙げる C 補助動詞的用法と中間的である用例も多く含まれており、先の「除」や「去」といった原典における対応漢字や前後の文脈を以てしてもどちらか判断のつかない場合も多い。したがって、本稿においてはそれぞれの用法における最も典型的だと思われる用例を挙げ、「-pelita(pAlita)」の B1〈対象物除去〉用法に関する規定を行うこととする。以下、用例を見られたい。

B1 〈対象物除去〉

(121)阿難이 내드라 ㅎ 수프레 가 안자이서 上地定을 니겨 허근 結을 다 떠리브려 阿羅漢果를 證호고 結集호는 門 밧기 와 들아지라 호야닐…

〔阿難は走って林の中に行き、座って上地定を習い、小さい結をすべて取り除き、羅漢果を証し、…〕

〈积譜詳節 24:2b〉

(122)善容이 무로디 너희 그리 밋고래 이서 므슴 煩惱를 몬 쓰리 브리관디 得道를 몬호엿는 다

〔…「あなたたちはそのように山奥にいらっしゃりながら、どうして煩惱を払い除けられず、得道できないのですか」〕

〈积譜詳節 24:26a〉

(123)比丘 | 偈 지서 對答호디 내 므슴미 解脫을 得호야 뒤논 거슬 다 더리브료니 이 모미 사 ㄴ외야 앓기디 아니호노이다

〈…我心得解脱 斷除諸有盡 今此身骸 無復恪惜…〉

〔…「私の心は解脱を得て、持っていたものをすべて捨て去ったので、この身などこれ以上惜しくない」…〕

〈积譜詳節 24:16a〉

(124)이논 일후미 色陰區宇 | 라 모든 念을 스리 브료몬 물고모로 虛妄호 生滅을 두르혀미라
〈…銷落諸念者…〉

〔…すべての念を消し去ることは、清いものに虚妄な生滅を取り戻すことである〕

〈楞嚴經諺解 9:51a〉

(125)엇데 구퉁여 文字를 떠리 브리고 各別히 말슴 업슨 ㅼ들 求호리오

〈何須拂去文字…〉

〔どうしてわざわざ文字を払い去り、別にお言葉のない意味を求めるのか〕

〈金剛經三家解 5:15b〉

(126)比丘 | 偈로 對答호디 내 므슴미 解脫을 得호야 諸有를 다 그쳐 브료니 이 모미사 앓기디 아니호리라

〈…我心得解脱 斷除諸有盡 今此身骸 無復恪惜…〉

〔…「私の心は解脱を得て、諸有をすべて断ち切ったので、この身など惜しくない」〕

〈月印积譜 25:78b〉

(127) ㅎ다가 最上頓宗을 議論홀딘덴 곧 이 凡과 聖과 通티 몬ㅎ느니 金剛王寶劔으로 막
ㅁ장 쓰러 버려 나뉘 업기 ㅎ고…

〈…盡情掃蕩無餘…〉

〔…金剛王の宝劔で心の隅から隅まで掃き去り、残るものが無いようにし、…〕

〈金剛經三家解 5:40b〉

以下からは、15 世紀中世韓国語資料で觀察される「pelita(pAlita)」の V2 「pelita(pAlita)」における C 補助動詞的用法の用例である。

まず、C 補助動詞的用法における C1 〈一掃〉用法を挙げる。前述の通り、C1 〈一掃〉用法は「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」、「面倒な状況を解消するために当該の動作が行われること」を表す。

この C1 〈一掃〉は、〈消去的動作〉の消えてなくなる心理状態や状況を「①視点者(動作主体あるいは話し手)にとって、不必要、無益な心理状態や状況」として捉えることにより表出する意味用法である。当該の動作の結果、爽快感を伴う場合もあり、そのような意味において結果状態に対する話し手(視点者)の評価(プラスの評価)が表出している場合もあるが、結果状態に対する評価よりも当該の動作そのものの勢いや積極性が主に捉えられている場合が多い。

この C1 〈一掃〉用法の場合は、V2 「pelita(pAlita)」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それを含む構文において V2 「pelita(pAlita)」は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「pelita(pAlita)」が表すような実質的動作等を表しているともいえない。したがって、V2 「pelita(pAlita)」の補助動詞的用法であると認めることができる。以下の用例を見られたい。

C1 〈一掃〉

(128) ㅁ이 닐오디 그러면 네 몬져 주그리로다 ㅎ고 그 모딘 노물 스라 주기고 地獄을 허려
버리니라

〔…その凶悪な男を焼き殺し、地獄を壊してしまった〕

〈釈譜詳節 24:18b〉

(129) 그 어미 아들 나니더늘 중들홀 모도아 닐오디 ㅎ다가 중곳 내 門 알피 오나든 매로
그우리 터 버리고…

〔…「もし僧がうちの門の前に来たら、鞭で追い返すように打ってしまえ」…〕

〈月印釈譜 23:73a〉

(130) 姝女들히 王을 므여 無憂華樹를 것거 브려닐 王이 자다가 씨야 보고 怒하야 姝女들홀
미오 블로 스라 주기니라

〈諸姝女輩憎惡王故 以手毀折無憂華樹…〉

〔姝女たちは王のことを憎み、無憂華樹の枝を折ってしまったところ…〕

〈月印釈譜 25:75b〉

(131) 王이 날오디 그러면 네 몬져 주그리라 하고 즉재 그 놈 자바 브레 스라 주기고 地獄
허려 브리니라

〈…又勅壞此地獄施衆生無畏〉

〔王は「それならお前が先に死ぬのだ」といって、すぐにその男を捕まえ、火で焼き殺し、地獄を壊してしまっただけだ〕

〈月印釈譜 25:87b〉

(132) 源이 홀른 仰山드려 날오디 아리 傳하단 밧 圓相을 기피 7초오미 맛당하니라 山이
날오디스라 브려이다

〈…燒却了也…〉

〔…「前に伝えたところの圓相を深く秘めておくのは当然である」と。仰山は「焼いてしまいました」と言った〕

〈金剛經三家解 1:7b〉

(133) 흔 주머귀로 化城關을 터 그우리왈고 흔 발로 玄妙寨를 차 드위혀 브리도다

〈…一脚 趯翻玄妙寨…〉

〔…一足で玄妙の垣根を蹴って、ひっくり返してしまっただけだ〕

〈金剛經三家解 3:46b〉

(134) 郭巨 | 제 겨집드려 날오디 艱難흔 거긔 내 아드리 어미 바블 앓느니 무더 브리저라 하고
싸흔 석 자흔 켜니…

〈巨謂妻曰 貧之不能供給 子奪母膳 可共埋之〉

〔郭巨が妻に言った。「貧しいところへ息子が母の飯を奪うから、(息子を)埋めてしまおう…〕

〈三綱行實圖 孝子 12b〉

次に、C 補助動詞的用法における C2 〈遺憾〉用法を挙げる。前述の通り、C2 〈遺憾〉用法は「当該の動作や変化、出来事が生じた結果、視点者(動作主体あるいは話し手)が残念な気持ちになること」を表す。

この C2 〈遺憾〉は、〈消去的動作〉の消えてなくなる心理状態や状況を「②視点者(動作主体

あるいは話し手)にとって、必要、有益な心理状態や状況」として捉えることによりその意味が表出する意味用法である。つまり、「視点者にとって必要で有益な心理状態や状況が、当該の動作が行われることによって消失し、その結果残念な気持ちになること」を表すということである。したがって、結果状態に対する話し手(視点者)の評価(マイナスの評価)が顕著に表出するといえる。

この C2〈遺憾〉用法の場合も、V2「pelita(pAlita)」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それを含む構文において V2「pelita(pAlita)」は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「pelita(pAlita)」が表すような実質的動作等を表しているともいえない。したがって、V2「pelita(pAlita)」の補助動詞的用法であると認めることができる。以下、用例を見られたい。

C2〈遺憾〉

(135)…여섯 히를 苦行히샤 부터 ㄷ외야 나라해 도라오샤도 ㅈ올아비 아니히샤 아랫 恩惠를 니저브리샤 길 넓 사롭과 ㄴ티 너기시니…

[…六年の間苦行して仏になって国にお戻りになっても、近くにはお寄りにならず、過去の恩恵を忘れてしまって道行く他人と同様にお考えになり、…]

〈釈譜詳節 6:4b〉

(136)萬一에 가 서르 일히 브류믈 免홀덴 볼 나를 구턱여 더디다 ㅎ야 말리아

〈儻歸免相失見日莫辭遲〉

[もし帰って互いに失ってしまうことを免れるなら、…]

〈杜詩諺解 8:47b〉

(137)마치 봄 브름미 서르 欺弄히논 듯히야 바미 두서 가짓 고졸 부러 것거 브리낙다

〈…恰似春風相欺得夜来吹折數枝花〉

[…夜に(春風が)数枝の花を吹き折ってしまった]

〈杜詩諺解 10:7b〉

(138)뉘 날오디 아츰미 오매 ㅼ들 니르왈디 아니훈다 ㅎ늑니오 미친 브름미 안직 긴 가지를 돌이아 그쳐 브리낙다

〈…狂風挽斷最長條〉

[…狂風が最も長い枝を引いて断ってしまった]

〈杜詩諺解 10:9a〉

(139)그 히엿 넷 姓名을 니저브리도다

〈忘却當年 舊姓名〉

〔その年の昔の姓名を忘れてしまった〕

〈南明集諺解釈 上 55b〉

(140)姓名을 니저브료문 本來面目을 모를시라

〔姓名을忘れてしまうことは、本来の面目を知らないということである〕

〈南明集諺解釈 上 55b〉

(141)술은 無明이니 아즐하야 씨디 몬하야 家郷을 일허브리고 미틔 도라가며 根源에 도라가
물 아디 몬홀시라

〔酒は無明なので、昏迷して醒めず、家郷を失ってしまい、根本に戻り、根源に戻ることを知ることができないということである〕

〈南明集諺解釈 上 56b〉

(142)三四 句는 正훈 길히 아스라 이 ㄱ리오 智日이 ㅎ마 ㄷㅁㅁ ㅂㅣ거 어드운 길헤 드러 家
郷을 일허브릴시라

〔…暗い道に入って、家郷を失ってしまうことである〕

〈南明集諺解釈 上 76b〉

(143)노니는 아드른 몇마 ㅅㅁ이 고해 불어든 듣거뇨마른 ㄴㅅㅅ시 本來ㅅ ㅁㅅㅅ 물 일허브리ㄴ다
〈…失却本來心…〉

〔…油断している間に本来の心を失ってしまうのである〕

〈南明集諺解釈 下 34a〉

5.3.2. 16 世紀中世韓国語の「-pelita」

次に、16 世紀中世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-pelita(pAlita)」における V2「pelita(pAlita)」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.3.2.1. V1 の特性

以下の表 37 は、16 世紀中世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V1 を用例数とともに提示するものである。16 世紀中世韓国語資料全体における「-pelita(pAlita)」の異なり語数は 34、延べ語数は 74 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 38 で提示する通りである。以下の表 37 と表 38 を見られたい。

表 37 16 世紀中世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1

V1	日本語訳	翻朴	翻老	呂氏	蒙山	重三	翻小	小諺	順川	合計
굴히여(굴히야)-	選ぶ、分つ						1	1		2
거더-	取る、集める				1					1
건네터-	逃す	1								1
그쳐-	断じる				1					1
내여(내)-	出す						1	1	1	3
너겨-	思う								1	1
노하-	置く、放つ					1	2			3
떠러-	払う、落とす							2		2
덜터-	除く							1		1
띄워-	浮かべる					1				1
마차-	終える								1	1
무더-	埋める				1					1
물허러-	崩す							1		1
익혀-	破る		1							1
미러-	押す					1				1
쌌라-	吸う					1				1
바사-	脱ぐ						1			1
벗겨(벗써)-	外す、剥がす					2				2

스라-	燃やす					1				1
써-	書く								2	2
สระ-	洗う、拭う				1					1
쓰러-	掃く				1					1
슬워히여-	なくす							1		1
뻘터-	裂く					1				1
주겨-	殺す					2				2
주어-	あげる								1	1
지여(저)-	※破る						1	2		3
펴-	広げる							2		2
프리-	解く							3		3
히야(히여)-	※壊す、滅ぼす		4	1	1	3	2	7		18
히야(히여)-	※壊す、滅ぼす	2	1				2	2	1	8
허러-	壊す						2	1		3
헤터-	散らす								1	1
흐러-	散らす						1			1
合計		3	6	1	6	13	13	24	8	74

表 38 16 世紀中世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の異なり語数および延べ語数

	翻朴	翻老	呂氏	蒙山	重三	翻小	小諺	順川	合計
異なり(延べ)	2(3)	3(6)	1(1)	6(6)	9(13)	9(13)	12(24)	7(8)	34(74)

次に、「-pelita(pAlita)」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 39 の通り示される。

「-pelita(pAlita)」の V1 の形態として、「動詞語幹+pelita(pAlita)」のものは観察されず、すべて「動詞語幹+ -e +pelita(pAlita)」である。以下の表 39 を見られたい。

表 39 16 世紀中世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の形態

	翻朴	翻老	呂氏	蒙山	重三	翻小	小諺	順川	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+ -e	2(3)	3(6)	1(1)	6(6)	9(13)	9(13)	12(24)	7(8)	34(74)

次に、「-pelita(pAlita)」における V1 の自他に注目してみると、表 40 の通り示される。本稿において使用した 16 世紀中世韓国語資料の「-pelita(pAlita)」において、「自動詞+pelita(pAlita)」のものは一例も観察されず、すべて「他動詞+pelita(pAlita)」であった。以下の表 40 を見られたい。

表 40 16 世紀中世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の自他

	翻朴	翻老	呂氏	蒙山	重三	翻小	小諺	順川	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	2(3)	3(6)	1(1)	6(6)	9(13)	9(13)	12(24)	7(8)	34(74)

5.3.2.2. 意味用法

次に、16 世紀中世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の意味用法について考察する。3.4.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、16 世紀中世韓国語において「-pelita(pAlita)」の V2 「pelita(pAlita)」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A1 〈捨てる〉用法の用例は観察されなかったため、B1 〈対象物除去〉用法の用例から見ていくこととする。

B 〈対象物除去〉は「付着していた不必要なものを取り除く」、「これまで持っていた悪い考えや思想を払拭する、断ち切る、滅却する」ことを表す。この B1 〈対象物除去〉の場合、本動詞「pelita(pAlita)」において以上のような意味用法が存在しないため、「-pelita(pAlita)」において独自に出現した意味用法である可能性が高いといえる。

ただし、この B 〈対象物除去〉用法と思われる V2 「pelita(pAlita)」の中にも、A1 〈捨てる〉用法や次に挙げる C 補助動詞的用法と中間的である用例も多く含まれている。以下の用例を見られたい。

B1 〈対象物除去〉

(144)법이 일덩흔 형벌이 이서 사를 줄 업스니 그디 ㄴ마니 도망ㅎ야 가라 ㅎ고 갈 벗겨 브리고 량식과 철낭을 빠 주고 다숫설 머근 아들 맞써 보내오

[…「…あなたはそっと逃げてください」と言い、枷を取り去り、食料とお金を包んで渡し、…]

〈重刊三綱行實圖 烈女 10a〉

(145)훈 군씨 갈로 왼팔홀 티니 더욱 굴티 아니커늘 쏘 올흔팔 베 튜디 구지조몰 그치디
아니커늘 모든 사름미 늦가출 벗써 브리고 가니 이튼나래 주그니라
[…(童氏が)腕を一本断ってもやはり屈服しないので、もう一本の腕を断っても罵るのを止めないので、顔の皮を剥がし取って帰っていったので、翌日に死んだ]

〈重刊三綱行實圖 烈女 25a〉

(146)부터와 祖師왜 사름미게 먹이산 고들 굿 알면 네 大藏教 | 瘡腫 스저 브론 죠히라
닐오몰 올타 호리라
〈勘破佛祖得人憎處 許你道大藏經 是拭瘡紙〉
[…仏と祖師が人から憎まれるところを必ず知っていれば、あなたの大藏經が瘡腫を拭い去っ
た紙であるということを、正しいと言うだろう]

〈蒙山法語諺解 46a〉

以下、16 世紀中世韓国語資料で觀察される「-pelita(pAlita)」の V2 「pelita(pAlita)」における C 補助動詞的用法の用例である。

まず、C 補助動詞的用法における C1 〈一掃〉用法を挙げる。C1 〈一掃〉用法は「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」、「面倒な状況を解消するために当該の動作が行われること」を表す。以下の用例を見られたい。

C1 〈一掃〉

(147)이러면 네 이 물 글월 내여다가 더 사름드려 무려 처섬의 덩흔 갑새서 닛 량 은을 더러
내여 흐르는 갑새 헤오 글월 익혀 브리라
〈「…元定價錢内中, 除了五兩銀子, 做番悔錢, 扯了文契 着」〉
[「…元の額から五両の銀貨を除いて、払い戻す額で計算し、契約書を破ってしまってください」]

〈翻譯老乞大 下 19a-20b〉

(148)밤낮 겨퓷 이셔 모기 놀이며 식어미 슬히 서거 귀더기 나거늘 썩라 브리니 다시 아니
나더니…
[昼夜姑の側におり、蚊を飛ばし、姑の肉が腐って蛆が湧けば吸い取ってしまうので、再び湧かなくなった…]

〈重刊三綱行實圖 孝子 31a〉

(149)왕이 후에 소긴 줄 아루시고 하 노후샤 도미를 거죽 죄로 두 눈조이 햅야 브리고 비예
연저 프레 띄워 브리고 거지블 드러다가 구틱여 어루려 커시늘…

[…王は後に騙されたと思って激怒し、都彌を偽りの罪で両目を潰し、舟に乗せて水に浮かべてしまい、都彌の妻を無理矢理連れて行って、…]

〈重刊三綱行實圖 烈女 30b〉

次に、C 補助動詞的用法における C2 〈遺憾〉用法を挙げる。前述の通り、C2 〈遺憾〉用法は「当該の動作や変化、出来事が生じた結果、視点者(動作主体あるいは話し手)が残念な気持ちになること」を表す。以下の用例を見られたい。

C2 〈遺憾〉

(150)또 이 봄 二三月 도헌 시저를 만나니 도헌 시경을 견네터브리디 말 거시라

〈「又逢着這春二三月好時節, 休蹉過了好時光」〉

[「またこの春の二、三月の良い季節を迎えたので、この良い時期を逃してしまわないようにしよう」]

〈翻譯朴通事 1a〉

(151)「그디는 풍속을 허려 브리는 사루미라 길우디 몬홀 거시라 햅고…

〈「卿敗俗之人 不可長也…」〉

[「君は風俗を壊してしまう人だ…」]

〈翻譯小学 7:12a〉

(152)或 귀며 서안의 흐려 이시며 칙을 권권이 흐려 브려 만히 아히며 종의 더러이미 도이며
…

〈或有狼藉几案 分散部秩 多爲童幼婢妾…〉

〈「あるいは箱や机にばらまいており、本を一巻ごとにばらまいてしまい、大部分子供や下女が汚すことになり、…」〉

〈翻譯小学 8:39b〉

(153)엇디 저문 아히들호로 아룸뎃 飲食을 몬드라 먹게 햅야 가문 뺨을 허려브리노 뇨 햅니…

〈豈可使小兒輩私作飲食壞家法也〉

[「どうして幼い子どもたちに個人的に食事を作らせて、家庭内の掟を破ってしまうのか…」]

〈翻譯小学 9:7a〉

5.3.3. 17 世紀近世韓国語の「-pelita」

続いて、17 世紀近世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-pelita(pAlita)」における V2「pelita(pAlita)」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.3.3.1. V1 の特性

以下の表 41 は、17 世紀近世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V1 を用例数とともに提示するものである。17 世紀近世韓国語資料全体における「-pelita(pAlita)」の異なり語数は 51、延べ語数は 170 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 42 で提示する通りである。以下の表 41 と表 42 を見られたい。

表 41 17 世紀近世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1

V1	日本語訳	諺痘	諺胎	女訓	東孝	東三忠	東忠	東烈	重杜詩	老諺	合計
ㄱ리터-	殴り飛ばす								1		1
가져-	持つ								1		1
갓가-	削る							1	4		5
거더-	取る、集める								7		7
써-	消す								1		1
것거-	折る								2		2
그쳐(그쳐)-	断じる								4		4
글어-	解く								1		1
내여-	出す	1									1
너겨-	思う				1			1	1		3
녀햐-	行く								1		1
늘거-	老いる								1		1
니버-	着る								1		1
ㄷ뵈-	争う								1		1
뵈려-	壊す								1		1
뵈-	開く								1		1
더러-	払う、落とす								6		6

떠러-	払う、落とす			1					9		10
떠여-	離す	1									1
두위터-	ひっくり返す								1		1
들입-	穿つ								1		1
미야-	縛る								1		1
머므러-	留まる								1		1
믹여(믹혀)-	破る								2	1	3
미러-	押す								1		1
바사-	脱ぐ								2		2
빠혀(빠혀)-	抜く、除く								3		3
버혀-	切る								2		2
ঝ়়여-	切る								2		2
스라-	燃やす								1		1
쓰러-	掃く								15		15
시서-	洗う		1						9		10
아아-	奪う								1		1
업터-	覆す								1		1
이어-	振る								1		1
이저-	欠ける								2		2
일혀-	失う								1		1
저-	※破る			1		1	1	1	21		25
떠혀-	裂く								1		1
주어-	あげる								1		1
터-	叩く								3		3
퍼러-	青くなる								1		1
퍼-	広げる								2		2
폐혀야-	廃する				1						1
프리(플어)-	解く	15		1							16
혀야(혀여)-	※壊す、滅ぼす			2				1	6	1	10
히야-	※壊す、滅ぼす								2	2	4
해여-	※壊す、滅ぼす									2	2

허리-	壊す								3		3
헤터-	まき散らす									1	1
훑터-	散らす								1		1
合計		17	1	5	2	1	1	4	132	7	170

表 42 17 世紀近世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の異なり語数および延べ語数

	諺痘	諺胎	女訓	東續孝	東三忠	東忠	東烈	重杜詩	老諺	合計
異なり(延べ)	3(17)	1(1)	4(5)	2(2)	1(1)	1(1)	4(4)	45(132)	5(7)	51(170)

次に、「-pelita(pAlita)」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 43 の通り示される。

「-pelita(pAlita)」の V1 の形態として、「動詞語幹+pelita(pAlita)」のものは観察されず、すべて「動詞語幹+ -e +pelita(pAlita)」である。以下の表 43 を見られたい。

表 43 17 世紀近世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の形態

	諺痘	諺胎	女訓	東續孝	東三忠	東忠	東烈	重杜詩	老諺	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+ -e	3(17)	1(1)	4(5)	2(2)	1(1)	1(1)	4(4)	45(132)	5(7)	51(170)

次に、「-pelita(pAlita)」における V1 の自他に注目してみると、表 44 の通り示される。本稿において使用した 17 世紀近世韓国語資料の「-pelita(pAlita)」において、「自動詞+pelita(pAlita)」のものは異なり語数 5、延べ語数 7 観察されたが、他はすべて「他動詞+pelita(pAlita)」であった。以下の表 44 を見られたい。

表 44 17 世紀近世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の自他

	諺痘	諺胎	女訓	東續孝	東三忠	東忠	東烈	重杜詩	老諺	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	5(7)	0(0)	5(7)
他動詞	3(17)	1(1)	4(5)	2(2)	1(1)	1(1)	4(4)	40(125)	5(7)	46(163)

5.3.3.2. 意味用法

次に、17 世紀近世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V2「pelita(pAlita)」の意味用法について考察する。3.4.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、17 世紀近世韓国語において「-pelita(pAlita)」の V2「pelita(pAlita)」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A1〈捨てる〉用法の用例は観察されなかったため、B1〈対象物除去〉用法の用例から見ていくこととする。B〈対象物除去〉は「付着していた不必要なものを取り除く」、「これまで持っていた悪い考えや思想を払拭する、断ち切る、滅却する」ことを表す。この B1〈対象物除去〉の場合、本動詞「pelita(pAlita)」において以上のような意味用法が存在しないため、「-pelita(pAlita)」において独自に出現した意味用法である可能性が高いといえる。ただし、この B〈対象物除去〉用法と思われる「-pelita(pAlita)」の中にも、A1〈捨てる〉用法や次に挙げる C 補助動詞的用法と中間的である用例も多く含まれている。以下の用例を見られたい。

B1〈対象物除去〉

(154) 마오라기를 더러 브리니 벗 나치 불도다

〈除 芒子粒紅〉

〔芒を取り除いたので、稲の粒が赤い〕

〈重刊杜詩諺解 7:18b〉

(155) 風塵스 마이 도트랏 디포니 늑고 더러우믈 버히며 떠러브료미 어렵도다

〈杖藜風塵際 老醜難剪拂〉

〔風が塵の際に杖をつき、古くなって汚れたものを断って払い除けることは難しい〕

〈重刊杜詩諺解 10:26b〉

(156) 또 굴오디 큰 열이 잇거든 쇼변을 통니하고 자근 열이 잇거든 독기를 프리 브리라

〈…大熱者當利小便有小熱者當解毒〉

〔…熱が高かったら小便を出すべきであり、熱が低かったら毒を解き除くべきである〕

〈諺解痘瘡集要 上 40a〉

(157) 서각이 형역 독기를 크게 프리 브리느니 물에 닳게 마라 그 즙을 머기라

〈犀角大解毒 犀角濃磨取汁服〉

〔犀角は大いに痘瘡の毒を解き除くので、水に濃く磨り下ろし、その汁を飲め〕

〈諺解痘瘡集要 上 45b〉

以下、17世紀近世韓国語資料で観察される「-pelita(pAlita)」のV2「pelita(pAlita)」におけるC補助動詞的用法の用例である。

まず、C補助動詞的用法におけるC1〈一掃〉用法を挙げる。前述の通り、C1〈一掃〉用法は「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」、「面倒な状況を解消するために当該の動作が行われること」を表す。以下の用例を見られたい。

C1 〈一掃〉

(158) 머리 허트러 쪽 ㄴㅅ되 밋디 아니호고 다 갓가 브리고 이통호믈 단팔호던 날과 ㄴㅅ되 고 복이 ㄴㅅ되

〈麻頭蓬不櫛盡削之哀痛常如祖括之日…〉

〔頭髮は乱れて蓬のようであるが櫛でとかさず、すべて剃ってしまい、…〕

〈東國新續三綱行實圖 烈女圖 5:83b〉

(159) 이라면 네 이 물 글월를 내여다가 더들드려 무려 처엄 덩훈 갑새서 닷 냥 은을 더러내여 흐르는 갑새 헤고 쓸월 익여 브리라

〈…元定價錢內中, 除了五兩銀子, 做番悔錢, 扯了文契 着〉

〔「…元の額から五兩の銀貨を除いて、払い戻す額で計算し、契約書を破ってしまってください」〕

〈老乞大諺解 下 18a〉

次に、C補助動詞的用法におけるC2〈遺憾〉用法を挙げる。前述の通り、C2〈遺憾〉用法は「当該の動作や変化、出来事が生じた結果、視点者(動作主体あるいは話し手)が残念な気持ちになること」を表す。以下の用例を見られたい。

C2 〈遺憾〉

(160) 호다가 몬져 콩을 주면 그 물이 다만 콩만 곱히여 먹고 딛플다가 다 헤터 브리니라

〈若是先與料時, 那馬只揀了料喫, 將草都拋撒了〉

〔「万一先に豆を与えたら、その馬たちは豆だけ選んで食べて、藁はすべてまき散らしてしまうんだよ」〕

〈老乞大諺解 上 22a〉

5.3.4. 18 世紀近世韓国語の「-pelita」

次に、18 世紀近世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V1 の特性について観察し、その動詞的性質について考察する。その後、「-pelita(pAlita)」における V2「pelita(pAlita)」の意味用法について考察し、実際の用例を挙げながら用法別に分類し考察する。

5.3.4.1. V1 の特性

以下の表 45 は、18 世紀近世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V1 を用例数とともに提示するものである。18 世紀近世韓国語資料全体における「-pelita(pAlita)」の異なり語数は 18、延べ語数は 56 であり、資料別の異なり語数及び延べ語数は表 46 で提示する通りである。以下、表 45 と表 46 を見られたい。

表 45 18 世紀近世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1

	日本語訳	伍諺	兵学	明義	改捷新	五倫	隣語	敬信	増無	合計
내여-	出す、投げる					1				1
노하-	置く、放つ					2				2
더러-	払う、落とす							1		1
찌혀-	離す			1						1
씩어-	切る					1				1
물니쳐-	退ける							1		1
버혀-	切る	1							1	2
벗겨-	外す、剥がす								1	1
슬와-	燃やす								1	1
아사-	奪う、取る								1	1
일혀-	失う						1			1
저-	※破る	8		3	1	11		12		35
쫓초-	追い出す					1				1
퍼-	広げる		1							1
히려-	※壊す、滅ぼす	1								1
히려-	※壊す、滅ぼす	2								2
혈어-	壊す							2		2
훑터-	散らす							1		1
合計		12	1	4	1	16	1	17	4	56

表 46 18 世紀近世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の異なり語数および延べ語数

	伍諺	兵学	明義	改捷新	五倫	隣語	敬信	増無	合計
異なり(延べ)	4(12)	1(1)	2(4)	1(1)	5(16)	1(1)	5(17)	4(4)	18(56)

次に、「-pelita(pAlita)」における V1 の形態的特徴に注目してみると、表 47 の通り示される。

「-pelita(pAlita)」の V1 の形態として、「動詞語幹+pelita(pAlita)」のものは観察されず、すべて「動詞語幹+ -e +pelita(pAlita)」である。以下の表 47 を見られたい。

表 47 18 世紀近世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の形態

	伍諺	兵学	明義	改捷新	五倫	隣語	敬信	増無	合計
動詞語幹	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
動詞語幹+ -e	4(12)	1(1)	2(4)	1(1)	5(16)	1(1)	5(17)	4(4)	18(56)

次に、「-pelita(pAlita)」における V1 の自他に注目してみると、表 48 の通り示される。本稿において使用した 18 世紀近世韓国語資料の「-pelita(pAlita)」において、「自動詞+pelita(pAlita)」のものは一例も観察されず、すべて「他動詞+pelita(pAlita)」であった。以下の表 48 を見られたい。

表 48 18 世紀近世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の V1 の自他

	伍諺	兵学	明義	改捷新	五倫	隣語	敬信	増無	合計
自動詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
他動詞	4(12)	1(1)	2(4)	1(1)	5(16)	1(1)	5(17)	4(4)	18(56)

5.3.4.2. 意味用法

次に、18 世紀近世韓国語資料において観察される「-pelita(pAlita)」の V2 「pelita(pAlita)」の意味用法について考察する。3.4.で規定した意味用法に沿って、実際の用例を挙げながら検討し、18 世紀近世韓国語において V2 「pelita(pAlita)」がどのような意味用法として用いられていたのかを明らかにする。

まず、A 本動詞的用法における A1 〈捨てる〉用法を挙げる。以下の用例を見られたい。

A1 〈捨てる〉

(161) 엿디 길히 드른 거슬 주어 그 힝실을 더러이리오 하니 양지 크게 붓그려 금을 내여 버리고…

〈況拾遺求利 以汙其行乎 羊子大慙乃捐金於野…〉

〔「どうして道に落ちているものを拾って、その行いを汚すのか」羊子は大いに恥じ、金を投げ捨てて、…〕

〈五倫行實圖 烈女 15a〉

次に、B1 〈対象物除去〉の用法を挙げる。再掲するが、これは「付着していた不必要なものを取り除く」、「これまで持っていた悪い考えや思想を払拭する、断ち切る、滅却する」ことを表す。以下、用例を挙げる。

B1 〈対象物除去〉

(162)그디 이제로 조차 후로 물읏 탐음 직긔와 망녕된 심각 모든 잡념 잇는 거슬 몬져 밀력을 가초와 일절 물니쳐 버리고…

〔…もうろくした考え、すべての雑念のあるものを、まず猛力を備えて一切払い除け、…〕

〈敬信録諺釋 37b〉

(163)處女の 屍를 驗함에 收生婆로 하여곰 中指甲을 버혀 버리고 소음으로써 싸감고 屍親과 다뭇 이웃 계집 두세 사름을 眼同하여…

〈…剪去中指甲 用綿包紮〉

〔…収生婆に中指の爪を切り取らせ、(その指を)綿で包んで、屍親とともに隣の娘二三人を従えて、…〕

〈増修無冤録諺解 1:26b〉

(164)초로써 죠히를 적셔 우희 덤헛다가 혼 時스동안을 기다려 아사버리고 물로 비스면 그痕이 곳 뵈느니라

〈…候一時久除去 以水洗 其痕即見〉

〔…酢で紙を濡らし、上に被せてから、しばらくの間待ち、取り除いて水で洗えば、その痕が見える〕

〈増修無冤録諺解 1:41a〉

以下、18 世紀近世韓国語資料で観察される「-pelita(pAlita)」の V2 「pelita(palita)」における C 補助動詞的用法の用例である。

まず、C 補助動詞的用法における C1 〈一掃〉用法を挙げる。前述の通り、C1 〈一掃〉用法は「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」「面倒な状況を解消するために当該の動作が行われること」を表す。以下の用例を見られたい。

C1 〈一掃〉

(165) 바로 범의게 드라드려 목을 즈르 전대 범이 노하브리니 아비 사라난디라 원이 듯고 지
들과 곡식을 주고 정문히니라

〈直搥虎頸豐因獲免…〉

〔(楊香が)にわかに虎に飛びかかり、(虎の)首を締めて持ち上げると、虎が(楊香の父を)放し
てしまい、父は助かった〕

〈五倫行實圖 孝子 31a〉

(166) 내 겨집이 되여 늑의게 손을 잡히니 엇디 한 손으로 써 온 몸을 더러이리오 하고
듯기로 그 풀을 씩어브리니 보논 사름이 눈물 아니 흘리리 업더라

〈…不可以一手并汚吾身即引斧自斷其臂〉

〔「…他人に手を掴まれ、片手で(夫と)ともに身体を汚すことができようか」と言って、斧で
その腕を断ち切ってしまうと、(それを)見ている者で涙を流さない者はいなかった〕

〈五倫行實圖 烈女 33a〉

次に、C 補助動詞的用法における C2 〈遺憾〉用法を挙げる。前述の通り、C2 〈遺憾〉用法は「当該の動作や変化、出来事が生じた結果、視点者(動作主体あるいは話し手)が残念な気持ちになること」を表す。以下の用例を見られたい。

C2 〈遺憾〉

(167) 겨을에 그 아비 손으로 하여곰 술위를 몰 시 치위 물혁을 노하 브린디 아비 슬퍼 알고
후처를 내티고져 하거늘

〈父冬月令損御車體寒失靱父察知之欲遣後妻〉

〔冬に(損の)父が損に車を走らせたが、(損が)寒くて手綱を放してしまったところ、父が(後
妻が損に満足に衣服を与えていないことを)察して知り、後妻を追い出そうとしたが、…〕

〈五倫行實圖 孝子 2a〉

(168)조연 循便호을 道理 인스을 거시니 하 그리 갑히 用廬 마옵소 朝得暮失이라 어드며 卽
時 일히브리니 아니 통분호온가

〈自然と順便に成まする道が御座りませふから 餘左様に深御心遣被成まするな 朝得而暮失で
得まして早速失まして 残念なでは御座らぬか〉

〈隣語大方 3:3b〉

(169)極惡호 사람이 이셔 사람을 터 죽이고 불솔와 브려 못츨내 빼도 可히 檢흘 꺼시 업거든
...

〈有極惡之人將人打歿何時燒燬何地...〉

〔極悪人がおり、人を打ち殺して、焼いてしまい、ついに骨も充分に検死できるものがなく、
...〕

〈増修無冤録諺解 3:94a〉

第6章 日本語と韓国語の「V-V」構造における歴史的変遷

本章では、日本語と韓国語の「V-V」構造における歴史的な変遷について述べる。まず、歴史的な形態的変遷が観察される日本語の「-おく」と「-しまう(しまふ)」の形態的変遷について述べた後、日本語と韓国語の「V-V」構造における V2「おく」と「しまう(しまふ)」、「twuta」と「nohta」、「pelita(pAlita)」の意味的変遷を時間軸に沿って考察する。特に意味的変遷に関しては、補助動詞としての V2 の意味拡張の様相についても言及する。

6.1 日本語の V1 における形態的変遷

本節では、日本語の「-おく」と「-しまう(しまふ)」といった「V-V」構造における V1 の形態的な変遷に焦点をあてて考察する。尚、韓国語の「-twuta」や「-nohta」、「-pelita(pAlita)」に関しては、その V1 において一貫して「動詞語幹+ -e(連結語尾)」をとっており、日本語のような形態的変遷は観察されなかった。したがって、本節においては、日本語の「V-V」構造の場合に限ってその V1 の形態的変遷を考察することとする。

6.1.1. 日本語の「-おく」の V1 における形態的変遷

本節では、上代日本語資料から近世日本語資料にかけて観察される「-おく」の V1 の形態における歴史的な変遷について考察する。まずは、以下の表 1 を見られたい。

表 1 「-おく」における V1 の形態的変遷

V1 の形態	上代	中古	中世	近世
動詞連用形	12(22) 75.0%(84.6%)	129(623) 81.6%(94.5%)	67(248) 36.0%(55.9%)	129(413) 48.9%(57.0%)
動詞連用形+テ	4(4) 25.0%(15.4%)	29(36) 18.4%(5.5%)	119(196) 64.0%(44.1%)	135(312) 51.1%(43.0%)

表 1 を見てもわかるように、上代日本語資料から中古日本語資料までは、V1 の形態が「動詞連用形」である「動詞連用形+おく」構造のものがそれぞれ 75.0%(84.6%)、81.6%(94.5%)と圧倒多数を占めている。しかし、中世日本語資料からは V1 の形態が「動詞連用形+テ」である「動

詞連用形+テ+おく」構造のものが急増し、「-おく」全体において 64.0%(44.1%)と半数以上を占めるようになっている。この傾向は近世日本語資料にも引き続いて起こっており、近世日本語の「-おく」全体においても「動詞連用形+テ+おく」構造のものが半数以上の 51.1%(43.0%)を占めている。

上代日本語資料『万葉集』において観察される「-おく」の「動詞連用形+テ+おく」構造のものは、そのほとんどが「句的な動詞連続」であると考えられる。一方、中古日本語資料においては、さらに V1 における形態の混在が観察されるようになる。例えば、中古後期の日本語資料である『今昔物語』では、「-おく」の V1 が「動詞連用形+テ」の形態で出現している用例が 29.3%(14.6%)と他の中古日本語資料よりも高い割合を占めており、中古後期から徐々に「動詞連用形+テ+おく」構造が頻繁に使用されはじめていることを示す。

上代日本語資料『万葉集』においても「動詞連用形+テ+おく」構造をもつ「-おく」は観察されたが、それらのほとんどは「句的な動詞連続」であると分析される。しかし、以下のような中古日本語資料における「動詞連用形+テ+おく」構造をもつ「-おく」の用例は、V2「おく」が C2〈結果維持〉用法や C3〈事前処置〉用法といった C 補助動詞的用法として用いられている用例が多数であるという特色を示す。以下に、用例を再掲する。

(1) 姫君も、おぼろけならでし出でたまへるわざなれば、物に書きつけておきたまへりけり。

〈源氏物語〉

(2) 「思ふさまにかなひはてさせたまふまではとり隠しておきてはべるべけれど、世の中定めがたければ、うしろめたさになむ。…」

〈源氏物語〉

さらに興味深いのは、中古後期の日本語資料『今昔物語』において、以下の用例(3ab)から(5ab)のように、同一の V1 における形態の混在が見られるという点である。ただ、以上の(1)と(2)のように、「動詞連用形+テ+おく」構造の用例が C 補助動詞的用法として用いられているとは言えず、以下のような用例においては「動詞連用形+おく」(a)と「動詞連用形+テ+おく」(b)の間に V2「おく」の用法上の相違があるとは言えない。したがって、「動詞連用形+テ+おく」が補助動詞構造専用の構造として用いられはじめたことを示すというよりは、中古後期の段階ではまだ同一資料内における表記上のゆれであった可能性が高く、両構造における機能分担のような現象が生じていたわけではないように思われる。以下、用例を再掲する。

(3)a. 夏比吉キ瓜ヲ得タリケレバ、「此レハ難有キ物ナレバ、タサリ方返来テ、人ノ許ヘ遣ラム」
と云テ、十果許ヲ厨子ニ入レテ納メ置テ云ク、「出ヅ」トテ云ク、…

〈今昔物語〉

b. 其ノ後、僧涙ヲ流シテ、夢ノ告ヲ知ヌ。弟子等師ノ泣ヲ見テ、其ノ心ヲ問ト云ヘドモ、師
答フル事無クシテ、只一紙ニ此ノ夢ノ告ヲ注シテ、蜜ニ經箱ノ中ニ納メテ置ツ。

〈今昔物語〉

(4)a. 事シモ寺ヨリ運バム様ニ東ノ大門ニ積置テ後、国の司死ヌレバ、故ニ運タルガ如シ。

〈今昔物語〉

b. …此ノ材木、其ノ河ヨリ曳上テ、此ノ寺ノ東ノ大門ノ前ニ三百余物乍ラ積テ置ケリ。

〈今昔物語〉

(5)a. 平中、「現ニ」ト思テ、「然ハ疾ク御マセ」ト云ヘバ、女起テ上ニ着タル衣ヲバ脱置テ、
単衣袴許ヲ着テ行ヌ。

〈今昔物語〉

b. 「此レハ、人ノ物ヘ行ケルガ、雨モ降ル、日暮、我ガ入ツル様ニ、此ノ墓穴ニ入テ、前ニ
置ツルハ、持タリケル物ヲハクト置ツル音ナメリ。次ニハ蓑ヲ脱テ置ク音ノ、サラサラトハ聞
ヘツルナメリ」

〈今昔物語〉

中世日本語資料における「-おく」では、さらに多くの「動詞連用形+テ+おく」構造の用例が観察される。表 1 を見ると、中古日本語資料全体における「動詞連用形+テ+おく」は 18.4%(5.2%)であったのに対し、中世日本語資料全体における「動詞連用形+テ+おく」は 64.0%(44.1%)と急激に増加していることがわかる。ただ、中世日本語資料における「-おく」の場合は、資料ごとに差が見られ、軍記物語の『平家物語』と随筆の『徒然草』で観察される「-おく」のうち、「動詞連用形+テ+おく」構造のものはそれぞれ 8.8%(5.7%)、5.9%(5.6%)と僅少であるのに対し、抄物資料の『中華若木詩抄』と狂言資料の『虎明本狂言集』で観察される「-おく」の場合はそれぞれ 87.5%(86.0%)、73.9%(75.3%)と非常に高い割合を占めている。キリシタン資料である『天草版平家物語』や『伊曽保物語』で観察される「-おく」の場合も、それぞれ 43.2%(26.4%)、40.0%(40.0%)と半数近くを占めている。

以上のように、中世後期の三大口語資料と呼ばれる抄物資料、狂言資料、キリシタン資料において「動詞連用形+テ+おく」が非常に多く観察されることを勘案すると、「動詞連用形+テ+おく」の出現において資料の文体的な特徴が関連している可能性が考えられる。つまり、抄物資料や狂言資料、キリシタン資料のような口語性の高い資料において「動詞連用形+テ+おく」

が頻繁に用いられはじめたということである。さらに、これらのような中世後期の口語資料に対し、『平家物語』や『徒然草』が中世前期に成立した作品であるという点も考慮に入れると、各資料における以上のような文体的特徴の差の他に、成立時期の相違といった点も「動詞連用形+テ+おく」の出現に深く関連しているものと思われる。

中世日本語資料の「-おく」においても、中古日本語資料『今昔物語』で観察されたような同一資料内における同一 V1 の形態的な混在が見られるが、「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」の間に V2「おく」の用法の相違といった顕著な機能分担の様相が見られない用例も観察されるため、同一資料内における表記上のゆれの可能性も否定できない。しかし、中世日本語資料における「動詞連用形+テ+おく」構造の用例全体を総合的に観察すると、V2「おく」が C 補助動詞的用法として用いられているものが多数を占めており、「-おく」の補助動詞構造専用の構造として「動詞連用形+テ+おく」が使用されてきている様相を捉えることも可能である。以下に、一部の用例を再掲する。

(6)a. 横たへて差されたかの刀を紫宸殿の後ろで皆人の見るに、ある人に預けおいて出られてござった。

〈天草版平家物語〉

b. 備中の国の兼康といふ者は北国の軍に倉光といふ者が手にかかって生け捕られたが、剛の者であったによって、木曾殿あたらず者をまづ切るなど言うて、倉光が弟に預けておかれたが、…

〈天草版平家物語〉

(7)a. 「いかに君、かのイソボを成敗致せと宣旨を下された時、あまり本意無さに、或る棺に入れ置いてござれば、まだ存命仕ることも有らうずる」と奏すれば、…

〈伊曾保物語〉

b. 「さても世上に名を得たこの学者を段さうことは本意無い、所詮身に罪を被るといふとも、命を継がうずる」と思ひ定め、密かに或る片脇な棺に入れて置き、「既に誅罰つかまつた」奏聞せられてあつた。

〈伊曾保物語〉

(8)a. 是をそなたへやれはこなたのうらみ、こなたへやれはそなたのうらみ、昔より申ごとく、あんずる物は中からとれといひおいた事が有程に、それがしがとるぞ…

〈虎明本狂言集 集狂言之類やるこ〉

b. やれやれにくひ事をいふ、惣じて女の口のこはひは、りべつのもとといと、むかしからいふておひた、まだおのれはくちがへらぬか…

〈虎明本狂言集 女狂言之類ひげやぐら〉

近世日本語資料の「-おく」においても、中古日本語や中世日本語と同様に「-おく」の V1 の形態として「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」のものが混在して観察される。表 1 を見ると、近世日本語資料全体の「-おく」における「動詞連用形+テ+おく」の占める割合は 51.1%(43.0%)となっており、中世日本語資料の場合と同様、かなり高い割合を占めていることがわかる。

近世日本語資料における「-おく」の場合も、資料ごとに V1 の形態的特徴に差が見られる。例えば、「西鶴集」で観察される「-おく」のうち、「動詞連用形+テ+おく」構造のものは 17.0%(14.4%)であるのに対し、「洒落本」や「滑稽本」、『東海道中膝栗毛』で観察される「-おく」の場合は、それぞれ 90.5%(93.5%)、78.4%(78.3%)、80.4%(43.6%)とかなり高い割合を占めている。ただ、いずれにしろ、その他の資料においても半数近くあるいは半数以上を「動詞連用形+テ+おく」構造のものが占めており、近世日本語資料における「-おく」が「動詞連用形+テ+おく」構造で出現する割合は非常に高いといえる。

近世日本語資料の「-おく」においても、中古日本語資料や中世日本語資料と同様に、同一 V1 における形態的な混在が見られる。ただ、近世日本語の場合、他の中古日本語資料や中世日本語資料における「-おく」の場合とは異なり、「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」の間に V2「おく」の用法の相違といった機能分担の様相が見られるのが特徴である。

例えば、以下の(9ab)から(11ab)の用例において、「動詞連用形+おく」構造(a)における V2「おく」が B1〈結果物残存〉用法として用いられているのに対し、「動詞連用形+テ+おく」構造(b)における V2「おく」は C 補助動詞的用法として用いられている。以下に用例を再掲する。

(9)a.後家に云渡したるは始の日付也そちへ書置は日付後也と申せし

〈醒睡笑〉

b.昔より上人の霊前へそなへ物にふらではかなはぬとかいておいた撰釈集にあるかいや難波に雪は法然の御調物と

〈醒睡笑〉

(10)a.若い人のことなれば、後日の念に、ちよつと知らせておきますと、言ひおいて帰られた。

〈心中重井筒〉

b.この在所で、わしは島原の傾城が、請け出されて来てみると、庄屋にも誰にも言うておく。

〈大経師昔暦〉

(11)a.命があらばまた会はう。死なば親子の末期の水、未来は八功德池の水。この世に思ひ置くことない。

〈心中宵庚申〉

b.児の膳にかうの物のあるを脇に居たる僧取てくふ児我か秘蔵に思ふて置たるをといはるゝ時…

〈醒睡笑〉

日本語の「-おく」は、上代日本語から中古日本語にかけては主に V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+おく」の構造で頻繁に用いられていた。しかし、中古後期からはじまり、中世日本語から近世日本語にかけて徐々に V1 の形態が動詞連用形+テである「動詞連用形+テ+おく」の構造で用いられはじめ、同一資料内の同一 V1 においても形態的な混在が観察されはじめるようになる。ただ、このような同一 V1 の形態的な混在を含めた「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」の混在は、表記上のゆれや各表現における口語性の程度差といった文体差によって生じている可能性も少なからずあると思われる。しかし、中古後期日本語から近世日本語にかけて、V2「おく」が C 補助動詞的用法として用いられている場合に「動詞連用形+テ+おく」構造が頻繁に用いられるという様相が観察されはじめ、近世日本語に至っては、同一 V1 の「-おく」における「動詞連用形+おく」構造と「動詞連用形+テ+おく」構造の間に V2「おく」における用法の相違といった機能分担の様相が観察されはじめる。

すなわち、V2「おく」が C 補助動詞的用法として用いられている「-おく」において、中古後期日本語から徐々に「動詞連用形+テ+おく」構造が用いられるようになり、中世日本語から近世日本語にかけてより頻繁に用いられるようになって定着し、「-おく」における「動詞連用形+テ+おく」構造が「-おく」の補助動詞構造専用の構造として用いられるようになっていった、という歴史的な変遷が考えられるということである。

6.1.2. 日本語の「-しまう(しまふ)」の V1 における形態的変遷

日本語の「-しまう(しまふ)」に関しては「-おく」のように複数の時代に渡って観察されず、近世日本語資料から徐々に観察されはじめるため、V1 の形態における歴史的な変遷を辿ることは困難である。しかし、現代日本語との比較において、近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」の V1 の形態について論じることは可能であると思われる。

現代日本語の「-しまう」は主に「動詞連用形+テ+しまう」の構造で観察されるが、近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」には、現代日本語においては観察されない「動詞連用形+しまう(しまふ)」構造の用例が多数観察される。よって、本節では、6.1.1.で検討した、上代日本語資料から近世日本語資料にかけて観察される「-おく」の V1 の形態的変遷と照らし合わせながら、近世日本語資料において観察される「-しまう(しまふ)」の V1 の形態的特徴について考察する。まずは、以下の表 2 を見られたい。

表 2 近世日本語資料における「-しまふ」の V1 の形態

V1 の形態	近世
動詞連用形	25(40) 21.7%(19.9%)
動詞連用形+テ	90(161) 78.3%(80.1%)

現代日本語において「-しまう」は「動詞連用形+テ+しまう」の構造で現れる。しかし、近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」には、表 2 を見てもわかるように、V1 の形態のヴァリエーションとして「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」のほか、「動詞連用形+しまう(しまふ)」の構造の用例が多数観察され、「-しまう(しまふ)」全体のうち 21.7%(19.9%)を占めている。

中古日本語資料や中世日本語資料、そして近世日本語資料における「-おく」においても、以上のような「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」のような形態的な混在が見られ、特に近世日本語資料における「-おく」の両構造の間には機能分担の様相が見られた。近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」の場合でも、V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+しまう(しまふ)」構造の V2「しまう(しまふ)」は B1〈動作終了〉用法として用いられているのに対し、V1 の形態が動詞連用形+テである「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」構造の V2「しまう(しまふ)」は C 補助動詞的用法として用いられており、同一 V1 における両構造の間の機能分担の様相が観察される。

例えば、以下の用例(12)から(13)において、V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+しま

う(しまふ)」構造の(12a)と(12a')の V2「しまう(しまふ)」は B1〈動作終了〉用法として用いられているのに対し、V1 の形態が動詞連用形+テである「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」構造の(12b)と(12b')の V2「しまう(しまふ)」は C 補助動詞的用法として用いられている。ただ、(13c)のように同一文の中に「くつてしまふ」と「くひしまふ」のように「動詞連用形+しまう(しまふ)」構造のものと「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」構造のものが共起しており、両者間に用法の相違といった機能分担の様相が見られない用例も観察される。さらに、文体差に注目してみても、(12a)や(12a')が地の文に出現しているのに対し、(12b)や(12b')は会話文に出現している。以下に用例を再掲する。

(12)a. 「…我らはもはや休みます」と我が事ばかり言ひしまひ奥に入りてぞ臥しにける。

〈卯月の潤色〉

a'. 「…ちよつと一筆請け取りして、出来た分くござれ」と言ひもしまはぬ半分聞き、三両三分に掴み付き…

〈心中方刃は氷の朔日〉

b. 「…人も連れず、着のまゝで、親の外聞構はぬ気か。言ふこと言うてしまうたら、きりきり戻りや、迎ひに來た」と後前もなく言ひ捨てけり。

〈薩摩歌〉

b'. 「オ、でかしやつた、言うてしまふは懺悔の一つ。罪を助かる種ともなる。…」

〈生玉心中〉

(13)a. 勝手よりおこしに來り、手水つかふやいな、膳をすゆるに、三人ともくひしまひ、丹波の人は、高野へと出ゆき、弥次郎兵衛喜多八は、…

〈東海道中膝栗毛〉

b. まんぢうをまたまた二十とりよせ、こんぴらへすゝめるやいなや、このたびは、なんのくもなく、たちまち二十くつてしまひ、…

〈東海道中膝栗毛〉

c. なづけのいれてありし、どんぶりをうちあけて、めしをもり、ぺろぺろとくつてしまひ、もつかいぼうへまはすと、これもしこたまよそつてくひしまひ…

〈東海道中膝栗毛〉

日本語の「-おく」は、上代日本語から中古日本語にかけては主に V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+おく」の構造で用いられていたが、中世日本語から近世日本語にかけて徐々に V1 の形態が動詞連用形+テである「動詞連用形+テ+おく」の構造で用いられはじめ、同一資

料内の同一 V1 においても形態的な混在が観察されはじめるようになる。近世日本語に至ると、「動詞連用形+テ+おく」が主に「-おく」における補助動詞的用法を担当するようになるという様相が観察され、「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」の間にも機能分担が生じる。つまり、「動詞連用形+テ+おく」が次第に「-おく」における補助動詞構造専用の構造として用いられるようになった、という歴史的な変遷が見られるということである。

一方、日本語の「-しまう(しまふ)」の場合、中世日本語以前の資料において「-しまう(しまふ)」が観察されないため「-おく」のように形態的な変遷を迎えることは困難である。しかし、「-おく」における以上のような歴史的変遷と合わせて考えると、近世日本語の「-しまう(しまふ)」においても「動詞連用形+しまう(しまふ)」と「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」の間に機能分担があり、補助動詞構造専用の構造として V1 の形態が「動詞連用形+テ」である「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」が用いられていたといえるのではないだろうか。ただ、上記の(13c)のように同一文中における V2 の用法差のない両構造の共起した用例の存在を考えると、単に表記上のゆれがあったとも考えられる。この点については、文体差といった点も含めて今後さらに検討する必要があると思われる。

6.2 日本語の V2 における意味的変遷

本節では、上代日本語資料から近世日本語資料にわたって観察される、日本語の V2「おく」と「しまう(しまふ)」における意味用法と補助動詞としての意味拡張に焦点をあて、それらの意味的変遷を明らかにする。

6.2.1. 日本語の V2「おく」における意味的変遷

まずは日本語の V2「おく」における意味的変遷について考察する。本節では、上代日本語資料から近世日本語資料にわたって観察される V2「おく」の意味用法の歴史的変遷を明らかにしたのち、補助動詞としての V2「おく」における意味拡張について考察する。

6.2.1.1. 日本語の V2「おく」における意味用法の変遷

上代日本語資料から近世日本語資料にわたって観察される日本語の V2「おく」の意味用法は、以下の表 3 のように示される。

表 3 日本語の V2「おく」における意味用法

意味用法	上代	中古	中世	近世	現代
A1〈積もる〉	○	○	×	×	×
A2〈置く〉	○	○	○	○	○
A3〈放つ〉	×	×	×	×	×
B1〈結果物残存〉	×	○	○	○	○
C1〈パーフェクト性〉	×	○	○	○	×
C2〈結果維持〉	○	○	○	○	○
C3〈事前処置〉	×	○	○	○	○
C4〈非難・自虐〉	×	△	○	○	○
D〈完遂〉	×	○	×	○	×

上代日本語資料『万葉集』で観察される V2「おく」においては、A 本動詞的用法の A1〈積もる〉用法と A2〈置く〉用法、そして C 補助動詞的用法の C2〈結果維持〉用法の用例が観察された。

最も多く観察されたのは A 本動詞的用法の A1〈積もる〉用法や A2〈置く〉用法の用例であるが、上代日本語から C 補助動詞的用法の C2〈結果維持〉用法の用例が観察される。以下に用

例を再掲する。上代日本語資料『万葉集』においては C 補助動詞的用法の用例が少ないため結論づけることはできないが、V2「おく」における「当該の動作の結果生じた直接的な結果状態を維持する」ことを表す C2〈結果維持〉用法が、C 補助動詞的用法の中でもより原始的な用法であった可能性を示唆する。C2〈結果維持〉の場合、C 補助動詞的用法の基本的特徴である「〈動作の完成性〉+〈結果の継続性〉」における〈結果の継続性〉を「①直接的な〈結果〉」の継続性と捉えており、本動詞「置く」における語彙的意味「事物に、ある位置を占めさせる」、より詳細に述べれば、事物をとある位置に占めさせ、その事物がその位置に継続して存在し続ける、という語彙的意味と密接に関わっているといえる。つまり、V2「おく」における C 補助動詞的用法のものの中でも、より本動詞の語彙的意味から類推しやすい意味であると考えられるということである。

(14)あしひきの山桜戸を開け置きて我が待つ君を誰れか留むる

〈足日木能 山櫻戸乎 開置而 吾待君乎 誰留流〉

〈万葉集 11/2617〉

中古日本語資料で観察される V2「おく」においては、A 本動詞的用法の A1〈積もる〉と A2〈置く〉用法、B 複合動詞的用法の B1〈結果物残存〉用法、C 補助動詞的用法の C1〈パーフェクト性〉用法、C2〈結果維持〉用法、C3〈事前処置〉用法、C4〈非難・自虐〉用法、D〈完遂〉用法と、非常に多様な用例が観察される。

中古日本語資料の V2「おく」において注目すべき点は、B 複合動詞的用法の B1〈結果物残存〉用法の用例が数多く観察されるという点である。この B1〈結果物残存〉は「当該の動作の結果生じた結果物を残存させる」ことを表す。V1 としては「書く、詠む、言ふ、思ふ」等ある程度限られた動詞を取るという制約は見られるものの非常に多くの用例が観察され、使用頻度自体は非常に高い用例である。中世日本語資料以降においても観察され続け、現代日本語においても「書きおく」や「言いおく」など一部が語彙的な複合動詞として用いられているが、中古日本語資料において多くの用例が観察されることから、中古日本語において盛んに用いられた用法であったことが窺われる。当時の B1〈結果物残存〉用法の V2「おく」が、現代日本語における語彙的複合動詞のような様相を呈していたか否かは更なる検討を要するが、「言ひおく」に対して「申しおく」や「のたまひおく」のような V1 が謙譲語形あるいは尊敬語形をとっている用例の存在を勘案すると、V1 としてとる動詞において制約を示しつつも、ある程度生産性のある用法であった可能性が考えられる。尚、中世日本語資料で観察される B1〈結果物残存〉用法の V2「おく」においては、「書置(かきおき)」のように転成名詞として用いられている用

例が多く出現する。つまり、中世日本語に至ってからは、B1〈結果物残存〉用法の「-おく」が現代語における語彙的複合動詞のように形態的に緊密化し、一語化した可能性が考えられる。この点については、後述する。

また、中古日本語資料の V2「おく」には上代日本語資料『万葉集』で観察された C2〈結果維持〉用法のほか、C1〈パーフェクト性〉用法や C3〈事前処置〉用法のような他の C 補助動詞的用法の用例も多く観察される。特に、現代日本語の V2「おく」には見られない C1〈パーフェクト性〉用法の用例が観察されるのが特徴的である。C1〈パーフェクト性〉は「当該の動作が設定時以前に達成され、その結果生じた結果(状態)が、設定時においても継続し、場合によってはそれが設定時において何らかの影響を与えている」ことを表す。他の C 補助動詞的用法の C2〈結果維持〉や C3〈事前処置〉とは異なり、動作主体の動作における〈意図性〉が無いかあるいは希薄であるため、「後続く事態を見越す」といった〈準備性〉が表出しない。以下に用例を再掲するが、現代日本語に置き換える際、「-おく」よりは「-ている(た)」とした方がより自然である。

(15)御心地にもをかしと聞きおきたまひし人なれば、かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さるべき契りあるにやと思しながら、…

〔器量よしとお聞きになっていた人なので、こうして思いがけずこの地においでになる巡り合わせになったのも、しかるべき宿縁のあることだろうかとお思いになりながら、…〕

〈源氏物語 明石〉

(16)などて、よろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし、若けれど中納言をばえ思しかけずなりぬめりしを、…

〔…しっかりと腰が定まらず、心の弱くなっていた私の怠りから、このような事態にもなったのだ。…〕

〈源氏物語 若菜上〉

中古日本語資料の V2「おく」におけるその他の C 補助動詞的用法としては、C2〈結果維持〉用法のほか、C3〈事前処置〉用法の用例も多く観察される。C2〈結果維持〉用法の場合、動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのが特徴であるが、その動作の結果生じる結果の維持に対する〈意図性〉の有無によって〈準備性〉が顕著である〈保持〉的な用法とそれが希薄である〈放置〉的な用法に分かれる。一方、C3〈事前処置〉用法は「後続く事態を見越して、当該の動作を行う」ことを表し、補助動詞的特徴の「〈動作の完成性〉+〈結果の継続性〉」

における〈結果の継続性〉を「②間接的な〈結果〉」の継続性、つまり後の事態へ続く〈効力〉として捉えている。動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのは C2〈結果維持〉用法と同様であり、〈準備性〉が顕著に表出する場合が多い。中古日本語資料で観察される V2「おく」の C2〈結果維持〉用法と C3〈事前処置〉用法の用例数における多寡に顕著な差は見られないため、どちらがより原始的かといった点については判断しづらい。しかし、中古日本語資料で観察される「-おく」において、C2〈結果維持〉用法よりも C3〈事前処置〉用法として用いられている V2「おく」の用例の方が V1 としてより多様な動詞をとっている様相が観察される。C3〈事前処置〉用法の V2「おく」が〈結果の継続性〉を間接的な〈結果〉として〈効力〉の持続を捉えているがゆえに、直接的な〈結果〉を表さない動詞が V1 となっても成立するため、V1 のヴァリエーションがより多様になっているものと考えられるが、C3〈事前処置〉用法が「-おく」における V2「おく」の補助動詞としての文法化が進展した後の段階の用法である可能性は充分に考えることができるだろう。

また、中古日本語資料における V2「おく」の C 補助動詞的用法の用例から徐々に「動詞連用形+テ+おく」の構造が用いられはじめていたのも特徴的である。

なお、中古日本語資料の V2「おく」から、同じく C 補助動詞的用法の C4〈非難・自虐〉用法と思われる用例が観察されはじめる。C4〈非難・自虐〉は「-おいて」等の形で複文の従属節の内部に現れ、「当該の動作を行ったことに対する動作主体への非難」を表す。動作主体が第三者であれば、その人物の行った動作に対する〈非難〉となり、話し手自身であれば〈自虐〉となる。しかし、中古日本語資料における V2「おく」の C4〈非難・自虐〉用法の用例は、中世日本語資料から近世日本語資料にかけて出現してくる典型的な C4〈非難・自虐〉の用例よりもその他の用法と中間的であり、拡大解釈の可能性も否定できない。本稿においては、C4〈非難・自虐〉用法の萌芽的な用例として、以下のような中古日本語資料における「-おく」の用例を挙げる。

(17)「頼もしき御蔭に、幼き者を牽りおきて、みづからをばなかなか幼くより見たまへもつかず、…」

〔「(母上を)お頼りどころとおすがりして幼い姫君をお任せ申しておいて、本人に対してこの父親はかえって幼いころからなんのお世話もいたさず、…」〕

〈源氏物語 少女〉

中古日本語資料の V2「おく」においては、以下に再掲する(18)のような D〈完遂〉用法の用例も観察される。D〈完遂〉は「当該の動作を最後まで行う」、「当該の動作を完全に行う」こ

とを表し、当該の動作を行うことによって始末をつけるといった意味を表しているといえる。この場合、先の C 補助動詞的用法のように、特に目立って〈結果の継続性〉が表出しないため、「後に続く事態を見越す」といった〈準備性〉も表出しない。以下、用例を再掲する。

(18)上帰らせたまふ御送りしおかせたまひて、中宮に、「ある山里に、ほのかなるものをこそ見たまへりしか」と申したまへば、…

〔帝がお帰りになるお見送りをおすませになつてから、中宮に、「ある山里で、ほのかなものを見たことでした」とおっしゃると、…〕

〈夜の寢覚め〉

中世日本語資料で観察される V2「おく」においては、A 本動詞的用法の A2〈置く〉用法、B 複合動詞的用法の B1〈結果物残存〉用法、そして C 補助動詞的用法の C1〈パーフェクト性〉用法、C2〈結果維持〉用法、C3〈事前処置〉用法、C4〈非難・自虐〉用法と、やはり多様な用法が観察される。

注目すべき点は、中世日本語資料で観察される V2「おく」における B1〈結果物残存〉用法の用例が、特に『虎明本狂言集』において、用例(19)のように転成名詞として用いられている点である。これは、「書きおく」のような「動詞連用形+おく」の V-V 構造が語彙的複合動詞のように形態的に緊密化し、一語として一体化した可能性を示唆する。(19)のように「-おく」が転成名詞として用いられている用例は、次の近世日本語資料における「-おく」の B1〈結果物残存〉用法の用例においてより多く観察されるようになる。以下に用例を再掲する。

(19)さてさてこれを人に見せたいな、いや此ぶんでは、むさとした事じやが、かきおきをしてはたさう…

〈虎明本狂言集 集狂言之類 文山だち〉

C 補助動詞的用法の用例は、中世日本語資料の V2「おく」においても豊富に観察される。「-おく」における「動詞連用形+テ+おく」構造の出現頻度の増加に伴い、C 補助動詞的用法の用例における「動詞連用形+テ+おく」構造の使用頻度も増加してくるが、その他の用法よりも C 補助動詞的用法の用例における使用頻度が高いことから、「動詞連用形+テ+おく」構造が C 補助動詞的用法の「-おく」において頻繁に用いられてきている様相を窺うことができる。

尚、中世日本語資料の V2「おく」における C 補助動詞的用法のうち特筆すべき用法は、C4〈非難・自虐〉用法であるといえる。

上代日本語資料から徐々に観察されはじめ、中古日本語資料から中世日本語資料にかけて豊富に観察される V2「おく」の C2〈結果維持〉や C3〈事前処置〉用法を見てもわかるように、日本語の V2「おく」には、無意志動詞を含む動詞に結合してその V1 の表す当該の動作や出来事の発生に対する動作主体の〈意図性〉を強化する機能があると思われる。無意志動詞を含む V1 の表す動作や変化等に対する動作主体の〈意図性〉を強化することは、その当該の動作や変化自体、そしてその結果に対する動作主体の〈責任性〉が顕在化することに繋がる。したがって、V2「おく」によって V1 の表す動作や変化等に対する動作主体の〈責任性〉を顕在化させることにより、その動作を行った動作主体に対する責任の追及といった〈非難〉、あるいは話し手自身が動作主体である場合は〈自虐〉の意味が表出してくるのではないかと考えられる。

この C4〈非難・自虐〉用法は、動作主体に対する責任追及といったマイナスの評価が当該の動作や変化の結果、つまり動作主体の動作や変化に対する〈責任性〉に対して与えられるため、V2「おく」における評価的意味がその他の用法よりも非常に強く表出した用法であるといえる。

C4〈非難・自虐〉用法の用例は中古日本語資料の V2「おく」においても多数観察されたが、中世日本語資料の V2「おく」、特に『虎明本狂言集』で観察される V2「おく」においてより典型的な C4〈非難・自虐〉用法の用例が観察される。中世後期の三大口語資料の一つとして数えられる狂言資料における用例という点で、文体的な性質によるものとも考えられるが、やはり中世日本語の V2「おく」において顕著に用いられはじめた用法である可能性が高いといえる。以下、用例を再掲する。

(20) (名取の何某) やいやい、何ものなれは、せつしやうきんだんの所で魚をすくふぞ

[やいやい、何者であれば、殺生禁断の所で魚を掬うのか]

(出家) いや身共は魚はすくはぬ

[いや、私は魚は掬わない]

(名取の何某) すくはぬとは、今のほどすくふておひて、ことさら出家の身で似合わぬ事をあそばす

[掬わないとは、今さっき掬っておひて、ことさら出家の身に似合わないことをする]

〈虎明本狂言集 出家座頭類 名取川〉

近世日本語資料で観察される V2「おく」においては、A 本動詞的用法の A2〈置く〉用法、B 複合動詞的用法の B1〈結果物残存〉用法、そして C 補助動詞的用法の C1〈パーフェクト性〉用法、C2〈結果維持〉用法、C3〈事前処置〉用法、C4〈非難・自虐〉用法、D〈完遂〉用法の

用例が観察された。近世日本語資料の V2「おく」においても、非常に多様な用法の用例が観察されることがわかる。

先の中世日本語資料の「-おく」のように、近世日本語資料の「-おく」における B1〈結果物残存〉用法の用例も、特に V1 が「書く」である「書きおく」の場合に転成名詞「書置(かきおき)」として用いられている場合が非常に多い。このように「書きおく」が転成名詞「書置」として現れることと合わせて、「-おく」全体における B1〈結果物残存〉用法の用例数が中古日本語や中世日本語よりも減少し、生産性が低下していることを考慮すると、近世日本語において次第に B1〈結果物残存〉用法の「-おく」が語彙的な複合動詞として固定化してきた可能性が考えられる。

近世日本語資料の V2「おく」においても、A 本動詞的用法の A2〈置く〉用法や、C 補助動詞的用法の C1〈パーフェクト性〉用法や C2〈結果維持〉用法、C3〈事前処置〉用法が豊富に観察されるが、特筆すべきなのは、以下の用例(21ab)と(22ab)のように、同一の V1 をもつ「-おく」が「動詞連用形+おく」構造(a)や「動詞連用形+テ+おく」構造(b)で現れるといった V1 の形態の混在が見られ、そこに用法の相違といった機能分担の様相が観察されるという点である。例えば、(21ab)における(21a)の「抜き置く」が A2〈置く〉用法なのに対し、(21b)の「抜いておく」は C3〈事前処置〉用法である。一方、(22ab)における(22a)の「言ひおく」が B1〈結果物残存〉用法なのに対し、(22b)は C1〈パーフェクト性〉用法である。つまり、(a)の各用例が示すように、A2〈置く〉用法や B1〈結果物残存〉用法の「-おく」は「動詞連用形+おく」構造であるのに対し、(b)の各用例が示すように、C 補助動詞的用法の「-おく」は「動詞連用形+テ+おく」構造が用いられているということである。以下、用例を再掲する。

(21)a.南無三宝と、剃刀捨て、側に抜き置く脇差の、鞘を持つて引き上ぐる。

〔「これは大変」と、剃刀を捨て、(腰から)側に抜き置いた脇差の鞘を持って、引き上げる。〕

〈卯月紅葉〉

b.つゝごかしの顔で、つらりと、九文、十文づゝ、百の口を抜いておけや。

〔「錢筒が倒れたようにみせかけ、一律に九文、十文ずつ、百文のところをぬいておけや」〕

〈心中万年草〉

(22)a.若い人のことなれば、後日の念に、ちよつと知らせておきますと、言ひおいて帰られた。

〔「若い人のことですので、ちょっと知らせておきます」と、言いおい(言い残し)て帰られた〕

〈心中重井筒〉

b.この在所で、わしは島原の傾城が、請け出されて来てみると、庄屋にも誰にも言うておく。

〔「…この田舎では、私は島原の遊女が身請けされて来ていると、庄屋にも他の人にも言っている…」〕

〈大経師昔暦〉

以下のような「-おく」の各構造における機能分担の様相については、文体差や表記上のゆれといった要因も考慮に入れて考察する必要がある。しかし、以上のような用例(b)をはじめとした近世日本語資料の「-おく」における C 補助動詞的用法の用例を全体的に観察すると、「動詞連用形+テ+おく」構造のものが圧倒多数を占めており、それが「-おく」の補助動詞構造専用の構造として使用されてきている様相を窺うことができる。

また、近世日本語資料における V2「おく」の C3〈事前処置〉用法において注目すべき点は、歴とした〈準備性〉を示さない「一時的処置」、「臨時的処置」のような用例が出現してくるという点である。これは、その他の時代の資料には観察されない近世日本語資料の「-おく」に特徴的な用例であるといえる。以下に用例を再掲する。

(23)「実正の情心こそ放心とは仕ませんけれども、女房になるの仕様のといふくらゐのことは、口先でアイといつて置ますはネ。…」

〔「本当の情愛こそうっかりするようなことはしませんけれども、女房になるというくらいのことは、口先だけでアイと言っておきますね。…」〕

〈春告鳥〉

C4〈非難・自虐〉の用法は、中古日本語資料の V2「おく」から萌芽的な用例が観察されはじめるが、中世日本語資料においてより典型的な用例が観察されはじめ、近世日本語資料の V2「おく」においても多くの典型的な用例が観察される。以上のような流れを勘案すると、この日本語の V2「おく」における C4〈非難・自虐〉用法は、V2「おく」の補助動詞としての文法化が進展した後の段階で出現した意味用法である可能性が非常に高いといえる。つまり、C4〈非難・自虐〉用法というのは、日本語の V2「おく」の補助動詞としての用法、つまり C 補助動詞的用法における C2〈結果維持〉用法や C3〈事前処置〉用法が確立した上で出現した用法であるということである。この C4〈非難・自虐〉用法はその他の C 補助動詞的用法である C2〈結果維

持)用法やC3〈事前処置〉用法よりも評価性、特に非難や自虐といったマイナスの評価性を顕著に示しており、より主観的な意味への変化といった主観化の方向性との一致を見せる。さらに、C4〈非難・自虐〉用法の場合、中世日本語資料や近世日本語資料で観察される典型的な用例においては、「動詞連用形+テ+おく」の構造をとった用例のみであるため、形態・構造的特徴といった側面からも文法化の進展した後の段階の用法であることを裏付ける。以下、用例を再掲する。

(24)「脇差忘れた、ちやつとちやつと. なんと伝兵衛. 町人はこゝが心やすい. 侍なれば、そのまゝ切腹するであろの.」 「我ら預つておいて、とんと失念. 小刀も揃うたと. 渡せば、…」

〔「脇差忘れた、早く早く。どうだな伝兵衛、町人はここが気楽だ。侍なら、すぐに切腹ものであるな」「私も預つておいて、すっかり忘れていました。小刀もそろっています」と渡すと、…〕

〈心中天の網島〉

(25)「ナニうそなものか。只今灸をすへて呉ると言て置て、灸点をおろしてあげやふといふと、脇へ逃るではないかへ。…」

〔「何、嘘なものか。たった今灸をすえてくれと言つておいて、灸点に灸をすえてあげようと言うと、脇の方へ逃げるではないか。…」〕

〈春告鳥〉

近世日本語資料のV2「おく」においてもD〈完遂〉用法は観察されるが、本稿において使用した上代日本語資料から近世日本語資料全体を通して、このD〈完遂〉用法のV2「おく」の用例は僅少である。以下、用例を再掲する。

(26)手にかけて. 殺しておいて行かんせな. 放ちはやらじと泣きければ.

〔行くのなら手にかけて殺してから行きなさいな. 決して放しはすまいと泣くと…〕

〈曾根崎心中〉

6.2.1.2. 本動詞「置く」と V2「おく」の意味的関連性

本節では、上代日本語資料から近世日本語資料にわたって観察された V2「おく」の意味用法の歴史的変遷を基にして、日本語の本動詞「置く」と V2「おく」との意味的な関連性について考察する。

前述の通り、上代日本語資料『万葉集』から「当該の動作の結果生じた直接的な結果状態を維持する」ことを表す C2〈結果維持〉用法が観察され、これが C 補助動詞的用法の中でもより原始的な用法であった可能性があることを指摘した。この C2〈結果維持〉用法の場合、C 補助動詞的用法の基本的特徴とした「〈動作の完成性〉+〈結果の継続性〉」における〈結果の継続性〉を「①直接的な〈結果〉」の継続性と捉えているといえるが、これは本動詞「置く」における語彙的意味「事物に、ある位置を占めさせる」、より詳細に述べれば、事物をとある位置に占めさせ、その事物がその位置に継続して存在し続ける、という語彙的意味と密接に関わっているといえる。つまり、「事物をとある位置に占めさせること」が〈動作の完成性〉へ、また「その事物がその位置に継続して存在し続けること」が〈結果の継続性〉へと類推を促すということである。このような点については、同様に〈結果の継続性〉が顕著に表出する〈パーフェクト性〉用法にも当てはめることができる。

一方、C3〈事前処置〉用法は「後に続く事態を見越して、当該の動作を行う」ことを表すが、この用法は C 補助動詞的用法の基本的特徴とした「〈動作の完成性〉+〈結果の継続性〉」における〈結果の継続性〉を「②間接的な〈結果〉」の継続性、つまり後の事態へ続く〈効力〉として捉えている。それゆえ、「直接的かつ具体的な結果」から「間接的かつ抽象的な結果」へと拡張していく過程を想定することができるが、実際の歴史的資料において観察される用例からもこのことは裏付けされるといえる。つまり、C2〈結果維持〉用法の用例は僅少ではあるものの上代日本語資料から観察され、C3〈事前処置〉用法の用例は中古日本語資料から観察されはじめるため、用例の出現時期といった点からも以上のような意味拡張の過程を想定することができるということである。

尚、「当該の動作を行ったことに対する動作主体への非難」を表す C4〈非難・自虐〉用法の場合は、間接的かつ抽象的な〈結果の継続性〉を当該の動作や変化等に対する動作主体の〈責任性〉として捉えており、さらにそこへ非難や自虐といったマイナスの評価も加わっている。これはより主観的な意味への変化といった文法化に伴う意味変化の一種、つまり主観化の方向性と一致しており、C4〈非難・自虐〉用法が文法化の進展した後の段階で出現した用法であることを示唆するが、実際の歴史的資料において観察される用例からもこのことは裏付けされるだろう。つまり、C4〈非難・自虐〉用法の用例は中古日本語資料から徐々に萌芽的な用例が観察されはじめ、中世日本語資料から近世日本語資料にわたって典型的な用例が観察されるため、

用例の出現時期からも以上のような意味拡張の過程を想定することができるのである。

同じく補助動詞的な用法である D〈完遂〉用法の場合は、〈結果の継続性〉が後景化しており、〈動作の完成性〉のみに焦点が当たっている用法である。C4〈非難・自虐〉と同様に複文の従属節に現れた場合に表出する用法であり、従属節によって表される事態に対する始末を付けてから、主節によって表される事態へと移行するという文脈で用られていることから、C3〈事前処置〉用法ほど〈準備性〉は顕著でないものの、「後の事態を見越」して当該の動作を行うことを表しているものと思われる。

B 複合動詞的用法の B1〈結果物残存〉用法は「当該の動作の結果生じた結果物を残存させる」ことを表しているが、この場合は、本動詞「置く」の語彙的意味のように、単に「事物に、ある位置を占めさせる」ことを表しているのではなく、「V1 の表す当該の動作の結果生産された歌や伝言等の結果物を、第三者の目に触れさせることや伝えることを目的として残存させる」ことを表しているといえる。「当該の動作の結果生じた結果物が継続して存在し続ける」といった点で本動詞「置く」の語彙的意味と関連しているが、「第三者の目に触れさせることや伝えることを目的として」いる点から C2〈結果維持〉用法や C3〈事前処置〉用法のような「後の事態を見越す」といった〈準備性〉も少なからず表出している。この B1〈結果物残存〉用法と C2〈結果維持〉用法及び C3〈事前処置〉用法との関連性については更なる検討を要するが、各用例が本動詞「置く」の語彙的意味をそれぞれの程度性をもって残存させていることは明らかである。

日本語の V2「おく」における以上のような意味用法の歴史的変遷を基にして、本動詞「置く」の語彙的意味から各時代に観察される V2「おく」の各意味用法への拡張過程を捉えるにあたり、次の(27)のような金水他(2000)による「出来事の時間的構造」⁶を図式化したものを援用する。

⁶ 金水他(2000)による「出来事の時間的な構造」におけるそれぞれの局面は以下のように説明されている。紙面の都合上、適宜筆者が要約したことを断っておく。

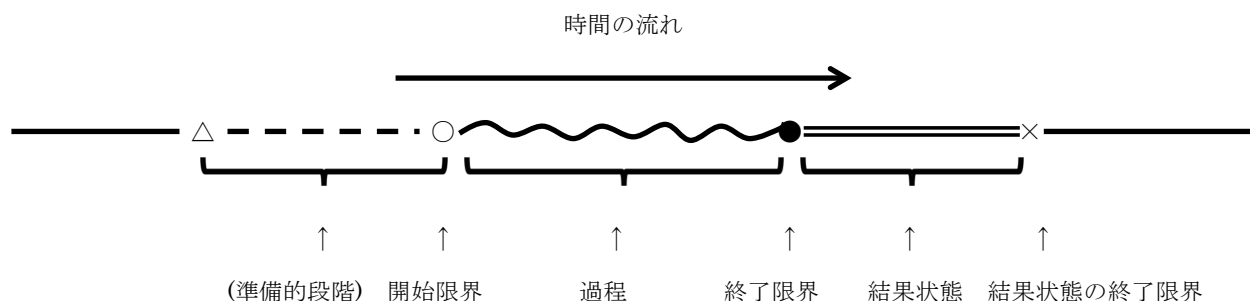
準備的段階…例えば「猫が魚を食べる」という出来事の前には、「猫が魚に近づく」という状況が必要であるが、この場合の「猫が魚に近づく」という状況を準備的段階と呼ぶのである。

過程…運動の主体の活動を指し示す。典型的には開始限界と終了限界を持ち、終了限界を過ぎると主体は開始限界以前の状態に戻る。

開始限界と終了限界…過程の始まりと終わりの時点を表わしている。例えば、「3時から5時まで本を読む」のように言うことができるが、この場合の「3時」が開始限界、「5時が」終了限界に相当する。

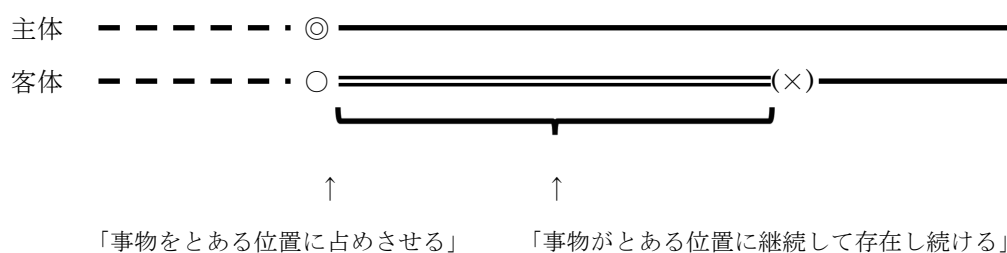
結果状態…動詞が表す出来事が達成されたときに必然的にもたらされる状態のことを言う。

(27)金水他(2000)による「出来事の時間的な構造」



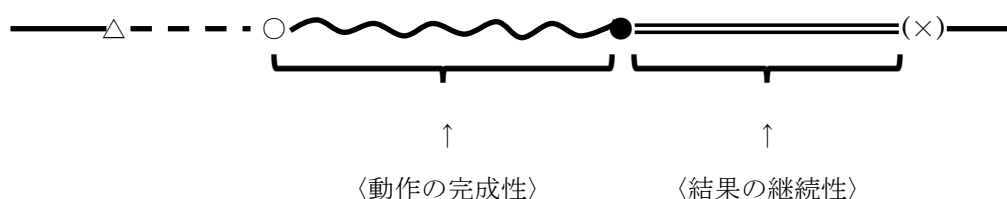
まず、本動詞「置く」の語彙的意味「事物をとある位置に占めさせる+その事物がその位置に継続して存在し続ける」の時間的構造を主体動作と客体変化に分けて図示すると、以下の(28)ようになる。尚、「◎」は開始限界と終了限界が同時である限界点を表示するものである。本動詞の語彙的意味のうち、先行する「事物をとある位置に占めさせる」という主体動作は開始限界が達成されると同時に終了限界も達成される瞬間的な動きであるといえる。後続する「事物がその位置に継続して存在し続ける」という客体変化(の結果状態)は、文脈によってそれが永続的に続く場合もあれば、終了限界点をもつ場合もあるといえる。

(28)本動詞「置く」の語彙的意味における時間的な構造



以上の(28)のような本動詞「置く」の語彙的意味における時間的な構造を基に、「-おく」における補助動詞的用法の基本的な時間的構造を図示すると、次の(29)のようになる。

(29) 「-おく」における補助動詞的用法の基本的な時間的構造



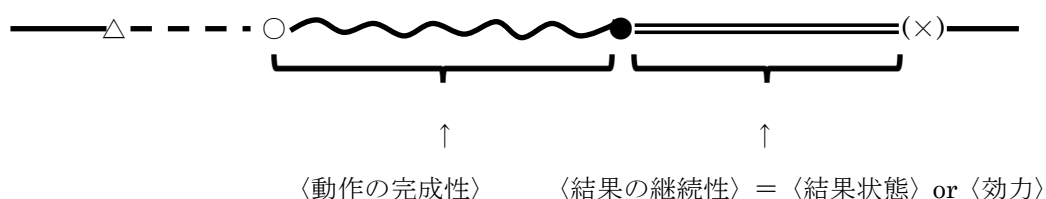
3.2.3 で述べたように、日本語の「-おく」の V2「おく」が補助動詞として用いられる場合、(29)で図示されているように、基本的に〈動作の完成性〉とその〈結果の継続性〉が複合的に捉えられる。〈動作の完成性〉は前接する V1 の表す動作が最初から最後まで行われることを表しており、それは設定時以前に達成される。その結果生じる〈結果の継続性〉は設定時においても引き続き継続しており、V2「おく」の用法によって程度差は存在するものの、設定時において何らかの影響を及ぼしている。

以上のような補助動詞的用法の V2「おく」が用いられた日本語の「-おく」を特色づけているものは、やはり〈結果の継続性〉が焦点化されているという点であろう。これは、本動詞「置く」の語彙的意味における時間的な構造にも図示したように、本動詞「置く」が含意する「物がとある位置に継続して存在し続ける」という結果状態を反映した特性であると考えられる。

以下、補助動詞として用いられている V2「おく」の各用法が、(29)で図示されるような「-おく」の補助動詞的用法の基本的な時間的構造における各局面をどのように捉えることによって生じるのかを図示する。

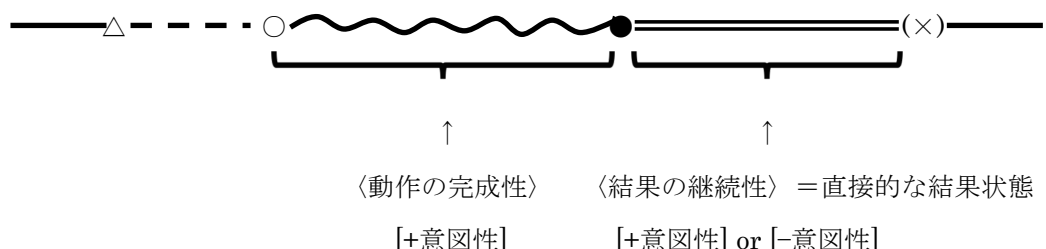
C1〈パーフェクト性〉の場合は、次の(30)のように図示することができる。C1〈パーフェクト性〉用法は「当該の動作が設定時以前に達成され、その結果生じた結果(状態)が、設定時においても継続し、場合によってはそれが設定時において何らかの影響を与えている」ことを表す。状態パーフェクト相当の意味を表す場合は、〈結果の継続性〉が当該の動作の結果生じる〈結果状態〉の継続として捉えられ、動作パーフェクト相当の意味を表す場合は、〈結果の継続性〉が当該の動作の結果生じる〈効力〉として捉えられる。その他の補助動詞的用法と異なるのは、〈動作の完成性〉と〈結果の継続性〉ともに動作主体による意図、つまり〈意図性〉の有無については言及しないという点である。したがって、後に続く事態を見越す〈準備性〉も表出しない用法である。

(30)V2「おく」における C1〈パーフェクト性〉の時間的な構造



C2〈結果維持〉の場合は、以下の(31)のように図示される。C2〈結果維持〉用法は「当該の動作の結果生じた直接的な結果状態を維持する」ことを表す。前述の C1〈パーフェクト性〉と異なる点は、〈動作の完成性〉において〈意図性〉が表出する点である。これは、以下の用例(32)と(33)のように、C2〈結果維持〉用法の「-おく」が非意図的動作であることを表す副詞「つい」や「思わず」と共起しづらい点からも裏付けられる。ただこの場合、〈結果の継続性〉は直接的な結果状態であり、その捉え方によって、〈意図性〉が表出し、後の事態を見越すといった〈準備性〉が顕著である「保持」的用法と、〈意図性〉が無いか希薄であり〈準備性〉も希薄である「放置」的用法に分かれる。

(31)V2「おく」における C2〈結果維持〉の時間的な構造

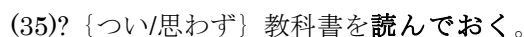


(32)? {つい/思わず} 窓を開けておく。

(33)? {つい/思わず} 子供を放っておく。

C3〈事前処置〉の場合は、以下の(34)のように図示される。C3〈事前処置〉用法は「後にくる事態を見越して、当該の動作を行う」ことを表す。〈動作の完成性〉において〈意図性〉が表出する点は C2〈結果維持〉と共通するが、〈結果の継続性〉は間接的な結果としての〈効力〉と捉えられ、具体的かつ直接的な結果状態の継続として〈結果の継続性〉を捉える C2〈結果維持〉とは異なっている。〈動作の完成性〉において〈意図性〉が表出するという点については、

(34)V2「おく」における C3〈事前処置〉の時間的な構造



前述の C2〈結果維持〉や C3〈事前処置〉でも述べた通り、V2「おく」には〈動作の完成性〉において動作主体による〈意図性〉をより顕著に表出させる機能があると考えられ、このこと

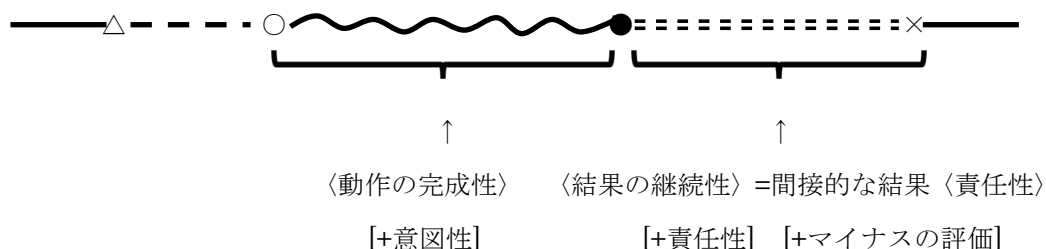
は(38b)や(39b)のような文が成立可能であるということからも裏付けされる。このような V2「おく」における〈意図性〉の表出機能を「意図化」とすると、この「意図化」が V2「おく」における C4〈非難・自虐〉用法の派生の動機となっていると本稿では考える。

パルデシ(2007)では、非意図的事象と非受影性事象という他動性の典型から逸脱した事象に他動詞節としてのコード化が拡張されることにおいて、「コントロール性(controllability)」と「有責任性(responsibility)」という概念による動機付けが存在することを主張しており、コントロール性と有責任性の相関関係を、「事象の結果部分が主語のコントロール下にあると認知される限りにおいて、その主語は事象の結果に対して責任を負うことになる。コントロール性が高ければ高いほど、それに対する主語の有責任性も高くなり、結果として、その出来事が他動詞節としてコード化される可能性も高くなる(p.181, l.11-15)」と説明している。

パルデシ(2007)では、他動性のプロトタイプから外れた事象が他動詞構文によってコード化される現象において、コントロール性に動機づけられた有責任性が関わっていることを論じており、本稿とは論点を異にする。しかし、当該の動作の結果が動作主体のコントロール下にあるか否かという認識が、その結果に対する動作主体の責任の有無に連動するという主張は、V2「おく」における C4〈非難・自虐〉用法の派生動機を解明する上で、非常に重要な考察であると考える。ただ、C4〈非難・自虐〉用法の派生動機として考えられるのは、動作主体の動作の結果に対するコントロール性に動機づけられる〈責任性〉というよりは、動作主体が当該の動作を意図的に行ったか否かという〈意図性〉の認識に動機づけられた〈責任性〉が関与していると考えられる。つまり、V2「おく」の C4〈非難・自虐〉用法においては、動作主体が当該の動作を意図的に行ったという〈意図性〉が視点者(話し手あるいは動作主体)によって認識された場合に、その動作の結果に対して動作主体が責任を負うことになるという〈責任性〉が発生するということである。そして、動作主体が意図的に当該の動作を行い、その結果に対して責任を負っていることに対する責任追及として、視点者による主観的な評価、特に「非難」といったマイナスの評価が与えられるのである。

したがって、C4〈非難・自虐〉用法の場合は、次の(37)のように図示される。C3〈事前処置〉と同様に、C4〈非難・自虐〉の場合も〈動作の完成性〉において動作主体の〈意図性〉が表出しており、〈結果の継続性〉は間接的かつ抽象的な結果、つまり動作の結果に対する動作主体の〈責任性〉として捉えられる。そして、その動作主体の動作の結果に対する〈責任性〉の追求として「非難」といったマイナスの評価性を帯びようになると考えることができる。

(37)V2「おく」における C4〈非難・自虐〉の時間的な構造



(38)a.?試合に負けておく。

b.わざと試合に負けておく。

c.さんざん試合に負けておいて、まだ現役選手を続けたいだど?いい加減、諦めろよ。

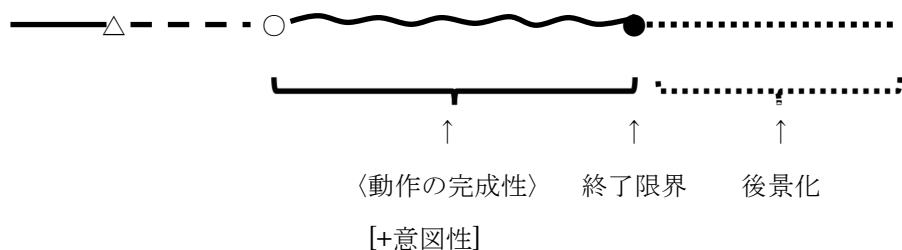
(39)a.?道に迷っておく。

b.わざと道に迷っておく。

c.さんざん道に迷っておいて、挙げ句の果てに「お前が探せよ」だつて。飽きれちゃうわ。

D〈完遂〉の場合は、以下の(38)のように図示される。D〈完遂〉用法は「当該の動作を最後まで行う」、「当該の動作を完全に行う」ことを表し、〈動作の完成性〉における終了限界を達成する局面が特に焦点化される。したがって、これまでの C1〈パーフェクト性〉や C2〈結果維持〉、C3〈事前処置〉、C4〈非難・自虐〉とは異なり、〈結果の継続性〉の局面が後景化している。

(40)V2「おく」における D〈完遂〉の時間的な構造



B1〈結果物残存〉の場合は、次の(39)のように図示される。B1〈結果物残存〉用法は「当該の動作の結果生じた結果物を残存させる」ことを表す。「事物を残存させる」動作を表す主体

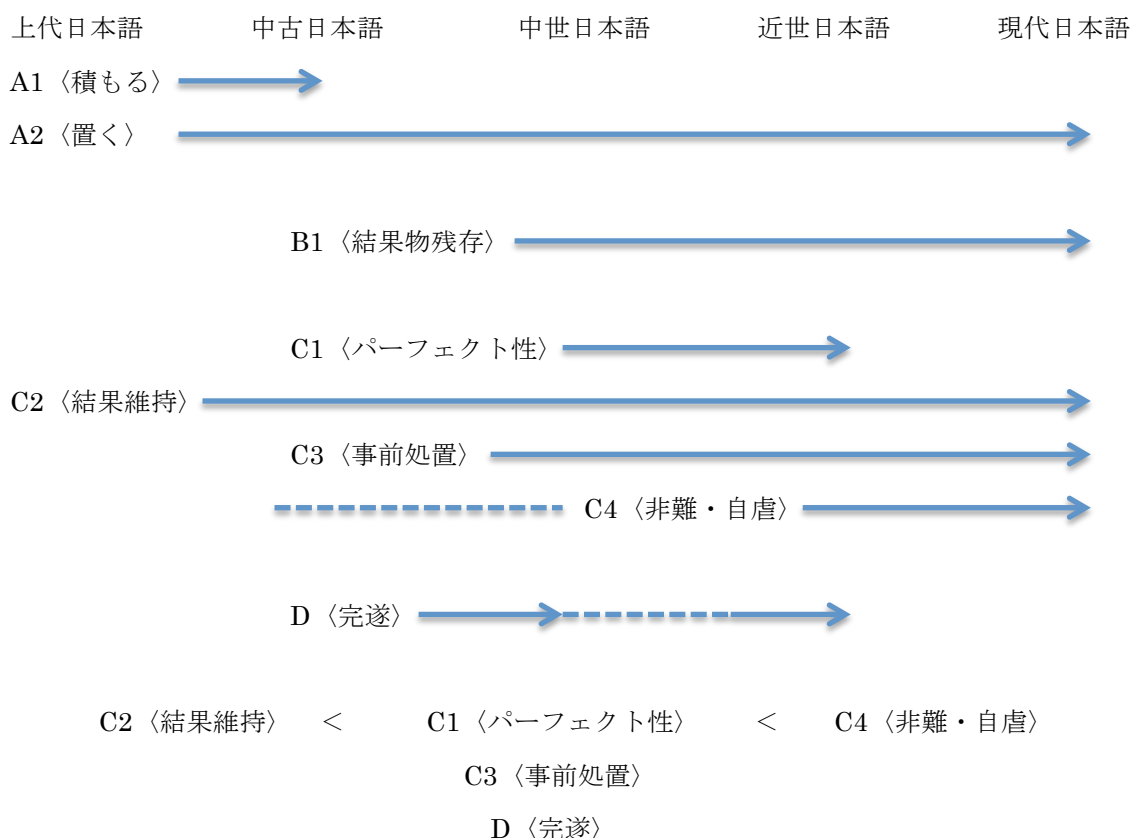
(41)V2「おく」における B1〈結果物残存〉の時間的な構造



6.2.1.3. 補助動詞としての V2「おく」における意味拡張の過程

本節では、上代日本語資料から近世日本語資料にわたって観察された V2「おく」の意味用法の歴史的変遷を基にして、補助動詞としての V2「おく」における意味拡張の様相を明らかにする。日本語の V2「おく」における意味的変遷と補助動詞としての意味拡張の様相を図式で示すと、以下の(42)のようになる。

(42) V2「おく」における意味的変遷と補助動詞としての意味拡張



補助動詞としての日本語の V2「おく」は、上代日本語資料の V2「おく」からその C 補助動詞的用法 C2 〈結果維持〉用法の用例が見られる。中古日本語資料においては、C2 〈結果維持〉用法のほか、C1 〈パーフェクト性〉用法や C3 〈事前処置〉用法の用例も見られ、C4 〈非難・自虐〉用法の萌芽的な用例も見られはじめる。尚、C4 〈非難・自虐〉用法の典型的な用例は、その後の中世日本語資料や近世日本語資料において顕著に見られはじめる。よって、以上のような意味拡張の過程を想定することができる。

日本語の補助動詞「おく」における以上のような意味拡張の過程を、文法化に伴う意味変化である主観化という観点から考察すると、C3 〈事前処置〉用法への意味拡張という現象は、語

彙的に含意される直接的な結果状態から文脈依存的な間接的結果状態への関心という意味の拡張であるため、主観化の方向への一致を見せている。また、C4〈非難・自虐〉用法のような、話し手の結果に対する評価性がさらに増した用法への拡張は、主観的な意味からより主観的な意味への拡張を示していると捉えることができる。

尚、現代日本語の補助動詞「おく」は、以下の「行為猶予」や「結果誇示行為」のような意味を表わす場合がある。「行為猶予」は、「-おく」の基本的特徴「〈動作の完成性〉+〈結果の継続性〉」において前景化する〈結果の継続性〉の効果によるものであると考えられる。「-おく」によって当該の動作における〈結果の継続性〉が前景化することにより、当該の〈動作の完成性〉が非焦点化する。つまり、いつかの時点において行う(べき)動作の結果(の継続性)が提示されていればよいという解釈が生じるため、当該の動作自体の「即時性」が軽減される。これは、(45b)のように「今すぐ」のような副詞表現と共にしづらいという点からも支持され、また(47)のように、「いつでもいいから」といった、行為の依頼相手に対して猶予を与えるような表現との相性が良い点からも支持されるといえる。よって、話し手が聞き手に対して当該の動作を行うことを依頼する際などにV2「おく」が用いられると、当該の動作を実行する際の聞き手の負担が軽減し、聞き手のネガティブフェイスが維持される場合もある。

「行為誇示」は「当該の動作を行ったことをことさらに示す」ことを表す。これはV2「おく」により、当該の動作に対する動作主体の〈意図性〉が強化されることによるものであると考えられる。話し手が当該の動作を意図的に、つまり敢えて行ったということを聞き手に対して誇示することにより、話し手(動作主体)の行為の有効性を顕示する用法であるといえる。

このように現代日本語の補助動詞「おく」の意味用法を考察すると、現代日本語においてはさらに「行為猶予」や「行為誇示」といった聞き手目当ての意味用法、つまり間主観的な意味にまで拡張していることが窺える。以下、用例を見られたい。

「行為猶予」

(43)a. 「そこに置いてある資料、人数分コピーとって」

b. 「そこに置いてある資料、人数分コピーとっておいて」

(44)a. ? 「そこに置いてある資料、後で人数分コピーとって」

b. 「そこに置いてある資料、後で人数分コピーとっておいて」

(45)a. 「そこに置いてある資料、今すぐ人数分コピーとって」

b. ? 「そこに置いてある資料、今すぐ人数分コピーとっておいて」

(46)a. 「私もう出かけなきゃ。鉢植えにお水遣ってね」

b. 「私もう出かけなきゃ。鉢植えにお水遣っておいてね」

(47)a.?「私もう出かけなきゃ。いつでもいいから、鉢植えにお水やってね」

b.「私もう出かけなきゃ。いつでもいいから、鉢植えにお水やっておいてね」

「行為誇示」

(48)a.「雨降ってきたから、洗濯物取り込んだよ」

b.「雨降ってきたから、洗濯物取り込んでおいたよ」

(49)a.「頼まれていた資料、作ったからね」

b.「頼まれていた資料、作っておいたからね」

(50)a.「お安くしますよ」

b.「お安くしておきますよ」

(51)a.「断ったりして気の弱い委員の方が倒れたりしたら、都政が混乱するので。都知事閣下と東京都民各位のために、もらってやる」

b.「断ったりして気の弱い委員の方が倒れたりしたら、都政が混乱するので。都知事閣下と東京都民各位のために、もらっていてやる」

〈第 146 回芥川賞受賞会見における受賞者田中慎弥氏による発言〉

6.2.2. 日本語の V2「しまう(しまふ)」における意味的変遷

続いて、日本語の V2「しまう(しまふ)」における意味的変遷について考察する。本節では、近世日本語資料において観察される V2「しまう(しまふ)」の意味用法を現代日本語における V2「しまう」との比較という観点から明らかにしたのち、補助動詞としての V2「しまう(しまふ)」における意味拡張について考察する。

6.2.2.1. 日本語の V2「しまう(しまふ)」における意味用法の変遷

本節では、近世日本語資料における V2「しまう(しまふ)」の意味用法を振り返るが、形態的変遷と同様に、V2「しまう(しまふ)」が複数の時代に渡って観察されないため、その意味用法においても歴史的な変遷を辿ることは困難である。しかし、現代日本語との比較において、近世日本語資料における V2「しまう(しまふ)」の意味用法について論じることは可能である。

近世日本語資料における V2「しまう(しまふ)」は、現代日本語の V2「しまう」と同じ意味用法も観察されるが(C1〈一掃〉、C2〈遺憾〉、C3〈無意識〉)、現代日本語においては観察されない用法の用例も多数観察される(A1〈終える〉、B1〈動作終了〉)。よって、本節では、現代日本語の V2「しまう」における意味用法と照らし合わせながら、近世日本語資料において観察される V2「しまう(しまふ)」の意味用法について考察する。まずは、以下の表 4 を見られたい。

表 4 日本語の V2「しまう(しまふ)」における意味用法

意味用法	近世	現代
A1〈終える〉	○	×
B1〈動作終了〉	○	×
C1〈一掃〉	○	○
C2〈遺憾〉	○	○
C3〈無意識〉	○	○

近世日本語資料で観察される V2「しまう(しまふ)」においては、A 本動詞的用法の A1〈終える〉用法、B 複合動詞的用法の B1〈動作終了〉用法、そして C 補助動詞的用法の C1〈一掃〉用法、C2〈遺憾〉用法、C3〈無意識〉用法の用例が観察された。

まず、近世日本語資料の V2「しまう(しまふ)」において、A 本動詞的用法の A1〈終える〉用法の用例が観察される。A1〈終える〉用法は「し終える。しとげる。しすます」という実質的な動作を表す。ただ、以下の(52)のような用例の場合は、V1 と V2「しまふ」が「句的な動詞連続」として用いられているといえる。以下に用例を再掲する。

(52)「犬がくらひつくでゆかれぬと、大切なお客衆が見えませいで、いかい商売のかいのござりますれば、ふびんな事なれど、一服させてしまひたうござります。」

〔「…犬がかみつくからいやだと、大切なお客方がお見えになりませず、大変商売の邪魔になりますので、かわいそうですが、一服盛って始末したいと思います。」〕

〈野白内証鑑〉

一方、現代日本語の V2「しまう」の意味用法には見られない、近世日本語資料の V2「しまう(しまふ)」の用法として、B1〈動作終了〉用法の用例が観察される。B1〈動作終了〉は「当該動作の最終段階が行われる」ことを表す。この場合、V2「しまう(しまふ)」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それを含む構文において V2「しまう(しまふ)」は対象物となる補語をとらないため補助動詞的な用法であるといえるが、本動詞「しまう(しまふ)」における実質的動作を表す語彙の意味が色濃く残存しているという点で、C 補助動詞的用法の用法とは異なっている。したがって、本稿では B1〈動作終了〉のような用法を、B 複合動詞的用法として A 本動詞的用法や C 補助動詞的用法とは区別して提示した。

ただ、日本語の「-おく」における B1〈結果物残存〉とは異なり、この「-しまう(しまふ)」における B1〈動作終了〉用法は、現代日本語において「食いしまう」や「言いしまう」のように語彙的な複合動詞としては残存していないようである。近世日本語において B1〈動作終了〉の「-しまう(しまふ)」がいかなる様相を呈していたかは検討の余地があるが、本稿では、V1 に依存的である点、また前接する V1 の種類に一定の制約が見られるという点を考慮し、暫定的に B 複合動詞的用法として B1〈動作終了〉を位置づけることとする。前述の通り、近世日本語資料で観察される「-しまう(しまふ)」の B1〈動作終了〉用法の用例は、V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+しまふ」の構造で出現しており、形態的特徴及び意味的特徴において現代日本語の「-しまう」にはない独自の特色を示していることがわかる。また、本動詞「しまう(しまふ)」の語彙の意味が色濃く残存している点を考慮しても、B1〈動作終了〉用法がより原始的な用法であった可能性を示唆する。以下に用例を再掲する。

(53)「今宵かもしれず」と待侘びて、臂を枕にすこし夢むすびけるに、建仁寺の陀羅尼つきしまふ時分に、表に人のおとなひ。

〔「来られるのは今夜かもしれない」と待ちわびて、臂枕をして少し眠ったが、建仁寺の陀羅尼の鐘をつき終わるころに、表に人の訪問の音がする〕

〈野白内証鑑〉

一方、近世日本語資料の V2「しまう(しまふ)」において、すでに現代日本語の V2「しまう」のような C 補助動詞的用法の C1〈一掃〉用法や C2〈遺憾〉用法、C3〈無意識〉用法の用例が観察される。

C1〈一掃〉は「負担感を一掃するように当該の動作が行われる」ことを表し、C2〈遺憾〉は「当該の動作が意図的に、あるいは話し手のコントロール不可能な状況下で行われるか、同様の状況下で当該の変化や出来事が生じた結果、話し手が残念な気持ちになる」ことを表す。どちらも C 補助動詞的用法の基本的特徴である〈不可逆性〉により実現する意味用法であると考えられるが、「西鶴集」や「近松集」といった近世前期の日本語資料においては V1 に意志動詞をとる C1〈一掃〉用法の V2「しまう(しまふ)」の用例が多く観察されるのに対し、『東海道中膝栗毛』といった近世後期の日本語資料においては C1〈一掃〉のほか、意志動詞のみならず、非対格自動詞や動詞の受身形を含んだ無意志動詞を V1 としてとる C2〈遺憾〉用法の用例も多く観察される。

近世日本語資料においても、資料ごとの文体差は勿論、位相差にも注意を要するため一概にどちらの用法がより原始的かといったことは断言することはできないが、日本語の V2「しまう(しまふ)」の C 補助動詞的用法において、C1〈一掃〉用法がより原始的な用法であった可能性は検討されるべきである。そして、日本語の V2「おく」における C4〈非難・自虐〉用法と同様に、日本語の V2「しまう(しまふ)」における C2〈遺憾〉用法の場合も、後悔や残念、憂慮や不安感といったマイナスの評価が当該の動作や変化、出来事の結果に対して与えられるため、V2「しまう(しまふ)」における評価性がその他の用法よりも顕著に表出していると考えられる。つまり、より主観的な意味への変化といった主観化の方向性との一致を示しており、この日本語の V2「しまう(しまふ)」における C2〈遺憾〉用法が V2「しまう(しまふ)」の補助動詞としての文法化が進展した後の段階で出現した意味用法である可能性が高いということである。

一方、近世日本語資料の V2「しまう(しまふ)」においても C3〈無意識〉用法の用例が観察される。C3〈無意識〉は「当該の動作が話し手のコントロール不可能な状況下で無意識的に行われたり、話し手が意識しないうち当該の変化や出来事が生じる」ことを表す。ただ、この C3〈無意識〉用法の用例は近世日本語資料の V2「しまう(しまふ)」においては僅少であり、近世日本語の V2「しまう(しまふ)」における C 補助動詞的用法の中でもより周辺的な用法であったことが窺われる。以下に、近世日本語資料における V2「しまう(しまふ)」の C 補助動詞的用法の用例を再掲する。

(54)「よごしますとわるふございますから、はやく着かへて仕舞ひませう。しはになりそふで心配でなりません」ト立をとどめて…

〔「汚しますと悪いですから、早く着替えてしまいましょう。皺になりそうで心配でなりません…」…〕

〈春告鳥〉

(55)「たばこぼんへ火をいれたらこげてしまはア。たばこ盆の中にある、火入のうちへ、火をいれてこいといふもんだ…」

〔「たばこ盆へ火を入れたら焦げてしまうぞ。たばこ盆の中にある火入れの中へ火を入れてこいというものだ…」〕

〈東海道中膝栗毛〉

(56)「乗合のことだから、まゝのかはとそれなりに、くたびれまぎれに、ツイねてしまひやして、…」

〔「…乗り合いだから、ええままよとそのままで、くたびれたのにまかせて、つい寝てしまいまして、…」〕

〈東海道中膝栗毛〉

6.2.2.2. 本動詞「しまう(しまふ)」と V2「しまう(しまふ)」の意味的関連性

本節では、近世日本語資料において観察された V2「しまう(しまふ)」の意味用法の歴史的変遷を基にして、日本語の本動詞「しまう(しまふ)」と V2「しまう(しまふ)」との意味的な関連性について考察する。

前述の通り、近世日本語資料における V2「しまう(しまふ)」においては、現代語の V2「しまう」には見られない B 複合動詞的用法の B1〈動作終了〉用法の用例が観察される。この B1〈動作終了〉は「当該の動作の最終段階が行われる」ことを表し、V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+しまう(しまふ)」の構造で出現する。これは本動詞「しまう(しまふ)」の語彙的意味のように、単にある動作を「し終える」のではなく「これまで続いていた事態を締めくくるといいう目的で当該の動作を終える」ことを表しているといえる。つまり、「これまで続いていた事態を締めくくることによってもう以前のような事態を継続させない、元の事態には戻らない」という、本動詞「しまう(しまふ)」の語彙的意味を色濃く残存させているということである。したがって、以上のような本動詞「しまう(しまふ)」や B1〈動作終了〉の V2「しまう(しまふ)」に見られる意味は、C 補助動詞的用法の基本的特徴とした〈不可逆性〉にも繋がっていく。

近世日本語資料においても、すでに現代日本語の V2「しまう」のように C 補助動詞的用法の C1〈一掃〉用法、C2〈遺憾〉用法、C3〈無意識〉用法が観察される。これらの C 補助動詞的

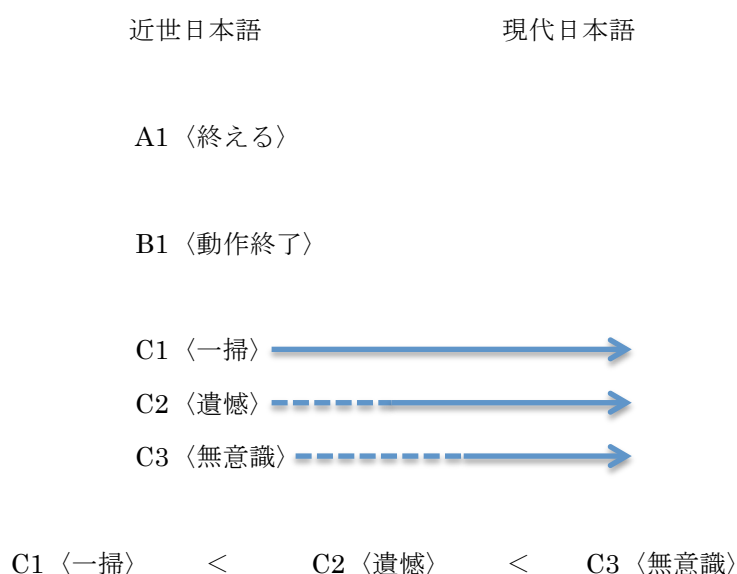
用法はすべて〈不可逆性〉を基本的特徴とするのは前述の通りであるが、これらに共通する〈不可逆性〉は、以上のような本動詞「しまう(しまふ)」やV2「しまう(しまふ)」のB1〈動作終了〉用法における語彙的意味から類推されるものであると考えられる。中でも、C1〈一掃〉用法の場合は「負担感を一掃するように当該の動作が行われる」ことを表すため、「これまで続いていた事態を締めくくることによってもう以前のような事態を継続させない、元の事態には戻らない」といった語彙的意味から最も類推しやすい用法であると考えられるが、実際の歴史的資料において観察される用例からもこのことは裏付けされるといえる。つまり、C1〈一掃〉用法の用例は「西鶴集」や「近松集」といった近世前期の日本語資料において多く観察されるのに対し、C2〈遺憾〉用法の用例は『東海道中膝栗毛』といった近世後期の日本語資料において多く観察されはじめるのである。このような出現時期の他、C1〈一掃〉用法の場合はV1として意志動詞を主にとるのに対し、C2〈遺憾〉は意志動詞の他、非対格自動詞や動詞の受身形を含んだ無意志動詞をもV1としてとるというV1の制約の面からも、C1〈一掃〉用法がより原始的な用法であり、C2〈遺憾〉がより文法化の進展した後の段階になって出現した用法であるといった意味拡張の過程を想定することができる。また、以上のような意味拡張の過程を想定した場合、C2〈遺憾〉用法は、後悔や残念、憂慮や不安感といったマイナスの評価が当該の動作や変化、出来事の結果に対して与えられるため、V2「しまう(しまふ)」における評価性がその他の用法よりも顕著に表出しているため、より主観的な意味への変化といった、文法化に伴う意味変化の一種である主観化の方向性との一致を示すこととなる。

6.2.2.3. 補助動詞としての V2「しまう(しまふ)」における意味拡張の過程

本節では、現代日本語における V2「しまう」との対比を視野に入れ、近世日本語資料で観察された V2「しまう(しまふ)」の意味用法を基に、補助動詞としての V2「しまう(しまふ)」における意味拡張の様相を明らかにする。

日本語の V2「しまう(しまふ)」における意味的変遷と補助動詞としての意味拡張の様相を図式で示すと、次の(57)のようになる。

(57) V2「しまう(しまふ)」における意味的変遷と補助動詞としての意味拡張



補助動詞としての日本語の V2「しまう(しまふ)」は、近世日本語資料の V2「しまう(しまふ)」からその C 補助動詞的用法 C1〈一掃〉、C2〈遺憾〉、C3〈無意識〉用法の用例が見られる。ただ、C2〈遺憾〉用法の用例は近世後期になってからより多くの用例が観察されはじめるため、V2「しまう(しまふ)」の C 補助動詞的用法において、C1〈一掃〉が C2〈遺憾〉よりも原始的な用法であった可能性が高い。また、C3〈無意識〉は観察される用例数もわずかであるため、近世日本語においてはそれほど確立していない用法であったと考えられる。よって、以上のような意味拡張の過程を規定することができると考えられる。

補助動詞としての V2「しまう(しまふ)」における以上のような意味拡張の過程を、文法化に伴う意味変化である主観化という観点から考察すると、C2〈遺憾〉用法のような、話し手の結果に対する評価性が顕著に表出した用法への拡張は、主観的な意味への拡張を示していると捉えることができる。C1〈一掃〉用法においても、当該の動作の結果、爽快感を伴う場合がある

が、結果に対する話し手の評価性という点に関しては、C2〈遺憾〉用法の方がより主観性を帯びていると考えることができる。

尚、現代日本語の V2「しまう」は、以下の「言い訳」や「照れ隠し」、「配慮」のような意味を表わす場合がある。このように、現代日本語においてはさらに「言い訳」や「照れ隠し」

「配慮」といった聞き手目当ての意味用法、つまり間主観的な意味にまで拡張していることが窺える。V2「しまう」は近世日本語資料から観察されるように、C3〈無意識〉用法にまで意味を拡張させている。C3〈無意識〉用法は「当該の動作が話し手のコントロール不可能な状況下で無意識に行われたり、話し手が意識しないうちに当該の変化や出来事が生じること」を表しており、言い換えれば、動作主体が非意図的に当該の動作を行うことを表しているのである。つまり、V2「しまう」には V1 の表す当該の動作を「非意図化」する働きを持っており、それは、当該の動作が話し手のコントロール不可能な状況下で行われるといった動作主体の当該の動作に対する「コントロール不可能性」によって動機づけられている。以下に挙げる V2「しまう」の間主観的な意味は、以上のような V2「しまう」の「非意図化」によって実現される意味であると考えられる。以下の用例を見られたい。

「言い訳」

(58)A:「誰？パソコンの電源、勝手に切ったのは」

B:「すみません…、私がさっき {切りました / 切ってしまいました}」

「照れ隠し」

(59)「今年は絶対無理だと思っていた司法試験。なんと今回、{受かりました / 受かってしまいました}」

「配慮」

(60)「事故、{起こしたの / 起こしてしまったの}？」

(58)の B はパソコンの電源を断りもなく切ったことに対する謝罪の発話である。このとき、無標の「切りました」の場合は、動作主体(話し手)の意志的動作としての表現となるため、その動作に対する動作主体(話し手)の反省の念が聞き手に伝わりづらいといえる。しかし、有標の「切ってしまいました」の場合だと、当該動作のコントロール不可能性が動機となった V2「しまう」の〈非意図性〉により、当該動作が非意図化して表現される。よって、無標の「切りました」の場合よりも、その動作が動作主体(話し手)の意図するところではなかったという意味合いが聞

き手に伝わることとなり、動作主体(話し手)の反省の念が現れやすくなる。ただ、この時注意しなければならないことは、当該の動作が非意図化されるとしても、それはあくまで伝達機能上の問題であり、当該の動作自体が完全に非意図化されるとはかぎらないということである。つまり、その動作が行われる時点ではそれが誰かにとって好ましくない動作だとは動作主体(話し手)自身も認識していない場合もあるため、動作自体は動作主体(話し手)が意図的に行った動作である場合もある。しかし、それを振り返って弁解する際に、V2「しまう」によって当該の動作を非意図化することにより、意図的にその動作を行ったという印象を弱め、その動作に対する反省の念を聞き手に伝えるのである。

(59)の場合も V2「しまう」の非意図化が作用している。V1「受かる」は無意志動詞であるが、試験に受かるためには主体による受かるための努力といった働きかけがあり、そこに、「(司法試験に)受かる」という目標に向かう意図性が存在するといえる。しかし、V2「しまう」によってそれを非意図化することにより、たとえそれが主体(話し手)の働きかけによって実現した事態であると話し手自身が認識しようとして、それを敢えて主体(話し手)の働きかけによるものではないという意味合いを聞き手に伝えることにより、話し手自身にとって好ましい事態が実現したということを控えめに伝達することになるのである。

(60)の場合は、V1「(事故を)起こす」という行為は主体(聞き手)によるものであり、話し手による発話はその事態の真偽を問うものであるが、無標の「起こしたの？」の場間と、主体(聞き手)の〈意図性〉がそのまま表出するため、主体(聞き手)がその行為を意図的に行ったという意味合いとなり、「(事故を)起こす」という事態が実現したことに対して話し手が聞き手を問い質すような、あるいは責め立てるような印象を与えかねない。しかし、「起こしてしまったの？」の場間だと、V2「しまう」によって当該の行為が非意図化されるため、その行為が主体(聞き手)の意図するところではなかったという意味合いを聞き手に伝えることができる。つまり、当該の行為による事態が聞き手以外の何か他の要因も大きく関わってどうしようもなく実現したのだという意味合いを表示することにより、主体である聞き手に対する配慮が生じる。

6.3 韓国語の V2 における意味的変遷

本節では、15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される、韓国語の V2「twuta」、「nohta」と「pelita(pAlita)」における意味用法と補助動詞としての意味拡張に焦点をあて、それらの意味的変遷を明らかにする。

6.3.1. 韓国語の V2「twuta」における意味的変遷

まずは韓国語の V2「twuta」における意味的変遷について考察する。本節では、15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される V2「twuta」の意味用法の歴史的変遷を明らかにしたのち、補助動詞としての V2「twuta」における意味拡張について考察する。

6.3.1.1. 韓国語の V2「twuta」における意味用法の変遷

15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される韓国語の V2「twuta」の意味用法は、以下の表 5 のように示される。

表 5 韓国語の V2「twuta」における意味用法

意味用法	15C 中世	16C 中世	17C 近世	18C 近世	現代
A1〈積もる〉	×	×	×	×	×
A2〈置く〉	○	○	○	○	○
A3〈放つ〉	×	×	×	×	×
B1〈結果物残存〉	×	×	×	×	×
C1〈パーフェクト性〉	×	×	×	×	×
C2〈結果維持〉	○	○	○	○	○
C3〈事前処置〉	△ ⁷	△	○	○	○
C4〈非難・自虐〉	×	×	×	×	×
D〈完遂〉	×	○	×	○	○

⁷ C3〈事前処置〉における△は、C2〈結果維持〉と C3〈事前処置〉の中間的な用法である C2'〈結果維持〉用法を表示するものである。

15 世紀中世韓国語資料で観察される V2 「twuta」においては、A 本動詞的用法の A2 〈置く〉用法と C 補助動詞的用法の C2 〈結果維持〉用法、そして C2 〈結果維持〉用法と C3 〈事前処置〉用法との中間的な用法である C2' 〈結果維持〉用法の用例が観察される。

表 5 が示す通り、15 世紀中世韓国語の V2 「twuta」において、すでに C 補助動詞的用法の C2 〈結果維持〉用法の用例が観察される。Son(1996)では、V2 「twuta」が補助動詞としての可能性を示すのは 18 世紀の資料からであるとしているが、以下の(61)のような 15 世紀中世韓国語資料における用例を見ると、この時点ですでに C 補助動詞的用法の V2 「twuta」が観察されることがわかる。この「자피두다(caphy-e-twuta, 守っておく)」の V2 「twuta」は、本動詞の「twuta」が持つ「事物をある位置に占めさせる」ことを表しているわけではなく、当該の動作「자피다(caphi-ta, 守る)」の直接的な結果の継続性⁸を捉えており、その結果状態を意図的に維持することを表している。よって、これを C 補助動詞的用法の一用法である C2 〈結果維持〉用法と認めることができよう。以下に用例を再掲する。

(61) 五百 도즈기 무리 와 벌돌홀 티고 爲頭 도즈기 나를 자바다가 거집 사마 사더니 제 法
에 상네 門 자피두고 ㅎ다가 쫓쳐오거든 썰리 門을 열라 ㅎ엿더니

[…私の役目は、いつも門を守っておき、万一(敵が)追ってきたら素早く門を開けるということでしたが、…]

〈月印釈譜 10:25a〉

日本語の V2 「おく」における C2 〈結果維持〉用法と同様、韓国語の V2 「twuta」の場合も、動作主体の動作に対する〈意図性〉が顕著に現れるのが特徴であり、その動作の結果生じる結果の維持に対する〈意図性〉の有無によって〈準備性〉が顕著である〈保持〉的な用法とそれが希薄である〈放置〉的な用法に分かれる。

以上のように、15 世紀中世韓国語の時点で、C2 〈結果維持〉用法のような韓国語の V2 「twuta」の C 補助動詞的用法と認められる用例が観察されることが明らかとなった。ただ、C2 〈結果維持〉用法として典型的な用法として認められる用例は観察されるものの、C3 〈事前処置〉用法であると認められる典型的な用例は観察されず、15 世紀中世韓国語資料においては以下のような C2 〈結果維持〉と C3 〈事前処置〉との中間的な用法しか観察されない。

⁸ (42)の場合は、当該の動作の結果生じる直接的な結果の継続性が、当該の動作そのものの継続性を捉えている。

(62)…집 사름이 놀라야 救^호야 뒀더니 居喪 무차닐 아스미며 아로리 돌히 다 스올 가지고
墓애 禮로 祭^호고 모다 수을 머구려 호거늘 王氏 불써 남기 목 미여 주그니라
〈…家人驚^救得免. …〉

〔…家人らは驚いて助けておいたが、喪に服すのを終え、親戚や知り合いらが皆酒を持って墓に礼儀として祭祀を行い、集まって酒を飲もうとしたところ、王氏がすでに木に首をくくって死んでいた〕

〈三綱行実図 烈女 26b〉

C3〈事前処置〉用法は「後続く事態を見越して、当該の動作を行う」ことを表し、文脈に依存した間接的な結果が、後続く事態への〈効力〉として捉えられる。しかし、以上の(46)のような 15 世紀中世韓国語における V2「twuta」の用例では、C3〈事前処置〉のように、文脈に依存した間接的な結果が後の事態への〈効力〉として継続していることを表出すると同時に、C2〈結果維持〉のように直接的で具体的な結果状態を意図的に持続させていることをも表出するというように、〈結果の継続性〉のあり方が中間的であるという特徴を持つ。つまり、C3〈事前処置〉用法のように〈結果の継続性〉が〈効力〉として抽象化していると解釈することも可能であるが、依然として C2〈結果維持〉用法の V2「twuta」のように〈結果の継続性〉において直接性及び具体性を備えており、その直接的かつ具体的な結果状態を意図的に維持するという意味が顕著に表出しているということである。

(62)のような用例が以上のように解釈されるのは、本動詞「twuta」のもつ語彙的意味が影響しているものと考えられる。韓国語の本動詞「twuta」は「事物に、ある位置を占めさせる」ことを表す。しかし、そのような語彙的意味において、他の日本語の「置く」や韓国語の「nohta」とは異なり、事物をある位置に接触させることよりも、その後に事物をその位置に継続して占めさせることに重点がある。つまり、〈動作の完成性〉のみならずその動作の結果生じた直接的な〈結果の継続性〉により焦点が置かれているということである。したがって、「twuta」の V2「twuta」においても以上のような本動詞「twuta」の語彙的意味が色濃く残存し、C3〈事前処置〉用法に近接する用例であっても、直接的な〈結果の継続性〉が依然として顕著に現れてくるものと思われる。

したがって、本稿では(62)のように、C3〈事前処置〉用法としては典型的とはいえず、C2〈結果維持〉用法と中間的な用法であると判断される用例を C2'〈結果維持〉用法として区別し、提示することとする。

以上のように、15 世紀中世韓国語資料における V2「twuta」の用法を観察すると、すでに C 補助動詞的な用法は認められるものの、典型的な用例は C2〈結果維持〉用法のみとなっており、

典型的な C3〈事前処置〉用法の用例は観察されないということがわかる。先に日本語の V2「おく」の意味的変遷を考察した際、その C 補助動詞的用法において、C3〈事前処置〉用法よりも C2〈結果維持〉用法の方がより原始的である可能性を示唆した。日本語の本動詞「おく」と韓国語の本動詞「twuta」、そして補助動詞としての V2「おく」と V2「twuta」が類似性を示すことから、以上のような 15 世紀中世韓国語 V2「twuta」の意味用法における様相が、日本語の V2「おく」における意味の拡張過程に対する仮説を支持する可能性は秘めているが、この点についてはさらなる検討を要するであろう。

16 世紀中世韓国語資料で観察される V2「twuta」においては、A 本動詞的用法の A2〈置く〉用法と C 補助動詞的用法の C2〈結果維持〉用法、そして C2〈結果維持〉用法と C3〈事前処置〉用法との中間的な用法である C2'〈結果維持〉用法、そして D〈完遂〉用法の用例が観察される。

16 世紀中世韓国語の V2「twuta」においても、C 補助動詞的用法の C2〈結果維持〉用法の用例が観察される。16 世紀中世韓国語資料における C2〈結果維持〉用法の V2「twuta」で特筆すべき点は、原典において「結果状態の持続」を表す「着」といった対応漢字が観察される点であり、それらが 16 世紀中世韓国語の V2「twuta」において C2〈結果維持〉用法がすでに存在していたことの一つの根拠として考えることができる。以下、用例を再掲する。

(63) 고티기 마차다 날히여 잇거 가져다가 조흔 짜해 나모 미딕 민여 두고 머규믈 도히 헉라
〈…乾浄田地上樹底下 〈糸全〉着…〉

〔全て治したので、(馬を)ゆっくり引いて持っていき、よい所(に行って、そこにある)木の下に 縛っておいて、よく食べさせよ〕

〈翻譯朴通事 43b〉

尚、16 世紀中世韓国語資料の V2「twuta」においても、C2〈結果維持〉用法と C3〈事前処置〉用法の中間的な用法である C2'〈結果維持〉用法の用例が観察される。以下、用例を再掲する。

(64) 이의 이러면 버다 너희 세히 흠씩 다 내오 수 덕거 뒳다가 北京의 가면 흠씩 헤여 덜
거시라

〈記着數目, 到北京時, …〉

〔…すでにこうなら、君たち三人が一緒に全てお払いなさい。金額を 書いておいて、北京に行ったら一緒に計算して分けることにしよう。〕

〈翻譯老乞大上 24a〉

以上のように、16 世紀中世韓国語資料における V2「twuta」の用法を観察すると、15 世紀中世韓国語資料における V2「twuta」のように、C 補助動詞的な用法は認められるものの、典型的な用例は C2〈結果維持〉用法のみとなっており、典型的な C3〈事前処置〉用法の用例は観察されないということがわかる。

また、16 世紀中世韓国語で観察される V2「twuta」においては、一例のみではあるものの D〈完遂〉用法の用例が観察される。ただ、この場合もやはり C2'〈結果維持〉の場合と同様に、C2〈結果維持〉用法のものと中間的であるといえる。例えば(65)の場合、V1 の「치다(chi-ta, 書き付ける)」により、公座簿に書き付けた名前が残り、それが一種の直接的な結果状態として継続することを V2 の「twuta」が表している可能性もあるからである。しかし、原典において動作の完了を表す「了」が対応漢字として観察されること、そして後続文脈が「즉재 오마(すぐに戻ってくる)」となっていることを考慮すると、二つの節が表す状況の間に時間的な隔たりがあり、「내 마스래 가 공좌부에 쳐 두고(私が官庁に行き、公座簿に(名前を)書き付ける)」事態を済ませてから、「즉재 오마(すぐに戻ってくる)」ことを表しているとも考えられる。以下に用例を再掲する。

(65)안직 날회라 내 마스래 가 공좌부에 쳐 두고 즉재 오마 우리 둘히 보시와 향 가져가 비례하고 공양하야 저그나

〈我到衙門押了公座便来〉

〔…私が官庁に行き、公座簿に(名前を)書いてから、すぐに戻ってくる。〕

〈翻譯朴通事 75b〉

17 世紀近世韓国語資料で観察される V2「twuta」においては、A 本動詞的用法の A2〈置く〉用法と C 補助動詞的用法の C2〈結果維持〉用法、そして C2〈結果維持〉用法と C3〈事前処置〉用法との中間的な用法である C2'〈結果維持〉用法のほか、C3〈事前処置〉用法の用例が観察される。

17 世紀近世韓国語の V2「twuta」においても、C2〈結果維持〉用法の用例が観察され、15 世紀および 16 世紀中世韓国語資料の V2「twuta」と同様に、C2〈結果維持〉用法と C3〈事前処置〉用法と中間的な C2'〈結果維持〉用法の用例も観察される。

ただ、17 世紀近世韓国語資料で観察される V2「twuta」において特筆すべき点は、典型的な C3〈事前処置〉用法の用例が観察されはじめるという点である。C3〈事前処置〉用法は「後に続く事態を見越して、当該の動作を行う」ことを表し、文脈に依存した間接的な〈結果〉が、後に続く事態への〈効力〉として捉えられることになる。動作主体の動作に対する〈意図性〉

が顕著に現れるのは C2〈結果維持〉用法と同様であり、〈準備性〉が顕著に表出する。以下に用例を再掲する。

(66) 二三日 디나거든 銅鑑 看品 홀 셔시니 몬져 代官네씩 출히라 닐러 두옵소

〈…さきにたいくわんしゆに こしらゑとゆうて於加しられ〉

〔…先に代官衆に拵えよと言っておいてください〕

〈捷解新語初刊本 3:28b〉

韓国語の V2「twuta」の場合、15 世紀中世韓国語から 16 世紀中世韓国語にかけての V2「twuta」において、典型的な C3〈事前処置〉用法の用例ははっきりと確認されない。C3〈事前処置〉用法と解釈され得る用例も若干見られるが、依然として直接的な〈結果の継続性〉が色濃く出現しており、いわば C2〈結果維持〉との中間的な用法であった(C2'〈結果維持〉)。しかし、17 世紀近世韓国語資料の V2「twuta」においては、以上の(66)のように、C3〈事前処置〉用法と認定することのできる用例が、数例ではあるが観察されはじめるようになる。

一方、18 世紀近世韓国語資料で観察される V2「twuta」においては、A 本動詞的用法の A2〈置く〉用法と C 補助動詞的用法の C2〈結果維持〉用法、そして C2〈結果維持〉用法と C3〈事前処置〉用法との中間的な用法である C2'〈結果維持〉用法のほか、C3〈事前処置〉用法と D〈完遂〉用法の用例が観察される。

18 世紀近世韓国語の V2「twuta」においても、C2〈結果維持〉用法と、C2〈結果維持〉用法と C3〈事前処置〉用法との中間的な用法である C2'〈結果維持〉用法の用例が観察される。ただ、18 世紀近世韓国語資料の V2「twuta」においては、17 世紀近世韓国語資料の V2「twuta」から徐々に観察されはじめる C3〈事前処置〉用法の用例がより豊富に観察されるようになる。また、一例のみではあるが、D〈完遂〉用法の用例も観察される。以下に用例を再掲する。

(67) 7장 쉬운 일이언마는 朝鮮 家風이 폐롭디 아닌 일을 폐로이 너기니 이러모로 미리 자니 네씩 당보히여 닐너 두니 그리 아뢴서

〈い加うやすいこととこされとも てうせんの加ふう加 むつ加しうないこと於むつ加しうそんしまするにより これによつて加た加ら こなたしゆゑくとうゆうて於きまするほとに そうこころゑなされて…〉

〔…朝鮮の家風が煩わしくないことを煩わしく思いますので、これ故、あらかじめあなたたちによく言っておきますので、そのように心得なさって…〕

〈改修捷解新語 5:33a〉

(68) 여러가지 거슬 혼디 녀허 두얼기의 煩雜ᄃᆞ여 猝然히 초조내기 어렵소오매 來日 모뢰 스
이 저기 閑暇ᄃᆞᆫ 새 내여 두오리

〈數々のものを一所に入ておきまして御坐るに方いりましりて 俄に尋出しがたふ御坐るから
明日明後日内に ちと隙なときに出しておきませふ〉

〔数々のものを一カ所に入れておいてございますので、すぐに探し出しづらいものもあるので、
明日明後日の内の隙なときに、出しておきましょう〕

〈隣語大方 1:24b-25a〉

(69)兩國 間 일을 勿論公私事ᄃᆞᆫ고 約束을 定ᄃᆞ여 두온 후ᄃᆞᆫ 約束 디로 서ᄃᆞᆫ 舉行ᄃᆞᆫ
거시 事理의 아니 당연ᄃᆞᆫ니일가…

〈兩國の儀は 公私の事に寄ませず 約條を相定ましてからは 約束の通 互に取行まするが
道理におゐて當然で御座りませぬか…〉

〔両国間のことは勿論、公私によらず、約束を定めてからは、約束の通りお互いに執り行うの
が物事の道理において当然ではございませんか…〕

〈隣語大方 7:17a〉

韓国語の V2「twuta」の C 補助動詞的用法については、15 世紀中世韓国語資料の V2「twuta」
からすでに C 補助動詞的用法の C2〈結果維持〉用法の用例が認められ、同時に C2〈結果維持〉
用法と C3〈事前処置〉用法との中間的な用法である C2'〈結果維持〉用法の用例が観察される。
ただ、典型的な C3〈事前処置〉用法の用例は観察されない。このような様相は 16 世紀中世韓
国語資料の V2「twuta」においても引き続き観察される。

しかし、17 世紀近世韓国語資料の V2「twuta」から典型的な C3〈事前処置〉用法の用例が
数例観察されはじめ、18 世紀近世韓国語資料に至っては、より多くの C3〈事前処置〉用法の用
例が観察されるようになる。日本語の V2「おく」の場合、上代日本語資料の V2「おく」にお
いてすでに C2〈結果維持〉用法の用例が観察されるが非常に少なく、また中古日本語資料の
V2「おく」においてはすでに C2〈結果維持〉用法の用例も C3〈事前処置〉用法の用例も非常
に豊富に観察されるため、どちらが C 補助動詞的用法としてより原始的かといった判断は下し
づらい。しかし、上代日本語資料から V2「おく」の C2〈結果維持〉用法の用例が観察される
こと、また C3〈事前処置〉用法の V2「おく」の方が V1 として多様な動詞をとること、また本
動詞あるいは補助動詞として類似性を示す韓国語の「twuta」における以上のような意味用法の
歴史的変遷、つまり C2〈結果維持〉用法の用例の方が C3〈事前処置〉用法の用例よりも早い
段階で豊富に観察されることを勘案すると、日本語の V2「おく」においても C2〈結果維持〉
用法の方が C3〈事前処置〉用法よりも原始的な用法であった可能性が非常に高いといえる。

6.3.1.2. 本動詞「twuta」と V2「twuta」の意味的関連性

本節では、15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察された V2「twuta」の意味用法の歴史的変遷を基にして、韓国語の本動詞「twuta」と V2「twuta」との意味的な関連性について考察する。

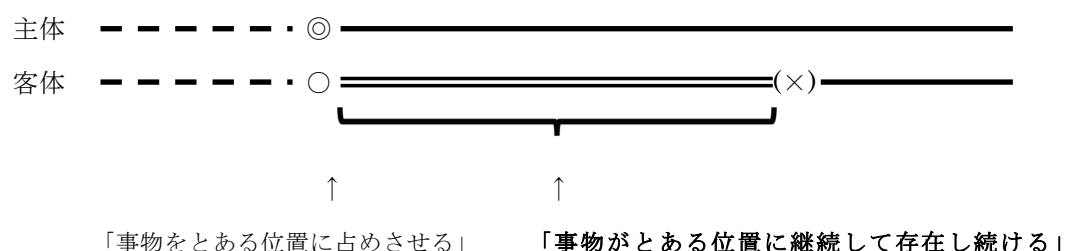
前述の通り、15 世紀中世韓国語資料から「当該の動作の結果生じた直接的な結果状態を維持する」ことを表す C2〈結果維持〉用法が観察され、これが C 補助動詞的用法の中でもより原始的な用法であった可能性があることを指摘した。日本語の本動詞「置く」と V2「おく」の場合と同様に、やはり韓国語の V2「twuta」の場合も、本動詞「twuta」における語彙的意味「事物に、ある位置を占めさせる」、より詳細に述べれば、事物をとある位置に占めさせ、その事物がその位置に継続して存在し続ける、という語彙的意味と密接に関わっているといえる。つまり、「事物をとある位置に占めさせること」が〈動作の完成性〉へ、また「その事物がその位置に継続して存在し続けること」が〈結果の継続性〉へと類推を促すということである。ただ、韓国語の本動詞「twuta」の場合、日本語の本動詞「置く」や韓国語の本動詞「nohta」より、事物をある位置に接触させることよりも、その後に事物をその位置に継続して占めさせることに重点がある。つまり、〈動作の完成性〉のみならずその動作の結果生じた直接的な〈結果の継続性〉により焦点が置かれているということである。

以上のような V2「twuta」における C2〈結果維持〉用法の用例は 15 世紀中世韓国語資料から観察され、18 世紀近世韓国語資料においても引き続き多くの用例が観察される。同じく C 補助動詞的用法である C3〈事前処置〉用法の用例は、C2〈結果維持〉用法と中間的な用法の用例が 15 世紀中世韓国語資料から観察されるものの、典型的な用例が観察されはじめるのは 17 世紀近世韓国語資料からである。このような実際の歴史的資料において観察される用例の出現時期からも、C2〈結果維持〉用法がより原始的な用法であり、C3〈事前処置〉用法は補助動詞としての文法化の進展した後の段階になって出現した用法であるという意味拡張の過程を想定することができる。

韓国語の V2「twuta」における以上のような意味用法の歴史的変遷を基にして、本動詞「twuta」の語彙的意味から各時代に観察される V2「twuta」の各意味用法への拡張過程を捉えるにあたり、日本語の V2「おく」と同様に(27)のような金水他(2000)による「出来事の時間的構造」を図式化したものを援用する。

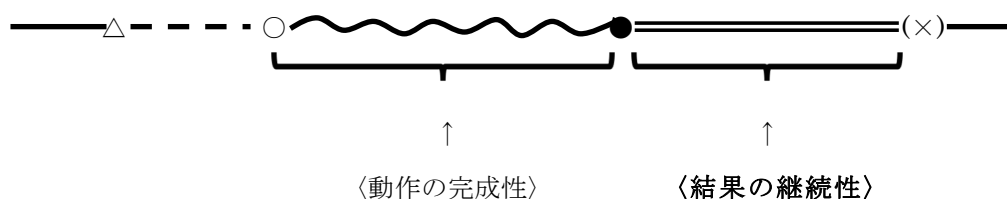
まず、本動詞「twuta」の語彙的意味「事物をとある位置に占めさせる+その事物がその位置に継続して存在し続ける」における時間的な構造を主体動作と客体変化に分けて図示すると、以下の(70)ようになる。韓国語の本動詞「twuta」も日本語の本動詞「置く」における時間的な構造と同様に考えることができる。

(70) 本動詞「twuta」の語彙的意味における時間的な構造



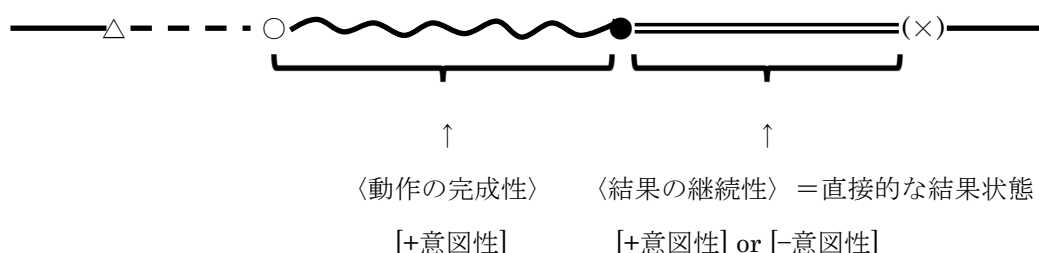
韓国語の「-twuta」における補助動詞的用法の基本的な時間的構造についても、日本語の「-おく」と同様に(71)のように図示される。

(71) 「-twuta」における補助動詞的用法の基本的な時間的構造



韓国語の V2「twuta」の C2〈結果維持〉の場合、日本語の V2「おく」の場合と同様に以下の(72)のように図示される。

(72) V2「twuta」における C2〈結果維持〉の時間的な構造



ただ、韓国語の V2「twuta」の場合、Son(1996)でもその基本義を「完結した動作の結果持続」としているように、直接的な〈結果の継続性〉が主眼におかれているといえる。例えば、Son(1996)で挙げられている(73)のような用例において、括弧内に表示した含意「今もその状態が維持され

ている」が「完結した動作の結果持続」を表すことを支持しており、このとき V2 「twuta」は V1 の動作が完了してその結果が現在まで維持されていることを表すと述べている。この指摘は、C3 〈事前処置〉のように〈結果の継続性〉が間接的な結果としての〈効力〉として捉えられるというよりは、あくまで直接的な〈結果の継続性〉、つまり「(旅行に行くときまで)荷物が揃えである」という結果状態が維持されていることを表しているという C2 〈結果維持〉として把握されるという内省を反映しているものと考えられる。特に V2 「twuta」の場合、(74ab)のように同一文脈において V2 「twuta」と韓国語の V2 「nohta」を比較した場合、V2 が「nohta」の場合は「状態変化」を表しており、「twuta」の場合は「状態維持」を表しており、明確な機能的分担の様相が観察されると指摘している。本研究において調査した 15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語資料における「twuta」の V2 「twuta」の意味用法においても、V2 の補助動詞的用法においては C2 〈結果維持〉用法の用例が多数を占めており、C3 〈事前処置〉用法の用例は 17 世紀近世韓国語資料から徐々に観察されはじめるものの、C2 〈結果維持〉用法の用例よりは少ない。つまり、V2 「twuta」の場合、本動詞「twuta」の語彙的意味における「事物がとある位置に継続して存在し続ける」という局面を反映した〈結果の継続性〉が、具体的かつ直接的な〈結果の継続性〉として把握される C2 〈結果維持〉の意味用法が依然として優勢な意味用法として用いられているということである。

(73) 오래 전에 여행갈 물건을 챙겨 {놓았다(noh-ass-ta)/두었다(twu-ess-ta)}⁹.

olay ceon-e yehayng-ka-l mwulken-ul chayngky-e {noh-ass-ta / twu-ess-ta} .

だいぶ前に旅行に行く (ための) 荷物を揃えておいた。

(今もその状態が維持されている)

第 3 章(4)再掲

(74)a. 죽어가는 사람을 살려 {놓다(noh-ta)/*두다(twu-ta)} .

cuk-e-ka-nun salam-ul sally-e {noh-ta / *twu-ta} .

死にそうな人を {救う/?生かしておく} .

b. 오늘은 일단 살려 {두지만(twu-ciman)/*놓지만(noh-ciman)}

다음날 만나면 혼날 줄 알아.

onul-un iltan sally-e {twu-ciman / *noh-ciman} taum-nal manna-myen hon-na-l cul al-a.

今日は一旦 {生かしておくが/?救うが} 次の日会ったら酷い目にあうぞ。

第 3 章(5)再掲

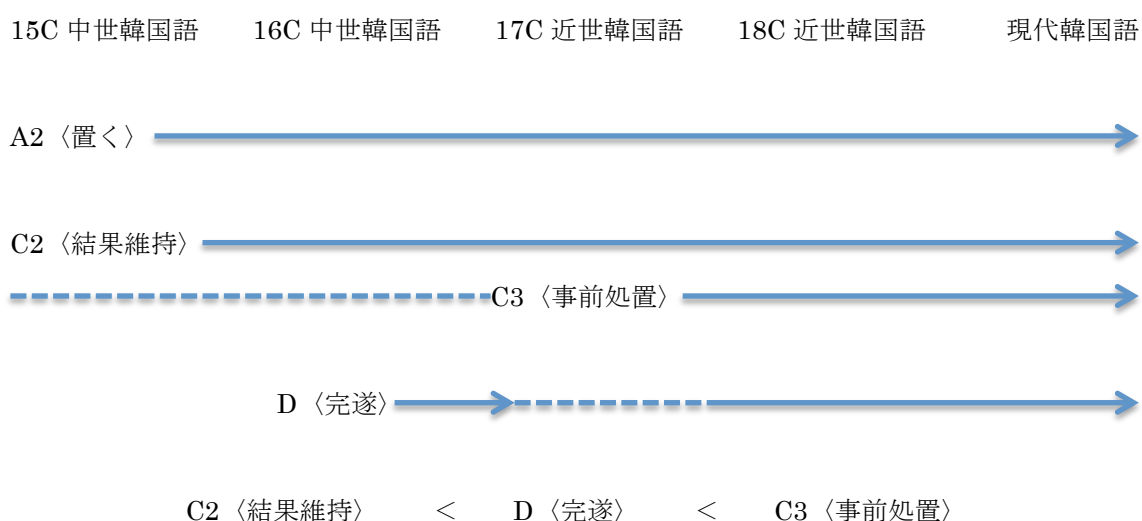
⁹ 下線及び太字は筆者による。

6.3.1.3. 補助動詞としての V2 「twuta」 における意味拡張の過程

本節では、15 世紀中世韓国語資料から 18 近世韓国語資料にわたって観察された V2 「twuta」の意味用法の歴史的変遷を基にして、補助動詞としての V2 「twuta」における意味拡張の様相を明らかにする。

韓国語の V2 「twuta」における意味的変遷と補助動詞としての意味拡張の様相を図式で示すと、以下の(75)のようになる。

(75)韓国語の「-twuta」における意味的変遷と補助動詞としての意味拡張



補助動詞としての V2 「twuta」は、15 世紀中世語資料の V2 「twuta」からその C 補助動詞的用法 C2 〈結果維持〉用法の用例が見られる。16 世紀中世韓国語資料と 18 世紀近世韓国語資料において D 〈完遂〉用法もわずかではあるが見られる。一方、C3 〈事前処置〉用法の用例は 17 世紀近世韓国語資料から典型的な用例が見られはじめ、それまでは C2 〈結果維持〉用法と中間的なものしか見られなかった。補助動詞としての V2 「twuta」の場合、日本語の補助動詞 V2 「おく」の場合よりも、より意味拡張の過程が捉えやすいといえる。つまり、C2 〈結果維持〉用法の方が C3 〈事前処置〉用法よりも原始的な用法であったということが、V2 「twuta」の意味的変遷においてより明確に示されているからである。よって、以上のような意味拡張の過程を規定することができる。

韓国語の補助動詞「twuta」における以上のような意味拡張の過程を、文法化に伴う意味変化である主観化という観点から考察すると、C3 〈事前処置〉用法への意味拡張という現象は、語彙的に含意される結果状態から文脈依存的な間接的結果状態への関心といった意味への拡張で

あるため、主観化の方向への一致を見せていると考えられる。

6.3.2. 韓国語の V2「nohta」における意味的変遷

続いて、韓国語の V2「nohta」における意味的変遷について考察する。本節では、15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される V2「nohta」の意味用法の歴史の変遷を明らかにしたのち、補助動詞としての V2「nohta」における意味拡張について考察する。

6.3.2.1. 韓国語の V2「nohta」における意味用法の変遷

15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される韓国語の V2「nohta」の意味用法は、以下の表 6 のように示される。

表 6 韓国語の V2「nohta」における意味用法

意味用法	15C 中世	16C 中世	17C 近世	18C 近世	現代
A1〈積もる〉	×	×	×	×	×
A2〈置く〉	○	○	○	○	○
A3〈放つ〉	○	○	○	○	○
B1〈結果物残存〉	×	×	×	×	×
C1〈パーフェクト性〉	×	×	×	×	×
C2〈結果維持〉	×	×	×	×	×
C3〈事前処置〉	×	×	×	△	○
C4〈非難・自虐〉	×	×	×	×	○
D〈完遂〉	×	○	○	○	○

15 世紀中世韓国語資料で観察される V2「nohta」においては、A 本動詞的用法の A2〈置く〉用法と A3〈放つ〉用法の用例が観察された。

韓国語の V2「twuta」の場合は、すでに 15 世紀中世韓国語資料において C 補助動詞的用法の C2〈結果維持〉用法の用例が観察されたが、V2「nohta」においては A 本動詞的用法のみで C 補助動詞的用法は観察されない。ただ、A3〈放つ〉用法という、日本語の V2「おく」や韓国語の V2「twuta」には見られない独自の用法があり、15 世紀中世韓国語資料における V2「nohta」にも A3〈放つ〉用法の用例が観察される。A3〈放つ〉は「手で何かを掴んだり押さえている状

態から、手を広げたり力を抜いて掴んでいたものが手の外へ抜けていくようにする」ことを表す。以下に用例を再掲する。

(76)한 도즈기 오솔 믹티고 平床 우희 미야 두고 어루려 커늘…崔氏 두리여 소겨 날오디
히미 ㅎ마 屈ㅎ니 혼 樣으로 드루리라 ㅎ야닐 도즈기 글어 노흔대 崔氏 도즈기 갈흘 아사
나모 지여 셔어서 날오디

〈群賊毀裂其衣. 縛於 簀之上將陵之…今力已屈. 當受處分. 賊遂釋之. 妻因取賊刀. …〉

〔…盜賊が(崔氏を)解き放つと、崔氏は賊の刀を奪い、…〕

〈三綱行實圖 烈女 13b〉

16 世紀中世韓国語資料で觀察される V2 「nohta」においては、A 本動詞的用法の A2 〈置く〉用法と A3 〈放つ〉用法、そして D 〈完遂〉用法の用例が觀察される。D 〈完遂〉は「当該の動作を最後まで行う」、「当該の動作を完全に行う」ことを表す。この場合、「後に続く事態を見越す」といった〈準備性〉は表出しない。以下の通り、16 世紀中世韓国語における V2 「nohta」の D 〈完遂〉用法は、以下の(77)一例のみ觀察された。この D 〈完遂〉は V1 の表す当該の動作を最後まで行うことを表すため、V2 「nohta」の意味の成立において V1 に対し依存的であり、それらを含む構文において V2 は対象物となる補語をとらず、さらに本動詞「nohta」が表すような実質的動作等を表していないといえる。したがって、以上のような D 〈完遂〉用法も V2 「nohta」における補助動詞的用法の一つと認定することができる。この D 〈完遂〉用法は、現代韓国語の V2 「nohta」においても指摘されているが(Son1996)、このような韓国語の V2 「nohta」における D 〈完遂〉用法のような補助動詞的用法は 16 世紀中世韓国語の時期から觀察されるといえる。ただ、C 補助動詞的用法における C2 〈結果維持〉用法のような用例は、15 世紀中世韓国語資料における V2 「nohta」と同様に、16 世紀中世韓国語資料においても觀察されない。以下、用例を再掲する。

(77)므슴 어려운 고디 이시리오 가마 굶싯고 가마예 불 디더 덥거든 반 잔만 촛기름 두워
기르미 닉거든 고기 녀허 두의저티며 소곰 두고 저로 두의저터 붓가 반만 닉거든 장물과
파와 약들 뽕 노하 짓고 가맛우흘 두고 김 나게 말오 불디더 두면 아니한 슝시에 닉느니라

〈…將油熟了時, 下上肉, 着些塩, 着筋子攪動, 炒的半熟時, 調上些醬水, 生葱, 料物拌了. 鍋子上蓋覆了, 休着出氣, …〉

〔…油が熱くなったら肉を入れて裏返し、塩を入れて箸で裏返して炒め、半分ほど火が通ったら、味噌を溶いた水と生葱と調味料を溶かし混ぜてから、(肉とそれらを)かき回し、釜の蓋を

被せて湯気が出ないようにし、火を焚いておけば、間もなく火が通る]

〈翻譯老乞大上 21b-22a〉

17 世紀近世韓国語資料で観察される V2 「nohta」においては、A 本動詞的用法の A2 〈置く〉用法、そして D 〈完遂〉用法の用例が観察される。16 世紀中世韓国語資料における V2 「nohta」と同様に、補助動詞的用法としては D 〈完遂〉用法の用例が数例観察されるのみで、C3 〈事前処置〉といった用法の用例は依然として観察されない。以下、用例を再掲する。

(78)능금이는 만경현 사람이니 갑소 최티강의 겨집이라 지아비 죽거를 복이 못되 오히려
흰 옷 입고 고기 먹디 아니코 요석의 상식하고 미 절의 의복 지어 노터라
〈…猶素衣不食肉朝夕上食每節製衣服以爲〉

〔…むしろ白衣を着て肉を食べず、朝夕上食をして、毎節に衣服を作りあげた〕

〈東國新續三綱行實圖 烈女圖 2:60b〉

18 世紀近世韓国語資料で観察される V2 「nohta」においては、A 本動詞的用法の A2 〈置く〉用法と A3 〈放つ〉用法、そして D 〈完遂〉用法の用例が観察された。16 世紀中世韓国語資料や 17 世紀近世韓国語資料における V2 「nohta」と同様、やはり補助動詞的用法としては D 〈完遂〉用法の用例が数例観察されるのみで、C3 〈事前処置〉といった用法の用例は依然として観察されない。ただ、以下の (79)は他の用法のものと中間的であると考えられる。つまり、(79)の「設行히여 놓다(設行 hAye-noh-ta, 催す·nohta)」の場合は、D 〈完遂〉用法の他、C3 〈事前処置〉用法としての解釈も可能である。以下、用例を再掲する。

(79)館守는 館中領首오니 당신 宴享부터 먼저 設行히여 노코 其餘小送使 宴享은 점초로
지내미 아니 존스올가

〈館守は館内の御頭で御座るにより 彼方の宴享から先にしもふておゐて 其餘の小送使衆のいはちも 段々にするがよひでは御座りませぬか〉

〔館守は館内の首領でございますので、あなたの祝宴から先に催しておいてから、その残りの小送使の祝宴は次第に行っていくのがよいのではございませんか〕

〈隣語大方 4:22b〉

韓国語の V2 「nohta」の補助動詞的用法においては、D 〈完遂〉用法の用例が 16 世紀中世韓国語資料の V2 「nohta」から少しずつ観察されはじめる。ただ、観察されたとしてもその用例

数は僅少である。本稿において使用した歴史的資料に出現する「-nohta」の用例の総数が、他の韓国語の「-twuta」や「-pelita(pAlita)」に比べて非常に少なく、「-nohta」自体の生産性が非常に少なかったことが窺われる。また、現代韓国語の V2「nohta」において観察される C3〈事前処置〉用法の用例は、18 世紀近世韓国語資料において一例のみ、それも D〈完遂〉用法と中間的な用法であると考えられる用例が観察されるのみであった。

現代韓国語において、V2「nohta」は形容詞とも結合するほど補助動詞としての文法化を進展させているといえるが、本稿で使用した 15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される「-nohta」においては、全体の用例数もわずかで生産性が低く、D〈完遂〉用法のような補助動詞の用法と認められる用例が観察されたとしても、その数は非常に少ない。つまり、15 世紀中世韓国語から 18 世紀中世韓国語の時点では、V2「nohta」においてそれほど補助動詞としての文法化が進展していなかったといえる。Son(1996)においても指摘されている通り、現代韓国語の V2「nohta」における C2〈結果維持〉用法や C3〈事前処置〉用法のような C 補助動詞の用法は、19 世紀以降に出現してくるものと思われる。

6.3.2.2. 本動詞「nohta」と V2「nohta」の意味的関連性

本節では、15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察された V2「nohta」の意味用法の歴史的変遷を基にして、韓国語の本動詞「nohta」と V2「nohta」との意味的な関連性について考察する。

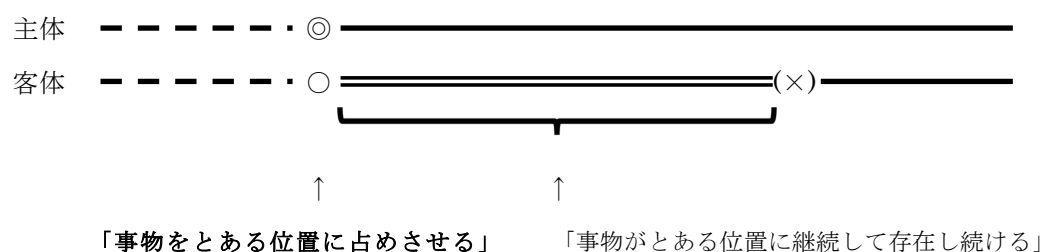
V2「nohta」の場合、16 世紀中世韓国語資料から「当該の動作を最後まで行う」「当該の動作を完全に行う」ことを表す D〈完遂〉用法が観察される。韓国語の「nohta」の場合、本動詞「nohta」は「事物に、ある位置を占めさせる」ことの他、「手で何かを掴んだり押さえている状態から、手を広げたり力を抜いて掴んでいたものが手の外へ抜けていくようにする」という語彙の意味をもつ。ただ、日本語の本動詞「置く」や韓国語の本動詞「twuta」のように「事物に、ある位置を占めさせる」という語彙の意味をもつものの、韓国語の本動詞「nohta」の場合は、事物にある位置を占めさせるための変化、つまり事物をある位置に据えるという瞬間的な変化に焦点が当たっており、その他の本動詞とは異なる特色をもつ。もう一方の語彙の意味も〈放つ〉ことを表すため、やはりその動作は瞬間的であるといえる。また、どちらの語彙の意味も、動作主体がある対象物を自身から離すことを表す。一色(2011b)において、現代韓国語の V2「nayta(だす)」は内から外への〈移動〉のほか、〈顕在化〉や〈完遂〉、そして〈分離・除去〉の意味用法をもつことを明らかにし、その意味拡張の過程を検討したが、韓国語の場合、ある対象物を別の対象物から離すことが〈完遂〉の意味に繋がっている可能性が考えられる。この点については更なる検討を要するが、瞬間的にある対象物を自身から引き離すことが、当

該の動作を最後まで完全に行うことによって、これまで続いてきた事態を締めくくり、決着をつけるといった〈完遂〉の用法を類推させる傾向を見てとることができる。

韓国語の V2「nohta」における以上のような意味用法の歴史的変遷を基にして、本動詞「nohta」の語彙的意味から各時代に観察される V2「nohta」の各意味用法への拡張過程を捉えるにあたり、日本語の V2「おく」と同様に(27)のような金水他(2000)による「出来事の時間的構造」を図式化したものを援用する。

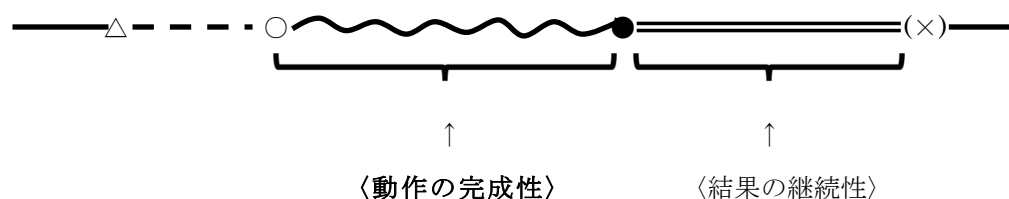
まず、本動詞「nohta」の語彙的意味「事物をとある位置に占めさせる+その事物がその位置に継続して存在し続ける」における時間的な構造を主体動作と客体変化に分けて図示すると、以下の(80)ようになる。韓国語の本動詞「nohta」も日本語の本動詞「置く」や韓国語の本動詞「twuta」における時間的な構造と同様に考えることができるが、これらと異なるのは、本動詞「nohta」が事物にある位置を占めさせるための変化、つまり事物をある位置に据えるという瞬間的な変化に焦点が当たっているという点である。また、もう一方の語彙的意味も〈放つ〉ことを表すため、やはりその動作は瞬間的な変化である。

(80)本動詞「nohta」の語彙的意味における時間的な構造



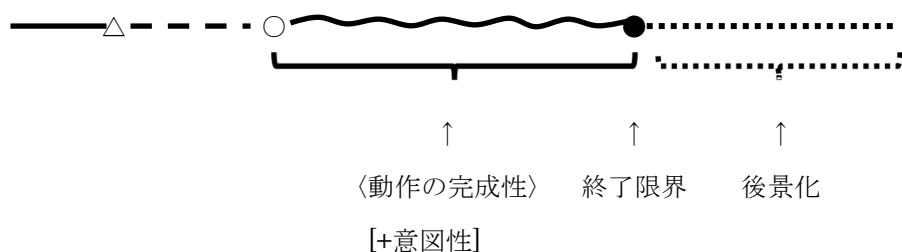
韓国語の「-nohta」における補助動詞的用法の基本的な時間的構造についても、日本語の「-おく」や韓国語の「-twuta」と同様に(81)のように図示される。

(81)「-nohta」における補助動詞的用法の基本的な時間的構造



16 世紀中世韓国語資料から観察される V2「nohta」の補助動詞的用法 D〈完遂〉の場合、次の(82)のように図示される。D〈完遂〉用法は「当該の動作を最後まで行う」、「当該の動作を完全に行う」ことを表し、〈動作の完成性〉における終了限界を達成する局面が特に焦点化され、〈結果の継続性〉の局面が後景化していると捉えられる。これは、本動詞「twuta」がその語彙的意味「事物をとある位置に占めさせる+事物がとある位置に継続して存在し続ける」において、特に「とある位置に継続して存在し続ける」という局面を特に焦点化するのに対し、本動詞「nohta」の場合は特に「事物をとある位置に占めさせる」という瞬間的な変化の局面を焦点化していることを反映しているものと考えられる。「事物をとある位置に占めさせる」、より詳細に述べると、「事物をとある位置に占めさせるためにその事物を手から放す」という瞬間的な変化が〈完遂〉のような文法的意味へと類推を促すかは更なる検討を要するが、同様に〈分離・除去〉といったある対象物を別の対象物から離すことを意味する用法をもつ韓国語の V2「nyata」も〈完遂〉の用法をもつという点から、V2「nohta」のみが例外ではないという韓国語における一般的な特性としてみる事が可能である。

(82)V2「おく」における D〈完遂〉の時間的な構造

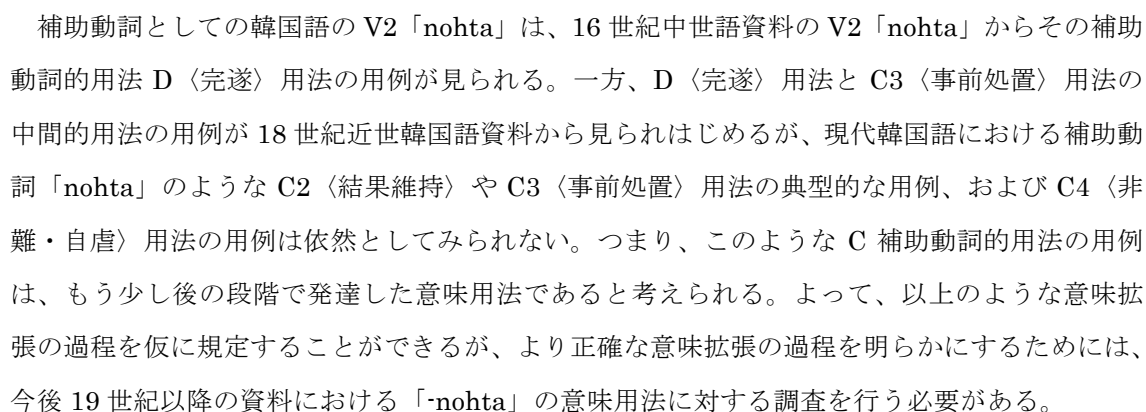


6.3.2.3. 補助動詞としての V2「nohta」における意味拡張の過程

本節では、15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察された V2「nohta」の意味用法の歴史的変遷を基にして、補助動詞としての V2「nohta」における意味拡張の様相を明らかにする。

韓国語の V2「nohta」における意味的変遷と補助動詞としての意味拡張の様相を図式で示すと、以下の(83)のようになる。

15C 中世韓國語 16C 中世韓國語 17C 近世韓國語 18C 近世韓國語 現代韓國語



次に、韓国語の V2「pelita」における意味的変遷について考察する。本節では、15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される V2「pelita(pAlita)」の意味用法の歴史的変遷を明らかにしたのち、補助動詞としての V2「pelita(pAlita)」における意味拡張について考察する。

6.3.3.1. 韓国語の V2 「pelita(pAlita)」における意味用法の変遷

15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される韓国語の V2 「pelita(pAlita)」の意味用法は、以下の表 7 のように示される。

表 7 韓国語の V2 「pelita(pAlita)」における意味用法

意味用法	15C 中世	16C 中世	17C 近世	18C 近世	現代
A1 〈捨てる〉	○	×	×	○	○
B1 〈対象物除去〉	○	○	○	○	○
C1 〈一掃〉	○	○	○	○	○
C2 〈遺憾〉	○	○	○	○	○

15 世紀中世韓国語資料で観察される V2 「pelita(pAlita)」においては、A 本動詞的用法の A1 〈捨てる〉用法と B 複合動詞的用法の B1 〈対象物除去〉用法、C 補助動詞的用法の C1 〈一掃〉用法と C2 〈遺憾〉用法の用例が観察される。

韓国語の V2 「pelita(pAlita)」における B1 〈対象物除去〉用法の用例は、15 世紀中世韓国語資料のみならず、16 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって遍く観察される用法であり、その他の用法の用例よりも非常に多くの用例が観察される。B1 〈対象物除去〉は「付着していた不必要なものを取り除く」、「これまで持っていた悪い考えや思想を払拭する、断ち切る、滅却する」ことを表し、本動詞の「pelita(pAlita)」の語彙的意味において存在せず、「-pelita(pAlita)」において独自に出現した意味用法である可能性が高いといえる。原典においても「除」や「去」、「落」等が対応漢字となっている場合が多く、15 世紀中世韓国語資料の V2 「pelita(pAlita)」において、B1 〈対象物除去〉の用法が存在していたことの一つの根拠となっている。以下に、用例を再掲する。

(84)比丘 | 偈 지서 對答호디 내 므슴미 解脫을 得ᄃ야 뒛논 거슬 다 더러브료니 이 모미사
ᄃ외야 앓기디 아니ᄃ노이다

〈…我心得解脱 斷除諸有盡 今此身骸 無復恪惜…〉

〔…「私の心は解脱を得て、持っていたものをすべて捨て去ったので、この身などこれ以上惜しくない」…〕

〈釈譜詳節 24:16a〉

先行研究の指摘する通り、15 世紀中世韓国語の V2「pelita(pAlita)」において、すでに C 補助動詞的用法の C1〈一掃〉用法と C2〈遺憾〉用法の用例が観察される。C1〈一掃〉は「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」、「面倒な状況を解消するために当該の動作が行われること」を表し、C2〈遺憾〉は「当該の動作や変化、出来事が生じた結果、視点者(動作主体あるいは話し手)が残念な気持ちになること」を表す。どちらも C 補助動詞的用法の基本の特徴〈消去的動作〉により実現される意味用法であると考えられるが、15 世紀中世韓国語資料で観察される V2「pelita(pAlita)」においては C1〈一掃〉用法の用例の方がより目立って観察される。以下に、用例を再掲する。

(85)그 어미 아들 나니더늘 중돌홀 모도아 닐오디 헝다가 중곳 내 門 알피 오나든 매로
그우리 터 브리고…

[…「もし僧がうちの門の前に来たら、鞭で追い返すように打ってしまえ」…]

〈月印釈譜 23:73a〉

(86)…여섯 히를 苦行헝샤 부터 ㄷ외야 나라해 도라오샤도 즈올아비 아니헝샤 아랫 恩惠를
니저브리샤 길 넓 사툼과 ㄴ티 너기시나…

[「…六年の間苦行して仏になって国にお戻りになっても、近くにはお寄りにならず、過去の恩恵を忘れてしまって道行く他人と同様にお考えになり、…」]

〈釈譜詳節 6:4b〉

16 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される V2「pelita(pAlita)」においても、A 本動詞的用法の A1〈捨てる〉用法のほか、B 複合動詞的用法の B1〈対象物除去〉用法、C 補助動詞的用法の C1〈一掃〉用法と C2〈遺憾〉用法の用例が観察される。ただ、16 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料における「-pelita(pAlita)」の用例数が 15 世紀中世韓国語資料における「pelita(pAlita)」に比べて少ない上、15 世紀中世韓国語における V2「pelita(pAlita)」にはない用法の用例も特に観察されない。韓国語の場合、すでに 15 世紀中世韓国語の段階で V2「pelita(pAlita)」の補助動詞としての文法化が進展しており、B 複合動詞的用法の B1〈対象物除去〉用法の用例が目立って観察されること以外、C 補助動詞的用法においては現代韓国語の V2「pelita」とはほとんど変らない様相を呈していたと考えられる。ただ、本稿において使用した 15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される韓国語の「pelita(pAlita)」において、V1 として自動詞をとる用例がほとんど観察されず、他動詞をとっている場合が圧倒多数であることを考慮すると、やはり現代韓国語における V2「pelita」よりは補助動詞としての文法化が進展していなかったと考えられる。現代韓国語で

は以下の(87)、(88)のように「-pelita」でも V1 として自動詞をとることが可能である。

(87)영희는 눈물을 참다가 결국 울어 버렸다.

yenhu-y-nun nwunmwul-ul cham-taka kyelkwuk wul-e-pely-ess-ta.

〔ヨンヒは涙を我慢していたが、結局泣いてしまった〕

(88)거짓말처럼 비가 그쳐 버렸습니다.

kwcitmal-chelem pi-ka kuchy-e-pely-ess-supni-ta.

〔嘘のように雨が止んでしまいました〕

以下、16 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察される V2 「pelita(pAlita)」における C 補助動詞的用法の C1 〈一掃〉用法及び C2 〈遺憾〉用法の用例を再掲する。以下の用例が示すように、本稿で使用した韓国語の歴史的資料において、V2 「pelita(pAlita)」の C 補助動詞的用法は満遍なく観察されたが、日本語の V2 「しまう(しまふ)」と同様に、C1 〈一掃〉用法の用例の方が C2 〈遺憾〉用法の用例よりも多く観察される。日本語の V2 「しまう(しまふ)」における C2 〈遺憾〉用法と同様に、韓国語の V2 「pelita(pAlita)」における C2 〈遺憾〉用法の場合も、後悔や残念といったマイナスの評価が当該の動作の結果に対して与えられるため、V2 「pelita(pAlita)」における評価性がその他の用法よりも顕著に表出していると考えられる。つまり、より主観的な意味への変化といった主観化の方向性との一致を示しており、この韓国語の V2 「pelita(pAlita)」における C2 〈遺憾〉用法が、日本語の「しまう(しまふ)」と同様に、補助動詞としての文法化が進展した後の段階で表出した意味用法である可能性が高いということである。

16 世紀中世韓国語

(89)이러면 네 이 물 글월 내여다가 더 사름드려 무려 처섬의 덩흔 갑새셔 닛 랑 은을 더러 내여 흐르는 갑새 헤오 글월 의혀 브리라

〈「…元定價錢内中, 除了五兩銀子, 做番悔錢, 扯了文契 着」〉

〔「…元の額から五両の銀貨を除いて、払い戻す額で計算し、契約書を破ってしまって下さい」〕

〈翻譯老乞大 下 19a-20b〉

(90) 엇디 저문 아히들호로 아릅뎃 飲食을 문드라 먹게 햏야 가문 햏을 히러브리 뇨 뇨 햏니...

〈豈可使小兒輩私作飲食壞家法也〉

〔「どうして幼い子どもたちに個人的に食事を作らせて、家庭内の掟を破ってしまうのか…」〕

〈翻譯小学 9:7a〉

17 世紀近世韓國語

(91) 머리 허트러 뽁 ㅁㅅ되 빔디 아니햏고 다 갓가 브리고 이통햏믈 단괄햏던 날과 ㅁㅅ 햏고 복이 ㅁㅅ되

〈麻頭蓬不櫛盡削之哀痛常如祖括之日…〉

〔頭髮は乱れて蓬のようであるが櫛でとかさず、すべて剃ってしまい、…〕

〈東國新續三綱行實圖 烈女圖 5:83b〉

(92) 햏다가 몬저 콩을 주면 그 물이 다만 콩만 곺햏여 먹고 딛플다가 다 햏터 브리 뇨니라

〈若是先與料時，那馬只揀了料喫，將草都拋撒了〉

〔「万一先に豆を与えたら、その馬たちは豆だけ選んで藁はすべてまき散らしてしまうんだよ」〕

〈老乞大諺解 上 22a〉

18 世紀近世韓國語

(93) 내 겨집이 되여 뇨의게 손을 잡햏니 엇디 햏 손으로 뼈 온 몸을 더러이리오 햏고 돛기로 그 풀을 씩어브리니 보논 사햏이 눈믈 아니 흘리리 업더라

〈…不可以一手并汚吾身卽引斧自斷其臂〉

〔「…他人に手を掴まれ、片手で(夫と)ともに身体を汚すことができようか」と言って、斧でその腕を断ち切ってしまうと、(それを)見ている者で涙を流さない者はいなかった〕

〈五倫行實圖 烈女 33a〉

(94) 겨울에 그 아비 손으로 햏여곰 술워를 몰 시 치워 물혀를 노하 브린디 아비 슬퍼 알고 후쳐를 내티고져 햏거늘

〈父冬月令損御車體寒失靱父察知之欲遣後妻〉

〔冬に(損の)父が損に車を走らせたが、(損が)寒くて手綱を放してしまったところ、父が(後妻が損に満足に衣服を与えていないことを)察して知り、後妻を追い出そうとしたが、…〕

〈五倫行實圖 孝子 2a〉

6.3.3.2. 本動詞「pelita(pAlita)」と V2「pelita(pAlita)」の関連性

本節では、15 世紀中世韓国語から 18 世紀近世韓国語に渡って観察された V2「pelita(pAlita)」の意味用法の歴史的変遷を基にして、韓国語の本動詞「pelita(pAlita)」と V2「pelita(pAlita)」との意味的な関連性について考察する。

前述の通り、韓国語の V2「pelita(pAlita)」には、15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料に渡って、B1〈対象物除去〉用法の用例遍く観察される。B1〈対象物除去〉は「付着していた不必要なものを取り除く」、「これまで持っていた悪い考えや思想を払拭する、断ち切る、滅却する」ことを表し、本動詞の「pelita(pAlita)」の語彙的意味「持っている、必要のないものを投げたり放ったりする」を変容させた「-pelita(pAlita)」において独自に出現した用法であると考えられるが、不必要な対象物を自身から離すという点において本動詞「pelita(pAlita)」の語彙的意味も少なからず残存しているといえ、この B1〈対象物除去〉用法においても本動詞「pelita(pAlita)」との関連性を依然として見出すことができる。

以上のような本動詞「pelita(pAlita)」や B1〈対象物除去〉の V2「pelita(pAlita)」に見られる意味は、C 補助動詞的用法の基本的特徴とした〈消去的動作〉にも繋がっていく。

15 世紀中世韓国語の V2「pelita(pAlita)」において、すでに C 補助動詞的用法の C1〈一掃〉用法と C2〈遺憾〉用法の用例が観察される。C1〈一掃〉は「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」、「面倒な状況を解消するために当該の動作が行われること」を表し、C2〈遺憾〉は「当該の動作や変化、出来事が生じた結果、視点者(動作主体あるいは話し手)が残念な気持ちになること」を表す。どちらも C 補助動詞的用法の基本的特徴〈消去的動作〉により実現される意味用法であると考えられるが、15 世紀中世韓国語資料で観察される V2「pelita(pAlita)」においては C1〈一掃〉用法の用例の方がより目立って観察される。これらに共通する〈消去的動作〉は、以上のような本動詞「pelita(pAlita)」や V2「pelita(pAlita)」の B1〈対象物除去〉用法における語彙的意味「不必要なものを自身から離す」から類推されるものであると考えられる。中でも、C1〈一掃〉用法の場合は「「負担感を一掃するように当該の動作が行われること」、「面倒な状況を解消するために当該の動作が行われること」を表すため、本動詞「pelita(pAlita)」や B1〈対象物除去〉のもつ(語彙的)意味から最も類推しやすい用法であると考えられる。実際の歴史的資料において観察される用例からもこのことは裏付けされるといえる。つまり、C1〈一掃〉用法の用例は 15 世紀中世韓国語資料から多く観察されるのに対し、C2〈遺憾〉用法の用例は相対的に少ない。このような出現の様相から、C1〈一掃〉用法がより原始的な用法であり、C2〈遺憾〉がより文法化の進展した後の段階になって出現した用法である可能性が高いといえる。また、以上のような意味拡張の過程を想定した場合、C2〈遺憾〉用法は、後悔や残念、憂慮や不安感といったマイナスの評価が当該の動作や変化、出来事

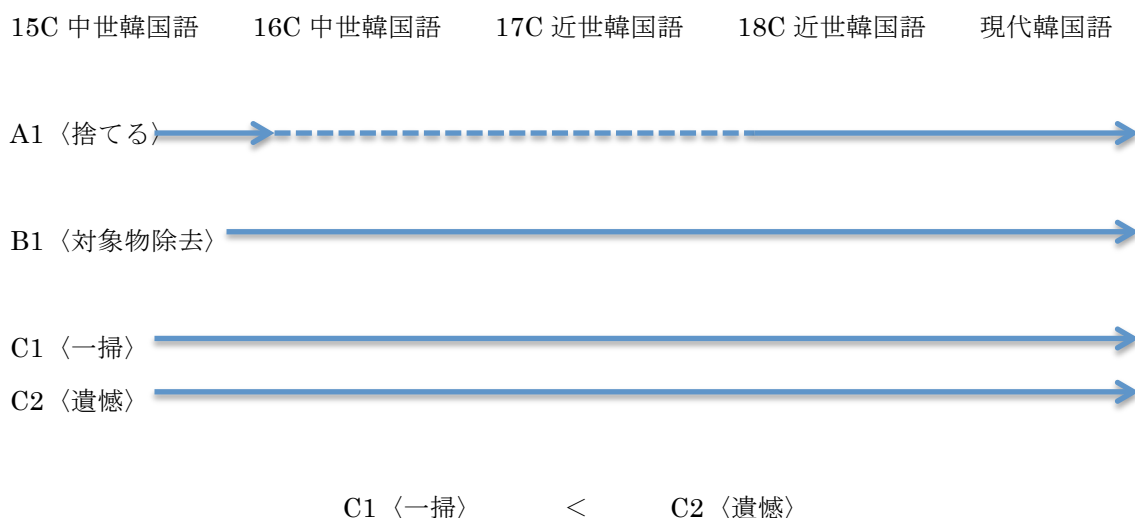
の結果に対して与えられるため、V2「pelita(pAlita)」における評価性がその他の用法よりも顕著に表出しているため、より主観的な意味への変化といった、文法化に伴う意味変化の一種である主観化の方向性との一致を示すこととなる。

6.3.3.3. 補助動詞としての V2「pelita(pAlita)」における意味拡張の過程

本節では、15 世紀中世韓国語資料から 18 世紀近世韓国語資料にわたって観察された V2「pelita(pAlita)」の意味用法の歴史的変遷を基にして、補助動詞としての V2「pelita(pAlita)」における意味拡張の様相を明らかにする。

韓国語の V2「pelita(pAlita)」における意味的変遷と補助動詞としての意味拡張の様相を図式で示すと、以下の(95)のようになる。

(95)韓国語の V2「pelita(pAlita)」における意味的変遷と補助動詞としての意味拡張



補助動詞としての韓国語の V2「pelita(pAlita)」は、15 世紀中世韓国語資料の V2「pelita(pAlita)」からその C 補助動詞的用法 C1 〈一掃〉、C2 〈遺憾〉用法の用例が見られる。したがって、出現時期によって意味拡張の過程を規定することは難しいが、やはり日本語の補助動詞 V2「しまう(しまふ)」の場合と同様に、C2 〈一掃〉用法の用例の方がより多く観察されるため、V2「pelita(pAlita)」の C 補助動詞的用法においても、C1 〈一掃〉が C2 〈遺憾〉よりも原始的な用法であった可能性が高い。よって、以上のような意味拡張の過程を規定することができると考えられる。

韓国語の補助動詞「pelita(pAlita)」における以上のような意味拡張の過程を、文法化に伴う意味変化である主観化という観点から考察すると、C2〈遺憾〉用法のような、話し手の結果に対する評価性が顕著に表出した用法への拡張は、主観的な意味への拡張を示していると捉えることができる。C1〈一掃〉用法においても、当該の動作の結果、爽快感を伴う場合があるが、結果に対する話し手の評価性という点に関しては、C2〈遺憾〉用法の方がより主観性を帯びていると考えることができる。

第7章 結論

日本語の「-おく」は、上代日本語から中古日本語にかけては主に V1 の形態が動詞連用形である「動詞連用形+おく」の構造で用いられていた。しかし、中古後期からはじまり、中世日本語から近世日本語にかけて徐々に V1 の形態が動詞連用形+テである「動詞連用形+テ+おく」の構造で用いられはじめる。そして、中古後期から同一 V1 において形態的な混在が観察されはじめ、近世日本語に至ると「動詞連用形+テ+おく」が主に「-おく」における補助動詞的用法を担当するようになる。つまり、「動詞連用形+おく」と「動詞連用形+テ+おく」の間に機能分担が生じはじめたということである。資料間における文体の差等を考慮する必要はあるものの、「-おく」の補助動詞的用法において頻繁に「動詞連用形+テ+おく」が用いられるようになって定着し、それが「-おく」における補助動詞構造専用の構造として用いられるようになった、という歴史的な変遷が考えられるということである。

現代日本語の「-しまう」は主に「動詞連用形+テ+しまう」の構造で観察されるが、近世日本語資料における「-しまう(しまふ)」には、現代日本語においては観察されない「動詞連用形+しまう(しまふ)」構造の用例が多数観察される。日本語の「-しまう(しまふ)」の場合は、中世日本語以前の資料において「-しまう(しまふ)」が観察されないため、「-おく」のような形態的な変遷を辿ることはできない。しかし、「-おく」における以上のような歴史的変遷と合わせて考えると、近世日本語の「-しまう(しまふ)」においても「動詞連用形+しまう(しまふ)」と「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」の間で機能分担があり、やがて補助動詞構造専用の構造として「動詞連用形+テ+しまう(しまふ)」が用いられていったといえるのではないだろうか。ただ、同一文中における用法差のない両構造の共起した用例の存在を考えると、単に表記上のゆれがあったとも考えられる。この点については、今後さらに検討する必要があると思われる。

補助動詞としての日本語の「-おく」は、上代日本語資料の「-おく」からその C 補助動詞的用法 C2〈結果維持〉用法の用例が見られる。中古日本語資料においては、C2〈結果維持〉のほか、C1〈パーフェクト性〉や C3〈事前処置〉用法の用例も見られ、C4〈非難・自虐〉用法の萌芽的な用例も見られはじめる。尚、C4〈非難・自虐〉用法の典型的な用例は、その後の中世日本語資料や近世日本語資料において顕著に観察されはじめる。よって、補助動詞としての日本語「-おく」の意味拡張の過程を、「C2〈結果維持〉<C1〈パーフェクト性〉・C3〈事前処置〉<C4〈非難・自虐〉」のように捉えることができる。このような意味拡張の過程を、文法化に伴う意味変化である主観化という観点から考察すると、C3〈事前処置〉用法への意味拡張という現象は主観化の方向への一致を見せていると考えられ、C4〈非難・自虐〉用法のような、話

し手の結果に対する評価性がさらに増した用法への拡張は、主観的な意味からより主観的な意味への拡張を示していると捉えることができる。

尚、現代日本語の補助動詞「-おく」は、「行為猶予」や「結果誇示行為」のような意味を表わす場合があり、現代日本語においてはさらに聞き手目当ての意味用法、つまり間主観的な意味にまで拡張していることが窺える。

補助動詞としての韓国語の「-twuta」は、15世紀中世韓国語資料の「-twuta」からそのC補助動詞的用法C2〈結果維持〉用法の用例が見られるのに対し、C3〈事前処置〉用法の用例は17世紀近世韓国語資料から典型的な用例が出現しはじめる。このような意味用法上の歴史的変遷を勘案すると、韓国語の補助動詞「-twuta」の場合は、日本語の補助動詞「-おく」よりもより意味拡張の過程が捉えやすいといえる。つまり、C2〈結果維持〉用法の方がC3〈事前処置〉用法よりも原始的な用法であったということが、「-twuta」の意味的変遷においてより裏付けられるからである。よって、16世紀中世韓国語資料から見られるD〈完遂〉も合わせて考慮すると、補助動詞としての韓国語「-twuta」の意味拡張の過程を、「C2〈結果維持〉<D〈完遂〉<C3〈事前処置〉」のように捉えることができる。韓国語の補助動詞「-twuta」に見られるC3〈事前処置〉用法への意味拡張という現象においても、主観化の方向への一致を認めることができる。

日本語の場合、上代日本語における「-おく」の用例数が少ないため、「C2〈結果維持〉<C3〈事前処置〉」という意味拡張の方向性を明確に捉えることは難しいといえるが、以上のような韓国語の補助動詞「-twuta」における意味拡張の過程を勘案すると、やはり日本語の補助動詞「-おく」においても「C2〈結果維持〉<C3〈事前処置〉」といった意味拡張の流れを想定することは可能であると考えられる。

一方、日本語の補助動詞「-おく」や韓国語の補助動詞「-twuta」との類似性を指摘される韓国語の補助動詞「-nohta」の場合は、16世紀中世韓国語資料からその補助動詞的用法D〈完遂〉用法の用例が観察されるものの、現代韓国語のようなC2〈結果維持〉やC3〈事前処置〉の用例は、中間的な用法の用例が一例見られるのみで、18世紀近世韓国語まで観察されない。つまり、「-nohta」の場合、現代韓国語のようなC補助動詞的用法は18世紀近世韓国語までは発達しておらず、もう少し後の段階で発達するものと考えられる。よって、「D〈完遂〉<C2〈結果維持〉・C3〈事前処置〉・C4〈非難・自虐〉」のような意味拡張の過程を仮に規定することができるが、より正確な意味拡張の過程を明らかにするためには、19世紀以降の資料の調査を行う必要があるだろう。

補助動詞としての日本語の「-しまう(しまふ)」は、近世日本語資料の「-しまう(しまふ)」からそのC補助動詞的用法C1〈一掃〉、C2〈遺憾〉、C3〈無意識〉用法の用例が見られる。た

だ、C2〈一掃〉用法の用例は近世後期になってからより多くの用例が観察されはじめるため、「-しまう(しまふ)」のC補助動詞的用法において、C1〈一掃〉がC2〈遺憾〉よりも原始的な用法であった可能性が高いといえる。また、C3〈無意識〉は観察される用例数もわずかであるため、近世日本語においてはまだ確立していない用法であったと考えられる。よって、「C1〈一掃〉<C2〈遺憾〉<C3〈無意識〉」のような意味拡張の過程を規定することができる。このような意味拡張の過程を、文法化に伴う意味変化である主観化という観点から考察すると、C2〈遺憾〉用法のような、話し手の結果に対する評価性が顕著に表出した用法への拡張は、主観的な意味への拡張を示していると捉えることができる。C1〈一掃〉用法においても、当該の動作の結果、爽快感を伴う場合があるが、結果に対する話し手の評価性という点に関しては、C2〈遺憾〉用法の方がより主観性を帯びていると考えることができる。

尚、現代日本語の「-しまう」は、以下の「言い訳」や「照れ隠し」、「配慮」のような意味を表わす場合があり、現代日本語においては聞き手目当ての意味用法、つまり間主観的な意味にまで拡張している。

一方、補助動詞としての韓国語の「-pelita(pAlita)」は、15世紀中世韓国語資料の「-pelita(pAlita)」からそのC補助動詞的用法C1〈一掃〉、C2〈遺憾〉用法の用例が見られる。したがって、出現時期によって意味拡張の過程を規定することは難しいが、やはり日本語の補助動詞「-しまう(しまふ)」の場合と同様に、C2〈一掃〉用法の用例の方がより多く観察されるため、C1〈一掃〉がC2〈遺憾〉よりも原始的な用法であった可能性が高い。これはA1〈捨てる〉やB1〈対象物除去〉との「不要なものの除去、消去」といった共通性からも読みとることができる。よって、「C1〈一掃〉<C2〈遺憾〉」のような意味拡張の過程を規定することができる。このような意味拡張の過程を、文法化に伴う意味変化である主観化という観点から考察すると、C2〈遺憾〉用法のような、話し手の結果に対する評価性が顕著に表出した用法への拡張は、主観的な意味への拡張を示していると捉えることができる。

最後に、「動詞+動詞」の「V-V」構造における形態的な一体化と意味的な一体化の関係性について述べたいと思う。

百留(2001a)では、従来、動詞間の結合の強弱は、アクセントや音便化、連濁といった形態音韻論的指標、係助詞などの介入を許すかといった統語論的指標をもとに論じられてきたが、意味、用法の面から結合の強弱を明らかにしようとする際には、「補助動詞化」という現象が手がかりになるのではないかと述べている(百留 2001a,80:12-17)。そして、「V-V」構造においてV2が補助動詞化しているものについては、構成要素の意味内容が単独で 사용되는場合とは異なっており、複数の動詞の接続であるという解釈を許さないため、「単なる動詞の接続とは異なり、その時点で形態的なまとまりが強まっていると判断できよう。本稿(百留 2001a)で取り

上げる複合動詞後項(-入る)の補助動詞化は、動詞間のまとまりが強まった後に起こる現象であると考えられ、複合動詞成立を意味の面から論じる際に有効な指標であると考え(80:35-39)」と述べている。

しかし、統語的な指標から、すでに豊富な補助動詞的用法が観察される中古日本語資料の「-おく」の形態的なまとまりを検討すると、必ずしもそれが強まっているとはいえない。

例えば、中古日本語資料の「-おく」において観察される「接頭辞+動詞」構造の「うちおく」には、以下の通り係助詞の介入が見られる。「うち」は「強意」を表すものとして接頭辞化し、単独で 사용되는場合と意味内容が異なっているといえるが、係助詞の介入を許す点から「うち+おく」において形態的なまとまりが強まっているとはいえない。

(1)さきざき御覧ぜしにはあらぬ手の、いますこしおとなびまさりて、よしづきたる書きざまな
どを、いづれかいづれならむとうちも置かず御覧じつつ、とみにも大殿籠らねば、…

〈源氏物語 椎本〉

さらに、中古日本語資料の「-おく」では V1 の尊敬語形(謙譲語形)や V1 が尊敬(謙譲)の補助動詞と結合した形が比較的自由に現れる。これらの「おく」も単独で 사용되는場合と意味内容が異なっているが、以上のような様相から形態的なまとまりが強まっているとはいえない。

(2)「げにこそ闇にまどへる心地すれ。なほ聞こえ慰めたまひて、いささかの御返りもあらばな
む」などのたまひおきて、立ちわづらひたまふも軽々しう、さすがに人騒がしければ、帰りた
まひぬ。

〈源氏物語 夕霧〉

(3)「いと行く末心細く、うしろめたきありさまにはべるめるに、まめやかなるさまに思し忘れ
ずとはせたまはん、いとうれしうこそ思ひたまへおかめ。はべらざらむ後なん、あはれに思ひ
たまへらるべき」とて、泣きたまふに、…

〈源氏物語 手習〉

以上のように、統語的な指標から中古日本語資料で観察される「-おく」における動詞間の結合度を検討すると、係助詞の介入や、V1 において尊敬・謙譲表現を許す用例が見られ、V1 と V2 「おく」が統語的に不可分で形態的な緊密性をもった一語として存在していたとはいえない面を示す。したがって、中古日本語における「-おく」において、V1 と V2 の結合度が比較的緩

かったことが推測される¹⁰。

以上のような百留(2001a)をはじめとした一連の研究においては、補助動詞化といった意味的な側面から「V+V」型表現の結合度を論じているが、日本語における動詞間の結合度の強まった複合動詞の成立に関しては、様々な観点からのアプローチが必要であると思われる。ただ、本稿において明らかにした、日本語の「-おく」における意味的変遷と以上のような統語的指標から見た動詞間の結合度を合わせて考慮すると、V2の補助動詞化というのは必ずしも動詞間のまとまりが強まった後に起こる現象とはいえないのではないだろうか。したがって、本稿において考察した補助動詞としての「-おく」の形態的変遷として、「動詞連用形+おく」から「動詞連用形+テ+おく」への移行が観察されるのも、依然として「-おく」における動詞間の結合度が緩かったがゆえに起こった現象であると理解できる。

「V-V」構造といった二つの動詞の連続においてV2が補助動詞化を遂げると、確かにV2はV1に対して意味の成立において依存的であり、単独の場合とは異なる意味内容を表わすといった点で一体化しているといえる。しかし、以上のような意味的な一体化と、形態音韻論的な一体化あるいは統語的な一体化は、関連しつつも、やはり必ずしもそれらが連動するとは限らない事例もあるといえる。古代語の「V-V」構造における動詞間の結合度の強弱について、またそれとV2の補助動詞化との関連性については、様々な観点からのアプローチに加え、個別の事例を一つ一つ丹念に検討していく必要があると思われる。

尚、韓国語においても以上のようなアプローチが可能である。韓国語の場合も、以下の(4)のように「V-V」構造といった二つの動詞の連続において、謙譲を表す先語末語尾¹¹の「-습(-sAp-)」¹²が介在する用例が『月印釈譜』の中に観察される。以下の用例を見られたい。

(4)이튿나래 나라해 이서 도즈기 자취 바다가야 그菩薩을 자바 남기 모물 빼습바 뒹더니…
…ku 菩薩-Al cab-a namk-Ai mom-mAl **pskey-zAp-a tw-is**-teni…
〈…その菩薩を捕まえて、木に身体を突き刺し申しあげておいたが、…〉

〈月印釈譜1:6b〉

¹⁰ 青木(2012)においても、古代日本語の「V-V」における動詞間の結合度の緩さを指摘する記述が見られる。

¹¹ 先語末語尾とは、語の末尾にくる語末語尾に先立つ語尾であり、語末語尾が次にその他の語尾が結合しなくても語を完成させることができるのに対し、先語末語尾は その他の語尾が結合しないと語を完成することができない。

¹² 「-습(-sAp-)」は数ある先後末語尾の中でも最も前に、つまり語幹の直後に結合し、よって後続するその他の語尾も最も多い。語幹の末音と語尾の種類により、「-습(-sAp-)」や「-습(-zAp-)」のほか六種の異形態として実現する。

上記の用例は V1 に謙譲の先語末語尾が結合し、「動詞語幹+先語末語尾+連結語尾+ twuta」 という構造となっている用例であり、「뺨-습-아-두 (pskey-sAp-a-twu-、突き刺し申しあげておく)」のように分析することができる。つまり、韓国語における動詞間の結合の強弱においても、V2の「補助動詞化」といった意味論的指標のみならず、先後末語尾などの介入を許すかといった統語論的指標をもとに論じることが可能ということである。

動詞間の結合の強弱に関する以上のような議論は、日本語と韓国語のみならず、アジア諸言語に広く見られ、アジア全体の地域類型論的な特色の一つとして数えられる「V-V」構造の成立に関する多くの謎の解明の一つの端緒になると思われる。本稿において取り組んだ日本語と韓国語における「V-V」構造の形態および意味的な観点からみた歴史的変遷のみならず、今後は助詞の介入や尊敬、謙譲表現の可否等のような統語的な観点からも詳細に検討し、日本語と韓国語における「V-V」構造の成立及びその発達過程の解明に努めたい。

参考文献

- 青木博史編(2007)『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房
- 青木博史(2010)『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房
- 青木博史編(2011)『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版
- 青木博史(2012)「レキシコンと言語変化-歴史的観点から見た複合動詞-」『関西言語学会第37回大会』
- 一色舞子(2011a)「日本語の補助動詞「-てしまう」の文法化」『日本研究』15,pp.201-221,高麗大学校日本研究センター
- 一色舞子(2011b)「「-だす」と「-내다」の対照分析」『日本語文学』49,pp.105-128,韓国日本語文学会
- 大場美穂子(2004)「補助動詞「おく」の使用制限についての覚書」『相模女子大学紀要.A,人文・社会系』,pp.1-9 相模女子大学
- 大場美穂子(2005)「補助動詞「おく」についての一考察」『東京大学留学生センター教育研究論集』14
- 奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって-金田一的段階-」『国語国文』1巻
- 奥田靖雄(1978)「アスペクトの研究をめぐって(上),(下)」『教育国語』53-54号
- 生越直樹他(2007)『日本語と朝鮮語の対照研究Ⅱ』東京大学21世紀COEプログラム「心とことば-進化認知科学的展開」研究報告書
- 呉美善(2004)『日本語動詞の文法化に関する考察』慶熙大学校出版局
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 梶井恵子(1997)『日本語の機能表現形式-「て形」のすべて-』凡人社
- 笠松郁子(1993)「「しておく」を述語にする文」言語学研究会編『ことばの科学6』,pp117-139 むぎ書房
- 亀井孝・大藤時彦・山田俊雄編(2008)『日本語の歴史 別巻 言語史研究入門』平凡社
- 加藤重広(2007)「日本語の述部構造と境界性」『北大文学研究科紀要122』,pp97-155 北海道大学
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 金水敏(2004)「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言語類型 柴谷方良教授還暦記念論文集』,pp47-56 くろしお出版
- 金水敏・乾善彦・渋谷勝己(2008)『シリーズ日本語史4 日本語史のインタフェース』岩波書店
- 金水敏・高橋善行・衣畑智秀・岡崎友子(2011)『シリーズ日本語史3 文法史』岩波書店
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15巻
- 工藤真由美(1996)『アスペクト・テンス体系とテキスト-現代日本語の時間表現-』ひつじ書房
- 今野真二(2009)『文献日本語学』港の人
- 澤田治美編(2011)『ひつじ意味論講座5 主観性と主体性』ひつじ書房

- 杉本武(1991)「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要』,pp.109-126
人文・社会学編 4, 九州工業大学
- 杉本武(1992)「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ(2)」『九州工業大学情報工学部紀要』,pp.61-73
人文・社会学編 5, 九州工業大学
- 鈴木泰(2012)『語形対照 古典日本語の時間表現』笠間書院
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子編(2011)『シリーズ・言語学のフロンティア 歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する—』大修館書店
- 高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」 金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』,pp.117-153 むぎ書房
- 高橋太郎(2003)『動詞九章』 ひつじ書房
- 高山善行・青木博史(2010)『ガイドブック 日本語文法史』 ひつじ書房
- 鄭世桓・上原聡(2008)「日本語の補助動詞「テシマウ」に対応する韓国語の *a pelita* と *ko malta* について—文法化の観点からの対照分析—」『日本認知言語学会論文集』,pp.461-471 日本認知言語学会
- 朝鮮世祖(訳河瀬幸夫)(2010)『積譜詳節上』春風社
- 朝鮮世祖(訳河瀬幸夫)(2010)『積譜詳節下』春風社
- 塚本秀樹(2006)「言語現象と文法化—日本語と朝鮮語の対照研究—」,東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば—進化認知科学的展開」研究報告書『日本語と朝鮮語の対照研究』 pp.27-61
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版
- 塚本秀樹(2012)『形態論と統語論の相互作用 日本語と朝鮮語の対照言語学的研究』 ひつじ書房
- 角田太作(2009)『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』 くろしお出版
- 坪井美樹(2005)「テ形接続形式と文法化」『国語と国文学 82-11』,pp.13-25 至文堂
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法 3』 くろしお出版
- バーナード・コムリー 山田小枝訳(1988)『アスペクト』 むぎ書房
- パルデシ プラシャント(2007)「「他動性」の解剖:「意図性」と「受影性」を超えて」角田三枝 佐々木冠 塩谷亨編『他動性の通言語的研究』, pp.179-190, くろしお出版
- P.J.ホッパー／E.C.トラウゴット 日野資成訳(2003)『文法化』 九州大学出版会
- 百留康晴(2000)「近世複合動詞の歴史的様相」『言語科学論集』 4, pp.88-76, 東北大学
- 百留康晴(2001a)「動詞接続から複合動詞へ-「入る」の補助動詞化を中心に-」『文芸研究』 152,pp.79-92
- 百留康晴(2001b)「継続を表わす補助動詞「続ける」の成立」『言語科学論集』 5,pp.120-109,東北大学
- 百留康晴(2002)「複合動詞後項「出す」における意味の歴史的変遷」『文化』 66,pp.17-33,東北大学文学会
- 百留康晴(2003)「中古動詞表現における動詞接続の展開」『国語学研究』 42,pp.14-25,国語学研究刊行会

- 百留康晴(2004)「大蔵虎明本狂言集における複合動詞後項の文法化」『文化』68, pp.55-75, 東北大学文学会
- 藤井由美(1992)「「してしまう」の意味」言語学研究会編『ことばの科学5』, pp.17-40 むぎ書房
- 堀江薫(2004)「談話と認知」中村芳久編『認知文法論Ⅱ』, pp.247-278 大修館書店
- 堀江薫(2005)「日本語と韓国語の文法化の対照—言語類型論の観点から—」『日本語の研究』第1巻3号, pp.93-106
- 堀江薫(2008)「間主観化—文法の語用論的基盤のタイポロジーに向けて」『月刊言語』2月号, pp.36-41
- 堀江薫・金延珉(2008)「主観化・間主観化」の観点から見た日本語・韓国語の文法現象—Elizabeth C.Traugott 教授の文法化研究の新展開—『月刊言語』5月号, pp.84-89
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- 松下大三郎(1924)『標準日本文法』紀元社
- 松下大三郎(1974)『改撰標準日本語文法』勉誠社
- 松本曜(2001)「言語類型論(Ⅱ): 文法化」, 山梨正明他編『認知言語学論考 No.1』pp.91-101 ひつじ書房
- 三上章(1972)『現代語法序説』くろしお出版
- 安田章(1977)「助詞(2)」『岩波講座 日本語 7』岩波書店
- 油谷幸利(1979)「「-어 놓다」と「-어 twuta」の意味分析」『朝鮮学報 91』
- 吉川武時(1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』, pp.155-327 むぎ書房
- 고영근, Ko Yeonggeun(2010)『제 3 판 표준 중세국어문법론』집문당
- 고영근, Ko Yeonggeun(2004)『한국어의 시제 서법 동작상』태학사
- 국립국어원 지음 国立国語院編(2005)『외국인을 위한 한국어 문법 1 체계 편』국립국어원
- 국립국어원 지음 国立国語院編(2005)『외국인을 위한 한국어 문법 2 용법 편』국립국어원
- 김석득, Kim Seokdeuk (1992)『우리말 형태론』탐출판사
- 김성화, Kim Seonghwa (1990)『국어의 상 연구』한신문화사
- 김영태, Kim Yeongtae (1997)『현대국어 보조용언 연구』문창사
- 김효신, Kim Hyosin (2007)「완료표현 ‘-고 말다’와 ‘-어 버리다’의 한국어 교육학적 연구」한국외국어대학교 교육대학원 석사학위논문
- 남기심・고영근, Nam Gisim・Ko Yeonggeun『표준국어문법론 개정판』탐출판사
- 박덕유, Pak Deokyu (1998)『國語의 動詞相 研究』한국문화사
- 박소현, Pak Sohyeon (2000)「완료를 나타내는 보조동사의 의미분석」한국외국어대학교 학위논문
- 박진호, Pak Jinho (2003)「한국어의 동사와 문법요소의 결합 양상」서울대학교 대학원 문학박사논문

- 손세모돌, Son Semodol(1996) 『국어 보조 용언 연구』 한국문화사
- 이성하, I Seongha (1998) 『문법화의 이해』 한국문화사
- 장미라, Jang Mira (2006) 「한국어 보조 용언의 상적 양태적 의미 기능과 통사적 특징 -‘놓다, 두다, 버리다, 내다, 말다, 치우다’를 중심으로-」 『배달말(38)』, pp.33-60
- 정언학, Jeong eonhak(2006) 『상 이론과 보조 용언의 역사적 연구』 태학사
- 한재영, Han Jeyeong(1999) 「중세국어 복합동사의 구성에 관한 연구」 『語學研究』 Vol.35, No.1, pp.123-149.
- 호광수, Ho Gwangsu (2003) 『국어 보조용언 구성 연구』 역락
- Jakobson, R. 1957. Shifters, Verbal Categories and the Russian Verb. Russian Language Project. Department of Slavic Languages and Literature. Harvard University.
- Ono Tsuyoshi. 1992. "The grammaticalization of the Japanese verbs *oku* and *shimau*." *Cognitive Linguistics* 3.4:367-390
- Strauss, Susan and Sung-Ock Sohn. 1998. "Grammaticalization, Aspect, and Emotion: The case of *-te simau* and Korean *-a/e pelita*" *Japanese/Korean Linguistics* 8. CSLI, 217-230.
- Traugott, Elizabeth C. 1995. "Subjectification in Grammaticalization." In: Stein, Dieter and Susan Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectivization in Language*. Cambridge University Press, 31-54.
- Traugott, Elizabeth C. 1999. "The role of pragmatic change ". *Pragmatics in 1998: Selected Papers from the 6th International Pragmatics Conference*. Vol.2, 93-102. Antwerp: International Pragmatics Association
- Traugott, Elizabeth C. 2003. "From Subjectification to Intersubjectification." In: Hickey, Raymond(ed.), *Motives for Language Change*. Cambridge University Press, 124-139
- Traugott, Elizabeth C. and Dasher, Richard B. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge University Press

辞書類

- 『日本国語大辞典 第二版』 小学館
- 『大辞泉』 増補・新装版 (デジタル大辞泉) 小学館
- 『標準国語大辞典』 国立国語研究院
- 『NAVER 日本語辞典』 <http://m.jpdic.naver.com>
- 『Daum 日本語辞典』 <http://dic.daum.net/index.do?dic=jp>

コーパス類

『KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」検索デモンストレーション』

http://www.kotonoha.gr.jp/cgi-bin//search_form.cgi?viaTopPage=1

『21 世紀世宗計画 現代韓国語コーパス』 <http://www.sejong.or.kr/>

『21 世紀世宗計画 歴史コーパス』

参考サイト

「日本古典文学本文データベース」

http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi

「知識探索サイト ジャパンナレッジプラス」

<http://www.jkn21.com/stdsearch/displaymain>

「デジタルハングル博物館」

<http://www.hangeulmuseum.org/>

使用テキスト

〈上代日本語資料〉

万葉集…日本古典文学全集（小学館）

〈中古日本語資料〉

伊勢物語、枕草子、源氏物語、夜の寝覚め、狭衣物語、とりかへばや物語、今昔物語

…日本古典文学全集（小学館）

〈中世日本語資料〉

宇治拾遺物語、平家物語、徒然草…日本古典文学全集（小学館）

天草版平家物語…『天草版平家物語総索引』（勉誠出版）

伊曾保物語…『伊曾保物語』（京都大学国文学会）、『エソボのハブラス 本文と総索引』（清文堂）

中華若木詩抄…『中華若木詩抄文節索引』（笠間書院）

虎明本狂言集…『大蔵虎明本狂言集の研究本文編』（表現社）

〈近世日本語資料〉

醒睡笑…『醒睡笑 静嘉堂文庫藏 索引編』（笠間書院）、『醒睡笑 静嘉堂文庫藏 本文編 [改訂版]』（笠間書院）

西鶴集、近松集、洒落本、滑稽本、人情本、東海道中膝栗毛…日本古典文学全集（小学館）

〈15 世紀中世韓国語資料〉

積譜詳節、月印積譜、楞嚴經諺解、圓覺經諺解、金剛經三家解、杜詩諺解、三綱行実図、南明集諺解
…『訳注積譜詳節』、『訳注月印積譜』、『訳注楞嚴經諺解』、『訳注圓覺經諺解』、『訳注金剛經三家解』、『訳注杜詩諺解』、『訳注三綱行実圖』、『注釈南明集諺解』(世宗大王記念事業会)、韓国古典叢書 1 語学類(大提閣)、韓国古典叢書 7 統語学類(大提閣)、「21 世紀世宗計画 歴史コーパス」、「デジタルハングル博物館」

〈16 世紀中世韓国語資料〉

續三綱行実圖、翻譯朴通事、翻譯老乞大、呂氏郷約諺解、重刊三綱行実圖、重刊續三綱行実圖、翻譯小學、小學諺解、分門瘟疫易解方、七大萬法、順川金氏諺簡
…『訳注翻譯老乞大/老乞大諺解』(산구문화사)、『訳注翻譯小學』(世宗大王記念事業会)、韓国古典叢書 1 語学類(大提閣)、韓国古典叢書 7 統語学類(大提閣)、「21 世紀世宗計画 歴史コーパス」、「デジタルハングル博物館」

〈17 世紀近世韓国語資料〉

諺解痘瘡集要、諺解胎産集要、練兵指南、女訓諺解、東國新續三綱行実圖、重刊杜詩諺解、老乞大諺解、捷解新語初刊本
…『訳注翻譯老乞大/老乞大諺解』(산구문화사)、『捷解新語 本文・索引・解題』(京都大学国文学会)、「21 世紀世宗計画 歴史コーパス」、「デジタルハングル博物館」

〈18 世紀近世韓国語資料〉

伍倫全備諺解、兵学指南、明義録諺解、改修捷解新語、五倫行実圖、隣語大方、敬信録諺釋、増修無冤録諺解
…『改修捷解新語』(京都大学国文学会)、『隣語大方 本文・解題・釋文・索引』(京都大学国文学会)、「21 世紀世宗計画 歴史コーパス」、「デジタルハングル博物館」

添付資料

万葉集	03/0320	富士の嶺に 降り置く 雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり	不盡嶺尔 零置 雪者 六月 十五日消者 其夜布里家利
	03/0388	海神は くすしきものか 淡路島 中に 立て置きて 白波を 伊予に廻らし 居待月…	海若者 靈寸物香 淡路嶋 中尔 立置 而 白浪乎 伊与尔廻之 座待月…
	03/0443	天雲の…たらちねの 母の命は 斎瓮を 前に 据ゑ置きて 片手には 木綿取り持ち	天雲之…帶乳根乃 母命者 齋忌戸乎 前 坐置 而 一手者 木綿取持 一手者和細布奉…
沈疴自哀文		胸を割き心を採り、 易へて置き 、投るるに神薬を以てすれば、即ち瘡めて平なるがごとし。	割胸採心、 易而置 之、投以神薬、…
	05/0804	ますらをの 男さびすと 剣太刀 腰に取り佩き さつ弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍 うち置き	麻周羅遠乃 遠乃古佐備周等 都流伎多智 許志尔刀利波枳 佐都由美乎 多尔伎利物知提 阿迦胡麻尔 志都久良
	06/0926	やすみしし 我ご大君は み吉野の 秋津の小野の 野の上には 跡見 据ゑ置きて	安見知之 和期大王波 見吉野乃 飽津之小野笑 野上者 跡見 居置 而
	08/1547	さを鹿の萩に 貫き置ける 露の白玉あふさわに誰れの人かも手に巻かむちふ	棹四香能 芽二 貫置有 露之白珠 相佐和仁 誰人可毛 手尔将巻知布
	08/1654	松陰の 浅茅が上の 白雪を 消たずて置かむ ことはかもなき	松影乃 浅茅之上乃 白雪乎 不令消将置 言者可聞奈吉
	08/1659	真木の上に 降り置ける 雪のしくしくも思ほゆるかもさ夜問へ我が背	真木乃於尔 零置有 雪乃 敷布毛 所念可聞 佐夜問吾背
	09/1744	埼玉の小埦の沼に鴨ぞ羽霧るおのが尾に 降り置ける 霜を掃ふとにあらし	前玉之 小埦乃沼尔 鴨曾翼霧 己尾尔 零置流 霜乎 掃等尔有斯
	09/1806	あしひきの荒山中に 送り置きて 帰らふ見れば心苦しも	蘆桧木笑 荒山中尔 送置 而 還良布見者 情苦喪
	09/1809	…親族どち い行き集ひ 長き代に 標にせむと 遠き代に 語り継がむと 娘子墓 中に 造り置き …	…親族共 射歸集 永代尔 標将為跡 退代尔 語将継常 處女墓 中尔 造置 …
	09/1809	…壮士墓 このもかのもとに 造り置ける 故縁聞きて 知らねども 新喪のごとも 哭泣きつるかも	…<壮>士墓 此方彼方二 造置有 故縁聞而 雖不知 新喪之如毛 哭泣鶴鴨
	10/1838	峰の上に 降り置ける 雪し風の共ここに散るらし春にはあれども	峯上尔 零置 雪師 風之共 此聞散良思 春者雖有
	10/2007	ひさかたの 天つしるしと 水無し川 隔てて置き し 神代し恨めし	久方 天印等 水無川 隔而置 之 神世之恨
	11/2356	高麗錦紐の片方ぞ床に落ちにける明日の夜し来なむと言はば 取り置きて 待たむ	狛錦 紐片叙 床落邏祁留 明夜志 将来得云者 取置待
	11/2617	あしひきの山桜戸を 開け置きて 我が待つ君を誰れか留むる	足日木能 山櫻戸乎 開置 而 吾待君乎 誰留流
	13/3237	あをによし 奈良山過ぎて もののふの 宇治川渡り 娘子らに 逢坂山に 手向け草 幣 取り置きて 我妹子	緑丹吉 平山過而 物部之 氏川渡 未通女等尔 相坂山丹 手向草 絲 取置 而 我妹子尔
	14/3437	陸奥の安達太良真弓は じき置きて 反らしめきなば弦はかめかも	美知乃久能 安太多良末由美 波自伎於伎弓 西良思馬伎那婆 都良波可馬可毛
	15/3629	秋さらば 我が船泊てむ 忘れ貝 寄せ来て置けれ 沖つ白波	安伎左良婆 和我布祢波弓牟 和須礼我比 与世伎弓於家礼 於伎都之良奈美
	17/4001	立山に 降り置ける 雪を常夏に見れども飽かず神からならし	多知夜麻尔 布里於家流 由伎乎 登己奈都尔 見礼等母安可受 加武賀良奈良之
	17/4003	…高き立山 冬夏と 別くこともなく 白栲に 雪は 降り置きて 古ゆ あり来にければ こそしかも…	…多可吉多知夜麻 布由奈都登 和久許等母奈久 之路多倍尔 遊吉波 布里於吉弓 伊尔之邊遊
	17/4004	立山に 降り置ける 雪の常夏に消ずてわたるは神ながらとぞ	多知夜麻尔 布理於家流 由伎能 等許奈都尔 氣受弓和多流波 可無奈我良等曾
	19/4220	海神の 神の命の み櫛笥に 貯ひ置きて 斎くとふ 玉にまさりて 思へりし 我が子にはあれど	和多都民能 可味能美許等乃 美久之宜尔 多久波比 於伎氏 伊都久等布 多麻尔末佐里氏 於毛敝里之…
	20/4310	秋されば霧立ちわたる天の川石 並置かば 離ぎて見むかも	安吉佐礼婆 奇里多知和多流 安麻能河波 伊之 奈弥於可<婆> 都藝弓見牟可母
	20/4426	天地の神に幣 置き 斎ひつついませ我が背な我れをし思はば	阿米都之乃 可末尔奴佐 於伎 伊波比都々 伊麻世和我世奈 阿礼乎之毛波婆
	20/4454	高山の巖に生ふる菅の根のねもころごろに 降り置く 白雪	高山乃 伊波保尔於布流 須我乃根能 祢母許呂其呂尔 布里於久 白雪

中古日本語資料

伊勢物語	いでていなば心かるしといひやせむ世のありさまを人はしらねば　とよみ置きて、いでていにけり。
	秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにそありけれ　と書きおきて、「かしこよりひとおこせば、これをやれ」とていぬ。
枕草子	御鏡うち置きて、「さは、翁まるか」と言ふに、ひれ伏して、いみじう鳴く。
	…となむ聞えたまひけると、聞しめしおきて、御物忌なりける日、古今を持てわたらせたまひて、御几帳を引きへだてさせたまひければ、
	帽額の簾は、ましてこはじの <u>うち置</u> かるる音、いとしるし。
	暑さのわびしきにそへて、ししたる事の、今日過ぐすまじきを <u>うちお</u> きて、ただすこし聞きて帰りなむとしつるに、
	いづくともなく雪の <u>降りお</u> きたるに見まがへられ、
	をりにつけても、一ふしあはれともをかしとも <u>聞きお</u> きつるものは、草、木、鳥、虫も、おろかにこそおぼえね。
	「いま秋風吹かむをりぞ来むとする。待てよ」と言ひおきて、逃げていにけるも知らず、風の音を聞き知りて、八月ばかりになれば、
	五位六位などの、下襲の裾はさみて、笏のいと白きに、扇 <u>うち置</u> きなど、行きちがひ、
	投げ取らせたれば、伏し拝みて、肩に <u>うち置</u> きては舞ふものか。
	「かかる者をなむ、語らひつけて置きためる。すかして、常に来る事」とて、ありしやうなど、小兵衛といふ人にまねばせて聞かせさせたまへば、
	命婦の乳母、いとく縫ひ果てて <u>うち置</u> きつる、ゆだけのかたの身を縫ひつるがそむきざまなるを見つて、
	ゆだけのかたの身を縫ひつるがそむきざまなるを見つて、とち目もしあへず、まどひ置きて立ちぬるが、
	清げなる立て文持たせたる男などの、誦経の物 <u>うち置</u> きて、堂童子など呼ぶ声、
	小法師ばらの、持ちあるくべうもあらぬおに屏風の高きを、いとよく進退して、畳などを <u>うち置</u> くと見れば、
	「物忌なれば見ず」とて、上に <u>ついさ</u> して置きたるを、つとめて手洗ひて、
	またつとめて、藤大納言の御もとに、この返しをして <u>さし置</u> かせたれば、すなはちまた返ししておこせたまへり。
	まだまゐらざりしより、 <u>聞きお</u> きたまひける事など、「まことにやさありし」などのたまふに、御記帳へだてて、…
	かつ使ひつるだにあかずおぼゆる扇も <u>うち置</u> かれぬれ。
	南ならずは東の廂の板の、かげ見ゆばかりなるに、あざやかなる畳を <u>うち置</u> きて、
	さやうの所にて聞くに、泥障の音の聞ゆるを、いかなる者ならむと、するわざも <u>うち置</u> きて見るに、あやしの者を見つけたる、いとねたし。
	山の駅は、あはれなりし事を <u>聞きお</u> きたりしに、またもあはれなる事のありしかば、なほとりあつめてあはれなり。
	山の駅は、あはれなりし事を聞きおきたりしに、またもあはれなる事のありし事を <u>聞きお</u> きたりしに、またもあはれなる事のありしかば、…
	人の上言ふを腹立つ人こそいとわりなけれ。いかでか言はではあらむ。わが身をば <u>さしお</u> きて、さばかりもどかしく言はまほしきものやはある。
	仰せ言には、「とくまゐれ」などのたまはせて、「これは <u>聞しめしお</u> きたる事のありしかばなむ。…」
	思ひ忘れたりつる事を <u>おぼしお</u> かせたまへりけるは、なほただ人にてだにをかしかべし。
	「あれは誰そ。あらはなり」など、ものはしたなく言へば、 <u>さし置</u> きていぬ。
	みなほかざまに火をかきやりて、炭を <u>重ね置</u> きたるいただきに、火を置きたる、いとむつかし。
	をかしと思ふ歌を草子などに <u>書きてお</u> きたるに、言ふかひなき下衆のうちうたひたるこそ、いと心憂けれ。
	長女が童の、鶏をとらへ持て来て、「あしたに里へ持て行かむ」と言ひて <u>隠しお</u> きたりける、いかがしけむ、犬見つけて追ひければ、…
	牛飼の腹立ちければ、従者して打たせさへしければ、まして、 <u>いましめお</u> きたるこそ。
	この草子、目に見え心に思ふ事を、…書きあつめたるを、あいなう人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば、よう <u>隠しお</u> きたりと思ひしを、…

源氏物語	「『…我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、かへすがへす <u>諫めおか</u> れはべりしかば、…
	年ごろ馴れむつびきこえたまひつるを、 <u>見たてまつりおく</u> 悲しびをなむ、かへすがへすのたまひける。
	かやうにおほぞうなる御厨子などに <u>うち置き</u> 、
	散らしたまふべくもあらず、深く <u>とり置</u> きたまふべかめれば、二の町の心やすきなるべし。
	なにがしが及ぶべきほどならねば、上が上は <u>うちお</u> きはべりぬ。
	ただひとへにもものまめやかに静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには <u>思ひおく</u> べかりける
	…上はつれなくみさをづくり、心ひとつに思ひあまる時は、言はむ方なくすぎき言の葉、あはれなる歌を <u>詠みお</u> き、…
	大和撫子をば <u>さしお</u> きて、まづ塵をだになど親の心をとる。
	思ひあがれる気色に <u>聞きお</u> きたまへるむすめなれば、ゆかしくて、耳とどめたまへるに、この西面にぞ人のけはひする。
	「…上にも <u>聞こしめしお</u> きて、 『宮仕に出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにつけむ』といつぞやのたまはせし。…」
	この人のなま心なく若やかなるけはひもあはれなれば、さすがに情々しく <u>契りお</u> かせたまふ。
	「…気色なくもてなしたまへ」など <u>言ひお</u> きて、かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣をとりて出でたまひぬ。
	「…右近 『いで、この葛城の神こそ、さがしう <u>しお</u> きたれ』とむつかりて…」
	「私の懸想もいとよく <u>しお</u> きて、案内も残る所なく見たまへおきながら、ただ我どちと知らせてものなど言ふ若きおもとのはべるを、…」
	「私の懸想もいとよく <u>しお</u> きて、案内も残る所なく <u>見たまへお</u> きながら、ただ我どちと知らせてものなど言ふ若きおもとのはべるを、…」
	うたて思さるれば、太刀を引き抜きて <u>うち置</u> きたまひて、右近を起こしたまふ。
	「…『かの古里人に告げやらん』と申せど、『しばし思ひしづめよ、事のさま思ひめぐらして』となん、 <u>こしらへお</u> きはべりつる」
	「十九にやなりたまひけん。右近は、亡くなりける御乳母の <u>捨てお</u> きてはべりければ、三位の君のらうたがりたまひて、
	「…京にてこそところえぬやうなりけれ、そこら遙かにいかめしう占めて造れるさま、さはいへど、国の司にて <u>しお</u> きけることなれば、
	「『…その心ざし遂げず、この <u>思ひお</u> きつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言 <u>しお</u> きてはべるなる」と聞こゆれば、
	「『…その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に <u>遺言しお</u> きてはべるなる」と聞こゆれば、
	いみじう心細げに <u>見たまへお</u> くなん、願ひはべる道の絆に思ひたまへられぬべき」など聞こえたまへり。
	いとをかしと聞いたまへど、人々の苦しと思ひたれば聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひを <u>聞こえお</u> きたまひて帰りたまひぬ。
	日高う大殿籠り起きて、文やりたまふに、書くべき言葉も例ならねば、筆 <u>うち置</u> きつつすさびゐたまへり。
	「…今日明日渡したてまつらむ」など、かへすがへす <u>こしらへお</u> きて出でたまひぬ。なごりも慰めがたう泣きゐたまへり。
	「暁、かしこにもものせむ。車の装束さながら、隨身一人二人 <u>仰せお</u> きたれ」とのたまふ。
	「宮へ渡らせたまふべかなるを、その前に <u>聞こえおか</u> むとてなむ」とのたまへば、
	二間の際なる障子手づからいと強く鎖して、御褥 <u>うち置</u> きひきつくろふ。
	手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまへり。見るかひなう <u>うち置</u> きたまふ。
	故親王のうしろめたしと <u>たぐへお</u> きたまひけむ魂のしるべなめり、とぞ思さるる。
	心得ずうちかたぶきたまへるに、つつみに衣箱の重りかに古代なる、 <u>うち置</u> きておし出でたり。
	姫君も、おぼろけならでし出でたまへるわざなれば、物に <u>書きつけてお</u> きたまへりけり。
	「今年だに声すこし聞かせたまへかし。待たるものは <u>さしおか</u> れて、御気色のあらたまらむなむゆかしき」とのたまへば、
	命婦もたばかりきこえむ方なく、宮の御気色も、ありしよりはいとどうきふしに <u>思しお</u> きて、…
	母方、みな親王たちにて、源氏の公事知りたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまに <u>しお</u> きたてまつりて、…
	むげに限りのさまにものしたまふを、 <u>聞こえおか</u> まほしきこともおはするにやとて、大臣も宮もすこし退きたまへり。
	「…かくもものしたまふぞ」など <u>聞こえお</u> きたまひて、いときよげにうち装束きて出でたまふを、…
	菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、 <u>さし置</u> きて往にけり。
	人は心づきなしと <u>思ひお</u> きたまふこともあらむに、我はいますこし思ひ乱るることのまさるべきを、あいなしと心強く思すなるべし。

故姫君を、ひき避きてこの大将の君に聞こえつけたまひし御心を、後は 思しおきて 、よろしうも思ひきこえたまはず。
大將は、ありしに變らず渡り通ひたまひて、さぶらひし人々をも、なかなか細かに 思しおきて 、…
「見だに向きたまへかし」と心やましうつらうて、ひき寄せたまへるに、御衣を すべしおきて ゐざり退きたまふに、
「中宮の今宵まかでたまふなる、とぶらひにものしはべらむ。院の のたまはせおく ことはべりしかば、…」と奏したまふ。
「春宮をば今の皇子になしてなどの のたまはせおき しかば、とりわきて心ざしものすれど、…
帝は、故院のやむごとなく重き御後見と思して、長き世のかためと 聞こえおき たまひし御遺言を思しめすに、…
そのをりの心地のまぎれに、はかばかしうも 聞きおか ずなりにけり。
よろづのことどもしたためさせたまふ。親しう仕うまつり世になびかぬかざりの人々、殿の事とり行ふべき上下 定めおか せたまふ。
領じたまふ御庄、御牧よりはじめて、さるべき所どころの券などみな 奉りおき たまふ。
それよりほかの御倉町、納殿などいふことまで、少納言をはかばかしきものに 見おき たまへれば、…
ものをあはれと思しけるままだに、 うち置き うち置き書きたまへる、白き唐の紙四五枚ばかりを巻きつづけて、…
ものをあはれと思しけるままだに、うち置き うち置き 書きたまへる、白き唐の紙四五枚ばかりを巻きつづけて、…
「…生ける世にとは、げによからぬ人の 言ひおき けむ」と、いとなつかしき御さまにて、…
退きて咎なしとこそ、昔のさかしき人も 言ひおき けれ、
二条院のあはれなりしほどの御返りは、書きもやりたまはず、 うち置き うち置きおし拭ひつつ聞こえたまふ御気色、なほことなり。
二条院のあはれなりしほどの御返りは、書きもやりたまはず、うち置き うち置き おし拭ひつつ聞こえたまふ御気色、なほことなり。
かくおぼつかなながらやと、こころ悲しきさまさまの愁はしさは さしおか れて、
御心地にもをかしと 聞きおき たまひし人なれば、かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さるべき契りあるにやと思しながら、
年ごろ公私御暇なくて、さしも 聞きおき たまはぬ世の古事どもくづし出でて、
常は厭はしき夜の長さも、とく明けぬる心地すれば、人に知られじと思すも心あわたたしうて、こまかに 語らひおき て出でたまひぬ。
おいらかなるものから、ただならずかすめたまへるを、いとあはれに うち置き がたく見たまひて、なごり久しう、忍びの旅寝もしたまはず。
なほざりに 頼めおく める一ことをつきせぬ音にやかけて忍しのばん
かの帥のむすめの五節、あいなく人知れぬもの思ひさめぬる心地して、まくなぎつくらせて さし置か せけり。
みなさるべきことにふれつつよすがつけむことを 思しおき つるに、幸ひ人多くなりぬべし。
「…げにうしろやすく 思うたまへおく わざもがな」と、まめやかに聞こえたり。
ただ世の聞こえをのみ思し憚りたまひしことを大臣はうきものに 思しおきて 、昔のやうにも睦びきこえたまはず。
「聞こえさせ のたまひおき しこともはべしを、今は隔てなきさまに思されば、うれしくなむ」と聞えたまひて、
院にも、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまで見えたまひし御容貌を、忘れがたう 思しおき ければ、
あぢきなきすき心にまかせて、さるまじき名をも流し憂きものに 思ひおか れはべりにしをなん、世にいとほしく思ひたまふる。
いまはとなりての際に、この齋宮の御事をなむものせられしかば、さも 聞きおき 、心にも残すまじうこそはさすがに見おきたまひけめと…
…さも聞きおき、心にも残すまじうこそはさすがに 見おき たまひけめと思ひたまふるにも、忍びがたう。
「見よと思ひたまひてこそ しおか せたまひけめ。などてか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。…」
かかるほどに、かの家主大式になりぬ。むすめどもあるべきさまに 見おき て、下りなむとす。
「 見たてまつりお かんがいと心苦しきを」とて、そそのかしきこゆれど、
「たゆまじき… 故ままの のたまひおき しこともありしかば、かひなき身なりとも見はててむとこそ思ひつれ。
大式の北の方の 奉りおき し御衣どもをも、心ゆかず思されしゆかりに、見入れたまはざりけるを、
あはれもつらさも忘れぬふしと 思しおか れたる人なれば、をりをりはなほのたまひ動かしけり。
子どもに、ただこの君の御事をのみ 言ひおき て、「よろづのこと、…」とのみ明け暮れ言ひけり。
いかでか、この人の御ために 残しおく 魂もがな、わが子どもの心も知らぬを、とうしろめたう悲しきことに言ひ思へど、

	「あはれに <u>のたまひおき</u> し、数ならずとも、思し疎までのたまはせよ」など追従し寄りて、
	今日になりて思しとどむべきことにしあらねば、事どもあるべきさまに <u>のたまひおきて</u> 、…
	あなたにも心して、果ての巻は心ことにすぐれたるを <u>選りおきた</u> まへるに、かかるいみじきものの上手の、…
	いかに <u>思しおき</u> つるにかといと知りがたし。
	西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまに <u>しおか</u> せたまふ。
	普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧をばさるものにて、またまた加へ行はせたまふべきことなど <u>定めおか</u> せたまふ。
	「さらばこの若君を。…対に <u>聞きおきて</u> 常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、袴着のことなども人知れぬさまならずしなさんとなむ思ふ」
	<u>こしらへおきて</u> 、「明日帰り来む」と口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちかけて、中將の君して聞こえたまへり。
	かばかりもうちとけたまふことなく、氣高き御もてなしを <u>聞きおきた</u> れば、近きほどにまじらひては、…
	これのみぞ、うしろめたくむすばほれたることに <u>思しおか</u> るべき心地したまひける。
	まことに心深きことどもの限りを <u>しおか</u> せたまへれば、何とわくまじき山伏などまで惜しみきこゆ。
	「…すさまじき例に <u>言ひおき</u> けむ人の心浅さよ」とて、御簾捲き上げさせたまふ。
	「女の中には、太政大臣の山里に <u>籠めおきた</u> まへる人こそ、いと上手と聞きはべれ。…」
	「頼もしき御蔭に、幼き者を <u>奉りおきて</u> 、みづからをばなかなか幼くより見たまへもつかず、…」
	宮人をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、つらしと <u>思ひおきた</u> まふことこそはありけめ、といとほしくもからくも思しけるを、
	丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と <u>思しおきて</u> させたまへり。
	ただこの姫君京に率てたてまつるべきことを思へ。わが身の孝をば、な思ひそ」となむ <u>言ひおき</u> ける。
	九条に、昔知れりける人の残りたりけるをとぶらひ出でて、その宿を <u>占めおきて</u> 、都の内といへど、…
	「…『いかにならせたまひにけん』と聞こえ出づるを、 <u>聞こしめしおきて</u> 、…」
	いといたくほほ笑みたまひて、とみにも <u>うち置</u> きたまはねば、上、何ごとならむと見おこせたまへり。
	「…昔の懸想のをかしきいどみには、あだ人といふ五文字をやすめ所に <u>うち置</u> きて、言の葉のつづき、たよりある心地すべかめり」
	常陸の親王の <u>書きおきた</u> まへりける紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか、
	ただ心の筋を、漂はしからず <u>もてしづめおきて</u> 、なだらかならむのみなむ、めやすかるべかりける」などのたまひて、
	唐の綺のことごとしき縁さしたる褥にをかしげなる琴 <u>うちおき</u> 、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして物ごとにしめたるに、
	かのあさましかりし世の古事を、 <u>聞きおきた</u> まへるなめりと恥づかしく、
	中將などをば、すすすくしき公人にしなしてとなむ <u>思ひおきて</u> し、みづからのあざればみたるかたくなしきをもて離れよと思ひしかど、
	御琴どもの、うるはしき袋どもして <u>秘めおか</u> せたまへる、みな引き出でて、おし拭ひて、ゆるべる緒ととのへさせたまひなどす。
	「…見どころある文書きかな」など、とみにも <u>うち置</u> きたまはず。
	螢を薄きかたに、この夕つ方いと多く <u>つつみおきて</u> 、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくろふやうにて。
	…例にも引き出でつべき根に結びつけたまへれば、「今日の御返り」など <u>そそのかしおきて</u> 出でたまひぬ。
	「骨なくも聞こえおとしてけるかな。神代より世にあることを <u>記しおき</u> けるななり。日本紀などはただかたそばぞかし。…」
	…後の世にも言ひ伝へさせまほしきふしぶしを、心に籠めがたくて <u>言ひおき</u> はじめたるなり。
	仏のいとうるはしき心にて <u>説きおきた</u> まへる御法も、方便といふことありて、
	「…言葉の限りまばゆく <u>ほめおきた</u> るに、し出でたるわざ、言ひ出でたることの中に、…」
	いかで人にもことわらせたてまつらむと <u>思ひおき</u> し忘れがたくて、正身ばかりには、おろかならぬあはれを尽くし見せて、
	ただ幼きどちの <u>結びおき</u> けん心も解けず、歳月隔てたまふ心むけのつらきなり。
	大和琴とはかなく見せて、際もなく <u>しおきた</u> ることなり。
	かくて <u>籠めおきた</u> れば、まことにかしづくべき心あるかと人の言ひなすなるもねたし、
	大輔の君といふ、持て参りて、ひき解きて御覽ぜさす。女御ほほ笑みて <u>うち置</u> かせたまへるを、…

	心にかけて恋しと思ふ人の御事は さしおか れて、ありつる御面影の忘れぬを、
	とかく聞こえ慰めて、人召して所どころ繕はすべきよしなど 言ひおき て、南の殿に参りたまへれば、まだ御格子も参らず。
	なほ心解けず 思ひおき たる気色してのたまへば、心憂くて切にも聞こえたまはず。
	「…つひに御あたり離るまじき頼みに思ひ慰めたる気色など見はべるも、いとうらやましくねたきに、あはれとだに 思しおけ よ」
	かの母君のあはれに 言ひおき しことの忘れざりしかば、
	「…棄てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕の筋に領ぜんと 思しおき つる、…」
	「…さはやかにふと渡したてまつりてむと思しのたまふなん、かへりていと軽々しき。まことに 思しおき つることにやあらむ、…」
	御調度どもは、さるべきはみな したためおき などするまゝに、上下泣き騒ぎたるは、いとゆゆしく見ゆ。
	…口にまかせてなおとしめたまひそ。賢き人は、 思ひおき 、かかる報いもがなと思ふことこそはものせられけめ。
	大将殿の、おほかたのとぶらひ何ごとをもくはしう 思しおき て、君達をば変らず思ひかしづきたまへば、えしもかけ離れたまはず、
	御簾あげわたして、脇息の上に草子 うち置き 、端近くうち乱れて、筆のしりくはへて、思ひめぐらしたまへるさま、飽く世なくめでたし
	あやしと うち置かれ ず、かたぶきつつ見ゐたまへり。
	「過ぎにし御おもむけも、頼みきこえさすべきさまに うけたまはりおく ことはべりしかど、ゆるしなき御気色に憚りつつなん」と聞こえたまふ。
	あまたの御遺言ありし中に、この院の御事、今の内裏の御事なむ、とりわきて のたまひおき しを、
	内裏の御事は、かの御遺言違へず 仕うまつりおき てしかば、かく末の世の明らけき君として、来し方の御面をも起こしたまふ、
	めざましかるべき思ひはありとも、なほやがて親さまに定めたるにて、さもや 譲りおき きこえましなども思しめすべし。
	すべてあしくもよくも、さるべき人の心に ゆるしおき たるまゝにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、…
	この宮の御事、かく思しわづらふさまは、さきざきもみな 聞きおき たまへれば、
	女たちをも、よそに聞き放ちたてまつるべきにもあらねど、またかくとりわきて 聞きおき たてまつりてむをば、ことにこそは後見きこえめと思ふを、
	あえものけしうはあらじと譲りきこえたまへるほど、げに面だたしき簪なれば、御返りも、昔のあはれをば さしおき て、
	「…かくても残りの齢なくは行ひの心ざしもかなふまじけれど、まづ仮にて ものどめおき て、念仏をだにと思ひはべる。…」
	…天の下の頼みどころに仰ぎきこえさするを、ましてこのことと 聞こえおか せたまはんことは、…
	よろしきに思し選びて、忍びてさるべき御あづかりを 定めおか せたまふべきになむはべなる」と奏したまふ。
	…また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱く なりおき にけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし、…
	ただ同じ世の中に聞きたてまつらましかばと、わが身までのことは うちおき 、あたらしく悲しかりしありさまぞかし、
	昔よりつらき御心をこころ思ひつめつる年ごろのはてに、あはれに悲しき御事を さしおき て、いかなる昔語をか聞こえむ、
	いと若やかなる御ふるまひを、心ながらもゆるさぬことに思しながら、関守の固からぬたゆみにや、いよく 語らひおき て出でたまふ。
	我より上の人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、 見えおき たてまつりたるばかりこそあらめなど思ひつづけられて、…
	…かかる人ありとばかりは、ほの 聞きおき たまへれば、なつかしくもてなしたまへり。
	この家をば寺になし、あたりの田などやうのものはみなその寺のことに しおき て、…
	この国の奥の郡に人も通ひがたく深き山あるを年ごろも 占めおき ながら、…
	…六時の勤めにも、ただ御事を心にかけて、蓮の上の露の願ひをば さしおき てなむ、念じたてまつりし。
	山をば広き海に 浮かべおき て、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべし。
	命終はらむ月日もさらにな知ろしめしそ。いにしへより人の 染めおき ける藤衣にも何かやつれたまふ。
	若きどち頼みならひて、おのおのはまたなく 契りおき てければ、かたみにいと深くこそ頼みはべしか。
	「昨日も、大殿の君の、あなたにありと 見おき たまひてしを、にはかに這ひ隠れたらむも軽々しきやうなるべし。
	「思ふさまにかなひはてさせたまふまでは とり隠しておき てはべるべけれど、世の中定めがたければ、うしろめたさになむ。…」
	なほうつし心失せずはべる世になむ、はかなきことをも 聞こえさせおく べくはべりけると思ひはべりて。
	かばかりと 見たてまつりおき つれば、みづからも世を背きはべなむと思うたまへなりゆけば、

	「…また、まだしき願などはべりけるを、御心にも知らせたてまつるべきをりあらば、 御覧じおく べくやとてはべるを、…
	…この宮を父帝のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなどくはしく 見たてまつりおきて 、…
	聞こしめしおきて 、桐壺の御方より伝へて聞こえさせたまひければ、まゐらせたまへり。
	衛門督は、尋ねんと思したりきと御気色を 見おきて 、日ごろ経て参りたまへり。
	冷泉院の後は、ゆゑなくて、あながちにかく しおきた まへる御心を思すに、いよいよ六條院の御事を、年月にそへて、限りなく思ひきこえたまへり。
	ひおく霜はげにいちじるき神のしるしか 次々、数知らず多かりけるを、何せむにかは 聞きおかむ 。
	高麗の青地の錦の端さしたる褥に、まほにもみで、琵琶を うち置きて 、ただけしきばかり弾きかけて、たをやかにつかひなしたる撥のもてなし、
	女は春をあはれぶと古き人の 言ひおき はべりける、げにさなむはべりける。
	などか、なのめにて、なほこの道を通はし知るばかりの端をば、 知りおか ざらむ。
	まだ宮幼くおはしましし時より、いときよらになむおはします、帝のかしづきたてまつりたまふさまなど、 聞きおきた てまつりて、…
	「いで、あなおほけな。それをそれと さしおきた てまつりたまひて、また、いかやうに限りなき御心ならむ」
	「いまはのとちめにもこそあれ。今さらにおろかなるさまを 見えおか れじとてなむ。
	契りおかむ この世ならでも蓮葉に玉ある露の心へだつな
	「かくなやましくせさせたまふを、 見おき たてまつりたまひて、今は、おこたりはてたまひにたる御あつかひに、心を入れたまへること」
	「いと幼き御心ばへを 見おき たまひて、いたくはうしろめたがりきこえたまふなりけりと、思ひあはせたてまつれば、
	御子たち数そひたまふめれば、みづからの世だにのどけくはと 見おき つべし。
	御心の中、限りなううしろやすく 譲りおき し御事を承けとりたまひて、
	おほかたの後見には、なほ頼まれぬべき御おきてなるを、ただ 預けおき たてまつりししるしには思ひなして、
	わがおはします世に、さる方にても、うしろめたからず 聞きおき 、また、かの大殿も、さ言ふとも、いとおろかにはよも思ひ放ちたまはじ、
	「かくても、たひらかにて、同じうは念誦をも勤めたまへ」と 聞こえおき たまひて、明けはてぬるに急ぎて出でさせたまひぬ。
	さるべきついではべらむをりには、御用意加へたまへとて、 聞こえおく になむ。
	人知れずはかなき形見ばかりを とどめおきて 、さばかり思ひあがりおやすけたりし身を、心もて失ひつるよ、とあはれに惜しければ、
	いまはのほどにも、 のたまひおく ことはべりしかば、おろかならずなむ。
	いまはとてこれかれに つけおき たまひける御遺言のあはれなるになむ、うきにもうれしき瀬はまじりはべりける」
	「…ひき違ふこともはべりぬべき世なれば、うしろめたくこそ」など、まほにはあらねど、うちに ほはしおきて 出でたまふ。
	「これになむ、まことに古きことも伝はるべく 聞きおき はべりしを。…」
	亡からむ後のことども 言ひおき はべりし中に、しかじかなん深くかしこまり申すよしを、返す返すものしはべりしかば、
	はちす葉をおなじ台と 契りおき て露のわかるる今日ぞ悲しき と御硯にさし濡らして、香染なる御扇に書きつけたまへり。
	あなたさまの物はみなかの宮に運びわたし、こまかにいかめしう しおか せたまふ。
	常に夏冬といときよらに しおき たまへれば、香の御唐櫃より取る出で奉りたまふ。
	「たましひをつれなき袖に とどめおきて わが心からまどはるるかな…」
	「げにこそ闇にまどへる心地すれ。なほ聞こえ慰めたまひて、いささかの御返りもあらばなむ」などの たまひおきて …、帰りたまひぬ。
	なほかく隔てたまへることと、露のあはれをば さしおきて 、ただならず嘆きつつおはす。
	いとこまやかに書いて、 うち置きて うそぶきたまふ。
	「今さらに若々しの御まじらひや。かかる人を、ここかしこに 落としおき たまひて、など寝殿の御まじらひは。
	「契りあれや君を心にと とどめおきて あはれと思ふうらめしと聞く なほえ思し放たじ」とある御文を、
	少将は、人々物語して、「…年ごろのしるしあらはれはべる心地なむしはべる」など、 気色ばみおきて 出でたまひぬ。
	結びおく 契りは絶えじおほかたの残りすくなきみのりなりとも
	御わざのことども、はかばかしく のたまひおき つることなかりければ、大将の君なむとりもちて仕うまつりたまひける。

そのおそくとき花の心をよく分きて、いろいろを尽くし <u>植ゑおき</u> たまひしかば、時を忘れずにほひ満ちたるに、
いとかくあらぬさまに思しほれたる御気色の心苦しさに、身の上は <u>さしおか</u> れて、涙ぐまれたまふ。
「何ばかり、世の常ならぬことをかはものせん。かの、 <u>心ざしおか</u> れたる極楽の曼荼羅など、このたびなん供養すべき。…」
「…経などもあまたありけるを、なにがし僧都みなその心くはしく <u>聞きおき</u> たなれば、また加へてすべきことどもも、かの僧都の言はむものすべき」
かの須磨のころほひ、所どころより奉りたま引けるもある中に、御手なるは、ことに結びあはせてぞありける。みづから <u>しおき</u> たまひけることなれど、…
千代の春見るべき花といのり <u>おき</u> てわが身ぞ雪とともにふりぬる 人々多く詠みおきたれど漏らしつ。
千代の春見るべき花といのり <u>おき</u> てわが身ぞ雪とともにふりぬる 人々多く <u>詠みおき</u> たれど漏らしつ。
「末に生まれたまひて、心苦しう、おとなしうもえ <u>見おか</u> ぬこと」と、院の思しのたまひしを思ひ出できこえたまひつつ、
この花を奉れば、うち笑みて、「恨みて後ならまししかば」とて、 <u>うちも置かず</u> 御覧ず。
これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語り <u>しおき</u> たるは、紫のゆかりにも似ざめれど、
亡せたまひなむ後のことども <u>書きおき</u> たまへる御処分の文どもにも、中宮の御次に加へたてまつりたまへれば、
内裏にも、かならず宮仕の本意深きよしを大臣の <u>奏しおき</u> たまひければ、おとなびたまひぬらむ年月を推しはからせたまひて仰せ言絶えずあれど、…
竹河に夜を更かさじといそぎしもいかなるふしを <u>思ひおか</u> まし
御調度などは、そこら <u>しおか</u> せたまへれば、人々の装束、何くれのはかなきことをぞいそぎたまふ。
内裏には、故大臣の <u>心ざしおき</u> たまへるさまことなりしを、かくひき違へたる御宮仕を、いかなるにかと思して、
姉君は、容貌など名高うをかしげなりと <u>聞こしめしおき</u> たりけるを、ひきかへたまへるを、なま心ゆかぬやうなれど、…
御せうとの君たちも、「さればよ。あしうやは <u>聞こえおき</u> ける」といどど申したまふ。
ただ一言なん宮に <u>聞こえおき</u> たまひければ、前の世の契りもつらきをりふしなれど、
今は限りになりたまひにし御病の末つ方に召し寄せて、いささか <u>のたまひおく</u> ことなんはべりしを、
かたはし <u>聞こえおき</u> つるやうに、今よりは御簾の前も心やすく思しゆるすべくなん。
御山籠りはてはべらん日数も <u>承りおき</u> て、いぶせかりし霧のまよひもはるけはべらん。
今はのとぢめになりたまひて、いささか、 <u>のたまひおく</u> ことのはべりしを、かかる身には置き所なく、
…一ところ一ところ世に住みつきたまふよすがあらば、それを見ゆづる方に <u>慰めおく</u> べきを、さまで深き心にたづねきこゆる一もなし。
かの老人をばあはれなるものに <u>思ひおき</u> て、いちじるきさまならず、とかく紛らはしつつ、心寄せとぶらひたまふ。
「一言にても <u>うけたまはりおき</u> てしかば、さらに思ひたまへ愈るまじくなん。
阿闍梨、年ごろ <u>契りおき</u> たまひけるままだ、後の御事もよろづに仕うまつる。
…いますこしおとなびまさりて、よしづきたる書きざまなどを、いづれかいづれならむと <u>うちも置かず</u> 御覧じつつ、…
うしろめたげにのみ <u>思しおく</u> めりし亡き御魂にさへ瑕やつけたてまつらん、となべていとつつましう恐ろしうて聞こえたまはず。
いと恥づかしげなめる御心どもには <u>聞きおき</u> たまへらむかしと推しはからるるが、
「…あはれなりし御一言を <u>うけたまはりおき</u> しさまなど、事のついでにもや漏らしきこえたりけん、…」
おほかたかやうに仕うまつるべく、 <u>仰せおき</u> て出でたまひぬ。
こなたに通ふ障子の端の方に、掛金したる所に、穴のすこしあきたるを <u>見おき</u> たまへりければ、外に立てたる屏風をひきやりて見たまふ。
行く末のあらましごとにとりまぜて、 <u>のたまひおく</u> こともなかりしかば、
なほかかるさまにて、世づきたる方を思ひ絶ゆべく <u>思しおき</u> てけるとなむ思ひあはせはべれば、ともかくも聞こえん方なくて。
「あはれなる御一言を <u>聞きおき</u> 、露の世にかかづらはむ限りは聞こえ通はむの心あれば、いづ方にも見えたてまつらむ、
内には、人々近くなどの <u>たまひおき</u> つれど、
客人は、弁のおもと呼び出でたまひて、こまかに <u>語らひおき</u> 、御消息すくすくしく聞こえおき出でたまひぬ。
客人は、弁のおもと呼び出でたまひて、こまかに語らひおき、御消息すくすくしく <u>聞こえおき</u> 出でたまひぬ。
「昔の御おもむけも、世の中をかく心細くて過ぐしはつとも、なかなか人笑へに軽々しき心つかふななどの <u>たまひおき</u> しを、…」

人に似ぬ御心寄せとのみのたまひわたりしを <u>聞きおき</u> 、今となりては、よろづに残りなく頼みきこえて、…
この殿のさやうなる心ばへものしたまはましかば、一ところをうしろやすく <u>見おき</u> たてまつりて、いかにうれしからましと、…
「…心ざし深くありがたげに聞こえたまふを、あながちにもて離れさせたまうて、 <u>思しおき</u> つるやうに行ひの本意を遂げたまふとも、…」
棄てがたく <u>落しおき</u> たてまつりたまへりけん心苦しさを思ひきこゆる方こそ、また、ひたぶるに、身をもえ思ひ棄つまじけれ。
「…よし、かくをこがましき身の上、また、人にだに漏らしたまふな」と <u>怨じおきて</u> 、例よりも急ぎ出でたまひぬ。
そのかひなく、かくつれなからむもいとほしく、情なきものに <u>思ひおかれて</u> 、いよいよはじめの思ひかなひがたくやあらん、
君たち、なまわづらはしく聞きたまへど、移ろふ方異に <u>にははしおきて</u> しかばと姫宮思す。
をかしくもいとほしくもおぼえて、内々に心も知らざりける、 <u>恨みおかれん</u> も、罪避りどころなき心地すべければ、
…もし世の中移りて、帝、後の <u>思しおき</u> つるまにもおはしまさば、人より高きさまにこそなさめなど、ただ今は、…
御帳の帷子、壁代など、三条宮造りはてて渡りたまはむ心まうけに <u>しおか</u> せたまへるを、
これこそは、かへすがへす、さる心して世を過ぐせと <u>のたまひおき</u> しは、かかることもやあらむの諫めなりけり、
「…所避りたまふに事よせて、さるべき所に移ろはしたてまつらむ」など <u>聞こえおきて</u> 、…
ほど経るにつけても恋しく、さばかりところせきまで <u>契りおき</u> たまひしを、さりとも、…
修法は、おこたりはてたまふまでと <u>のたまひおき</u> けるを、よろしくなりにけりとて、
「またもなほ、かやうにてなむ。何ごととも聞こえさせよかるべき」など <u>聞こえおきて</u> 立ちたまひぬ。
御渡りにあるべきことども、人々に <u>のたまひおく</u> 。
このわき御庄どもなどに、そのことどもものたまひ預けなど、まめやかなることどもをさへ <u>定めおき</u> たまふ。
さらば対面もありぬべけれど、しばしのほども、心細くて立ちとまりたまふを <u>見おく</u> に、いとど心もゆかずなむ。
昔の人のもて使ひたまひし、さるべき御調度どもなどは、みなこの人に <u>とどめおき</u> たまひて、
「…まして、これは、 <u>思ひおき</u> てきこゆることもかなはば、あまたもさぶらはむになどかあらん」
かへすがへすも、宮の <u>のたまひおき</u> しことに違ひて草のもとを離れにける心軽さを、恥づかしくもつらくも思ひ知りたまふ。
かねてよりならはしきこえたまふをも、ただつらき方にのみぞ <u>思ひおか</u> れたまふべき。
「…ただ、かの <u>思ひおき</u> てしさまを違へたまへるのみなん口惜しう恨めしきふしにて、…」
折りたまへる花を、扇に <u>うち置き</u> て見ゐたまへるに、
よそへてぞ見るべかりける白露の <u>ちぎりかおき</u> し朝顔の花
故宮の御忌日は、かの阿闍梨にさるべきことどもみな <u>言ひおき</u> はべりにき。
「いま、いとく参り来ん。ひとり月な見たまひそ。心そらなればいと苦し」と <u>聞こえおき</u> たまひて、なほかたはらいたければ、…
ひき開けたまへるに、継母の宮の御手なめりと見ゆれば、いますこし心やすくて、 <u>うち置き</u> たまへり。
…また小さき台二つに、華足の皿どもいまめかしくせさせたまひて、餅まゐらせたまへり。めづらしからぬこと <u>書きおく</u> こそ憎けれ。
三条殿腹の大君を、春宮に参らせたまへるよりも、この御事をば、ことに <u>思ひおき</u> てきこえたまへるも、宮の御おぼえありさまからなめり。
いとあはれにて、をかしやかなることなき御文を、 <u>うちも置</u> かずひき返しひき返し見ゐたまへり。
「例の、たたむ月の法事の料に、白きものどもやあらむ。染めたるなどは、今はわざとも <u>しおかぬ</u> を、急ぎてこそせさせめ」とのたまへば、
「さやうなるをりもおぼえはべらぬものを、いとかしきことに <u>思しおき</u> てのたまはするや。…」
宮の忍びてものなどのたまひけん人の忍ぶ草 <u>摘みおき</u> たりけるなるべしと見知りぬ。
かの御世に睦ましく <u>仕うまつりおき</u> ししるしのおのづからはべりけると、うれしくも悲しくも思ひたまへられはべる。
「…かくなん言ひしと伝へたまへ」などばかり <u>のたまひおく</u> 。
荒れはつる朽木のもとをやどり木と <u>思ひおき</u> けるほどの悲しさ
何ごととも浅くなりたる世はものうしや」とて、御琴 <u>さし置き</u> たまふを、口惜しと思して、
女御の <u>しおき</u> たまへることをばさるものにて、作物所、さるべき受領どもなど、とりどりに仕うまつることどいと限りなし。

…思したちぬること、すがすがしくおはします御心にて、来し方の例なきまで同じくはもてなさんと 思ひおき つるなめり。
故朱雀院の、とりわきて、この尼宮の御事をば 聞こえおか せたまひしかば、
されど、言ふかひなくなりたまひにし人の、世の常のありさまにて、かやうならむ人をも とどめおき たまへらましかばとのみおぼえて、
御衣の鳴れば、 脱ぎおき て、直衣、指貫のかぎりを着てぞおはする。
…こなたにも入れたるを、東国人どもにも食はせなど、事ども 行ひおき て、うち化粧じて、客人の方に来たり。
いかでうしろやすくも 見たまへ おかんと、明け暮れかなしく思うたまふるを、
いはけなく年足らぬほどにおはすとも、真実のやむごとなく 思ひおき てたまへらんをこそ本意かなふにはせめ、
さりとてもえたへぬわざなりければ、むげにその方に 思ひおき てたまへりし身だに、かく心より外にながらふれば、まいていとあるまじき御事なり。
宮は内裏にとまりたまひぬるを 見おきて 、ただならずおはしたるなめり。
「…何ごとをもこがましきまでん」と、語らひきこえおきて出でたまひぬるに、
「経などを讀みて、功德のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやむごとなきことに、仏の たまひおき けるもことわりなりや。…」
「…何ごとをも教へさせたまへ」など 聞こえおきて 。
「…うしろやすくと、かへすがへす 言ひおき つるものを」と、いとほしく思せど、いかが聞こえむ、
人の思すらんこともはしたなくなりて、いみじう恨み 契りおき て出でたまひぬ。
「あやしく心幼げなる人を 参らせおきて 、うしろやすくは頼みきこえさせながら、魑のはべらむやうなる心地のしはべれば、…」
「…おのづからともかくも仕うまつりてん」と 言ひおきて 、みづからは帰りなんとす。
「なほよきをりななるを」と例ならず強ひて、「明後日ばかり車奉らん。その旅の所 尋ねおき たまへ。ゆめ、をこがましうひがわざすまじくを」
君も乳母も、めでたしと 見おき きこえてし人の御さまなれば、忘れぬさまにのたまふらむもあはれなれど、
まだなりあはぬ仏の御飾りなど 見たまへおきて 、今日よろしき日なりければ、急ぎものしはべりて、乱り心地のなやましきに、
あさはかならぬ方に心とどめて人の 隠しおき たまへる人を、もの言ひさがなく聞こえ出でたらんにも、
されど、いまいとよくもてなさんとす、山里の慰めと 思ひおき てし心あるを、すこし日数も経ぬべきことどもつくり出でて、のどやかに行きても見む、
さて、しばしは人の知るまじき住み所して、やうやう、さるかたにかの心をも のどめおき 、わがためにも、人のもどきあるまじく、
人の形見とてさるまじき所に旅寝したまふらむことと思ひつるは、かやうの人 隠しおき たまへるなるべしと思し得ることもありて、
御風邪よくつくろはせたまへ」など、まめやかに 聞こえおきて 出でたまひぬ。
つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて とあるを、 うちも置かず 見たまふ。
「なめしともや思さんと、つつましながら、さすがに年経ぬる人のはべるを、あやしき所に 棄ておきて 、いみじくもの思ふなるが心苦しさに、…」
「…かく尋ねきこえさせたまひしも、おぼろけならじと 聞こえおき はべりにし、浮きたることにやははべりける」など言ふ。
「…隠しひそめて、さる心したまへ」など、思ひいたらぬことなく 言ひおきて 、母君「かしこにわづらひはべる人も、おぼつかなし」とて帰るを、
我すさまじく思ひなりて 棄ておき たらば、かならずかの宮の呼び取りたまひてむ、
「…落ちとどまりて、人の御ためにもいとほしからむ。さかしらにこれを 取りおき けるよなど漏り聞きたまはんこそ恥づかしけれ」
かの殿にも、今はの気色見せたてまつらまほしけれど、所どころに 書きおきて 、離れぬ御仲なれば、つひに聞きあはせたまはんこといとうかるべし、
持て来たるに書きつけて、「今宵はえ帰るまじ」と言へば、ものの枝に 結びつけておき つ。
「身を失ひてばや」など泣き入りたまひしをりをりのありさま、 書きおき たまへる文をも見るに、
人々二人して、車寄せさせて、御座ども、け近う使ひたまひし御調度ども、みなながら 脱ぎおき たまへる御衾などやうのものをとり入れて、
思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、かく 放ちおき たるに心やすくて、人も言ひ犯したまふなりけむかし、と思ふにも、
「…あいなきわざになむ。よくつつしませおはしませ」など 聞こえおきて 、出でたまひぬ。
人にうち出でたまふことは難く、ものづつみをのみしたまひしけにや、 のたまひおく こともはべらず。
今より後、何ごとにつけても、かならず忘れきこえじ。また、さやうにを人知れず 思ひおき たまへ。
帝まで聞こしめして、おろかにもあらざりける人を、宮にかしこまりきこえて 隠しおき たまへりけるを、いとほしと思しける。

	心づよく割りて、手ごとに持たり。頭に <u>うち置き</u> 、胸にさし当てなど、さまあしうする人もあるべし。
	急ぎ行きて見るに、人も寄りつかでぞ <u>棄ておき</u> たりける。
	宮と聞こえし人のしたまふとおぼえしほどより心地まどひにけるなめり、知らぬ所に <u>据ゑおきて</u> 、この男は消え失せぬと見しを、…
	僧都は、「今は、かばかりにて、いたはりやめたてまつりたまへ」と <u>言ひおきて</u> 、登りたまひぬ。
	めづらしからぬも見どころなき心地して、 <u>うち置</u> かれけんかし。
	…今日明日とも知りがたきに、いかでうしろやすく <u>見おき</u> たてまつらむと、よろづに思ひたまへてこそ、仏にも祈りきこえつれ」
	この御前なる人も、姉君の伝へに、あやしくて亡せたる人とは <u>聞きおき</u> たれば、それにやあらんとは思ひけれど、定めなきことなり、
	「御法服あたらしくしたまへ」とて、綾、羅、絹などいふもの、 <u>奉りおき</u> たまふ。
	「…まめやかなるさまに思し忘れずとはせたまはん、いとうれしうこそ <u>思ひたまへおかめ</u> 。…」
	あはれにもをかしくも聞くに、身の上も、この世のことともおぼえず。とどこほることなく <u>語りおきて</u> 出でぬ。
	はかなき世のありさまとり重ねて思ひたまへしに、ことさら道心をおこすべく <u>造りおき</u> たりける聖の住み処となんおぼえはべりし」
	…かならず思し出でて、思ひ入りにけん道も妨げたまひてんかし、さて、さなのたまひそなど <u>聞こえおき</u> たまひければや、
	「親の死にかへるをば <u>さしおきて</u> 、もてあつかひ嘆きてなんはべりし。
	わが御心の、思ひ寄らぬ限なく <u>落としおき</u> たまへりしならひにとぞ、

夜の寝覚め	形見どもをうらやみなく とどめおきて 、競ひかくれたまひし後、
	わりなくこしらへわびたまふに、とりもあへず天の戸あくる気色なるに、昼さへかくてあるべきならねば、逢瀬の山を 頼めおきて 、…立ち出でたまふ。
	「…世のつねの懸想には違ひでもあるかな」と思ふにも、涙ぐまれて、書く文も うち置かれて 、とばかりながめたまふ。
	上帰らせたまふ御送り しおかせたまひて 、
	仏あらはしたてまつりて御祈りすべきよし、頼もしげに 言ひおきて 帰りたまひぬるに、胸の隙をあけて、さりともと頼み思ふ。
	局の後見にはべる人も、親のあらましごとを 聞きおきた れば、
	…つひに聞きたまひてむものから、我しも忍びこめて、この御心に 恨みおか れたてまつりて、おぼし捨てられたてまつりなむ」
	法性寺の僧都に、限りある命の程なりとも、このたびは助かるべきよし祈り申すべく、泣く泣く のたまひおき 、おぼつかなく悲しかるべきことをおぼせど、…
	宰相の君は、「これに孝ずると思ひて、ここにさぶらひて、扱ひきこえよ」とて、 とどめおきた まふ。
	心あるどちは念じ思ひて、夜夜中のことも、御堂にては恐ろしかるべければ、おはする顔に しおきて 、さるべき女房、侍は、みなさぶらはせて、…
	中宮には、かくと、まづきこえたまひたりければ、「 聞きおき しより、心にかかりて、いかにと思ひつることの、うれしく、思ふさまにも」と、よろこびおぼしたり。
	やがて御前に臥せさせたまへるを、大納言は 見おきた まひて、乳母の局におはして、少将に、あはれなることども尽きせずのたまふ。
	このこと聞きて後は、わりなく、おぼし澄ます蓮の上の御願ひも、 さしおか れ、
	ただ、我、ともかくももてなしたてで、はらからを頼もしきものに思ひて、 譲りおき ける怠りのみこそ、罪去りどころなくうしろめたけれ。
	さばかりこそ、この君のことを、泣く泣く誰にも 言ひおき しかど、我がある前に言ひ聞かせじ、聞くとところありと、いみじき過ちありとも、思ひ憚る人やありける。
	「中將のとは見えずこそ」とて うち置 きたまへるを、
	いと近くなりぬる御いそぎのことどもばかりは、大納言たち、中納言、帥などに、くはしく きこえおきて 、
	御硯の蓋に、小さき松ども うち置 きつつ、青き唐の薄様に御文書きたまひけるを、見たてまつりたまへば、
	恥ぢしらひて うち置 きたまへるを、
	うしろめたからぬ心ばへを 見おきて 、いと労ありし人の御心ばへなれば、『むなしくは、もてなしたまはじ』と、頼み思ひたまふ
	故殿の心寄せ語らひたまひし藤典侍といふ人も、かたよりつかうまつるべく 思ひお きたり。
	「故大臣の、病のはじめに、御事をなむ 言ひおき しかば、昔よりの心ざしに添へて、いかでと思ふ心深きを、
	「…人に気色見せて、この帳のうちに入れたてまつれよ」と 言ひおか せたまひて、
	「今はなほ、ためらひて起き居、さはやかにもてないたまへ。さおはすめりと 見おきて こそ、異方にはべらむも心やすからめ。…」
	「かくてのみ臥いためひたるを 見おきて は、静心なく、わりなかるべきを。苦しう思ひ乱れはべり」
	人がらの、限りなくのみ なりおき にければ、何の情もなく、ひたぶるに思ひわびたるしも、たとへむものなきままに、
	いみじう心づくしに、物思ひわびさせむと、あやにくに 結びおき けむつらさも、疎ましからぬにもあらず。
	殿はた、「疾くも出だいてばや」とおぼせど、昔より 聞きおか せたまへることあるにより、かたはらいたくて言交ぜたまひにくけれど、
	思ひ寄らぬことなく、よろづを 言ひおき 、少将を召して、
	よろづに きこえお きたまひて、出でたまひぬれば、紛るることなきままに、
	「かく聞きながらおどろきて参らざらむも、いとあやしかるべし。さりとして、 おびえお きて、程なく立ち帰りなむを、我にてことわりと思ひ許すべきことならずかし」
	よろづに、身のことわりをも人のつらさをも、いみじく 言ひおきて 、出でたまふ空もなし。
	ことと慰むこともやと、あやしきまでまめに なりおき はべりにし心を改めて、朱雀院の宮の御事も思ひ寄りにしを、
	それに心の休まるやうはなきものから、昔の人には深う 恨みおか れ、
	御前にもおろかになめげなるものに きこしめしおか れはべりし愁へ、
	「…今日より、はかばかしからぬ念誦のついでには、極楽の望みは さしおか れ、まづ心にかからせたまはむずるが、この世の絆強くなりぬる心地しはべるかな」
	入道殿にもさばかり 申しおき 、かの御みづからも、思ひたつづくもあらぬ身の絆、ところせかべきほどと知りたまひしにかば、
	憂かりける契りはかけも離れなでなごてこの世を 結びおき けむ
	暮れゆくも知られたまふべくもあらねば、大納言、中納言、夜さりの御渡りのこと 営みお きて、…
	姫君の御贈物に、いとも深く 籠めお きたまへりける唐の琴など、この折にぞ引き出でたまひける。
	殿の御膝にかき靡かされて、筆に任せて書きて うち置 きたまへる墨付き、筆の流れ、
	おぼつかなくて隔たる日ごろのことなどをも さしお きて、すずろなることを言ひ出でて恨みのたまふ。
狭衣物語	「…いかで一枝御覧ぜさせてしがな」とて、 うち置 きたまふを、宮少し起き上がりたまひて、見おこせたまへるまみ、
	いとかくしも し置 きけん産霊神さへ恨めしくぞ思さる。
	薮高く上げわたして、人々の透影あまたして、童べのをかしき、あまた多かり。 見お きはべるよし申せば、何人ならん、見知りたりけるにや、と思せど、
	公も日記の御唐櫃開けさせたまひて、天稚御子のこと、中將の作り交したまへる文ども、 書き置 かせたまへり。

たださばかりの御けしきにてその夜の面目は限りなかりきかし。なかなかること 言ひおく ぞ、えもあざれたりとぞ思しめさん。
暮れぬれば、内裏へ参りたまふついでに、かの蓬の門を尋ねさせたまへば、 見おき し隨身、「そこそこ」と申す。
「いづくなりとも、おはせん所へこそは。さらでは、いかが 見おき たまはんも、安らかにやは思すべき。思ひかけぬありさまは、いかにもあるべきことならねば」
「 見おき たてまつるべきにはあらず。さりとて、また、かかる人さへおはすめれば、いかにしてか具したてまつらん。…」
「しばしのほどだにあるべくもあらぬを、まいて、いつを限りにてか 留めおか ん。かくよろづにところせき身を、いかにも具しならひたまひてこそ、いづくへも」
「…おはしたらんに、よくよく案内申せ、と 言ひ置き はべりぬ」と言ふも、
それは さしおきて 、隣の人々に問へば、確かなること言ふもなければ、参りて、しかじかなん申す。
かくことにもあらぬみづからの心にも、あはれにもかたじけなくも 思ひおき 聞こえん絆になりたまはんよ、
「同じ心にてこそ」など 申し置き しが、常に見、睦びきこゆれば、折々に局のわたりに立ち寄りなどしたまひけり。
「…やがてと出で立ちはべりつる、見えぬ山路も、なほ、明朝は、語らひはべりし人に、 言ひ置く べき事も、いとど数添ふわざに」などやうに、
また大宮なども、ことの外には、よも便なしなども思されじと思ひたまへれば」とて うち置く を、あるかなきかの御心地にも、これをさへ散らして、
「いとをかしうはべるめる。聞こえさせそこなひてん、口惜しうや」とて うち置きた まへば、
「まことにあさましや。いかに」とせちに申したまへば、見るともなくて うち置かせ たまへば、
女宮たちの御事をば、あはれにうしろめたきかた添ひて思しめせば、大臣にも返す返す 聞こえおき たまひける。
かぎりなることにて東宮居させたまひなど 見おき させたまひて帰らせたまふ御心地、さらにかかる御身のめでたさとも思されずぞありける。
持ちたまへる扇の うち置 かれたりけるに、
墨黒く広がり騒ぎて、まれまれ続きたる所は彫り深く、 分け置 かれたる文字やう、
いとめづらかに、かかるやうもありけりと目留りて、 うち置かん とも思されず。
御硯召し寄せたるついでに、ひき解きて うち置き たり。
思しわびて、ただ 引き結びて置 かせたまひたるを、包みて出ださせたまひつ。
されど、「あな、おぼつかな」とて、 うち置 きたまへるを、
女宮、限りなくあてなる御心といへども、前の世より産霊の神の し置 きたまへる契りなればにや、
御輿の駕輿丁、形姿まで、世の例にも 書き置かん とせさせたまひけり。
心には しめ結びおき し萩の枝をしがらみかくる鹿やなからん
ここかしこ、紛れ歩きたまひて、心安き掛金にやありけん、 放ちおき たまひけるを、知る人もなし。
大白牛車を、え思し返すまじう、思ひ取りたまひてしかば、よろづに 慰めおき たてまつりたまひて、立ち出でたまふ心地、疎かならず、
さらばいかに 思ひおき つることのありけるぞ
類なき物に思ひしめきこえたまへる御目には、珍しうさま殊にのみおぼえたまへば、 うち置 かれずまぼりたまひて、
さま殊なる御匂ひにこそならせたまひにけれと、とみに花も うち置 かれず、つくづくとまぼられて、
ありつる女御殿の御返し、御硯の上に うち置 かれたるを、取りて見たまへど、
今はまた東宮に故宮の 啓しおき たまひけることもあり、なほ、さやうなる谷の下水にはなさで、などのみ中宮より責めのたまはすれど
いかにもいかにも定めては、やがて籠り居むなど、 掟て置き たる所も侍るめり。
さりとも、まして形のやうなるありさまに 見置き ても、心安くふと見放つばかりのことは、いとありがたかるべければ、
今少し若やげにらうたげなる筋さへ添ひて、見まさりけることさへ、口惜しう、 うち置き がたう思さること限りなし。
「故宮の、ただこの君のことをのみ返す返す 言ひ置 きたまひしかど、よそながらはその心ざしの験もなきを、…」
東宮より御使参りぬと 見置 きたまひて出でたまふまに、例の細やかにうらみ続けたまひつる中に、
日に添へていと弱くなりまざりたまへど、ただ、この御事を 見置かん と、紛らはし、忍びたまひて、ことごとしからねど、
「この御返り聞こえたまへ。後ろやすく 見置 きたてまつりてのち、形をも変へ、限りの命も絶え果てんとのみこそ、思ひはべりつれど、
かなはぬ業なりければ、遂に、 見たてまつり置く こともなくてやみぬべきを、思はずなるありさまにて、
かかる十市の里に、尋ねさせたまひつべかりけりと、 見置き はべりぬるこそ、少し頼もしう。
絶え絶えにていと心細げなるは、なかなか 見置き がたけれど、長居せんも、苦しうや思されんと思せば、
「今よりは、たどたどしからぬ心地しはべりぬべかめれば、常にも」など 聞こえ置 きたまひて、出でたまふに、
せちに恋しうおぼえたまふ夕暮に、もしや慰むと、うつくしく心殊に 作り置 きたてまつりたまひて、
入りて見たまへば、ここにも念誦堂、いと尊う し置 かれて、行ひ勤めたまひける人の跡と見ゆ。
「人々、近う候ひたまへ」など 言ひ置き て、こなたざれたまふ。
泣き明かしたまへる涙の淵も、げに身を流さぬ業にやと、いみじう心苦しう、 見おき がたきを、
いそがしたまへば、いと心あわたたしき心地して、とまる人々に、よろづは 言ひ置き て、引きつくろひて参りぬ。

	「…」と、 語らひ置き て、渡りたまひぬる間にぞ、大武近う参り寄りて、御帳のかたびら引き開けて見れば、 やすく踏み分けたまへる跡ども、見えはべらざりし庭のけしきをも、 見置き がたう思ひたまへられしかばなむ。 えかうしもやと、思ふさまに思さるるにも、後ろめたくいみじきものに、 見置 いたてまつりたまひて、消え果てたまひにし人の御心のうち思し出づるに、… 「逢ふにし換へば」とかや、いとかばかりなる人にも 言ひ置か ざりけんかし、この御身に換へん命は、 纏繰にくくまれたまへる、女帝に ゆづり置き 、 いかなるべきことにかと、人知れず思すにも、かの、峰の若松とかや、 祝ひ置き たまひけん生ひ先の、まことに、かなひたまふやうあらば、いかなる心地しなん。 送り置 かれたまふなん、御ありさまの、あはれにゆかしう思しやらるれば、やがて渡らせたまへり。 思ひかけざりしわざかなと、思し続けるほどばかりは、見れども飽かぬ御ありさまを さし置 いて、 あえかに細りたまへる、いとど心苦しいあてにらうたげなることまさりたまひて、 見置き がたう思しめさるれど、暮れぬれば、帰らせたまひぬ。 御産衣や、昔の人の描きすさみたまへりし絵どもなどの、破り捨てんが惜しかりしどもを、 取り置 いたりしなり。 「かの常盤に侍りし老人の、昔、見え侍りけるあやしの反故どもを、 取り置き て候ひけるを、亡せはべりにしのち、御覧ぜさせよと、言ひ置きはべりしを、 亡せはべりにしのち、御覧ぜさせよと、 言ひ置き はべりしを、思ひたまへ出でて、御つれづれの慰みに取り出でて侍りつる。 「…なかなか、かやうに寂しき宿を思しやらんことは、かたうぞ侍れども、御心のほどを 見置き はべれば、たのもしうなん。…」 「…位を去りたまひても、ここを荒らさで、かならず住みたまへ」など、 申し置 かせたまへば、 御前の花、盛りに咲き乱れて、夕露重げに紐ときわたりたる色々、いづれとなく 見置き がたき中に、女郎花の、人の見ることや苦しからん、
とりかへばや	さりげなくもてなして若君の御方をのぞきたまへば、うちかしこまりて笛は さし置 きつ。 世に似ずをかしき御けはひなどを、わが身はさるものに 言ひお きて、この御有様をだに例の人と見たてまつらばやと、飽かずかなしう思す。 物の気などのするわざなめり、心得ぬ御気色の交じるは」と 言ひお きて、出でたまひぬ。 「御前に人さぶらへや」と 言ひお きて、御手水召して行ひたまふにも、 かつは心ゆきぬべき御住まひなる」と語り出でたるを、さる人ものしたまふとはみな 聞きお きたまへれば、 すこしばかりにて さし置 きたまへれば、取りて弾きたまへる、さらに同じ調べをふと聞き取りて、いとおそろしきまで。 「残りの音は、聞こえさせつるほだしども、このはかなき人に 教へお きはべりしに、違はず弾き取りたるとおぼえはべるは、…」 「…うしろめたくはあるまじきを」と こしらへお きて、わが御身はあなたにおはしぬ。 姫君には、たちかへりかぎりなき心ざしを 契りお きても、飽かずあはれなれば、 右の大殿には、四五日と 言ひお きたまひしに十余日まで音もせずかき籠りたまへりつるを、 あやにくならんもわりなくて、魂の限り とどめ置 きて、骸の限りながら出でぬ。 見けるをやと思ふいとほしさも さし置 かれて、いとどかき抱き寄せられて、 「しのばれんわが身と思はばいかばかり君をあはれと 思ひお かまし…」 「誰々かさぶらひたまふ。御前に人少ななり。あまた参りたまへ」など 言ひお きて、まかでたまひぬ。 中納言の御乳母子二人ばかり、さてはむげにものの方行も知るまじき若き人、童女など、率て わたしお きたりければ、いとありつきて待ち受けたり。 世を憚るやうにて歩きもせず、さまざまの祈りをせさせ、よろづに扱ひ、泣く泣く 言ひお きて、また宇治にたち帰りたまへれば、 「…うち嘆き、例ならぬ気色人に見え知られたまふな。ただある様にてを」と、かへすがへす 言ひ置 きて出でたまふ。 「…『…終の世のとまりと思しのたまひし』と告ぐる人のべりしかば、もし 申し置 きたまへることやはべりけん、うけたまはらまほしくて、…」 大方の世を心細げにのたまひて、いつばかりその折などは のたまひお かずはべりし。 かれはいま一度見てむなしくなさんことは、なほ飽かずかなしければ、かかるよしを 言ひお きて急ぎ出でたまふも、 かかるさまは憂きものにもありけるかな、かかればこそ仏も罪深きものに 思ひお きたまひけれ、 御ことにより殿はむげに不覚になりたまへりしを、 見置 きたてまつりてなん出ではべりにし。 我なただあるさまにもてなしてあれと 言ひお きて出ではべりにしかば、誰にも見え知らるることもはべらざりし身にて、 「さる気色見えば、告げに来」と 言ひ置 きたまひける人、後に走り参れるに、忍びあへで、 もし見よと思ひて 書き置 きたまへる歌などやうのものあるに思へど、さやうのねちげばみかかづらふべき人にもものしたまはず。 片時たち離れさせたまふべき心地もせねど、御身を分かちとむる心地して、かへすがへす 契りお きて、昨夜の妻戸より出でさせたまふ。 聖の宮にも、ひきかへかたはらさびしく思されんこと思しやられて、よろづ頼もしう 聞こえお きたまふ。 今は、心やすく 思ひお くことなく、鳥の音聞こえぬ山に跡絶えはべりなんことをこそ限りなく思ひたまへるに、 宮も、やがてついでに渡したてまつりて、我は一筋に 思ひお くことなくと思して、さるべき老いしらへる女房などをだにとどめたまはず、

中古日本語資料

今昔物語	如此キノ靈驗幾計ゾ。真言教盛リニ弘メ置テ、嵯峨ノ天皇ノ護持僧トシテ僧都ノ位ニテナム在マシケル。 而ル間、願ノ如、此ノ朝ニ、天台宗ヲ渡シテ弘メ置ケリ。 汝等、父母也ト云フトモ、專ニ可敬シ」ト云置テ、返ヌ。 承和十四年ト云フ年帰朝シテ、顕蜜ノ法ヲ弘メ置タリトナム語り伝ヘタルトヤ。 其後、我ノ門徒ヲ立テ、顕蜜ノ法ヲ弘メ置ク。 今昔、弘法大師、真言教諸ノ所ニ弘メ置給テ、年漸ク老ニ臨給フ程ニ、数ノ弟子ニ、皆、所々ノ寺々ヲ譲リ給テ後、 貞観二年ト云フ年、惣持院ヲ起テ舍利会ヲ始行テ、永ク此ノ山ニ伝ヘ置ク。 然ル間、我ガ門徒ヲ別ニ立テムト思フ心有テ、「我ガ門徒ノ仏法ヲ可伝置キ所カ有ル」ト所々ニ求メ行キ給フニ、 其ノ料ニハ水田二十町寄置タリ。「永ク行ム」ト云ヘリ。 如此ク見置キ、喜テ返ヌ。 然ルニ、積リ置ケル木ノ葉ヲ搔去テ見レバ、木ノ葉ノ中ニ巖迫ニーノ石ノ櫃有リ。 高野姫ノ天皇、神護景雲二年ト云フ年ノ正月ノ後七日ニ此ノ会ヲ始メ置キ給フ。此レヲ御齊会ト云フトナム語り伝ヘタルトヤ。 貞観二年ト云フ年□、惣持院ヲ起テ、舍利会ヲ始メ行ヒテ、永ク此ノ山ニ伝ヘ置ク。 其ノ橋ノ本ニ梨ノ木ヲ伐テ曳キ置テ、年来ヲ経タリ。 其ノ所ニ河有リ。秋河ト云フ。其ノ河ニ彼ノ曳キ置タル梨ノ木ヲ渡シテ、人并ニ牛馬、此レヲ踏テ渡リ往反ス。 広達、此レヲ見テ大ニ怖レテ、此レヲ踏ミ奉ケム事ヲ悔ヒ悲ムデ、自ラ淨キ所ニ曳置テ、木ニ向テ泣々ク礼拝恭敬シテ、誓ヲ立テ云ク、 …此ノ材木、其ノ河ヨリ曳上テ、此ノ寺ノ東ノ大門ノ前ニ三百余物乍ラ積テ置ケリ。 事シモ寺ヨリ運バム様ニ東ノ大門ニ積置テ後、国の司死ヌレバ、故ニ運タルガ如シ。 此レ亦希有ノ事也。此ノ木積置タル上ニ鳩□現ニ来テ居ケル。 掌ヲ合セテ一念ノ心ヲ発シテ礼ム人ハ、必ズ当来ノ弥勒ノ世ニ可生シ』ト釈迦仏説キ置キ給ヘル事ナレバ、仏ノ御法ヲ信ゼム人、此レヲ可疑キニ非ズ。 此ノ□聖人、「故僧都ノ宣ヒ置シ事ナレバ、愚ニ可思キニ非ズ」ト云テ、仏師好常ヲ勸ニ語テ令造奉タル也。 此ノ人々皆去ヌル後ニ、慶祐阿闍梨ト云フ人独リ許ヲ留メ置テ、蜜ニ語デ云ク。 病人ノ云ク、「日来世ノ中心地ヲ病ムヲ、カク出シテ棄置タル也」ト。 残レルヲバ折櫃ニ入レテ、坏ノ有ルニ湯ハ入レテ、枕上ニ取リ置テ、提ハ返シ遣ツ。 前ノ庭ニ高キ棚ヲ構テ、其ノ上ニ皆膳ヘ置テ、礼拝シテ掌ヲ合セテ次第ニ居ヌ 着タル袈裟ヲ脱テ松ノ木ノ枝ニ懸ケ置テ失ヌ。 袈裟ヲバ経原寺ノ延命禪師ト云フ僧ニ譲レル由ヲ云ヒ置ク。 而ルニ、羅刹女良賢ヲ提テ、数日ヲ経テ出ル道ヲ一時ニ人里ニ将出デ、棄置テ返リ給ヌ。 道榮此ノ言ニ随テ、塔ノ戸ヲ開テ見レバ、塔ノ内ニ多ノ経卷ヲ積置ケリ。 大嶽ヨリ始テ水飲ニ至ルマデ積置ケル経ハ、汝ヂ西塔ニ住セシ時読誦セル所ノ経也。 水飲ヨリ始テ柿ノ木ノ本マデ積置ケル経ハ、法性寺ニ住シテ読誦セル所ノ経也。 理満聖人夢ニ、我ガ死タルヲ野ニ棄置タレバ、百千万ノ狗集リ来テ我死骸ヲフ。 住持ノ云ク、「汝ヂ此ノ寺ニ暫ク居タレ。我レハ要事有テ只今郷ニ出テ、明日可返来キ也。…」ト云テ、米少分ヲ預ケ置テ出ヌ。 「自然ラ郷ニ要事有テ逗留スルナリ」ト思テ過ルニ、五日不来ズ。預ケ置ケル所ノ少米皆尽テ食物無シ。 「此レ偏ニ法花経ノ験力也」ト知テ、其ノ柿、梨子ヲ多ク搜リ取リ置テ、日ノ食トシテ、其ノ倒レタル木ノ枝ヲ折取テ焼テ、冬ノ寒サヲ過ス。 …年老タル僧三人ガ夢ニ同時ニ見ル様、此ノ持経者ヲ縛リ付タル男ノ家ニ、普賢ヲ縛リ奉テ、打責メ奉テ、家ノ柱ニ結ヒ付テ置奉タリ、ト見ル。 而ルニ、遂ニ病愈ル事無クシテ死ヌ。弟子有テ、近キ辺ニ棄置レツ。 弟子人ノ告ニ依テ、其ノ髑髏ヲ取テ、山ノ中ニ清キ所ヲ撰テ置ツ。其ノ山ノ中ニテモ尚、法花経ヲ誦スル音有リ。 西ノ山ノ峰ニ行テ見レバ、実ニーノ池有リ。其ノ水紅ノ色也。池ノ中ニ竜ヲ断々ニ切テ置ケリ。 我レ此ヲ聞テ、一ノ堂ヲ見ルニ、多ノ法花経ヲ積ミ置奉レリ。 此ノ男預タル郎等来テ、正家ニ告テ云ク、「此ノ盗人男、日来吉ク拈メテ置タル、守ル者共モ寝入ル事モ無ク、亦人モ不寄ヌニ、…

中古日本語資料

風吹ク日ハ、木ノ下ニ畳ヲ敷テ、花ヲ外ニ不散ズシテ 取り集メテ置ク 。切ナル思ヒニハ、花枯ヌレバ取集テ薫ニ交ゼテ匂ヲ取レリ。
然レバ、此ノ是錢ヲ人ニ不令知ズシテ 隠シ置テ 、没後ノ料ニ充テム。只、死ナム時ニ臨デ、弟子共ニ令告知ム」ト思テ、房ノ天井ノ上ニ窃ニ 隠シ置 。
然レバ、此ノ是錢ヲ人ニ不令知ズシテ 隠シ置テ 、没後ノ料ニ充テム。只、死ナム時ニ臨デ、弟子共ニ令告知ム」ト思テ、房ノ天井ノ上ニ窃ニ 隠シ置 。
而ル間、律師身ニ病ヲ受テ悩ミ煩フ間、此ノ錢 隠シ置 タル事ヲ忘レテ、弟子共ニ不告知ズシテ、遂ニ死ヌ
前ノ蛇ヨリモ大キニ増レル大蛇直ニ来テ、此ノ老僧ニ向テ申シテ云ク、「我ハ此レ、鍾ノ中ニ 籠メ置 ン僧也。…
亦、女モ其ノ後不久ズシテ、死ニケルニ、女ノ 云ヒ置ケル 様、「此ノ千両ノ金ヲ、我レ死ナム後ニハ必ズ墓ニ埋メ」ト。
我レ生タリシ時其ノ金ヲ仕フ事無シテ、死ニシ時、我レ、『其ノ金ヲ墓ニ 埋テ置ケ 』ト遺言セシニ依テ、金ヲ墓ニ埋メリ。
寺ノ近キ辺ニ出デハ、山林ヲ廻テ見ニ、此ノニノ猿林ノ中ニ暑預ヲ多ク 堀リ置テ 、土ノ穴ニ頭ヲ指入テ、ニツ乍ヲ同ジ様ニ死テ臥セリ。
其ノ後、僧彼ノ猿詔ヘシ法花經ヲ不書畢ズシテ、仏ノ御前ノ柱ヲ刻テ 籠メ置キ 奉ツ。
美作ノ国ノ人、糧米ヲ牛ニ負テ、此ノ山ニ參テ、牛ヲ僧房ニ 繋ギ置テ 、主ハ神殿ニ參ル。
汝ガ書奉タル様ニ、不淨懈怠ニシテ書タル經ハ、広キ野ニ 棄置 ツレバ其ノ墨ノ雨ニ洗レテ流ルハガ、此ク河ニ成テ流ルハ也」ト。
行ヒ畢テ、此ノ度ハ、幕ヨリ始め皆壞テ同ジ所ニ 積置 ツ。
而ル間、兼テ命終ラム時ヲ知テ、比叡ノ山ニ登テ、所々ノ堂舎ヲ廻リ礼シ、古キ同法ニ値テ、不審キ事共ヲ 云置 テ云ク、「此レ、最後ノ対面也」ト。
何クヘ坐ストモ此等ヲバ 取り置 テコソ可坐キニ、此ク俄ニ死タル人ノ様ニ不坐ネバ、弟子共泣キ迷テ求ムルニ、
「疾登リ給ヘ」ト云テ、共ニ板敷ニ登テ、長増笠延ニ 脱ギ置テ 、障昏ノ内ニ這ヒ入ヌ。
日夜ニ弥陀ノ念仏ヲ唱テ、懃ニ極樂ニ生レムト願ヒケル程ニ、雲林院ニ住シテ此ノ菩提講ヲ 始メ置ケル 也。
「…汝ヂ、『極樂世界ヨリ阿弥陀仏ノ御使也。此ノ御文奉ラム』」ト 云ヒ置テ 、我レハ寝ヌ。
此ノ講、吉ク御心ニ入レテ勤メ可給シ。我レハ、講ノ畢ラム時ニゾ命可終キ」ト 云ヒ置キ 、去ヌ。
見レバ、年老タル法師ノ物ヲ荷ヒテ持来テ、 打置 テ奥ノ方ニ入ヌ。
僧、「何事為ナラム」ト思テ、窃ニ行テ立聞バ、早ウ、奄ノ後ニ一聞ナル持仏堂 造置 テ、其レニ入、火ヲ打テ、仏前ニ明シ香ヲ置、先ヅ法花ノ懺法ノ行ヒツ。
其後、三日ヲ経テ、病癒テ心地直シク成ヌレバ、妻子眷属ニ向テ、諸ノ事皆 云ヒ置テ 、五日ト云フニ失ニケリ。
我レ年老ヒヌ。『生タラム程ニ聖人ニシテ御セムヲ心安ク 見置 テ死ナバヤ』トコソ思ヒシカ」ト書タリ。
僧都此レヲ見テ、此ノ二度ノ返事ヲ法文ノ中ニ 卷キ置テ 、時々取り出シテ見ツハゾ泣キケル。
「昔ハ契ギリ蓬萊ノ宮ノ裏ノ月ニ、今ハ遊ブ極樂界ノ中ノ風ニ」ト云テ、搔消ツ様ニ失ヌ、ト見テ、夢覺ヌ。其ノ後チ、高遠ノ中将此ノ文ヲ 書付テ置 テケリ。
此ノ国ノ人八人同ク有り。一ノ洲ニ 籠メ置 タレバ、同ジ所ニ八人有テ、泣キ悲ム事無限シ。
鷹ノ櫟ヲ食タル所ヲ 見置 テ、年来下ケルニ、母鷹此ノ事ヲ思ヒ佗ビケルニヤ有ケム、本ノ所ニ櫟ヲ不食ズシテ、
然レバ、娘ヲ亦無キ者ニ哀ビ悲ムデ、「憑モシク 見置 」ト思テ、夫ヲ合ケルニ、其ノ夫去テ不来ズ。
若狭ヘ行クトテ、女ノ着物ノ無キヲ見テ、衣共 着セ置テ 、超ニケリ。
「此ニ宿タル人ノ若狭ヘ今朝行ヌルガ、明日此ニ返リ来ラムトシテ、 留メ置 タル也。…」
女、「何ナル事也トモ、今ヨリハ何デカ不仕ザラム」ト 云ヒ置 去ヌ。
紅ノ生ノ袴一腰持ケルヲ、「此ヲ取セム」ト思テ、我ハ男ノ 脱ギ置 タル白キ袴ヲ着テ、此ノ女ヲ呼ビテ云ク、
既ニ出立テ、此ノ女ノ 調ヘ置 タル物共食テ、馬ニ鞍置テ引出シテ、此ノ女ヲ乗セムズル程ニ、女ノ思ハク、
其ノ貧女ノ妹来テ、…故ニ足ニ馬ノ屎ヲ塗付テ、姉ニ語テ云ク、「我レ今来テ取ラム程、此レヲ 寄シ置ク 也」ト云テ、去ヌ。
其ノ後、三年ヲ経テ聞ケバ、「千手院ニ 納メ置 タル修理料ノ錢百貫、倉ニ付タル封モ不替ズシテ、失ニタリ」ト云ヒ合タリ。
其ノ後、其ノ池ニ持行テ、可然キ所ヲ見テ、砂ヲ堀リ遣テ、冷シク成シテ放タレバ、水ノ中ニ入ヌ。心安ク 見置 テ、男、寺ノ有ル所ヲ差テ行ケバ、
…父ニ云ク、「今夜彼ノ蛇来テ門ヲ叩カバ、速ニ可開シ。我レ偏ニ観音ノ加護ヲ憑ム也」ト 云ヒ置テ 、倉代ニ籠居ヌ。
其ノ中ニ、大キナル鈴、鏡、金ノ簾有り。于今彼ノ山ニ 納メ置 タリ。
御帳ノ帷ヲ糸吉ク打畳テ、前ニ 打チ置 ル、ト見テ、夢メ覺ヌ。
…安芸周防ノ程ヲ過ル間、其ノ息キニ人モ不寄ヌ島ノ有ケルニ、謀事ヲ構テ、此ノ大隅ノ掾ヲ 放チ置 テ、守ハ過ヌ。
従者一人ヲ留テ、「此レ引キ隠セ」ト 云ヒ置 タレバ、男死タル馬ヲ守リ立テルニ、
「早ウ、長谷ノ観音ノ哀ビ給フ也ケリ」ト、悲ク貴クテ、其ノ死人ヲ深ク家ノ内 隠シ置 テ、明ル日ヨリ妻夫共ニ、此ノ金ノ死人ヲ打駄ツハ売テ世ヲ過ケルニ、

中古日本語資料

「…『少ノ便モ有ラバ、錦ヲモ御帳ノ帷ニ縫テ奉ラム』トコソ思フニ、此ノ御帳許ヲ給ハリテ可出キニ非ズ」ト云テ、犬防ノ内ニ 指入テ置ツ 。
弟子等師ノ泣ヲ見テ、其ノ心ヲ問ト云ヘドモ、師答フル事無クシテ、只一紙ニ此ノ夢ノ告ヲ注シテ、蜜ニ經箱ノ中ニ 納メテ置ツ 。
今昔、下野国ニ薬師寺ト云フ寺有り。公ケ其ノ寺ニ戒壇ヲ 始メ被置テ 、止事無キ寺也。
亦、此ク不合ナルヲモ、此ノ人ノ養ハムニ懸リテ、世ニ可有キニモ有ラム」ト思テ、返々ス 契リ置テ 出ヌ。
押量リツハ答ヘ、或ハ前前キ古キ人ノ 云置 タル如クニ答フレバ、主ノ云ク、
悪人也ト云ヘドモ、此光空持経者ノ経ヲ聞テ悲ヒ貴デ、初ハ山寺ニ有ルヲ帰依シケルニ、後ハ我が家ニ 迎へ置テ 、経ヲ令誦テ帰依シテ年来ヲ経ル間、
辛クシテ夜日差ヌレバ、先ズ我が抱キ奉レル仏ヲ見レバ、毘沙門天ニテ在マス。仏壇ノ前ヲ見レバ、牛ノ頭ナル鬼ヲ三段ニ 切殺シテ置タリ 。
「男ナレバ京ニ留ルベキ事ニ非ズ」トテ、父ノ共ニ下ニ、妻ヲ 見置テ 行カム事ノ破無ク心苦シク思ケレバ、
「相具セム」トモ恥クテ不云デ心ニ思碎ケ乍ラ、下ル日ニ成テ深キ契ヲ 云ヒ置テ 、泣々ク別レテ、夫ハ陸奥ヘ下ヌ。
「朝メデニ調美シテ妻ニ令食ム」ト思テ、棹ノ有ルニ 打懸テ置テ 臥ヌ。
住持見レバ、実ニ有シ如クニテ腰ニ挟ミテ有り。此クテ後ノ世ノ事ヲ 契リ置テ 、住持ハ返ヌ。
其ノ行ヒノ餅ヲ此ノ僧多ク得タリ。人ニモ不与デ家 取置 タリケルヲ、此ノ僧ノ妻、
今二人ノ男、「野ノ中ニ此ク 棄テ置 タル物ナレバ、ヨモ只ニテハ不棄ジ。…」
「然ハレ、其達ハ否不吞ゾ。我ハ譬ヒ何ナル物ヲ 棄置 タル也トモ、只吞テム。命モ不惜ラズ」ト云テ、
然レバ律師モ弟子ノ心ヲ吉ク見テ、此クモ 云ヒ置 ケル也ケリ。
可穢キ所ナド沙汰シ取セタリケレバ、僧聊ナル物具ナムト拈タメ、可云キ事ナド 云ヒ置テ 、死ナムズル所ニ行テ、独リ居テ念仏唱ヘテ居タリ。
汝ガ師ノ大徳其レヲ見給テ、哀ノ心ヲ至シテ、汝ヲ以テ木ノ上ニ 取り置 セテ、苦ヲ令離メ給ヘリ。
男、僧ニ、「暫ク此テ御セ。己ガ無ラム程ニ努々此レ不臨給フナ」ト 云置テ 、内ノ方ヘ入ヌ。
…足代ト云フ物ニ、上ニ大キナル木共ヲ横様ニ 結付テ置 タリケルガ、何ニカシケム、俄ニ縄ノ切レテ、低タル五位ノ上ヘニ落懸ル。
…此ノ門ノ下、生レテ十余日許ニ成タル男子ノ糸清氣ナルヲ 棄テ置 タリ。
未ダ生テ泣ケレバ、「糸惜シ」ト思ケレドモ、グ事有テ、此ク 見置テ 過ニケリ。
「我レハ人ニ被見知タル身ナレバ、現ニハ不有ジ。谷ノ方ノ藪ニ隠テ居タラム。其ハ老法師ノ形ト成テ、此ニ居給テ、通ラム人ヲ必ズゼヨ」ト 教へ置テ 、…
其後、郡司ノ云ク、「己ハ水ノ上ヘ入ナムトス。其水ノ上ヨリ来ラム物ヲ、鬼ニマレ神ニマレ、寄テ懷ケ」ト 云ヒ置テ 、郡司ハ水ノ上ニ入ヌ。
京ニ返上テ、内ニ参テ、滝口ノ陣ニシテ、滝口共ノ 履置 タル沓共ヲ、諍ヒ事ヲシテ、皆犬ノ子ニ成シテ這セケリ。
狭キ峯ノ可動クモ非ヌ所ニ 打籠置 ツレバ、竜狭ク口破無クシテ居タリ。
此ノ天狗木ヨリ飛来テ、僧ヲ搔キ抓テ、遙ニ比良ノ山ノ栖ノ洞ニ將テ行テ、竜ノ有ル所ニ 打置ツ 。
而ル間、七年ニ至テ遂ニ死ス。死ヌル刻ミニ、何ニカ思ケム、妻子ニ 云置 ケル様、「我死ナム後ニ、忽ニ葬スル事無シテ、九日置タレ」ト。
而ル間ダ、聖武天皇ノ御代ニ、其ノ葉ノ料物ヲ、岡田ノ村主ト云者ノ姑ノ家ニ 宿シ置ク 。
而ルニ、一人ノ弟子其ノ坊ヲ伝ヘテ住ケルニ、師ノ聖人ノ常々 醉入レテ置 タリケル、白地ノ小瓶ノ有ケルガ、壺屋ノ棚ニ有ケルヲ、房主見付テ、
臨テ見レバ、五寸計ナル小蛇蟠テ有り。恐テ離レタル方ノ間木ノ上ニ 捧テ置ツ 。
妻子眷属ニ思フ事ヲモ 云ヒ不置ズ シテ、思ヒ不懸ズシテ死ヌレバ、
貧キ身ニ年来ノ貯ヘフ此ノ料ト 貯へ置テ 願フ遂ルヲ、俄ニ大魔障出来テ妨グルハ、功德ノ実ナレバ、此ク有ル也。
多ノ公財共、心ニ任セテ 取置 タリケル、皆焼失ヌ。
哀レニ思エ給ヒケレバ、若キ心ノ内ニモ実ニ行ク未マデノ事ヲ絡返シ契テ、長月ノ夜モ極テ長キニ、露不寝ズシテ、哀レニ 契置テケリ 。
「…祖心浅クシテ男ナド合ストモ、努々人ニ見スル事ナセツ」トテ、出モ不遣ズ 云置テ 、出給ヒヌ。
明ル朝ニ、返リ給フトモ、「今迎ヘニ可来シ」ト 云置テ 出ヌ。
鑑ヲバ 取置 テ、侍共皆曳杖シテ、築垣ノ崩ナドノ有ル所ニ立塞ガリテ護リケルヲ、
国司恐テ衣ヲ返シ与ツ。女衣ヲ取テ濯 淨メ置ツ 。
「…『少シ擲』ト思テ侍リシカバ、『少シ擲習ヘ』ト 教へ置テ 失侍テ後、絶テ然ル遊モ重ク不為ニ、此通り給フト自然聞侍ツレ。憚乍ラ」。
寛蓮、「糸可咲クモ云フカナ」ト心ニ思ヘテ、基石ノ笥ヲニツ乍ラ前ニ 取置テ 、
「不知ヤ。其事難知シ。然ラバ口灰ヲ多ク取り集メテ、其男ヲ其灰ノ中ニ 埋テ置テ 暫ク見ヨ」ト教ヘケレバ、…

滝口返テ、忠明ノ教ヘニ随テ、灰ヲ多ク集テ、其中ニ男ヲ 埋ミ置 テ、一二時計ヲ経テ見ルニ、灰動ケレバ、搔開テ見ルニ、然レバ、汝ヂ先ヅ家ニ行着テ、物共ヲバ皆 取置 セテ後、汝ヂ一弓ニ箭ヲ番テ、
一人ハ不入シテ物共ヲバ皆 取置 セテ、
「…気色怖気ナル体シタル者共ノ、人ニモ非ヌガ…、居ヘタル物共ヲ取食テ、其 造置タル 船、車、馬ナドニ乗テコソ散々ニ返ツレ。其レハ何ゾ、父ヨ」
「…定メテ怖シキ事有ラムトス。其ヲ念ジテ有レ」ト 云置 テ、陰陽師ハ出テ去ヌ。
而ル間、伊衡少将物ヲ被ギテ、殿上ノ戸許ニ被物ヲバ 落シ置 テ、文ヲ御前ニ持来テ奉ル。
五条油ノ小路辺ニ、荒タル檜皮屋ノ内ニナム 下シ置 ツルゾト、云ケル。
而ル間、此ノ男ノ同僚也ケル侍、 打棄テ置 タリケル此ノ妻ノ文ヲ、何ニトモ無ク取テ見ケレバ、此ク書タリ、
守ノ云ク、「頼信坂東ハ此度ナム始メテ見ル。然レバ道ノ案内可知キニ非ズ。然レドモ家ノ伝ヘニテ 聞キ置 ケル事有リ、
其レモ極タル兵ニテ、頼信ト共ニ其ノ国ニ有ケル間、其ノ親孝ガ居タリケル家ニ、盗人ヲ捕ヘテ 打付テ置 タリケルガ、
然レバ其ノ河辺ニ住ム人ハ、水出ル時ニ登テ居ル料トテ、家ノ天井ヲ強ク造テ、板敷ノ様ニ 固メテ置 テ、水出レバ其ノ上ニ登テ、物ヲモシテ食ナドシテゾ有ナル。
其ノ因幡河量無ク出タリケル時、其ノ天上ノ上ニ女二三人、童部四五人ヲ 登セ置 タリケル家ノ、水ノキ時ニコソ、柱ノ根モ不浮デ立テリケレ、
夜ノ明ルモ心モト無テ、何シカ明マヽニ、□妻ニ返々ス 云置 テ、児ニ物云セテ後、従者共モ呼集テ、兄ノ許ヘ行ク。
然レバ、「二三人許心ヲ合テ守テ、『搦ヨ』ト云ニ随テ、慥ニ搦メヨ」ト 云置 テ、介ヲ内ニ将入テ、此児ノ有壺屋ニ入テ見スレバ、
東ノ人、「只可為様ノ有也。此殿ニ有トテ人ニ不宣シテ、只精進ストテ、注連ヲ 引テ置 給ベシ」ト云ヘド、
吉ク々物ナド食テ、此巖ノ上ニ立ン。此ヨリゾ上ラン為ル」ト、吉々 教ヘ置 テ、奥様ニ入ヌ。
白地ト思テ、船ヲバ少シ引居テ綱ヲバ 棄テ置 タリケルニ、此二人ノ童部ハ船底ニ寄臥タリケルガ、二人乍ラ寝入ニケリ、
可然ニヤ有ケン、作タル田、糸能出来タリケレバ、多ク 蒔置 テ、妹兄過ス程ニ、漸ク年来ニ成ヌレバ、然リトテ可有事ニ非ネバ、妹兄夫婦ニ成ヌ。
守喜ビ乍ラ、帯ヲ京ニ持上テ、関白殿ニ奉テケリ。其帯、多ク帯ノ中ニ 加ヘテ被置 タラン。其ヨリ後ハ有様ヲ不知。
然テ、其輩ヲ其浮ニ敷テ、其上ニ其辺土ヲ救テ、下衆共ヲ多ク雇テ 刳置 テ、其上ニ屋ヲ造ニケリ。
互若カリケル時ニ、守心ヨリ外ニ頗ル妬シト 思ヒ置 タル事ノ有ケルヲ、不知シテ、
此小瓶ヲバ皮子ノ底ニ深ク 納置 ツ。
長黒バミタル□ニ裏タル物ヲ、守ノ袖ノ上ニ 打置 タレバ、守重氣ニ提テ入ニケリ。
「何ノ料ニカ有ム」ト思フ程ニ、下衆男ノ、木ノ様ナル物ヲ一筋 打置 テ去ヌ。
門脇ニニツ乍ラ取下テ、「『此奉レ』ト候ツル也」ト云テ、 取置 テ、負セタリツル馬モ、具シタリツル者共モ、ヤガテ返去ニケリ。
然レバ、人ノ命ハ皆前世ノ業ニ依テ、産ルハ時ニ 定置 ツル事ニテ有ケルヲ、人ノ愚ニシテ不知シテ、今始タル事ノ様ニ思歎ク也ケリ。
家ニ数ノ狗ヲ 飼置 テ、山ニ入テ鹿猪ヲ咋殺サセテ、取事ヲ業トシケリ。
我レニモ非ズ、人ノ 落シ置 タル気色ニテ、橘ノ高欄ニ押懸テ居タルガ、人ヲ見テ、恥カシ気ナル物カラ、喜ト思ヘル様也。
然レバ、女ノ賢キハ弊キ事也ケリ。若干ク 取置 ケル物共馬ナドト見ケルハ、万ノ物ノ骨頭ナドニテゾ有ケル。
其ノ妻ヲ何ニシタルニカ有ケム、疵モ無クテ□トシテ、棹ノ有ケルニ打懸テナム 殺シテ置 タリケル。
其ノ時、人々起テ火ヲ燃シテ寄テ見ケレバ、其ノ五位侍ヲコソ真平ニ□ 殺シテ置 タリケリ。
大臣ハ此ク 見置 テ返リ給テ後ニ、人ヲ教ヘテ、
「今故ニ持行テ尋テ取セム」トテ、壺屋立タル所ノ物ノ上ニ 捧テ置 タリケルヲ、遠助ガ妻ハ嫉妬ノ心極ク深ケル者ニテ、此ノ箱ヲ遠助ガ置ケルヲ、
然レドモ幼キ子ヲ野ノ中ニ将行テ 棄置 タラムヤハ。
若キ男共ノ勇タル数男ヲ具シテ行テ見ケレバ、夜前葬送セシ所ニ墓モ卒堵婆モ無シ。火ナドモ不散ズ。只大キナル野猪ヲ 切殺シテ置 タリ。実ニ奇異キ事無限シ。
従者ノ男ノ云ク、「此許ノ事ニ値テ、故モ無ク過シテムハ無下ノ事ナルベシ。此ノ□ノ木ニ箭ヲ 射立テ置 テ、夜明コソ尋テ御覧ゼメ」ト云ケレバ、
暫ク思ヒ廻シテ、二人ノ妻ヲ捕ヘテ 縛リ付テ置 タラムシカバ、終ニハ顚レナマシ。糸口惜ク逃シタル也。
「土御門ノ門ニテ待テ」ト 云置 タリケレバ、「従者共ヤ有ル」ト問ケレバ、「皆候フ」ト云テ、十人許出来ニケリ。
負フ男、「此ナ不食給ソ、死人ヨ」ト云テ、搔負テ走テ行テ堂ノ戸ノ許ニ 打置 テ、「彼ノ主達、此ニ負テ来タリ」ト云テ、堂ノ内ニ入タル間ニ、
尚妬ク思食ケレバ、「吉ク誠ヨ」ト仰セ給テ、庁ニ大キナル壺ノ有ケルニ、水ヲ一物入レテ、其レニ延正ヲ入レテ、顚許ヲ 指出シテ被置 タリケリ。
実ニ糸怖キ心也。装束ノ皆解テ 隠シ置 テ、然カ云ハムト思ケル心バセ、更ニ人ノ可思寄キ事ニ非ズ。

中古日本語資料

同宿ノ僧制シ可敢クモ非ヌ程ナレバ、此ク 見置 マヽニ、テ殿ニ参テ、
此ノ男文ヲ取テ引披テ打見テ、算取出シテ糸輒ク 打置 テ、程モ無ク、「何ラナム候ケル」ト云ヘバ、
然テ、学生共ヲ集メテ、作文シテ居タリケルニ、文頌スル盛ニ、傍ニ物共 取置 タリケル塗籠ノ有ケル内ノ方ニ、極テ怖シ気ナル者ノ音ニテ吠ケレバ、
淡路ノ守源ノ頼親ノ朝臣ノ許ヨリ鯛ノ荒巻ヲ多ク奉タリケルヲ、贅殿ニ多 取置ケル ニ、
「此ノ荒巻三巻、人ヲ以テ取りニ奉ラム時ニ遣ハセ」ト 云置 テ、義澄ハ殿ヲ出テ、
要事有テ、白地ニ宿リハ罷リ出ゾトテ、義澄ガ従者ノ男ニ 申シ置 ソル様、
『左京ノ属主ノ許ヨリ、此ノ荒巻取ニ被遣タラバ、取テ儘ニ其ノ使ニ取ラセヨ』ト 云置 テ、罷出テ、只今返リ参タル也」ト、事ノ有様ヲモ不知シテ云ヘバ、
其替ニハ破タル平足駄ノ片足ヤ、旧尻切ノ壞タルヤ、旧藁杵ノ切タルナドヲコンソ求メテ、 籠テ被置ル 、ト聞侍ソレ」ト語レバ、
錦ノ平屋ヲ卯酉ニ長ク立テ、同錦ノ縵ヲ引廻シテ、其ノ内ニ種合セノ物共ヲバ、悉ク 取置 タリ。
…極ク難堪気ニ思給ヒタリツル気色ヲ見給ヘテ、己ハ 閑置 タル事ノ侍レバ、試ムト思給ヘテ、此ク仕タリツルニ、否堪給ズシテ、解給ヒタル也」
傍ニ寄テ、音モ不為デ曲マリ居タレバ、此ノ物近ク来テ、先ヅ物クハリト 下シ置ク ナリ。
「…次ニハ蓑ヲ 脱テ置ク 音ノ、サラサラトハ聞ヘツルナメリ」
此ノ男ヲ髪ニ縄ヲ付テ幡物ト云フ物ニ寄セテ、背ヲ口出サセテ、足ヲ結曲メテ 拵置 テ、女ハ烏帽子ヲシ水旱袴ヲ着テ、引褊テ、
生夕暮ニ糸清気ナル紙ニ申文ノ様ナル物ヲ、人ヒト持来テ 差置 テ去ヌルヲ、「何文ナラム」ト思テ取テ披テ見レバ、仮名交リニ此ク書タリ、
其レニ、世ニ候ヒシ時ニ豊ニ候ヒシカバ、京ニ此ノ家ヲモ 造リ置 テ、蔵共ニ財ヲモ貯ヘ置テ候ヒシカバ、此ノ人ヲモ此ニ居ヘテ候ヒツルニ、
其レニ、世ニ候ヒシ時ニ豊ニ候ヒシカバ、京ニ此ノ家ヲモ造リ置テ、蔵共ニ財ヲモ 貯ヘ置 テ候ヒシカバ、此ノ人ヲモ此ニ居ヘテ候ヒツルニ、
夏比吉キ瓜ヲ得タリケレバ、「此レハ難有キ物ナレバ、タサリ方返来テ、人ノ許ヘ遣ラム」と云テ、十果許ヲ厨子ニ入レテ 納メ置 テ云ク、「出ヅ」トテ云ク、
「出ヅ」トテ云ク、「努々此ノ瓜不可取ズ」ト 云置 テ出ヌル後ニ、七八歳許有ケル男子ノ此ノ厨子ヲ開テ、瓜一菓ヲ取テ食テケリ。
近来ノ人ナラバ、明ルヤ遅キト宿直ヲモ数儲ケ、彼ノ、「仲スルゾ」ト云ツル侍ヲモ 搦メ置 テ、入来ラムトセム盗人ヲモ尋テ、別当ニモ檢非違使ニモ可触キニ、
妻娘ナドヲモ兼テヨリ異事ニ付テ外ニ 渡シ置 テケリ。
然レバ其ノ唐櫃ヲバ女ゾ 搔入レテ置 ケル。
筑後ノ前司ノ云ケル様ハ、「家ノ物外ニ 運び置 テ、吉キ事有リ、悪キ事有リ。盗人ニ物不被取ヌ、此レ糸吉キ事也。
然テ口看ノ長ヲ呼テ、「此ノ殿原ノ装束共一具ヅヽ、淨キ所ニ 取り置ケ 」ト云ケレバ、
心バヘノ蔽カリケルヲ思ヒ出ツヽ難忍ク泣キ迷ヒ合ヘリケルニ、章家ハ兎死ヌト 見置 テ、其ノ日ヲダニ不過サズ狩ニ出テ行ニケレバ、
…此ニ此テ年来居タリケルガ、構テ我レガ京ニ有シヲ盗取テ、 養ヒ置 テ為立テ、時々清水ニ参スレバ、
家ニ数ノ狗ヲ 飼置 テ、常ニ其ノ狗共ヲ具シテ深キ山ニ入テ、猪鹿ヲ、狗共ヲ勸メテ咋殺セテ取ル事ヲナム、昼夜朝暮ノ業トシケル。
此ク三切レニ咋切テ觜ヲ以テ咋ツヽ前ニ 投置 テ、身篩打シテ翼疏シ、尾ナド打振テ、露事シタリトモ不思タラデ有ケレバ
一人ノ女、二歳許ノ子ヲ背ニ負タリケルヲ、平也ケル石ノ上ニ 下シ置 テ、亦幼キ童ノ有ケルヲ付テ遊バセテ、女ハ貝拾ヒ行ク程ニ、
猿其ノ子ヲ搔抱テ山様ニ逃テ行ケレバ、 付テ置 タリツル小童、此レヲ見テ愕泣ケルヲ、母聞付テ見遣タルニ、猿我ガ子ヲ抱テ山様ニ走り入レバ
此ノ水銀商ハ家ニ酒ヲ 造リ置 テ、他ノ事ニモ不仕ズシテ、役ト蜂ニ吞セテナム此レヲ祭ケル。
平中、「現ニ」ト思テ、「然ハ疾ク御マセ」ト云ヘバ、女起テ上ニ着タル衣ヲバ 脱置 テ、単衣袴許ヲ着テ行ヌ。
汝ヲ今ハ不可見ズ。但シ我ガ形見ヲバ 留置カム 。其レヲ我ガ替ニ可哀キ也』ト云フ」ト見ル程ニ、夢覺ヌ。
終夜語ヒテ曉ニ返ケルヲモ恋気ニ思タリケルヲ 見置 テ出ニケレバ、陸経家ヘ返ケル終道心ニ懸テ家ニ返リ着ケルニ、
池ノ堤ニ大ナル穴ヲ通シテ、其ヨリ水ヲ出シテ、水ノ落ツル所ニ魚ノ可入キ物ヲ 構ヘ置 テ水ヲ出シケレバ、水走り出ルニ随テ、其ノ穴ヨリ多ノ魚共出ケレバ、…
天台ノ法文ヲ教ヘ立テ、学生数出来ニケレバ、法花ノ八講ヲ行ハセ、三十講ヲ 始メ置 テ、既ニ仏法ノ地ト成ニケルニ、
此ク 見置 テ其ノ家ニ入テ暫ク有テ出テ、亦馬ニ乗ラムト為ル時ニ、此ノ販婦ノ女驚キ覺タリ。

宇治拾遺物語	「おのれが親の失せ侍りし折に、世の中にあるべき程の物など 得させ置きて 申ししやう、『今なん十年ありてその月にここに旅人来て宿らんとす。何のあるにか痒き所も出で来る衣なれば、 脱ぎ置きて 、練色の衣三つが上にこの宿衣引き着ては臥したる心、いまだ習はぬに気もあげつべし。ただ一人愛宕の山に持て行きて、大きな石を四つの隅に置きて、その上にこの棺を うち置きて 、千手陀羅尼を片時休む時もなく、うち寝る事もせず、…」 「これ、人して取りに奉らん折に、おこせ給へ」と 言ひ置く 。 「…あはれ、飛ぶがごと走りてまうで来たる童かな」とほめて、取りてまな板の上に うち置きて 、ことごとしく大鯉作らんやうに左右の袖つくるひ、『左京の大夫の主のもとから荒巻取りにおこせたらば、取りてそれに取らせよ』と 言ひ置きて まかでて、只今帰り参りて見るに、かなたこなたの門どもをさしまはして、 鍵取り置きて 、侍ども引杖して、それにまた父祖父などは二百余年までぞ生きて侍りける。「その人々の 言ひ置かれたり ける」とて、『この卒都婆に血のつかん折になん、この山は崩れて深き海となるべき』となん、父の 申し置かれしかば 、…垂布に包みたる藁をば大門の脇に 隠し置きて 、待ちあたる程に、二時余りありて、僧正、小門より帰る音しければ、その後、この専当法師病つきて命終りぬ。妻子悲しみ泣きて、棺に入れながら 捨てずして置きて 、なほこれを見るに、死にてあからさまに物へ行くとても、人に、「この雀見よ。物食はせよ」など 言ひ置き ければ、子孫など、「あはれ、なんでふ雀飼はるる」とて憎み笑へども、…女の顔をうち見て、口より露ばかりの物を 落し置く やうにして飛びて往ぬ。 瓢の種をただ一つ 落として置きたり 。 一里配りなどして、果てにはまことにすぐれて大なる七つ八つは瓢にせんと思ひて、内に つりつけて置きたり 。 …あさましくうれしければ、物に入れて 隠し置きて 、残りの瓢どもを見れば、同じやうに入れてあり。 悦びて寄りて腰よくうち折りて後に、取りて物食はせ、菓食はせなど して置きたり 。 雀は腰うち折られて、かく月比 籠め置きたる 、よに妬しと思ひけり。 女思ふやう、「みな米にならんとしけるものを、急ぎて食ひたれば、かくあやしかりけるなめり」と思ひて、残りをば皆 つりつけて置きたり 。 家に行きて思ひ明かして、 すかし置き つる心憂さ書き續けてやりたれど、 「ゆゆしげに し置きたらば 、それに見飽きて心もや慰むとこそ思ひつれ。こはいかなる事ぞ。 「佐渡国にはまことに金の侍るなり。候ひし所を 見置きて 侍るなり」といへば、 …十一二ばかりなるをのこ子、女子、二人の子を舟のまもりめに 乗せ置きて 、父母は、「植ゑんという者雇はん」とて、陸にあからさまに登りにけり。 舟をばあからさまに思ひて、少し引き据ゑて、 つながずして置きたり けるに、この童部ども舟底に寝入りにけり。 作りたる田のよくて、こなたに作りたるにも殊の外まさりたりければ、多く 刈り置き などして、さりとてあるべきならねば、妻男になりにけり。 この人のおはし着かん所を 見置き 奉りて悦びも申さんと思ひて、御供に参りし程に、菩提講の庭に参り給ひければ、 始め置き たる講も今日まで絶えぬは、まことにあはれなる事なりかし。 これも今は昔、業遠朝臣死ぬる時、御堂の入道殿仰せられけるは、「 言ひ置く べき事あらんかし。不便の事なり」とて、解脱寺観修僧正を召し、地藏菩薩を一体造り奉りたりけるを、開眼もせで櫃にうち入れて奥の部屋など思しき所に 納め置きて 、世の営みに紛れて程経にければ、…あやしくて、夜明けて奥の方をよくよく見れば、この地藏 納めて置き 奉りたりけるを思ひ出して、見出したけり。 塔のもとに、古き地藏の物の中に 捨て置き たるをきと見奉りて、時々きぬかぶりしたるをうち脱ぎ、頭を傾けて、遙かなる山の奥の谷の片岸に、高き木のあるに鷹の巣くひたるを見つけて、いみじき事 見置きたる とうれしく思ひて、帰りて後、… 「郡司が家に、京のめなどいふものの、かたちよく、髪長きが候ふを隠し据ゑて、殿にも 知らせ奉らで置きて 候ふぞ」と語りやがて下りにければ、その家に入りゐて、得たりける米、稲など 取り置きて 、ただ一人なりけれど、食物ありければ、…おのれが分とて作りたるは殊の外多くい出で来たりければ、稲多く 刈り置き て、それよりうち始め、風の吹きつくるやうに徳つきて、いみじき徳人にてぞありける。 「例の鉢来にたり。ゆゆしくふくつけき鉢よ」とて、取りて倉の隅に 投げ置きて 、とみに物も入れざりければ、鉢は待ちみたりける程に、物どもしたため果てて、この鉢の常にまうで来れば、物入れつつ参らするを、今日紛はしく候ひつる程に、倉に うち置きて 忘れて、取りも出さで錠をさして候ひければ、汝が書き奉りたるやうに、心きたなく、身けがらはしうて書き奉りたる経は、広き野辺に 捨て置きたれば 、その墨の雨に濡れて、かく川にて流るるなり。 この女を、我があらん折、頼もしく 見置 かんとて、男あはせけれど、男もたまらざりければ、これやこれやと四五人まではあはせけれど

	「明けば行きて、またの日帰るべきぞ」と、返す返す 契り置きて 、
	寒げなりければ、衣も 着せ置き 、郎等四五人ばかり、それが従者など取り具して廿人ばかりの人のあるに、
	「ここに宿りたる人の、若狭へとて往ぬるが、明日ここへ帰り着かんずれば、その程にとて、このある者どもを とどめ置きて 往ぬるに、…」
	「いかなる事なりとも、今よりはいかでか仕らであらんずる」とて、頼もしく 言ひ置きて 往ぬ。この人々の夕さり、つとめての食物まで沙汰し置きたり。
	この人々の夕さり、つとめての食物まで 沙汰し置きたり 。
	鳥鳴きぬれば、急ぎ立ちて、この女の し置き たる物食ひなどして、馬に鞍置き、引き出して、乗せんとする程に、
	ただ妻一人、仏師に 向はせて置きたり けり。
	仏師、仏の御眼入れ果てて、男の僧帰り来たらば、物よく食ひて、 封つきて置き たりし物ども見て、家に持て行きて、…
	頼信は、坂東方はこの度こそ初めて見れ。されども我が家の伝へにて、 聞き置き たる事あり。
	御帳の帷をいとよく畳みて、前に うち置か ると見て、夢覚めて、
	この御帳ばかりを賜りて、まかり出づべきやうも候はず。返し参らせ候ひなん」と申して、犬防の内に さし入れて置きぬ 。
	車に乗りこぼれて、やり寄せて見れば、いまだとも かくもしなさで置き たりけるに、
	二三人連れて行きて見れば、穀糞を多く 痢り置き たり。
	畳の下を引きあけて見れば、土を少し掘りて、布袋に米を 入れて置き たり。
	柴の編みたるやうなる物を高く造りたるに さし置き て、「さかしらする人をば、かくぞする。
	木登よくする法師、登りて見れば、極楽へ迎へられ給ひし我が師の聖を、葛にて 縛りつけて置き たり。
	御門この由を開き給ひて、后を捕へて、髪に縄をつけて上へつりつけて、足を二三尺 引き上げて置き たりければ、すべきやうもなくて、…
	しばしあれば、宮、紅の御衣二つばかりに押し包まれて、鞠のごとく簾中よりころび出でさせ給うて、和尚の前の簀子に 投げ置き 奉る。
	「深く閉ぢ籠めて、重く いましめて置け 」と宣旨を下されぬ。
	人屋の司の者、宣旨のままに、重く罪ある者置く所に 籠めて置き て、戸にあまた錠さしつ。

中世日本語資料

平家物語	しかるを忠盛朝臣、或は相伝の郎従と号して、布衣の兵を殿上の小庭に <u>召しおき</u> 、或は腰の刀を横だへさいて、節会の座につらなる。
	若しなほ其咎あるべくは、彼身を召し進ずべき歟。次に刀の事、主殿司に <u>預けおき</u> をはンぬ。
	昔奈良の御門の御時、神亀五年、朝家に中衛の大將を <u>はじめおかれ</u> 、大同四年に、中衛を近衛と改められしよりこのかた、
	祇王御前の申状によつてこそ、召しかへされてもさぶらふに、かやうに <u>召しおかれ</u> なば、祇王御前の思ひ給はん心のうちはづかしうさぶらふ。
	遥かにさがりたる所に、座敷 <u>しつらうておか</u> れたり。
	障子に又、「いづれか秋にあはではつべき」と <u>書き置き</u> 給ひし筆の跡、げにもと思ひさぶらひしぞや。
	かるに其恩を忘れて、外人もなき所に、兵具をととのへ、軍兵を <u>かたらひおき</u> 、其営の外は他事なし。
	白河院の御時、 <u>はじめおか</u> れてより以降、衛府どもあまた候ひけり。
	賢王猶御あやまりあり、況や凡人においてをや。既に <u>召しおか</u> れぬる上は、いそぎうしなはれずとも、なんの苦しみか候べき。
	其辺なる僧坊に <u>おろしおき</u> 奉って、送りの者どもも、身々の捨てがたさに、暇申して帰りけり。
	太政入道、「丹波少将をば此内へは入れらるべからず」と宣ふ間、其辺ちかき侍の家に <u>おろしおき</u> つつ、宰相ばかりぞ、門のうちへは入り給ふ。
	「子ならざらむ者は、誰かただ今、我身の上を <u>さしおい</u> て、是ほどまでは悦ぶべき。まことの契は親子のなかにぞありける。
	其上仰せ合せらるる成親卿、 <u>召しおか</u> れぬる上は、設ひ君いかなる不思議をおぼしめたたせ給ふとも、なんのおそれか候べき。
	法皇むかへ参らせんずる事も、はや思ひとどまり、腹巻 <u>ぬぎおき</u> 、素絹の衣に袈裟うちかけて、いと心にもおこらぬ念珠してこそおはしけれ。
	「若し此辺に我方さまの者やある。舟に乗らぬ先に <u>いひおく</u> べき事あり。尋ねて参らせよ」と宣ひければ、
	「あないとほし。王城にさしもたつき霊仏霊社の、いくらもましますを <u>さしおい</u> て、我崇め奉る御神へ参って、祈り申されけるこそ、いとありがたけれ。…」
	昔素盞鳥尊、三十一字のやまとうたを <u>はじめおき</u> 給ひしよりこのかた、もろの神明、仏陀も、彼詠吟をもつて、百千万端の思をのべ給ふ。
	我等が召しかへさるるうれしさはさる事なれども、御有様を <u>見おき</u> 奉るに、さらに行くべき空も覚えず。
	それより父大納言殿のすみ給ける所を、尋ねいりて見給ふに、竹の柱、ふりたる障子などに、 <u>書きおか</u> れたる筆のすさみを見給て、…
	「人の形見には、手跡に過ぎたる物ぞなき。 <u>書きおき</u> 給はずは、いかでかこれを見るべき」
	…さては下りし時、心苦しげなる有様を <u>見おき</u> しが、事ゆゑなくそだちけるよと、思ひ出てもかなしかりけり。
	修羅の三悪四趣は、深山大海のほとりにありと、仏の <u>解きおき</u> 給ひたれば、知らずわれ、餓鬼道に迷ひ来るか」と思ふ程に、
	よしなき少将の、今一度都の音づれをもまてかしなンド、 <u>なぐさめおき</u> しを、おろかにもしやとたのみつつ、ながらへんとはせしかども、
	西八条へ出でし時、この子が我もゆかうどしたひしを、やがて帰らふずるぞと <u>こしらへおき</u> しが、今の様におぼゆるぞや。
	又おとど、「我朝にはいかなる大善根を <u>しおい</u> たりとも、子孫あひついでとぶらはむ事有りがたし。他国にいかなる善根をもして、後世を訪はればや」
	上皇は法皇の離宮、故亭幽閑寂寞の御住ひ、御心苦しく <u>御覧じおか</u> せ給へば、法皇は又上皇の旅泊の行宮の浪の上、舟の中の御有様、おぼつかなくぞおぼしめす。
	まことに宗廟、八幡、賀茂な ン どを <u>さしおい</u> て、はると安芸国までの御幸をば、神明もなどか御納受なかるべき。
	まことにさしあつたる大事、大嘗会な ン どのおこなはるべきを <u>さしおい</u> て、かかる世の乱に、遷都造内裏、すこしも相応せず。
	あそここの溝や堀に <u>ぞすておき</u> ける。
	共に召し具したる馬部、吉上なンドと <u>どめおき</u> 、其屋を守護せさせ、竜の御馬にうち乗って、内裏へかへり参りたれば、ほのぼのとあけにけり。
	入道相国、かやうにいたくなさけなう <u>ふるまひおか</u> れし事を、さすがおそろしと思はれけん
	「御有様見奉るに、日にそへてたのみずくなうこそみえさせ給へ。此世に <u>おぼしめしおく</u> 事あらば、すこしもののおぼえさせ給ふ時、仰せおけ」とぞ宣ひける。
	「御有様見奉るに、日にそへてたのみずくなうこそみえさせ給へ。此世に <u>おぼしめしおく</u> 事あらば、すこしもののおぼえさせ給ふ時、 <u>仰せおけ</u> 」とぞ宣ひける。
	今生の望一事ものこる処なし。ただし <u>思ひおく</u> 事とは、伊豆国の流人、前兵衛佐頼朝が頸を見ざりつるこそやすからね。
	日ごろ <u>つくりおか</u> れし罪業ばかりや獄卒となつて、むかへに來りけん。あはれなりし事共なり。
	「あなふしぎ、当時何事あつてか、大仏殿奉行に参るべき」とて、懷中して宿所へ帰り、ふかう <u>おさめておか</u> れたりけるが、
	其上実盛は、今度のいくさに討死せうと思ひきつて候ぞ。二たび都へ参るまじき由人々にも <u>申しおい</u> たり。大臣殿へも此やうを申し上げて候ぞ」

弓矢とりは、いささかの所でも思ひ出の詞をば、かねて <u>つかひおく</u> べきで候ひける物かな。
朽もせぬむなしき名のみ <u>とどめをきて</u> 、かばねは越路の末の塵となるこそかなしけれ。
をさなき者共があまりにしたひ候を、とかう <u>こしらへおかん</u> と仕るほどに、存の外の遅参」と宣ひもあへず泣かれければ、
「おのれらが父斉藤別当北国へくだッし時、汝等が頻りに供せうどいひしかども、『存るむねがあるぞ』とて、汝等を <u>とどめおき</u> 、…
日比 <u>読みおか</u> れたる歌共のなかに、秀歌とおぼしきを百余首、書きあつめられたる巻物を、
三位是をあけてみて、「かかる忘れがたみを <u>給はりおき</u> 候ひぬる上は、ゆめゆめ疎略を存ずまじう候。
「今は西海の浪の底に沈まば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ、浮世に <u>思ひおく</u> 事候はず。さらば暇申して」
…忠度のありし有様、 <u>いひおき</u> しことの葉、今更思ひ出て哀れなりければ、
赤地の錦の袋に入れたる御琵琶もって参りたり。経正是をとりついで、御前に <u>さしおき</u> 、申されけるは、
あかずしてわかるる君が名残をばのちのかたみに <u>つつみてぞをく</u>
御門御琵琶を <u>さしお</u> かせ給ひて、「抑汝はいかなるものぞ。いづくより来れるぞ」と御尋ねあれば、
三位中将、「をさなき者共が、あまりにしたひ候を、とかう <u>こしらへおかん</u> と遅参仕り候ひぬ」と申されければ、
『生あるものは必ず滅す。楽しみ尽きて悲しみ来る』と、いにしへより <u>書きおきたる</u> 事にて候へども、まのあたりかかるうき事候はず。
人はいつれの日、いつれの時、必ず立帰るべしと、其期を <u>定めおく</u> だにも久しきぞかし。
いつ帰るべしともおぼえねば、故入道相国の <u>作りおき</u> 給ひし所々を見給ふに、
法印平家に具せられて、西国へ落ちし時、あまりにあわてさわいで、北の方をも宮をも京都に <u>すておき</u> 参らせて下られたりしが
頭や蔵人 <u>なしお</u> きて、人々退出せられけり。
一門の公卿列してもてなし奉り給ひしかば、是も又 <u>さしおき</u> がたき御事なり。
西国の軍をば暫く <u>さしお</u> かせ給ひていそぎのぼらせ給へ」と申しければ、
其次に敍位除目おこなはれて、木曾がはからひに、人々の官ども思ふ様に <u>なしお</u> きけり。
ふる郷に <u>とどめおき</u> 給ひし北の方、をさなき人々の事をのみなげきかなしみ給ひけり。
うき世の忘れがたみにも <u>思ひおく</u> ばかり。
「… <u>書きおきたる</u> 文をば都へつたへてたべ」なんど、こまごまと宣へば、
「いとけなき子をもふりすて、老いたるおやをも <u>とどめをき</u> 、是までつき参らせてさぶらふ心ざしをば、いかばかりとかおぼしめされさぶらふらむ。
いづくともしらぬあふせのもしほ草 <u>かきおく</u> あとをかたみとも見よ
さりながらなほおぼつかなくおぼしめし候はば、腰の刀を <u>召しお</u> かれて、まげて御ゆるさを蒙り候はばや」と申せば、
「西国へ下りし時、文をもやらず、 <u>いひおく</u> 事だになかりしを、世々のちぎりはみな偽にてありけりと思ふらんこそはづかしけれ。
「…あれこそ八島の大臣殿の当国の守でわたらせ給ひ候ひし時、召され参らせて御最愛にて候ひしが、老母を是に <u>留めおき</u> 、…
千手前酌を <u>さしお</u> いて、「羅綺の重衣たる、情ない事を機婦に妬む」といふ朗詠を一両返したりければ、…
故郷に <u>留めおき</u> 給ひし北の方、をさなき人々の面影のみ、身にたちそひて、忘るるひまもなかりければ、
「さればこそ、人なみなみに都を出でて、西国へ落ちくだりたりしかども、ふるさとに <u>とどめをき</u> しをさなき者共のこひしさ、いつ忘るべしとも覚えねば、
撰取不捨の本願あやまたず、浄土へ引導き給へ」と申されける中にも、「ふる郷に <u>とどめおき</u> し妻子安穩に」といのられるこそかなしけれ。
「かくのごとく四国の浦々島々に五十騎百騎づつ <u>さしお</u> かれて候。…」
判官、「是は義経に天のあたへ給ふ文なり。鎌倉殿に見せ申さん」とて、ふかう <u>をさめてお</u> かれけり。
「 <u>思ひおく</u> 事はなきか」との宣へば、「何事かを思ひおき候べき。君の御世にわたらせ給はんを見参らせで、死に候はん事こそ口惜しう覚え候へ。
「思ひおく事はなきか」との宣へば、「何事かを <u>思ひおき</u> 候べき。君の御世にわたらせ給はんを見参らせで、死に候はん事こそ口惜しう覚え候へ。
あまの村雲の剣は、崇神天皇より景行天皇まで三代は、天照大神の社壇に <u>あがめお</u> かれたりけるを、

…昔天照大神、天の岩戸に閉ぢこもらむとせさせ給ひし時、いかにもして我御かたちを <u>うつしおきて</u> 、御子孫に見せ奉らんとて、御鏡を鑄給へり。
我は一人の子なれば、この世に <u>思ひおく</u> 事なきに、年来相具したりし女房の、日野といふ所にありと聞く。
いま一度対面して、後生の事を <u>申しおか</u> ばやと思ふなり」とて、片時の暇をこはれけり。
いかにもして今一度御すがたを見奉らばやと思ひつるに、今は露ばかりも <u>思ひおく</u> 事なし。
げにもむくろをば <u>すておき</u> たりければ、とって輿にいれ、日野へかいてぞかへりける。
東山円覚寺といふ所に、ふかう <u>おさめてを</u> きたりけるを、文覚聞き出して、かの紺かき男共に相具して下りけるとかや。
つひにいかなる御有様にて、わたらせ給ひ候はんずらむと、 <u>思ひおき</u> 参らせ候にこそ、ゆく空もおぼゆまじう候へ」
「わ殿も九郎がまねし給ふなよ」と仰られければ、此御詞におそれて、物具 <u>ぬぎおきて</u> 、京上はとどまり給ひぬ。
都より相具したりける女房達十余人、住吉の浦に <u>捨て置き</u> たりければ、松の下、まさごの上に、袴ふみしだき、袖をかたしいて、泣ふしたりけるを、
二三遍おしかへしおしかへしようで後、「神妙々々」とて <u>打ちおか</u> れければ、斎藤五、斎藤六はいふにおよばず、
水をばめして糲をばめさず、 <u>さしおき</u> 給へば、常陸房とってくうて ン げり。
平家都を落ちしとき、三歳にて <u>すておか</u> れたりしを、めのとの紀伊次郎兵衛為教やしなひ奉って、ここかしこにかくれありきけるが
さても門司・赤間の関にて、いくさはけふを限と見えしかば、二位の尼 <u>申しおく</u> 事さぶらひき。

中世日本語資料

徒然草	多くの工の心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度ども 並べ置き 、前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、…
	御堂殿の作りみがかせ給て、庄園おほく寄せられ、我御族のみ、御門の御後見、世の固めにて、行末までと おぼしおき し時、いかならん世にも、…
	されば、よろづに見ざらん世までを 思ひおき てんこそ、はかなかるべけれ。
	人しづまりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりしたため、 残しおか じと思ふ反古など破り捨つる中に、なき人の手ならひ、…
	…風流の破子やうのもの、ねんごろに営み出でて、箱風情の物にしたため入れて、双の岡の便よき所に 埋みおき て、紅葉散らしかけなど、…
	埋みけるを人の 見おき て、御所へまゐりたる間に盗めるなりけり。
	「しばし、この事はてて」、「同じくはかの事 沙汰しおき て」、「しかしかの事、人の嘲りやあらん、行末難なくしたためまうけて」、…
	…坊を百貫に売りて、彼是三万疋を芋頭の銭とさだめて、京なる人に あづけおき て、十貫づつとりよせて、芋頭を乏しからず召しけるほどに、
	吉水和尚、月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はここにありはら　と詠み給ひけるは、岩本の社とこそ 承りおき 侍れど、おのれらよりは、…」
	「すべて何も皆、ことのととのほりたるはあしき事なり。し残したるを、さて うち置 きたるは、面白く、いきのぶるわざなり。…」
	めなもみといふ草あり。くちばみにさされたる人、かの草を揉みて付けぬれば、則ち癒ゆとなん。 見知りておく べし。
	尊きひじりの 言ひ置 ける事を書き付けて、一言芳談とかや名づけたる草子を見侍りしに、心にあひて覚えし事ども。
	されば、棺をひさくもの、作りて うち置 くほどなし。
	身死して財残る事は、智者のせざるところなり。よからぬ物 蓄へ置 きたるもつたなく、よき物は、心をとめけんとはかなし。
	「人は万を さしおき て、ひたふるに徳をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。
	誠に、少しの地をもいたづらに置かんことは、益なき事なり。食ふ物、薬種などを 植ゑおく べし。
	慈鎮和尚、一芸あるものをば下部までも 召し置 きて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。
	…「時にあたりて本歌を覚悟す。道の冥加なり、高運なり」など、ことしく 記しおか れ侍るなり。

天草版平家物語	横たへて差されたかの刀を紫宸殿の後ろで皆人の見るに、ある人に 預け おいて出られてござった。
	この忠盛は相伝の郎等ぢやと申して、兵を内裏のお庭に 召し置き 、あるいは腰刀を差しながら節会の座に列ならるる、…
	次にまた刀の儀はやがて御内に 預け置 いてござる
	このこと 思ひ知らせ奉 らいではおくまい
	…その恩を忘れて外人もない所に兵具を調べ、武士を 語らひ おいて謀反の営みのほかには他事なかった。
	清盛み簾の内から見だいてあるべうもないと言はれたによって、武士ども十四五人前後左右に立ち囲うで縁の上に引き上せて、一間な所に 押し籠 うでおいた。
	しばしあって奴が首左右なう切るな、よくよく 縛めて おけ、言はれたれば
	既にこのやうに 召し置 かれた上は、急ぎ失はせられずとも、苦しいもない儀ぢや
	十にならるる女子八歳の男子を車に取り乗せ、いつくを指すともなく遣り出だいて、漸うとして雲林院といふ所へ落ち着いて、そのあたりの寺に 下ろし置 いて、…
	夜の間に変はる体楽しみ尽きて、悲しみ来たと、ある人の 書き置 かれたも、今日の前に知らるる体でござる。
	わが身を さし置 いて、これほどまでは
	清盛はこのやうに人々をあまた 警め置 いても、なお心行かずや思わはれつらう
	その上仰せ合はせらるる成親卿を 召し置 かれた上は、たとひ君いかなる不義を思し召し立たせらるるとも、何の恐れがござらうぞ？
	清盛重盛に中違うてはあしからうずと思はれたか、法皇を迎ひ奉らうずることをも早思ひ留まり、腹巻 脱ぎ置 いて、素絹の衣に袈裟うち掛けて、…
	もしこの辺にわが方様の者やある、船に乗らぬ先に 言ひ置 かうずることがある
	まことにさこそ思し召すらう、われらが召し返さる嬉しさはさることなれども、そなたの御風情を 見置き 奉って上るにも及ばず、せん方ないことぢや。
	少将の形見には夜の衾、康頼が形見には一部の法華経を 留め置 いて、縄を解いて押し出せば、俊寛は綱に取り付いて、…
	それより父大納言殿の住まれた所を尋ね入って見らるるに、竹の柱、古りた障子、などに 書きおか れた筆のすさみを見て、あはれ人の形見には手跡に過ぎた物はない。
	書きおか れぬならば、何としてこれをば見ようぞと言うて、康頼入道と二人諍うでは泣き、泣いては読みなどせられた。
	六条これこそとばかり言うて、袖を顔に押しあてて、涙を流いたをもって、さては下った砌り心苦しげな有様を 見おい たが、何事なう育ったよと、…
	その瀬に身をも投げうとしたを、由ない少将の今一度都の音信をも待てかしなどと 慰めおか れたを、愚かでもしやと頼うで存へうとはしたれども、…
	西八条へ出た時、この子がわれも行かうと慕うたを、やがて帰らうそと、 賺いておい たが、今のやうに覚ゆる
	もとより私は推参の者で追ひ出だされませうずるを、妓王御前の申し状によってこそ召し返されてもござるに、 留め置 かせらるるならば、…
	諸共に 召し置 かれうさへ片腹痛うござらうずるに、妓王出だされて、わらは一人を留め置かせられば、なほなほ迷惑に存ぜうず
	諸共に召し置かれうさへ片腹痛うござらうずるに、妓王出だされて、わらは一人を 留め置 かせられば、なほなほ迷惑に存ぜうず
	日ごろ参った所へは入れられいで、遥か下がった所に座敷を しつらうて置 かれたれば、妓王こはされば何ごとぞ？わが身に誤ることはなけれども、
	障子にいつれか秋に逢はで果つべきと 書き置 かせられた筆の跡をげにもと思うて悲しう存じた。
	そのち御所中を探し奉ったれども、ござらなんだれば、長兵衛ばかりを生け捕って六波羅へ引いて行って、坪の内に 引き据ゑて おいたれば、
	三井寺には折節競が沙汰があつて、さても競を召し具せられうことであったものを！ 捨て置 かせられてなんたる目にか合ひませうずらうと、口々に申されたれば、
	…門の内へ追ひ入れたを侍どもこの馬を取って来たを宗盛見らるれば、宗盛といふ焼き印を 当てておい たを見て、大きに腹を立てて、
	淨妙は這ふ這ふ帰って平等院の門前の芝の上に鎧を 脱ぎ置 いて、矢目を数へてみたらば、六十三が所あった。
	御自害をだにさせらるるならばと申したれば；三位入道殿げにも言うて、鎧を 脱ぎ置 いて、声高に念仏を申された最後の様体が哀れにござる。
	わが身は大手から一万余騎で向かふが、また一万余騎をあそこここに ひき隠 いておいて、兼平といふ者は六千余騎で日の宮林に陣を取られてござった。
	弓矢を取る者はあからさまの座席とは思ふとも、思ひ出になる言葉をば 申し置 かうずることぢや。
	鎧の引き合はせから巻き物を一卷取り出して、俊成卿へ奉られたを俊成ちつとこれを開いて見て、かかる忘れ形見を 給はり おくことなれば、ゆめゆめ疎略を存ずまじい
	その上今度は用意もおらないほどに、迎ひの者をお待ちあれと、 賺いておか うとせられたところへ、若君も、姫君も御簾の外へ走り出て、鎧の袖、草摺に取り付いて、…
	幼い者どもがあまり慕ふを今朝からとかう 賺いておか うとするほどに、存じの外に遅なはったと言ひもあへず泣かれたれば、五人の人々も皆鎧の袖を絞られてござった。
	積み置 いた善の幸ひもことごとく尽きて、今は積み重ねた悪の禍ひが身に報うて君にも捨てられまらして、…
	清盛の 造り置 かれた所々もいつしか三年に荒れはてて、苔は道を塞ぎ、草は門を閉ぢて、瓦には松が生へ、…
	備中の国の兼康といふ者は…剛の者であつたによって、木曾殿あたを者をまづ切るなど言うて、倉光が弟に 預けて おかれたが、
	心ざまも優で、情けある者であつたによって、倉光も懇ろに 扶持 しておいてござる。
	…道で木曾殿に行き合つて、その有様を語つたれば、木曾腹を立てて切らうずるものを、憎い命を 助けて おいて、怨になったと、言はれたれば、

そこで木曾殿剛の者と聞いたが、ゆかしさに今まで 切らいで おいた、何ほどのことがあらうぞ？追ひかけて討てと言はれたれば、兼平まっ先駆けて五十騎ばかりで喚き叫うでかかったれば、兼康矢を七つ八つほど 射残いて おいたを差し詰め引き詰め散々に射たに、西国の軍をばまづ さし置 かせられて、早う上らせられいと言ひやったところで喜。木曾はもしもの事があらば、院を取り奉って、西国の方へ御幸をなし奉って、平家と一つにならうとて、力者を二十人余り 用意してお いたれども、…力及ばいで河原太郎さらばと言うて下人どもを呼び寄せ、故郷に 留め置 く妻子のもとへこの様そもを言ひ遣はし、馬どもをば汝らに取らすただしいつとなひ波の上、船の内の住まひなれば、身々とならうも心苦しいなどと 言ひ置 いたもはかない予言であった。 書き置 いた文どもを都へお上せあれ、これは後の世のことを申し置くなど来し方行く末のことどもを語り続けてさめざめと泣かれたれば、書き置いた文どもを都へお上せあれ、これは後の世のことを 申し置 くなど来し方行く末のことどもを語り続けてさめざめと泣かれたれば、とかくただ独りいつとなう明かし暮らすは慰む方もなけれども、通盛の上を見れば、賢うこそ幼い者どもを都に 留め置 いたれとあつて、泣く泣く喜ばれた。いづくとも知らぬ逢瀬の藻塩草、 書き置 く跡の形見とも見よ。千手酌を さし置 いて、今様を歌へば、親義筆を さし置 いて誰も明らかに承ったらば、喜。小松の三位の中将はわが身は屋島にありながら、心は都に通ひ、故郷に 残し置 かせられた北の方、幼い人々のことを明けても、暮れても思はれたれば、…又いとけない者どもが嘆かうずることも無惨な：迎へ取らうと 賺し置 いたことも皆偽りにならうず重衡さても快い善知識かなと喜うで、年来常にござって遊ばせられた侍のもとに 預け置 かれたお硯のあつたを召し寄せられて、これは清盛の大唐から渡いて、…人並み並みに都を出て、西国へは落ち下つたれども、ただ大方の恨めしさもさることで、故郷に 留め置 いたいとけない者どもがことをのみ明けても、…さてあらうずることでもなければ、おん身の髪を剃り下させらるるにも、古里に 留め置 かせられた北の方、幼い人のことがなほ心にかかった。その鎧と、太刀は貞能がもとから取って、新三位の中将殿に 預け置 き奉る。所知下されうずるとて、下し文どもあまた なし置 かれ大名、小名馬ども引かうずるとて、用意せられたれども、下らなんだれば、皆人入らぬ賢人立てと思はれた。これは義経に天の与ゆる文ちゃ：頼朝に見せまらせうずるとあつて、深う 納めてお かせられた。既に源氏ぞ、定めて大勢であらうず、急いでお船に召されいと言うて、磯に 上げ置 いた船ども俄かに押し下ろいて、平治に父義朝は討たれ、母常磐の懷に抱かれて、ここかしこを迷ひ歩いたを清盛入道殿尋ね出させられたれども、幼ければ、不便なとあつて、 捨て置 かせられたほどに、義経涙を流させられ、この世に 思ひお くことがあらば、義経に言ひおけと仰せらるれば義経涙を流させられ、この世に思ひおくことがあらば、義経に 言ひお けと仰せらるれば世にも苦しうで、などか 思ひお くことがなうてはござらうぞ？民部の大夫も降人に参らず、義経軍に勝って馬から下り坐って休ませらるるところに、おめおめと召されて参るをやがて鎧を脱がせて 召し置 かれ、人に預けられた。義経その頃磯の禪師といふ白拍子が娘静と申す女を 愛して置 かせられたが、ただ今の法師は起請は書いたれども、…都から召し具せられた女房ども十人余り住吉の浜に 捨て置 き、静ばかりを召し具してその勢二十人余りで大和吉野の奥へ落ちられた。 捨て置 かれた女房どもあるいは松のもと、あるいは砂の上に袴踏みしだき、三歳と申す時、都に 捨て置 いて落ち下られたを乳人の紀伊の次郎兵衛といふ者が養ひたて、

伊曾保物語	…ある百姓上々の熟柿を持って来て主人に捧ぐれば、…「只今賞かんせうずれども、風呂へ入れば、その風呂上がりの為に <u>蓄へおけ</u> 」
	「…その風呂上がりの為に蓄へおけ」とあつて、傍近う使はるる二人の小姓に <u>預けおか</u> れ、その身は風呂に入られた。
	さて船ども湊に着けば、宮殿楼閣を <u>飾りお</u> いた高い臺に上つて言ふは、…
	その後イソボ諸国へ渡り、道を説き教ゆれば、バビロニヤといふ大国のリセロと申す帝王このイソボを寵愛あつて忝くも御身近う <u>召し置</u> かせられた。
	されども帝王この由を聞かせられて実否を未だ決しさせられなんだれば、豫てエンノ <u>巧みお</u> いたことぢやによつて、…
	「…所詮身に罪を被るといふとも、命を継がうずる」と思ひ定め、密かに或る片脇な棺に <u>入れて置き</u> 、…
	「いかに君、かのイソボを成敗致せと宣旨を下された時、あまり本意無さに、或る棺に <u>入れ置</u> いてござれば、まだ存命仕ることも有らうずる」…
	「ギリホといふ大きな鳥を四つ生け捕つてかの鳥の足に籠を結び付け、その籠に童を <u>入れ置き</u> 、鳥の餌を持たせ差し上げば、…
	「御厩に <u>召し置</u> かれた馬草驛がバビロニヤの駒の嘶ふを聞いて胎うでござる如く、かの猫も往返仕つた」と奏すれば、…
	イソボが荷物の中に黄金を <u>入れて置き</u> 、路次で追懸け荷物の中からこの黄金を探し出し、盗人と言ひ掛けて即ち籠者させ、…
	「…只今汝が首を食ひ切らうずるも、わがままであつたれども、 <u>さしお</u> いて助けたことをば恩と思はぬか」と言へば、…
	田舎の鼠が言ふは、「面々はこの倉の案内を…この館の人々各を憎むによつて、萬のわな（糸世）、鼠捕りを <u>こしらへて置き</u> 、剩さへ數十疋の猫を養へば、…
	或る童手習ひに遣る所から友だちの手本を盗んで来れども、その母はこれを折檻も <u>せいでお</u> くによつて、日々に筆、墨などを盗んで来て、…
	「…、先づその方に <u>召しお</u> いた私が隨身を起こさせられい」と、狐は眞かと心得て、
	或る盗人福人の家に忍び入らうずると思へども、番の為に犬を数多 <u>飼うてお</u> いたれば、吠え立てられてえ入らなんだ、…
	野牛の母草を喰ひに野に出づる時、子どもに <u>言ひお</u> く様は、「この穴の戸を中よりよう閉ぢて居よ、…楚忽に開くな」と言うて出た。
	或る鷲巖の上から羊の居る上に飛び来れば、鳥これを羨みて、 <u>曝いて置</u> いた羊の皮の上に飛んで来たによつて、…
	蟹心中に殊の外腹を立てて、「所詮かやうの徒者を娑婆塞げに <u>生けて置</u> いて、頭の痛いことを堪へうよりは」と思ひ、
	又大酒を飲み、前後も知らず、酔ひ伏したところをふり擔げて或る棺の中へ <u>入れて置</u> いて、酔ひの醒め方に及うでかの女その棺の戸をほとほと叩けば、…
	或る年寄りの山賊薪を擔げて山より出たが、草臥れ果てて薪をば傍らに <u>下し置</u> いて、ひたと倒れ伏いて、吐息をついて言ふは、…

中世日本語資料

中華若木詩抄 上	短○ヲハ○ノ角ニ <u>打ヤリテヲケ</u> ドモ
	短○ニ火ヲトボシテヲケバ梅影ガ面白イ
	一ノ句ハ菊ヲウヘテヲイタ体也
	今コヽニ菊ヲウヘテヲイタハ
	○中ニ立テヲイタ花ハ旧冬○月ニ開タ花ゾ
	大夫ノ軒ヲカキスヘテヲイタリトモ
	トテモナルマイホトニウチヲカント思テ
	洛陽ノ花トモヲーツニシテヲイタリトモ
	山川并禽獸異類異形ニ至ルマテ鑄ツケテヲク也
	別ニ丹青ヲ以テ吾顔色ヲ似セ得テヲイテ
	コノ山ハ何物カ袖中ヘ把テカクイテヲイタソ
	妓女ヲ買テヲイテモ曲モナイソ
	床ノ上ニ堆○トツメトモ掃ワズシテヲク也
中華若木詩抄 中	イロヘタル窓ノ中ニ花ヲタヽミ入テヲイタヤウナソ
	蔵題ノ体トテ題ヲバカクシテヲイテ出サヌ也
	一○ニ云テハヲカヌ再三云コトソ
	三四ノ句ヲ引出サントテ太有情ト云イカケテヲク也
	其箭…今ニ至ルマテ繪図ニウツシテヲクホトナルソ
	昔ノ聖人ノ書ニヨクシルシツケテヲカレタ也
	コノ大箭ヲ高堂ノ上ニカケテヲイテ
	子陵…光武トモ云ワス臥シタルママニシテヲキモナヲラヌソ
	タヽハヤ世ヲハ命ノアルニマカセテヲケ
	マツ白ナ青天ニソツトサシハサミテヲイタヤウナソ
	イカナル家ニモ牛欄アリテイカホトモ逐入テヲク也
	結句銀○ニ秘蔵シテ酒ヲ入テヲイテ
	楊妃○ハ…老○ガヒロイテヲイタヲ
中華若木詩抄 下	コノ○モソコニテ…拾テオイタルソ
	ワカキ時ニ坐禪スル処ヲ影ニ寫シテヲイタソ
	平家ノ封シテヲイタ墳也
	○○…諸万人ノトリカコミテヲキタル中ヲ
	騷-人閑レ (サシヲヒテ) 筆ヲ費スニ乎-章ヲ一
	張建封…○○ト云者ヲ燕子楼ニカシヅイテヲイタルカ
	其為ニ○條ヲ折ラスシテノコイテヲク也
	八景ノ詩ハ垂○佛……大唐ニテ作テヲカレテ

中世日本語資料

	秋風…トコロトコロニ紅葉ヲ吹残シテヲク也
	秋風…コノ江上ノ景モ…吹残イテヲイタガ猶百白也
	耳ニアタルトモコラエテ一任シテヲクベキ也
	タヽコラエテヲカレンズルナリ
	イカナル寺院ニモ珠簾ヲ巻アケテヲク也
	魚イマダハマザルサキニハヤ餌ヲトリヲイデ
	白魚ヲハノコシテヲイデ武王ノ時ニ
	ソレニヨリテ早ク餌ヲ収テ釣ヲトリヲク也
	願クハ四時一様ノ春ニシテヲキタイソ

中世日本語資料

虎明本狂言集	ゑひす大黒	其時大こくすゝみ出て、いちだい三ぜん大千世界のたからを是に、 入おきたる 、袋を汝にとらせ
	大黒連歌	大黒れんがのおもしろさに、数のたからを 入おきたる 、袋をなんじにとらせけり
	三人夫	然は三ヶ国のお百姓〇の名を申あげい、うへとうに かきしるひておか せられうとのお事じや、申あげい
	つくしのおく	常のこく都へ上りつき、先次第にみねんぐうを上る、たんぼの者は、ほでをぶちのさきに付、まん中に 上げおく 、…
	隠笠	…常のこく京へいて、かくれみのかくれがさと云物は、たなには だひておく まひが、何とせうぞと云てよばるゝ
	財のつち	共又かくれみのかくれがさは諸大名のかひとらせられて、うちでのこづちを都のてうほうに のこしおか れたれ共、…
	三本の柱	其に付汝らは、ほねおりなれども、今少材木がいる、則山に木を三本 なをさせておいた 程に、三人ながらいて、…
	松やに	…これをたゞおく所でもなひ程に、さいわいやがて皆々のをあそばされうほどに、さらはくすねにねつて ねりとめておき ませう
	牛馬	いそひで罷出た、追付あれへ参らふと存る、一のくひを りやうじておひ たらは、しゝそんなまでらくらくといたす事で御ざる、…
		させいさせい、一のくひを りやうじておひ たらは、後には馬をばくらういたさうとも、某がまゝじや、…
	なべやつばち	今こそかやうなかつこなどしやうばひ致すとも、一のたなさへ りやうじておひ たらは、後には何をしやうばいいたさうとも、…
	たうずまふ	…四百余州に、私にかつすまふがござらぬ、さあるに依てもろこしの帝王に めしおか れ、御ちそうなさるれども、…
	あさう	其事でござる、今までに是にござる程に、内々それがいりませうと存て、 こしらへておゐ て御ざる
		やいやい藤六、なんぢらはきとくに、いひ付もせぬに、よう こしらへておひ た、又ゑほしがみは、事の外むつかしひといふが左様にあるか
		中々ならはひではなりませぬに依て、それはまへかどから ならふておゐ てござる
		中々いできてござる、今少うるしがひぬに依て、此こくくに いたひて置 て御ざる、もつてかへらせらるゝ間に、はやひませう
	雁盗人	それならはたゞ今とりにこうほどに、たなを ひいておき やれ
		たなをは ひいてお こうが、おそくはだす程にさうおこゝろやれ
		いや思ひ出た事がござる、わたくしがたなを ひいておけ とは申たれ共、定て其まゝおきませう程に、…
	すみぬり	…水を目へぬつてなくまねをいたすと申たれ共、誠にさせられなんだ程に、せうこを御目にかけうと存じて、すみに とりかへてお いてござる
	鬼がわら	…思ひの外はやうおいとまを下され、仕合のよもおかげじやと思ふ、だうのやうすを 見お ひて、国本にての物がたりにせう
		さらはようだうの様子を みておか ふ
	鼻取ずまふ	…よはひはなをばねからくつとひきぬきまする、つよひはなは、ほうさきまで 引ゆがめておき ますると仰られひ
		きやつはちやうごうがあおつ、今度とるならば、地へ三尺打こまふほどに、いひたひ事があらは いひお け、国本へとゞけてとらせうといへ
		国本をですするからは、 申お きたひ事もござらぬ、たのふだ人のお手にかゝつて、地へ三尺うちこまれて、今生後生のおもひでに仕らふと仰られひ
	しうくららかさ	はなとりのごとくに してお き、道すがらよの事はとはぬなり
		いやまいる程にかいだうじや、是にまつて、よきさうな者を見 はからふてお こふと存る
	栗田口	…ことこくあわた口で有を、国々の諸大名の御てうほうじやと有てかひ〇くたされて、其一人都のてうほうに のこしおか れたれ共、…
		今の者一人、みやこのてうほうに のこしおか れたを、それがしがさいかくをもつて、かうてまいつてござる
	じせんせき	…いやよの所へたちこへたらは、たちまちめいわくさせうずれ共、京内参りといふ程に、此度は さしおか ふ
	ふじまつ	ゑい、せつかんをいたさうとぞんじたれども、ふじさんけいと申程に、此度は さしおか ふ、…
		…やいせつかんをせうと思ふて是まできたれ共、ふじさんけいをしたと云程に、ふじへのおそれに、此度は さしおく
	うつぼざる	いやかしませう あゝの御きしよくでは、とても からひではおか せられまひ、…
		扱は からひではおか せられまひなふ
	きんや	何事とは、さきに汝がかたるやうに、此野はしさいささま有て、きんやに さだめおか れて、殺生きんだんの所て有を、…
	ばうしぱり	るすなどゝいふものは、ようじんもせひでかなはぬに、このやうに してお かれては、たとへぬす人がいつたといふても何共なるまひ
		いや酒ものみたし、其上此やうに してお かれた所もあり、いざたくんでのまふ、しあんをさしめ
	はぎ大名	中にも下京に見事な庭をもつた者がござあるが、みやぎのゝ萩をたくさんに うへてを かれたが、…
	ぶあく	たのふだ人の、それがしにわごりよを言ひつきやつたらは、 しらせひでお かれふか、さてさてわごりよはどうよくな人じや
		扱々かたしけなひ、是こそまことに命のおやじや、日比どうかんなひ殿じや、此御おんはいつくの裏にゐる共 わすれおく まひ
		…御きうくつに御ざらふとおほしめして、あなたにひろひろとした、屋敷を とつておか せられてござるほどに、…
	さひの目	…かやうにむこにとるからは、此家やしきざいほう、家に付たるひくわんまで、只今かたかたへ わたしおく ほどに、…

鬼類小名類	かうじ	…是三人はいわうが島へながされ給ふ処に、さる子細あつて、二人はしやめんあり、しゆんくわん一人かのいわうしまに とめおか る、…
鬼類小名類	なるこ	雲はれて、たれも月を、松島や平いづみは面白、いとゞひまなき秋の田に、月出るまで隙なきに、いざ さし置 てやすまん、いざ さし置 てやすまん 雲はれて、たれも月を、松島や平いづみは面白、いとゞひまなき秋の田に、月出るまで隙なきに、いざ さし置 てやすまん、いざ さし置 てやすまん
女狂言之類	わかな	さがりはにて、はしがゝりにて太打 上テラク 也
女狂言之類	どもり	…もはやさやうに罷ならぬ程に、あのおとこを いけておい てもいらぬ、打ころいて、わらはもくびをくゝらふと思ふての事で御ざる
はらきらず		…わらはも今までは、随分かせひで御されども、さうもならぬ程に、とかく いかいておい ていらぬもので御ざる程に、あのおとこをうちころひて、…
		…それへ御見まいに参る所で、ようきたと仰られてかわひがらせらるゝに依て、一日づゝも とめておか せらるゝ、又あれへまいれば、…
女狂言之類	おこさこ	たとへははしにめはなをつけたるやうな男であらふとまゝよ、おのれがいまのやうにいはふ事か、そのうへ此間 あまやかひておひ たに依て、…
女狂言之類	はなご	…物のたとへにも、によむはうやうによるやくによでんと云て、さだまらぬ、はかなひものを 云ておゐ た程に、…
		いやさやうではござらぬ、つねのお人なればかやうには申ませぬが○中々身共を いけておか せられまひ程に、…
		身共がよう しておか う
		それならなんちが尤もじや、汝にとがはなひ、それならはわらはも汝をたのまふ程に、なんちがしていたやうに、わらはを させておい てくれひ
		それははらはに まかせておけ 、ゆびでもいろはすまひぞ
		おれがわごりよにまようた事か、わごりよがおれを よびこでおひ て、おれおきながら、よそのめづかひ、せんじせんじとそこでかねうて、…
		…某が手をとつて、おくのまへいかるゝ程に、うれしうて、手をひかれていたれば、中々さけ肴を とりとゝのへておひ て、…
女狂言之類	枕物狂	…此おうちがさやうの事はなけれども、爰におもしろひ物語が有、かたつてきかせう、わかひ者は きひておいた がよひ
		すてゝもおか れず、とれはおもかげにたちまさり、おきふしわかで枕より、跡より恋のせめくれは、せんかたまくらにふししつむことぞかなしき
女狂言之類	いしがみ	それほどに思はゝ、身共に まかせておけ 、随分とめてみう
女狂言之類	れんじやく	…今こそかやうににごり酒をしやうばい致す共、一のたなさへ とつておい たらは、後にはなにをあきなひにいたさうともまゝで御ざる、…
女狂言之類	河原太郎	わきのざへなをり、つゞみおけに、さかばやしを さしておき 、つゞみおけの中へ、すゞをいれ、つゞみおけさげ、さかばやしかたげて
		いやおのれは、 いはせておけ はほうりやうもなひ、ちくしやうといふか、しかとそのつれな事を云か
女狂言之類	どん太郎	それはごんごだうだんの事じや、某がいとまもやらぬに、男をもつたとは、何事ぞ、もつたと云て、 もたしておく ものか
		又上京に手かけを もつておか れたが、上京へ参ると申されたほどに、さだめてそれへ参られたもので御ざらふ、…
女狂言之類	にやくいち	其事じや、此間身共がくわ○んをあらす程に、見しりを しておいた が、身が花にはうたがひがなひ
女狂言之類	ひげやぐら	やれやれにくひ事をいふ、惣じて女の口のこはひは、りべつのもといと、むかしから いふておひ た、まだおのれはくちがへらぬか
女狂言之類	おはが酒	右のひざがしらにめんを きせておく 、これはわき上面にての事
		さてさて次第次第にゑひたるていにて、めんをきては、きうくつなほどに、あしに きせておか ふと云て、ひざがしらにめんをきせて、…
		女のかたへおもてを むけておき 、ゑいつぶれてねている、女そつとわきへのきて
		女は笛吹の方にいたがましにて候、おいは、目付のはしらの本にある、しからはめんを左のひざがしらに きせておく べし
女狂言之類	今じんめい	茶やはは、め付のはしらのかたにおろし、茶やに茶うすを作り物に しておく を、それをととりて、ばうずは、大臣柱のかたにいて、…
女狂言之類	かなわか	なふ女といふ物は、ばけものじや、よう しておけ ばようみゆるものじや程に、まづゑどつてみさしめ
出家座頭類	腹不立	…某までにてもなし、今一人申合て立たる人が御ざるが、是が留守居を 尋ねておか れたもぞんぜぬ程に、…
出家座頭類	薩摩のかみ	近比いたわしひ事じや程に、茶の銭も さしおか ふず、舟ちんもおもらせう
		まことに茶の銭を さしおか せらるゝのみならず、舟ちんまでくだされかたじけなひ、下向にかならず御礼申さう、さらはさらは
		いや惣じて、爰元の大法で、爰にてせんちんをこうて、いださぬものがあれば、あの島へ あげておく 程に、
		…いださぬものがあれば、あの島へあげておく程に、りくつをいはゞ、おぬしもあの島へ あげておか ふぞ
出家座頭類	地藏舞	…ちざうばうがつぶりを、三度までさすつて、ぜんざいなれや地藏坊、地藏坊、末代の衆生を、ちざうに あつけおく なりと、…
出家座頭類	なきあま	それならはそのうは さしおい て、こなたへきてくれさしめ、ふせをとつたらは、わこりよに半分ませうほどに、そどろになひてくれさしめ
		それは まかせておか せられひ
出家座頭類	名取川	…（出家）いや身共は魚はすくはぬ（名取の何某）すくはぬとは、今のほど すくふておひ て、ことさら出家の身で似合わぬ事をあそばす
出家座頭類	路れん	（夫）いや身共はさのみならふとおもはなんだれ共、さそこな僧がむりになされた程に、身共はしらぬ（出家）それは迷惑な、そなたの たのふておい て
出家座頭類	しゅじやう	…追付国本へ罷下らふと存るが、爰にしゅじやうを あつらへておい て御ざるが、此比出つるはずで御ざる程に、とりに参らふ、…

		其事、せんど仰られたは近日国本へ下らせるゝと仰られたに依て、一日の間もはやふ出かしてしんぜうと存て、 <u>でかひておいて</u> ござる
出家座頭類	あくぼう	おくへつれていて、長刀 <u>たてゝおかふ</u> と云て、目付はしらへよせかけておかふとてひよろひよろとして、下におかふと云て、…
出家座頭類	かなづの地藏	おくへつれていて、長刀たてゝおかふと云て、目付はしらへ <u>よせかけておかふ</u> とてひよろひよろとして、下におかふと云て、…
		二人行合て、うしろ堂へおじやれと云て、ぢざうをこしかけさせ、みせて、おふてゆき、またまん中に <u>こしかけさせておいて</u> 、…
出家座頭類	ほねかわ	…地藏を脇の方に <u>すへおいて</u> 田舎の者立たるがよし、扱出合てみせて、うるはしう出来たと云時、随分精を出し作りたと云
		…辻風が吹てまいつて、ほねはほね、かはゝかはとなつたによつて、まん中をゆふて、てんじやうへ <u>あげておいた</u> といはしめ
		…こしのほねを打おつて御ざるに依て、役にたゝぬ程に、馬やのすみにつなひで <u>おいた</u> といはしめ
出家座頭類	花盗人	はなのだいを、一反おひまはり、とらへて、はなのだいに、 <u>しばりつけておく</u>
出家座頭類	楽阿弥	おもしろけれど尺八の、我がふけはかしましゝとて、三千里の外、ちいんはへだつまじ、まづ我は <u>さしおく</u> なり御尺八をふき給へ
出家座頭類	たこ	…此浦一衆がよりて、しやうくわん仕て候処に、そのたこを引上たる者にたゝりをなして候間、これなるしるしを <u>たて置いて</u> 候が、…
出家座頭類	しうろん	そなたの法は、じやうごはな法じや程に、それは <u>とりおひ</u> て、今日より身が弟子にならしめ
出家座頭類	松山	あら、とぜんや我が寺の、とぜんや我が寺の、 <u>のりすりおけ</u> と、とふものもなし
出家座頭類	どぶかつちり	いじのわるひ事とは、おのれ一人わたりおつて、身共を爰に <u>すてゝおく</u> 、おふてわたらずは後がわるからふ
		…ししやう何とて酒をくれぬぞと云、今のほどもつたに、 <u>のふでおいて</u> 、のみがくしをあそばすと云、…
出家座頭類	まりざとう	お前におのおのの御ざつて、まりをけふとおしやる程に、まりをも <u>こしらへておいて</u> 、またさうじをもし、おのおの御ざつたらはこなたへ申せ
		…けなりひ程に、まりをけうとの約束で御ざつた程に、まりを <u>こしらへておいて</u> ござる
出家座頭類	きかず座頭	…これがみゝのはやひ者で御ざる程に、これを <u>やとふておかふ</u> 、きくいちいるか
出家座頭類	さるざとう	こゝにて、女さる引をまねき、さけのまする、さるはしてばしらに、 <u>いひ付ておく</u> なり、ざとうおぬしが、た〇ついつする所で、さけがしまぬ、…
集狂言之類	じしやく	則おもてに <u>ねさせておいた</u>
集狂言之類	連歌盗人	しぜんかいしきのやうな物がいらふかとぞんじて、そのやうな物は十四五人まへ <u>拵ておいて</u> ござる
		扱々にがつた事でござる、私もやうじのやうな物は <u>拵ておいた</u> れ共、何一色こしらへる事もならひで、そなたをたのふでいて御ざる
		たしなふだ人で、ありあけを <u>とぼひておかれた</u>
		よひに、きやく人があつたとみへたが、ぶようじんな、火を <u>とりもせいでおいた</u>
集狂言之類	盗人の子	女、子ヲイダキ、ウヘニ小袖ヲ打カケテ、子ヲ、子ヲネサセ、ソノウエニ、小袖ヲキセテヲク也
		此やうなうつくしひ子をひとりこゝに <u>ねさせておいた</u> かにくひ事じやと云て、又なくと云て、すかす、
集狂言之類	うり盗人	…当年某がうりを作て候へは、一段見事にいでき満足に存る、ちぶんじやほどに、ちとみまふて、ぬすまれぬやうに <u>仕ておか</u> ばやと存る、…
		参る程に是じや、誠に一段見事に出きて御ざある、何とやら人のとつたあとがある、爰は人どおい所じや程に、用心におどしに、にんぎやうを <u>作ておか</u> ふ
		にんぎやうを <u>作ておく</u> 、…
		…なしうちゑぼしをまへゝおりてきせ、ひだりになわをもたせ、右につえを <u>よせかけてをき</u> 、みづごろもきせ、ひつこむ
		されはこそ、事の外とりよひ、なに事も <u>きひておひ</u> たがよひ、と申が誠じや、爰にも有、いかふはかゞゆくよ、さぐつた分には是ほどはとられまひ
		是はいかな事、物をいはぬこそ道理なれ、人かと思ふたれは人形をつくつて <u>おいて</u> 、よひきもをつぶひた、なふはらたちや、おのれめにだまされた
		…一だん見事にいできて御ざ有程に、まいり見申て候へは、何者やらんとつたやうにござ有た程に、人ぎやうを <u>つくりて置</u> たが、…
		是はいかな事、夜前うり盗人がいつたものじや、かきくゞつた跡がある、是はさて、人ぎやうも <u>打くづひておいた</u> 、やあやあ、…
		主も見まふまひかとぞんずるほどに、今夜も <u>まいり</u> とつて <u>おか</u> ばやと存る、
		下にいてなわをもちてなわはながく <u>しておく</u>
集狂言之類	三人がたは	三人、 <u>ならべておく</u>
集狂言之類	文山だち	さてさてこれを人に見せたいな、いや此ぶんでは、むさとした事じやが、 <u>かきおき</u> をしてはたさう
集狂言之類	かうじだわら	ひがくれたほどに、今日はしうばいになるまひ、こゝにする人が御ざる程に、先是を <u>あづけておか</u> ふ
集狂言之類	にわう	此やうな事はあるまひ、後のかたりくにもなる程に、よう <u>みておいた</u> がよひ
集狂言之類	鶏猫	さていかやうなる者か <u>とらへておき</u> てあるぞ
集狂言之類	やるこ	いや山田をみれば、なるこを <u>かけておひ</u> たよ
		…さりながら、我らがわたくしに申でもおりなひ、むかしから <u>いひおいた</u> 事が有程に、是を申さう

		それこそきかまほしけれ、さらは互にわきざしをまん中へ <u>だいておかふ</u>
		諸国を修行し給ふに、ある山里をとをり給へば、めんめんのあらそふ物を <u>かけておく</u> 、西行ふしんに思ひ、たちよりひいてははなし、…
		是をそなたへやればこなたのうらみ、こなたへやればそなたのうらみ、昔より申ごとく、あんずる物は中からとれといひ <u>おいた</u> 事が有程に、…
集狂言之類	すゞきばうちや	やれやれ中々の事でござる、惣じてあのおとこは、百申事が一つもまことが御ざなひ、さだめて鯉は <u>とつておく</u> まひが、…
		…そうべつようじやうごで、せうせうではおまいらぬ、それに依てたうざはむつかしひ、はじめから <u>しみておく</u> ほどに、のふでおくりやれ
		そなたのおし〇やつたことく、茶の湯にすいたれば、おくのまに <u>しかけておいた</u> が、いかにもりんりんりと、たぎつてある、
集狂言之類	つりきつね	道具をすつるといふて、から、わきのとをりより、ちとぶたいの方に <u>ひつはつておく</u>
		…わなをすてたと申程に、まことかとぞんじて、心やすうもどらふとしたれば、かへるみちに、 <u>はりすまひておいた</u> 、…
		はあ、わかねずみを、油あげに <u>しすまひておひた</u> は、かゝつたが道理じや、…
		…きつねのよう参る所において御ざある、みまはふ、されはこそ、さんさんに <u>ないておひた</u> 、…
		…まつ是をよう <u>しておひて</u> 、かごふでゐ申さう
集狂言之類	いぐい	いな事でござる、某がさんをおきはじまつて、たゞいまのやうな、ちろちろとして <u>おかれぬさん</u> をおいた事が御ざらぬ
万集類	はちたゝき	…きみやうまるといつしけんしん、あらかしましのひやうたんや、とてはるかたにゝ <u>すておかるゝ</u> 、それはむかしのけんしん、…
万集類	松はやし	…きのめづけさんせうのかは、まつかさかなにしやうくわんせよと <u>おしへおきて</u> 、みちもくらまの山ふかみ、ふかみ、みだうのおくにそ入たまふ…
万集類	ひいたる舞	正月のてようはいには、ゑぼし上下ちやくしつゝ、ぶるひけんぞくあつまり、かれのいはゐを <u>さめおく</u> 、ひきでものにとりては、…
		二月はねはんの、さがのしやかに参て、きせんくんじゅ <u>納めおく</u> 、中にもしやくそのの、つくつくと御らんじ、浄土のはると引たり
		七月にもなりしかは、爰かしこの山谷に、なるこなはを <u>はへおき</u> 、ほうほうからころろと、人もおはぬに引たり
万集類	寝替	もはや人もしづまつた、さらはまいらふ と云て、きやうと、けさと、ころも <u>ぬぎおき</u> 、…
万集類	ざぜん	此ほど文のつかひさせて、なんじをあまやかすによつて、かつにのつてそのつれな事を云、とかく <u>いけておひて</u> いらぬ、おなをりそひ
		身どもがよう <u>しておかふ</u> 、きうくつなりとも、あすまでいてくれひ、しぜんやまのかみがきて、此小袖をとれと云共、かまいてとるな

近世日本語資料

醒睡笑	策伝某小僧の時より耳にふれて面白くおかしかりつる事を反故の端にとめ置たり
	又ある時馬を一疋買ふてつなく其馬屋に金を弍枚入て置けり
	金堀を頼み過分に物をとらせぬけ道をほり置其身は恙なくおこなひうせたるなといふ者もありけり
	山崎にて上の殿へ下の殿の日記箱を取てをき何とこへともわたさす後にはいさかひになる宗鑑
	無常とは如何なる人の諸行そやそとははつかし内にたておけ
	そなたは我に阿弥陀經を教て善男子善女人といへといふておゐて今は又さういはぬとは一事兩様なる事をなとさんさんにからかひて表へ出ける時
	經をひろけ同し調子にあけ大旦那三藏ほつしめかようない物をもてきてをゐて人に難儀をかくるはやといへとも人はきかんなんたけな
	所詮法蔵坊を頼み我向ふの座になをし置大衆まねをせんに子細あらしと出仕をとくる
	われわれ錢を手にもち目にあてゝゐる時あれとゝの錢の中から目を見出して御座あるはといへと念比におしへ置
	与次郎走り来りまかせておけ与次郎かおろふ間は何共あれ目出たふはなすまいぞと
	とゝのあれともかうも頭巾を持ればといへと教をきて
	一兩年過八冊の調給候紛失て仕かと存奥に書付置也
	そと錢をほりて取かへ蛇を入て置たり件の亭主後にほりて見れば蛇有ヤレおれしやヤレ見忘たかと幾度も名乗つるこそ聞事なれ
	さらはとて池をほりふなを沢山に放し置毎日食を投あわれむ事久し
	ちととんなる客人手に取見て扱ゝ結構に御座ある召置れてよからんと申入らぬ物を何にせうそと仰あれば
	とらへておかんやうもあるまい
	仏とは何者そあやしき者也返すへからす人屋にこめよと閉こめておく
	近此蚊成人感にたへ歸りて中間に教置態人をよひ振廻けるに
	是御覽せよ山のいもを汁にしくはんと思ひ取寄置たれは見るか内にヶ様になりて候は
	彼薪のよにさして置たる鎌をうちわすれ宿に帰り漸思出し右の薪かたふる人のもとに行
	男やもめにて送らんにしもなければ重て妻をもとめ置しが
	兄に我子幼稚也そちへとり養育成人の後家を渡してくれられよといひ置終にむなしくなれり
	人の親として子に物の惜からんや女房にとらすといはすは銀を皆遣すつへしと工夫の上にて言置たる也
	後家に云渡したるは始の日付也そちへ書置は日付後也と申せし
	其一座過て市次郎親に向ひてわれに何共名がなくは大事もないか幸てゝの市次郎とつけて置れたるにやゝもすれは
	王故に歩をも馬をもたてをきてかくきやうの外につかふ金銀
	町屋の棚に面をかけておきたり
	宗長法師ある方にとまり暁いそき歸るとて下帯を忘れ置れしを持せて送りければよみてつかはす
	件晋陶酔漢生涯米穀一石瓶ニ入置、
	肴とりに立たる間に上座の客人四ッ目を左へなをし置ぬ
	不便なる哉と車にのせ鳥羽につれ行便船を尋ねのせてやりぬ彼者を旅人の宿に舟よりあけおく
	いつくよりとなく大鷹一もとそれて来り畠に居るをとらへ宿に帰り大なるかこに入て置けり
	件の者共弍三人つれ立ある市に出素麴をほして置たるを見付あれよあれよなま弥次郎かあるは弥次郎にしてくわせたいなど
	児見むとさしてきたれは笠寺のへ屋のすみにそひつすへておく

近世日本語資料

われは餅にさねかあれかしと思ふようへて置てならせてくひたい
村雨のふるとは見えて晴にけりそのみのかさをそこにぬきをけ
三位か物相と児の物相と同飯臺にすへならべて置たれば
児の膳にかうの物のあるを脇に居たる僧取てくふ児我か秘藏に思ふて置たるをといはるゝ時
久松といふ子を山寺にのほせ置たり親見舞とて寺にいたり一夜の程とまりたるに
僧目覚て我腰の廻りひやひやとするさぐり見れは何やらんぬれたる物也不思議に思ひ若衆の腰のまはりへそとやりて置…
玄旨法印公南都よりのぼらせ給ふに山城の井手の玉水にて人した帯を垣にかけをき水をあひける時
小刀慥におくといふ十の文字を一首の歌に書置し
簪あり舅の方へ見舞とてある町を通りしか新しき鴈を棚に出し置たり式百にてかい矢を通し持せ行
常に浅間敷小者二人つかふとて一人の名をは十人と付一人の名をは五人と付置たりしか
下女の出でそこにあれば蠅もせゝるにとりて置玉へといふ時いまいましやかんきんした手てとらふかなと
登るへき便なけれは高野山かねてしきおく法の狭筵
兼ての約束はやねからしのひ來れ橋をかけ置ん
亭主歸りたらは家根をありくは猫てあらふといふ時猫の鳴まねをせよとしめし合せておきつるが
三宝とめて朝食をふるまはすは成まいそらね入しおきて帰るを知らぬふりにせんこそよからめと思案しけれは
昔より上人の靈前へそなへ物にふらではかなはぬとかいておいた撰釈集にあるかいや難波に雪は法然の御調物と
境にて質屋に米を十石入置錢を持て來てはその代程米を取て行
三條の辻に面白き物を棚に出して置参らせた何そや楠にて仕たる風炉と釜とを見て御座あるとうつけをいふやつかな
虎狼野牛といふ四字をかけて置たり
麦粉を食せんと取出し置立まわる間に暴風吹おろし跡なくちらしけれは
飯の汁を一口すひ此汁の実は何そと問ふ姥それはくゝたちの汁候よ人の口きらふとていや去年八月からなまいてをいたと
暁より起て朝食をいそき用意し内の者にも早々くらはせ棚もと其外掃除きれいにして置たり
言伝られし人と文と京につきしかと送れる二種は大坂に忘れ置たりとて渡さゞりけれは
其疾藁を幾重もあみかけ焙炉の紙につゝみ詰置候儘といわら壺と號する也
若狭の太守武田殿無縁の出家をかゝへ置れ寺なとたて
藏に目のぬけたる鯛をかけて置り亭主元日の朝見付大に機嫌をそこなふ時にこさかしき中ゐの出で…

好色一代男	「世之介もはや小学に入るべき年なれば」とて、折ふし山崎の姨のもとに 遣はし置き けるこそ幸ひ、… 両替町に春日屋とて母かたの所縁あり、このもとへ銀見習ふためとて つかはし置き けるに、… 鴨の長明が孔子くさき身の とり置き も、門前の童部にいつとなくたはれて、 「…我との道路を忘れずとや。さりとはむごき御こころ入れ、いかにして 捨置く べきや」と、… 所の 仕置 咄、 中寺町・小橋の坊主ごろし、色町を覗き兼ねつる隠居の親仁の、 とつて置き 銀をみなになす事、これぞかし。 揚屋町に行けば、日來の大臣よろしく さばき置 かるとみえて、… よしあしのへだてもなく、五匁づつに 定め置く こそ正直なれ。 御 仕置 かたく、 麓引捨てし柴積車の上に おろし置き て、その里にゆきて、椎の葉に粟のめしを手もりに、茄子香の物をもらひて、 しのび戸棚と申すは、これも内証より通路仕懸けて、男を 入れ置き 逢はする事なり。 空寝入りの恋衣と申すは、次の間の洞床に後室模様のきる物、大綿帽子、房付の念珠などを 入れ置き て符作り、 女よりさきへ男を廻し、かの衣類を着せて 寝させ置き 、さるかみさまと申しなして、下々に油断させて逢はする手だてもあり。 後世の引入れといふは、美しき尼をこしらへ、身は墨衣を きせ置き 、なりさうなるおかた達に付けてつかはし、 しるしの立ちぐらみといふは、出合茶屋の暖簾に赤手拭 結び置き ぬ。 男は板の下にあふぬきて寝やうに、一尺あまりのすきを置きて 拵へおき ぬ。 一念通ふこそうれしけれ。いかでそのままそのころざしを 捨置く べきや。御望みにまかせ申すべし。…」 面白からずとて、この所にも口きく程の若き人、新町に手あひを拵へ、 ためて置いて 一度に島原で遣ひ捨つる事、もつともなり。 「…」と、よろづよしなに申しなしてはよろこばせ、太夫さまの事ならばと、常々 思はせて置き 、黠しき子細ありける。 迎ひの遅き女郎、茶釜近くあつまりて、 取置く 椀箱のじやまなし、こごり鮎の鉢をあらし、 湯の水のと口の隙なく、丸盆割りてさらぬ体に 直し置き 、城浪が三味線ふみをりて、しらぬ顔にして置き所かへらるるなど、くらがりより見ての笑しさ、 よし田が上がへの棲まで流れよる時、禿の小林、我が ぬぎ置き し黒茶宇のきる物にて残らずしたみ、かいやり捨てける。 喜右衛門方の二階座敷をかこうて、懸物には白紙を表具 しておか れけるは、ふかき心のありさうにみえ侍る。 禿を呼びよせ、「なうて叶はぬ物ぢや。 取つておけ 」と申されし、その見事さ、いつの世か又あるべし。 …『顔が氣にいらぬ』と口舌仕懸けられ、かの男是非もなく『それが今日にみえましたか。何やかや 貰うて置いて から、あまりむごい仕方でござる。 田舎大じん印籠あけて、いく菓かあたへけるを、のむ顔して灰吹に捨てて、禿に紙燭灯させ、雪隠の入口に 付け置き て、その身は世之介に取付き、… 八畳敷の小座敷よろづ新しく、「京世之介様御床」と、張札 して置く こそかはいらしき。 さて、かたさま御 残し置き 候独笑ひの御肌着、十四日にふと御事ども思ひ出し、下に着て出申候を、 世之介と申しかはせし事を忘れず、 書置 して剃刀手にふれし事もありしとなり。 この人を 捨置き 、それよりすぐに道頓堀にまかり、畳屋町にしるべの役者のかたより、科なき身にもしのび駕籠 好色五人女 浮世蔵と、戸前に書付けて つめ置き ける。 その男は役に立たずにて、今は肥後の熊本に行きて奉公せしとや。世帯やぶる時分、暇の状は 取つておく 。 男、礮のかたを見て、「それ、持仏堂の脇にもたし 掛けて置き ました」と働きける。 清十郎年ごろ語りし人ども、「せめてはその跡 残しおけ 」とて、草芥を染めし血をすすぎ、屍を埋みて、しるしに松・柏をうゑて、清十郎塚といひふれし。 取りいそぎ宿を出てゆきしが、祇園町の仕出し弁当屋の釣簾に付紙、目印に錐と鋸を 書置き しが、このうちへおせん入るか見えしが、中二階にあがれば、 殊更、男を大事に掛け、雪の日、風の立つ時は食つぎを 包みおき 、夏は枕に扇をはなさず、 二人都への 書置 残し、入水せしといはせて、この所を立ちのき、いかなる国里にも行きて、年月を送らん 喧嘩し、ひけとる分かくし、 買置 の商人損をつつみ、これ皆、闇がりの犬の糞なるべし。 風俗いやしげになし、編笠ふかくかづき、おさんは里人に あづけ置き 、無用の京のぼり、敵持つ身よりは、なほおそろしく行くに、 「今宵鼠めは」とつぶやく片手に、椎茸のにしめ・あげ麩・葛袋など 取おく もをかし。 つね申せし言葉のすゑ、身の 取置 までして、最期の程を待ち居しに、おもへば人の命や」

	子細は、そなたの兄弟契約の御かたより、当寺へ 預け置き 給へば、その御手前への難儀、かれこれ覚しめし合させられ、 「その身は念比に契約の人、わりなく愚僧をたのまれ 預りおき しに、その人、今は松前に罷りて、この秋の頃は必ずここにまかるのよし、 この事、お七親より聞きつけて、「御嘆きもつともとは存じながら、最後の時分、くれぐれ 申し置き けるは、… なり行く跡をとほせ給ひなば、いかばかり 忘れ置く まじき。二世までの縁は朽ちまじと申し置きし」と、様々申せども、中々吉三郎聞分けず、 二世までの縁は朽ちまじと 申し置きし 」と、様々申せども、中々吉三郎聞分けず、
好色一代女	あなたこなたの通はせ文、皆あはれにかなしく、後は 捨置く 所もなく、物毎いはぬ衛士を頼みて、あだなる煙となすに、諸神書込みし所は消えずも、 男ざかりの座敷へはすこしぬる過ぎて見えける。一人を金一角に 定め置き しは、かるゆきなる呼物なり。 禿いやりて、供の者に 持たせ置き し白き奉書包みの煙草とりよせ吞むなど、延の鼻紙ひざちかく置きて、かりそめ遣ひ捨て、引舟女郎をまねきよせ、 うき世とてさまざま、我転職つとめけるうちに、頼みに掛けし客三人までありしに、ひとりは大坂の人なるが、檳榔子の 買置 して家をうしなはれける。 かく のせ置け ば、なじみて挟箱もろふ時、人がないとはいはせぬためなり。 後は酒に乱れ、勝手より醒き風もかよひ、一夜づつの情代、金子二歩に 定め置き 、諸山の八宗、この一宗をすすめまはりしに、いづれの出家も珠数切らざるはなし。 夜毎に我行きて吟味して、寝間の戸ざしを外から肱壺うたせて、姪と簀とを 入れ置きて 、無理に『宵から寝よ』と錠をおろしてかへりしに、 「銀八十目にさしつり、内証借りにして、その代りには、朝夕念ずる、弘法大師の御作の如來を済ますまで 預け置く べし。 そもそも針刺の数を 改め置きて 、仕舞ふ時、又針を読みて、よろづを大事に掛け、殊更に身を清め、さはりある女は、この座敷出べき事にあらず。 腹がむつかしうなりなば、その親仁さまの子にかづけて、御隠居の跡を我が物に 書置 させまして、すゑ世わたり」と、分別おちつけて行く程に、 「あれはくるしからぬお客、さあこれへ」と、中二階へ あげ置く 。 この外、かやうのたぐひの女、身をぞんざいに持ちなし、むかしの悪病、山帰來などにして 隠し置き しが、 はじめの程は、つれあひも合点にして、人の手にさはり、腰を叩く程の事は、余所見 して置き しが、色ある男、毎日、一本一步の扇、調へにくる人あり 上間屋・下間屋数をしらず、客馳走のために、蓮葉女といふ者を 拵へ置きぬ 。 …かりそめの慰みを銀二匁、中にも形の見よきに、衣類のうつくしげなるをきせて、銀一両とすこし位を 付け置きぬ 。 この中に大振袖のきるもの、帯一筋、二布物一つ、木綿足袋一そく、これ皆かし物に 拵へ置きて 、そののそんれう、布子ひとつつを一夜を三分、帯一つを一分五厘…
西鶴諸国ば	慈悲の世の中とて、諸人のために、よき事を して置く は、紀州掛作の、観音のかし傘、二十本なり。 昔よりある人寄進して、毎年張り替へて、この時まで 掛け置く なり。 大事にかけて、油差持ちしに、 はづし置 きたる杉戸こけ掛かり、おもはぬ怪我をいたしける。 寛永二年、冬の初めに、津の国池田の里の東、呉服の宮山、衣掛松の下に新しき女乗物、誰かは 捨て置き ける。 少人にあやまりもあればと存じ、左の袂に印を 付け置く のよし、申し上ぐる。 …身もだえして嘆き、世にながらへても、せんなしと思ひ極め、心にある事 書置き して、小浜の海に身を投げけるに、 「…」と念比に 申し置 かれて、つひに仏の国へまゐられけるに、 木の葉の雫を口にそそぎ、我が一重をぬぎて、着せまゐらせ、跡へはよその歯骨を 入れ置きて 、それより負ひたてまつり、… 「先づこの度はのけ」と、出さまに鍋釜を提げて、おもてに 捨て置き 、はじめの抜け道に出るに、 されども一念かけし弥平次を 打たでは置く まじ。御心安かれ」と、御首に物を語りて、 かの塚を掘るに、初めのしやれかうべなき事、不思議ながら、よも 打たで置く べきかと、心を突くせし甲斐なく、判八も又、返打ちにあひぬ。 その後、不思議なる事は、その寺の冠木門、数百人にしても、うごくまじきを、ある夜屋根ばかりを、海道に おろし置きぬ 。 近年関東のかたに、友呼び雁といふ物をこしらへ、広野にはなちがひ して置き しに、空行く鳥をよびおろし、さまざまなつけて、 これをかなしく、独りねられぬままに、世の無常を觀ずる時、 寝させ置き たる二人の子供、現に声をあげて、びく身のうごく事三十七度なり。 つねづね取り溜めし鯉の中に、女魚なれどもりりしく、慥かに目見じるしあつて、そればかりを 売に残して置く に、いつのまかは、鱗にひとつつ巴出来て、… 後には水をはなれて、一夜も家のうちに寝させ、後にはめしをもくひ習ひ、また手池に はなち置く 。 むかし功者なる、茶の湯を出されしに、庭の掃除もなく、梢の秋のけしきを、そのままに しておかれ しに、客もはや心を付けて、 亭主かけ出るを、とつてしめ、かの男をはじめ、家内残らず繩を かけ置き 、火打の光に、女を見付け、さまざま我がまましてにげて行く。
男色大鑑	博奕にまけてのあくる日十五ぐるひすると、さがり口の 買置 して飛子を咄すと。 吉原の太鼓に羽織かすと、川原のこんがうにこまがね 預けて置く と。

紅の脚布を内懷にまくりあげ、上着の衣裏をかなしみ、首筋を取りのけ、木の枝に懸け置きし木地笠をとりどりに、
はや御出家はましまさず、世を思ひ葉の二またの竹に、きのふの日付にて書きおかれしは、
「とかく言葉では申しがたし。正八幡の内殿に所存を込め置く」の由申せば、すぐに参詣して、神主右京に子細をきけば、…
「御病のためとて日参、願状の箱納め置かれける」と申す。
かやうの美少、すゑの世語りにも、せめてはこの御書置きなりとも黒焼きにして、こころの定まらぬ当代の若衆どもに吞ませたし。
若道の名香とするして、なにものか中門に張りおく。
その外浮沓・棒火矢を申し立てに、御合力分二百石くだしおかる。
夫に離れて後世を捨てて、河内の国道明寺に、十九の夏衣を墨に染めし以来、身の取置きの便もなかりしに、
我をかなしみ、この者門前につれて書き付けおかれし御方、色々思案めぐらすれども、知れざる事をなげき、諸神をいのる事大方ならず。
大右衛門横腹を通されながら、我が宿にかへり、態と乱気の書置きして、自害残る所もなし。
一方は藤井武左衛門とするし、一枚は春田丹之介と書き置く。
いさぎよく殉死の心懸け、無紋の上下・小脇指、書置箱に生きながら魂を入れ置きしに、世は知れぬ物ぞかし。
いさぎよく殉死の心懸け、無紋の上下・小脇指、書置箱に生きながら魂を入れ置きしに、世は知れぬ物ぞかし。
我が指替へを残し置き、立ちさまに左の袂から一包、金子百両ありしを、枕近きゐざり、盲目にささやきて、
「各々頼むなり。これを道のつかひにして、源介殿を国元へかへしてたまはれ」と申し置きて、…
過ぎにし十月より今月今日までの事どもをかたり、京都の別れに残し置きたまひし物をも、そのまま封じ目をきらず、この度かへしぬ。
文侯、まことある臣と、琴にくづれたる南壁を、たださずおかれけるとなり。
小輪に命をくれしもの、たとへば身をくだかるればとて、これを申すべきや。この儀、兼ねて御耳に立て置きしに」と、さらになげく気色もなし。
これもたはごととは思ひながら、町の出口琵琶首と申す所に人を付けて置くに、案のごとくその人に逢ひて、
「…旅夜着の下にこがれて、物いはぬ契りをこめ、左の袂に伽羅の割欠けを入れ置きしが、それは」
「さてはこの鳥の所望と見えたり。最前より一命を進じ置きたる上に、何が惜しかるべし」
蘭丸を見ては、人のおもはくもかまはず、手すきを待ち兼ねし人をさし置き、櫛も外なるを取り出し、心静かに靦粧をつくりまゐらせける。
露路の猿戸を錠おろして、雨戸も内よりかため、掃庭に葉右衛門独り立ちわづらはせ置く。
我最後の時、早桶の内へ、この一腰を、何か惜しからじと入れられしが、これは重代を取り違へ、さる侍方より内証にて預り置きしなり。
されば似るを友とする世の習ひ、節木松斎とて、茶流の調度を預けおかせ給ふ坊主、この恋を請け取り、
「これなん都堀川の母の許へ、今はの形見と、便りに言ひ送り給はれ」とさし置く所へ、和尚紫衣をまくり手して、生者必滅の理をしめし給へば、
「春は花秋は月にとたはぶれて詠めし事も夢のまたゆめ」と書き置きて、いなや腹かき切れば、
四五枚読み兼ね巻きかへし、かの男は九左衛門に預け置き、その身は曙早く登城して、御前に出、
身の取置きもして、死をまつ事何か思ひ出なるべし。
玉鉾の道を一筋に女郎ぐるひに悩み、世々の遊女の筆跡、かたのごとくに集め置きしが、
膳棚のはしに栴落しをしかけ置かれしは、出家の身にも荒れる鼠はうるさくや。
心にある事のみ取りまぜ、筆のとまりを定めずあらましに書き置きぬ。
「何事も夜明けてのせんぎ、それまではその者汝等に預け置く」と立ち入るを呼びかけ、
金剛の火神鳴の久蔵も、一命はすてけれども、太夫を思へば無念ながら胸をおさへ、しるべの人あらば預け置きて、大勢相手思ふ折節、
「今となつてはいなどは申し。わが身はあづけ置く」と申せば、…
残れる火打石を取り集めて、東山新熊野の方陰にはこばせて、枯葉の小笹が奥に塚をつき、その御方の定紋なれば、しるしに桐の一本を植ゑおき、
世にありし時かかへ置きたる子に、浅之丞と申せしは、すぐれてうるはしく情もふかく、諸人の恋種となりぬ。
したい事してあそび、寺そのの宗旨に学びおきたる経を読み、諸旦那に衣を着て逢ふより外勤める事もなく、
これに心を掛け奉る御宝前、はらひ清める法師の内陣をあらためけるに、一つの願状籠め置きぬ。
ただ一筋にねがひけるを、生如来の捨ておかんせぬめりと、人の山崩れて笑ふべらなればと、君ゆゑの恥はなんのいの。
ここはとかくして、命にかけて置きしも至極なり。

	番の者寝声にて、「女一人」とこたへて帳に 付けおく よし。
	この道すきものの我なれば、最前よりとくと目ききは して置く 。
	これもいやとはいはず 畳みおき しに、灰吹きを捨てにやらるる。
	これ皆亭主半弥が心ざしふかし。松茸かぎりもなく、宵より人遣はして 植ゑ置き けるとなり。万事おとなしき仕方ぞかし。
	猿に袴を着せて看板出し、えびす橋筋に「根本浮世楊枝」とて、芝居若衆の定紋を うちつけ置き しに、
	二階にあがるを見しが、筆ばやにその事にはなく 書置き して、惜しきは命、「これは」と、なげきて帰らぬ若衆、さても死なれぬ所を、…
	かの若衆に年竹をもたせて 立たせおき 、子細らしく印をむすびければ、しばしありてこの竹をうちけるほどに、
	かの男は目覚まして後、剃られし髭を惜しみなげきかなしむ事、是非もなき身とて、髭見世を とりおき 、この事さたなしにかへりける。
	京の人にも目鼻あり、大坂とても手足はかはらず、小判はここにも 落としてはおかず 。
	せめては若道供養のためと思ひ立ち、延紙にて若衆千体張貫にこしらへ、嵯峨の遊び寺に をさめ置き ぬ。
	「…若衆はたがひの心ざしよりかため、命をその人に 捨て置き 、自然の時の後だとも末々の頼もしづく、…」
	筋目あらばよき大名の道具なるべき人がらも今、行末の芸の事までも、岩井半四郎と素面の時 沙汰し置き ぬ。
	「さては天から降りたる一箱」と大笑ひして、明けもせずそのままに 捨て置き ぬ。
	「それがしこのあたりの人形屋なるが、この形ひとしほ心を込めて作り、看板に 立て置き し事年久し。…」
	これを思ふに、まったく欲に非ず。無分別といふ人は のけて置き て、なるべき事かとおもひめぐらす程きもにめいじ、
日本永代蔵	水間寺の銭を 入れ置き 、
	庭山にまさりて庭藏の詠め、四季折々の 買置 、これぞ喜見城の楽しみと思ひ極めて、…
	昼は家職を大事につとめ、夜は内を出ずして、若い時 ならひ置き し小謡を、それも両隣をはばかりて、地声にして我ひとりの慰みになしける。
	これ皆、大和・河内・津の国・和泉近在の物づくりせし人の子供、惣領残して未々をでつち奉公に 遣はし置き 、…
	この弟子、おとなしくなりて一分見世を出しけるに、親方にかはらず鍋蓋・火燵箱の 仕置 、これより外をしらず。
	母親の持たれし筒落掃・藁箒子・洪団扇は、「貧乏まねくといへども、この家の宝物」とて、乾の隅に をさめ置 かれし。
	この男、家業の外に反故の帳を くくり置き て、見世をはなれず一日筆を握り、…
	両替の手代通れば銭・小判の相場を 付け置き 、…
	繰綿・塩・酒は穢土棚の状日を見合せ、毎日万事を 記し置 けば、紛れし事はここに尋ね、洛中の重宝になりける。
	土用干にも畳の上に直には置かず、麻袴に鬼緞の肩衣、幾年か折目正しく 取り置 かれける。
	忙はしき時の人遣ひ、諸道具の 取置 もやかましきとて、これも利勘にて、大仏の前へあつらへ、一貫目につき何程と極めける。
	屋敷の空地に、柳、柊、樺葉、桃の木、花菖蒲、じゅう仁など取りまぜて 植ゑ置き しは、ひとりある娘がためぞかし。
	座敷に灯かかやかせ、娘を 付け置き 、「露路の戸の鳴る時しらせ」と申し置きしに、この娘しをらしくかしこまり、灯心を一筋にして、…
	座敷に灯かかやかせ、娘を付け置き、「露路の戸の鳴る時しらせ」と 申し置き しに、この娘しをらしくかしこまり、灯心を一筋にして、…
	この銀朔日に請け取り、五匁の屋賃を のけて置き 、白米のよきに味噌・塩・薪をととのへ、
	とても埒の明かざる僉議なれば、手代ひとつに心をあはせ、 買置 の有物に勘定仕立て、七月前をやうやうに済まし、
	今この身になりて思ひあたり、諸芸のかはりに身を過ぐる種を 教へお かれぬ親達をうらみける。
	八つ屋敷がたに出入り、九つ小判の 買置 、十で丁ど治まりたる御代に住める事を目出たし。
	いつとても 捨て置く 骨を源内もらひ置きて、これをはたかせ、又油をとりけるに、思ひの外なる徳より分限になり、
	いつとても捨て置く骨を源内 もらひ置き て、これをはたかせ、又油をとりけるに、思ひの外なる徳より分限になり、
	諸事をかねがね たくはへ置き し故に、渴命に及ばざりき。
	これにも女頭ありて指図をして、客に一人づつ寝道具あげおろしのために 付け置き ける。
	年寄りたる手代は、我がためになる事を しておく 。
	鍛屋も仕合せのある時、来年中の台所物、前年の極月に 調へ置き 、
	心の海広く身代真臘の風、帆柱の 買置 に願ひのままなる利を得て、
	富士を白銀にして持ちたればとて、武蔵野の土、羽芝の煙となる身を知りて、老いの入り前かしこく 取り置き 、世にある程のたのしみ暮し、…

…汝等、過賄の種を忘れな」と、 云ひおか るも外の事なく往生いたされしを、各々嘆きを止めて取り置きける。
…汝等、過賄の種を忘れな」と、云ひおかるも外の事なく往生いたされしを、各々嘆きを止めて 取り置き ける。
「親仁遺言に、『すぎはひの種を大事』と 申し置 かれしが、菜種は油のしぼり草、この種の事なるべし」と一筋に思ひ入り、…
…いっぞはこの 買置 するか、又はこれを作らせて分限になる事を明暮工夫めぐらしける。
この寺の御開帳、七日を古代より判金一枚づつに 極めおか れしを、菊屋、二貫目の身代にて三度まで開帳すれば、
末々一度は倒るるつものに、五七年も前より覚悟して、弟を別家に仕分けて、分散にこれを遁れさし、京の者は伏見に名代を替へては屋敷を もとめ置き 、…
…大坂の者は在郷の親類に田畠を 買はせ置き ぬ。
美形ならば、よもや籠は 売らせてはおか じ。
町人も、親にまうけたためさせ、讓狀にて家督請け取り、 仕にせおか れし商売、又は棚賃・貸銀の利づもりして、…
欲に目のあかぬ人、…大分湊に 積ませ置き て、「去年たばこは水にしめされ思はしからず。当年は湯か塩につけて見給へ」と、皆々つき返され…
これ程ふしぎなる事なしと、かの分銅屋 見廻り置き て語りぬ。
…庭に米俵、三月頃までの用意、払ひは二十日ぎりに、取り方ばかりに して置き し手まはし、内証のよろしき所見えたり。
金銀昔に増さり、次第に沢山になりけるを、どこへ 取つて置いて 見せぬ事ぞ、合点のゆかぬ事なり。
たとへば、借屋住みの人は、毎日その割にして、家賃を外に のけ置く べし。
借錢の済ましやうは、まうけのある時その半分 のけお き、一貫目の内へ百目づつにてもあぐれば、十年には済む事なり。
堺といふ所は俄分限者稀なり。親より二代三代つづきて、古代の 買置 物、今に売らずして時節を待つは根づよき所なり。
年中工夫にかかり、昼夜の枕にひびく時計の細工 仕掛け置き しに、その子大方に仕継ぎ、その跡孫の手にわたりて、…
この所、唐物の 買置 、勝れて安き相場物の年累ねても損ぜぬ物、買置きて利を得ぬ事なし。
この所、唐物の買置、勝れて安き相場物の年累ねても損ぜぬ物、 買置 きて利を得ぬ事なし。
いかに珍しきとて、この 買置 国土の費なり。
掛銀は取りよきから集むる事なり。いつにても手の物にして 残し置き 、思ひの外の隙入り、あるいは留守とてたびたび足をはこびぬ。
家の宜しき事ばかり申してむつかしうかかれば、外を さし置き 、それから済ます物ぞかし。
払ひ方は少しの物から済まし、大分の所を 明け置く 物なり。
しかもつきの悪き銀を、「こなたへ 懸けて置き ました。いやならいやになされ」と、猫の蚤見てあしらひもせねば、これもぜひなく、とらぬがそんと帰る。
秋冬少しの間に毎年利を得て、三十年余りに千貫目の 書置 して、その身一代は楽と云ふ事もなく、子孫のためによき事をして、八十八にて空しくなりぬ。
書置 見ぬうちは頼もしく、何れも開くを待ち兼ねしに、
九之介も、身の程は覚悟して、兼ねて 書置 したため置きしを、手代ども集まり、
九之介も、身の程は覚悟して、兼ねて書置 したため置き しを、手代ども集まり、
心底残らぬ内談、石流昔のよしみと、所の人々これを感じ、まづまづ 書置 開いて見しに、皆々横手を打ちつけるこそ道理なれ。
有銀千七百貫目はつかひくづし、これはし借銀の 書置 、興を覚ましける。
この男心ざし深く、藁葺の庵を渡して扶持を 分け置き けるに、後は七八人もありて物かしましかれど、
又赤堀宇左衛門と云ふ男は、この身になりても鉄砲を 残し置き 、無用の盗み鳥、野山の狼を殺し、鞘咎め・武勇達、年中我がままをふるまひける。
それぞれの人心、かく替りあるこそ浮世なれと、 かくまへ置き し主は、この善悪をたださず置きしに、世の浪人改めに、皆々所を送りける。
それぞれの人心、かく替りあるこそ浮世なれと、かくまへ置きし主は、この善悪を たださず置き しに、世の浪人改めに、皆々所を送りける。
万屋はひそかなる手前者、独り子に吉太郎とてありしが、十三歳の時、鼻紙に小杉入れしを見て勘当切り、播州の網干に姨ありしが、この許に 遣はし置き 、
自から商売かへて、しつけぬ事はあやうく、年々大分金銀へらして、 買置 すれば下りを請け、金山のそん銀、ほどなく家ばかりになりぬ。
親仁なげき給へば、倅子いふやうは、「時節のよき折から家普請を して置 いたればこそ、このたび売るに仕合せ」と、これに無用の自慢なり。
徒居を外よりのとがめをうたてく、瀬戸物見せかけばかり 出し置き 、値段とふものあれば、百の物を百とありのままにいひければ、これをねざれどまけず。
「この外金子百両、女房後々寺参り金に、この五年前に のけて置き ける」と、包みながら封じ目に年月月日書き付け置きぬ。
「この外金子百両、女房後々寺参り金に、この五年前にのけて置きける」と、包みながら封じ目に年月月日 書き付け置き ぬ。
小者これを見て、「さてもさても商下手なり。 包み置き たる金子は、一両も多くはなるまじ。利発なる小判を長櫃の底に入れ置き、…

小者これを見て、「さてもさても商下手なり。包み置きたる金子は、一両も多くはなるまじ。利発なる小判を長櫃の底に 入れ置き 、…
毎年元日に 書置 して、四十以後死をわきまへ、正直に世渡りするに、自然と分限になつて、泉州堺に小刀屋とて長崎商人あり。
ことさら名物の諸道具・唐物・唐織、先祖より五代このかた 買置 して、内蔵にをさめ置く人もあり。
ことさら名物の諸道具・唐物・唐織、先祖より五代このかた買置して、内蔵に をさめ置く 人もあり。
又、内儀十四の嫁入して敷銀五十貫目、その時の箱入封のまま かさね置き 、その娘縁に付く時、これを持たせておくりける人もあり。
そもそもの 書置 は三貫五百目なりしが、二十五年がうちに、ひとりの利発にして仕出し、年々書置かさみて、…
そもそもの書置は三貫五百目なりしが、二十五年がうちに、ひとりの利発にして仕出し、年々 書置 かさみて、…
前後かやうの事は又あるまじきと思ひ入り、念比なる友に商の望みを語りて、一人より銀五貫目づつ、十人より五十貫目借りて、このりんずを 買ひ置き けるに、…
内井戸、石の井筒に取りかへ、人の物借らるる程は取り込み、ひそかに田地を 買ひ置き 、一生の身業を拵へ、その外、子どもを仕付銀まで取りて置き、…
内井戸、石の井筒に取りかへ、人の物借らるる程は取り込み、ひそかに田地を 買ひ置き 、一生の身業を拵へ、その外、子どもを仕付銀まで 取りて置き 、…

近世日本語資料

五十年忌歌念仏	身は国へ帰つて、旦那へは道具屋が出来さぬ分で <u>済しおく</u> 。
	あの道具屋の手前は、親仁から、百五十両か八貫目、 <u>渡してさへ置</u> いたれば、波風立たず嫁入が延びる。…
	勘十郎殿さつきにから、切羽脛金する通り、銀渡したら御損であらう、 <u>断つておいた</u> ぞと、苦り切つてぞ申しける。
	そなたと我とに、あの仁から一筆 <u>取つて置く</u> ならば、我も旦那の手前が立ち、其方も下細工へ手間遣らいでも大事なし。
	父はいよいよ腹を立て、勘十郎はいづくにある。何に恐れて引き込むぞ。清十郎めが入れ物吟味し、衣類、諸道具 <u>押へ置き</u> 、…
	オ、過分過分、確かに届き、請け取つたが、その状も請取も大事にかけ、笠の頂に <u>入れ置き</u> 、その笠を道頓堀の群集に、芝居の木戸に預けて、…
	もつとも、我ら私商ひ損金の流用に、道具の代金暫く <u>取り替へ置き</u> たれども、追つ付け右の金は才覚して、道具屋へ済し置く。
	もつとも、我ら私商ひ損金の流用に、道具の代金暫く取り替へ置きたれども、追つ付け右の金は才覚して、道具屋へ <u>済し置く</u> 。
	きつと仕置きに行なふべきが、手を出して人も殺さず、盗人に極まる証拠なければ、慈悲をもつて <u>助け置く</u> 。
淀鯉出世滝徳	こつちへ <u>任せておか</u> しやんせと、大門際に待ちかくれば、
	オ、 <u>踏まいでおか</u> うか。重ねてかやうな慮外をせば、下々に打ち殺さする、用心せよ。駕籠持て来いと、
	こなさんはまづお帰り、内をしまうて、夜中過ぎ、八つの時分にまたござんせ。 <u>金調へて置き</u> ませう。
	なう <u>生けて置</u> いては、請け出して、女夫になるが情けない。わしには大事の男がある。その男と縁切れる。恋路の仇となる故に、今刺し殺す。
冥途の飛脚	九日、十日両日のうち、その地亀屋忠兵衛方より、右三百両請け取り、内々 <u>申し置き</u> 候ことども埒明け申さるべく候。
	さりながら、いかにねんごろなればとて、先に断り <u>立てお</u> いて、使へば借るも同前。
	これを思へば、世の中にお <u>仕置</u> 者の絶えぬも道理。
	花車、こゝへ寄らつしやれ、女郎衆も禿どもも、忠兵衛がことにつき、 <u>耳打つておく</u> ことがある。
	人に損かけ、苦勞をかけ、孫右衛門が子で候とて、 <u>引き込んでおか</u> れうか、
博多小女郎波枕	乗合の京の奴、垣立より顔差し出し、合点ゆかぬと思ふ面付き、 <u>生けて置</u> いたら頬桁叩き、後日の難儀見るやうな、…
	商売の荷物、衣類はそのまゝ船に <u>捨て置き</u> 、肌に一銭貯へなければ、二度に二つの下着を売つて、今日までの露の命をつなぎしぞや。
	来る道すがら <u>見てお</u> いた、一文字屋の江口、丸屋の勝山、同じ家の薄雲、油屋操、和泉屋小倉、車屋の大磯。
	否とも応とも申されぬ、世界中がこのとほりに身持つたら、私らが商売は <u>取りおく</u> だやとぞ笑ひける。
	後にはあの婆たつた一人。留守のことはお家主頼みますと <u>言ひ置き</u> 、今日か明日は戻られう。
	破れ家を手前普請、根太も追つ付け張るはずで、板も <u>買ひ置く</u> 。
	方々に <u>預け置き</u> し金銀、荷物についてのことか。
	これ姥、掛硯に <u>入れ置き</u> し割符の手形。これがあれば一大事。入れ物ともに道具屋の手へ渡つたか。
	ヤ反りを打つておどしても、割符を <u>取らずにおか</u> うかと、ずはと抜けば、
	今の小町屋惣七は、博多小女郎がならし竹、いつも心に <u>かけて置く</u> 。親のかいきにあや錦、もはや都を見んことも、またとなるまい、…
女殺油地獄	他人ならば少々は見逃しにもいたし、御免なされ <u>くだしお</u> かるゝやうの、取りなしをも申すべきところ。
	今日は二日、際というて明日、明後日。万事を <u>さし置き</u> 、今日のうち三貫目調へて渡さつしやれ。
	ヤア山伏の法を知らぬか、験を <u>見せずばお</u> くまじと。
	両替町の銭屋から灯二升、梅花一合、今橋の紙屋から通持つて灯一升、当座帳に <u>付けておく</u> 。
	ア、お沢様の心推量した。遣りにくいはず。こゝに <u>捨てて置</u> かしやんせ。わしが誰ぞよさそな人に拾はせましょ。
	ア、思ひ出した。新町に紙入れ忘れて来た。中にうめくほど銀 <u>入れて置</u> いた。つい一走り取つて来う。刷毛も来いと、立ち出づる。
	これはしたり、また跡偏。しからば、明日にも与兵衛が参り次第、酒でも飲ませ、こゝに <u>留め置き</u> 、…
薩摩歌	御奉公は縁の物。これを取得に <u>召し置</u> かれば、常江戸、脇城、国脇まで、申せば事も長いこと、…
	十二の年から十九まで、人の盛りを <u>捨て置</u> いて、仮令道を守ればこそ。
	女子衆が見つけて、こゝへ失せたは曲者、夜明まで <u>留め置</u> いて、おとな殿へ渡すとて、錠を下ろして動かせず。
	持つていきやと、徒の契りも徒にせず。心の底に <u>結び置く</u> 、露の情けぞあはれなる。
	これ、鼻の先にぎろつく、この母に孝行なら、寺も精進も <u>取り置</u> いて、今日にはにつこり笑うて、生臭物で祝うてたも。
	銅鑼のやうなる声あららげ、エゝ親仁殿がなまぬるい。 <u>括し上げてお</u> きもせず、あいつらが口説の、揚屋の亭主になる気か。

近世日本語資料

	見知らぬとて是非もない、手前に不断 <u>飼ひ置いて</u> 、外から上へ聞えては、同罪といふ、一筆の身抜けがならうと思ふか。
	これこれ、たと晒布が干してある。この端をきつと結びつけ、こちらはこの木で <u>留めておく</u> 。
	尋ね巡るや、はうばうの津。潮の辻なる裏貸家、かねて <u>聞きおく</u> 目印あり。
丹波与作待夜のこむろぶし	こちは八貫 <u>出してお</u> く、負ければ、それで取り遣りなし、勝てば蒸して十六貫。
	先の銀を渡して、やうと往なせた、あれらとの付合ひ、 <u>重ねてお</u> いてもらひたいと、呟けば、
	馬を質に押へて、あいつにきつと済させ、小まんを内へ <u>入れてお</u> きや。皆御大儀でござると、
	宿の庄屋へ <u>預けお</u> く、この方よりも人をつけ、代官所へ渡すべし、立ち上がれと引立つる。
	くどくどき、馬引き出し、 <u>預けてお</u> いた脇差は、そこらは抜からぬ。
	よき敵の首取つて、討死するを侍の、死ににくい死にとはいふぞ。 <u>覚えてお</u> け、関の小まんと心中の討死を手柄とは、一切経にもないこと。
	謝つたり、左内殿、この仕合せの上なれば、心も闇と罷りなる、万事貴殿に <u>任せお</u> くと、手を合すれば、
夕霧阿波鳴渡	思ふところを逆様な、こりや酷らしい、どうぞいの。わしが心變つたら、 <u>踏んでばかり置</u> かんすか。叩いてばかり置かんすか。
	思ふところを逆様な、こりや酷らしい、どうぞいの。わしが心變つたら、踏んでばかり置かんすか。 <u>叩いてばかり置</u> かんすか。
	鍋釜の墨搔くにも、こなたの髭に在ると思ひ、よい所を <u>のけて置</u> く。
長町女腹切	腹の立つたあげくぢやに、慥貪を取りにやれ、マア、杯を <u>出してお</u> け、むつかしからう。おれは出見世へ行てゐるぞ。
	今宵は女郎衆の総揚げ、見事なことか、古手な肴 <u>取りお</u> いて蒲焼一種で飲み明かす。
	紙入れより金二十両取り出し、サア、金でした小判といふもの、近づきになつて <u>お</u> けと、めつかうに投げつくる。
	そんなことに今まで歩いたことなけれども、てんぼの皮、行てのけう、その間に用意して <u>お</u> かんせ。
	こちの連合ひ甚五郎殿は、武士付合ひして堅い人、半七も侍筋、行儀強い若い者と、常々自慢 <u>しお</u> きしに、それにお山を同道し。
山崎与兵衛寿の門松	そのための遣手、これ目が黒い <u>見てお</u> きや
	何者とは眼をあけ、人ぢや。男ぢや。男といふもの <u>見てお</u> け。うぬは何者、葉屋の彦介といふ男、見ておけ。
	何者とは眼をあけ、人ぢや。男ぢや。男といふもの見ておけ。うぬは何者、葉屋の彦介といふ男、 <u>見てお</u> け。
	昨日の駒 <u>動か</u> せず置きました。
	イヤ別の用はない、これ見や、おきく、若いやつらが <u>しかけてお</u> いた升落し。
	恩を受け、言葉を番ひし、この与平、 <u>捨て置</u> いては男立たず。
	その札とて目腐り銀、樽代としてよこした。酒戻しはせぬもの故、まあ請け <u>取</u> つて置いたぢや。
	手形は取つた銀取つた、吾妻が身請け済みました、そつこで請け出す三百両、 <u>打</u> つて <u>お</u> け、しやんしやん、
曾根崎心中	高き屋に、上りて民の賑ひを、 <u>契りお</u> きてし難波津や。
	ム、ウなんぢや、判とは、どれ見たい、オ、 <u>見せいでお</u> かうかと、懷中の鼻紙入れより取り出し、
	エ、首を切らせる奴なれど、ねんごろがひに <u>許</u> して <u>お</u> く。
	やれ九平次め、畜生め、おのれ <u>生けてお</u> かうかと、よろぼひ尋ね回れども、
	手にかけて、 <u>殺</u> して <u>お</u> いて行かんせな、放ちはやらじと泣きければ。
	神や仏に <u>かけお</u> きし、現世の願を今こゝで、未来へ回向し、後の世も、なほしも一つ蓮ぞやと。
心中二枚絵草紙	他国から上つてこの大坂で、女郎柄をも握る者が、通例の男と思ふか、どうでもかうでも、 <u>聞かにや</u> おかぬ、語らせねやおかぬと、
	他国から上つてこの大坂で、女郎柄をも握る者が、通例の男と思ふか、どうでもかうでも、聞かにやおかぬ、 <u>語らせ</u> ねやおかぬと、
	ヤア忝い。鍵の入つたる鼻紙入れ、親仁が <u>忘れ置</u> かれたり。
	鍵はもとの紙入れに、はじめのごとく <u>納め置</u> き、掛硯の引出しあけ、二包みの白銀を、下懷へ押し込んで、小判は頭巾にぐわりりと入れ、
	内でかうした心からは、外で何がな <u>しお</u> きつらん、誰に似てこの根性、憎いが余つて不便なり。
	死するとあらば、御回向も頼み申すと、言ひ置きも、涙ながら、余所ながら、見置きながらの橋柱、朽ちゆく、身こそ
	死するとあらば、御回向も頼み申すと、言ひ置きも、涙ながら、余所ながら、 <u>見置</u> きながらの橋柱、朽ちゆく、身こそ
	歌人の評判 <u>つけお</u> きし。
	あこがれ出づる玉の緒の、互ひの目には見えねども、 <u>残し置</u> くのと連れ行くと、両刃に死する剃刀の、一つの乱れ焼き、乱れ、心は

近世日本語資料

	弟善次は、川端に捨てし衣装と書置を、拾ひ、驚き、駆けつけてみれば、あへなく事切れたり。
卯月紅葉	オゝさればとよ。これはかうはしておけども、是非に叶はぬその時は、私の方から知らせをせう。
	書置、涙に、文字消えて、先へ死んだも、ましならめ、萎れ侘びたる折節に。
	用意しおきし差替へに。夫の白き帷子、緋縮緬に結び下げ、おろせば下より受け取りて、死ぬる覚悟と心得ける
	南無三宝と、剃刀捨て、側に抜き置く脇差の、鞘を持つて引き上ぐる。
卯月の潤色	狂乱したりと嘆きをかけ、不孝の罪も恐ろしや、一筆づゝの書置を残さばやと、
	この間に、助給は書置細々と書き納め、伯母よりの贈物一つに取つておし戴き戴き。位牌の前にも供養して、しばし絶え入り嘆きしが。
	むかはり待ため花橘昔の人と短夜の、雲隠れして世の人の、袂しをるゝ藻塩草、かき置き、に名をゝ残しける。
	古道具屋与兵衛入道助給。末期に親、伯母の御方へ申し残す書置のこと。
心中重井筒	あれ女房ども、ないなの治右衛門様。そなたの判なら銀貸さうとおつしやる。お目にかゝつておきやと言へば、
	そのうちおたつが戻つたら、湯屋へ行つたと騙しておけ。かならず何にも吐かすなど。
	若い人のことなれば、後日の念に、ちよつと知らせておきますと、言ひおいて帰られた。
	若い人のことなれば、後日の念に、ちよつと知らせておきますと、言ひおいて帰られた。
	互ひに生れ変つたら、本妻定めぬその先に、早う女夫になりませう。言ひ置く事はこればかり。サアサア戻つてくださんせと、…
心中万年草	ちご文殊の御相伝、大師の広めおき給ひ。俗も尊む若衆の情け、衆道秘密のお山とかや。
	たとへ親の敵でも、出家は各別、在家となれば見逃し置かれぬ弟の敵。
	つゝごかしの顔で、つらりと、九文、十文づゝ、百の口を抜いておけや。
	ハテこなたもあんまりな。お梅が一世一代に何が惜しいぞ。やつぱり九十六文で、百づゝやつておかしやれと、連れて納戸に入りにつけり。
	この秋の買入れに、紅の花のやうな小判二百五十両、先へ預けて置かれた。
	これ母様。いたづらも、悪性も。男持ため先ならば、言はれぬ構ひぢやあるまいか。それにいちむぢ言ふ人はほからかいておかしやんせ。
心中刃は氷の朔日	てんでん天気も照り降り雨に、五十余りの女房の。取つておきをば濡らさじと、嬉しや、こなたさうなとて。走り込みしは、誰でござるぞ。
	万事こなたを頼んでおく。
	提灯屋に咎はない。わしが仏に受けられず。願の叶はぬ知らしめ、さうしておいてくださんせ。
	それ故他人は差し置いて、乳兄弟の拙者が参ること。
今宮の心中	昨日の暮方、三田から私が父親のぼられ、小さい時から在所で、約束しおいた男の姑の患ひ故。急に嫁入を急いできた。
	この談合は取りおいて、きさはこの貞法に、とんと預けておいても。
	この談合は取りおいて、きさはこの貞法に、とんと預けておいても。
	これは由兵衛が言ふとほり、手形を取つて置きたい。
	これ、奴、腸の出るほどこいつ踏め。まかせておけろと土足にかけ。
	もうよいわよいわ。死なぬほどにしておけさ。こつちへ来いと、主従は悠々として帰りけり。
	この世間ぶつそうに、戸棚の錠はなぜおろさぬ。さらば鍵も腰につけ、錠をおろしておきませう。
生玉心中	どつこい気遣いなされますな。まかせておけでも盟でも、飲みつけてやりませう。
	醬油屋の徳兵衛と我らが思ひ引き合せ、憂きを晴らす合点で、そのとほり一筆書いて、小弁を頼うで置いてきた。
	気を揉んでも、もがいても、身は裸なり、工面はならず、大方は四日までと、わしが請合ひおきやした
	少し濡れかけて騙したりや、惚れられ自慢で、もうそのことを触れ歩く。それであいつが名を筒拔とつけておく。
	わしやこの桐油がうつとしい。身は濡れてもいとほぬ。これをこゝに捨ておいて、にはかに雨にあうた人。着てくだされば本望。
	命を先へ出して置いて、取つてみよ。
心中天の網島	やがてこの男が女房に持つか。紙屋治兵衛が請け出するか。張り合ひの女郎、近付きに、なつておきやと、のさばり寄れば、
	アゝ苦しいない。障子越しに抜き身を突き込む暴れ者。腕を障子にくゝりおく。思案あり、縄解くな。人立あれば、所の騒ぎ。サア皆奥へ。
	手付渡して取り止め、請け出してその後。囲うておくか、内へ入るゝにしてから。そなたはなんとなることぞと、
	…なんと伝兵衛。町人はこゝが心やすい。侍なれば、そのまゝ切腹するであろの。我ら預つておいて、とんと失念。小刀も揃うたと

近世日本語資料

	十悪人のこの治兵衛。死に次第とも <u>捨ておか</u> れず。後から後までご厄介。勿体なやと手を合せ。
心中宵庚申	殿がじろと御覧なされ。縮緬は風にしぶき、面倒な。 <u>重ねてお</u> けろ。
	イヤさうでござらぬ。この道に高下はない。その小一兵衛も呼び出し、 <u>並べて置</u> いて、念者に頼む。
	伯母婿ながら、そなたの親分、高麗橋二丁目、川崎屋源兵衛殿 <u>差し置</u> いて、直にこゝへ突きつける仕方も憎し。
	命があればまた会はう。死なば親子の末期の水、未来は八功德池の水。この世に <u>思ひ置</u> くことない。
	コリヤ松よ。今日は五日宵庚申、甲子が近い。二股大根 <u>のけて置</u> け。
	気に入らいで往なした嫁。遠州戻りに在所へ寄り、ようくはへて戻つたな。常磐町の従兄弟が所に <u>預けて置</u> き、商売にかこつけ、…
	武士の釜の水で育ちしこの半兵衛、二十二の年から御面倒に預り、一人の甥御を <u>差し置</u> き、家屋敷、商売とも、私へお譲りなさるゝ御厚恩、…
	<u>書置</u> もしたゝめ、死装束、脇差も、荒布の荷へ巻き込み、この世の心がゝりは微塵ほどもなけれども…
	なう、いややの。コリヤ半兵衛。はしりの出刃包丁、よう <u>磨がしてお</u> いたぞや。ちよいと触つても、剣ぢやぞ。
	魂込む <u>書き置</u> き箱、…
	親兄弟への <u>書き置</u> きも、この状箱に入れ置けば、明日は早々届くべし。
	親兄弟への書き置きも、この状箱に <u>入れ置</u> けば、明日は早々届くべし。
堀川波鼓	まづ只今は御家中の、さる方へ <u>預け置</u> いて候が、なにとぞ御師匠様の御世話にて、鼓の一番もうち習はせ、…
	姉と夫婦と定りて、十何年といふ年月を重ね、子まで <u>養ひ置</u> いたる仲を、…
	喜ぶ矢先に、おのれめは姉を去れの、離別のとは。ようも言うた、畜生づら。 <u>生けてお</u> くも腹立ちやと、目鼻も分かず打ち叩く。
	我等がためには姉の敵。我がためには母の仇。いや我がためにも、兄嫁の敵を <u>見捨ててお</u> かれうか。さりとは連れてたべと、
	さらりと経を <u>取り置</u> いて、手鼓なりとも打つたがよい、今からでも鼓を打ちやと、
	只今の侍が下人どもを <u>残し置</u> き、表に鍵も置きながら、その身はこれに居る体にて、祇園会の山鉦を見に行くと覚えたり。
大経師昔暦	久三、挟箱。暦配る家によつてお引きが出る。たゞ取ると思ふな、給分に引きつぐ。 <u>断つてお</u> いたぞと、
	我が夫を <u>さしお</u> いて、手代に言ふは何事と。
	オゝ生掬摸め、勝手に <u>せいでお</u> かうか。男ども、皆おちや。旦那お出でなされと呼ばゝれば。
	総じて所帯方、商ひ事、二人に <u>まかせ置</u> くからは、事によつて、主の印判押すまいものではなけれども、…
	そんなら待ちをれ、解いてくりよ。オゝ <u>解かせいでお</u> かうか、ま一つ棒をくらふかと。極つけられて、不承に縄ひつほどき。
	親たちに会ふからは、木の空に晒され、骸を鍵で突かれても、 <u>思ひ置</u> くことござらぬと、口説き嘆けば、
	命のうちは袖乞ひでも、頼みないは後生のこと。これはそのまゝ <u>留め置</u> いて、死んでの後の弔ひにと、嘆けば、
	この在所で、わしは島原の傾城が。請け出されて来てみると、庄屋にも誰にも <u>言うてお</u> く。
	かのお心ざしの一貫目、二百目使うて、残る八百目、この家主助作に <u>預け置</u> きました。
	申し殿様、あいつに八百目の銀を <u>預け置</u> きました。
	首を <u>取らずにお</u> かうかと駆け出づるを、大勢取りつき。狼藉させぬ、粗忽させぬと抱き止むる。
鍵の権三重帷子	うまい盛りの十八豎豆。柔かなうちを一口食うて、 <u>せゝりさ</u> がしておかうや。そりやなりませぬ。アゝあべかこうとぞ喚きける。
	また後から、安馬 <u>買ひ置</u> き、乗り入れて売つたらば、銀持になるはず。
	武芸は侍の役珍しからぬ。茶の湯を上手になさるゝ故。人の用ひ奔走もある。小さい時から茶杓の持ちやう。茶巾さばきも <u>習ふてお</u> きや。
	この一樽は上方の名酒。幼い方のお慰み、お見廻のしるしと、おついでに申してくりやれと、 <u>言ひ置</u> き、帰れば、
	我が身が連れ添ふ心にて、吟味に吟味。思ひ込うだ稀男なればこそ。大事の娘に添はするもの、 <u>怏気せずにお</u> かうか。
	これぞ冥途に通ひ樽。契りは偕老同穴と、一つ棺に一つ穴。どこぞに <u>埋んでお</u> けの輪と、いはねど。物が言はせたる。
	この市之進まづ妻敵を <u>差し置</u> き、舅の敵を討たねば叶はず。
	権三も他国に親類、知音もあるべし。なんと <u>構へ置</u> くも知らず。三日路、四日路とも踏み出だし、時の変にて助太刀欲しいこともあるべし、
出世景清	よき幸ひと景清は荷ひし櫃を <u>下ろし置</u> き、迷惑さうに揉み手をして、表にこそは出でらるゝ。
	宿願あつて兵衛殿は清水参詣致され候ふ。御文を <u>預かり置</u> き、帰られ次第見せ申さん。明日御出で候へと飛脚をかへし、
	よし何にもせよ、なほ景清に言ひ分あり。まづまづ死骸を <u>取り置</u> けと、かたはらに葬らせ、牢屋に向つて立ちはたかり、

近世日本語資料

	このうへは 助け置き 、日向の国宮崎の庄を宛て行ふと、御懇情の御言葉に御判を添へて給はりける。
用明天皇職人鑑	任せておけ 屋が門出でと。
	明日は、未明に打つ立ち申すべしと、手配り 極め置き 候ふ。
	宮仕へせよ、佐用姫、 思ひ置く こととてなし。サア長刀抜いて苦痛を止め、殺してくれと観念し、息をとちたる眼にも、名残の涙せきあへず。
	長者横手を打って、初めて聞いて驚きたり。百島大夫を 付け置き しその甲斐もなく、長者が娘がてゝなし子を孕んで、何と一分立つものぞ。
	ちつと世上も思へかし。顚骨をわつてなりとも、 飲まさにやおかぬ と責めけるは、地獄の呵責もかくやらん。
	この道へは御家中の討手の達者に 待ち伏せさせて置き 候ふと、
	いらざる職人の武士だてなれども、ふと頼まれ奉り しさいては置かれず 、裏壁返してあとを詰めんと思ひ、…
けいせい反魂香	殿様の御留守、誰が許しての推参。御家老の仰せ一国に違背申す者はなし。きつと お仕置き しかるべしとぞさゝへける。
	某嫁に申し受け、この伴左衛門に縁辺し、七百町を主づかんと、 あてはめて置いたもの 。
	隠し置 いたる取り手の者、十手八方、鉄鞭をぶち立て立て振ぢふせて、…
	死骸を酒に 浸し置き 、後日の評定たるべし。
	生けて置かば 、四郎二郎にいかなる仇をかなすべきと、傾城の意趣を幸ひに、討つて捨てたる伴左衛門。
	オゝわがみが言ふとほり、押つ取つて廊の迷惑。 お仕置き には法がある。
	詮議にあふ由、洛中の是沙汰。遺恨のものは某故、 聞き捨てておか れぬ挨拶。廊の説はどうぞと言へば、
	山三が言葉を一たん 立てずにおかれ うか。
	ヤア亭主、近付きに なつておき や。
	これを着て四郎二郎様、熊野へ参つてくだされ。死しても心は連れ立たう。 書き置き もしたいが、口でさへ尽されぬ、筆には中々まはらぬと、
	お主と一所にしてくださば、連れ立ちお礼に詣でませうと、笠の紐まで 紮け置き し、
	アゝいままし。古い木の末の、 思ひ置き はよしなやな。こちもそなたも若松の、千代の杯ざぐんざ、浜松の音。
	葛城ことは、三月二日に親方が暇を取り、拙者が本妻。借宅見立ての間、揚屋に 預け置き しところ、判左衛門数通の艶書。
	エゝ卑怯者。あゆまずは、 任せておけ にうち入れて、生きながらの酒びたし、地獄の鬼の中食菜と。戯れ笑ひ帰らるゝ。
国性爺合戦	宸襟安からざる所に、第一の臣下右軍将李蹈天進み出で、今までは国の恥辱をつゝしみ 隠し置き 候ふ。
	その子もこゝに 捨て置き 、おことは一先づ御妹を介抱し、海登の港をさして落ちよと言ひけ…
	エゝ無用の拔駆け、殊に舟まで仰せ付けられた。渡りに舟とはこの事と、船中に 隠し置 いたる剣取つて横たへ、梅檀女を乗せ参らせ、…
	おことはこれより乗り出だし、便りよき小島に姫宮を 預け置き 、船路を変へて追ひ付けよ。
	軍半ばの大民国、事太平に治まるまで、姫宮を汝に預け日本に 留めおかん と思へども、筋なき女の心を窺ひ、わざとつれなく見せたるぞ。
	この四百余州と釣り替への姫宮を、しつかと 預け置く からは、男の心変らぬ証拠。姫宮に仕へ奉るは舅に孝行、夫に仕ふる百倍ぞや。
	しかるに、某去る天啓五年この国を立ち退き、日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を、乳人が袖に 捨て置き しが、その子が母は産み落して当座に死す。
	矢狭間に罅隙間なく、所々に石火矢を 仕掛置き 、すはといはば、打ち放さんその勢ひ、…
	一とせ唐士を立ち退く時、成人の後形見にせよと我が形を絵に写し、乳人に 預け置き つるが、老いの姿は変るとも面影残る絵に合せ、疑ひを晴れ給へ。
	然らば我々了簡して、城内にある中は、縄をかけて 縛り置き 、縄付きにして通せば、韃靼王へ聞こえても主君の言訳、我等が身晴れ。
	お留主といひ、きびしき国の掟を憚り、男子は皆帰し、母上ばかりを 留め置き しが、猶も上の聞こえを恐れ、縄をかけてあれあの、…
	まづ日本に 残し置き 、親子三人この唐土へは来たれども、
	老母をこれに 留め置き 、人質と思はれんも本意ならず。輿車用意して所を尋ね送り返し参らせよ。
	南無三宝紅粉が流るゝ。さては望みは叶はぬ、味方もせぬ甘輝めに母は 預けおか れずと。
	…三十八ヶ所切り取つて、太子の御幸を待ち顔に、所々に付城築き、兵糧軍兵 籠め置き て、威勢は天の氣に顚れ、手にとる、やうにぞ見えにける。
	竹筒一本取り出だし、この筒に蜜を込めて山蜂多く 入れ置き たり。
	かくのごとく折籠二、三千合も拵へ、様々の菓子餉酒肴したゝめ、各これに鳩毒を入れ陣屋に貯へ 並べ置き 、陣所近く敵を引き受け、…
	しかれば竹林にて従へし島夷共、日本頭に 作り置き 、かれらを真先に立て、日本の加勢と披露せば、
曾我会稽山	御身の方にも、彼の札二枚 受け取つておか れしが。散らさず手前にあるならば、サア。只今これにて一見せん。

近世日本語資料

	よしよし今は逃がすとも、我が見込んだは鰐百倍、一度は <u>とらで置く</u> べきかと、…
	しかるに鎌倉に <u>残し置く</u> 女共が、心ざしの過分さ、気の働きの利発さ、…
	京の小四郎といふ者に、ならずの野良者をすかし、金銀とらせ、曾我の老母が方へ、犬に入れて <u>付け置き</u> しが、
	今夜これにて祝言の杯取り囃し、祝ふてたべと、枕の文匣に <u>畳み置く</u> 、直垂二領、
	祐成涙を止め、かねては今宵仮屋にて、心静かに <u>書き置き</u> し、形見も残さんと思ひしが、
	なう、この紙帳の <u>書き置き</u> 。
	母は寝ても寝入らず、 <u>書き置き</u> するを物合より、見て泣く涙はいかばかり、そこを堪へた親心、思ひやれやとばかりにて…
	腕の骨のかたまるまで、人にも油断させんため、出家にすると箱根へ <u>登し置き</u> たるに、元服したる科ぞとて、このごろまでの勘当は、…
	「…母君はまづ、しばし」と、草の茂みに <u>隠し置き</u> 、小挑灯の芯切り湿し待つとも、
	お先手は発足の御触れあり、合羽は <u>取り置き</u> 、腰錢を取り落すな、
	近経殿に <u>預け置く</u> 。然るべく頼み存ずると、二枚の小札を手に渡せば、
	某他人になつたる徳、天下晴れて <u>匿へ置き</u> 、時節を待つて世に出さんと、手を取つて、引かぬばかりにあしらへども、
	日中九つの鐘を <u>さし置き</u> 、八つに撞き申すべき旨、申され候ふゆへ、
	これによつて、老母並びに大磯の虎、化粧坂の少将と申す遊女、兄弟一味の者共、以上三人 <u>揃め置き</u> 申し候ふ。
	日本無双の兄弟、 <u>助け置き</u> たき者なれども、兄祐成が討たれし上は、助かれといふとも、よも助からじ。
	この白首義朝が妻、常盤が我にあまへる不便さ、牛若なンドいふ子供を <u>助け置き</u> しは何と。
平家女護島	汝ら風情が理を理に立てさせ、清盛入道が理をまげて天下の <u>仕置き</u> 立つべきか。
	これ菊王、この骸門外に <u>捨ておけ</u> と。髻搦んで首提げ、御前まぢかく欄干に謹んで、
	すなはちこれに候ふと袖の下より生首、御膝下に <u>差し置け</u> ば、入道くわつと顔色変り、…
	世に便りなき俊寛、我を仏になすと思ひ、 <u>捨て置き</u> て船に乗れ乗れと、泣く泣く手を取り、
	オゝ咎重なつたる俊寛島にそのまゝ <u>捨ておか</u> れよ。いやいや御辺を島に残しては、
	あはれ訪ふ人とても、なく音は鴟、天津雁、誘ふは、己が友衛。一人を <u>捨てておき</u> 津波いく重の。袖や濡らすらん。
	本宮の社檀修覆のため、神体を仮に宮遷しいたす所、いかなる者の仕業やらん、この箱を <u>籠め置き</u> たり。
	廊下の櫪こじはなし、 <u>掘り置く</u> 土の穴かしこ、人には見せじと骸を取つて引きずりこむ。
	不義者の恥知らずに巡り合ふ事あるべきかと、 <u>隠し置き</u> たるこの雑巾、親子の恥を押し拭ひ、早立ち退けと…
	千鳥。一人は、泣き焦がれ、かりそめに親と頼みし俊寛を、跡に <u>残しておき</u> の島。
	御淀のごとく一所、瀬尾太郎と不慮の口論によつて、瀬尾を討ちたる咎に任せ、俊寛はすぐにかの島に <u>残し置き</u> 候ふと申し上ぐる。
	今までは常盤といふ女、人質に <u>取り置き</u> たれども、牛若冠者めが奪ひ取り、東国へ逃げたれば、
	一念の炎となりて、皮肉に分け入り、 <u>取り殺さいでおか</u> うか。エゝ無念やと怒りの歯ぎしみ、恨みの涙。磯打つ波に村雨の篠を乱すがごとくなり。
	珍しや頼朝。命を助け、 <u>流し置き</u> たる昔を忘れ、平家に弓を引かんとは恩を知らぬ大悪人。

近世日本語資料

跣婦人伝	当に してお く無心がはづれて、いきつしんづの苦しみ。
遊子方言	銭がないといへば、おれが丸角の あつらへてお ゐた、花がんだいがある。
	きれは、阿蘭陀のむしろをり。貴様見るとふるへ付ほどなきれだ。おれが銭のある時に、 あつらへて置 た。
	たばこ入は堀安で 見て置 た。とんだいやよいさらさがある。それを、こしらへさつしやれ。
	これはせ左衛門なれど、久しぶりで来たしるしとかなんとかいふやうなもの。そつちへ しまつて 翁草
	お吸物を吸なんしてお出なんし。御膳のしたくも、 いたしてお きんした
	いゝゑこう して置 ておくんなんし。又しかられんす
	扱も扱もあの茶屋めが、「七ツに、むかひをよこせ」と、 いふて置 たものを、今にむかいをよこさいで
甲斐新話	二人とも足をあらひあがる内に、盃だいなど用意して、二人が前へ 直し置 、となりの女房らしきをよびよせ、みゝへ口をあて、何やらさゝやく
	五郎どん、たのむよ。馬幸さんがござつたら、 待せ申してお かつせへ。直に帰るから
	水あげは私だとふに いたして置 ました
	のみて置く
	そのよふなアぐんも して置 たアよ
	うらが曾祖父の代から、でけへ御用金の 出して置 もんだから、あにハア寝せべへと起すべへと、うらが心儘だあよ
	わつちも、勤る所は つとめて置 ゐした
	あんなに言ひじらけに して置 ちやアおかしみもんだね
	ナニサ うつちやつて置 なせへ
	おさへて 何、よしさ。 取て置 な
古契三娼	大門の 仕置 場たえて、堤に飛びこふ蛸も刑鞭の朽たるなるかと思はれ、
	榎堂で取れたなまこ、 のけて置 ておます程の真実ニ外心はなかりき。
	このちう旦那が もつてきてお きいしたから、読んで見いしたが、すつぱり松葉屋ノ世界さ。
	ぬしはわたしが先でござへやす。それを美しくおめへに黒さんを 貸してお くから、見事に呼びとげねへ。
傾城買四十八手	トにつこりとわらひ、はをりをぬがせてほうり出し よふねさん、 しまつてお きな
	「ハテこゝへはき物を置たが」「ヲツトこゝへ かた付て置 やした」
	なんだといゝは。 うつちやつてお かつせへ。こんたのせわにやアならねへは
	うつちやつてを けへ
	けふはでへぶ手めへにはむひていつたぜ。おれに羽織を ねだつて置 からだ
	堀の内さんのお張護符を戴に やつてお きんしたよ。
	銭助がねだつた羽織は、わつちが方からこしらへてやりんしやう ウゝそんならマアそふ して置 てくりや
傾城買二筋道	それとも、あたまのものは借物なら、あすの晩までに壺両式分ばかり、 かしてお いてくりや。
	あの子の来ねへうち、おめへがたに 話してお きてへ事がある。かならず笑つてくれちやア恨だぜ

近世日本語資料

酩酊気質	ナア酒に酔て帰つたら四の字はかならずいふなと 云付て置く に、どうした物だ。
	ホイ箒が落た。コレ虎どの、 かけておか つしやい。はづして置くと毛が切れて忽ちわるくなる。
	ホイ箒が落た。コレ虎どの、かけておかつしやい。 はづして置く と毛が切れて忽ちわるくなる。
	ト戸をたてると、戸についてゐるなめくじりをべったり　ホイ、エゝきたない。誰か痰を 吐かけて置 た。
	トうぬがこゝとの不興なるはゑびす棚へそつくりと あげておき
	それにおめへばつしのいもうとはおやしきへ あげておき やすが、だんなさまがおふたかたで、もやいつかひさ。
	時珍とかいふ唐のおまへ昔の聖人が 云つて置 しつたさうさ。
	前かた私が隣に聴取傍問さまといふ物識が有てだいぶ面白い故事をきゝ ためて置 ました。
	干物の天窓を、黒くすばりにおつこがして、夜食の菜に 取置 とはチツト違はア。
	つは月の下略、是は月究に 留置く 故なり。
浮世床	コレ留。そこらをきりきり掃て、湯を 湧して置き や。おれは行て来て剃るぞ。
	爰に付てお出なさりやア能が、湯の跡へお客が来りやア、 待しちや置 やせん。一番へ廻しやすぜ
	「夫よりか早く 起してお け
	「寐る時は はづして置く がいゝ。エゝ人をつけへにした。禪ぢやアあんめへし
	「何でも構ねへ。山王さまはおれが最負だからおれが宗旨に して置 ア。
	今から遺言に して置 ア。
	「能いよ、 打遣つてお置 。私は一人で参るよ。
	「これさ。 捨て置 ねへ。物しつたり物しらなんだり、物しり物しらずサ
	ハテそれで得心ないならば、云ても詮がないさかい、トツト 放置 くがゑいはいの。
	「東西只今の角力行司 預り置 ます
	ちよと往て来うかい。此跡へ 入れて置 て下んせ
	「どうもさうはならぬよ。一体あいつを 留置 て貸すやつが悪いはな。アゝこまつたやつだ。
	垢を ためて置く 板へゆびをすり付ながら
	おばあが能物を のけて置 ました。御乳母どん、上んなナ。
	「そんなら又、足を早く入たが能はさ。おいらア足を先へ 入て置 て、しかうしてのちに口をきくはさ
	能事があるぞ。コウ爰の壁に張てある女郎の絵とナ、爰の金時の絵をひつpegして引縛らう。そう してお いて、口によせべいぢやアねへか。
	巫女は、市女笠あがりくちにとり おきて 、正坐になほり、裏包おのが前にひかえて、目を閉ぢ、
	一体あの子をば他所へ 預けて置 たのさ
	「 囲ツて置 か
	「ナア＝ 囲ツておく 働きもねへから、相応の付届をして預けて置たのさ。
	「ナア＝ 囲ツておく 働きもねへから、相応の付届をして 預けて置 たのさ。
	其羽織も、古いのを着て、新しいものは かばつておき などでもいふが最後、大癪癪さ。
	サアそれからお帰には、湯豆腐か水雑炊まで 捨てお けといふ仰置れで、鼻紙、手拭、頭巾、足袋、履物までそろへて、
	サアそれからお帰には、湯豆腐か水雑炊まで 捨てお けといふ 仰置 れで、鼻紙、手拭、頭巾、足袋、履物までそろへて、
	「前編にさう 書ては置 たが、口よせばかり多くては御見物がお倦なさるだらう

	「延公が屋しきから帰つて、袴を脱放して置くと、コレ初や、其お袴を一寸袖畳にしておきやと云つたが、
	「延公が屋しきから帰つて、袴を脱放して置くと、コレ初や、其お袴を一寸袖畳にしておきやと云つたが、
	半町ほど向の辻番まで連て行の、おくまりたる所へひそめおいて、着物を脱せたり、何角介抱する所が、
	ひよつとして拝む時には南無御先祖さまとか、十五日の仏さまとか云て済して置はス。
	そんならお備でも上置くさ、
	其尊い神国の称名を、死で穢た身につけておいては、此国の神神さまへ勿体ねへから、仏道の法式をもつて、…
	場所は五六町預り、床は三ヶ所預つて皆弟子を出して置くシ、云分はねへ。
	若さやうな御仁さまは、コリヤ、此通記し置ましたる所書が証拠ぢや。
	「是も時過ると、当時当時の風俗をしるによし。又後の人の慰にもなる物だから、おれは一冊に書とめておいた。
	「水塞ト〇ウ、左右左右、みなア水塞に、そぶて、そぶて、傍てエ、弩弩、伏伏置、自かアラア。
	主が申されますには、ナニ着物などにかまはつしやるな、しまつて置くには及ばぬから、さつさと着るがよいと斯申されますのさ。

人情本	春告鳥	「ヲヤおとぼけでなひ。為嶋とやらへ宅をこしらへて、世話を <u>して置</u> なましたぢやアありませんか	
		ト櫛笄を抜てそこへ <u>なげ出し置</u> 。	
		面倒なりとて此ほど鳥雅の方の下女病氣にて宿へ下りしとあるを、物怪の倅として二十日ほど以前より此別荘へ <u>つかはしお</u> きたるなり。	
		久しくわすれて居た着物がある。…トいひながら錠をおろせし簞笥の引出しより取いだすは、唄女お浜に着せるとて呉服屋へ <u>あつらへ置</u> しが、…	
		その出来ざる中にお浜の行衛は知れず、 <u>捨て置</u> けれども呉服屋の迷惑を察し、…	
		いづれたづね出して着せる時節もあらんかと <u>仕舞置</u> しを思ひだして、その着物をとりいだす。	
		行燈のまへに <u>ならべお</u> けば、お民は肝を潰して鳥雅の顔をながめていたりしが	
		母人さんがおつしやるには、どふもお民を此方へ置と色をしたがつてならなひのに、寄ものもさはるものも惚たがつてならねへから、寮へでも <u>やつて置</u> ふ。	
		おたみは雨戸のかたを見やりて、しづかにまくらを <u>はづしお</u> きにかゝる	
		ア、おそろしい日だ。種々な邪魔ツ怪子が来やアがる。おそろしいことだ。はやく木戸を <u>めて置</u> う。また何ぞ来るといけねへ	
		「ナニ水は昨日久助が <u>汲込で置</u> ましたを、最少し先刻お火鉢の火があんまり沢山おこりましたから、鉄砲へ入て自然に湧ましたヨ	
		昔はおみらんに罪ある時節は、内所へ <u>居(すは)らせて置</u> くとぞ。	
		此頃は少し親御の方が不首尾だから、思ふ様にはならねへけれど、根が家督をとるべき旦那のことだから、始終の為に今 <u>勤めて置</u> のだア。	
		針ほどの事を鉄棒を引ごとく、仰山に言ふらしければ、幸左衛門も <u>捨置</u> がたく、本店へ相談しければ、	
		お民は是非なくくすりを <u>捨置</u> 、さつさつとはさいだせば	
		「エ、イしれた事だァ。出て行ときあれ程言付たのに、薪をなぜ <u>干ておか</u> ねへのだ。そして鳥網も干せと言たのに、夫もしやアがらねへ	
		「そんならばはやく往てお出な。旦那をば <u>お待せ申ておく</u> から。エ旦那へ、お淋くともお待ちなさつてつかはさいましナ	
		ト無理にお熊に <u>たのみ置</u> 、その身はいそぎ出て行。跡にはお熊と彼旦那、遠慮なればうち解て、俱に酔をぞつくしける。	
		…鼻紙入の小菊を一枚とり、金入より金を出して五百疋ほどつゝみ、別に五十疋をも紙にひねりて <u>さし置</u> けり。	
		金龍山人狂訓亭為永春水か。よく種々な名を <u>書て置</u> 作者だ	
		しなやかなる指を湯氣にてやけどをなし、耳を押へ、左の手にて土瓶を五徳の脇へかけて <u>むらし置</u> 、猪口のようなる小器茶碗でありそふな所を、	
		猪口を <u>漬しておく</u>	
		「ハイありがたふございますが、今にまたお花さんが帰りますと、着物でも巨燵へ <u>かけて置</u> て上ませうとぞんじて、	
		何所よりかは連来りけん、十六七の処女にていと美麗を傍に <u>引居お</u> き	
		サアうぬ、覚悟しろ。万一一ふことをきかねへ時は、殺しても生胆をとる相談を <u>して置</u> たア。	
		「ナニナニお前が世話をやかねへでも、相応に吞で居るから、 <u>打捨(うっちゃっ)て置</u> なせへ。さてその苦しい理は	
		ナニ最少とも泣は仕ませんヨ。マアネ、今お咄し申した程に鳥雅様に <u>言て置</u> て、今更に出勤して居りいしては、	
		「ヲヤ何ぞますへ、此様に数品取寄て。薄垣さん、私の左様 <u>言て置</u> たものは何様したへ	
		自然と出勤する気にもなるだらうと、内室さんも種々気をもんでくれさしつて、斯 <u>して置</u> ておくんなんすのぞますから、	
		「ナアニ <u>打捨(うっちゃっ)て置</u> なヨ。何所へか往てまた手玉でも取て遊んで居るのサ。今になんぞ喰たくなると出て来るはナ	
		「ヲヤ何がそんなにおかしふぞますへ。コレサ薄の香さん、其お湯の冷ねへ様に <u>して置</u> なましヨ。アイおいらん	
		ナニサまた嬉しいじれつてへ事は幾度もあるはな。マア先刻いふとふりよく手紙を <u>書て置</u> なせへ。是非私がたづね当つてくはしく言てあげるから	
		それだから此度は急度、いゝ便りを聞してくれさつしやる筈に願を <u>かけて置</u> ましたから、何様ぞ貴君の信切でとゞけておくんなましヨ。急度ぞますヨ	
		「それでも泉目吉とかの人形を二ツ持て来なまして、一ツ能の方をば私に見付らねへ様に <u>隠して置</u> なましたヨ。	
		「お洒落でなひ。能好男の風俗をして誰が幾日も <u>止宿て置</u> ものか。	
		ドレマアちよツと店へ往て来べゑ。若旦那に左様 <u>申て置</u> ねへヨ。お前さんの事でお店へ参りましたから、何れ近ひ中何様かなりませうから、	
		「よいはネ、 <u>打捨てお置</u> な。不躰だけれども、お囲さんの手際ぢやア、鳥雅さんの相手には出来ないヨ	
		本店の抱にて祖父の代から出入する甚五郎は、前々より目を <u>かけて置</u> しもの、殊に祖母のひめきにする男ゆゑ、万事に都合よければ、	
		そして着衣衣類は明日桜川三孝が持て行はづに <u>して置</u> たから、そのつもりでお在なさいましと。	
		「ハイ能 <u>看てお</u> きました。お手紙でも被遣ますならば持て参じませうか	

	「ナニナニそれぢやアいかねへ。明六ツにやア路次を 開ておく ぜ	
	向なる御下屋敷に仏間をしつらひ、侍女一人と婢女一人を 付て置 れしが、	
	表方にてても心やさしき侍のみをゑらみ出して、その身の付人とおそばされ、それより彼春心院を多分その御殿に 呼置 れて、…	
	若衆姿を幸ひと、箕掛かもしをもつて嶋田の娘に仕立、伊勢本へ あづけおき 、猶慈悲深き桜の禪尼の御頼みにて、	
	恨みし亀略を詫言し、まづ忠之丞を かくまひおき 、他に知らさじと請合ける。	
	其親御さんもお在だから、是非何所へか知れなひ家へ 隠してお置 なさつたに違ひござゐますまいはネ。	
	何をいふかと茶にして 会釈(あいしらつ) て 置 たらば、何時の間にか母人アの所へ尋ねて行て、何様だまかしてか私を貰はふ遣ふと約束をして	
	実正の情心こそ放心とは仕ませんけれども、女房になるの仕様のといふくらゐのことは、口先でアイといつて 置 ますはネ。	
	其夜梅里と咄し合しごとく、お八重の仮名をまた仮に改めてお中と呼び、お熊の宅に かくまひ置 けるゆへ、忠之丞と知るものは絶てなく、	
	是まで女房をも持ず、万端家業のとりしまりは、血縁の別家吉兵衛といふものに頼み、通ひ勤の支配人とし、 任せ置 、	
	お花の身のうへをば、立派に世話をして遣ふと 考がへて置 たが。	
	少しも隔心様な事もせず、誠に私へ遠慮なく我儘をいふから、 可愛がつておけば 種々と兄をこまらせてならねへ。	
	「ナニうそなものか。只今灸をすへて呉ると 言て置 て、灸点をおろしてあげやふといふと、脇へ逃るではないかへ。	
	他に 頼んで置 て、サアといふと否だといふのは、則私を馬鹿にするのだけはネ	
	元来両親もなく我儘育のことなれば、まづ其儘に 拾置 しが、此程鳥雅の不首尾より思ひ付たる手段ありて、	
	「そしてマア忠さんを 視せて置 て、其後誰人を嫁にお遣んなさるのでございますか。むづかしそふな亘てござゐます。	
	まだお花に嬉しがらせる程の息継も させずに置 て、今直に女房をお持では余りでござゐますは。	
	全体鳥雅に相応な婦人でも 持して置 ば、自然と放蕩も不為のに、壮年を独身で置て、少しぐらゐ女郎唄女で金を遣つたとて、	
	地面をニケ所に金子三千両、同じ家号にて支配人に 預け置 たる砂糖問屋の店を所為代物と当時積着の荷物、	
	ナニナニ彼は発明だから亀相な口を利く気づかひもなし、殊におれが目を かけて置 から大丈夫だ	

東海道中膝栗毛	馬の耳に風もひかさぬ趣向の <u>とつて置</u> を、棚からおろして如斯
	ナント店賃の一ねんや二年、溜つたとつて、一生 <u>やらずにおき</u> やアしめへし、それをやかましくいふくらへなら、…
	田舎侍の出立、いかな後家の質屋へ見せても、百石どりととは直打する男を、棒手振の芋七に <u>してお</u> くは惜いもの。
	さる所の隠居が、内の腰本に手をつけ、孕したゆへ、聳や娘の手前、しれぬさきにとて、表向いとまを出して、請人の所へ内証で、 <u>預けおか</u> れたが、
	「ヤアヤア今夜くるのか。エ、それは又早急な。それとしつたら、けふ髪月代でも <u>してお</u> こうものを。ドレちよつと、髭ばかりでも剃て来やう
	「イヤ何もしねへが、ちよつと爪も <u>とつてお</u> こう
	売のこしのあき半櫃あるをさいわい、ふたをあけて、かのおつぽをいれ、もとのごとくふた <u>してお</u> き、やがておもてのかけがねをはづし、…
	此間からおめへに頼んだ十五両の金の事、翌日は店おろしにかゝるゆへ、ぜひあすの朝まで、わつちが遣ひ込だ穴を、 <u>埋ておか</u> ねばなりやせぬ。
	そしてめんよふ、道中の茶屋では、床のまに、ひからびたはなを <u>いけてお</u> く。あのかけものをみねへ。なんだ
	そのかみさまが、内にか <u>つてお</u> いた馬と色事をして、にげたつけがどふしたしらん
	両側より旅雀の餌鳥に <u>出してお</u> く留おんなの顔は、さながら面をかぶりたるごとく、真白にぬりたて、
	「コウ弥次さん、じやアねへとつさん。おめへわらちも、いつしよに <u>してお</u> かふ
	「ヲ、そして、おれが脚半も、ざつといすいで <u>お</u> きや
	北八いろとかんがへ、そこらを見廻し、弥二郎が <u>かくしてお</u> いたる下駄を見つけて、
	「ドレふところを、 <u>あつためてお</u> いてやろう
	たがこゝに <u>脱捨お</u> きしかぶといしかゝる難所に降参やして
	そのみしろを、きんにようのがんげに、畑で湯につつばおるとつて、 <u>ひん脱で</u> おいたら、聞きやれ、だいじのきものを、がらゝおまにくはれてしまつたア。
	此内やどの女ぜんをもちきたり <u>ならべ</u> おきて
	このとき、かのつとに <u>なし置</u> たる、すつぽんとこのまにおきたるまゝ、それなりにわすれたるが、
	此ひまに十吉弥二郎がふとんの下に <u>いれてお</u> きし、うちがへの金をぬすみ かねてこしらへおきたると見へて石ころを、かみにくるつゝみたるをすりかへ、
	此ひまに十吉弥二郎がふとんの下に <u>いれてお</u> きし、うちがへの金をぬすみ かねて <u>こしらへ</u> おきたると見へて石ころを、かみにくるつゝみたるをすりかへ、
	どうまきへいれて又もとのごとく、ふとんの下へ <u>いれお</u> く。
	丁場の背戸に <u>つなひで</u> おいたら、雪陣のやによヲ、がらゝみんなくらやアがつた
	「エ、やくたいでもあくたいでも、 <u>うちやつてお</u> きやアがれ。よくつべこべとしゃべるやらうだ
	「マアかるく <u>してお</u> くがいゝ。そのかわり百ヶ日には、ちとはりこまつせへ
	モシ旦那、あなたの乗てござらしやる、ふとんの間に四文銭壱本 <u>いれてお</u> きましたが、あるか見てくだされませ
	あの女をぶつたりはたいたりして、とうとうさらけ出しおりましたが とかく御ていしゆは不便がつて、それからわきに <u>かこつてお</u> きおりましたを、…
	「コレ、おめへとんだことをする。それをふところへ <u>いれてお</u> くと、又はひ出ますは。うみへうつちやつてしまひなせへ
	しかし私も、此わらじは、一昨年松前へはいてまいつたが、帰るまで何ともござりませなんだから、 <u>しまつて</u> おいて、去年長崎へもはいてまいるし、
	「ナニないことはあらまい。慥に <u>入れて置</u> ました
	時におめへがたのよふなうつくしい顔で、なぜ髪を剃なさつた。ほんにそふ <u>してお</u> くはおいしいものだ
	赤坂までわつちがさきへいつて、いゝ宿をとりやせう。おめへくたびれたなら跡からしづかに来なせへ。宿から向ひの人を <u>出させてお</u> きやせう
	「ナニおれはこゝにゐるものを、だれがさきへ、やどを <u>とつてお</u> くものだ
	「イヤおはきなされてはたまらまいが、 <u>しまつてお</u> きなさると、いつまでもおますわいな
	「ム、そんならでへじに <u>しまつてお</u> きな。誰ぞがかいやしやう。
	わつちやアいつち初手に <u>見てお</u> いた、此三分ぎれを、手ぬぐひだけ、きつてくんなせへ
	今のやつを風呂場で、ちよびと <u>契つてお</u> きは、はやかるふ

きた八にはなあかせんと、そつとおきたち、さしあしにてつぎの間に、かねて <u>きゝおきた</u> るとをり、さぐりさぐり、かべをつたひて、ゆくうち、
「サア今度は現銭だ。おめへも貳百、そこへ <u>出しておきな</u>
それゆへなにも、御ちそうがでけぬくいが、当所はいたつて、こんにやくがよござりますから、マア是でもあげましょとぞんじて、 <u>申つけおきました</u>
「イヤそれは、かねて <u>たくわへ</u> おきます。おめにかけてませう
早速貴公御噂も <u>いたし置候</u> 事故、追付貴宅江同道参上可致候間、右御案内申入置候。
早速貴公御噂も <u>いたし置候</u> 事故、追付貴宅江同道参上可致候間、右御案内 <u>申入置候</u> 。
しこたま趣向は <u>とつておき</u> の正月物
「イ、エナ、わたしがうちはもとから爰で、ついしかたなへ <u>あげておいた</u> ことはおませんわいな
「…京都千本通、中立うりひよいと上ル所、辺栗や与太九郎が、先刻内々 <u>ひきあふておいた</u> 、アノ美しい可愛らしい、弁才天女のおべん女郎…
「エ、やかましい。千本も百本もいるものかへ。何でもからしよてつぺんに、おれがさかづきを <u>さしておいた</u>
女ぼう、あるひは女などにさゝやきて、あれはたれ、これはたれと、あいかたを <u>きはめておく</u> ゆへ、
「さよじや、コリヤわしがまちがいじやわいの。しかし、なんならさきさも、それに <u>しておかん</u> すと、薬もるにもいつしよにして、…
「なるほど、コリヤおいしやさまのおつしやるとをり、弥次さん、おめへも血の道に <u>しておく</u> がいゝね
「さやうさやう、かいもく字がよめぬ、むしくじやさかい。それでかやうに、薬の名を多に <u>かいておきます</u> じやて
「コレ北八、手めへのつゝみもいつしよに、おれが風呂敷に <u>つゝんでおこふ</u>
となりへそつと <u>やつておく</u> 。
「どうりこそ、きびしよに何か一ツばいあるとおもふたが、わしや又、此わろめが、 <u>水入れておき</u> おつたと思ふて、川へほつたが、
「イヤこいつらア、 <u>いわせておきやア</u> 、とほうもねへやつらだ。よこつつらアはりとばすぞ
「イヤわしやうちに、客 <u>ほつて</u> おいてきたさかい
「…ゑらいけんくはがあると、人がはしるさかい、わしもツイいて、見てもどるほどに、それまでまでといふて、 <u>またしておきました</u> はいの
「ハテ小便可 <u>すねて</u> おいて何せうぞい。ありたけしたんで、のけたわいな
「ワハゝゝゝ、てつきりけつねにがな つまゝれくさつたもんじやあろぞい。ゑらい隙費しな。 <u>ほつておけ</u> ほつておけ。
「ワハゝゝゝ、てつきりけつねにがな つまゝれくさつたもんじやあろぞい。ゑらい隙費しな。ほつておけ <u>ほつておけ</u> 。
「あこに、 <u>くゝつて</u> おいたわいの
いつそのこと、此布子はその裕のかたに、只 <u>とつておき</u> やせう
「ナニ <u>うちやつておき</u> やれ。みな手めへがべらぼうからおこつたことだ。さきは商売だものを、しかたがねへ
「へゝ <u>うちやつておき</u> や。あんまりあたじけなくしやアがると、おれがこまらせてやる仕法がある
やつかいものゝはしご、うちすてゝゆかんと、わうらいすくなきよこ町へはいり、そつと <u>すておき</u> 、にげんとすれば おりあしく人に見付られてとがめられ
「さよなら、さいわいのこつちやわいな。わたくしかたに、せは <u>いたしておき</u> おります、よい坊がござりますわいな。これをおつれなされませ。
「エ、おめへも、今となつて、きたねへことをいふ。そればかりのこと <u>うちやつておきな</u> せへ。こつちでも、たてかへた事がありやす
はしごをちや屋のかどに <u>たてかけておき</u> ゆき過て
「ソリヤおなごのない国で、生れた人さんじやあろぞいな。かまはんすな、 <u>ほつておかん</u> せ
くわしばこを <u>つき出し</u> おいて、かつてへゆくと
弥次郎もおなじく、くわし三ツ四ツとり出すに、かつてより人おとするゆへ、ちやつとはこはもとのごとく <u>かさねておき</u> 、…
「コリヤ声がたかい。柳ごりのわきに出てあるを、さつきから <u>にらんで</u> おいたからよ
「イヤぜんてへおめへがたアこんなに、両頭の雪陣に <u>しておく</u> からわるい
「アゝいたいた。コリヤとんだ所へ、井戸を <u>出しておき</u> やアがる。四ツ辻のまん中に

	ふたりをげんくわんに またせお きて、左平次ひとり、住半のかつてぐちへはいり、かくと言入れる。
	すべて長町のそんりやうやにては、きものはをりとも、うらには、白糸にて、十もんじのしるしを つけお くとみへたり。
	「いゝことをいふ。しかしきさまのこつたものを、うつてかしやせう。ノウ弥次さん、見なせへ乞食に してお くは、おいしい器量だ
	記行は追てあらはすべく、まづはこゝにて筆を さしお き畢ぬ

醒睡笑 境の津に行仕舞をせんはいかにといふに尤と同じ五六人つれてくたり

好色敗毒散	何にてもあたらしいおもひつき、今迄ない図をあんずるに、皆むかしの粋が <u>してしまう</u> た事なり。
野白内証鑑	「今宵かもしれず」と待侘びて、臂を枕にすこし夢むすびけるに、建仁寺の陀羅尼つき <u>しまふ</u> 時分に、表に人のおとなひ。 是は一通りの浮気客を急にたらし、衣裳何かのやつかきを <u>させて仕舞ひ</u> 、取るほどとつてはあかるゝやうにしかけ、… 残る三十両を以て女郎の借金五十六両の方を <u>わびてしまひ</u> 、 いろいろの料理ごのみして夕飯をいひつけ、まづ口あけに思ふまゝ <u>とつてしまふ</u> て、扱夕めしを心よくくうて、… 「…その通りにして、をんびんにさたなしに <u>してしまう</u> ても」と、出家とて若衆を見かぎりもし給はず。 すぐにおしふせ道盛の働をうつし、いやおうなしに <u>しゆびしてしまひ</u> 、 かはつたしかけで物もいれず、三本足を <u>くふてしまひぬ</u> 。 犬がくらひつくでゆかれぬと、大切なお客衆が見えませいで、いかい商売のかいでござりますれば、ふびんな事なれど、一服 <u>させてしまひ</u> たうござります。 是はふしぎ、又元へもどりしが、しゆもくから来た程に、もはや回向して <u>しまはう</u> とおもへど、物はふしぎ、今一ぺんまはして見て、… …使かへつて、「御返事」とて出すを、かの末社さつとひらいて <u>よんでしまふ</u> て懷中し、「サア追付け此の連衆の中へ参ります」といへば、 此の手は何程か京の降達が <u>仕手しまふ</u> て、今は大きに古手な御趣向。 「ならぬをしつて是でのめとは、 <u>ゆきつかしてしまふ</u> がてんか。…」
浮世親仁形気	ある時町衆二日寄会に、借屋中の判を <u>とりて仕舞ひ</u> 、組頭の立花やの浄閑隠居して、悴十助に向後町義をつとめさする、披露目の祝義に、樽肴を出され… 病ひの床について、俄に命がたすかりたいとて、一度に五百目、壺貫匁の独参湯を飲んで、苦痛して <u>死んで仕舞ふ</u> 無分別者世に多し。 「こりや、今もいふ通り、親代々の宗旨の為に <u>たふれてしまへ</u> 。…」

近世日本語資料

好色五人女	「このたはけ、いつの世にあがりを請くべし。追付け勘当帳に <u>付けてしまふ</u> べし」と、見る人これをなげきしに、やめがたきはこの道。
好色一代女	…三五の十八、焼物のあたま数読みて、膳出し前に下し膾の子もなくあへて、「先のしれぬ三軒屋より、ここで <u>くうて仕舞へ</u> 」と、
	二人あるよねに客五人、座に着くより、はや前後の籤取り、酒より先に塩貝 <u>喰うて仕舞ひ</u> 、手元に塵籠もあるに、栢のから菖荇盆に捨て、
西鶴諸国ばなし	…老人目覚まして、この女を呑み込み、はじめ出せし道具を、かたはしから <u>呑み仕舞ひ</u> 、金の小鍋を一つ残して、…
男色大鑑	あやふき露命まぬかれ、塵汚を濯ぎ、月代をあらため、御前の御礼を <u>はじめて仕舞ひ</u> 、年寄中残らずまはりて私宅にかへり、
	さてもさても長事をさはりなく <u>申ししまへ</u> ば、浮気男ども思ひにむすび付けし中に、
	上方ははや <u>歌うて仕舞ひ</u> ぬる、春の山道はさんさなど、今になりてから引いて、踊りぶりをかしく、これは座にたまられず。
日本永大藏	…鈴も遠いから <u>ただかせて仕舞</u> はれける。
万の文反古	このごとくの取りやりは千貫目より上越し、慥かなる身代の人のする事を、一拍子違へば <u>手扣いて仕舞ふ</u> 、…
	兄の跡をかやうに相続する事、世間にあるならひと、是非祝言させて、三国一を <u>うたうて仕舞</u> 申候ひて、
世間胸算用	「…それをたがひに了簡して、腹 <u>たてずにしまふ</u> 事、人みなかしこき世とぞなりける」
	身のかせぎに油断なく、色々のわたり鳥調へて、都にのぼりしに、みな <u>見せて仕舞ひ</u> し跡なれば、ひとつも錢になりがたく、
武道伝来記	勝之丞、左の肩先を斬られ、抜き合する間に、たたみかけて本望とげ、止めを <u>刺してしまふ</u> 所へ、跡より三人追つつき、又斬りむすび、
	「仰せ渡さるる段々、聞き給へ」と、茂右衛門、書付け <u>読み仕舞へ</u> ど、団平おくれて不首尾の時、
	大助玄関前に立ちながら、その謡に連れて、 <u>謡ひしまひ</u> ぬれば、主膳立ち出で、
武家義理物語	一人は荒木与次兵衛が追出し太鼓の <u>鳴りしまふ</u> まで、田舎らしき人に気を付け、
	道中申し合ひて、互ひに機嫌良く日を重ね、参州岡崎の泊りの夕暮れ、水風呂を焚かせ、二人ともに <u>入りしまひ</u> 、浴衣を着ながら、…
	…俄に木の葉焚き付け、柚味噌ばかりの膳を出だせば、 <u>食ひしまう</u> て、その箸も下に置きあへず、

近世日本語資料

冥途の飛脚	梅川殿へも吹き込んで、此方から挨拶切り。島屋の客にさらりつと <u>讀けさせてしまひたい</u> 。
	上り詰めるその手間で、届ける所へ <u>届けてしまへ</u> 。エ、性根のすわらぬ氣違ひ者と。
博多小女郎波枕	内には乞食と、尖り声。余り物は <u>やつてしまう</u> た、通りや。通りやと、つかうどなり。
薩摩歌	…人も連れず、着のまゝで、親の外聞構はぬ氣か、言ふこと <u>言うてしまう</u> たら、きりきり戻りや、迎ひに来たと。
夕霧阿波鳴渡	…命危なしと聞き及びしが、いかう重いか、但し無常の夕霧と、 <u>消え失せてしまう</u> たか。
	田も遣らう、畦も遣らうで。奥様はうつそり、鼻 <u>明いてしまはん</u> しよ。小無益しい、あた分の悪い。
長町女腹切	騙りめが挨拶、はらりしやんと <u>切つてしまひ</u> 。年切り増して奉公するか。
	べりべりしやべる頬桁、 <u>蹴放いてしまはん</u> ど。むしやぶりつくを、
卯月紅葉	父様も留守なり、これも <u>仕立ててしまひ</u> たし。今日は連れになりますまい。よう拝んでやと、言ひければ。
卯月の潤色	…我らはもはや休みますと。我が事ばかり <u>言ひしまひ</u> 奥に入りてぞ臥しにける。
心中重井筒	晝算おいてみて。たとへ算が合うても、五度に三度は <u>投げずにしまふ</u> 。
心中方刃は氷の朔日	…ちよつと一筆請け取りして、出来た分くだされと、 <u>言ひもしま</u> はぬ半分聞き、三両三分に掴み付き。
生玉心中	オ、でかしやつた、 <u>言うてしまふ</u> は懺悔の一つ。罪を助かる種ともなる。
堀川波鼓	いやいやいや、人の譏りも、身の恥辱も。 <u>思つてしま</u> うて上のこと。よし御承引なきからは、こなたとこゝで刺し違へ…
大経師昔暦	煙草盆に切炭いけて、膳立てをして、椀拭いて。お給仕に差し合はう、夕飯早う <u>食てしま</u> やと。一口に千色ほど。
鐘の権三重帷子	…馬持がよい故に。その月毛も一兩年めつきりとよくなつた。買手があらば <u>売つてしまひ</u> 、五両も七両も利を取つて。
	影は障子に男と女。忍び逢ふ夜の私言。頷き合うて顔と顔、寄せてしつぽる濡れの露。 <u>寝てしま</u> うたか、まだ寝ぬか。
	人間はづれの女、穢れし道具、武士の家が穢るゝ。中間ども、片端に叩き割り、火をつけて <u>焼いてしまへ</u> 。
	ハアこなたもよつぼどのこと言うたがよい。こゝからなんぼあると思はしやる、一里半ござる。そのうちに、船は <u>出てしまふ</u> 。
曾我会稽山	明け暮れに、病ひとなつて、痛めんより。鳩毒となつて、一思ひに <u>殺してしまへ</u> 、兄弟と。

近世日本語資料

遊子方言	口上いいしまい
	これさつきの、どこへか <u>持てゐつてしまつた</u> 花がん袋と羽織を持て来てくれろ
古契三娼	是は都合のわるいとき、頭のものもみんな <u>まげてしまつて</u> 、つげの櫛をちよいとさしてゐたり何かするから、
	「…こ他所行にきせるを持たねへほどもふしやうじやアねへわへ」と言ひつのつタから、お蝶はさいわいにして突出してしまつたのさ。
傾城買四十八手	「…」と言ひをしへても、つい云そびれてい <u>はずにしまひ</u> 、
	<u>ひきしまふ</u>
	ト云ながら、一ト二の糸を <u>ゆるめてしまい</u> 、箱を廊下へつき出す。此間五ツ六ツすてぜりふ有。
	…又は外の客を不勤、段段 <u>切てしまひ</u> 、終には独客と成、互ひに身づまりとなる故、
繁千話	まてしばしと思ふうち、あつちから折れてきたから、こつちも <u>をれてしまつた</u> が、モウ殆あいそうがつきた
	そんなこたアまゝのかは。今ン夜のしうちを幸に <u>きれてしまつて</u> 、爰の内だけへねへな。未練をだしなさんな
	「河東峯に一トはけ夕霞」と、うなりながら小便をして来て、それより犬悦は <u>寝てしまひ</u> 、茶屋の女も暇乞して販る。

酩酊氣質	…此頃アおれが様な男ぶりの膺が出来るが、此土地えはまだ流行めへ。ナニもうはやつてしまつたト。べらぼうめ。そりやア福介だア。
	とか、よしんば少らツつの無利をいつても、済すましを付て、手エ打てしまふといふもんでござへす
浮世床	わけもなく、理屈もなく、人の気にさわるもしらず、われおもしろの人かしまし。さわぎしまへば、いびきゴウゴウ。
	此内いんきよのあたま結しまひ、伝あくびをしながら、さかやきをもみて毛うけをもつ
	先生それもしらずよ。甲所を一ばんやつて仕舞て、跡のキツカケを見やうとして目をぱつちり明くと、
	おまへ爰へ出てかいて見なされ、トゑらいドス声できめをつたによつて、わしもしゆつと消て仕舞た
	アノナ初めて下つた折に、どこやらの家へ娼妓買に往た。まづゑいナ。何や角が済で仕舞て床へ往たは。
	悪ヂヤリすなの、あばずれぢやのと、ぼやきつういと何所やら往て仕舞た。
	此頃はをつな所へはまつて、血道をぶちあげて騒いでゐるが、今に見ねへよ、なけなしの金を捨て、ちつとばかりの株家督を他の手に渡してしまふだ
	今朝起たのは、五ツが鳴てから起たはな。家内の者は朝飯を食てしまつた跡だ。夫に、居膳で食ふも能が、せめてうぬが食た椀でも洗ふがいゝはさ。
	「おらアイそがしくて見ずにしまふス
	「ぜかして（やめにして）仕舞たはいのう。…
	「はるはるといふ奴は、皆はり倒されてしまふ
	読る坊さまによんでもらつた所が、又忘てしまふゆゑ、孫や彦のこちとら組は、先祖の戒名をおぼえずに暮して、

人情本 春告鳥	…ドレさめねへうちにト言ひながら湯のみのふたを見れば、其身の紋とおなじことなり。左様思ひながらも深くは考へず呑で仕舞 「そのつゝみでにあつちの客人の所へ左様いつてやんな。今に寐かしてしまつてゆるりと楽しみイすから、待て居ておくんなましと 「よごしますとわるふございますから、はやく着かへて仕舞ひませう。しはになりそふで心配でなりません ト立をとどめて くどくもぬしにいふ通り、いつそお心が替り切になつてしまつて、たとへどんなに気をもんでもさはひでも、… おれを呼たがつても其方へは往れないから、モウさつぱりとおれが事はあきらめろ、と言て仕まつてくれさツしやれば、… 仕うちで愛相を尽して、弥是限りにしてしまはつしやる気であらツしやるのだろふ、と思ふとしみ悔しふざますは しかし、あの素人のときならば、そりやアもふ悔しいと思ひつめて死んで仕廻て、かわいそふなことをしたと思はれるのを、… 「そして芸者でも、娘でも、今まで在た情人は不残切てしまつて、そして内室さんも持ねへで、このすゑ誰とでも色はこしらへねへで、 …またあの手合が大勢来ると、しみじみした咄しも出来ねへからとおもつて、衆人に啞を吐て先へ芝居へやつて仕廻つて、… 先の女にくるめられ、それに心を奪はれて、いひかはしたことをもわすれてしまひ、勝手にしろとは恨めしい気随な返答と思へば、 やうやう氣をとり直し、何様にことをわけて言たればとて、男の腹が變つて居ては、最早不及事、とても左様なることならば、死んで仕舞がましならめ、 心を見ぬかれて、いゝよふにじらされるやら、なぐさまれるやらしても、則此様に馬鹿の様になつてしまつて、ほんに私きやア、… エ、イ薬は付て居ねへでも、火があれば煎じあがるはナ。マアきり掃出してしまつて、薬でも水でも吞せねへナ 「サアこちらへおいでなさいましなねへ ト言ながら、上に羽折て居たる広袖をずウイと両袖から脱で仕舞 「今漿水を付て仕舞ましたら、何だか戦栗がする様になりましたから、此様な衣類をいたして… どふもどふも感心ちやアございませんか。このお座敷へみんな乗つて仕舞のだものを、小細はづだ トいひながら段取をしてならべ なまなか思ふお人が出来ましても、嫉妬で捨られるよりは、何にもなひ方が拙なひ心を知られなひで、恥をかゝずに仕舞ますは。 最貴君に是限逢れなひ節は、直に中之町も引て仕廻て、髪も結ず湯にも這入らなひで、貴君に別れた此儘で年季の中は引籠で居て、 命が有たら信実尼になりますは、死んで仕まへばそれでよし、 それから翌朝帰らツしやる其節も、毎度よりか機嫌をよくやさしいことを言はしつて、帰ツて仕まはしツた其時の思ひは アイサ左様ざましたツけネ。あの朝帰して仕廻しツて私が同床に 十年と百年と斯二ツ立て仕まうと、それこそモウ来さつしやりやア仕ますまひは。 イヤ小僧が珍らしい勘繰を言出したはへ。しかしよく気が付た。此方は持ては来たが、ツイわすれて仕まつた。早く此所へ持て来てくん 「ヲヤヲヤ私しやア先かも知れなひが、モウ前に断はられてしまつたのだけはネ。 「ヲヤヲヤ左様かへ。私やアさつぱりわすれてしまつたのに、お前はよく覚へて居ておくれだツけねへ 「アイありがたふヨ、ちよつと着かへて仕まはふ 梅里も跡から奥へ行、お熊にかまはず理介を寐かして仕まひ、お花も二階にて目を覚せし様子ゆゑ、挨拶をして、お清には火を發して貰ひ、 お前さんも私も思ひがけなひ度で別れ別れになつて仕まつて、モウ兎ても再度お目にかゝる事は出来なひのかと思つて居りましたのに、 「モウ泣は仕ませんヨ。其代りに今の様に過た度ても、疑ぐツてお在なさる様だと、死で仕舞ますは。それでなければ幾時も泣て居ますは …其殿さまがお死去遊ばしたといつて、私に尼になつて仕まへといふのは、かはひそふに無理ぢやアありませんかねへ。 「ヲイヲイ、それは今朝のお薬か「ヘイ昨日のはお辰どんが流して仕舞ました たとへまた一人や半分情合のあつたものがあるにもした所が、過た昔のことだものヲ。今では忘れて仕まつたのサ また私が付て居て其様な度にもなつて仕まつては、第一私が悔しくもあり、… 鳥雅に我儘をいはせなひといふ証古に、鳥雅には見せずに祖母が視て嫁を貰つて仕まふといふ事に極つて、其嫁を尋ねる段になつて居るといふから、

近世日本語資料

東海道中膝栗毛	其日ぐらしに春米の当座買、たゞき納豆あさりのむきみ、居ながら呼込で喰てしまへば、びた錢壺文も残らぬ身代、
	「いゝとはなんのことだコレ其金ゆへに、おらア女房をさらけ出してしまつて、今夜からひとり寝にやアならねへは
	「サアサアこの元気で仏を桶へさらけこんでしまをふ。」
	「エ、おめへもふちつとはやく来なさればいゝに。もふ桶の中へさらけこんでしまつたものを、
	弥二郎兵へ目つきでしらせるゆへ、口こどとをいひながら、きやはんをあらひしまい
	「コレしやれずと、もふいつぺん湯へ這入つてきや。そのうちに、みなおれがのんでしまはア
	「たばこぼんへ火をいれたらこげてしまはア。たばこ盆の中にある、火入のうちへ、火をいれてこいといふもんだ
	「めしをたいたら、粥になつてしまふわな。米を焚といへばいゝに
	ばかアいゝなせへ。しんぼうしてゐるうちにやア、足がまつくろにこげてしまはア
	此内膳も出、そこそこにくつてしまい、しやれもむだもいつかういはず、たゞぼうぜんとだまりんなり
	…畑で湯につつばおるとつて、ひん脱でおいたら、聞きやれ、だいじのきものを、がらゝおまにくはれてしまつたア。
	此内三人ともあしをあらひしまいすぐにおくへとほる
	時に女中、膳はひいて酒にしやせう「ハイ今に出します ト ぜんをひいてしまい、てうしさかづき、さかなをもちいで
	「ハテがつてんのいかぬ。アノやらうが風呂敷包も笠もねへ。大かたおいらが寝てゐる内、たつてしまつたと見へる
	よい。サア伝すけ、今すこしある 呑でしまへ
	私ども右の泥房にあいまして、さつぱり路用はとられてしまいましたから、大きに難儀をいたします。
	かゝるこんざつの中ゆへ、人もきがつかず、きた八おもふさま、くつてしまい すきまを見て、…
	手もちなくてたばこ入のそこをはたく 六部はやがてくひしまいて
	ゆかた一まいうしろなして、てんじやうのつくろひちん、少々出し、さらりとすんでしまいければ、ほどなくよがあけて、
	のこらず犬にやつてしまい、むねをわるくして、こゝをたち出、たどり行に、
	駄ちんはみんな、うらが呑でしまつて、がらおまにくわせべいもなアなし、
	ほどなくさかづきだいてうしすゞりぶたをもち出、おさだまりのさかづきも、それぞれにすんでしまい
	いつたいこのきやく人、けんつうにて、みなつけがみなれば、まげもびんもおちてしまい、きやくはあたまをなでまはして
	「ハレおとした所が、たかでおまいは、ながれてしまはしやるぶんのことだ
	このうちかつてよりもいろいろもちだし、ぜんも出て、弥二郎きた八すこしはきのどくながら、これもくつてもふと、…
	「それでも、ナニおればかりかぶるもんだ。いまいましい。せつかく酔た酒が、みんなさめてしまつた
	「次郎どんの犬と、太郎どんの犬と、みんなさめてしまつたか
	「ほんに観音さまのあたまア、かみくだいてしまつた
	「くらやみの恥を、とうどうあかるみへぶちまけて仕廻た。ハゝゝゝ時に弥次さん、おめへとんだふさぐの。
	また一ぱいつぎ、ひとくちのんでしたにおくと、北八又そつと引よせのんでしもふ
	ひつたくりてうしをとつてついで見て 「ヤアこのさる市め、ひとりでくらつてしまやアがつた
	「ワヤこの子はとんだことをいふ コリヤア茶だ茶だ ト いゝながらのみさしたちやわんの酒をのんでしもふ
	きた八そつと手を出し、ちよくのさけをのんでしまい、ちやつともとの所におく
	「ワアイ座頭どんのさけウ、みんなあの人がちやわんへついでしまはつせいた

	「エ、めんどうな、はらつてしまつたがいゝ。手めへのするこたア、なんでもおさまらねへ。あしもとのあかるいうち、はらつてしまや
	「エ、めんどうな、はらつてしまつたがいゝ。手めへのするこたア、なんでもおさまらねへ。あしもとのあかるいうち、はらつてしまや
	十ねんばかりしもあとに風眼とやらをわづらひおりまして、両眼ともにかいもくおつつぶしてしまいおりましたが、
	こゝにてぜんも出、いろあれ共りやくすやがてぜんもすみ、弥二郎ゆにも入てしまひ
	コレコレ、おめへとんだことをする。それをふところへいれておくと、又はひ出ますは。うみへうつちやつてしまひなせへ
	「コレおやぢどん、なんのかのといわずとも、たぜいにぶぜいだ。はやくうつちやつて、しまいなせへ
	「ならざアきさまぐるめに、うみへぶちこんでしまふがどふだ
	竹籠をすてゝしまひし男ぶりごくつぶしとはもふいはれまい
	「コリヤごうてきにくらやアがつた トふせうぶせうにかのぜにを払てしもふ
	わしがおどりしまつた所で、おめへのつむりをちよいとなでよふから、それをきつけに、やんやアとほめてくんな。
	「よいよいやさア ト おどりしまい、ざとうのあたまをちよいとああしにてなでと
	「そのかはり、わしもほめてがなけらにや、はりあいがない。うたひしまつたら、だんなほめて下さるかな
	ふたりはおき出て、手水つかふ内ぜんも出、くひしまひ、かれこれするうちやどのていしゆ
	「エ、ソレ、まだ竹のつゝからおちる。それもほかしてしまわつせへな
	おやまに浅柄のたばこ貰ひおつたが、みなすふてしもふた
	女どもはどこをとつてしまい、かつ手へ行と、弥次郎小ごゑになりて
	「…道理こそコリヤ地藏さまのねきにまで、箱どもがとびちつておるが。ヤア、お鼻がぶづかけてしもふた
	弥次郎まんぢうをくひしまい 「もつとやろふか。いくらでもはいるよふだ
	十ヲばかりくつて、あとはもふおくびに出るくらいなれど おのれこんびら、はなあかせてやらんと、むりにおしこみみなくつてしもふ
	まんぢう二十とりよせ、たゞもじもじと見ててばかりゐたりけるが、やがてくひかゝるとぼつりぼつり十ヲ斗くつてしまい、
	あとはいやそふなかほつきにて、やうやうとのこらず、くつてしもふ
	まんぢうをまたまた二十とりよせ、こんびらへすゝめるやいなや、このたびは、なんのくもなく、たちまち二十くつてしまひ、
	はしり行うち、かの家のかどに、たつてゐた人もどこへか、ついといつてしまい、さつぱりしれなくなり、…
	此うちせんどうども、舟にとまをふいてしまひ、さほさし出して
	心はせく、ふたのおちたをさいわい、ハハアこゝにもくちがあると、うへのほうから、シウと、せうべんをしてしまひ
	此うちいんきよは、やうやうにはいてしまひ、川の水にうがひし、くちをあらひて
	あたらしきしびんときゝて、なるほどだいじもあるまいと一ぱいひきうけて、ぐつとのんでしまい
	「そのはづじや。ゑい所はみな、うちで焚てくてしもふたわい
	「用たしにならはやういてごんせ。わしらが今めしくてしもふと、いつきに船を出すさかい
	乗合のことだから、まゝのかはとそれなりに、くたびれまぎれに、ツイねてしまひやして、
	「まゝよ、どうするもんだ。かねは胴巻に入れてもつてゐるから、たかゞ包は手めへとおれがきがへばかりだ。うつちやつてしまへ。…」
	「おらア、ついのもんでしまつた。いめへましい。サアいかふ
	「イヤわつつちがくせとして、聞かけた事は、金輪際きいてしまはねば、気がすまぬといふもんだから
	北八にかねをつきつけ、どこへやらいつてしもふ。

	「アリヤわしさきやろわい ト このたごのうちへ、ふたりながら小べんしてしもふと、こへとりたごをかたげ見て
	だんだんさかなを出すごとに そのねだんをきゝて出ただけのもの、のこらずくひしまひて
	「エ、歌どころじやアねへ。どふぞ <u>うちやつてしま</u> いてへものだが ト 今は二百の錢もおしからず、…
	ちやづけちやわんにめしをもりてさつとくひしまい
	弥次郎、かの一ぱいのめしをくひしまひて、ちやわんをやつかいのかたへさすと
	弥次郎めんどうなりと、がまんをおこし、やうやうと、くひしまへば、
	なづけのいれてありし、どんぶりをうちあけて、めしをもり、ぺろぺろとくつてしまひ、もつかいぼうへまはすと、…
	…めしをもり、ぺろぺろとくつてしまひ、もつかいぼうへまはすと、これもしこたまよそつてくひしまひ
	実の所は逃口上、知恵袋揚底なれば、 <u>はたき仕舞</u> し栗毛の趣向掬なく、
	三ぜんもち来りすへる。しよくじのうち、いろあれどもりやくす。やがてめしもすみ、ゆにも入てしまふと、
	こどといひながらせんかたなく、ぜにをはらひやると、此うちあんまも <u>もんでしもふ</u> と
	勝手よりおこしに來り、手水つかふやいな、膳をすゆるに、三人ともくひしまひ、丹波の人は、高野へと出ゆき、弥次郎兵衛喜多八は、…
	「コリヤ座摩の宮の札じや。しかもけふつく日じやわいな。大かた今頃は、もふ <u>ついてしもふ</u> たじやろぞいな
	…けふは、くわんげ富の当日、ことに今、 <u>つきしまひ</u> たると見へて、くんじゆ下向、おびたゞしく、おしもわけられず。
	あとふりかへりふりかへり神前にいたり見るに、富 <u>つきしまひ</u> て、第一ばんより、だんだんと、あたりふだのばんづけ、…
	角丸若太夫、竹田の切狂言も <u>うち出しまへ</u> 、
	「はらアたつても、わつちが吞込であるから、念晴しにいつてしまいなせへ。おいらもどふか、きゝてへやうだの
	三人ともおもふさまに、くひしまうと、やがてぜんもひけたるに、
	「久助もふ其障子 <u>ほつてしまへ</u> 」

釈譜詳節	3:15a	後에 쯔 白氎을 스시에 <u>노하 두고</u> 보더시니 俱夷 쯔 갓가비 오러커시닐 太子ㅣ ㅎ샤디 白氎이 띠 무드리라 ㅎ실씨
	6:2b	耶輸ㅣ 그 그별 드르시고 羅睺羅 더브러 노곤 樓 우희 오르시고 門들을 다 구디 <u>죵겨뒹터시니</u>
	9:11b	文殊師利여 물읷 衆生이 도흐며 구즌 이를 모르고 오직 貪्ह며 앓가본 무스물 머거 布施्ह며 布施्ह는 果報를 몰라 천라을 만히 <u>뵈호아 두고</u> 受苦ㄹ비 덕히여...
	9:12a	모지마라 줍디라도 제 모맷 고기를 바혀 내는 드시 너겨 ㅎ며 쯔 貪्ह 無量有情이 천라을 <u>모도아 두고</u> 제 뵈도 오히려 아니ㅎ거니
	9:20a	倉은 갈물씨니 나들 갈물씨라 庫는 천량 <u>그초아 뒹는</u> 지비라
	11:24b	그 ㅼ 南堀엿 仙人이 사스미 우룸 쯔리 들고 어엿비 너겨 가 보니 암사스미 ㅎ 쯔니물 <u>나하 두고</u> 할타가 仙人을 보고 나드ㄹ니라
	13:17a	典은 尊्ह야 <u>여저 둘씨니</u> 經을 尊्ह야 여저 뒹는 거실씨 經典이라 ㅎ느니라
	13:17a	典은 尊्ह야 여저 둘씨니 經을 尊्ह야 <u>여저 뒹는</u> 거실씨 經典이라 ㅎ느니라
	24:7a	아래 부테 阿難이 더브르시고 舍衛城의 드르샤 乞食्ह터시니 冼 그새 好곤 아히들히 흘굴 뵈화 지블 <u>뵈그라두고</u> 이는 몸채라 이는 翼鄺이라...
	24:13a	王이 엿데 사르물 손소 주기시느니잇고 사름 주깊 官員을 <u>定्ह야 두쇼셔</u>
	24:14b	그 比丘ㅣ 두리여 울며 닐오디 나를 ㅎ ㄹ 스시나 <u>살아 뒹다가</u> 주기쇼셔 모딘 노미 듣디 아니흘씨 ...
	24:22b	그 ㅼ 王이 꺽것 위्ह야 차바닐 만히 <u>準備्ह야 뒹터니</u> 그 상재 그런 한 차바닐 즉자히 다 먹고
	24:31b	釋迦文佛이 거췌 저긔 내 부터췌 말췌물 ㅎ스보다 涅槃्ह신 後에 劫 다옴 時節에 經과 袈裟와 바리와를 내다 가져다가 이 塔에 <u>녀히 뒹습다가</u> ...
	24:42b	그저긔 王이 金銀 瑠璃 玻璃로 네 가짓 도굴 뵈그라 香乳와 香湯을 담고 種種 음담과 보비엿 幢幡蓋와 花香 풍류를 그초 <u>準備्ह야 두고</u> 齋戒्ह야
	24:51a	太子ㅣ 아바넛 勅書ㅣ 신가 너겨 깃스박 ㅎ 눈 ㅼ 衲 畚바다에 <u>연자두고</u> 오래 보니 苦空無我를 아라 須陁洹道를 得्ह니라
月印釈譜	1:6b	이툏나래 나라해 이셔 도즈기 자취 바다가아 그 菩薩을 자바 남기 모물 <u>ㅼ스박 뒹터니</u> 菩薩이 前生에 지은 罪로 이리 受苦्ह시니라
	1:7b	원넉 피 달 담고 올흔 넉 피 달 <u>다마 두고</u> 닐오되
	1:10a	곳 닐굽 줄기를 가져 겨샤디 王ㄹ 出승을 저췌박 瓶ㄹ 소배 <u>그초아 뒹터시니</u> 善慧 精誠이 至極्ह실씨 고지 소사나거늘 조차 블러 사아지라 ㅎ신대...
	2:49b	王이 돌해 刻히샤 刻은 사길씨라 南郊에 <u>무더두라</u> ㅎ시다
	4:11a	閻羅王宮이 瞻部洲스 아래 五百 由旬 디나 가 잇느니 꺽것 마스를 다 그숨아는 짜히니 그에 王이 이쇼디 오누의니 다 地獄 <u>뵈그라 두고</u> ...
	4:46b	이 華嚴經은 文殊師利菩薩와 阿難尊者와 鐵圍山 췌시에 이 經을 뵈그라 龍宮에 <u>드려 뒹거늘</u> 龍樹菩薩이 龍宮에 가보고 외와 가져와 世間에 流傳्ह니라
	7:8a	네 바리를 어디 가 어든다 도로 <u>다가 두어라</u> ㅎ야닐
	7:9a	如來와 중래 다 나 니거시닐 瓶의 므를 <u>기러 두고</u> 사가리라 ㅎ야 므를 기르니 ㅎ 瓶의 그둑거든 ㅎ 瓶이 ㅼㅅ곰 ㅎ야 ㅎ ㅼ 계도록 긴다가 몰्ह야 너교디
	7:9b	比丘들히 제 와 기르려니 지빅 두고 가리라 ㅎ야 지빅 <u>드려두고</u> ㅎ 부체를 다드니 ㅎ 부체 열이곰 흘씨
	7:13a	부테 쯔 難陁드려다가 地獄을 뵈시니 가마돌해 사르물 <u>녀히 두고</u> 글효디 ㅎ 가마에 뵈 므를 글히터니
	9:29a	오직 貪्ह며 앓가본 무스물 머거 布施्ह과 布施्ह는 果報를 몰라 迷惑고 信根이 업서 천라을 만히 <u>뵈호아 두고</u> 受苦ㄹ비 덕히여 이셔 빌리 잇거든...
	9:29a	모지마라 줍디라도 제 모맷 고기를 바혀 내는 드시 너겨 ㅎ며 쯔 貪्ह 無量有情이 천라을 <u>모도아 두고</u> 제 뵈도 오히려 아니ㅎ거니
	9:38a	倉은 갈물씨니 나들 갈물씨라 庫는 천량 <u>그초아 뒹는</u> 지비라
	10:25a	五百 도즈기 무리 와 번들흘 티고 爲頭 도즈기 나를 자바다가 겨집 사마 사터니 제 法에 상네 門 <u>자퍼두고</u> ㅎ다가 ㅼ쳐오거든 썰리 門을 열라 ㅎ엿터니
	14:76b	方便力으로 險흔 깊 가온디 三百 由旬 디나 ㅎ 城을 <u>지셔두고</u> 한 사름드려 닐오디 녀희두리여 말며 물러 도라가디 말라...

	20:46b	山 자히 보고 太子를 서스박 怒흔 쁘데 <u>미야 뒹터니</u> 婆羅門이 너교디 나를 주깁가 ㅎ야 거줏말로 글어 노히니…
	20:63a	太子 술보디 大王스 두겨신 보비를 어더 네 城門 밧과 저젯 가온디 <u>노하 두고</u> 布施 ㅎ야 求 ㅎ리 잇거든 ㄴ미 쁘들 거스디 마오져 ㅎ노이다
	22:28a	庫藏은 천량 <u>꺄초아 뒹는</u> 庫 라
	22:71b	王이 사름 브려 請 ㅎ쇼셔 宮城에 드르시면 五百 ㄱ장 모던 黑象을 술 <u>머겨 뒹다가</u> 불바 주교리이다
	23:4b	오직 財物을 貪 ㅎ야 <u>싸하두고</u> 흘디 아니 ㅎ며
	23:73a	…내 아드리 僧齋에 쁘고라 혼 도노로 도티며 羊이며 거유 올히며 뚝 가히를 만히 사 오라 ㅎ야 ㄷ히 쳐 술찌기 <u>ㅎ야 두고</u> …
	23:73a	羊을 미야 들오 모글 뺨어 더븐 피 바드며 도틀 <u>동여 두고</u> 매로 티니 물본 소리 굿디 아니 ㅎ엿거든
	23:75a	羊을 들오 목 뺨어 더븐 피 바드며 도틀 <u>동여 두고</u> 매로 티며 글쁜 가마애 오로 녀허 데티니
	23:76a	羅卜이 새돌히 ㅎ흙 므러 오거늘 보고 깃븐 쁘들 내야 匠人 請 ㅎ야 ㅎ흙 부터를 <u>땡꺄라 두고</u> 三年을 供養 ㅎ습다가
	23:93a	어미 이받디 아니 ㅎ고 거줏 일로 이받던 짜홀 <u>ㅎ야 뒹거늘</u> 目連이 도라와 무른대 어미 날오디 이받던 짜홀 몬 보려
	25:47b	世尊이 大衆들히게 니르사디 이제 文殊의게 付囑 ㅎ야 戒壇上에 두어 三年 디내야 東南角에 <u>웁겨 두어</u> 三十 年을 디내야 이 히 디난 後에…
	25:54a	牟尼佛도 내게 조고맛 爪髮을 施 ㅎ샤 塔中에 <u>조쳐 뒹습다가</u> 世尊 涅槃 後에 塔中으로서 내야…
	25:65a	아리 부테 阿難이 드리시고 城에 드르샤 乞食 ㅎ시더니 한 아히들히 깃 가온디 各各 ㅎ흙 되화 지비며 倉庫 며 財寶 五穀을 <u>땡꺄라 두고</u> 노다가…
	25:74a	阿毘樓陀 大臣이 阿育王像 땡 꺄라 나모 象티와 東門 밧기 두고 쏘 니 업슨 ㄴ굴 땡 꺄라 <u>두퍼 두고</u> 날오디…
	25:95a	王이 듣고 歡喜踊躍 ㅎ야 摩偷羅로서 巴連弗邑에 니르리 그 스시에 비 버리고 비에 幢盖 <u>드라 뒹터니</u>
	25:142b	阿??이 도로 셔고 法益의 아들 三波提를 太子 <u>사마 뒹터니라</u>
楞嚴經	2:121a	性이 空흔 眞實스 覺이 法界에 周徧커늘 혼 번 迷惑 ㅎ야 識 사물씨 이런드로 ㄹ흔 몸 안해 <u>그슴 ㅎ야 두미</u> 餅스 가온뎃 虛空 곧 ㅎ니라
	4:90b	ㅎ흙 아흔 純흔 므리 ㄱ지료물 혼 야오로 <u>브려 두어</u> ㄴ외야 ㅎ리옴 업뎃 ㅎ야샤 어루 因地스 ㄴ스물 사므리라
	8:124a	ㅎ다가 데 힘 이시며 福德을 <u>兼 ㅎ야 뒹는</u> ㄴ사르미 中에 사르미 모물 브리디 아니 ㅎ야 ㄷ의 히를 갑거니와
円覺經	序65	沙竭大龍이 부텃 기티산 付囑을 차자 經律을 다 가져 龍宮에 <u>드려 두니</u> 이 海藏이라
	上1·2:100b	그러나 비록 한 중생도 원각을 <u>갓추어 두지 아니한</u> 사람이 없으나, 또 티끌의 경전을 내지 못하며
金剛經三家解	2:25a	그러나 이 몸이 相은 緣을 만나면 곧 現 ㅎ고 緣이 다오면 곧 숨느니 더 報身 化身이 수으며 現호믄 <u>더뎃 두고</u> 괴외흔 光明 眞實스 모몬 상네 물꺄시며
	3:52a	山僧 어스물 ㅎ 前에 옷과 바뎃 아래 <u>꺄초와 두니</u> 鬼神도 쏘 能히 아디 못 ㅎ터니 녀희 이 혼 몯 사르미 어느 고돌 向 ㅎ야 어드료 ㅎ다가
	5:24a	諸法이 혼 字 어루 ㅼ어 눈 알피 거러 이시리 업스며 혼 말스미 어루 ㅼ어 嵬中에 <u>記錄 ㅎ야 두미</u> 업스니
杜詩諺解	3:25a	ㄴ ㅼ지 뷔면 붓그러울가 저허 혼 ㄴ ㅼ돌 <u>머물워 두고</u> 보노라 시름드윈 누네 서리와 이슬을 보노니
	3:32b	녀희 비들 마가 줄 靑錢을 ㅎ마 <u>일워 뒹노니</u> 반드기 ㄷ흔 마스로 히여 내 이베 들에 ㅎ라
	3:41ab	상네 商山스 늘그니 님금 돕는 功을 <u>兼 ㅎ야 두쇼</u> 물 怪異히 너기노라

	6:20b	主人이 늘근 ㅁ를 思念호야 그윽 지비 ㄱ숯 만되를 容納호야 ㄸ다
	6:39a	눈 알피 杻械를 버려 두고 등 뒤해션 더와 피리를 부넷다
	6:48a	干戈스 ㅅ시에서 늘구니 지블 幸히 다보조로 ㄱ리와 ㄸ노라
	7:35b	ㄱ솔히 成熟거든 晝화 ㄸ다가 반드기 흐롤디라 ㅎ올로 내 倉을 陵군게 홀 뿐 아니니라
	8:68a	내 슬호디 가난흔 ㅅㅅ리 오래 羅襦裳을 어더 ㄸ다니 羅襦를 쏘 베퍼 ㄸ디 아니호고 그딕를 相對호야셔 紅粧을 시셔 브리노라
	8:70a	溫潤흔 玉이 ㅁ츠매 외로이 셋느니 불근 구스른 시러곰 어드운 디 ㄱ초와 두리아
	9:23a	ㄱ늘오 보드라운 프른 실로 밍 ㄱ론 신과 빗난 흰 터리로 ㅅㅅ 手巾은 기퍼 ㄱ초아 ㄸ다가 늘그닐 주느 거시어늘 아샤 뿌미 내 모매 밋도다
	9:41a	빗난 구루믈 蕭史ㅣ 머므렛고 글웠 字는 魯恭이 머물워두도다
	10:39ab	ㄱ솔히 다으거늘 東녀그로 녀 와 쏘 도라가디 몬호니 새지블 小城스 ㅼ메 브터 ㄸ노라
	11:19b	物理를 子細히 推尋호야 모로매 行樂홀 디니 엇데 ㅅㅅ 일후믈 ㅼ이 모물 ㅁ야 두리오
	15:3b	나그내로 사로매 ㅅㅅ간 심거 ㄸ바믈 瑤琴과 ㅼㅅ호야 ㄸ다라
	17:14ab	尸郷스 한아비 ㅅㅅ바 두어 길홀 두렛게 ㅎㅅ ㄸ디 아니호니라
	21:11a	揚雄이 쏘 河東賦를 지셔 ㄸ노니 오직 부숫그려 하늘로 올여 보내요믈 기들오노라
	22:18a	오직 ㅁㅅ맷 일로 ㅎㅅ여 두고 귀밉터리의 衰殘호모란 肯許티 마물디니라
	22:19a	머물워 두면 不祥홀가 저프고 ㅼㅅ ㅼ면 柴荆에 셋그리로다
	23:43b	저근 비를 내 ㅎ마 일워 ㄸ노니 ㄸ대 자보믈 ㄱ숯 브르믈 기들오리라
	25:57a	그딕 이제 ㅅㅅ ㄱ름 흐르느 ㅼ레 비출 ㄸ어 가느니 나도 쏘 몰엿 ㄱ새 저근 비를 ㅁㅅ라 ㄸ노라
三綱行實圖	孝31b	집 겨티 殯所호야 두고 ㅅㅅ아비 무더메 가아 무두려 호야 다춧 히를 슬피 우루디 몬 ㄸ터니
	忠13b	祿山이大怒호야 履謙이 조쳐 ㅁ야 두고 ㅼ드니 두 사르미 죽드록 구지조믈 이베 그치디 아니호터니 顏氏 주그니 …
	忠17a	李懷光이 石演芬이를 至極 미더 收養아들 사마 ㄸ터니 懷光이 朱泚와 사괴요려 커늘 演芬이 行在所에 郤成義 브려 열즈보디
	忠17a	天子ㅣ 그딕를 股肱 사ㅁ시키고 그딕 ㄸ로 腹心 사마 ㄸ느니 그딕 天子를 背叛커니 내 그딕를 엇데 背叛 아니호리오
	忠19a	河東割地使 劉韜이 金營에 니거늘 金스 사르미 더레 接히여 ㄸ터니 僕射 韓正이 ㄸ오디…
	忠22b	岳飛 盡忠報國이라 혼 네 ㅅ를 등에 사겨 ㄸ터니 高宗이 精忠旗를 주샤 ㄸ미 ㅼ리에 다르ㄱ 호시니라
	忠27b	絳山이 ㄸ오디 사르미 各各 ㅅㅅ금을 ㅅㅅ기느니 츄마 ㅅㅅ금 ㅼ를 ㅅㅅ ㅎ가지로 더더 두리여 내 ㅅㅅ금 몬즈븐 後에사 寸寸이 사호라도 ㅅㅅ디 아니호애라
	烈13a	도조기 겨집 아니 두외요리라 호야늘 한 도조기 오슬 ㅁ티고 平床 우히 ㅁ야 두고 어루려 커늘…
	烈17a	趙氏 每常 울며 구지저 죽가지라 커늘 도조기 ㅅㅅ를 스랑호야 주기디 아니호고 사ㅅㅅ 여려홀 디크워 ㄸ거늘 趙氏 버서 나디 ㅅㅅ 둘 알오 소겨 ㄸ오디
	烈23b	明秀ㅣ 듣고 저믈 子息을 중 맛디고 金과 匹帛과를 쏘 주고 옷과 棺과 祭餼 거슬 손소 다 호야 두고 집 사ㅅㅅ과 여히여 ㄸ오디
	烈26b	집 사르미 놀라아 救호야 ㄸ터니 居喪 ㅁ차늘 아ㅅㅅ미며 아로리 ㄸ히 다 스을 가지고 墓에 禮로 祭호고 모다 수을 머구려 호거늘…
南明集	上6b	五蘊은 五陰이라 掃蕩은 ㅼ려 브릴시오 建立은 세여 둘시라

上11b	萬 브렛 蟾光을 가며 이쇼물 브려둘디어다
上12a	보는 전초로 니르샤디 가며 이쇼물 브려 두라 하시니라
上58a	請호노니 나리 못도록 心猿을 노하 두리를 보라
下51a	三四 句는 幻師 제 범을 밧고라 두고 도록혀 疑心호야 저후를 내느니 …

続三綱行実図	孝6a	德崇이 올오 닐오디 아비란 한디 무더 두고 주시기 지빅 퍼난히 이쇼몰츠마 몰ㅎ애라 ㅎ더라
	孝21a	金龜孫이논 賤人이니 開城府 사더니 저머셔 어미 주것더니 조라 슬허 그려 神主를 밧그라 두고 아츰나죄 祭ㅎ더라
	孝23a	脫裳ㅎ고 어버시 상즈를 그려 두고 아츰나죄 飯祭ㅎ야 精誠이 지극ㅎ야 게을우미 업스니 열즈박늘 褒獎ㅎ시니라
	孝35a	脫喪ㅎ야도 소곰 장을 먹디 아니ㅎ더니 무덤 겨틱 祠堂 밧그라 두고 아츰나죄 飯祭호물 산적ㄱ티ㅎ야...
	烈1a	식어미 나히 아ㅎ내 죽거늘 힘을 다 드려 送葬ㅎ고 식어미 양즈를 그려 두고 죽도록 祭ㅎ니라
翻譯朴通事	5b	더 어름 담논 그릇 우희흔 덩잇 어름 노코 슬고와 이스랏과 여러가짓 성흔 과시를 어름 다몬 그릇 안해 돛가 두면 ㄱ장 보디 ㄷㅎ니라
	11a	랑둥하 몰란 옛 사르미 지빅 쥬신 브터 두고 뽕 타 나커든 몰 미엿던 갑슬 더를 혼 우흠 뽕만 주미 올ㅎ니라
	21a	뒗 내해 몰 씻기라 가져 그늘 서느러운 디 민여 두고 글게로 글거 조히 ㅎ야
	34a	데 내 은 닛 랑을 떠디워 두세라
	43b	고티기 무차다 날회여 잇거 가져다가 조흔 짜해 나모 미틱 민여 두고 머규물 ㄷ히 ㅎ라
	52b	옷 고의 감토 휘돌ㅎ란 다 이 궤 안해 노하 두워 탕즈 맛든 사름 맛더 보라 ㅎ고
	75b	안직 날회라 내 마스래 가 공좌부에 쳐 두고 즉재 오마 우리 돌히 보시와 향 가져가 비례ㅎ고 공양ㅎ야 저그나
翻譯老乞大 上	3b-5a	그 免帖 우희 세 번 마조몰 면ㅎ라 ㅎ야 쓰고 스승이 우희 쳐 두느니라
	19b-20a	네 가마의 불디더 ㄱ장 글커든 콩 녀히 두고 물읏 ㄱ장 것글후미 혼 디워만 ㅎ거든 이 사ㅎ론 디플다가 콩 우희 둑고 불딘디 말오...
	21b-22a	반만 닉거든 장물와 파와 약돌 빠 노하 젓고 가맛우흘 둑고 김 나게 말오 불디더 두 면 아니한 스시에 닉느니라
	24a	이믹 이러면 바다 녀히 세히 흠씩 다 내오 수 더거 두다가 北京의 가면 흠씩 헤여 덜 거시라
	47b-48a	가년에 잡사름 업다 ㅎ야 잇는 거긔 노선 잡사름 브리워 두디 몰홀 거시니
	47b-48a	본디로 쏘 서르 사귀디 몰ㅎ던 거시니 엇디 ㄷ흔 사름 아니완흔 사름 알리오 엇디 머물워 브리워 두료
	58ab	우리 몰 모라 가 하츄에 가 짐돌 설엇노라 ㅎ면 마치 불 ㄱ리로다 이 몰돌 다 민야 두라 더 돌홀 히야 닐에 ㅎ라
	70ab	내 쏘 人蔘과 모시뵈 이세라 러실 갑 들보라 가고려 갑곳 잇거든 풀오 ㅎ다가 ㄱ장 디거든 안직 머추워 두어든
翻譯老乞大 下	36ab	집 혼 술워 자븐것 년는 술워 나귀 노새 메우는 큰 술워 톱는 술워 다 ㄷ히 지빅 드려 노하 두고 눈비에 젓게 말라
	36b	이리 치우니 우리 먼 술 노하 두고 뽀아 혼 양 던져
	37a	뉘 이긔며 뉘 몰 이긔니오 더더 두고셔
翻譯老乞大 下	36ab	집 혼 술워 자븐것 년는 술워 나귀 노새 메우는 큰 술워 톱는 술워 다 ㄷ히 지빅 드려 노하 두고 눈비에 젓게 말라
呂氏鄉約諺解 華山本	9b	제 허물을 샤죄ㅎ고 기호물 청ㅎ거든 칙애 셔 두고셔 그 허물 기호물 기드리고

蒙山法語諺解 重刊 빙발암판	2b	조오로 미물러니거든 상녇양오로 안조미 맛당히니라 히다가 물러가디 아니거든 문득 짜해 노려 두서 열 거르를 거러 누니 굿긋거든
	42a	趙州스 놀난 갈히 춘 서릿 비치 이룩이룩히니 헤아려 엇더호노 호야 무르린댄 모미 分호야 두 그티 도외리라 喝호고 니르샤디
三綱行実図 重刊 東京大本	孝31b	다릿 고기를 베혀 죽에 섰거 머기니 도로 사라 훈 둘나마아 죽거늘 집 겨턱 빙소호야 두고 식아비 무더메 가 무두려 호야
	忠13a	고경이 밤낫 거스리 사호다가 몬호야 자퍼 니거늘 록산이 구지조디 내 너를 열조와 판관 회여 두어 히 몬호여서 태쉬 도외니
	忠13b	엇데 니론 반고 누리비린 가히야 엇데 나물 문득 아니 주기논다 록산이 대로호야 리검이 조차 밍야두고 썩드니
	忠17a	니회광이 석연분을 지극 미더 슈양 아들 사마뎡더니 회광이 주즈와 사괴요려커늘
	忠22b	금 사르미 저허 어비라 하며 괴를 부라고 쏘 갓가이 몬 가더라 악비 진룡보극이라 훈 네 조를 등의 사겨 뒹더니
	忠27b	강산이 날오디 사르미 각각 님금을 섬기느니 차마 님금 썩을 스졸와 훈가지로 더더 두리여 내 님금 문조온 후에야 촌촌이 사하라도 측디 아니호애라
	烈13a	내중내 도조기 겨집 도외디 아니호리라 호야늘 모든 도조기 오솔 빅티고 평상 우히 밍야두고 어루려커늘 최시 슈육홀 가두려 소겨 날오디
	烈23a	명쉬 듣고 저문 조식을 중 맛찌고 금과 비단과를 주고 옷싸 관과 제홀 거슬 손조 다호야 두고 집사롭과 여히여 날오디
	烈26b	다시 브라운 이리 업거다 호고 조조 갈호로 주그려커늘 집사르미 놀라 구호야 뎡더니 거상 마츠늘
続三綱行実図 重刊	孝6b	아비란 한디 무더 두고 조식이 집의 편안히 이시믈 차마 못호리로다 히더라
	孝21a	김귀손이논 천인이니 기성부 짜히셔 사더니 저머셔 엄이 죽었논디라 조라 슬허 그려 신쥬을 밍그라 두고 앓참나조 제히더라
	孝23a	부모의 거상 님어 여섯히을 시묘호여 슬허 여위여 썩만이셔 병 드렷더니 탈상호고 어버의 얼구를 그려두고 앓참나조의 제호야...
	孝25a	시묘호야 친히 나무 지여 제를 밍그더니 거상 필흔 후에 영당 짓소 상 그려두고 들윗 시절 거시어든
	孝35a	어버의 몽상애다 시묘을 삼년식 살고 탈상 하야도 소곰과 장을 먹디 아니히더니 무덤 겨턱 스당 지어두고 앓참나조 뎡 제홀을 산적 갓히호야
	烈1a	식업의 나히 아흔 되여 죽거늘 힘을 다 들어 송장호고 식업의 얼구를 글여 두고 죽도록 제히니라
翻譯小學	4:3a-b	스랑호오니도 윈 이를 알며 므우니도 어딘 이를 알며 자븐 거슬 사하 두디 능히 호터 주며...
	4:12a	장쵸 무늬 들 저괴 보물 모로매 느조기 하며 무늬 드러 문 허리에 그르디른 남굴 받드드시 하며 눈 들어 보디 말며 무니 여렷거든 쏘 여려 두며 ...
	6:4b	楊文公의 집 사롬 그르치는 글월에 그로디 저문 아히 비호몬 모습애 다마 두며 외올 썩르미 아니라 조연이 알며 조연이 잘호논 이를 길워
	6:20b	니르건댄 통심도외니 너희 썩애 사겨 두미 맛당히니라
	7:5b	伊川 先生이 니르샤디 병호야 자리에 누엇거든 사오나온 의원에게 맞터도물 스랑티 아니호논 어버시와 효도 아니호논 조식에 가줄비느니
	7:13b	宋 시절 려릉왕 義眞이 武帝스 거상에 左右엿 사르물 브려 호흔 고기 차반을 사다가 집 안에 각버리 브석 밍그라 두고 먹더니
	8:9a	그 불 일 경계흔 그레 날오디 무스미 본디 빈 거시라 바긋 거슬 조차 디답호미 자최 업스니라 자바 두미 중외 잇느니 보므로 법을 사물디니라
	8:22a	쏘 날오디 데 일론 사르미 유무를 맞터 보내여든 브틴 거슬 떠 보며 머물워 두디 마롤디니라
	8:27b	업서호논 사르물 에엿비 너기던 주를 보고 닛 블겨 뉘웃고 붓그려 만히 사하 뎡는 거슬 능히 흘과드네니라
	8:28b	본디 겁호고 잔악호 사르문 넷 사르미 주굼 사로매 통달히 헤여 명에 브려 두며 강강호고 질괴우더 올코 고다
	9:17b	待賓齋며 吏師齋랏 지블 지셔 두며 나랏 빗난 이를 구경홀 법을 세니 이러토헌 이리 쏘 스므나몬 요건이러라

	9:81b	은 일빅 량으로 내게 브터 뒸던 사름이 죽거늘 제 아득을 주니 즐겨 받디 아니호느니
	10:14b	므리 만커나 7물어나 호거든 미리 빅성의게 머글 거슬 뺨이며 군스의 머글 곡식을 창고에 녀히 두디 조코 만케 하며 몸 갑파 잇는 환자를 받디 말며
	10:14b	손 드는 집과 역을 다 도히 쑤며 두며 손 이바드며 군스 머글을 다 도히 호디
小學諺解	3:3a	어딘 이는 조라운 디 공경호고 저픈 디 스랑하며 스랑호온디 그 사오나움을 알고 먹여호는 디 그 어디롭을 알며 싸하 두디 能히 흐트며...
	4:37b	호서늘 或이 날오디 내티시다 호느니 어딘 사름이 아이게 노호움을 곰초아 두디 아니하며 원망움을 묵이디 아니호고 親히 하며 스랑할 썩롬이니라
	5:18b	...7마니 갓가이 호야 호 가즈와 半 품을 비록 或 어더도 모다 怒호고 물 저색여 두어시리 인는 이 적으니라
	5:39a	伊川先生이 굴오사디 病호야 床의 누엇거든 상의원의게 맞더 돌을 어엿비 너기디 아니하며 효도 아니홈에 比호느니...
	5:107b	오슬 이기디 몰홀 7시 호과다 흠이니라 본디 怯호고 나약한 이는 그 넷 사름의 죽음 사름애 통달호여 命에 브려 두며 세츠고 질기우드며 ...
分門瘟疫易解方	5a	주後方의 痘단병 업게 호디 불근 疳瘡 새비 줌 지에 녀히 우몹 가운데 녀히 듯다가 사흔마니 내여 짐 사름미 대되 남지는 열 닛 겨지븐 슴 닛출 머그라
	5a	또 불근 수툴글 동짓날 자바 오로 몰외여 듯다가 립춘 나래 술마 머고디 다른 사람 주디 말라
	10b	정월 초하룻날 새배 내여 수우레 녀히 두세 소숨 글혀 동녘문 향호야 머고디 묻져 아히 브터 얼은 지히 머그라
	20b	千金方의 痘단 병 서르 툃디 아니케 호디 드레줄 날급 치를 병헌 사름미 누은 듯 아래 7마니 녀히 두라
七大萬法	21a	가줄비겐댄 世間애 사름미 子息 길음 곧호야 어버시 츠림 업서 子息을 제 믁스므로 브려 두면 남진 子息은 나가 돈니다가 사오나온 벌부치 도죽도 비호며
順川金氏諺簡	2:4	머글 것 어더 듯다가 나죄 보내소.
	6:3	이제란 원간 겨집종으란 내 브려 두어든 자내 브리소.
	10:6	또 네 가져가던 여뽕븐 비록 두 필식 해면 열엿 비리어니와 앓갓오니 아모려나 내바다 빌 갑고 하 비디 거든 앓가온 것 더려 두어라.
	14:6	가져다가 지비 인는 그 장독조차 가져다가 네 게 드마 두어라.
	16:7	무명 그튼 아모려도 몰 히여 두고도 안 업서 더더 있다.
	17:6	면화논 여게서 게오 두어 오시는 오니 옷도 두더기 니퍼 두고 새옴한다 호건마는 고도 털릭 바디 덕녕 히여 두니 내 지금 두터온 저구리를 업서...
	17:6	면화논 여게서 게오 두어 오시는 오니 옷도 두더기 니퍼 두고 새옴한다 호건마는 고도 털릭 바디 덕녕 히여 두니 내 지금 두터온 저구리를 업서 ...
	26:3	또 뽕븐 보내여 듯다가 다 주게 도로 보내다니라.
	27:3	오늘 덤심으란 마고 나죄 세히 밥만 호여 두소.
	28:1	받고 셔들오 내 하 고돈 히여 두고 마리나 녀는 종과 다르니 호자 너기니 하 물 가져 사니 과심코 노호와 드려 보내고 인노라.
	28:6	몬소니 엇딘디 이버는 와서 “내 인칭 설웨라> 내 겨지비 사름가> 늬 갈와 돈니라> 제 지비 더더 두리라.” 하고 누의드를 슈샹히 맛당이 아니 너기고
	38:8	아히드리 느리니 오죽 호 동 만 동 이 동혀 둘 슈오기 지비 갈 분토를 내 바다 두고 니저 세 번 사름미 가디 닛고 잇다가 ...
	51:15	머글 거시나 조조 호여 보내고 더더 두디 마소.
	55:22	너를 하 닛디 몰호고 그리워 보셔늘 손소 기워 보내려 두고 네 형 보내노라.

57:11	또 세 저올란 간스 <u>히여</u> 두어라.
80:2	늬자내 와서 열서 근 주고 자내 옷 날굽 거시 두고 내 다몬 동저구리와 흰 당옷 <u>브라</u> 두고
80:2	괴니 <u>바다</u> 두고 번동 뿔 설흔 말 서울로 갈 제 히여 달라 청히니 내 모기라 맞더더니 괴니 다 바다 두고 게 가니도 만히니라 하고
80:2	번동 뿔 설흔 말 서울로 갈 제 히여 달라 청히니 내 모기라 맞더더니 괴니 다 <u>바다</u> 두고 게 가니도 만히니라 하고
90:16	나 병 들고 힘 쓴 마리나 하면 열 나고 히여 제 즈가로 <u>더더</u> 두니 이제야 나으리 한덕녕 굿스물 뵈니 몽이도 못히고 늬도 아녀시니 올히사 못히로다.
91:1	네 아바니미 저년 겨울부터 어나글 호디 갓가온 난과 니관 브를 <u>여더</u> 두고 여괴 ○ 저기여든 드렸고 나가면 …
91:3	몬아기네 본디 고 녀니 그러나마나 드렸게 하라 하면 내 주글디라○ <u>더더</u> 두고 그 녀니 불순히니라 하면…
98:6	그 아기도 온슈하고 와 괴오늘 설워터니 저는 이제는 도히 있고 그 몰 주고 우 여닐굽 필지 연저 도흔 마를 <u>사</u> 두더니 …
98:10	바다 네게 구디 간스 <u>히여</u> 두어라.
99:16	칠월 열이튼날 조식들 <u>비히</u> 두고 그리고 다시 그리고 밤나줄 니즌 시 업시 설오니 드리 빅 녀닌가 식베라.
104:3	자내 <u>니저</u> 듯다가 이제야셔 그러 구시는가.
104:4	당명의 밥 <u>히여</u> 두소.
121:3	또 담옷 니피기랑 늬일 글사니 히여 <u>훤</u> (훤) 푸고 므리나 <u>바다</u> 듯짜가 내 늬일 아춤 밤 일 먹고 선산셔 부스 보고 오나든 나조 겨터 니이게 호디아
134:8	<u>이터</u> 두고 민망히여라.
137:8	몬저 개○에 갈 제 무명 두 필 ○○○ 내 ㄱㄹ매사 아되나 쉬 오리 히여 보내고 장으란 아므려나 <u>드마</u> 두어라.
138:5	무명 덕녕점 <u>내여</u> 듯다가 보내소.
144:8	아바님 한덕녕 엇그제야 하고 허마 스년 마니 당옷 허나홀 <u>드려</u> 두디 짓디 못히여 더더 두고 아므리 므스물 뵈 짓자 히여도 더더 두고 애들오 잇노라.
144:8	아바님 한덕녕 엇그제야 하고 허마 스년 마니 당옷 허나홀 드려 두디 짓디 못히여 <u>더더</u> 두고 아므리 므스물 뵈 짓자 히여도 더더 두고 애들오 잇노라.
144:8	아바님 한덕녕 엇그제야 하고 허마 스년 마니 당옷 허나홀 드려 두디 짓디 못히여 더더 두고 아므리 므스물 뵈 짓자 히여도 <u>더더</u> 두고 애들오 잇노라.
158:5	병흔 날노만 주디 마오 <u>더더</u> 두소.
163:10	요스이 그 녀니 드러 왔다 히니 ○나 요스이 <u>누겨</u> 두고 견디소.
167:6	근시미란 일도 하며 진지도 하고 막그미란 뵈 뿔 종으로 <u>최터</u> 두면 이리 도홀가 흥건마는 자내 뜨디 나와 다르니 속절업시.
172:1	아들 당가드리라 가셔도 갓나히 조비니코 꾸며 주니 므오니 맛당티 아니코 이 소닐 그 짓 종가 <u>여려</u> 두고…
174:6	조식○(드)리 <u>비히</u> 두고 ㄱ이업세라.

診解痘瘡集要	上21b	일씩번 글흔 물 흔 사발의 드리티고 아모 거수로 마고 다다 괴운 아니 나게 더퍼 두고 미양 반 흡식 흔 흡식 드시하야 머기면 즉제 톤노니라
	上66a	흔 덩이를 사발이 담고 일씩번 글흔 물을 붓고 두에 다다 듯다가 미근하거든
	下21b	유장법은 흡기를 물근장 각 흔 흡을 저어 7장 섯거 두고 분대를 뭉슈루디 갓가 기름 불라
	下32a	잡것 머기디 말고 그 쏹을 미화 음간하야 듯다가 셋들 초여드랜날 히 물 도다셔
	下46b	의혹입문의 글오디 고시를 방 안해 드라 두고 쏘 고시 드문 술로 자리며 오시며 니블에 다 썩므라
診解胎産集要	12a	만일 민디 아니커든 도치를 알 안는 둥의 등주리 아래 드라 두면 흔 자리 다 수둑 되노니라
	12a	쏘 글오디 석옹황 흔 냥을 불근 노모치 녀허 윈녁 허리에 치오고 쏘 활시를 흔나홀 허리에 가마 두고 쏘 원쥬리쏘출 츠고
	12a	쏘 수둑기 긴 당복 세 나출 싸야 자리 아래 몰로여 녀허 두고 쏘 남진니 머리털과 손톱 발톱을 자리 아래 녀흐라
	25b	열산은 날은 7장 더운 제 아기 나커든 맛당히 깊고 안정코 핏빛 먼 더 잇고 창지개를 열고 물근 물을 만히 짓고 어름 뺨워 두고 보라
	31a	림산커든 몬져 산부의 상해 낚는 오슬 벗겨 브억머리과 어귀에 싸 두면 수이 난노니 모르게 하라
	69b	그 굴기 소합원을 비빅여 녀커나 혹 죠히 심지를 기름 무터 고자 두어 다시 아오디 아니케 하라
女訓診解	下13a	그러나 天地 스이에 妻ㅣ 妾을 嫉妬할 ㅁ음을 내며 毒害할 ㅁ들 곰초아 두리 만하니 다 夫主의 ㅁ들 밧디 아니를 말미아문이라
	下14b	진실로 안해 비록 妾을 사랑하나 밧겨트로는 恩養을 비고 안하론 ㅁ여하는 ㅁ음을 곰초아 두어 주는 밧 衣服과 飲食이 ㅁ들 비려 호매
東國新續三綱行實圖 續三綱孝子圖	18b	김귀손이는 천인이니 기성부 짜해서 사더니. 저머셔 어미 주것씨니. 조라 슬허 그려 신쥬를 밧7라 두고 아츰 나죄 제하더라.
	20b	탈상하고 어버의 얼굴을 그려 두고. 아츰 나죄 뵈 제하야 정성이 지극하야 게을우미 업더니. 열조외닐 흥문 세오 표장하시니라
	22b	거상 바슨 후에 영당 짓고 상 그려 두고. 들잇 시절 거시어든 의식 몬져 제하고 효성이 지극하더라.
	32b	탈상하야도 소곰 장 먹디 아니하더니. 무덤 거터 스당 지어 두고. 아츰 나죄 뵈 제호물 산 적 7티 하야.
東國新續三綱行實圖 忠臣圖	1:11b	왕이 노하여 가도아 두니 튕이 장쫓 죽게 되여 상셔하여 날오디
東國新續三綱行實圖 烈女圖	3:48b	머리 버혀 무덤 거터 무더 주그를 밍세하야 다룬 디 아니호려 하고 자는 고디 지아비 가지를 거려 두고 제스를 게을리 아니하더라 쇼경대왕도에 정문하시니라
	4:10b	다시 씨니라 언문으로 주조 가례의 상시며 제하는 버블 썩 북롬 우희 브터 두고 아츰 나죄 뵈물을 받드시 최복하고 보와하니라 금 상도의 정문하시니라
	4:24b	슬픈 말슴을 지어 머무려 두어 부몯씩 고하고 쏘 아히 머리를 빗기고 안고 눈을 흘리고
	6:81b	드디어 두 녀 녀드랑을 달려 주기고 주검을 길헤 보려 두니 사라실 제 기르던 개 거터 덕키여서 슬피 우니 보는 사람이 에엿비 녀기디 아니리 업더라
	8:24b	김시 도적이 성히여 면티 물흘 줄 알고 미리 목글 남기 미여 듯더니 그 지아비 살이 진하여 해를 니버닐 즉제 나모 아래 노려더 죽다 금 상도에 정문하시니라
重刊杜詩診解	1:35a	하늘히 險阻를 排設하야 뵈노니 劔門ㅣ 天下에 壯大하도다
	2:51b	내 丈夫의 빠기 아니라 죽도록 어름과 불와를 ㅁ으매 무더 두리로다
	3:18a	노출 퍼 도와 아롭다이 웃고 放逸한 바론 도와 썰리 녀는 듯도다 물근 거우루레 내의 愚直호를 다마뵈 노니 큰 하늘히 眞實로 照臨하야 계시니라
	3:25a	바불 짓디 아니하니 우르리 새배 어렸고 오시 업스니 臥床이 바미 초도다 노모치 뵈면 붓그러올가 저허 흔 낮 도늘 머물워 두고 보노라
	3:32b	비출 두루 힐후며 빗 머리 여름 썰로미 神奇로외오미 잇도다 녀희 비들 마가 줄 靑錢을 하마 일워 뵈노니
	3:41b	상네 商山스 늘그니 님금 돕는 功을 兼하야 두쇼물 怪異히 너기노라
	4:36a	몹 盜賊의 서르 초초미 범과 일히라와 심하니 사름을 먹거니 다시 妻子 기터 두를 즐기리아
	5:3a	오늬 나래 하늬 ㅁ들 보니 일흔 녀슬 녀희 무를 뵈여 두겨시니라
	5:4a	뵈 날오디 모달에 소는 거슬 기터 두리라 하리오 하마 이 비뵈흔 거슬 시저 브리놋다
	6:20b	主人이 늘근 ㅁ를 思念하야 구윳 지빅 7울 반되를 容納하야 뵈다
	6:39a	뵈 罪ㅣ 업숨 굴히요물 肯許하리오 눈 알피 桎械를 버려 두고 등 뒤희션 더와 피리를 부놋다 말하며...
	6:48a	干戈스 스이에서 늘구니 지블 幸혀 다보조로 7리와 뵈노라

	7:35b	오히려 저허 물근 아츰미 거집 종을 보내야 말스물 브터 노픈 뵈홀 넘거 보내노라 ㄱ 올히 成熟거든 뵈화 뵈다가 반드기 흐롤디라
	8:68a	가난흔 짚 썩리 오래 羅襦裳을 어더 뵈다니 羅襦를 썩 베퍼 납지 아니호고 그디를 相對하야서 紅粧을 시서 브리노라
	8:70a	불근 구스른 시러곰 어드운 더 굽초와 두리아 기튼 치위에 곶과 플왜 떠디여 잇느니
	9:23a	ㄱ 놀오 보드라운 프른 실로 밍ㄱ론 신과 빗난 한 터리로 썩 手巾은 기피 ㄱ초아 뵈다가 늘그니를 주는 거시어늘 아아 뿌미 내 모매 밋도다
	9:41a	먼 劫에 王을 回하야 지으니 ㅈ흔 臺에 네 노로물 못노라 빗난 구루문 蕭史ㅣ 머므렛고 글웠 字는 魯恭이 머물워 두도다
	10:39b	東녀그로 녀 와 썩 도라가디 몬호니 새지블 小城ㅅ 뵈메 브터 뵈노라
	11:19b	物理를 仔細히 推尋하야 모로매 行樂홀디니 엇데 썩 일후를 써 이 모물 미야 두리오
	12:11a	鸛鶴ㅣ 것느니 几를 비겨서 물거를 브라노라 기픈 病에 藥餌를 뵈하 뵈다니 나오와 머굴 잇부물 다 닛과라
	15:3b	나그내로 사로매 ㅈ간 심거 ㅈ밤물 瑤琴과 딱하야 뵈다라 드뭇흔 다스 株ㅅ 양지 가스매 칙칙기 어즈러이 담겨세라
	16:57a	妖怪흔 노미 허리와 逆亂흔 사르미 모근 敢히 ㅈ거허리아 썩물 노피 아니하며 썩 ㅈ가이 아니하야 긴 갈홀 모로매 하눌해 지여둑 과 곤디 아니허리라
	17:14b	尸鄉ㅅ 한아비 자바 두어 길홀 두뻬게 홈 곤디 아니허니라
	18:14a	드몬 가지 썩 되오와닷도다 고자 뵈논 저근 올흔 本來 썩 막줄오미 잇더니
	19:33a	顏色이 이우렷도다 노니는 子ㅣ 불휘 업소니 새지블 ㄱ 올 프어리에 브터 두노라
	20:11b	프른 글웠흔 누를 爲하야 엇논고 길 녀미 어려우른 어느 이시리오 블러 츠줄 興은 ㅎ마 專一호라 由來로 ㄴ는 비출 밍ㄱ라 두노니
	21:11a	楊雄이 썩 河東賦를 지어 뵈노니 오직 부숫그려 하눌로 올려 보내요물 기들오노라
	22:18a	오직 ㅁㅁ맷 일로 히여 두고 귀밑터리의 衰殘호ㅁ란 肯許티 마물디니라
	22:19a	公卿이 아니로다 머물워 두면 不祥홀가 저프고 퍼 쓰면 柴荊에 ㅈ그리로다
	23:44a	저근 비를 내 ㅎ마 일워 뵈노니 ㄴ대 자보물 ㄱ 올 브르물 기들오리라
	24:26a	溫溫흔 네 風味를 저문 제 ㅎ마 ㅈ에 써 두노라
	24:28a	해 갈마 둔 ㄴ 더러우를 떠러브리도다
	25:57a	그디 이제 ㅈ ㄱ롬 흐르는 ㅁ레 비출 날어 가느니 나도 썩 몰래 ㄱ애 저근 비를 밍ㄱ라 두노라
老乞大諺解	上18a	이 벅아 네 콩 솥기를 아디 못흔는 듯하네 블 씨더 가매 쓸커든 콩을 녀혀 두고 물읏 쓸기 ㅎ 디위만 ㅎ거든...
	上52b	이 물들을 다 미야 두고 더 돌호로 ㅎ야 닐게 ㅎ라
	上59a	오늘 앓츰밥 먹은 곳에서 팀 바다 가져 온 은이러 두어 두어 두어라 ㅎ여 두자
	上63b	너일 갑슬 듯보라 가서 갑시 이시면 풀고 ㅎ다가 ㄱ장 천하면 아직 잠싼 머물워 두리라
	下21b	이뵈 가려 ㅎ면 내게 나쁜 은이 이시니 힘힘이 노하 두워 ㅁ슴ㅎ료 이뵈서 비단시 가져가자 우리 푸즈에 헤아리라
	下33a	집 지은 슬워 ㅈ은 것 ㄴ는 슬워 나귀 노새들 머오논 큰 슬워 투는 슬워 다 ㅈ히 집의 드려 노하 두고 雨雪에 ㅈ게 말라
	下33b	뉘 이긔며 뉘 못 이긔노 더더 두고 네 보라 일렷다
捷解新語 初刊本	1:25a	글란 이제 東萊 술와 보내야 드릴 양으로 ㅎ오려니와 ㅈ세히 더거 두읍소
	3:28b	二三日 디나거든 銅鑼 看品 홀 썩시니 몬저 代官네의 출히라 닐러 두읍소
	4:8a	一特送 中 歸船 一隻 第一 船 中 歸船 一隻 代官으로서 借船 一隻 ㅎ하야 三 隻이읍도쇠 미리 술와 두읍소
	4:27b	우리도 ㅎ나 돌히서 되디 못홀 거시니 送使의 談合하야 아뭇 도로나 ㅈ홀 양으로 홀 거시니 아직 大廳의 드려 두읍소
	5:15a	그러하면 日本 船頭 ㄱ장 니근 사름 十五 人을 差定하야 두어시니

伍倫全備諺解	1:32a	媚春아 燒香하라 杏花 훈 가지를 것거 膽瓶에 <u>쏘자</u> 두라 香을 피워시니 썰리 와 절호쇼셔 썰리 와 절호쇼셔
	1:40a	이 一方에 巡하여 百姓들을 ㄱ르차 興利除害하며 伸冤理枉코더 호노니 네 放告牌를 가져다가 分司門전에 <u>세워</u> 두어
	3:11a	또 훈등 사람이 이시니 僥倖으로 훈 번 과거헌 後에 𢶏 칩을다가 𢶏디 뒤히 <u>보려</u> 두며
	3:37a	爺爺ㅣ 너를 ㄱ르치시는 거시 다 이 도흔 말삼이니 句句마다 다 𢶏음에 <u>꺠록하야</u> 두과더 호노라
	4:4a	姆姆되얏는 이 더 孀孀을다가 𢶏흠에 <u>뵘아</u> 두디 𢶏흠을 恨호거늘 너는 𢶏 더를 ㄱ르차 𢶏이 되얏나
兵學指南	18a	인꺠는 아라 分변과다 호미니 신디의 <u>세워</u> 두은 이난 꺠 아래 가 일을 품하며 령을 듣과다 호미오
	8a	개암이 𢶏듯하라 디 𢶏기 𢶏츠를 𢶏드려 만일 두어 거롭이 합디 𢶏호미 잇거든 다시 <u>옴겨</u> 두어 서로 합게 하라
	13a	데일당이 되야 가는 거롭 쉬 𢶏거든 𢶏레를 <u>니어</u> 두어 머므르고 당보호는 사람이 다 그티매 니르러 각각 쏘 안자 쉬고
	16a	꺠를 가져 각 집문 머리의 <u>쏘자</u> 두고 성의 나 품하야 니르디 쉼 집을 엇기를 다 하다 훈 연후의 영을 니어 들어가되
明義錄諺解	上52a	필경은 내 다시 𢶏토지 아니하고 제 호는 대로 <u>맞저</u> 두니 제 𢶏관이 모힐 뜻으로 𢶏츰내 반포하고 아츰의 진하꺠관이 니 디훈 뜻으로써 우리러 품호니
	2:3a	𢶏조오시디 이러헌 𢶏셔를 네 어이 상즈의 <u>꺠초와</u> 두엇는다 𢶏스호되 동정으로 지만호습노이다
	2:22b	네 이 편지를 본 후에 진실노 일본 인심이 이시면 엇지 감히 범연이 보고 상조 속에 <u>너혀</u> 두리오
	2:24a	그 편지를 보되 고변을 아니하고 그 편지를 <u>머들너</u> 두어시니 맛당이 지정불고로써 지만하리이다
	2:27a	제 또헌 이런 말노써 디답하야 상즈의 <u>너혀</u> 두어 심상헌 말노 보드시 호니 이 훈 일의 지히의 텅정을 불만헌던 𢶏음을 쇼연이 ㄱ리오지 못홀 지라
	2:27a	사람의 신지 되야 이런 심장을 두어시니 이의 텅디 스이의 <u>용납하야</u> 두기 어렵거든...
	2:34a	이제 이 칠십여인은 𢶏 후검 𢶏한 모든 역적의 스인이라 슬프다 저 모든 역적이 이 무리를 익정의 <u>버려</u> 두어 안호로 엇보고 𢶏그로 부쳐내여 𢶏장하며
改修捷解新語	1:37b	꺠란 이제 東萊 술와 보내여 드릴 양으로 호호려니와 조셔히 <u>저겨</u> 두읍소
	3:38b	二三日 지나거든 銅鐵看品을 𢶏 썬시니 몬져 代官네꺠 출히라 <u>닐려</u> 두읍소
	4:11a	一特送 中 歸艇 一隻 第一艇 中 歸艇 一隻 代官으로서 借艇 一隻 合하여 三隻이읍도되 미리 <u>술와</u> 두읍소
	4:38b	우리도 호나 돌히셔는 되지 𢶏홀 썬시니 送使의 談合하여 아몰도로나 𢶏홀 양으로 𢶏 썬시니 아직 大廳의 <u>드려</u> 두읍소
	5:22a	그러헌면 日本 船頭 ㄱ장 니근 사람을 十五人을 分付하여 두어시니
	5:33a	ㄱ장 쉬운 일이언마는 朝鮮 家風이 폐롭디 아닌 일을 폐로이 너기니 이러모로 미리 자니네꺠 당보하여 <u>닐너</u> 두니 그리 아루셔
	10下:06b	公貿易 일은 나라 일이오니 거번 온 銅鐵內의셔 三萬斤 남아 다룬 고에 <u>아사</u> 두읍고
五倫行實圖	忠12b	이에 무를 디함에 가도고 음식을 𢶏호니 뭉 눈과 꺠에 돌닌 털을 섯거 습키더니 다시 복히 우히 <u>옴겨</u> 두고 ...
	烈47b	포찰시 이 말을 𢶏고 어린 아들을 𢶏의게 맞디고 지믈을 만히 주고 친히 𢶏관과 제믈을 <u>꺠초아</u> 두고 집사람으로 더브러 영결하여 굴오디
	烈62b	왕이 시험호고져 하여 도미를 <u>머므려</u> 두고 훈 신하로 하여꺠 왕의 오솔 𢶏히고 왕의 물을 투고 밤에 그 집의 가 도미의 처드려 𢶏오디
	兄04a	다만 기르던 양 𢶏여 구를 가지고 홀로 산뎡에 드러가 십여년을 양을 처 양이 성하여 천여 두에 니르니 𢶏턱을 <u>사</u> 두엇더니 그 아이 가산을 다 패호거늘
	宗45a	이에 ㄱ만이 쓸에 섯는 나모 우히 가마꺠 𢶏기를 <u>꺠고아</u> 두어 하여꺠 서로 𢶏화 올게 호니 집사람이 꺠이히 너기거늘
	宗50b	벼슬이 이의 𢶏호매 집 𢶏가온 𢶏에 도흔 𢶏 수천 묘를 <u>사</u> 두어 의장을 삼아 여러 가난헌 겨레를 치고
	朋18b	만경이 𢶏오디 머무런 디 두 돌이로디 세 상스를 <u>빈소</u> 하여 두고 장스호고 가려 호디 더브러 의론호리 업세라
隣語大方	1:7a	東萊令監이 近間의 新舊交龜호습시다 호오니 去番부터 여러번 <u>술와</u> 두어뎡 公幹事를 新官꺠 極盡히 付托하여 가시게 하여 주읍쇼셔
	1:24b	銀貨는 優數이 辨備하여 두엿스오니 失時치 마루시고 蔘貨를 入執하시면 이 편은 오히려 多多益善이읍도되

	1:24b	여러가지 거슬 힌디 <u>너허</u> 두언기의 煩雜 _한 여 猝然히 초즈내기 어렵소오매
	1:25a	여러가지 거슬 힌디 너허 두언기의 煩雜 _한 여 猝然히 초즈내기 어렵소오매 來日 모리 스이 저기 閑暇 _한 쟈 <u>내여</u> 두오리
	1:30b	예서 치고 시보되 놈의 집의셔 治罪 _한 는 거슨 얻더 _한 오니 <u>什過_한여</u> 두고 나가셔 다스리게 _한 열습니
	3:9b	令監말습은 만당 _한 오나 天與不取면 反受其殃이라 _한 오니 辭讓치 마옵시고 <u>바다</u> 두옵시면 나중의 지간이 일소오리
	3:17a	그런 일은 <u>預爲辨備_한여</u> 두어야 올치 臨渴掘井이란 말쳐로 덤병니니 이런 일이 일습는가
	7:1b	그 날 風勢 不一 _한 여 館所의 밋지 문 _한 와 設門의 <u>下陸_한여</u> 두옵고 계요 오늘이야 드려는 완습거니와
	7:2b	今年부터는 일즉 下送 _한 습게 뜯을 먹습고 各同事中의도 그 뜯을 다 <u>호여</u> 두언소오매
	7:17a	兩國 間 일을 勿論 公私事 _한 습고 約束을 <u>定_한여</u> 두온 후는 約束 디로 서 _한 舉行 _한 는 거시 事理의 아니 당연 _한 니일가 _한 물며
	10:7b	聰明은 不如鈍筆이라 _한 니 아모 일이라도 後考 _한 염즉 _한 일은 부디 <u>기록_한여</u> 두시고져 _한 습니
	10:12a	그 사름의 情境이 하 불상 _한 와 참아 <u>그만_한여</u> 두옵들 문 _한 여 다시 이리 숲소오니
敬信錄諺釋	4a	붓그림이 업스며 은혜 _한 알고 허물은 미뤄며 화를 움기고 악을 팔며 헛기리물 사며 험 _한 맛음을 <u>포장_한야</u> 두며
	81a	오공 형역 공연이 침범 _한 는 류 을 바드되 성내지 말며 휘방 _한 는 디로 <u>맞져</u> 두고 분변치 말며 _한 귀 거슬니는 말을 순슈 _한 며
	82a	부인이 공고씩 불효 _한 는 디로 <u>맞져</u> 두며 목미거나 물에 썩지를 보고 구치 아니 _한 며
	84a	빈핍 _한 이 구 _한 며 비는 것슬 응치 아니 _한 며 흉년에 쌀을 <u>너허</u> 두고 안자 늙은 갑슬 구식 _한 며
	85b	이 신심에 유익 _한 글을 보와 작복쇼지 _한 미 어지 다 형치 아날이오 브라건디 귀천가의 이 칙 _한 별식 정히 <u>공봉_한여</u> 두고 찌찌로 보며
增修無冤錄諺解	1:6b	此條本文이 我國事例와 相左 _한 시 그 글에 나아가라간 <u>改正_한야</u> 두물 이러 _한 툷 _한 노라
	1:38b	이제는 그린 本으로써 上司에 신보 _한 고 器仗은 封 _한 고 보람 _한 야 <u>빠</u> 두엇다가 만일 上司에서 起送 _한 라 _한 면 보내 _한 니라
	1:70a	某日時에 니르러 某縣 某里 地名엿 아모 명식 사름의 屍首 <u>머무러</u> 둔 곳에 니르러 합당히 참예 _한 를 사름들을 불너 모도아
	2:12a	纏繞繫 _한 이 死人이 몬져 노히나 썩를 가져 목 우희 두 돌림을 감아 두루고 스스로 늙은 디를 드디여 上面에 <u>미야</u> 두고 …
	3:53b	새여 흰 거슬 내야 糯米飯에 버무려 고로게 _한 야 前대로 보히 빠 몬져 大米나 粘米 밥 우희 <u>노하</u> 두엇다가 …

15C中世韓國語資料

月印積譜	7:37b	그 龍王이 모새 七寶 平床을 내야 소느로 <u>바다 노썰고</u> 술보디 世尊하 나를 救ᄃ샤 力士ㅣ 내 몸 ᄃ야브리디 아니케 ᄃ쇼셔 ᄃ더라
	8:102a	安樂國이 듣고 菩提樹 미티 가 보니 삼동내 버혀 더뎛거늘 주셔다가 次第로 <u>니셔노코</u> 짜해 업데여 그 울며 슬하디여 우니
	20:47a	婆羅門이 너교디 나를 주깁가 ᄃ야 거죇말로 <u>글어 노히니</u>
	20:57a	金銀 돈 三千과 수암쇼 三百을 말다히 <u>내야 노ᄃ시니</u>
	20:81b	父王 나를 보내야 브르 히 즉재 <u>글어 노코</u> 닐오 호라 ᄃ고 太子 잇
	21:208a	放은 노ᄃ 썬오 逸은 便安ᄃ 썬니 제 便安ᄃ 야으로 믋ᄃᄃ장 <u>펴 노하</u> 조심 아니ᄃ 썬라
	23:88a	그 ㅼㅅ 世尊이 한 사ᄃᄃ물 거느리샤 比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷 無數億萬을 앞뒤헤 圍繞히시고 虛空身을 <u>펴노ᄃ시니</u>
三綱行實圖	孝11a	돈 님자히 닐오디 깁 三百 匹을 <u>ㅼㅅ 노호</u> 리라 ᄃ ㄷ 內에 다 <u>ㅼ고 노ᄃ</u> 처섬 마조 본 짜해 와 닐오디
	烈13b	崔氏 두리여 소겨 닐오디 히미 ᄃ마 屈ᄃ니 ᄃ 樣으로 드루리라 ᄃ야닐 도즈기 <u>글어 노ᄃ</u> 대 崔氏 도즈기 갈ᄃ 아사…

翻譯老乞大 上	21b-22a	반만 닉거든 장물과 파와 약들 <u>따노하</u> 짓고
	28b-30a	그 도즈기 즉재 혼 弓手를 살 <u>혀노하</u> 뽀니 물게 느려 디니 그 도즈기 첫녁으로 물 돌려 니거늘
三綱行実図 重刊 東京大本	烈13a	도즈기 <u>그러노훈</u> 대 최시 도즈기 갈흘 아사 나무 지혀서 날오디 나를 주기거든 주기고 죽고져 시브거든 나야오라 햏야닐…
順川金氏諺簡	21:3	오니 명디 글도 어들 세 업고 옷 히여 니블 세는 올로도 업스니 나도 와셔 <u>뒤혀노홀</u> 이리 업서 민망하고 니응노 짓 명디 이를 더곰 근심햏노라.
	55:9	학개는 햏다 몬 히여 몬 이긔여 호바니 <u>내여노하</u> 도 어버이 뽀디 아니 애드노라.
	73:15	문져 보고 믇속물 <u>자바노커</u> 니와 내 모미 햏 햏햏고 믇속미 간 디 업서 가기 나들로 더어 가니 …

練兵指南	4b	혹 쏘 물 우히셔 삼혈 충통을 둘러 노 하며 낭의과 삼지를 남시 ^하 야셔 모도 티며 변 ^하 라
	30a	마병 ^ㅁ 를 툰 고셔 충통들을 정제 ^하 야 변^ㄱ라 노 홀 양으로 ^하 고
東國新續三綱行實圖 烈女圖	2:60b	갑스 최티강의 겨집이라 지아비 죽거를 복이 ^ㅁ 초되 오히려 흰 옷 입고 고기 먹디 아니코 요석의 상식 ^하 고 미 절의 의복 지어 노 터라
	2:75b	돌마다 초 ^하 루 날 오슬 지어 녕악애 노터라 잔을 드려 노 코 슬프믈 다 ^하 니 술이 문득 몰나디고 새 안즌 디 드러 떠러딘 눈믈 바다 먹고
重刊杜詩諺解	2:36a	서리 마즌 텅지 곳다운 橘에 놀러 노 핫도다
老乞大諺解	上19b	고기 녀허 뒤이즈며 저기 소곰 두고 저로 뒤저어 붓가 반만 닉거든 장물의 파와 교토를 딱 노 하 섰고 가마 두에 덮고 김나게 말고 블 씨더 ^하 디워만 ^하 면 닉 ^ㄴ 니라
	下33a	집 지은 슬워 잡은 것 년 ^ㄴ 술워 나귀 노새들 머오 ^ㄴ 큰 술워 ^ㅁ 는 술워 다 ^하 집의 드려 노 하 두고 雨雪에 젖게 말라

兵學指南	12b	대장이 스스로 문 밖이 이실디라도 결연히 <u>허허야 노하</u> 드리디 말라
	14a	만일 이 세 가짓 거시 업슬딘댄 문득 주장이 스스로 올디라도 쏘흔 <u>쥬허야 노하</u> 니드리디 말라
	17a	문득 이 아모 사름이며 아모 관원이라도 더의 니르러 허허고 나가과다 혼는 재여든 명히 막아 머므로를 힝하고 <u>결단허여 노하</u> 디나를 허티 말라
	17b	문득 이 수신과 대장이 스스로 문 밖이 이실디라도 결단허야 <u>허허야 노하</u> 드리디 말라
	19a	혹 거마창 아래 번가라 도적을 쏘되 빈 재 다시 장약허야든 치온 재 <u>니여 노코</u> 노흔 재 보아흐로 장약허야든
明義錄諺解	上45a	내 굴오디 이 쏘 어인 말고 내 좌측의는 즘들과 장과 궤 곱흔 거슬 처음의 <u>버려 노흐</u> 미 업스니 인습을 어디셔 쥐여 가지리오
	2:56b	이러트시 전허야 날넛노 쇼운이 공스허되 신이 듯즈오니 <u>던해 노호</u> 와 하시논 고로 공관이 나가 서명선드려 닐너 허여곰 상소를 허얏다 허더이다
	跋2b	협흡허샤 안흐로 흥모를 막조르시며 우흐로 대척을 도으시고 아래로는 혼두 궁뎡 소싱을 <u>내여 노코</u> 성공을 도와 화란의 땡얼을 나타나지 못흔 디
五倫行實圖	烈26b	이제는 힘이 굴허여시니 너를 조초리라 하니 도적이 <u>프리 노커</u> 는 최시 도적의 칼을 아사 쥐고 남글 의지허여 셔셔 굴오디
	兄36b	일즉 축군에 원을 허여 갓다가 겁과 비단을 어더 도라와 다 당 우히 <u>피노코</u> 형데로 허여곰 모음대로 굴허여 가지라 하고 미양 닐오디
隣語大方	4:22b	館守는 館中領首오니 당신 宴享부터 몬져 <u>設行허여 노코</u> 其餘小送使 宴享은 점초로 지내미 아니 존스올가
敬信錄諺釋	9a	약지를 베퍼 질고를 건지며 다 탕을 주어 목마르를 풀며 혹 산 것슬 <u>사 노흐</u> 며 혹 지계허야 죽이기를 경계허며
	70b	더러운 것과 더러운 그릇슬 신령 압과 삼광 일월성신 아래 <u>드려내여 노치</u> 말며
增修無冤錄諺解	1:42b	갑희는 二尺 남죽고 시테 기릭대로 하고 장작으로써 불덜너 더여 알맞게 하고 초로써 적시고 屍를 곳 안히 <u>드려노코</u> 衣物으로써 덤헛다가
	2:7a	여러 사름을 對허야 푸러 노리와 仍허야 屍를 한 디 붉은 곳에 <u>드려노코</u> 보야흐로 自縊흔 套繩을 푸러 벗겨내야
	3:94b	만히 새와 장작을 써 불덜너 極히 덥게 하고 胡麻 두어 말을 가져 우히 <u>피노</u> 했다 뷔로 찢면 새 속잇 기름이 흙 속에 스미여 드리 곳 人形이 되디

釈譜詳節	3:25b	변조리던 각시돌히 다리 드러 내오 손 발 떠버리 고 주근 것 ㄱ티 그우드려 이셔
	3:31a	太子 원소노로 마리를 자부시고 發願호샤디 이제 마리를 무저 衆生들과로 煩惱를 쁘려 브료리 라 호시고 손소 무저 虛空에 더더시닐
	6:4b	여섯 히를 苦行호샤 부터 ㄷ외야 나라해 도라오샤도 조올아비 아니호샤 아랫 恩惠를 니저버리 샤 길 넓 사름과 ㄱ티 너기시니
	6:6b	王이 大愛道를 불러 니르샤디 耶輸는 겨지비라 法을 모를씨 줄급 드리워 돈은 ㅼ들 몬 쁘려 브리 노니 그디 가아 아라들게 니르라
	6:9a	懺은 초물씨니 내 罪를 초마버리 쇼셔 호논 ㅼ디오 悔는 뉘으출씨니 아랫 이를 외오 호라 흘씨라
	11:19a	여섯 大臣이 議論호디 太子를 더러버리 디 아니호면 우리 乃終내 便安티 몬호리라
	13:33b	一乘이라 혼 거슨 三乘을 여히여 버리 고 一乘을 니르논 디 아니라 三乘을 모도아 一乘에 가노니
	20:12a	至極호 사름미 得道호면 다 열구를 데어체 헤여 죽사리를 니줄씨 일허도 ㅎ 무적 브리드시 호며 줄급을 ㅎ 바혀 브리 드시 호노니
	20:22b	또 日天子 물읏 어드부를 잘 더노니 이 經이 또 이 곧호야 一切 도티 몬호 어드부를 잘 호야버리 며
	20:28b	네 이제 호마 여러 魔賊을 호야버리 고 生死軍을 헐며
	20:35b	慧炬는 智慧 왜니 미혹호야 어드부를 能히 호야버릴 씨라
	21:5b	呪는 빌 씨오 呪는 호야버릴 씨니 呪呪는 비러 노물 호야버릴 씨라
	21:5b	呪는 빌 씨오 呪는 호야버릴 씨니 呪呪는 비러 노물 호야버릴 씨라
	21:14b	眞觀과 淸淨觀과 닙고 큰 智慧觀과 慈觀을 상네 올월오져 願홍디니 ㅼ 업슨 淸淨호 비젧 慧日이 한 어드부를 호야버려
	21:31b	調達이 중 호야버린 罪 곧호야 이 法師 犯觸호 거시 이런 殃을 어드리라
	21:31b	調達이 아래 佛會에 五百 比丘 드리고 흐려 나가니 ㄱ 和合僧을 호야브료 미라
	23:22a	그저기 東土엔 周穆王이 셔엿더시니 二月ㅅ 보롬 나래 모딘 브르미 니려 집도 호야버리 며 나모도 것거디며 地動호며
	23:36a	魔王波旬과 外道돌히 깃거 난것기로 塔과 덜와 호야버리 고 比丘들흘 주겨든
	24:2b	阿難이 내드라 호 수프레 가 안자이셔 上地定을 니겨 혀근 結을 다 떠러버려 阿羅漢果를 證호고 結集호논 門 밧기 와 들아지라 호야닐
	24:16a	比丘 偈 지셔 對答호디 내 ㅅㅅ미 解脫을 得호야 뒛논 거슬 다 더러브료 니 이 모미사 노외야 앓기디 아니호노이다
	24:18b	王이 닐오디 그러면 네 몬져 주그리로다 호고 그 모딘 노물 소라 주기고 地獄을 혀려 브리 니라
	24:26a	善容이 무로디 너히 그리 밧고래 이셔 므슴 煩惱를 몬 쁘려 브리 관디 得道를 몬호엿는다
	24:26b	善容이 너교디 梵志돌히 苦行을 더리 호요디 煩惱를 몬 떠려 브리 거니 沙門이 도호 음담 먹고...
月印釈譜	序:20a	十二部修多羅애 出入호디 곧 기튼 히미 업스며 호 두 句를더오며 더러버리 며 뿌디 ㅅ슴 다보물 닐웁 ㄱ장 ㄱ지호야 有所疑處 어든 必資博問호야
	1:12a	輪廻는 술읏ㅼ ㅎ돌씨니 부터는 煩惱를 떠려 브리 실씨 죽사릿 受苦를 아니호거시니와
	1:12b	상넛 사름몬 煩惱를 몬 떠려 브릴 씨 이 생애서 後生 因緣을 지셔 사름미 ㄷ외락 벌에 중징이 ㄷ외락 호야 長常 주그락 살락 호야 受苦호물 輪廻라 호노니라
	1:29a	活은 살씨니 제 손토비 쇠 ㄷ외야 제 모물 떠야버려 죽고져 호디 몬호노니라
	2:16a	衆生은 煩惱를 몬 쁘려 브려 이리 이실씨 도호 일 지순 因緣으로 後生애 도호 몸 ㄷ외오 머즌 일 지순 因緣으로 後生애 머즌 몸 ㄷ외야
	2:62a	金剛慧는... ㄱ장 ㄱ는 그림제 ㅅ 後ㅅ 無明을 호야버려 죠고맛 드틀도 업게 호야샤 妙覺애 들리라

4:10a	흔 字로도 그지 업슨 法을 모도자바 邪曲을 <u>호야브리</u> 고 正을 세며 모딘 이를 업게 하고 요흔 이를 낼씨라
4:25b	나는 無明이 7리어 간 디마다 如來씩 곶외어늘 如來 흔 번도 구짓디 아니허더시니라 하고 즉자히 驕慢흔 ㅁㅁㅁ <u>더러 브리고</u>
4:27b	變化로 큰 쇼 밍 7라 五百比丘의 바리를 <u>호야브료</u> 니 부텃 바리는 허공에 ㄴ라 오를씨 몬 호야브료이다
4:27b	變化로 큰 쇼 밍 7라 五百比丘의 바리를 호야브료니 부텃 바리는 허공에 ㄴ라 오를씨 몬 <u>호야브료</u> 이다
4:41b	죽사릿 根源엿 三毒을 <u>더러 브리</u> 산 주를 아르샤 하시논 이를 허마 일우시니 智慧 불 7샤
4:61b	호몰며 오ㄴ 나래 一切煩惱를 다 <u>쁘러 브렛</u> 거늘 내 마리와 손톱과를 엿데 ㄴ느시 ㄴ기ㄴ다
7:17a	迦尸王이 獼猴王ㄴ려 닐오디 네 獼猴들히 내 나라를 다 <u>호야브리</u> ㄴ니 네 엿디 암홀 내야 주디 아니흔다
7:18a	大王하 아르쇼셔 婬欲엿 이룬…즐거부든 적고 受苦 하느니 브롬 거스려 해 자봄 곧 호야 <u>노하 브리</u> 디 아니 현면 당다이 제 모미 데오
7:31a	頭陀는 <u>떠러브리</u> 다 혼 ㄴ디니 煩惱를 떠러브릴씨라
7:31a	頭陀는 떠러브리다 혼 ㄴ디니 煩惱를 <u>떠러브릴</u> 씨라
7:37b	世尊하 나를 救호샤 力士 내 몸 <u>호야브리</u> 디 아니케 호쇼셔 허더라
7:43b	四正勤은 네 가짓 正흔 道理에 브즈러니 行홀 씨니 하나흔 호마 ㄴ넛은 구즌 法을 <u>그쳐브료</u> 리라 호야 一心으로 精勤홀 씨니
7:54-1a	부텃그 供養호습더니 부테 <u>노하 브리</u> 라 호신대 윈 소넷 고즐 노하늘
7:54-1a	부테 쑤 <u>노하 브리</u> 라 호신대 올흔 소넷 고즐 노하늘
7:54-1a	부테 쑤 <u>노하 브리</u> 라 호신대 梵志 슬보디 世尊하 두 소니 다 뷔어늘 ㅁ스글 노하라 호시ㄴ니잇고
7:54-1a	부테 니르샤디 고즐 노하라 호논디 아니라 ㅁ 六塵과 안 六根과 가온뎡 六識을 <u>노하 브리</u> 라
7:54-2b	한 사르미 짜해 디여 우더니 모몰 외파시메 기름 <u>무터 버리</u> 시고 니르샤디
8:66a	이 止觀 두 字 解脫般若法身 三德에 스ㄴ츠니 止는 <u>그쳐브릴</u> 씨 解脫이오 觀은 智慧ㄴ씨 般若 오 捨相은 法身이라
8:97a	나는 드로니 아버지 몬 7즌 子息은 어딘 이를 비호디 몬홀씨 아버지의 일후를 더러비ㄴ다 호느니 나가든 짜해 <u>무터브료</u> 디 허리이다
8:102a	願흔든 내 호마 命終흫 時節에 一切 7린 거슬 다 <u>더러 브리</u> 고 더 阿彌陀佛을 보ㅁㅁ 즉자히 安樂刹애 가나가지이다
9:35中b	그러흔 고든 如來衆은 大海 곧고 四諦는 四大河 곧 하니 結使를 <u>더러 브려</u> 저품 업슨 涅槃城에 드느니라
10:6b	나랏 百姓이 부터 오시거늘 브라습고 울며 슬보디 어셔 드르샤 미쳐 보쇼셔 하고 제 瓔珞 <u>그쳐 브리</u> 고 짜해 그울며 흫 무터 우더니
10:19a	부텃 淸淨흔 道理 오래 盛티 몬호리니 가즐버 니르건댄 상네 쏘하고 아돌 저근 지비 盛티 몬호ㄷ 호며 노내 기스미 기서 나들 <u>호야브리</u> ㄷ 호니라
10:70a	除滅은 <u>더러 브려</u> 업게 홀씨라
10:81a	散壞非時電雲은 時節 아닌 쟈 번게 구르믈 호터 <u>호야브릴</u> 씨라
10:88a	龍들홀 다 듣게 호며 諸天이 歡喜踴躍게 호며 一切 魔를 <u>호야브려</u> 衆生을 便安케 호리라
11:16a	煩惱는 貪瞋癡 等 十使 諸漏ㅁ 緣이 도외야 法身을 <u>호야브려</u> 正흔 性을 보찰씨 煩惱賊이라 호노니라
11:34b	六種震動호몬 六識을 브터 無明 <u>호야 브료</u> 몰 表호니라
11:75a	無明은 이 根本惑이니 中道理를 막느니 中觀을 닷가 이 別惑을 <u>호야브료</u> 디며
11:75a	見思는 이 枝末惑이니 眞諦理를 막느니 空觀을 닷가 이 通惑을 <u>호야브료</u> 디니

11:101b	世諦에 나사가디 實相아니니 업슬씨 證熏 사르미 天真을 <u>이저</u> 브리디 아니호며
11:120b	이마를 몰라 밤나재 무숨 써 브즈러니 苦空 보아 生死를 곱 <u>그쳐</u> 브리고 곧 너교디
11:122b	理를 迷홀씨 理 불저긔 我人 업슨 돌 아라샤 我心을 <u>그쳐</u> 브리며
11:122b	慧觀을 證호야 아라 能히 煩惱를 <u>그쳐</u> 브리며 凡夫 因果 苦集이 道ㅣ 아니어늘
11:122b	이 道를 아라보아샤 戒取를 <u>그쳐</u> 브리며 滅道를 正히 아라 第一을 삼고 有漏를 가져다가 爲頭호 道호 일 삼디 아니호야
11:123a	世間이 아철븐 돌 아라샤 見取를 <u>그쳐</u> 브리며
11:123a	四諦를 보디 疑心호야 비웃디 아니호야 證信호야 決定호야샤 邪疑를 <u>그쳐</u> 브리느니 이럴씨
11:123a	身邊戒見邪疑理를 迷호야 냇다가 도로 理를 보아 <u>그쳐</u> 브리고 塵境 色聲 等 事를 가져다가 我人 사마 斷常 혜움돌홀 아니홀씨
12:4b	오늘 부터씨 몸 듣좁던 네 업슨 法을 듣좁고 疑悔를 <u>그쳐</u> 브리며
12:8a	自性天 眞佛의 가줄비스 불디 아니라 頓敎은 無量不思議劫 디나다 호몬 바르 正智無明을 다 <u>그쳐</u> 브려 種智 다 두러브면 無邊劫엿 迷惑이 一時에 다 업스리니
12:17a	옷 바사 부터 供養호스바 精誠을 바터 天張를 그르며 天表을 <u>떠러</u> 브료물 表호니라
12:17a	天張를 그르며 天表을 <u>떠러</u> 브려 어즈러비 고타 두외야 녁시 값 저긔 모미 조초미 큰 도라가미라 호니라
13:14a	左右는 空假스 드트를 <u>떠러</u> 브려 中道에 가샤물 表호니라
13:21b	즉재 瓔珞과 보드라븐 爲頭호 옷과 嚴飾엿 거슬 바사 브리고
13:65b	色心을 처섬 <u>호야</u> 브리면 萬法이 다 뷔며 理事ㅣ 根源에 도라가면 一切眞實호느니
13:66a	須菩提 네 空을 아라 일홈 업스며 相 업스니 色心을 처섬 <u>호야</u> 브료미라 이제 實果를 證호야 도르혀 名相을 일홈 지호니
14:7b	能히 色心이 迷惑호야 거로물 스곳 아라 無明스 대가리를 <u>호야</u> 브리면 勝智 알피 現호야 부터와 다르디 아니호리라
14:12b	香風이와 이운 고줄 <u>부려</u> 브리고 다시 새 고줄 비허 이긔티 굿디 아니호야
14:17b	諸佛이 得道호심 제 다 짜홀 뉘우며 放光호샤 無明을 드위혀 <u>호야</u> 브려 智光 나토샤물 뵈시느니라
14:70a	十行은 界外塵沙를 그츠시고 十向은 無明을 降伏호샤 中觀을 니기샤 初地에 오르샤 一分無明을 <u>호야</u> 브리샤 一分三德을 證호샤 三德은 法身般若解脫이라
14:70b	이긔티 地마다 功德이 十倍호야 妙覺에 다드르시면 十二品無明을 <u>호야</u> 브리샤 蓮花藏世界 大寶花王座에 안즈샤
14:73b	三行브터 妙覺에 니르리 三十品惑을 <u>호야</u> 브리샤 究竟호야 涅槃山頂을 證호샤
14:75a	무스물 두르혀 큰 디 向호야 七地에 나사 다드라 習氣를 다 <u>그쳐</u> 브리면 이논 四百 由旬 디나 보비 잇논 디 갓가비 가미오
14:75a	또 八地로 우히 나사가 無明을 다 <u>그쳐</u> 브려 變易生死를 여히여 無餘涅槃을 證호면 이논 五百由旬 디나 보비 잇논 디 다드로미라
15:20a	智定慧覺明明으로 迷懵惑瞋고 어득호물 <u>호야</u> 브려 너비 衆중生싱들히 法법性성을 스곳 불기 알에 호물 니르시니
17:16a	부테 能히 若干 因緣 譬喩로 맛당호물 조츠샤 藥을 내샤 <u>더러</u> 브리시느니 이를 니르산 良醫의 잘 고토미라
18:14a	또 모로매 알뻗 解를 <u>니저</u> 브린 後에사 能히 行境에 들리라 호니
18:31b	智慧火로 幻緣을 <u>스라</u> 브리샤
18:45a	菩提 得고져 홀 사르미 비록 能히 쁘로 브리디 몬호야도 안죽 저그닐 브터 <u>더러</u> 브리면 有爲福에서 더으릴씨
18:45b	이를 불기 아디 몬고 열구를 <u>호야</u> 브리며 더러븐 것 술면 乃終에 므스기 有益호리오

	18:48a	諸經에 法 퍼샤몬 어드븀 <u>호야브료</u> 물 爲커신마론
	18:48a	또 日天子 여러 어드븀물 能히 더터 호야 이 經도 一切 도티 몬훈 어드븀물 能히 <u>호야브리</u> 느니라
	18:56b	네 이제 호마 여러 魔 도즈굴 <u>호야브려</u> 生死軍을 혈며 녀나몬 怨讐스 도즈굴 다 것거 滅호도다
	18:69b	慧炬는 能히 癡暗을 <u>호야브료</u> 미오
	21:8a	摩耶 즉재 宿命을 아르샤 善根이 純히 니거 八十億 盛훈 結을 <u>호야브리</u> 샤 須陀洹果를 得호시고 부텃기 슬브샤디
	21:70a	이 陀羅尼는 能히 一切 智慧를 猛利게 호야 煩惱賊을 <u>호야브리</u> 느니이다 호시고 즉재 呪를 니르샤디 識菴
	21:174b	廢는 <u>노하 브릴</u> 씨오 失은 일흘 씨라
	21:181a	이 衆生들홀 네 神力으로 方便호야 救호야 卹해내야 이 사르미게 無邊身을 覓야 地獄을 <u>보아브려</u> 하늘해 나 勝妙樂을 受게 호라
	21:215a	여섯 大臣이 議論호디 太子를 <u>더러브리</u> 디 아니호면 우리 乃終내 便安티 몬호리라
	22:11a	惡友 두리아 寶珠를 <u>무더 브려</u> 父母를 모르시긔 호니
	22:50b	惡友 츠기 너거 그 寶珠를 ㅈ해 <u>무더브리</u> 니라
	22:65b	그 ㅈ 惡友 손 바래 두드레 박고 모기 갈 메오 좌줄 미읜 자히 善友를 가 보아닐 善友 父母씩 술바 다 <u>벗겨 브리고</u> 나사드려 아나
	22:67a	그 ㅈ 東方으로서 大風이 니러나 雲霧를 <u>부러브리</u> 니 虛空이 곳 7지 조코 閻浮提엿 더러븐 거시 다 조차 업거늘
	22:69b	<u>더러 브리</u> 리니도 부터를 업게 코져 호노라
	22:71b	阿闍世王이 五百 醉象을 <u>노하브린</u> 대 ㅈ거나니 남기 다 것드르며 다미며 지비며 다 모르듣더니
	23:32b	히미 하 能히 怨敵을 <u>호야브리</u> 리라
	23:62b	迷惑고 모딜오 새옴 브르고 姦邪호야 道德을 <u>호야브리</u> 건마론
	23:73a	그 어미 아들 나니더늘 중들홀 모도아 닐오디 호다가 중곳 내 門 알피 오나돈 매로 그우리 <u>터 브리고</u> 내 아드리 僧齋에 ㅈ고라 혼 도느로 도티며 羊이며 거유 올히며 ㅈ 가히를 만히 사 오라 호야
	23:75b	사름 일우린 적고 사름 <u>호야브리</u> 린 하도다
	23:82b	獄卒이 그 말 듣고 머리를 수겨 쇠슬히 <u>노하 브리고</u> 머리 조사 一千 디위 나마 절호고 讚歎호야 닐오디
	23:88b	닐굽 多羅樹스 노피러시니 眉間엿 五色毫光을 퍼샤 地獄을 비취여 <u>호야브리</u> 시니
	25:47b	如來 滅度 後 四十五年 디나면 호 惡王이 世間에 出現호야 佛法을 <u>호야브리</u> 며 僧尼 보차물 몬내 니르리니
	25:50a	다 城 나마 道理 비호샤 恩愛綱을 <u>호야브리</u> 시며 煩惱 도즈굴 주기샤 無上道를 일우샤 一切를 度脫호시느니
	25:75b	姦女들히 王을 므여 無憂華樹를 <u>것거 브려</u> 닐 왕이 자다가 ㅈ야 보고 怒호야 姦女들홀 미오 블로 스라 주기니라
	25:78b	比丘 偈로 對答호디 내 ㅈ스미 解脫을 得호야 諸有를 다 <u>그쳐 브료</u> 니 이 모미사 앓기디 아니호리라
	25:87b	王이 닐오디 그러면 네 몬져 주그리라 호고 즉재 그 놉 자바 브레 스라 주기고 地獄 <u>허러 브리</u> 니라
	25:102a	이 남곤 菩薩이 慈悲三昧力으로 魔兵衆 <u>호야브리</u> 시고 阿耨多羅三藐三菩提를 得호신 ㅈ히이다
楞嚴經諺解	1:17a	摩登이 神呪스 히물 브터 둡은 欲을 <u>스려브리</u> 고 耶輸와 호 가지로 아럿 因을 아라 시혹 罽毘나물 得호며 시혹 授記를 니브니라 호시니

1:37b	定과 혜왜 고르며 學과 行과 다 붉게 하시니 갓근 거츠루를 어루 <u>스려</u> <u>브리</u> 며
1:78a	眞際 헝마 나투면 妄흔 띠 절로 업는 전초로 關提로 彌戾車를 <u>호야</u> <u>브리</u> 게 헝리라
1:104a	阿難이 무속매 아디 몬호몬 손지 客塵이 어리워 그로미 득원 전칠씨 特別히 爲호야 <u>떠러</u> <u>브리</u> 시니라
1:107b	旅亭엿 客은 보내요미 쉽거니와 그스근 ㅼㅼㅼㅼ 드트른 <u>떠러</u> <u>브로</u> 미 어려우니
2:79b	同業은 妄을 感호미 혼 가쵸물 니르시니 生死를 간대로 조차 本覺을 <u>뻬디</u> <u>브릴</u> 씨라
2:95a	能히 菩提를 <u>호야</u> <u>브려</u> 生滅을 니르와드며 조흔 무속물 더러이며
2:104b	우흔 다 조호며 微妙흔 見精을 브트샤 情塵을 <u>떠러</u> <u>브리</u> 시니라
3:64b	엇데 如來ㅣ 因緣과 自然과 둘흘 다 <u>미러</u> <u>브리</u> 시느니잇고
4:59a	이 人人의 本來 面目이니 엇데 妄으로 돌헤 헝며 <u>이저</u> <u>브려</u>
4:90a	生死根本은 五濁業用이라 妄을 두르혀 眞에 맞게 코져 瞋단덴 몬져 生死이 거쵸 根源을 <u>굴히야</u> <u>브리</u> 고 生滅 아니흔 圓湛흔 性을 브터 功을 일우리니
5:42b	料擻는 <u>떠러</u> <u>브릴</u> 씨라
5:68a	내 比丘ㅣ ㄷ외야 상네 一切ㅅ 조스르원 길과 놀이 田地 險헝며 조바 法 곧디 아니호미 이셔 술위와 물와를 <u>호야</u> <u>브리</u> 거든
5:69b	險을 ㅼ히 하시며 <u>호야</u> <u>브로</u> 물 마그시며 사르물 그롬헝시며 쇼를 건네샤디
5:88b	邪와 흐리요물 <u>호야</u> <u>브리</u> 샤 무슴과 境界 空寂헝샤
6:31b	안헝 業이 열히 이쇼디 法身을 <u>호야</u> <u>브로</u> 몬 오직 姪과 怒와 癡왜 甚홀씨
6:56b	僑陳那와 大迦葉 등이 各各 六塵을 因호야 圓을 아니 이에 다 <u>굴히야</u> <u>브리</u> 샤몬 더는 니르산 聖人ㅅ 性엔 통티 아니호미 업수미오
6:103b	네흔 거리쎄 着호물 <u>더러</u> <u>브로</u> 물 爲헝니라 헝니
6:104a	이는 法을 <u>호야</u> <u>브리</u> 며 法을 헝씨 이런드로 일후미 賊人이니 비록 부텃 오술 니브나 조티 아니호모로 命을 사를씨
7:9a	헝다가 雪山이 아니면 그 쇠 내 더러워 짜해 브르디 몬헝리니 各別히 平原에 ㅼㅼ 가쵸 <u>파</u> <u>브리</u> 고
7:54a	比丘는 四棄니 곧 알ㅼㅼ 四重이니 犯헝면 반드기 <u>내조차</u> <u>브롬</u> 디라 헝디 住티 몬헝리라
8:2b	조흔 그릇 中에 毒흔 ㅼ를 <u>더러</u> <u>브리</u> 고 모든 湯水와 雜지와 香과로 그르슬 ㅼ고샤 後에 甘露를 담돏헝니라
8:61b	心慮ㅣ 虛히 얼의여 三界엿 무슴 닳는 六品微細흔 煩惱를 <u>그쳐</u> <u>브려</u>
8:65a	시혹 諸趣를 자바 妙圓ㅅ 體를 迷헝며 시혹 妙圓을 자바 諸趣ㅅ 業을 <u>떠러</u> <u>브려</u> 그르 떠러듀를 닐웁 전초로
8:84a	逸은 무슴그장 <u>ㅼ</u> <u>브릴</u> 씨라
8:99b	意에 브스면 能히 번게 ㄷ외며 무뤼 ㄷ외야 心魄을 <u>봏아</u> <u>브리</u> 느니라
8:101b	思애 다티면 能히 지 ㄷ외며 瘡이 ㄷ외며 ㄴ는 돌히 ㄷ외야 모물 터 <u>봏아</u> <u>브리</u> 느니라
9:47b	魔ㅣ 어드우모로 브투를 삼느니 이제 禪을 닳그며 定을 꾸며 妙心이 精明호야 菩薩羅漢과 어운 전초로 能히 魔界를 위워 <u>호야</u> <u>브려</u> 惱害를 닐위리라
9:50b	阿難아 반드기 알라 네 道場에 안자 모든 念을 <u>스려</u> <u>브려</u> 그 念이 헝다가 다오면 念 여히요미 一切 精明호야 動과 靜과 ㄹ기디 몬헝며
9:51a	이는 일후미 色陰區宇ㅣ라 모든 念을 <u>스려</u> <u>브로</u> 몬 물고모로 虛妄흔 生滅을 두르혀미라
9:60b	이는 일후미 塵을 모도며 四大性을 <u>미러</u> <u>브려</u> 헝굴오티 向호야 純에 드로미니

	9:77a	一分大我慢魔 心腑에 드러 塔廟를 禮 아니하며 經像을 <u>호야브려</u> 檀越드려 날오디
	9:77b	기피 信호리 허러 붓오몰 조차 地中에 <u>무더 브려</u>
	9:113b	薄은 氣分이 가 다와들씨오 蝕은 이저 <u>호야브릴</u> 씨라
	10:12a	시혹 生滅을 <u>떠러브려</u> 常이라 헤며 시혹 生滅을 두어 常이라 헤며
	10:12a	이논 生滅을 <u>떠러브려</u> 常이라 헤요미라
	10:46a	六門을 스러 <u>그라 브려</u> 어올며 여로몰 일우면 봄과 드롬괘 通호야 갓가와 서르 뼈 淸淨호야
	10:47a	하다가 이 中에 定慧力으로 六門을 스러 <u>그라브려</u> 根으로 어우러 논호디 아니하며
圓覺經	序65a	龍藏은 부터 滅度호신 一千年 後에 魔와 外道왜 盛호야 正敎를 <u>호야브릴</u> 시
	上1-1:65b	업스신 智를 가줄비시고 아호본 劫風이 <u>호야브료</u> 몰 디니논 譬喩 니 工巧히 惑을 두게 호시는 智를 가줄비시고
	上1-2:53b	住持호샤 일티 아니호시며 <u>호야브리</u> 디 아니호실 시라
	上1-2:107b	시는 그릇과 시는 집 곧 호야 기피 아철브며 <u>호야브리</u> 며
	上1-2:130a	닐은 二乘이 無爲스 廣大호 기픈 구데 떠러디니와 善根을 <u>호야브린</u> 그릇 아닌 衆生이 큰 邪見스 貪愛스 므레 뼈디니왜니
	上1-2:181a	偈에 날오디 身見 等を <u>호야브려</u> 微妙호 聖道를 자바 가져 修道애 煩惱를 그칠시 현 오시라 니르니라
	上1-2:182b	처섬 眞性이 두 業이 잇느니 호나호 能히 제 體엿 恒沙 功德을 디녀 本來 브터 오매 일티 아니하며 <u>호야브리</u> 디 아니호미오
	上2-2:24b	一切 衆生이 四大 毒蛇도 쏘 이곤호야 하다가 호나히 7장 瞋心호면 能히 모몰 <u>호야브리</u> 느니라 호시니라
	上2-2:117b	糞掃衣논 世人이 브론 거시 느외 빠디 몬호미 빠디 <u>쁘려 브론</u> 것과 곧 호니라
	下3-1:102b	圓覺性은 任호야 이슥 아닌 전초로 알폰 들어 부터 어두미오 이논 身心을 <u>노하 브료</u> 미니 하다가
	下3-2:62a	쏘 더 觀을 니겨 무식몰 <u>노하 브리</u> 디 아니호야 漸次로 證을 求홀 디니라
	下3-2:92b	鬼神이 그 境界를 보차리 잇거든 내 반드기 붓아 微塵 곧게 호리이다 鬼神의 境界를 <u>붓아 브료</u> 몬 佛菩提心을 護待호는 전치라
金剛經三家解	序10b	엇데 이 文을 조사 德을 <u>호야브리</u> 리오 어루 錦스 우히 고줄 더오다 니르리로다
	序10b	玉이 허므리 업거늘 文을 조스면 도르혀 도호 玉의 溫潤호 德을 <u>호야브리</u> 느니
	1:7b	山이 호마 得호야 곧 <u>소라 브리</u> 니라
	1:7b	源이 흘른 仰山드려 날오디 아리 傳호단 밧 圓相을 기피 7초오미 맛당호니라 山이 날오디 <u>소라 브료</u> 이다
	1:12b	몸 受호 後에 거츠리 根六六塵이 이 一段靈光을 <u>무더 브료</u> 미 드외야
	1:13a	그럴시 舍衛國에 거샤 이 經을 爲호야 니르시니 큰 쏘든 오직 이 사를 爲호샤 브토몰 그르며 미요몰 <u>아샤 브려</u>
	1:14a	값눌히 조고매 나다나 萬法의 本來 뷔유몰 <u>쁘려브리</u> 며 무식 고지 發明호야 五蘊이 잇디 아니호몰 비취도다
	1:26b	모로매 지빅 이셔 값 가온덧 이를 <u>이져브리</u> 디 아니하며 값 가온디 이셔 집 소벳 이를 어즐티 아니호야샤 올호리니
	1:26b	이런드로 날오디 妙喜론 엇데 無着이 무루를 容納호며 和론 엇데 絶流宮를 <u>지여브리</u> 리오 호니라

	2:13b	올흔녁 누는 體오 윈녁 누는 用이오 덩바깃 누는 體用 ㄱ즈니라 그흔 後에 다시 사다 호몬 空을 아라 잇다가 空을 떠러브릴 시라
	2:15b	絲毫念은 中을 니르니 中을 아샤브리다 혼 쁘디라
	2:36a	즈게를 어더 가지 자보미 足히 奇特地 아니흐니 노픈 빙애에 소닐 떠 브려 샤 丈夫兒 니라
	2:55a	무리라 브른돌 어뒀던 무리리오 쇠라 불러도 반드기 쇠 아니니라 두 그들 다 노하 브리고 中道를 一時에 마롤디니
	2:61b	料는 떠러브리다 흐논 마리라 九阜는 아홉 고비엿 모시니 鶴이 앓는 디라
	2:66a	根塵識을 노하 브리고 淨淨히야 無餘에 니르니 圓萬히며 空寂한 體 現히 이에 現히도다
	3:3b	히와 들왜 비록 볼 ㄱ나 불고미 니르디 몬히며 劫火 하야브릴 제도 저는 하야디디 아니히도다
	3:23a	무스매 사르물 지여 브리다 아니하면 ㄴ치 붓그러운 비치 업스리라
	3:23b	불셔 毗盧老漢을 지여 브리리니 毗盧를 지여 브리면 곧 무스매 날보미 이셔 ㄴ치 붓그러운 비치 이시리니
	3:23b	불셔 毗盧老漢을 지여 브리리니 毗盧를 지여 브리면 곧 무스매 날보미 이셔 ㄴ치 붓그러운 비치 이시리니
	3:26b	그러면 실어 세요미 또 내게 이시며 쁘려 브롬 도 또 내게 잇느니라
	3:37b	愿을 알리 적고 愿을 지여 브리리 하도다
	3:38a	말슴 바다 뜯 아로몬 愿을 아논 아치오 말슴 조차 아롬 내요몬 愿을 지여 브리 는 아치라
	3:46b	흔 주머귀로 化城關을 터 그우리왈고 흔 발로 玄妙寨를 차 드워혀 브리 도다
	3:53b	더위자바 니러 곧 行호미 깃비 快컨마른 또 請히노니 依然히 노하 브롬 디니라
	3:53b	힘 큰 사르몬 본디 뭐디 아니하야 ㄴ즈시 옷 머리엿 關을 하야브리고 디나느니라
	3:53b	菩提 머욘 므거우물 더위 자바 니러 곧 行호미 快호몬 快히나 또 請히노니 알폴 브터 노하 브롬 디니라
	3:54a	吹毛를 갓 ㄱ로 자바 다른 자죄를 쁘려 브리 니 모로기 心地 다 開通케 히도다
	4:44a	말와 즘즘홈과 離와 微와를 다 쁘려 브리 면 괴외히 넷 靈山에 히오사 안즈리라
	5:15b	엇데 구퉁여 文字를 떠러 브리고 各別히 말슴 업슨 ㅼ들 求히리오
	5:31a	今時를 떠러 브리고 비르서 시러 體에 나사가도소니 세 點스 므리 또 소글 向하야 두려우물 모로매 아롤디니라
	5:38b	觀히논 智로 法性스 ㄴ겨레 들면 올히면 다 올히며 외면 다 외온디라 쁘려 브료 미 또 내게 이시며…
	5:38b	…쇼 타셔 쇼 어두미며 虛空엿 곳과 陽燄괘며 ㅼ과 곡도와 ㅼ 몃 더품괘니 흔 부드로 애워 브롬 디며
	5:39a	一切 다 일시 어루 ㅼ 애워 브롬 디며 一切 다 올홀시 마롤딘댄 곧 마롤디니라
	5:40b	히다가 最上頓宗을 議論홀딘댄 곧 이 凡과 聖괘 통티 몬히느니 金剛王寶劔으로 ㅼ ㅼ장 쁘려 브려 나 몸 업기 히고
	5:48b	비록 이 곧히나 내 모물 爲코 法을 爲티 아니하면 佛祖스 기픈 愿을 지여 브리고 모물 爲코 사르물 爲티 아니하면 二乘境界에 ㅼ디리니
	5:49a	涅槃스 무스물 것고 正한 法眼을 업게 히며 知見을 쁘려 브리고 命의 불휘를 바혀샤 ㅼ디 ㅼ홀 愿을 어루 가푸며 ㅼ디 어려운 德을 ㅼ 가푸리라
杜詩諺解	3:2b	물 타 님금 受辱히샤물 놀라고 갈홀 ㅼ혀 나히 늘구물 떠러브리 노라
	3:3b	堯스 封히던 넷 民俗이 이제 疑心되도다 기리 嗟吁하야서 北寇를 ㄴ위터 브리고 져 히고 흔 디위 브라셔

3:4a	西夷를 <u>거더 브리</u> 고져 호노라 구퉁여 玄圃에 뵈습디 몬호나 超然히 具茨엿 어딘 사르물 待接호시고라
3:15a	숯 尊스 가온뎡 화를 疑惑호니 곳갈 우헛 빈혀는 <u>머뜨리 브렛</u> 도다 옷기슬글 돌이여 魏스 님그물 놀래니
3:45a	滄溟에 늘구메 와 돈니노니 朱紱로平生을 <u>저브리</u> 과라 어스르메 새 수플로 가매 놀개 가비야오물 올워러 브러 보노라
3:48b	그윳 드리는 버듸 7놀흘 썩차도다 7롭몬 7되 건나는 나래 놀오 프른 퍼런 것 불을 7스물 뵈느다 호마 얼구렛 띠를 <u>떠러 브료</u> 니
3:60b	關中엿 죠고맛 아히 紀綱을 <u>허러 브리</u> 며 張后ㅣ 즐기디 아니커든
3:60b	님그미 爲호야 驚忙호더시니라 이제 니르러 이젯 님그미 오히려 亂을 <u>빠혀 브러</u> 7스물 77며 스랑호물 글탈하 四方을 기우시느니라
3:71b	蜀스 사르미 자랑호디 一千 히를 물 넘썬미 張儀樓에 갓갑디 아니호니라 호느다 올히 灌口에 戶口를 <u>호야브리</u> 니
5:8a	7를 썸 내야 宮闕을 收復호고 / 畚 城에 盜賊이 城壕를 <u>갓가 브리</u> 도다(汗馬收宮闕 春城鏖賊壕)
5:26a	父母스 恩惠를 <u>그쳐 브리</u> 고 소리를 숨씨고 干戈를 메오 녀노라(棄絶父母恩 吞聲行負戈)
5:26b	骨肉의 恩惠를 어느 <u>그쳐 브리</u> 리오 男兒의 주구미 時日이 업스니라(骨肉恩豈斷 男兒死無時)
5:33a	물 돌여 돈니건 디 스물 히니 明主스 恩惠를 <u>저브릴</u> 가 전노라
5:37a	스랑훈단 네 范增이 玉마를 <u>뜯려 브리</u> 니 吳國스 兵馬로 히여 힌 오솔 님디 묻게 홀디니라(憶昔范增碎玉斗 未使吳兵著白袍)
5:40a	綿州스 副使ㅣ 누른 오솔 니버늘 우리 花卿이 <u>쁘려 브러</u> 卽日에 平호니라(縣州副使着柘黃 我卿掃除卽日平)
5:44b	하며 저근 材官이 涇渭에 屯守호엿느니 將軍들호 시름도윈 7출 <u>허러 브리</u> 디 말라(多少材官守涇渭 將軍且莫破愁顏)
6:20b	언제사 世俗엿 띠를 <u>떠러 브리</u> 고 흰출히 바르래 비 타 가려노
6:24b	더 주숨뵙 災害 오히려 7러 蒼生 이수미 씨디 [?]디 몬호엿더니 指揮호야 率土를 便安케 호시고 <u>시서 브려</u> 큰 불무를 撫定호시니라
6:42a	브르미 怒호야 우르느니 내 집 우헛 세 7 뛰를 <u>거더 브리</u> 느다
6:42b	뵈 니브리 여러 히를 7호미 쇠 곧호니 일의노논 아히 아니환히 누워 안홀 불와 <u>믹여 브리</u> 느다
6:45b	스랑호야 앓교미 호마 여섯 히러니 이 낫 새배 즘은 나출 <u>버혀 브리</u> 노라
7:6a	실에를 바라 書帙을 7즈기 호고 순 거슬 보아 藥스 77출 <u>더러 브리</u> 노라
7:18b	방하고 디여 디호니 비치 호오 7스라기를 <u>더러 브리</u> 니
7:24b	서르 對호야 이슈니 열 丈만 호 龍이 몬드시 몹 뉘누릴 드위터 <u>빠 브리</u> 느다
7:28a	그윳 거긔 불곤 義를 <u>저브료</u> 니 슬허호니 머리 쏘 세도다
7:31b	프른 외해 學士ㅣ 銀魚를 <u>스라 브리</u> 고 힌 물 타 도로 돌여와 모미 바회 아래서 사넛다
8:30b	긔 출호 三峽 므를 갓고로 흘리리오본 陣은 호올로 즘은 사르미 軍을 <u>쁘려 브리</u> 리로다
8:36a	속절업시 烏鵲이 깃부를 傳호넛다 기피 鵲鵲스 詩를 <u>저브리</u> 과라
8:47b	萬一에 가 서르 <u>일혀 브류</u> 를 免홀덴 불 나를 구퉁여 더되다 호야 말리아
8:68b	내 슬호디 가난호 짚 썩리 오래 羅襦裳을 어더 뒷다니 羅襦를 쏘 베퍼 님디 아니호고 그딕를 相對호야서 紅粧을 <u>시서 브리</u> 노라
9:2b	겨집과 子息과는 쏘 엇던 사름고 丹砂 먹져 호던 알뻗 許諾을 <u>저브리</u> 과라
9:6b	道術에 일즉 7들 머글오니 先生이 일 昏蒙호물 <u>터브리</u> 니라

9:18b	큰 구스리 허믈와 무든 거슬 바사 브린 듯고 흰 드리 虛空을 當호엿는 듯도다
9:18b	나는 南과 北과에 돈니는 사르미로니 므수멧 거춘 거슬 미야 브료 물 묻호얏노라
9:19b	금 빈허로 눈조속에 7리썬 거슬 거더 브리 면 비디 온 磳磳 1라와 重호리라
9:31b	오래 野客이 드외야서 幽深흔 디 초조물 니기호노니 何顚을 仔細히 비화 與心 저브료 물 免호라
9:34a	뉘 能히 金印을 글어브리 고 瀟洒히 便安히 坐禪호물 다못호리오
10:2b	셴 머리에 幕府에 와 돈노니 平生엿 므슴 저브료 물 기피 아노라
10:7b	마치 붉 브르미 서르 欺弄호는 듯호야 바미 두서 가짓 고줄 부러 것거 브리 는다
10:9a	뉘 날오디 아츰이 오매 뜰들 니르왈디 아니흔다 호노니오 미친 브르미 안직 긴 가지를 돌이야 그쳐 브리 는다
10:26b	風塵入 7식 도트랏 디포니 늙고 더러우물 버히며 떠러 브료 미 어렵도다
11:39b	오늬 나조흔 엇던 나조코 히 디나가노니 更點이 길오 燭入브리 불 7니 저브료 미 마티 아니호도다
11:47a	되삿기 님금 恩澤을 저브리 니 슬프다 너희 太平흔 젓 사르미러니라
11:52b	江湖에 브룻 몃거리 하니 비를 일흘가 전노라 호고 門의 나 셴 머리를 굶노니 平生엿 뜰들 저브리 듯호도다
14:30a	물근 7르물 브라오니 히 돈노니 덥고 溫和호매 나그내 시르를 흐려 브리 노라
14:39a	네 수프레 도라가물 得디 못호니 帛가온 므수물 미려 브리 노라 고돌파 그를 짓노라
15:4a	므쇼 머기는 놀엿 소리를 즐겨 들곡 아히로 흰히 등어리 글키고 내 머리 우헛 빈허를 바사 브료 리라
15:13a	蹉跎흔 늘근 양조로 도흔 林泉을 슬혀 브리 노라
15:18a	栢公이 夔國을 鎮定호시니 留滯흔 이를 이 흥번 쁘려브리 도다
16:1b	離群 索居호매 늘거와 서르 맛보니 昏蒙호물 包容호야서 터 브료 물 깃거호노라
16:6a	幽棲홀 뜰들 저브리 디 아니호야 寵辱엿 모물 兼全호도다
16:9a	술읏 바회를 훈갓 호마 썩홀 썩니로다 터 닳가든 집 지수물 지즈루이 저브릴 가 앓기노라
16:54a	大常이 樓 지순 빛 소리 수스워리노니 兵事를 7르 盜賊을 갓가 브료 리라 下牢로 건나놋다
16:58b	술 너호로매 터 브료 물 7가호다니 너를 依賴호야 7물 돌히 너기노라
16:58b	物이 微賤호야 世人이 드와 브리 노니 義 잇건마튼 뉘 徵求호야 보물 즐겨호리
16:63b	우리 무른 엇데 이 즐거울 7장호리오 하늬 내산 거슬 모델오 그쳐 브료 미 聖人入 슬논 배니라
16:66b	이 무른 엇데 7술히 업스리오 쏘 춘 이스를 니버 브리 이리라
16:67a	쁘리며 7리와 芝蘭을 호야브리 노니 한 가시 남기 盛호도다
16:68a	…호몰며 苦菰와 馬齒에 도흔 菜蔬를 7리오미썩녀 小人이 君子를 아쳐러 호야브료 물 슬노니
16:73a	幸혀 흰 고지 미조물 므초니 엇데 프른 너출 거더 브료 말리오
17:17b	세엿 사르미 사랑호디 도로 호야브리 노니
17:30a	交河에 몇 버늘 層層인 어르물 불와 떠혀 브리 니오

17:33a	意氣盜賊을 모라 더러 보료 매 이실시 金帛을 내야 사놋다
19:4a	江河 흐리니를 시서 브리 고 소텃 새로인 거슬 調和호닛다
19:9a	무스미 어위커 性的 疎拙호요물 두시고 떠러 보려 길희 窮困호물 스랑호시놋다
19:20b	潭州엿 온 섯수를 싸혀 보료 니 瀟湘 두들겟 즈믄
19:27b	프른 뫼헤 스식으로 혼 내힌 짜히로소니 城郭이 시르를 시서 브리 도다
19:31a	나는 이제 목숨 길며 덜우물 므던히 너겨 브리 노니 엿데 시러곰 命의 屯蹇호물 슬흐리오
20:2b	블러 니로매 머리 글구를 썰리 호고 더위자바 녀매 몇 격지를 들워 브리 가뇨
20:3b	무스물 여러 더운 病을 몰오 누닐 불기 떠 雲煙을 쓰러 브리 노라
20:5a	슬허호시는 絲綸이 切호니 어즈러운 法을 더러 브리 시도다
20:12b	깊 가온대 阮籍이 아니오 들굴 우희 張騫이 곧도다 떠러 브리 면 구루미 어느 이시리오 머므려 이슈메 히 머므디 아니호는다
20:14a	金 빈혀로 훈갓 누네 썸 거슬 거더 보릴 뿌니로다 거우루엿 얼구릭 자죄를 여히디 못호얏노라
20:21b	프른 빈 짜해 魍魎오란 그리터 브리 고 丹極에 鯤鵬둘히 노라 오르더라
20:23a	무스미 흐익호니 飛動을 붉는 듯고 사화 이기여 侵凌호물 거슬 시서 브리 도다
20:25a	싸를 調鍊호야 情性을 調和호고 兵甲을 퍼 棘矜을 이어 브리 노라
20:25b	쁘들 퍼 짓는 그른 魯侯를 기리고 스랑호논 수리 澗水 그릇닐 버혀 브리 노라
20:30b	契揄 더러 보료 물 듣고져 조스roi 너기고 麒麟에 그리요물 짓고져 호디 말라
20:47b	滄洲에 갈 願을 저 보료 니 뉘 날오디 늘거셔 블로물 보리라 호노뇨
20:51b	몹곳 버드른 본디로 幽僻호고 村엿 고즌 쓰러 브리 디 아니호노라
20:53a	雲臺에 形像을 그류믄 다 妖氛 쓰러 보료 물 爲호애니라
21:22b	쁜 구루미 프른 붉 비출 저 브리 디 아니호니 그논빈돌 엿데 白帝城을 저브리리오 모미 곳 스시로 디나갈시...
21:22b	쁜 구루미 프른 붉 비출 저브리디 아니호니 그논빈돌 엿데 白帝城을 저 브리 리오 모미 곳 스시로 디나갈시...
21:41b	늘거 보료 만 불곤 거우로애 아노니 슬픈 무숨 오매 힌 구루물 브르노라
22:3b	블거 하니는 집 썸렛 고지오 떠러 보렛 노닌 담 모햇 프리로다
22:31a	니건 그솔히 몹 되 反호니 시러곰 번게 쓰러 브리 듯 호물 마디 못호리라
22:44b	秦王은 亂을 싸혀 브리 시는 姿質 이시니 혼 갈 가지고 兵符를 檢領호시니라
22:44b	汾晉으로 豐沛를 사므니 모딘 隋를 무초매 시서 브리 시니라
23:3b	어느 저긔 節戮을 돌아와 힘써 攬搶을 쓰러 보릴 고
24:17a	큰 지빅 노존 물물 아흔 듯호며 긴 城에 기튼 堞을 쓰러 브리 듯도다
24:28a	모다셔 놉 주논 아름다오물 보내오 해 갈마 뒷논 더러우물 떠러 브리 도다
24:30b	글 짓는 例 우리 짓 그레 미츠니 무스미 흰출호야 그린 거슬 쓰러 브리 도다

	24:36a	오히려 漳水에 病을 버뜨려 蒿里에 餞送호물 기리 <u>저</u> 브리과
	24:41b	썩에 놀라 넷 明哲헌 사르물 저히니 거문 머리 改變하야 사름 잇는 짜홀 <u>저</u> 브릴가 흥더라
	24:43b	몹걸 곤헌 어딘 史臣의 부든 大庾嶺에 <u>그쳐</u> 브리디 마를 디어다
	24:49a	니건 히에 朝謁호미 그츠니 다른 나래 <u>쓰려</u> 브료물 그르호도다
	24:59b	嫌疑를 <u>떠려</u> 브려 사괴요미 오라더니
	25:9b	요주숨 누넷 가시 <u>아샤</u> 브리드시 그 샤용을 병으리와드니 河東人 저문 겨지비 모맷 姓이 柳개니라
	25:13a	머리 올마가매 뉘 터 <u>빠</u> 브리리오 내 지빅 미쳐 올라 將次人 전노라
	25:14b	노쁜 무를 싸물 티디 말며 긴 고기를 비눌 <u>히야</u> 브리디 말라
	25:38a	내 氣運 孱弱하니는 正直호물 반드개 <u>이저</u> 브리디 아니호리라 어느 사르미 國風을 採取홀고 내 이 말스물 받좁고져 호노라
	25:49a	글하논 집과 부디 양즈를 그디 아천디 아니홀시 글지시와 글스기로 지빅 올라 그디를 爲하야 <u>쓰려</u> 브리노라
	25:54b	皇孫이 오히려 일즉 蓮勺에 困히 돈니며 衛莊이 貶黜호물 보아 그 바를 <u>히야</u> 브리니라
三綱行実図	孝1	閔損이 다슴어미 損이를 믅여 제 아들란 소음 두어 주고 閔損이란 굴품 두어 주어늘 치빅 물 석슬 <u>노하</u> 브린대
	孝12	郭巨 제 거집드려 닐오디 艱難헌 거기 내 아드리 어미 바블 앓느니 <u>무더</u> 브리저라 호고 짜홀 석 자홀 쾀니
	孝18	술와 잣과를 五六 里를 심겟더니 훈 사스미 와 소를 <u>호야</u> 브려늘
	孝25	플와 나모왜 것들더니 王崇의 바튼 곧 아니 <u>호야</u> 브리니라 居喪 밧고 墓人 겨퓷 손지 사더니
	孝31	두 횃 마내 식어미 病호엿거늘 밤낫 겨퓷 이서 모기 놀이며 식어미 술히 서거 구더기 나거늘 <u>썩라</u> 브리니 다시 아니 나더니
	忠8	使者 다시곰 달애오 印綬를 치이거든 <u>미려</u> 브리고 아니 받거늘
	忠15	大丈夫 이런 凶逆을 <u>아샤</u> 브리디 묻호고 北面하야 臣下 드외느니여
	忠21	邦父 7장 구짓고 옷 밧고 곳갈 <u>뽕터</u> 브리고 어서 죽가지라 커늘
	忠28	물쇼 주겨 軍士를 이바드며 쏘 집과 싸흔 거슬 <u>소라</u> 브리고 每日 피싸홈 하니
	烈10	法이 一定헌 刑罰이 이서 사름 줄 업스니 그디 7면니 逃亡하야 가라 호고 갈 <u>벗겨</u> 브리고 糧食과 천량을 빠아 주고
	烈10	남지닉 갑새 조경하야 지곡지고기 맛굼다가 머리 니거샤 니룬대 즉자히 <u>주거(주겨)</u> 브리니라
	烈25	훈 불홀 베티니 더욱 屈티 아니커늘 쏘 훈 불홀 베튜디 구지조물 그치디 아니커늘 7가출 <u>밧겨</u> 브리고 가니 이툼나래 주그니라
	烈30	王이 後에 欺弄 마존 주를 아루시고 하 怒하샤 都弥를 거죽 罪로 두 늣조스 <u>호야</u> 브리고 비에 연자 <u>뽕워</u> 브리고 그 겨지블 드려다가 구퓷여 어루려 커시닐
	烈30	王이 後에 欺弄 마존 주를 아루시고 하 怒하샤 都弥를 거죽 罪로 두 늣조스 <u>호야</u> 브리고 비에 연자 <u>뽕워</u> 브리고 그 겨지블 드려다가 구퓷여 어루려 커시닐
南明集	上1a	頭陀는 梵語 니 예서 닐오맨 뽕시니 煩惱를 <u>떠려</u> 브릴시라
	上3b	虛空 밧 그르메를 터 <u>호야</u> 브려 그쳐샤 이 뽕 本來人 사르물 보리라
	上6b	五蘊은 五陰이라 掃蕩은 <u>쓰려</u> 브릴시오 建立은 세여 돌시라

上14a	鳥과 오 셋 빛 터러글 지버 부러 부리 신대
上24a	갓 누 무출 노하 부리 고 조세히 불디언딩 밧글 向하야 속절 업시 어도물 모로매 마물디어다
上31a	三四 句는 민드리 조하야 凡情과 聖解왜 다 업서 죠고밧 것도다 바사 부릴 시라
上36b	둘짖 句는 집 일허 부리 고 生死애 그우닐시라
上55b	그 히엣 넷 姓名을 니저 부리 도다
上55b	姓名을 니저 부리 몬 本來面目을 모를시라
上56b	술은 無明이니 아줄하야 씨디 몬하야 家鄉을 일허 부리 고 미틔 도라가며 根源에 도라가물 아디 몬홀시라
上73b	첫 句는 三 句 들워 버서 부론 고디 이 卞實흔 體相이라
上76b	三四 句는 正흔 길히 아스라 이 7리오 智日이 하마 ㄷㅁㅁ 밧거 어드운 길헤 드러 家鄉을 일허 부릴 시라
上77a	因果를 쁘러 부리 논디 가시야 슬험직하니 卞흔 길하란 몰라 일코 어듭고 쏘 미치도다
上77a	…뉘 苦와 樂과 報를 受하리오 홀시 니르샤디 쁘러 부리 다 하시니라
上77b	漚漚蕩蕩은 殃禍이 ㄱ 업소물 니르시니라 아롬 업스며 물롬 업다 호몬 因果를 쁘러 부리 는 마리라
下4b	일즉 天魔이 애를 떠러 부리 시니 邪와 正과 서르 섯그나 勢를 어루 아물디니라
下25a	그뻘 노하 부리 샤미 어긔디 아니커늘 므스 일로 사르미 와 자바 니르왈디 몬하노
下25a	노하 부리 샤몬 그려긔 지체셔 가비압고 니르왈디 몬호몬 泰山이셔 므거우니 이논 得失 업슨 쁘디라
下25a	쑤 노하 부리 몬 傳授 잇는 쁘디오 니르왈디 몬호몬 傳授 업슨 쁘디라
下30a	슬프다 末法에 眞風을 지여 부리 느니 物에 다호매 아줄하야 모르논디 어린 아히 곧도다
下32b	네짖 句는 法財를 하야 부리 며 功德을 업게 홀시라
下34a	노니는 아드론 몇마 좃이 고해 불어든 듣거노마론 넌즈시 本來스 므스물 일허 부리 놋다
下42b	因果를 다 닛다 호몬 善星이 因 업스며 果 업스며 물롬 업스며 아롬 업스니라 하야 因果를 쁘러 부릴 시라
下57a	터 ㅼ러다 호몬 ㅼ 주머니를 일허며 갓 누 무출 노하 부릴 시라
下64b	네와 이제와애 뉘 이 恩 가픈 사롭고 하다가 싣 근매나 이시면 곧 지여 부리 리라
下65a	네짖 句는 하다가 싣근매나 凡情聖解 옷 다오디 몬하면 一句에 相應티 몬하릴시 니르샤디 지여 부리 리라 하시니라

翻譯朴通事	1a	또 이 봄 二三月 도헌 시저를 맞나니 도헌 시경을 <u>견네테브리디</u> 말 거시라
	9a	올히 비 므슬히 7장 하니 므리 蘆溝橋스 란간엿 스지 머리를 즈마 너머 쉬문올다가 다 다덜어 <u>히야 브리</u> 고면회 다 쓰셔 혼 불회도 업다 보니
	35a	더 나괴 어러 나흔 노미 나를 에도라 돈니니 달라 후안디 반 년이나 호디나를 갑디 아니후니 내 두 창 새 휘를다가 다 돈녀 <u>히야 브리</u> 과라
翻譯老乞大 上	3b-5a	후다가 다시 사술 빼혀 외오디 몰후야도 免帖 내여 <u>히야브리</u> 고 아리 외와 免帖 타 잇던 공으로 이 번 몰 외온 죄를 마초아 티기를 면후거니와
	19ab	내 물이 닐어 비러 오니 브롬놀 9티 쾌후니 네 조심후야 쓰고 녹미 것 <u>후야브리디</u> 말라 이 버다 네 사후는 답피 너므 굶다 즘승돌히 었디 머그료 7장 7노리 사후라
翻譯老乞大 下	19b-20a	이러면 네 이 물 글월 내여다가 더 사롬드려 무려 처섬의 덩흔 갑새셔 닛 랑 은을 더러 내여 머르는 갑새 헤오 글월 <u>의혀 브리</u> 라
	47b-50a	우리 세샹엿 사르미 남님 드외여 돈닐딘댄 내 조샹 명성을 <u>후야브리디</u> 말오
	47b-50a	떠도 내 천 쓰며 <u>후야브려</u> 도 내 짓 거슬 후야브리누니 네게 므스 이리 브트뇨
	47b-50a	떠도 내 천 쓰며 후야브려도 내 짓 거슬 <u>후야브리</u> 누니 네게 므스 이리 브트뇨
呂氏鄉約諺解 華山本	36b	또 비러간 거슬 <u>후야브리</u> 사롬을 론벌호디 괴약이 맞디 아니후 죄곧티 후야...
三綱行実図 重刊 東京大本	孝1a	민손이 다습어미 민손이를 먹여 제 아들란 소음 두어 주고 민손이란 곱품 두어 주어늘 치위 물석을 <u>노하 브린</u> 대 아비 알오 다습어미를 내토투 커늘
	孝18a	허지 호온자 슈묘후야셔 솔과 잣과를 오륙 리를 심것더니 혼 사스미 와 소를 <u>후여브려</u> 늘 허지 슬허 릴오디 사스몬 엇데 미야커뇨 혼대
	孝25a	새 즘칭이 주그며 플와 나모웨 것들더니 왕송의 바튼 곧 아니 <u>후야브리</u> 니라
	孝31a	밤낫 겨티 이셔 모기 놀이며 식어미 술히 서거 귀더기 나거늘 <u>썬라 브리</u> 니 다시 아니 나더니
	忠8b	스재 다시곰 달애야 인썬힐 모매 초이거늘 <u>미려 브리</u> 고 아니 바든대 스재 공송의 두 아들과 데즈돌드려 닐오디
	忠13	남진이 멀리 간 주를 헤아려 보고 관원손디 실로 고후니 즉제 <u>주겨 브리</u> 니라
	忠21b	방에 7장 구짓고 옷 밧고 곳갈 <u>뽕터브리</u> 고 어셔 죽거지라커늘
	忠28a	물 소 주겨 군스를 이바드며 또 집과 사흔 거슬 브레 <u>소라 브리</u> 고 미일 피나게 싸롬후니
	烈10a	법이 일덩흔 형벌이 이셔 사롬 줄 업스니 그디 7마니 도망후야 가라 후고 갈 <u>벗겨 브리</u> 고 량식과 철낭을 빠 주고 다숫설 머근 아들 맛져 보내오
	烈10a	남진이 머리 간 주를 헤아려 보고 관원손디 실로 고후니 즉제 <u>주겨 브리</u> 니라...
	烈25a	흔 군시 갈로 윈폴힐 티니 더욱 굴티 아니커늘 또 올흔폴 베 튜디 구지조몰 그치디 아니커늘 모든 사르미 뇨가출 <u>벗썬 브리</u> 고 가니 이튼나래 주그니라
	烈30b	왕이 후에 소긴 줄 아루시고 하 노후샤 도미를 거죇 죄로 두 눈조이 <u>후야 브리</u> 고 비에 연저 트레 퍽워 브리고 겨지블 드려다가 구퍽여 어루려 커시늘
	烈30b	왕이 후에 소긴 줄 아루시고 하 노후샤 도미를 거죇 죄로 두 눈조이 후야 브리고 비에 연저 트레 <u>퍽워 브리</u> 고 겨지블 드려다가 구퍽여 어루려 커시늘
翻譯小學	6:3a	이 시저레는 學問을 講論 아니후시 남진 겨지비 아히 퍽브터 곧 교만후며 게을어 어딘 성을 <u>후여브려</u> ...
	6:17b	柳玼이 일즉 글워를 밍 7라 그 子弟를 경계후야 7로디 일후를 <u>후야브리</u> 며 모물 해후며 ...
	7:12b	그디는 풍속을 <u>허려 브리</u> 는 사르미라 길우디 몰힐 거시라 후고
	8:5a	明道 先生이 니르사디 성현의 일천 마리며 일만 마리 다몬 사롬으로 후마 <u>노화 브렸</u> 는 모수를 가져다가...

	8:6b	상례 사르미 무수미 잠깐이나 노하 브리 면...
	8:22b	넛재는 물읷 사르미 거슬 비러다가 히여브리 며 도로 보내디 아니호미 올티 아니하니라
	8:23a	다숫재는 물읷 음식 머고매 굴히여 브리 며 머그며 호미 올티 아니하니라
	8:39b	或 꺼며 셔안의 흐러 이시며 칙을 권권이 흐러 브려 만히 아히며 종의 더러이미 도이며
	8:39b	브름 비며 벌어지며 쥐의 호여브류 미 두외면 진실로 덕을 더러유미니...
	9:7a	엇디 저문 아히들호로 아롬뎛 飮食을 몬드라 먹게 하야 가문 썸을 히려브리 느뇨 하니
	9:25a	王祥이 옷 바사 브리 고 어름 뿌고 어두려 하더니
	9:48b	高允이 물러 와 사롬드려 날오디 내 太子 ㄱ루치사물 받좁와 하디 아니호몬 翟黑子를 지여 브릴 가 제해니라
	10:34b	아히 시절브터 얼우니 금은이어나 빗난 오슬 모매 니퍼든 문득 붓쓰려 내여 브리 다니
小學諺解	1:2a	物과 欲이 서루 ㄱ리여 그 옷들을 물혀려브려 이해하며 브리기를 편안히 너기느니라
	2:77b	만일 님금 신하의 義와 아비 아들이 親호와 남진 겨집의 굴히움은 곧 날로 切磋 하야 브리 디 아닐디니라
	3:9b	曲禮에 굴오디 기우려 듣디 말며 워여 디답디 말며 음사히 보디 말며 게을어 프려브리 디 말며 돈놈을 거만히 말며 섬을 칙드디디 말며 ...
	4:18b	父母ㅣ올와 나히시니 ㅈ식이 올와 도라개사 ㅁ히 효되라 니를 거시니 그 얼굴을 호야브리 디 아니며 ...
	4:22a	宣이 도히 너겨 비호디 能히 묻히며 宣이 夫子의 朝廷에 겨삼을 보니 식식히 아래를 臨히샤디 호야브리 디 아니히실시
	4:51a	能흔 이는 福으로써 치고 能티 묻흔 이는 호여브려 써 禍를 얻느니라
	5:2b	이제 세상에 勳문을 강논티 아니하야 스나히며 간나히 아힌 제분터 곧 교만히며 게을어 히야브려 ㅈ람애 니르려 더욱 강팍히느니
	5:16a	柳玘이 일즉 글을 지어 그 子弟를 경계하야 굴오디 일흠을 호야브리 며 몸을 해히며 선세를 슈육히며 ...
	5:17a	그 둘재는 선비 일을 아디 묻히며 넷 도리를 깃거 아니하야 넷 經을 아득호디 붓그리디 아니히고 當世를 의론하야 특을 프려브려
	5:17b	베퍼 내여 브정히고 사특히 디 줍기여 젓듯 하야 德義를 슬워호여 브리 면 의관을 헛갓 둔돌 쯡놈과 엇디 다르리오
	5:19a	子孫이 모딜며 경솔히며 사치히며 오만흠으로 말미암아 써 업터 떠려브리 디 아니리 업느니
	5:19a	일워 세움애 어려움은 하늘애 올움 곧고 업터 떠려브림 애 쉬움은 털럭 스롬 곧디라 날오건댄 무음이 알푸니 너희 맛당히 ㅼ의 사길디니라
	5:45b	何曾이 籍을 文帝의 안즌 디셔 당면하야 질정하야 굴오디 그디는 풍속을 호야브리 는 사람이라 ㅁ히 길우디 묻힐 거시라
	5:87a	伊川先生이 表記에 君子ㅣ식식히고 공경히면 날로 건강히고 편안히고 펴 브리 면 날로 게으른다 하느 말을 ㄱ장 도히 너기더시니
	5:87a	상네 사람이 뜰이 잠만 노하 펴 브리 면 날로 허탕흠애 나아가고 스스로 거두 잡으면 날로 規矩에 나아가느니라
	5:98a	學者ㅣ모로미 몬져 이런 것들힐 덜터 브리 고 상네 스스로 격녀하야 니르와대야 문득 떠러담애 니르디 아니히리라
	5:99b	만일 죽은 날애 히여곰 창애 남은 곡석이 이시며 庫애 남은 지름이 잇째 하야 써 陛下를 저브리 디 아니호리라 하더니
	5:101b	넛재는 물읷 사롬의 거슬 비롬애 ㅁ히 히여브리 며 도로 보내디 아니티 아닐 거시며
	5:102a	다숫재는 물읷 飮食 먹음애 ㅁ히 굴히야 브리 며 取히디 아닐 거시며
	5:113a	글 비호는 공부는 모롬이 이에 일과 하느 법을 嚴히 세고 ㅁ히 하루도 노하 프려브리 디 몰힐 거시니
	5:117b	쯡돌히 더러인 배여 브름과 비와 버러지와 쥐의 호여브린 배 되느니
	6:6b	申國夫人드려 날여 굴오디 엇디 ㅁ히 점은 아히들로 히여곰 스스로이 飮食을 몬드라 家法을 히려 브리 게 하리오 하니 그 嚴흠이 이러툃 하더라

	6:44b	允이 물러와 사롬드러 닐러 곁오디 내 東宮의 ㄱㄹ처 인도홈을 받잡디 아니홈은 翟黑子를 저브릴가 저헨 연괴나라
	6:132a	절 먹는 아히 도여실 적브터 얼운이 金銀과 빗난 도흔 오스로써 더어든 문득 붓그려 내여 브리다니 나히 스물힌 제 급데예 모텀하야
七大萬法	11b	짜홀 딛고 니러나며 ㅈ 브리고 가 설 디 업솜 곤하야
順川金氏諺簡	6:3	이제란 원간 거집종으란 내브려 두어든 자내 브리소.
	12:7	지그미 일 바돔 자바 보다니마 저년 즈흔 것 보미 세 필 나하셔 다 그즈 저 ㅈ 브리고 옷돌도 놀그니 다 업시코 새 것돌 당시 ㅈ돌 것 업고 하니
	96:3	사르물 다 ㅈ 브리고라.
	98:12	녀는 이룬 사르미 ㄱ 가시니 아니○ 수를 ㅈ 브리고 업서 민망하니 ㅈ ㅈ돌 보내려코
	109:3	나드론 무흔 디나가디 이리 사르미 아니 오니 나른 유위나 그리 하니 과시미 ㅈ 브릴던돌 제 ㅈ시기가 브리랴마는 이리 아니 오니 내 기드리도 아닌노라.
	164:2	사라 가나 흥정을 하나 아니라마는 곡셔가 공 바든 거샤 다 ㅈ 브리니 내 슈탐하느냐.
	169:3	우리는 두 겨지비 드리고 안즈셔 아조 ㅈ 브리게 잇다가 하눌히 삼겨 어르므로 여를 ㅈ란디만명 아기내도 ㅈ 미쳐 보리려니라.
	172:8	브리는 종도 ㅈ시거나 다 ㅈ 브리고져 호디 미듀기 곁에도 내 ㅈㅈㅈ로 ㅈ하노라.

諺解痘瘡集要	上3a	또 굴오디 슈포과 농포 도드니는 콘물 놀물이 다 적느니 물씩 헌디로 조차 난디라 티독을 프리브려 형역 아니케 하는 방문이라
	上4a	또 달힌 술의 슈비흔 주사 식르 두툼 반만 마라 입 안해 서서 드려 모딘 독기를 프리 브리 면 일싱에 히역슈귀 업느니라
	上18a	심하야 검블근 겁질이 되면 워티흔 증취라 보원탕의 조초 선각 홍화를 가하야 머겨 풀어 브리 고 불서 슈피되었거든
	上39a	또 굴오디 물잇 열을 과굴이 업시 말고 잠깐 프리브리 미 맛당하니 형역이란 거시 열 곳 업스면 부러 나디 몰느니
	上40a	또 굴오디 큰 열이 잇거든 쇼변을 통니하고 자근 열이 잇거든 독기를 프리 브리 라
	上41a	물잇 도드며 부르며 물 돌며 끓길 제 그티 빠디여 니디 아니며 물이 열의여 도디 아니거든 다 슈양탕으로 써 싯기라 형역독기를 프리 브리 는 방문이라
	上41b	또 굴오디 드물면 독이 업고 뵈면 독이 인느니 청낭흔 약을 써 프리 브리 라 비록 스므나몬 복 써도 해롭디 아니하고 눈해 흘근 심이 업느니라
	上42a	또 굴오디 형역기 7장 만히 돌거든 서각 디항탕이나 가미 서각 쇼독음에나 산사조 조초삭 초찰을 가하야 머겨 독기를 프리 브리 라
	上44a	혹 붉근 피 넘더기니 7투야 스아를 분변티 묻흐몬 독기 7장 성헌디니 신공산을 써 프리 브리 라
	上44b	히독탕은 형역 독을 크게 프리 브리 느니 스과 승마 빅사약 감초 서각 슬흐니 산사조 붉근꽃 거문콩 각 네 푼식이를 싸하라 달혀 머기라
	上45b	흑산조는 형역 독기를 프리 브리 느니 7도 돌 제 이를 머기면 문득 사라디고 돌디 아닌느니
	上45b	서각이 형역 독기를 크게 프리 브리 느니 물에 담게 7라 그 즙을 머기라
	下27b	조변씩상환은... 열 낫과 물 두 보오 브어 달혀 물이 무르거든 대극오란 내여 브리 고 대초만 기어 옷범 7티 비빅여 머기라
	下35a	또 굴오디 눈 구석의 고름이 만히 나면 반드시 두 눈이 상하느니 안해 독기를 청낭히 프리 브려 미리 막조를 거시나 쇼독음과 서각 디항탕을 쓰라
	下36a	전등양이 굴오디 형역이 7 더데 지을 제 선무우씨 기름을 그치디 말고 디거 불라 니르험즉 하거든 니르혀 뽀여 브리 라
	下52b	의혹입문의 굴오디 형역 후에 눈에 예막이 나가든 오직 혈기를 사르고 독기를 프리 브리 면 알히기 절로 7곳 예막이 절로 업느니라
	下70b	사할 디나되 업디 아닌느니는 안해 싯흔 열이 인느니 서각디항탕으로 프리 브리 라 7 나머지 또 업느니는 쇼독음으로 내부츠미 마당하니라
諺解胎產集要	12a	빛복의 브티면 저근덧하야 난느니 즉제 시서 브리 라 방지하야 수이 나케 하는 법이라
女訓諺解	下29a	안해는 어딘 아비며 형이 잇고 또 그 어의 7루치을 어더 金魚를 짜해 뽀려 브리 며 金魚는 직돈이라
	下35a	만일 和티 아니미 잇거든 곧 調화하야 順겨 하며 夫主의 怒를 곧 勸하야 프리 브리 고
	下38a	蓋 념澹과 검素 性을 치고 奢치와 華麗호미 德을 하여 브리 느니라
	下39a	하물며 다숫 비치 눈을 하야 브리 느니라 반드시 色을 빼 고이 아닐 거시오
	下45b	네 맛당히 힘을 브즈리니 하야 힘써 닷가 거의 내의 글 밍그라 써 將來를 브라는 뜰을 저브리 디 아니괘다 하노니
東國新續三綱行實圖 孝子圖	1:60b	권거의는 빅천군 사름이라 고려 신우 시저려 거상 제도를 폐하야 브리 고 다 빅일만 남고 벗더니 거의 혼자 삼 년을 녀묘하디 정녀하시니라
	6:46b	임진왜난의 왜적의 잡은 배 되여 그 올흔 손목을 버히다가 등 우희 신주 업업는 줄 보고 도적이 어덜이 너겨 브리 니라
東國新續三綱行實圖 三綱忠臣圖	2b	이제 지아비 명을 저브리 고 어마님 사랑을 브리미 가하닝잇싸 혁을 잡고 노티 아니헌대 거진이 7로디
東國新續三綱行實圖 忠臣圖	1:25b	슈민이 혼자 불로하야 날오디 나라를 저브리 고 도적의게 아당 몰홀 거시니
東國新續三綱行實圖 烈女圖	1:89b	현금은 김히부 사름이라 늘싱 비문싱의 겨집이라 지아비 다른 겨집을 도히 너겨 브리 니 현금이 상해 주찬을 7초아 식아비 식어미를 머기더니
	4:81b	도적이 녀기되 이미 주것다 하야 브리 고 가니 마초와 바회를 만나 요형으로 시러곰 사라나니라 금 상도의 정문하시니라
	5:83b	머리 허트러 썩 7투되 빈디 아니하고 다 갓가 브리 고 이통흔을 단팔하던 날과 7티 하고 복이 무초되
	7:87b	내 이제 말지라 만일의 서르 저브리 디 아닐딘대 절로써 스스로 7게 하라 막금이 허락하고 남진이 죽거늘
重刊杜詩諺解	1:33b	나 7내로 栖栖히 돈노매 幽隱을 뜰을 저브리 니 絶跡헌 디로 向하야 가물 感歎하노라
	1:36a	내 장초 眞宰를 罪 주고져 하노니 뜰덴 疊嶂을 갓가 브리 고져 하노라
	1:46a	넛 님그미 그므를 밍 7라 法을 設立하야 生成을 害하도다 푸른 말와미 茂盛티 아니호미 아니언마는 비 점으도록 녀하야 브리 닛다
	1:53b	偏裨를 술와 고기를 적적 그지하야 주고 卒伍 衣와 裳괘 하오지러라 모딘 사르미 올흐며 외요물 몰라 모다 췌하야 길헤 내야 퍼 브리 니라

1:56a	罪 무로매 兵卒이 形勢 하니 사흙 이긋여 凱歌호매 어딜며 사오나오미 懸隔하리로다 드트를 다 쓰러 브료리 라 期約하느니
2:7b	모딘 여흐레 었디 顏色을 變티 아니 하리오 노피 누워서 저근 모을 저브료 라
2:23a	萬里에 고기와 龍 두리어 굿불오 三更에 새와 증싱과 놀라 우늦다 시서 브려 몃겻 헤툼을 貪하느니 시르를 이운 나모 것글가 호매 브티노라
2:24b	몃겨른 足히 紗帽를 찍우리로소니 거프른 모로매 어느누근 이슬 갓가 브롤 디로다
2:38a	좁좁하야서 生業 일흔 무를 스랑하며 困하야 머리 가 防戍하느니 軍卒을 싱각호니 시름 그티 終南山과 7특니 瀕洞하야 주어 브리 디 몬하리로다
2:47a	百萬 사르미 현 城을 티니 이 괴유를 獻하옵고 계우르란 나르디 아니 하더라 組練을 브료물 훈7티 하고 자맛 짜 앓노라 하야 온 사르물 저브리 니라
2:52b	南 녀리 가 圖謀하야 구름과 물와를 거더 브리고 北 녀크로 올워러 하눌홀 이리로다
2:57a	더운 짜햇 더운 병 드리로물 마디 몬호니 돈노매 저푸를 떠러 브려 리아 虎狼 中原을 엿보느니 었디 시러곰 디나왔논 짜해 머물리오
2:60b	그디는 燈燭이 퍼쇼물 보라 곧 느는 나비로 하여 密近게 하느니라 八極 밧기 精神을 떠 브려 구브며 올워러보니 다 蕭瑟하도다
2:64a	온 가짓 헤아료므로 便安하며 어려우를 보니 네 어딘 사르미 헤요미 分明하도다 이 理를 거의 可히 녀비하야 모으매 가져 브리 디 아니호물 期約하노라
3:2b	물 타 님금 受辱하사물 놀라고 갈을 싸혀 나히 늘구를 떠러 브리 노라
3:3b	堯人 封하던 넷 民俗이 이제 疑心되도다 기리 嗟吁하야서 北寇를 두워터 브리 고져 하고 현 디워 브라서
3:4a	西夷를 거더 브리 고져 하노라 구퓌어 玄圃에 뵈옵디 못하다 超然히 具次엿 어딘 사르물 待接하시고라...
3:15a	畚 辱人 가온딧 화를 疑惑호니 곳갈 우희 빈허는 머뜨러 브렛 도다
3:45a	滄溟에 늘구매 와 돈니노니 朱紱로 平生을 저브리 과라 어으르매 새 수플로 가매 놀개 가비야오물 올워러 브러보노라
3:48b	하마 얼구렛 띠를 떠러 브리 니 眞實로 爛熳호미 기푸모로 하에니라 글 지우매 새 굵勾 安穩하니 스식으로 기리 임논 고돌 아디 몬하노라
3:60b	關中엿 죠고맛 아히 紀綱을 허려 브리 며 張后 즐기디 아니커든 님그미 爲하야 驚忙하더시니라
3:60b	이제 니르러 이젯 님그미 오히려 亂을 싸혀 브려 모으물 77며 스랑호물 글탈하 四方을 기우시느니라
3:71b	蜀人 사르미 자랑호디 一千 히를 물 넘썬미 張儀樓에 갓갑디 아니하니라 하느다 올히 灌口에 戶口를 하야 브리 니
4:13a	므스그라 나라히 기우려 와 드나드로매 金闕이 어듭게 하노노 中原에 모라 더러 브릴 거시 이실시 츠마 이거슬 쓰시느니라
4:13b	녀름 짓는 지비 안직 저허하느니 보리를 갓고로 지게 하며 쫘나모 가질 것거 브리 놋다
4:24b	요스이에 潼關을 安靜하와 蜂蟻를 쓰러 브리 시니라
5:4a	뉘 닐오디 모딜에 소는 거슬 기터 두리라 하리오 하마 이 비뉘흔 거슬 시서 브리 놋다
5:8a	모를 씹 내야 宮闕을 收復하고 城에 盜賊의 城壕를 갓가 브리 도다 賞功하사매 당당이 杖杜를 브르리로소니 도라오사물 이스랏 薦蒿 저글 미츠시리로다
5:20a	願하든 兵事 불 곤하요를 警戒하사 恩惠를 四海에 더오사물 기피 하쇼서 蕭關과 隴水에 官軍이 드니 青海와 黃河에 7갓 구루를 거더 브리 도다
5:26a	父母人 恩惠를 그쳐 브리 고 소리를 숨끼고 干戈를 메오 녀노라
5:33a	내 모의 貴하요몬 足히 議論홀디 아니니라 물 들어 돈니건디 스물 히니 明主人 恩惠를 저브릴 가 전노라...
5:37a	스랑흔던 네 茫增이 玉마를 쓰러 브리 니 吳國人 兵馬로 하여 흰 오솔 님디 문게 홀디니라 어득어득기 閶闔에 妖怪로인 氣運이 다티엿느니
5:40a	綿州人 副使 누른 오솔 니버늘 우리 花卿이 쓰러 브려 即日에 卞히오니라 子璋의 머리째에 피 무드닐 소노로 지바 崔大夫의 알피 더디니라
5:44b	저근 材官이 涇渭에 屯守하엿느니 將軍들흔 시름 도윈 나출 허려 브리 디 말라
6:20b	언제야 世俗엿 띠를 떠러 브리 고 흰출히 바르래 비 타 가려노
6:24b	指揮하야 率士를 便安케 하시고 시서 브려 큰 불무를 撫定하시니라 壯士이 陵邑을 슬흐며 幽人이 鼎湖에 절하노다...
6:42a	八月에 7웠 하눌히 놓고 브리미 怒하야 우르느니 내 집 우헿 세 불 뛰를 거더 브리 는다
6:42b	실의 노는 아히 아니 환히 누워 안홀 불와 의여 브리 는다 臥床마다 지비 시여 모른 짜히 업스니 빗바리 삼낫 곤하야 글디 아니하느다
6:45b	東嶽 7애 萬一面勢를 보아 지으면 戶牖 기리 어루 便安하리로다 스랑하야 앓교미 하마 여섯 히러니 이 낫 새배 즘은 나출 변혀 브리 노라
7:6a	市橋에는 그윗 버드리 7늘오 7렸 길헿 미헿 梅花 곳답도다 실에를 바라 書帙을 7즈기 하고 슨 거슬 보아 藥人 노무출 더러 브리 노라
7:18b	79라기를 더러 브리 니 벳 나지 붉도다
7:24b	서로 對하야 이슈니 열 丈 만흔 龍이 므드시 몃 뉘누릴 드워터 떠브리 는다
7:28a	그딧 거긔 불곤 義를 저브리 니 슬허호니 머리 쯔 세도다 되 反하야 干戈 가져 돈노므로브터 天下엿 學士들이 쯔 몃겻 돈듯 하노다
7:31b	프른 뵈해 學士이 銀魚를 스라 브리 고 흰 물 타 도로 들어와 모미 바희 아래서 사노다
8:30b	굵 출흔 三峽 므를 갓고로 홀리리오 불 陣은 하올로 스른 사르미 軍을 쓰러 브리 리로다 이제 나히 아아라 열여닐구비니 君門에 와 射策하야 第一을 期望하노다
8:36a	속절업시 烏鵲이 깃부를 傳하노다 기피 鵲鵲시 詩를 저브리 과라 사를 理는 어느 노치리오 시름 곧곳 쯔 歲時로 잇도다

8:47b	萬一에 가 서르 일허브료를 免홀덴 불 나를 구턱여 더되다 ㅎ야 말리아 갈 저긔 노니는 소닐 依憑ㅎ야 브터 보내요니 오늘 오몬 짚 글워를 브튜를 爲ㅎ예로라
8:68a	가난흔 짚 썩리 오래 羅襦裘을 어더 뒀다니 羅襦를 썩 베퍼 님지 아니ㅎ고 그디를 相對ㅎ야서 紅粧을 시서 브리노라
9:2b	계집과 子息과는 썩 엇던 사름과 丹砂 먹자 ㅎ던 알뻗 許諾을 저브리과라
9:6b	말숨과 우우를 넌즈시 ㅎ디 호라 道術에 일즉 ㅼ들 머물오니 先生이 일 昏蒙호를 터브리니라
9:18b	큰 구스리 허물와 무든 거슬 바사 브린 듯고 힌 ㄷ리 虛空을 當ㅎ앤는 듯도다
9:18b	나는 南과 北과에 돈니는 사르미로소니 ㅁ으매 거튼 거슬 미야 브료물 몬ㅎ야노라
9:19b	金 빈허로 눈즈이에 ㄱ리썩 거슬 거더 브리면 비디 온 碑碣이라와 重ㅎ리라
9:31b	오래 野客이 ㄷ외야서 幽深흔 디 초조물 니기 ㅎ노니 何顚을 仔細히 비화 興心 저브료물 免호라 ㅎ 번 重疊ㅎ고...
9:34a	뉘 能히 金印을 글여 브리고 瀟灑히 便宜히 坐禪호를 다몬 ㅎ리오
10:2b	센 머리에 幕府에 와 돈노니 ㅅ생앳 ㅁ음 저브료물 기피 아노라 病을 견디여 물곤 새배 안자쇼니 온 그른 이른 보물 슬허 짓도다
10:7b	마치 ㄸ 브르미 서르 欺弄ㅎ는 듯ㅎ야 바미 두어 가짓 고줄 부러 것거 브리는다
10:9a	아츰미 오매 ㅼ들 니르왈디 아니ㅎ다 ㅎ노니오 미친 브르미 안직 긴 가지를 돌이야 그쳐 브리는다
10:20b	더 干戈멘 軍士ㅣ 히 ㄸ듯록 邊疆을 防守ㅎ야쇼물 念ㅎ노라 어느 말미로 ㅎ 번 시서 브리려로 더위를 자바 서르 브라놋다
10:26b	저른 젓 자취 주모 드므니 것거 즐기던 이리 일즉 문득 디나가도다 風塵스 ㄱ이 도트랏 디포니 늙고 더러우를 버히며 ㅼ러브료미 어렵도다
11:39b	오늘 나조흔 엇던 나조코 히 디나가노니 更點이 길오 燭사브리 불 ㄱ니 저브리미 ㅁ티 아니ㅎ도다
11:47a	故國엿 風雲스 氣運이오 高堂엔 사호맷 드트리로다 되삿기 님금 恩澤을 저브리니 슬프다 녀히 太平흔 젓 사르미러니라
11:52b	江湖애 브름 물겨리 하니 비를 일흘가 젓노라 ㅎ고 門의 나 센 머리를 글노니 ㅅ생앳 ㅼ들 저브린 듯ㅎ도다
12:33b	雪嶺엔 ㄱ을힛 防戍를 썰리 ㅎ고 繩橋엔 사화 이긔오물 더되ㅎ놋다 西스 녀 되는 甥과 舅앗 禮니 구턱여 息私를 저브롤지 아니니라 ...
13:4a	센 머리를 ㅼ러 브릴 黃精이 잇노니 그디는 다룬 ㅼ 氷雪 ㄸ흔 양즈를 보라 西岳ㅣ 노파 구죽흔 ㅅ히 尊ㅎ니 여러 ㅁ부리 버려셔시니 兒孫이 곧도다
13:8a	侵陵ㅎ야 ㅁ 門을 허러브리고 두르힐휘 地軸을 ㅁ혀 브리놋다
13:8a	侵陵ㅎ야 ㅁ 門을 허러브리고 두르힐휘 地軸을 ㅁ혀 브리놋다
13:24a	楚俗ㅣ 이 ㅁ레 비를 비러 비오나든 必沈牛ㅎ야 報答ㅎ노니라 이 돌히 ㄸ 밧기 물만 내와드면 비를 히야 브리노니라
13:24a	쇼를 ㄷ마 雲雨를 報答ㅎ노니 물 곧거든 비 돈노를 警戒ㅎ노니라 하닐 ㅼ든 ㅅ터 브료물 뒀노니 鬼神의 ㅁ ㄱ론 功은 아오라호매 니엇도다
13:30b	썩 이 사름 업슨 ㅅ히로소니 프영기 ㅁ여 브롤 잇부를 사오나온 모물 ㅁ던히 너규리라
13:34a	漢庭엿 우루를 기리 저브리고 湘水엿 녀슬 아오라히 슬노라 기픈 겨오레 江劍에 나그네 ㄷ외요니 사를 이룰 조차 田園을 뒀노라
14:30a	물곤 ㄱ흠물 브라오니 히 ㄸ노니 ㄸ고 溫和호매 나그네 시르를 ㅎ터 브리노라
14:38b	네 수프레 도라가물 得디 못호니 ㅁㅅ가온 ㅁ으물 미리 브리노라 고돌파 그를 짓노라
15:4a	거른 가츠로 ㅁ ㄱ론 ㅁ를 스저 지여셔 나모 지며 ㅁ쇼 머기는 놀앳 소리를 즐겨 듯고 아히로 흰히 등어리 글키고 내 머리 우틋 빈허를 바사 브료리라
15:18a	柏公ㅣ 夔國을 鎮定ㅎ시니 留滯흔 이룰 이 ㅎ 번 ㅼ러 브리도다
16:1b	어느 ㄷ리로 네 方便으로 나를 외오 허다가 ㅁㅅ삼게 ㅎ가노 離群 索居호매 늘거 와 서르 맛보니 昏蒙호를 包容ㅎ야서 터브료물 것거ㅎ노라
16:6a	나를 와 만나니 ㅼ ㅁ으미 親ㅎ더라 幽棲홀 ㅼ들 저브리디 아니ㅎ야 寵辱앳 모물 兼全ㅎ도다
16:9a	술읳 바회를 ㅎ갓 ㅎ마 ㅼ홀 썩이로다 터 ㄸ가든 집 지우를 지즈루 이저브릴가 앳기노라
16:55a	丹青흔 ㅅ해 날워여 네 도라보샤매 조출 주를 아노라 大常ㅣ 樓 지운 ㅁ트 소리 수으워리노니 兵事를 무려 盜賊을 갓가 브료리라 下牢로 건나놋다
16:59b	내 늘거 病을 가졌노니 지비 가난ㅎ야 더워 ㅁ는 듯흔 디 누웠노라 슬 너호로매 터 브료물 ㄸ가ㅎ다니 녀를 依賴ㅎ야 ㅼ를 돌히 너기노라
16:59b	物이 微賤ㅎ야 世人이 ㄷ되 브리노니 義 잇건마는 뉘 徵求ㅎ야 보물 즐겨 ㅎ리오 세 히를 물곤 ㄱ을히 니르거늘 敢히 얼거 ㄱ초물 闕ㅎ디 아니ㅎ노라
16:64b	鳳凰과 麒麟과는 어딴 잇는고 우리 무른 엇데 이 즐글을 ㄱ장 ㅎ리오 하닐 내산 거슬 모덜오 그쳐 브료미 聖人스 슬는 배니라
16:67b	이 무른 엇데 ㄱ을히 업스리오 썩 춘 이스를 니버 브리이리라 도로혀 ㅅ해셔 나미 ㅼ르니 너추러 門과 ㅼ왜 ㅎ야디놋다
16:68a	ㅼ리며 ㄱ리와 芝蘭을 ㅎ야브리노니 한 가시남기 盛ㅎ도다
16:69a	苦苴와 馬齒애 ㄸ흔 菜蔬를 ㄱ리오미ㅼ녀 小人이 君子를 아쳐러ㅎ야 브료물 슬노니
16:72b	외와 ㅅ긔 수이에 더버리니 橘奴의 자취와 이젓ㅎ도다
16:74b	ㄸ긔 서비 ㅎ마 ㅼ리디니 ㅁ ㅁ피 ㄱ장 서의ㅎ도다 幸혀 힌 고지 ㅁ조물 ㅁ츠니 ㅅ땃 프른 너출 거더 브료물 말리오
17:17b	세엿 사르미 스랑ㅎ디 도로 ㅎ야브리노니 ㅁ스름 지킴 奇異호를 ㅼ리오

17:30a	미은 氣運은 오히려 戰場에 놀카이 돈노물 스랑호는다 밧모기 더르고 구비 노파 쇠를 붉는 듯하니 交河에 몇 버늘 層層인 어르물 불와 떠혀 브리니오
17:33a	몹스를 그물로 쁘려 잡듯하야 글워레 브툼 무리 하니 意氣 盜賊을 모라 더러 브료매 이실시 金帛을 내야 사놋다
18:9a	쏘 솔와 대왜 幽深호를 알리로다 뵤여 브료몬 關티 몹홀 거시니 모딘 것 아쳐로물 眞實로 怨讐7티 호노라
18:14a	고자 뒷논 저근 올흔 본來 쏘 막줄오미 잇더니 모츠매 다덜어 호야 브리니 즘은 니픽 이우려 누려호물 시러곰 붓그러리아 구턱여 넷 수프렛 님자히로라 호야리아
19:4a	一代에서 놀랄 麒麟을 어드시도다 江河ㅣ 흐리니를 시서 브리고 소티 새로윈 거슬 調和호는다
19:9a	모오미 어위커 性的 疎拙호를 두시고 떠려 브려 길히 窮困호를 스랑호시놋다
19:20b	푸메 드니를 본來 崑山엿 玉 이론 고돌 민노라 潭州엿 온 섰수를 째혀 브료니
19:27b	프른 뫼헤 슝스로 혼 내힌 짜히로소니 城郭이 시르를 시서 브리도다
19:31a	나는 이제 목숨 길며 덜우를 므던히 너겨 브리노니 엿데 시러곰 命의 屯蹇호를 슬흐리오
20:2b	畝獵홀 사르몬 防戍엿 브를 불어놀 미헛 지빈 뫼헛 므를 혀호는다 불려 니로매 머리 글구를 썰리 호고 더위자바 네매 몇 격지를 들워 브리가노
20:3b	모오물 여러 더운 病을 몰오 누늘 불기 떠 雲煙을 쁘려 브리노라 노푼 이바디하야 諸侯ㅣ 禮接호느니 고온 사르몬 노푼 순 알피 잇도다
20:5a	거른 머릿 百姓이 지즈로 얹미이니라 슬허호시는 絲綸이 切호니 어즈라운 法승을 더러 브리시도다
20:12b	들굴 우헛 張騫이 곧도다 떠려 브리면 구루미 어느 이시리오 머므려 이슈매 히 머므디 아니 호는다
20:14a	물 기시 드러운 모미 殘弱호를 므던히 너기노라 金甌혀로 혼갓 누네 썬 거슬 거더 브릴 썬니로다
20:21b	武太后ㅣ 朝廷을 當호야 嚴肅호니 한 지직 자죄 니어 오르니라 프른 빈 자해 魍魎오란 그리터 브리고 丹極에 鯢鰲돌히 노라 오르더라
20:23a	터럭 곧 만흔 디도 슝스로 자랑호고져 호는다 모오미 흐웁호니 飛動物 붉는 듯고 사화 이기여 侵凌홀 거슬 시서 브리도다
20:25a	썩를 調鍊호야 情性을 調和하고 兵甲을 퍼 棘矜을 이어 브리노라
20:25b	政術란 사오나오물 돌히 너기고 글 호기란 그디의 모오매 연저슈를 붓그러노라 썩들 퍼 짓는 그른 魯侯를 기리고 스랑호는 수리 澠水 7투닐 버혀 브리노라
20:30b	버릇논 나라해 兵戈ㅣ 어두우니 이젿 님굼 德教ㅣ 淳厚호시도다 猊유 더러 브료물 듣고져 조오로이 너기고 麒麟에 그리요물 짓고져 호디 말라
20:47b	滄洲에 갈 願을 저 브료니 뉘 닐오디 늘거서 불로물 보리라 호느노
20:51b	몹스 버드론 본디로 幽僻하고 村엿 고즌 쁘려 브리디 아니 호노라
20:53a	雲臺에 形像을 그루는 다 妖氛 쁘려 브료물 爲호애니라
21:22b	江閣에서 손을 마자 물 보내야 마쵸마 許홀시 午時도록 니려 안자쇼를 하눌히 불굴 적브터 호라 썬 구루미 프른 붉비출 저 브리디 아니 하니
21:22b	7는 빈 돌 엿데 白帝城을 저 브리리오 몸이 곳 스이로 디나갈시
21:41b	엿데 喪亂入 後를 因호야 곧 주그며 사로미 호호미 잇거노 늘겨 브료모란 불곤 거우로애 아노니
22:3b	흐린 수리 만드기 누네 잇느니 다 醉호야 모오물 펴노라 불거 하니는 집 썩헛 고지오 퍼려 브렛느닌 담 모헛 프리로다
22:31a	天子ㅣ 涼州를 시름호실시 길홀 嚴急히 호야 가물 모로매 일 호는다 니건 7울히 몹 되 反호니 시러곰 번게 쁘려 브리듯호물 마디 묻호리라
22:44b	秦王은 亂을 싸혀 브리시는 姿質 이시니 혼 갈 가지고 兵符를 總領호시니라
22:44b	汾晉으로 豐沛를 사르니 모딘 隋를 모츠매 시서 브리시니라 큰 臣下는 廟 지어 享食홀디어늘 後엿 祭祀ㅣ 엿데 드물며 거츠노
23:3b	어느 저긔 節鉞을 도라와 힘써 攬槍을 쁘려 브릴고 쏘 곤호 궁권 三千土ㅣ 살오 구름 7리엔 七十 城을 降服호니라
24:8b	큰 功勳ㅣ 소티 사겻는 게 뻗도다 玉燭이 調和호를 올워려 스랑호느니 뉘 一定호야 靑萍갈홀 자 브려노
24:17a	큰 지빅 노푼 물물 아온 듯호며 긴 城에 기튼 堞을 쁘려 브린 듯도다
24:28a	집 논화주며 驂馬 밧겨주는 스이에 感激호야 거리치디 묻호논가 스랑호더라 모다서 놉 주는 아롭다오물 보내오 해 갈마 둔 논 더러우를 떠려 브리도다
24:31a	글 짓는 例 우리 짓 그레 미츠니 모오미 흰출호야 7린 거슬 쁘려 브리도다
24:36a	오히려 漳水에 病을 버므려 蒿里에 餞送호물 기리 저 브리과라 鷄鵒ㅣ 魯國사 門의 니르려 와 鍾鼓 두드려 이반논 즐거우물 아디 묻호니라
24:41b	썩에 놀래 넷 明哲호 사르물 저호니 거른 머리 改變호야 사름 잇는 짜홀 저 브릴가 호더라
24:43b	몹겔 곧 혼 어딘 史臣의 부든 大庾嶺에 그쳐 브리디 마를디어다 저주웁뻑 님굼 禮數ㅣ 阻隔호야 지은 그를 올이오와 請호미 어렵도다
24:49a	니건 히에 朝謁호미 그츠니 다룬 나래 쁘려 브료물 그르호도다
24:60a	嫌疑를 떠려 브려 사괴오미 오라더니 슬허 志力을 보내노라 時俗오란 綿谷ㅣ 다룬 디 브뤼고 나그내로 雪山ㅣ 외로외니를 對호얏노라
25:9b	네 디나가며 이제 오매 다뫼 혼뻑 곧트니 人生에 萬事ㅣ 잇디 아니호 거시 업도다 요주웁 누넛 가시 아아 브리드시 그 사웁을 병으리와드니
25:13a	至極호 精誠ㅣ 웃드민 고돌 棼히 아드기 모로놋다 머리 올마 가매 뉘 터 째 브리리오
25:14b	노푼 무를 썩물 티디 말며 긴 고기를 비늘 호야브리디 말라

	25:38b	官職을 固守호미 貴호고 能히 時節 조차가물 스랑호디 아니호니라 내 氣運殘弱호니는 正直호물 받드시 <u>이저</u> 브리디 아니호리라
	25:49b	그디는 西漢入 杜陵엿 늘그니를 보디 아니호는다 글호는 집과 부디 양조를 그디 아철디 아니홀시 글 지이와 글 스기로 지빅 올라 그디를 爲호야 <u>쓰러</u> 브리노라
	25:54b	皇孫ㅣ 오히려 일즉 蓮勺에 困히 돈니며 衛莊ㅣ 貶黜호를 보아 그 바를 <u>히야</u> 브리니라
老乞大諺解	上4a	그 免帖 우희 세 번 마즈를 면호라 호여 쓰고 스승이 우희 도셔 두느니라 호다가 다시 사슬 빼혀 외오디 몬호여도 免帖 내여 <u>해여</u> 브리고
	上17b	이러면 내 빌라 가마 이 작도논 이 우리 권당의 집 거시니 데 즐기디 아니커늘 내 미이 닐너 비러오니 브롬놀 곳티 쾌호니 네 조심호여 쓰고 노미 것 <u>해여</u> 브리디 몰라
	上22a	호다가 몬져 콩을 주면 그 물이 다만 콩만 곱히여 먹고 땀플다가 다 <u>해터</u> 브리느니라
	下18a	이러면 네 이 물 글월를 내여다가 더들드려 무려 처엄 덩헌 갑새져 닛 냥 은을 더러내여 머르는 갑새 헤고 쓸월 <u>믹여</u> 브리라
	下43a	우리 세상 사름이 男兒ㅣ 되여 돈닐썬대 내 조상 명성을 <u>호여</u> 브리디 말고
	下44b	네 엇디 슬피디 못호는다 호면 무음을 어리워 가지고셔 디답호여 니로디 써도 내 천을 쓰고 <u>히여</u> 브려도 내 짓 거슬 히여브리느니 네게 므슴 일이 브트뇨
	下44b	네 엇디 슬피디 못호는다 호면 무음을 어리워 가지고셔 디답호여 니로디 써도 내 천을 쓰고 <u>히여</u> 브려도 내 짓 거슬 <u>히여</u> 브리느니 네게 므슴 일이 브트뇨

伍倫全備諺解	1:3a	오늘 天氣 道흔디라 美景良辰을 <u>저버리</u> 디 말려 호느니
	1:51a	술은 이 小人이 小鍾으로 셋과大碗으로 반을 먹느이다 네 祖宗을 辱머기며 <u>히여 버리</u> 고 네 家世를 敗壞 호얏는디라
	2:25b	嬢아 엇디 嬢을 <u>버혀버리</u> 리오 내 가디 못호리로소이다 내 널로하여 글을 넘혀 므섯호려 호더뇨
	2:41a	…輕易히 藥을 쓰며 사름의 危極함을 타 사름의 錢鈔를 索호여 써 사름의 性命을 <u>히여버림</u> 에 날위니
	2:46a	내 父母를 위호여 더의 나흔 눈을 <u>호여 버려</u> 시니
	3:3a	이런 사름은 우호로 國恩을 <u>저버리</u> 고 아리로 비흔 바를 저버리니 天地鬼神도 더를 용납디 아니호리라
	3:3a	이런 사름은 우호로 國恩을 저버리고 아리로 비흔 바를 <u>저버리</u> 니 天地鬼神도 더를 용납디 아니호리라
	3:38b	一朝에 깃비 兒女債를 갹호니 百年에 守孀心을 <u>저버리</u> 디 아니호엿소다
	5:1b	엇디 우호로 우리 님금을 <u>저버리</u> 며 아리로 비흔 바를 저버림이 아니리오
	5:1b	엇디 우호로 우리 님금을 저버리며 아리로 비흔 바를 <u>저버림</u> 이 아니리오
	7:36a	우리 弟兄이 우리 母親을 <u>저버림</u> 이 만호니 아디 못게라 엇디 써 더를 報答호리오
	7:37b	이러듯한 사름은 하늘도 더를 <u>저버리</u> 디 아니 호시리라
兵學指南	4a	파디오 소리 부로몬 이논 일조로 큰 디를 <u>피 버리</u> 과다 호미니라
明義錄諺解	上41a	이제 엇지 내 몸의 친히 아니호리오 텃지 숙성호야 날을 섬기기를 지성으로 하니 결단코 나의 버라논 바를 <u>저버리</u> 지 아니호리니
	下43b	이제 혼 일은 그 아비를 <u>저버리</u> 지 존현각일긔 아니호여시니 오회라 모년의 혼 직신을 보앗노라
	下49a	반드시 우리를 죽이고져 하니 우리 무어슬 동궁의게 <u>저버림</u> 이 잇느뇨 호더라 하니
	下62a	내 벼슬이 이곳고 내 권이 이곳하니 후겸의 무리곳하니는 별노 즈뢰홀 도리 업스니 출하리 <u>써혀버리</u> 고
改修捷解新語	10下:22b	本意을 <u>저버려</u> 습니 아모려나 보옵는 새 인수를 萬萬히 호을 거시니 잠 다 못호느이다
五倫行實圖	孝02a	겨울에 그 아비 손으로 하여곰 술위를 몰 시 치워 물혀를 <u>노하 버린</u> 디 아비 슬퍼 알고 후처를 내티고져 호거늘
	孝31a	바로 범의게 두라드러 목을 즈르 쥔대 범이 <u>노하버리</u> 니 아비 사라난디라 원이 듯고 지물과 곡식을 주고 정문호니라
	忠27b	내 환공의 듯터온 은혜를 넘어시니 맛당이 죽으므로 갑흘디라 내 환공을 <u>저버리</u> 디 아니호든 곳 환공의 나라를 저버리디 아님 ㄱ특니라 호고
	忠27b	내 환공의 듯터온 은혜를 넘어시니 맛당이 죽으므로 갑흘디라 내 환공을 저버리디 아니호든 곳 환공의 나라를 <u>저버리</u> 디 아님 ㄱ특니라 호고
	忠30a	네게 무어슬 <u>저버렸</u> 관디 반호는다 나흔 디디로 당나라 신해라 비록 네 천거호 배 되나
	忠40a	네 내 아들이 되어서 이제 나를 <u>저버라</u> 우리 집을 망호라 호는다
	忠40b	공이 차마 텃즈를 비반호니 내 엇디 공을 <u>저버리</u> 디 아니호리오
	忠47b	네 밍세를 <u>저버리</u> 고 동병호여 오니 엇딘 쓰디뇨
	忠63a	나흔 금나라 대당 진화상이라 어즈려온 군등의서 죽으면 사름이 아디 못호고 나라를 <u>저버리</u> 다홀 거시니
	忠75b	엇디 아비 명을 <u>저버리</u> 고 어미 즈이를 쫓츠려 호느뇨 호고 몰 곳비를 잡고 노티 아니호니
	烈15a	엇디 길히 드른 거술 주어 그 형실을 더러이리오 하니 양지 크게 붓그려 금을 <u>내여 버리</u> 고
	烈33a	엇디 혼 손으로 써 온 몸을 더러이리오 호고 듯기로 그 풀을 <u>씩여버리</u> 니 보논 사름이 눈물 아니 흘리리 업더라
	烈48a	오직 혼 번 죽어 내 지아비를 <u>저버리</u> 디 아니리니 너희들은 어린 조식을 잘 기르라 호고

	宗53a	달초하고 또 종시 고치디 아니하여 용납히디 못하리면 관가에 고하여 먼 짜하로 <u>또초브리</u> 더라
	朋14a	이간이 날오디 그디 양념하를 <u>저브리</u> 디 아니하니 엇디 나라를 저브리랴 하더라
	朋14a	이간이 날오디 그디 양념하를 저브리디 아니하니 엇디 나라를 <u>저브리</u> 랴 하더라
隣語大方	3:3b	조연 循便하올 道理 인스올 거시니 하 그리 갑히 用廬 마옵소 朝得暮失이라 어드며 卽時 <u>일허브리</u> 니 아니 통분하온가
敬信錄諺釋	3b	싱물을 잡아 살무며 오곡을 <u>호터 브리</u> 며 증싱을 로요하며 남의 집을 파하고 지물을 취하며 물을 트며 불을 노하 사름 사논 바를 해하며
	11a	반드시 거죽 거슬 하야 뼈 나라를 속이며 근본을 <u>저브려</u> 뼈 몸을 멸하느니
	20b	혹 겨집을 스스 집의 두어 더러운 일이 드러나 들니여 상성의 세상 구하시논 모음을 <u>저브리</u> 미 잇는지라
	33a	업을 더 널니지 못하든 다만 인순 일을 시작하야 하는 배 업고 밀미여 가는 거동 두 글지 일싱을 <u>저브리</u> 는지라
	37b	그디 이제로 조차 후로 물잇 탐음 각기와 망녕된 싱각 모든 잡념 잇는 거슬 문져 명력을 가초와 일절 <u>물니쳐 브리고</u>
	38b	스스로 별호하야 굴오디 정의 뜻을 조케 하단 말 도인이라 하니 모든 망상을 <u>더러브림</u> 을 끼지함이라
	75b	속이는 말 하지 말며 지물 고탁한 거슬 <u>저브리</u> 지 말며
	80a	남의 처즈 고탁한 거슬 <u>저브리</u> 지 말며 한 사름의 해를 더러주며
	81b	빅전준일공 구제하기 권하는 글을 시형하며 남의 고탁을 <u>저브리</u> 지 말며 비의엿 지물을 취치 말며 싱명을 사노하며
	81b	가은을 더 <u>저브리</u> 고 빈핍한 이를 주급하며
	82a	임즈 업슨 무덤을 평토치며 한 사름의 희골을 더 <u>저브리</u> 며 한 고으나 과부를 침릉하며
	82a	남의 숨은 악을 전포하며 남의 처즈 부탁한 거슬 <u>저브리</u> 며 첩을 스총하고 처를 브리며
	82b	남의 계형을 <u>혈어브리</u> 며 남을 한 송스를 부축이며 휘방지어 한 사름을 더러여 무함하며
	82b	모진 비복을 노화 방스히 형하게 하며 죽근 벗과 밋 빈천홀 적의 사관 벗슬 <u>저브리</u> 미니라
	82b	남의 규증 일을 말하며 한 큰 언약을 <u>저브리</u> 며 남을 별명 지어 놀이하며
	83a	남의 그른 노릇하를 보고 아니 권유하야 막으며 한 귀 거슬니는 말을 성내며 한 언약을 <u>저브리</u> 며
	84a	비의엿 지물을 취하며 빗줄 저 이스며 남의 일운 공력을 <u>혈어브리</u> 며 색지인 것슬 숨기며 빈핍한 이 구하며
增修無冤錄諺解	1:26b	處女の 屍를 驗함애 收生婆로 히산 시디는 계집이라 하여곰 中指甲을 당가락 손톱이라 <u>버혀 브리고</u> 소음으로써 싸감고...
	1:36a	檢驗하야 디내티면 往往 일을 그릇틸미라 저기 의심된 곳이 이셔 들쁜갓치 破損하얏거든 모롬이 하여곰 <u>벗겨브리</u> 라
	1:41a	브르고 초로써 鈔히를 적서 우희 덤헛다가 한 時스동안을 기드려 <u>아사브리</u> 고 물로 빠스면 그 痕이 곳 뵈느니라
	3:94a	짜를 검험함이라 [보] 極惡한 사름이 이셔 사름을 터 죽이고 <u>불술와 브려</u> 못춤내 빼도 마히 檢홀 꺼시 업거든